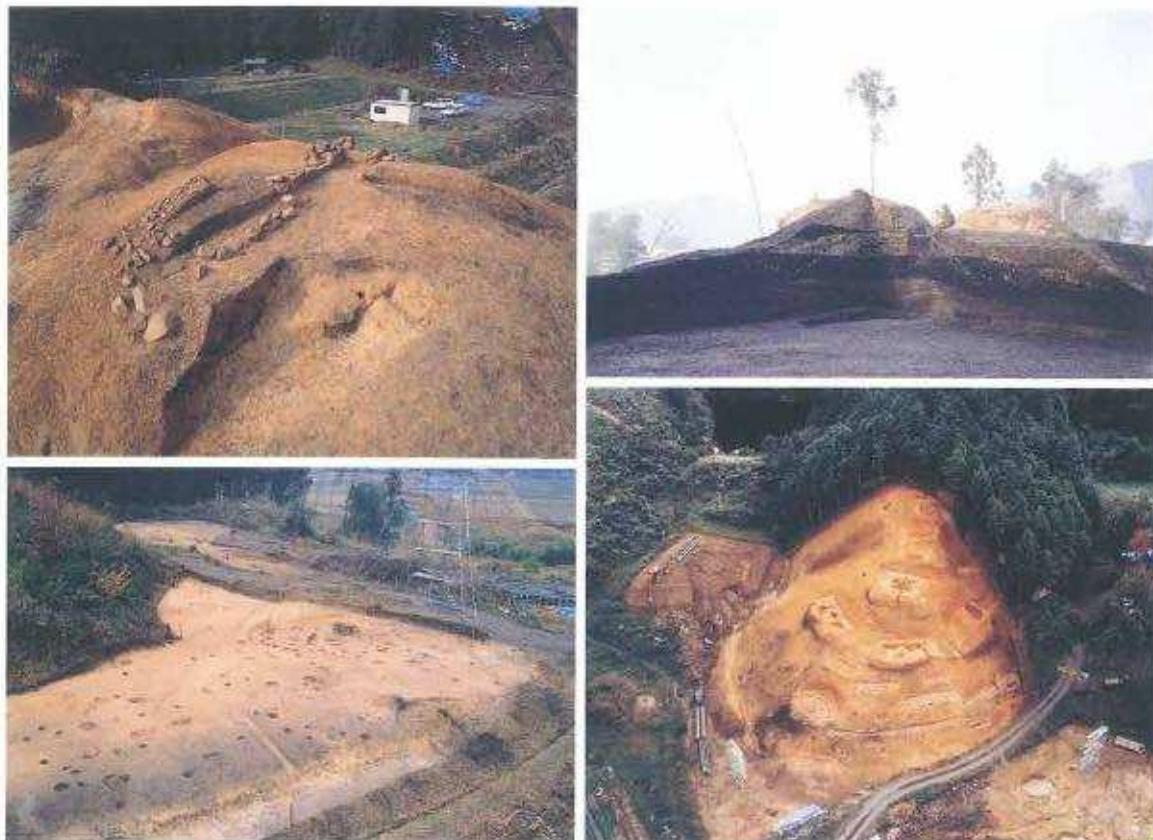


和賀向山1号墳 芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡 芝花古墳群

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－IV



2008年3月
(平成20年3月)

兵庫県教育委員会

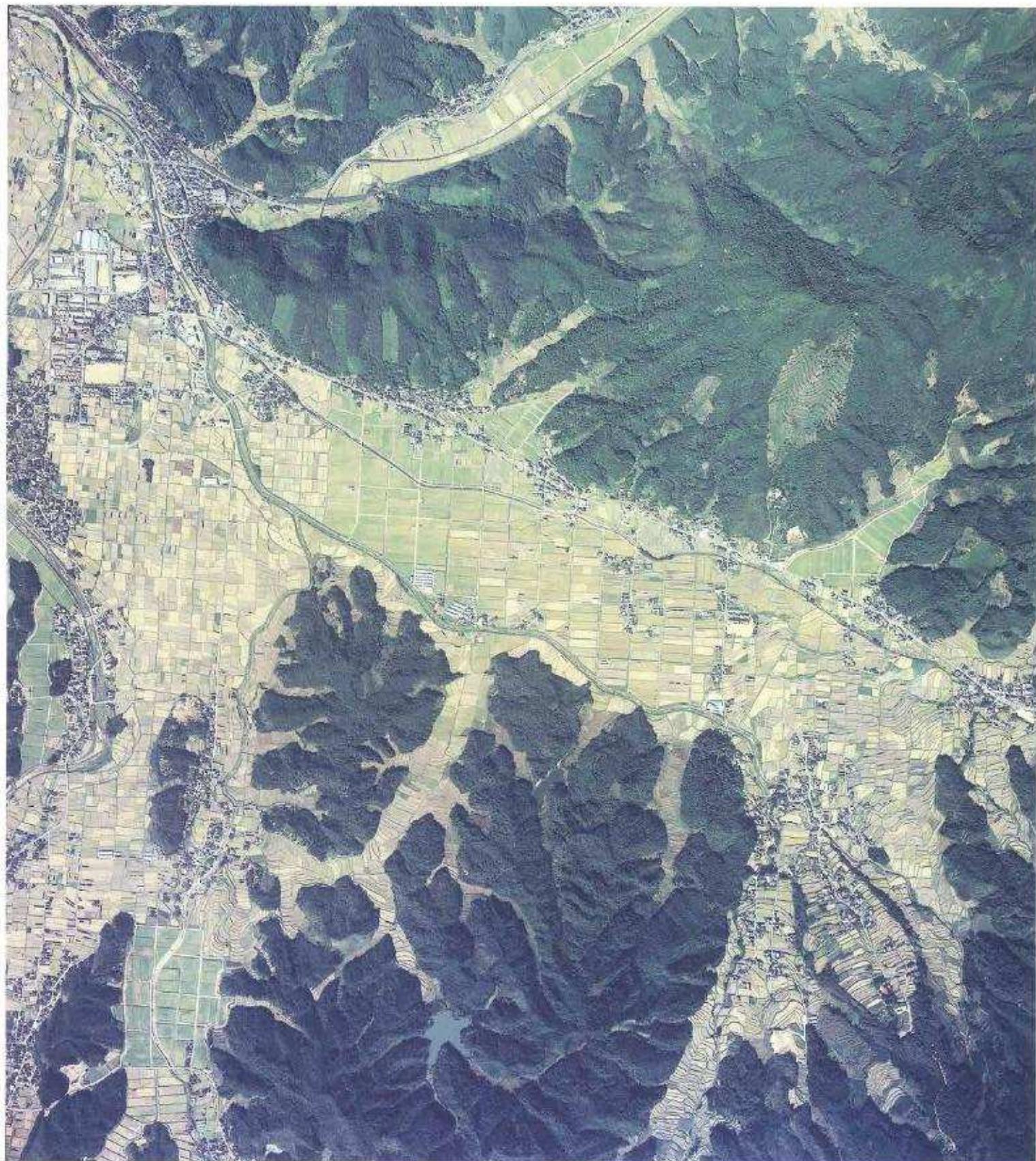
和賀向山1号墳 芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡 芝花古墳群

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－IV



2008年3月

兵庫県教育委員会



遺跡周辺航空写真(上が北)



遺跡群遠景(西上空から)



空から見た遺跡群(西から)



全景(西から 奥は若水古墳群)



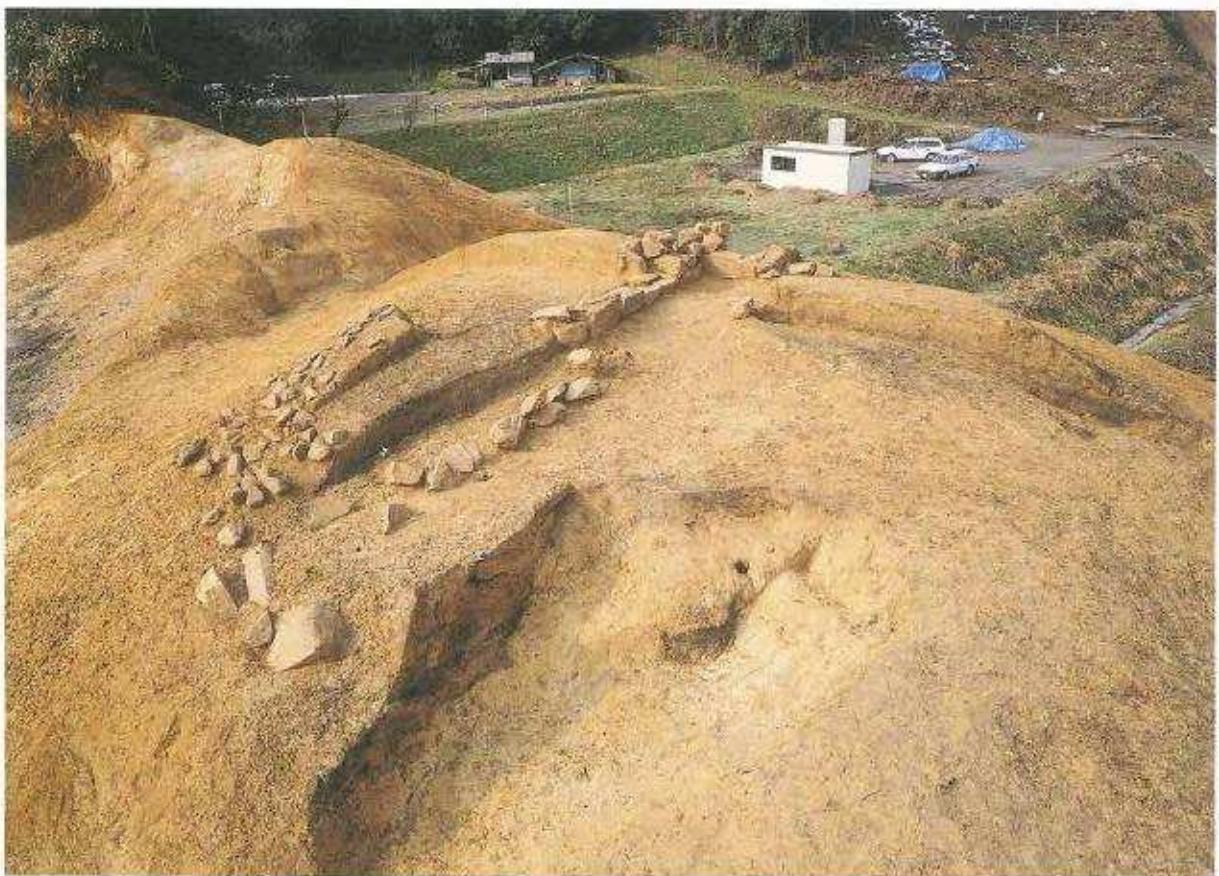
全景(東から 奥は芝花古墳群)

卷頭図版4

和賀向山1号墳



全景(東から)



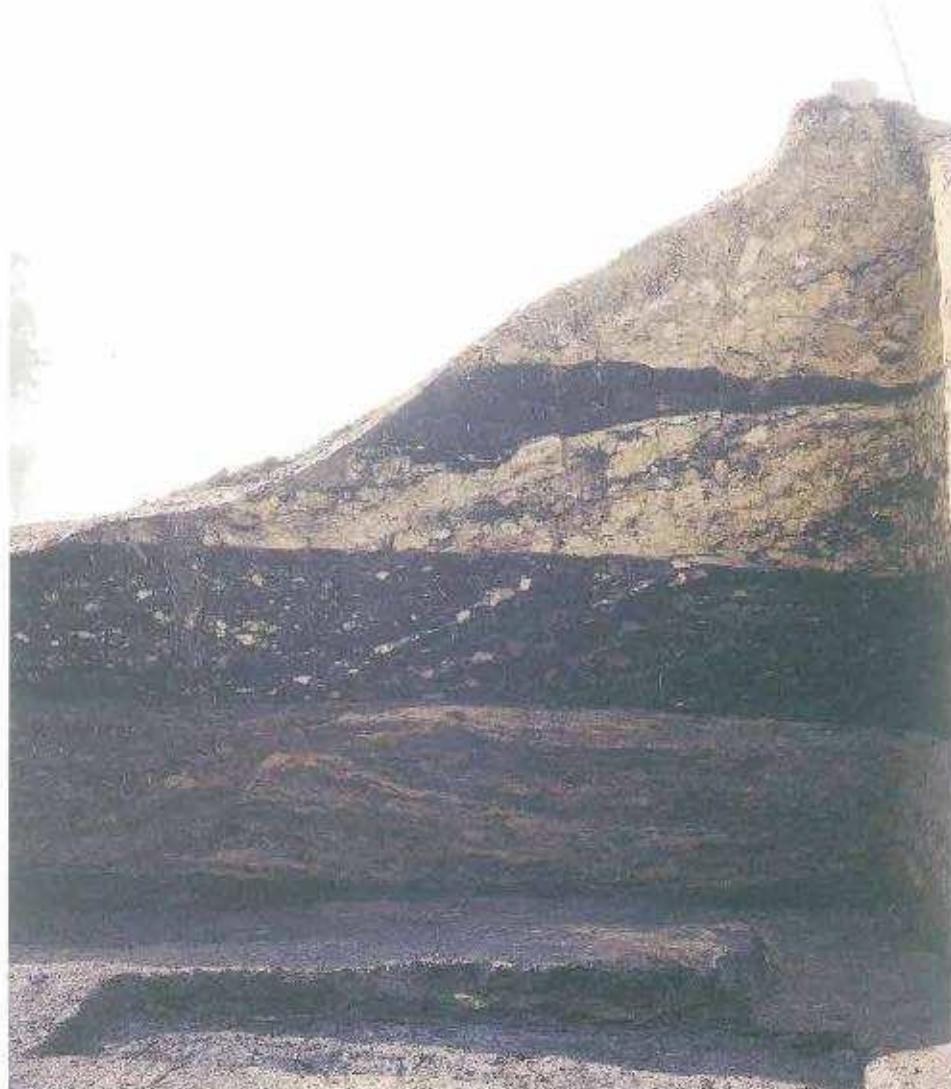
全景(北東から)



古墳遠景と芝花古墳群等所在丘陵(北上空から)



芝ヶ端古墳近景(北西上空から)



墳丘中央部盛土土層断面(東から)



墳丘盛土土層断面(南東から)



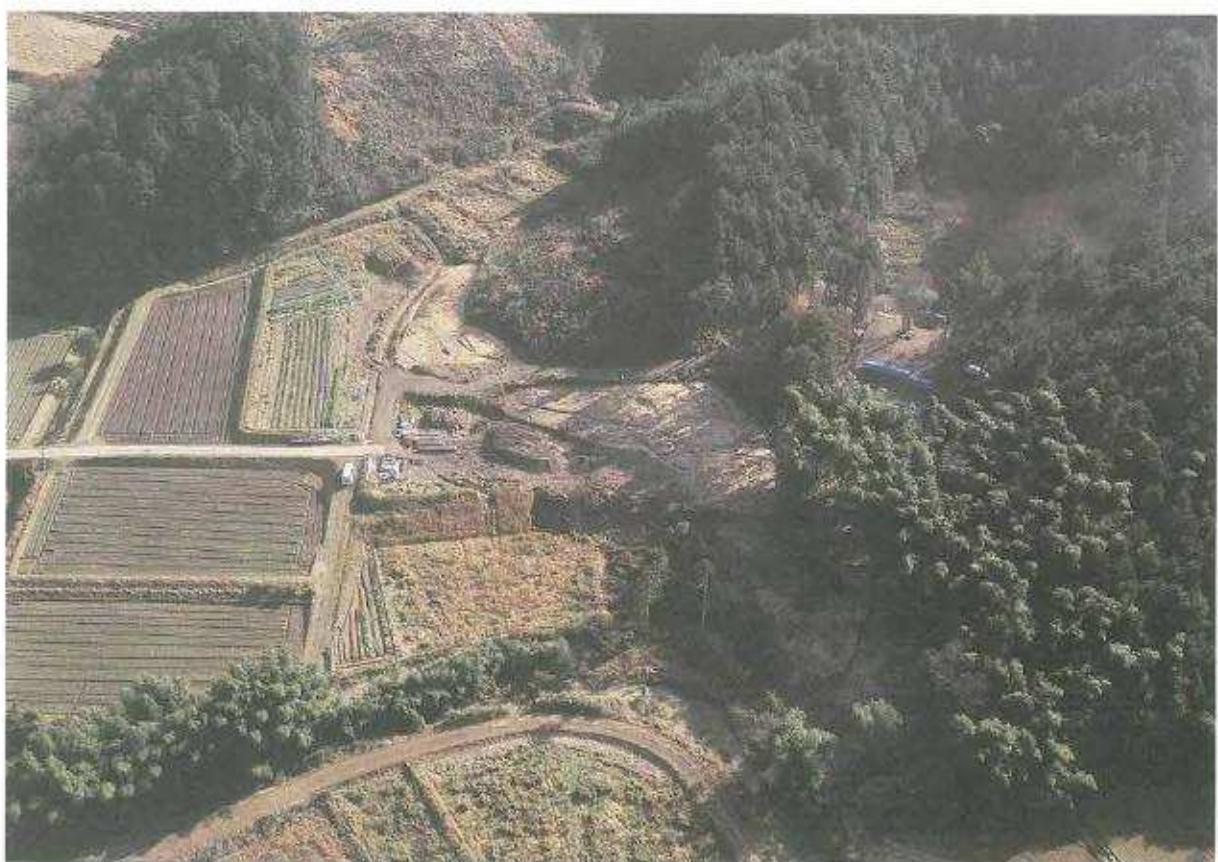
墳丘盛土除去後の旧地形(南西から)



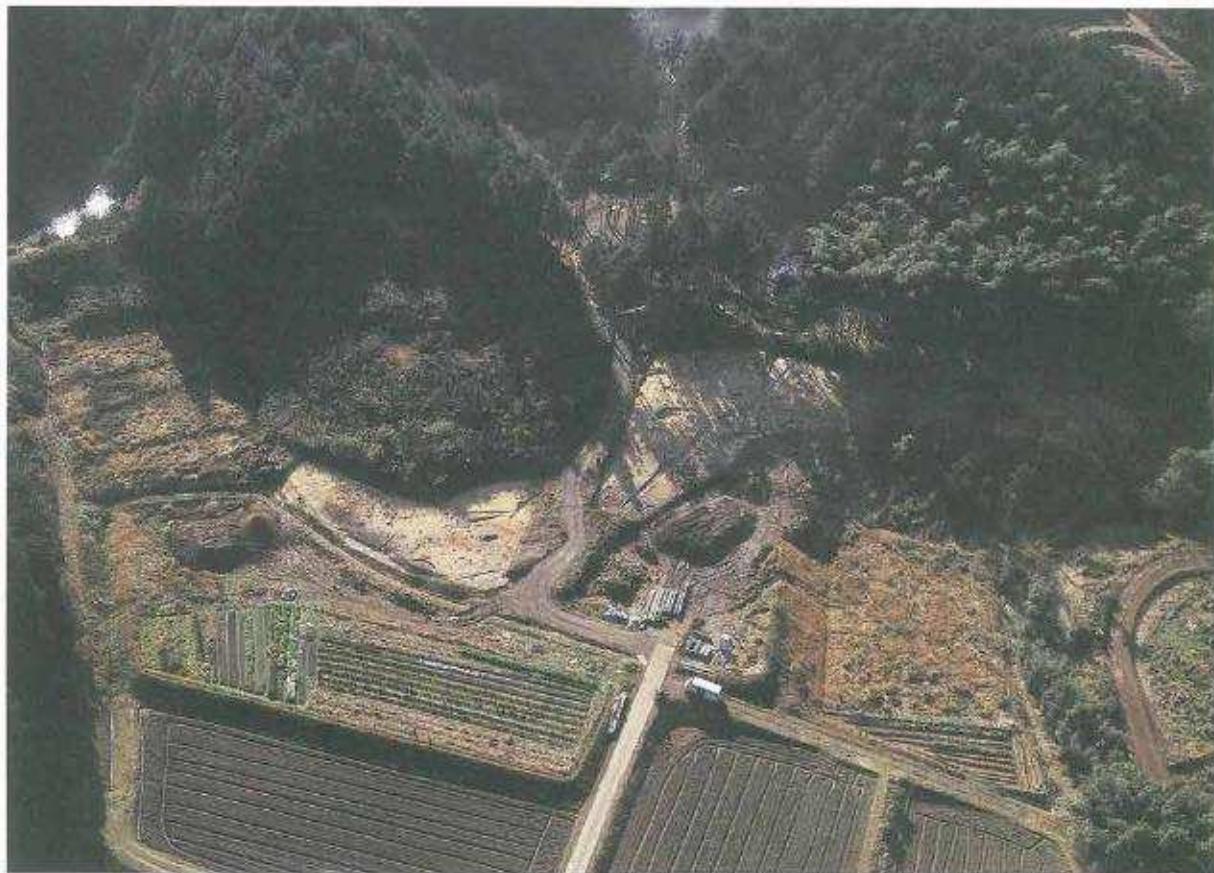
芝ヶ端古墳出土埴輪



芝ヶ端遺跡遠景(北西上空から)



芝ヶ端遺跡近景(西上空から)



芝ヶ端遺跡近景(北上空から)



芝ヶ端遺跡A地区西部(北東から)



芝ヶ端遺跡 B 地区全景(北から)



芝ヶ端遺跡 SB-B1 (東から)



芝ヶ端遺跡 SX-A1・SD-A1(北から)



芝ヶ端遺跡 SK-B10(西から)



芝ヶ端遺跡弥生時代～奈良時代出土遺物



芝ヶ端遺跡B地区南部遺構群(北東から)



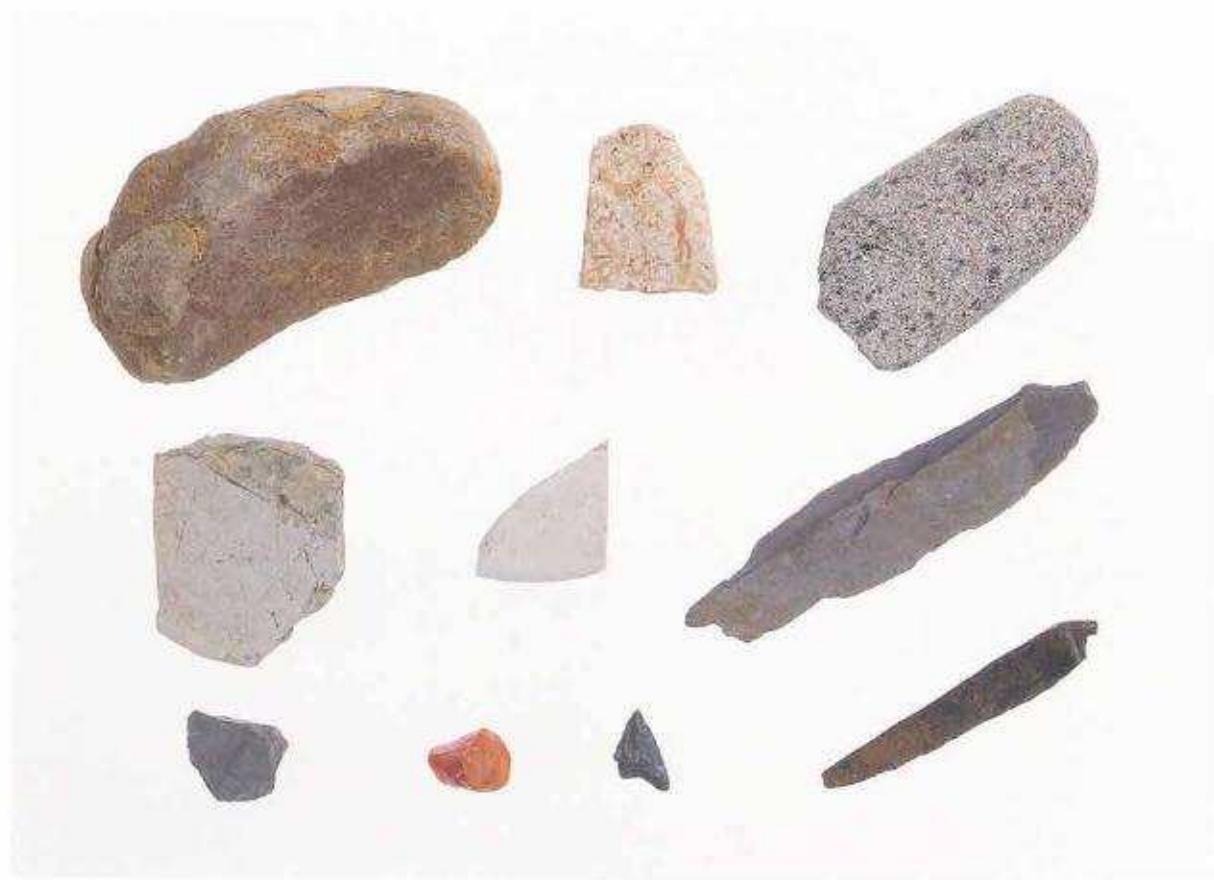
芝ヶ端遺跡 S D-B 1 底の足跡(北から)



芝ヶ端遺跡 B 地区谷状遺構埋土層断面(北から)



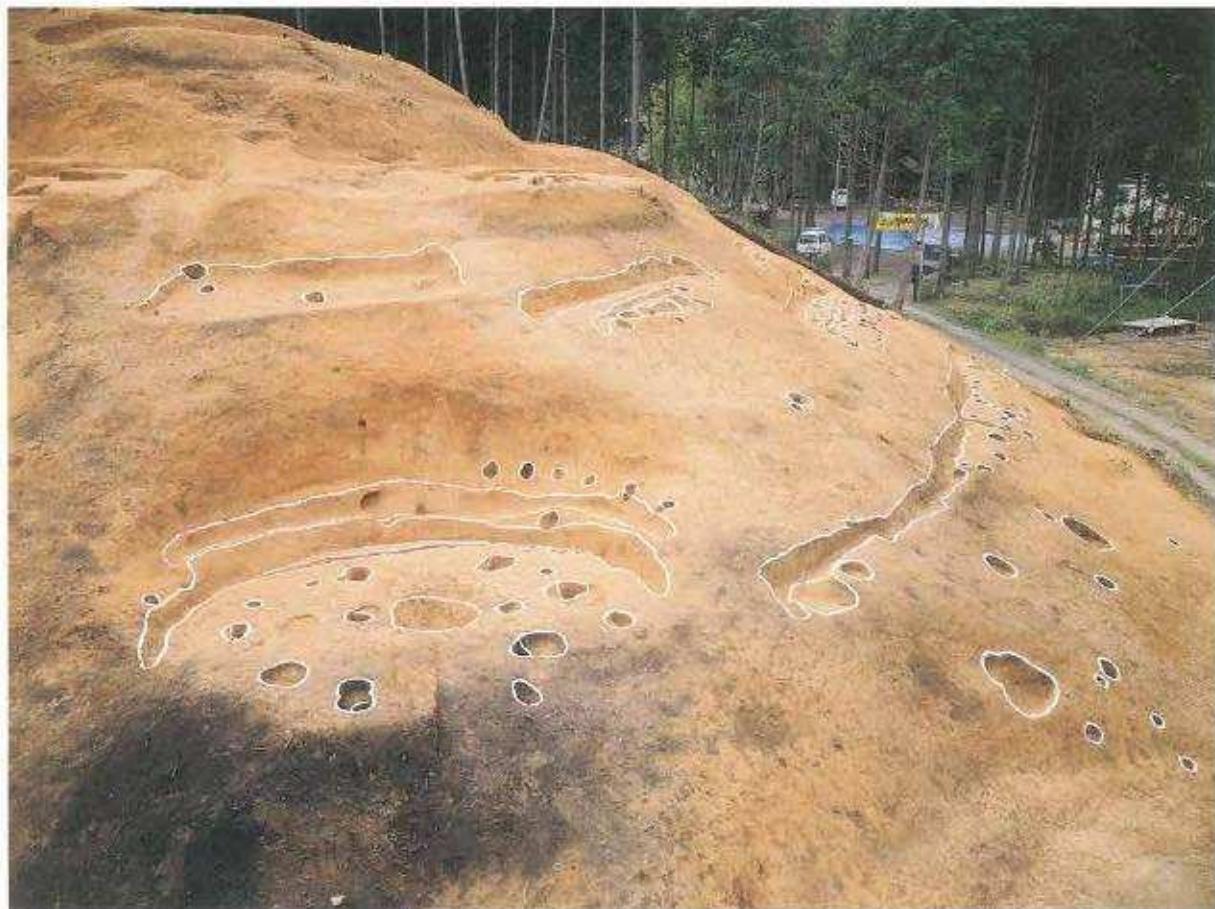
芝ヶ端遺跡出土中世遺物



芝ヶ端遺跡出土石器・石製品・金属器



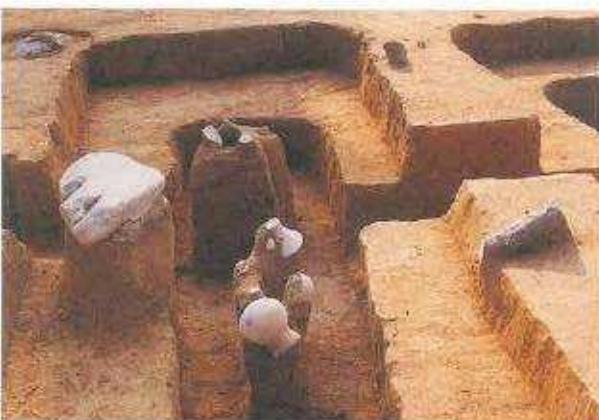
芝花古墳群全景



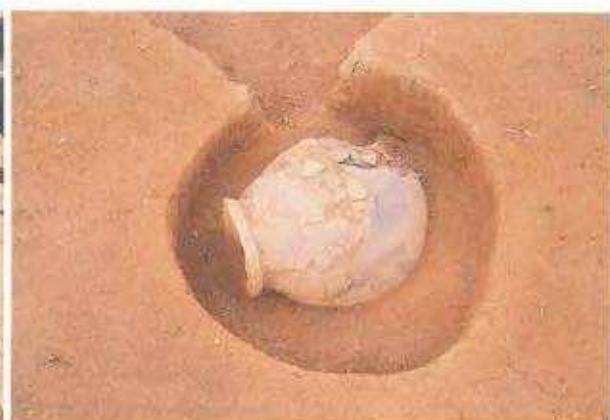
弥生時代の遺構群



芝花26号墳



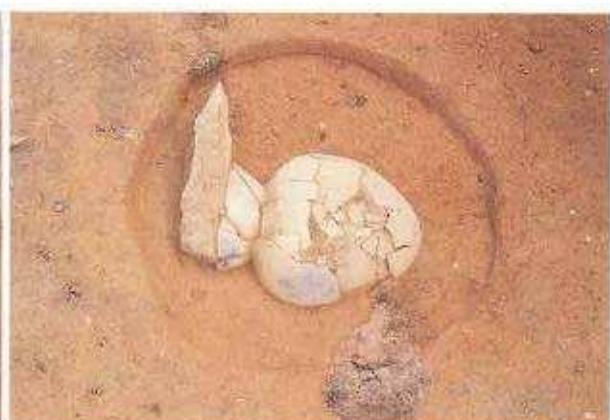
芝花26号墳主体部1供獻土器



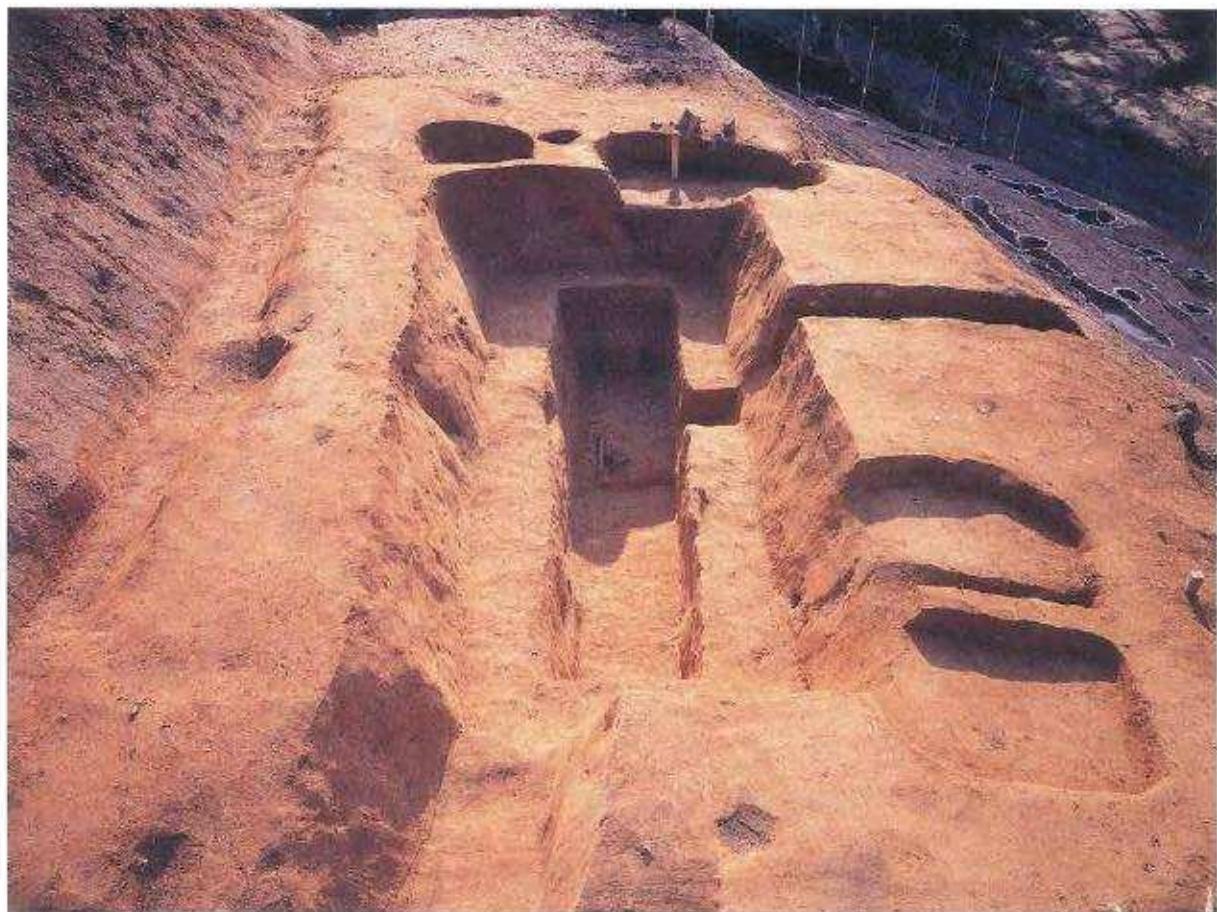
芝花26号墳土器棺1



芝花26号墳土器棺2



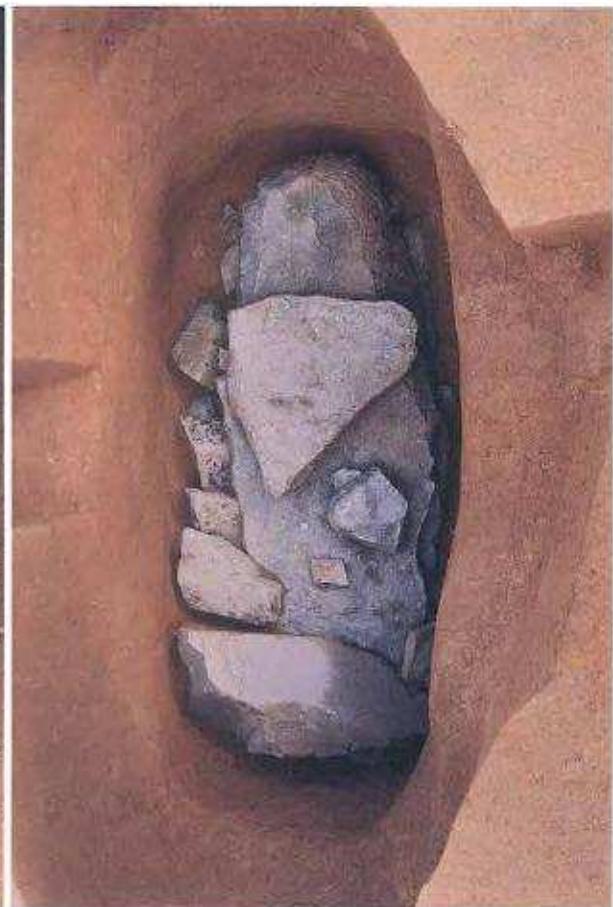
芝花72号墳土器棺



芝花73号墳



芝花74号墳主体部1

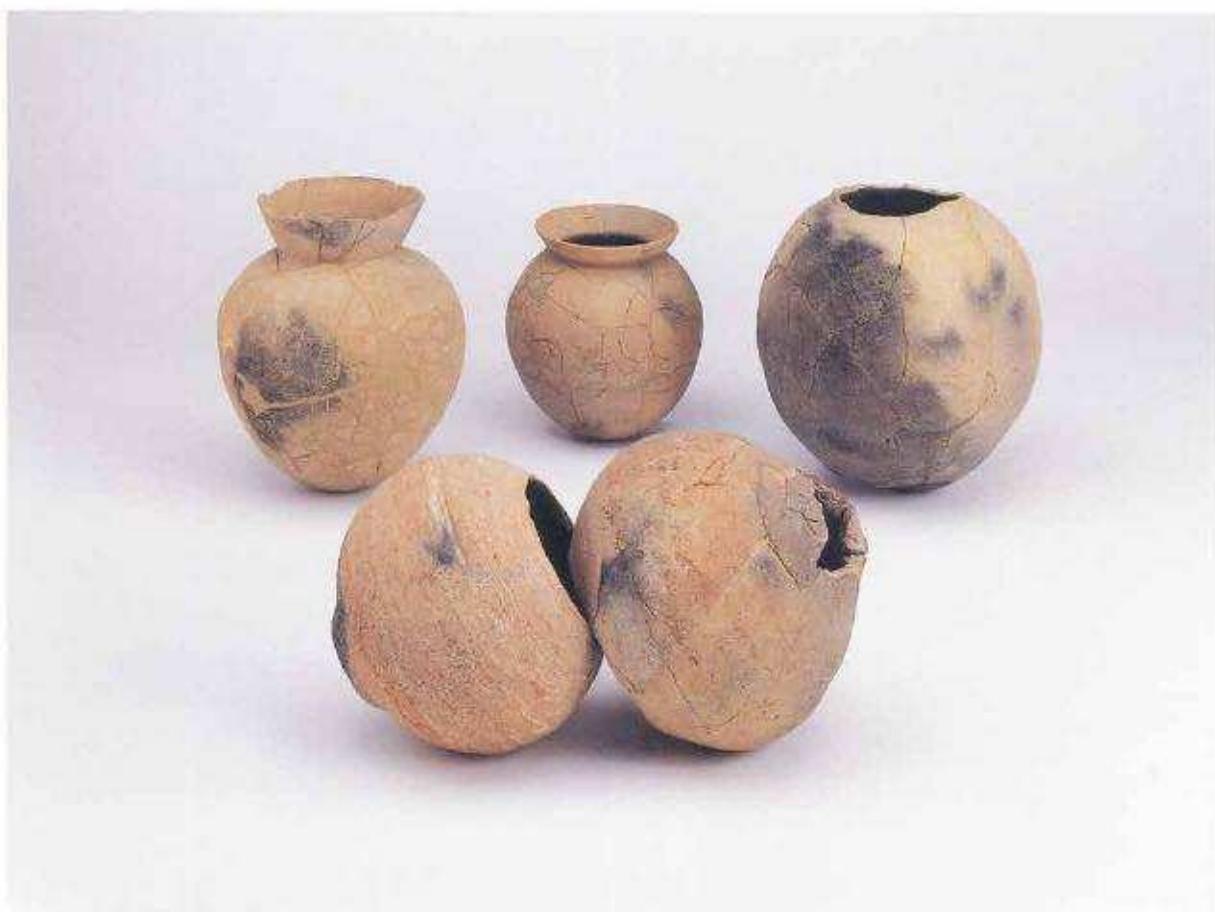


芝花74号墳主体部2

巻頭図版18
芝花古墳群



古墳時代の供献土器



古墳時代の土器棺

例　　言

1. 本書は一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。発掘調査および整理作業は、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県立考古博物館で実施した。
2. 本書には兵庫県朝来市山東町和賀に所在する4遺跡の報告を収録している。それらの遺跡名・所在地および調査担当者は以下のとおりである。

和賀向山1号墳　和賀字向山108-6

西口圭介　鈴木敬二　池田征弘　海邊博史（現：香川県善通寺市役所）

芝ヶ端古墳　和賀字芝ヶ端108-7, 108-8

別府洋二　岸本一宏　井本有二（現新宮高校）　川村慎也（現：高知県四万十市教育委員会）　田中秀明

芝ヶ端遺跡　和賀字芝ヶ端191, 191-2, 192-2, 192-3

別府洋二　岸本一宏　井本有二　川村慎也　田中秀明

芝花古墳群　和賀字向山117-2, 118

種定淳介　大崎晃司　池田征弘

3. 発掘調査にあたって、和賀向山1号墳は梁瀬工業株式会社、芝ヶ端古墳および芝ヶ端遺跡については長野建設株式会社、芝花古墳群は株式会社松本組にそれぞれ委託して実施した。発掘調査補助は中村真也・山本亮司、現場事務・室内作業は足立智美・加門美智代・木村智子・西田みゆきがあたった。また、田中弘樹（現：新温泉町教育委員会）が研修のため調査に加わった。

4. 発掘調査時の遺構の実測は空中写真測量図化として、和賀向山1号墳は三和航測株式会社、芝ヶ端遺跡については富士測量株式会社、芝花古墳群は株式会社かんこうの各航測会社に委託して実施した。なお、芝ヶ端古墳は空中写真測量を実施しなかった。その他の実測は補助員が補佐し、調査員が実施した。また、出土品整理時の遺物実測および遺構・遺物図の浄写は嘱託員が行なった。

5. 出土品整理事業は平成18（2006）年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、平成19年7月以降は兵庫県立考古博物館で実施した。主として嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者のうちの事務所・博物館所属職員が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。また、金属器保存処理は事務所・博物館職員の指導のもとに当事務所・博物館で行った。

2年にわたる出土品整理事業の担当者は下記のとおりである。

作業指示担当職員　岸本一宏（工程管理兼務）　鈴木敬二　池田征弘

保存処理担当職員　岡本一秀

作業担当嘱託員等　宮田麻子　村上京子　尾鷲都美子　長濱（三島）重美　池内（溝上）くみ　西村美緒
眞子ふさ恵　西口由紀　木村淑子　小野潤子　三好綾子　奥野政子　又江立子
荒木由美子　藤池かづさ　嶺岡美見
栗山美奈　大前篠子　藤井光代　清水幸子

6. 本書に使用した写真的うち、遺構については調査員が撮影したもの、発掘中の空中写真撮影は各空測会社に委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。

7. 芝花古墳群出土試料の自然科学分析のうち、人骨については京都大学大学院理学研究科 片山一道先生に依頼し、赤色顔料については株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。
8. 本書の執筆は、発掘調査担当者でもある岸本・鈴木・池田が行い、分担は和賀向山1号墳が鈴木、芝花古墳群が池田、その他は岸本が執筆し、本文目次に文責を示した。また、片山一道先生からは玉稿を頂戴した。
本書の構成・編集は、嘱託員の補助のもと、執筆担当職員と調整しながら岸本が行った。
9. 本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表します。（以下、順不同敬称略）

青木哲哉 田畠基 中島雄二

凡 例

1. 本書で使用した方位は第V系国土座標（日本測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は国土地理院1等水準点を利用した海拔高（T.P.）を使用した。
2. 遺構番号は遺跡ごとに略号を使用し、掘立柱建物跡→S B、溝→S D、井戸→S E、竪穴住居跡→S H、土壙→S K、柱穴→S P、墓・不明遺構→S Xとしている。
3. 遺構等の土層色調名および土器の色調名は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。
4. 芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡の土層名のうち、堆積物の粒度区分については、『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、筑地書館株式会社発行）により、調査担当者が経験的に触感により判断したものである。
5. 遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。
また、遺物番号のうち、石器・石製品には番号の前に「S」、金属器には「M」をそれぞれ冠し、土器とともに遺跡ごとに通し番号としている。なお、重複を避けるため、和賀向山1号墳には「W」、芝ヶ端古墳には「K」、芝ヶ端遺跡には「T」、芝花古墳群には「H」の遺跡別のアルファベットを遺物番号の前に付している。
6. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、磁器・陶器の断面は40%網掛け、黒色土器は20%網掛けにしている。
7. 本書に掲載した挿図のうち、第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図、第2図は朝来市教育委員会から提供をうけたものをそれぞれ使用した。

本文目次

第I部 はじめに

第1章 遺跡の位置と環境	1 (岸本)
第2章 発掘調査の経緯・経過と体制	3 (岸本)
第3章 出土品整理の経過と体制	6 (岸本)

第II部 和賀向山1号墳

第1章 はじめに	7 (鈴木)
第2章 発掘調査の成果	9 (鈴木)
第3章 まとめ	18 (鈴木)

第III部 芝ヶ端古墳

第1章 調査の経過と概要	25 (岸本)
第2章 調査の結果	27 (岸本)
第3章 まとめ	42 (岸本)

第IV部 芝ヶ端遺跡

第1章 調査の経過と概要	43 (岸本)
第2章 調査の結果	45 (岸本)
第3章 まとめ	78 (岸本)

第V部 芝花古墳群

第1章 調査の経過と概要	79 (池田)
第2章 繩文時代	80 (池田)
第3章 弥生時代	81 (池田)
第4章 古墳時代	85 (池田)
第5章 中世	96 (池田)
第6章 自然科学的分析	98

(京都大学大学院理学研究科 片山 一道)

(株式会社パレオ・ラボ)

第7章 まとめ	101 (池田)
---------------	----------

卷頭写真図版目次

卷頭図版 1		遺跡周辺航空写真（上が北）
卷頭図版 2	上	遺跡群遠景（西上空から）
	下	空から見た遺跡群（西から）
卷頭図版 3 和賀向山 1 号墳	上	全景（西から 奥は若木古墳群）
	下	全景（東から 奥は芝花古墳群）
卷頭図版 4 和賀向山 1 号墳	上	全景（東から）
	下	全景（北東から）
卷頭図版 5 芝ヶ端古墳	上	遠景と芝花古墳群等所在丘陵（北上空から）
	下	近景（北西上空から）
卷頭図版 6 芝ヶ端古墳	上	墳丘中央部盛土土層断面（東から）
	下	墳丘盛土土層断面（南東から）
卷頭図版 7 芝ヶ端古墳	上	墳丘盛土除去後の旧地形（南西から）
	下	出土埴輪
卷頭図版 8 芝ヶ端遺跡	上	遠景（北西上空から）
	下	近景（西上空から）
卷頭図版 9 芝ヶ端遺跡	上	近景（北上空から）
	下	A地区西部（北東から）
卷頭図版 10 芝ヶ端遺跡	上	B地区全景（北から）
	下	S B-B 1 (東から)
卷頭図版 11 芝ヶ端遺跡	上	S X-A 1・S D-A 1 (北から)
	下	S K-B 10 (西から)
卷頭図版 12 芝ヶ端遺跡	上	弥生時代～奈良時代出土遺物
	下	B地区南部遺構群（北東から）
卷頭図版 13 芝ヶ端遺跡	上	S D-B 1 底の足跡（北から）
	下	B地区谷状遺構埋土土層断面（北から）
卷頭図版 14 芝ヶ端遺跡	上	出土中世遺物
	下	出土石器・石製品・金属器
卷頭図版 15 芝花古墳群	上	芝花古墳群全景
	下	弥生時代の遺構群
卷頭図版 16 芝花古墳群	上	芝花 26 号墳
	中左	芝花 26 号墳主体部 1 供穀土器
	中右	芝花 26 号墳土器棺 1
	下左	芝花 26 号墳土器棺 2
	下右	芝花 72 号墳土器棺 3
卷頭図版 17 芝花古墳群	上	芝花 73 号墳
	下左	芝花 74 号墳主体部 1
	下右	芝花 74 号墳主体部 2
卷頭図版 18 芝花古墳群	上	古墳時代の供穀土器
	下	古墳時代の土器棺

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	和賀・柿坪山塊の古境分布図	2
第3図	道路用地範囲と古墳・遺跡調査部分	4
第4図	義父親音塚古墳・岡田 2 号墳出土埴輪	20
第5図	芝ヶ端古墳出土円筒埴輪模式図および部分名称	30
第6図	円筒埴輪ハケ目（K-13）とハケ原体予想模式図	32
第7図	芝ヶ端古墳出土石製品等	39
第8図	朝来市山東町森向山 1 号墳出土の円筒埴輪	42
第9図	芝ヶ端遺跡他確認調査トレンチ配置図	44
第10図	芝花古墳群確認調査トレンチ配置図	79
第11図	縄文時代の遺構と遺物	80
第12図	芝花 73 号墳出土人骨付着赤色顔料分析	100

図版目次

図版 1	和賀向山 1 号墳	確認トレチ配置図
図版 2	和賀向山 1 号墳	調査範囲図
図版 3	和賀向山 1 号墳	調査前墳丘測量図
図版 4	和賀向山 1 号墳	調査区全体図
図版 5	和賀向山 1 号墳	墳丘地形図
図版 6	和賀向山 1 号墳	墳丘・周溝土層断面図
図版 7	和賀向山 1 号墳	1 号墳石室平面図
図版 8	和賀向山 1 号墳	1 号墳石室展開図
図版 9	和賀向山 1 号墳	1 号墳墓域平面図
図版 10	和賀向山 1 号墳	木棺墓 1 平面図・土層断面図
図版 11	和賀向山 1 号墳	円筒埴輪配置図・土坑平面図・土層断面図
図版 12	和賀向山 1 号墳	埴輪
図版 13	和賀向山 1 号墳	埴輪・土器
図版 14	和賀向山 1 号墳	鉄器
図版 15	芝ヶ端古墳	芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡調査区位置
図版 16	芝ヶ端古墳	芝ヶ端古墳墳丘
図版 17	芝ヶ端古墳	墳丘下地形・土層断面
図版 18	芝ヶ端古墳	葺石残存状況
図版 19	芝ヶ端古墳	墳丘東西方向土層断面
図版 20	芝ヶ端古墳	墳丘南北方向土層断面
図版 21	芝ヶ端古墳	出土埴輪 (1)
図版 22	芝ヶ端古墳	出土埴輪 (2)
図版 23	芝ヶ端古墳	出土埴輪 (3)
図版 24	芝ヶ端古墳	出土埴輪 (4)
図版 25	芝ヶ端古墳	出土埴輪 (5)
図版 26	芝ヶ端古墳	出土遺物
図版 27	芝ヶ端遺跡	調査区全体
図版 28	芝ヶ端遺跡	A 地区全体
図版 29	芝ヶ端遺跡	B 地区全体
図版 30	芝ヶ端遺跡	竪穴住居跡 (1) SH-A1・A2
図版 31	芝ヶ端遺跡	竪穴住居跡 (2) SH-A3・B1
図版 32	芝ヶ端遺跡	S X-A1・S D-A1
図版 33	芝ヶ端遺跡	B 地区北部遺構
図版 34	芝ヶ端遺跡	S K-B01・B06
図版 35	芝ヶ端遺跡	S B-B1・S X-B1
図版 36	芝ヶ端遺跡	B 地区谷部
図版 37	芝ヶ端遺跡	S D-B1 平面・S D-B1・B2 土層断面
図版 38	芝ヶ端遺跡	B 地区土壙等
図版 39	芝ヶ端遺跡	遺構出土遺物 (1)
図版 40	芝ヶ端遺跡	遺構出土遺物 (2)
図版 41	芝ヶ端遺跡	遺構出土遺物 (3)
図版 42	芝ヶ端遺跡	包含層出土遺物・遺構等出土石器
図版 43	芝花古墳群	全体 (調査前)・断面図
図版 44	芝花古墳群	全体 (古墳時代以降)
図版 45	芝花古墳群	全体 (弥生時代以前)
図版 46	芝花古墳群	S H01
図版 47	芝花古墳群	段状遺構 1~3
図版 48	芝花古墳群	段状遺構 4~6
図版 49	芝花古墳群	段状遺構 8~10・S K10
図版 50	芝花古墳群	木棺墓
図版 51	芝花古墳群	芝花 28 号墳墳丘 (調査前・調査後)
図版 52	芝花古墳群	芝花 28 号墳墳丘断面・主体部
図版 53	芝花古墳群	芝花 27 号墳墳丘 (調査前・調査後)
図版 54	芝花古墳群	芝花 27 号墳墳丘断面・主体部 1・2
図版 55	芝花古墳群	芝花 26 号墳墳丘 (調査前・調査後)
図版 56	芝花古墳群	芝花 26 号墳墳丘 (完掘後)・断面
図版 57	芝花古墳群	芝花 26 号墳主体部 1・2
図版 58	芝花古墳群	芝花 26 号墳主体部 3・土壤墓
図版 59	芝花古墳群	芝花 26 号墳土器棺 1・2
図版 60	芝花古墳群	芝花 72 号墳墳丘 (調査前)

図版 61	芝花古墳群	芝花 72 号墳墳丘（調査後）
図版 62	芝花古墳群	芝花 72 号墳墳丘（完掘後）
図版 63	芝花古墳群	芝花 72 号墳墳丘断面
図版 64	芝花古墳群	芝花 72 号墳主体部 3
図版 65	芝花古墳群	芝花 72 号墳主体部 1・2・土器棺
図版 66	芝花古墳群	芝花 73 号墳墳丘（調査前・調査後）
図版 67	芝花古墳群	芝花 73 号墳墳丘（完掘後）・断面
図版 68	芝花古墳群	芝花 73 号墳主体部 3
図版 69	芝花古墳群	芝花 73 号墳主体部 1・4・5・SKO 2
図版 70	芝花古墳群	芝花 74 号墳墳丘（調査前・調査後）
図版 71	芝花古墳群	芝花 74 号墳墳丘（完掘後）・断面
図版 72	芝花古墳群	芝花 74 号墳主体部 1 (1)
図版 73	芝花古墳群	芝花 74 号墳主体部 1 (2)
図版 74	芝花古墳群	芝花 74 号墳主体部 2
図版 75	芝花古墳群	芝花 74 号墳主体部 3
図版 76	芝花古墳群	芝花 74 号墳主体部 4・段状遺構 7
図版 77	芝花古墳群	集石墓
図版 78	芝花古墳群	SHO 1・段状遺構出土弥生土器
図版 79	芝花古墳群	SKO 1・包含層出土弥生土器
図版 80	芝花古墳群	弥生時代出土石器 (1)
図版 81	芝花古墳群	弥生時代出土石器 (2)
図版 82	芝花古墳群	芝花 28・27・26 号墳出土土器
図版 83	芝花古墳群	芝花 26・72 号墳出土土器・鉄製品
図版 84	芝花古墳群	芝花 73 号墳出土土器・鉄製品
図版 85	芝花古墳群	芝花 74 号墳出土土器・鉄製品・古墳時代・中世出土土器
図版 86	芝花古墳群	集石墓出土石製品 (1)
図版 87	芝花古墳群	集石墓出土石製品 (2)

写真図版目次

和賀向山 1 号墳

写真図版 1	和賀向山 1 号墳	上 中 下	和賀向山 1 号墳より芝花古墳群を望む 芝花古墳群より和賀向山 1 号墳および若水古墳群を望む 和賀向山 1 号墳遠景（西から）
写真図版 2	和賀向山 1 号墳	① ② ③ ④ ⑤	墳丘土層断面（墳丘南西側斜面 東から） 墳頂部および石室内土層断面（東から） 周濠および同溝内土坑土層断面（西から） 周濠内土坑土器出土状況（西から） 石室前庭部土層堆積状況（北東から）
写真図版 3	和賀向山 1 号墳	上 中 下	石室側壁（西側） 畿道付近（東から） 石室側壁（西側） 中央部（東から） 石室側壁（西側） 奥壁付近（東から）
写真図版 4	和賀向山 1 号墳	上 中 下	石室奥壁裏込（東から） 石室側壁（東側） および奥壁裏込（西から） 鐵器出土状況（石室床面 南から）
写真図版 5	和賀向山 1 号墳	上 中 下	全景（北東から 遠景） 全景（北東から 近景） 墓擴完掘状況（東から）
写真図版 6	和賀向山 1 号墳	上 中 下	周濠内円筒埴輪出土状況（北西から） 〔左〕〔右〕周濠内円筒埴輪出土状況（北西から） 1 号墳南東斜面 菩石石材検出状況（南東から）
写真図版 7	和賀向山 1 号墳	上 中 下	木棺墓 1 土層断面（東から） 木棺墓 1 棺内完掘状況（東から） 木棺墓 1 完掘状況（東から）
写真図版 8	和賀向山 1 号墳	上 中 下	除雪作業状況 人力搬削状況 遺構実測作業状況
写真図版 9	和賀向山 1 号墳		円筒埴輪(1)
写真図版 10	和賀向山 1 号墳		円筒埴輪(2)

写真図版 11	和賀向山 1 号墳	円筒埴輪、朝顔形埴輪
写真図版 12	和賀向山 1 号墳	形象埴輪
写真図版 13	和賀向山 1 号墳	墳丘、木棺墓、土坑出土土器
写真図版 14	和賀向山 1 号墳	鉄器
芝ヶ端古墳		
写真図版 15	芝ヶ端古墳	上 調査前（東から） 下 近世以降盛土層断面（南から）
写真図版 16	芝ヶ端古墳	上 墳丘残存状況全景（南西から） 下 墳丘残存状況アップ（南西から）
写真図版 17	芝ヶ端古墳	上 墳丘残存状況全景（北東から） 下 北東部墳丘側埴輪片出土状況（北東から）
写真図版 18	芝ヶ端古墳	上 墳丘裾南部埴輪片出土状況（南から） ① 主体部全景（北東から） ② 主体部埋土層断面（南東から） ③ 墳丘盛土と主体部の関係土層断面（北から） ④ 作業風景（南東から）
写真図版 19	芝ヶ端古墳	上 墳丘北西側土層断面（北西から） 下 墳丘盛土除去後の旧地形（南西から）
写真図版 20	芝ヶ端古墳	朝顔形埴輪・円筒埴輪・ヘラ描文を有する破片
写真図版 21	芝ヶ端古墳	上 朝顔形埴輪口縁部①（外面） 下 朝顔形埴輪口縁部①（内面）
写真図版 22	芝ヶ端古墳	上 朝顔形埴輪口縁部②（外面） 下 朝顔形埴輪口縁部②（内面）
写真図版 23	芝ヶ端古墳	上 円筒埴輪口縁部③ 下 円筒埴輪基底部①
写真図版 24	芝ヶ端古墳	上 円筒埴輪体部①（外面） 下 円筒埴輪体部①（内面）
写真図版 25	芝ヶ端古墳	上 円筒埴輪体部②（外面） 下 円筒埴輪体部②（内面）
写真図版 26	芝ヶ端古墳	上 円筒埴輪基底部② 中 古墳裾出土土器 下 古墳裾・表土下出土金属器
写真図版 27	芝ヶ端古墳	上 形象埴輪① 下 形象埴輪②
写真図版 28	芝ヶ端古墳	上 古墳裾・表土下出土土器 下 墳丘盛土・表土下出土土器
写真図版 29	芝ヶ端古墳	上 古墳裾・表土下出土遺物 下左 墳丘裾出土砥石 下右 墳頂部表土下出土石英
写真図版 30	芝ヶ端古墳	上 墳丘裾出土刻線のある砥石 下 墳丘盛土出土剝片・砥石
芝ヶ端遺跡		
写真図版 31	芝ヶ端遺跡	全景（北西上空から）
写真図版 32	芝ヶ端遺跡	上 A地区全景（北上空から） 下 B地区全景（北西上空から）
写真図版 33	芝ヶ端遺跡	上 A地区（西から） 下 A地区東半（北東から）
写真図版 34	芝ヶ端遺跡	上 SX-A1・SD-A1（北から） 下 SH-A1（北から）
写真図版 35	芝ヶ端遺跡	上 SX-A1 埋土層断面（東から） 下 SD-A1 埋土層断面（東から）
写真図版 36	芝ヶ端遺跡	上 SX-A1 全景（北から） 下 SX-A1 墓壙（北から）
写真図版 37	芝ヶ端遺跡	① A地区調査前風景（東から） ② B地区調査前全景（東から） ③ B地区調査前全景（西から） ④ A地区機械掘削状況（西から） ⑤ B地区人力掘削状況（南から） ⑥ SK-A2（SH-A1中央土壤）（西から） ⑦ SH-A2 埋土層断面（北西から） ⑧ AH-A3（北東から）

写真図版 38	芝ヶ端遺跡	上 下	B地区北東部（北東から） B地区南部（西から）
写真図版 39	芝ヶ端遺跡	上 下	SH-B 1（東から） SD-B 7・B 8およびSK-B 10（南から）
写真図版 40	芝ヶ端遺跡	上 下	SD-B 7 土器出土状況（南東から） SD-B 7 土器出土状況（南から）
写真図版 41	芝ヶ端遺跡	上 下	SH-B 1 中央土壙（南東から） SK-B 01 埋土土層断面（北東から）
写真図版 42	芝ヶ端遺跡	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	SH-B 1 中央土壙埋土土層断面（南西から） SK-B 01 全景（北東から） SK-B 06 土器出土状況（東から） SB-B 1 内 S P-B 03 土器出土状況（北から） SB-B 1 内 S P-B 02 土器出土状況（北東から） SB-B 1 および周辺の遺構（西から） SK-B 01 須恵器出土状況（南西から） SE-B 1 埋土土層断面（北から）
写真図版 43	芝ヶ端遺跡	上 下	谷部・SD-B 1 連結部埋土土層断面（北から） bb SD-B 1 埋土土層断面（北東から） aa
写真図版 44	芝ヶ端遺跡	上 下	SX-B 1（北東から） SX-B 1（南西から）
写真図版 45	芝ヶ端遺跡	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	SK-B 02 埋土土層断面（北から） SK-B 03 埋土土層断面（北東から） SK-B 04 埋土土層断面（北西から） SK-B 05 墓出土状況（西から） S P-B 13 土器出土状況（南東から） S P-B 21 土器出土状況（北から） S P-B 21 下部土器出土状況（北から） S P-B 22 土器出土状況（北から）
写真図版 46	芝ヶ端遺跡	上 ① ② ③ ④	SD-B 3 積・埴輪検出状況（東から） SD-B 1 底面の足跡（東から） SD-B 2 埋土土層断面（北東から） cc SD-B 3 積・埴輪検出状況（北から） S P-B 01 土器出土状況（北東から）
写真図版 47	芝ヶ端遺跡		弥生時代～奈良時代遺構出土土器
写真図版 48	芝ヶ端遺跡	上 下	弥生時代住居跡・溝出土土器① 弥生時代住居跡・溝出土土器②
写真図版 49	芝ヶ端遺跡	上 下	SK-B 01 出土土器 B地区遺構出土土器
写真図版 50	芝ヶ端遺跡		B地区遺構出土遺物
写真図版 51	芝ヶ端遺跡	上 下	B地区谷部出土土器 B地区溝・柱穴・包含層出土土器
写真図版 52	芝ヶ端遺跡	上 下	A地区柱穴・B地区包含層出土磁器（外面） A地区柱穴・B地区包含層出土磁器（内面）
写真図版 53	芝ヶ端遺跡	上 下	出土石器類（a面） 出土石器類（b面）
写真図版 54	芝ヶ端遺跡		B地区遺構出土石製品
芝花古墳群			
写真図版 55	芝花古墳群		全景（真上から）
写真図版 56	芝花古墳群	上 下	調査前全景（北西から） 調査後全景（北西から）
写真図版 57	芝花古墳群	上 下	調査前全景（北東から） 調査後全景（北東から）
写真図版 58	芝花古墳群	上 下	調査前全景（東から） 調査後全景（東から）
写真図版 59	芝花古墳群	上 下	弥生時代遺構群（北から） 弥生時代遺構群（西から）
写真図版 60	芝花古墳群	上 下	落とし穴（北から） SH 01（北から）
写真図版 61	芝花古墳群	上 中 下	SH 01 断面（西から） SH 01 中央土坑（北から） SH 01 上層須恵器出土状況（北西から）
写真図版 62	芝花古墳群	上	段状遺構 1（西から）

写真図版 62		中	段状造構 1 (南から)
写真図版 63	芝花古墳群	下	段状造構 2・3・6 (西から)
		上	段状造構 2 (南から)
		中	段状造構 3 (南から)
		下	段状造構 4 (西から)
写真図版 64	芝花古墳群	上	段状造構 5 (西から)
		中	段状造構 6 (南から)
		下	段状造構 9 (東から)
写真図版 65	芝花古墳群	上	SKO1土器 (南から)
		下	SKO1 (北から)
写真図版 66	芝花古墳群	左上	木棺墓 (南から)
		左下	木棺墓埋土断面 (南から)
		右上	木棺墓掘方断面 (南から)
		右下	木棺墓掘方 (南から)
写真図版 67	芝花古墳群	上	古墳群全景 (北から)
		下	古墳群全景 (西から)
写真図版 68	芝花古墳群	上	芝花 28・27・26号墳 (南から)
		下	芝花 28号墳周溝 (東から)
写真図版 69	芝花古墳群	上	芝花 28号墳主体部 (西から)
		下	芝花 28号墳主体部東端 (西から)
写真図版 70	芝花古墳群	上	芝花 27号墳 (南から)
		下	芝花 27号墳主体部 1 (東から)
写真図版 71	芝花古墳群	①	芝花 27号墳主体部 1 断面 (東から)
		②	芝花 27号墳主体部 2 断面 (東から)
		③	芝花 27号墳主体部 2 (東から)
		④	芝花 27号墳主体部 2 西端 (東から)
		⑤	芝花 27号墳主体部 2 石 (東から)
		⑥	芝花 27号墳主体部 2 据方 (東から)
写真図版 72	芝花古墳群	上	芝花 26号墳 (南から)
		下	芝花 26号墳主体部 1 (東から)
写真図版 73	芝花古墳群	上	芝花 26号墳主体部 1 埋土 (東から)
		中	芝花 26号墳主体部 1 据方 (東から)
		下	芝花 26号墳主体部 1 供獻土器 (東から)
写真図版 74	芝花古墳群	上	芝花 26号墳主体部 2 (東から)
		下左	芝花 26号墳主体部 3 (東から)
		中右	芝花 26号墳主体部 3 断面 (西から)
		下右	芝花 26号墳東側土壙墓 (南東から)
写真図版 75	芝花古墳群	上	芝花 26号墳土器棺 1 盖 (南西から)
		下	芝花 26号墳土器棺 1 身 (南西から)
写真図版 76	芝花古墳群	上	芝花 26号墳土器棺 2 (西から)
		下	芝花 26号墳土器棺 2 (西から)
写真図版 77	芝花古墳群	上	芝花 72号墳 (北東から)
		下	芝花 72号墳主体部 3 (南東から)
写真図版 78	芝花古墳群	上	芝花 72号墳主体部 3 (北から)
		中	芝花 72号墳主体部 3 遺物 (北から)
		下	芝花 72号墳主体部 3 断面 (北から)
写真図版 79	芝花古墳群	上	芝花 72号墳主体部 1 (東から)
		中	芝花 72号墳主体部 2 (東から)
		下	芝花 72号墳主体部 1・2 断面 (西から)
写真図版 80	芝花古墳群	上	芝花 72号墳墳丘断面 (北から)
		中	芝花 72号墳土器北側土器棺 (西から)
		下	芝花 72号墳土器北側土器棺 (西から)
写真図版 81	芝花古墳群	上	芝花 73号墳 (南から)
		下	芝花 73号墳主体部 3 (東から)
写真図版 82	芝花古墳群	上	芝花 73号墳主体部 3 据方 (東から)
		下	芝花 73号墳主体部 3 遺物 (東から)
写真図版 83	芝花古墳群	上	芝花 73号墳主体部 3 供獻土器 (北から)
		中	芝花 28号墳主体部 1 (東から)
		下	芝花 28号墳主体部 1 据方 (東から)
写真図版 84	芝花古墳群	上	芝花 73号墳主体部 5 土器 (東から)
		中	芝花 73号墳 SKO2 (西から)
		下	芝花 73号墳墳丘断面 (東から)
写真図版 85	芝花古墳群	上	芝花 74号墳 (北から)

写真図版 85	芝花古墳群	下	芝花 74 号墳 (南から)
写真図版 86	芝花古墳群	上	芝花 74 号墳主体部 1 蓋 (南から)
写真図版 87	芝花古墳群	上 中	芝花 74 号墳主体部 1 棺 (南から) 芝花 74 号墳主体部 1 底 (南から)
写真図版 88	芝花古墳群	下	芝花 74 号墳主体部 1 挖方 (南から)
写真図版 89	芝花古墳群	上 下	芝花 74 号墳主体部 2 蓋 (南から) 芝花 74 号墳主体部 2 棺 (南から)
写真図版 90	芝花古墳群	上 下	芝花 74 号墳主体部 2 棺 (東から) 芝花 74 号墳主体部 3 蓋 (南から)
写真図版 91	芝花古墳群	下 上	芝花 74 号墳主体部 3 棺 (南から) 芝花 74 号墳主体部 3 挖方 (南から)
写真図版 92	芝花古墳群	上 中	芝花 74 号墳主体部 3 棺 (東から) 芝花 74 号墳主体部 4 挖方 (東から)
写真図版 93	芝花古墳群	下 上	芝花 74 号墳主体部 4 断面 (東から) 段状遺構 7 (南東から)
写真図版 94	芝花古墳群	上 下	段状遺構 7 土器 (南東から) 集石墓 (北から)
写真図版 95	芝花古墳群		集石墓充堀状況 (北から)
写真図版 96	芝花古墳群		縄文・弥生時代出土土器
写真図版 97	芝花古墳群		弥生時代出土土器
写真図版 98	芝花古墳群		弥生時代出土石器①
写真図版 99	芝花古墳群		弥生時代出土石器②
写真図版 100	芝花古墳群		芝花 28・27・26 号墳出土土器
写真図版 101	芝花古墳群		芝花 26 号墳出土土器・鉄製品
写真図版 102	芝花古墳群		芝花 72・73 号墳出土土器・鉄製品
写真図版 103	芝花古墳群		芝花 73・74 号墳、段状遺構 7 出土土器・鉄製品
写真図版 104	芝花古墳群	上	SH01 上層出土土器
		下	中世の出土土器
写真図版 105	芝花古墳群		集石墓出土備前焼壺
写真図版 106	芝花古墳群	上	中世の石製品
写真図版 107	芝花古墳群	下 上	芝花 73 号墳出土人骨① 芝花 73 号墳出土人骨②
		下	芝花 72 号墳出土人骨 集石墓出土骨片

I はじめに

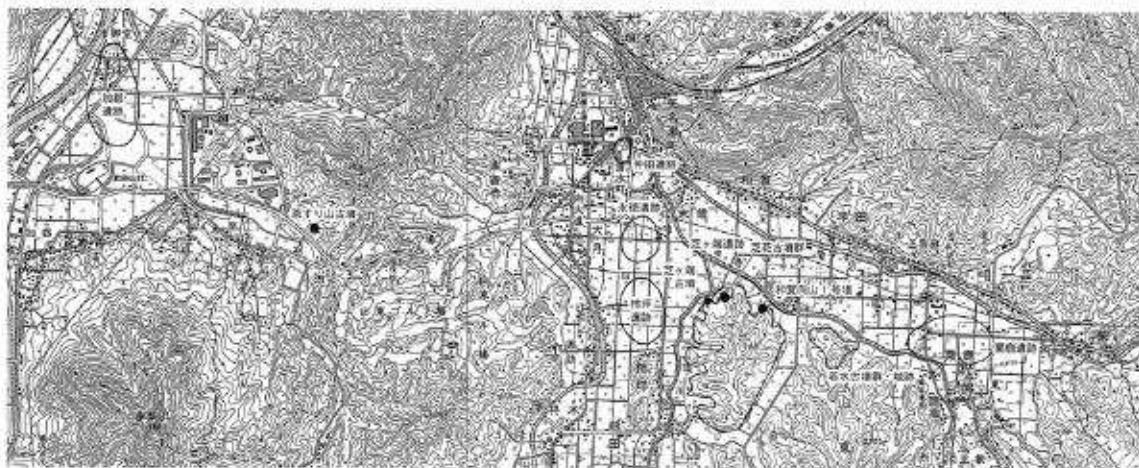
第1章 遺跡の位置と環境

本書で報告する和賀向山1号墳・芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡・芝花古墳群は、朝来市山東町北西部の「山東盆地」縁辺に位置する。山東盆地は横「L」字形に近い形状を呈するが、その屈曲部分南側に存在する山塊の北端に位置している（第1図）。

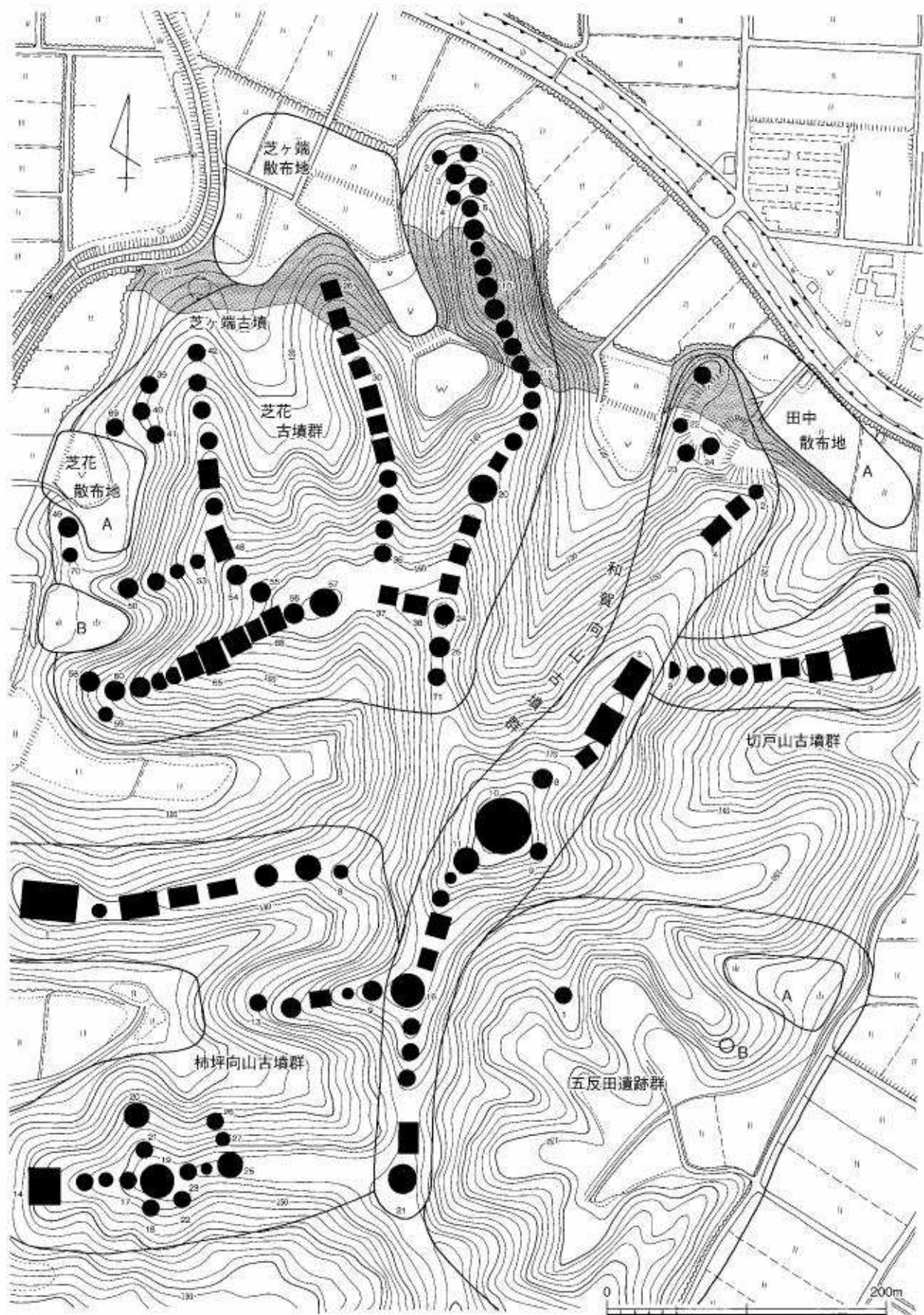
盆地内低地部には弥生時代～古墳時代の集落跡である柿坪遺跡や栗鹿遺跡が存在し、弥生時代では仲田遺跡や永徳遺跡がある。また、盆地に面した丘陵上には弥生時代後期～古墳時代の若水遺跡・古墳群も存在し、盆地西方の丘陵部には大円墳の茶すり山古墳が存在している。なお、丘陵部をさらに超えた和田山盆地側には弥生時代～古墳時代の大集落跡である加都遺跡が存在している。

和賀向山1号墳・芝ヶ端古墳・芝花古墳群が存在する山塊の尾根筋には、第2図に示したように、芝花古墳群・和賀向山古墳群のほか、柿坪向山古墳群や切戸山古墳群などが密集して存在し、丘陵尾根のほとんどが古墳で埋め尽くされている。また、方格規矩鳥文鏡を出土した馬場19号墳も本丘陵内南端に位置している。

この丘陵の北東に位置するのが和賀向山古墳群で、道路予定地範囲内に1号墳が存在している。その西側には芝花古墳群が存在しているが、北側にのびる3本の支尾根のうち、本書所収分は中央の支尾根に立地する支群の北端にあたる。なお、東側支尾根に存在する芝花7～15号墳の調査報告は、平成19年度刊行『芝花弥生墓群・古墳群』に所収している。芝ヶ端古墳は、芝花古墳群の最も西側の支尾根先端に立地しており、位置的には芝花古墳群に含むべきかもしれないが、地元教育委員会との協議の結果、芝ヶ端古墳と呼称している。芝ヶ端遺跡は芝花古墳群の中央支尾根北側の水田部分に位置し、芝ヶ端散布地と呼称されていた部分にあたり、確認調査の結果、遺構・遺物が検出された部分は散布地の南西部分である。



第1図 遺跡の位置



第2図 和賀・柿坪山塊の古墳分布図

第2章 発掘調査の経緯・経過と体制

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

一般国道483号北近畿豊岡自動車道のうち、春日和田山道路は、兵庫県中央部東端に位置する丹波市春日町から朝来市和田山町までを結ぶ高規格幹線道路で、平成18年に開通している。

この道路建設予定地内のうち、朝来市山東町内に存在する埋蔵文化財の調査は、兵庫県教育委員会により平成5年度に実施したが、その後事業地の範囲等の一部変更に伴い、平成10年度に再度分布調査を実施した。その際の遺跡名は地点名としてNo.を付しており、以下の（）内の番号である。

本書所収の各遺跡のうち、確認調査は、芝ヶ端遺跡（No.114地点）（遺跡調査番号990191）と芝ヶ端古墳（No.116地点）（遺跡調査番号990192）について第1次確認調査を平成11年7月に実施したが、芝ヶ端遺跡については遺構検出範囲の拡大に伴い、芝ヶ端古墳については古墳としての確証を得るために、平成11年11月に第2次確認調査を芝ヶ端遺跡（遺跡調査番号990254）と芝ヶ端古墳（遺跡調査番号990277）の両者について実施した。

以上の確認調査の結果を受けて、芝ヶ端遺跡の全面調査（遺跡調査番号990225）は平成11年10月～12月に、芝ヶ端古墳の全面調査（遺跡調査番号990285）は芝ヶ端遺跡調査に引き続き平成11年12月～平成12年3月に実施した。

和賀向山1号墳（No.112地点）（遺跡調査番号990220）と芝花古墳群（No.115地点）（遺跡調査番号990221）の確認調査は平成11年9月～10月に実施し、遺跡の性格と調査範囲の確定をおこなった。

その結果により、芝花古墳群の全面調査（遺跡調査番号2000200）は平成12年7月～11月に、和賀向山1号墳については平成12年11月～平成13年3月に全面調査（遺跡調査番号2000256）を実施した。

なお、詳細は各報告部分に掲られたい。

第2節 発掘調査の体制

各遺跡の発掘調査はすべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施したが、それらのうち、芝ヶ端遺跡および芝ヶ端古墳の第2次確認調査と全面調査はすべて同一担当者であり、芝花古墳群の確認調査および全面調査も別の同一担当者による。以下、遺跡別・調査種類別に担当者等の調査体制を記す。

（1）和賀向山1号墳

和賀向山1号墳（所在地：朝来市山東町和賀字向山108-6番地）

平成11（1999）年度 確認調査 調査番号990220

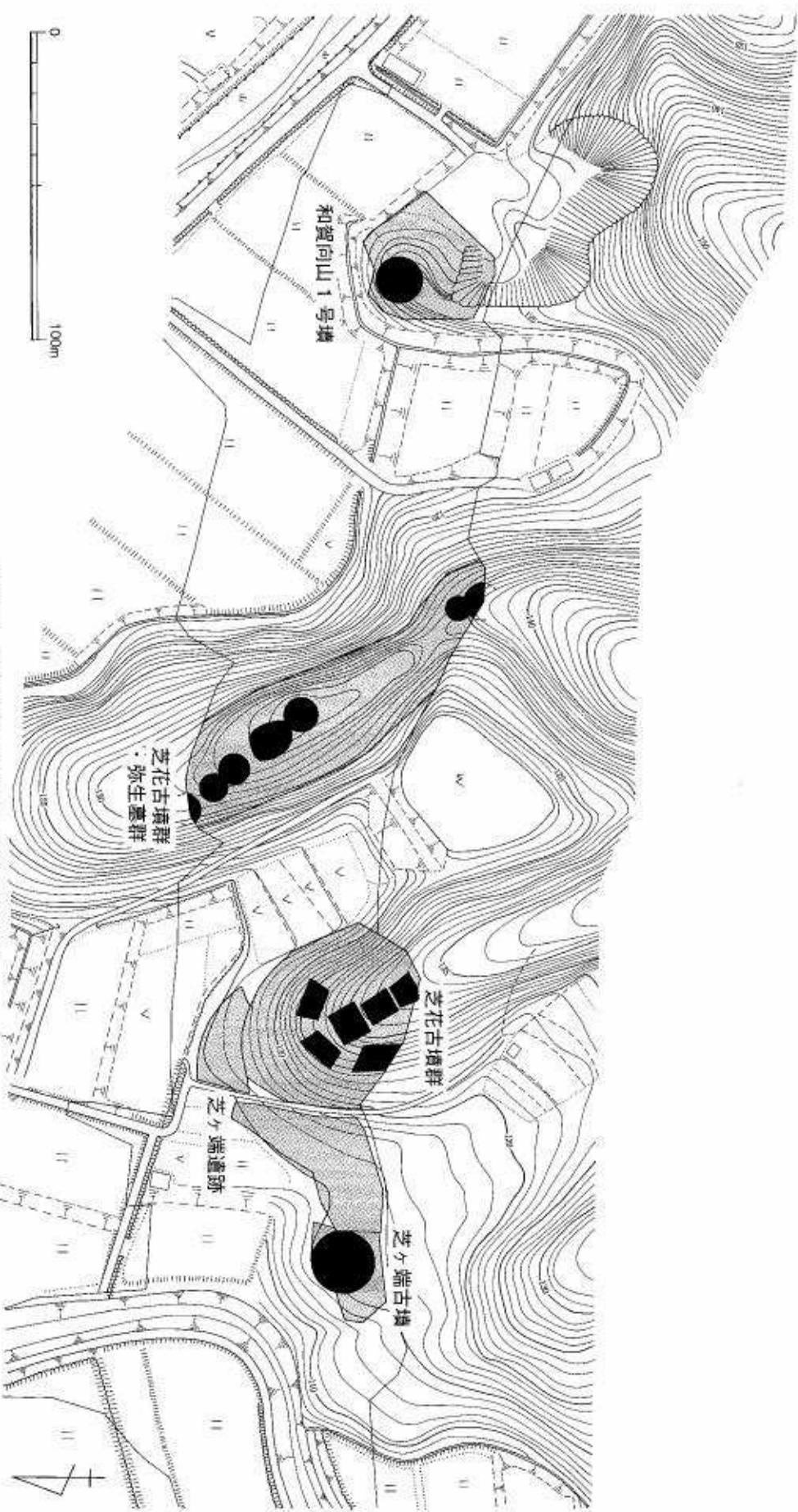
調査担当者 池田征弘

平成12（2000）年度 全面調査 調査番号2000256

調査面積 1,236m²

調査期間 平成12（2000）年11月1日～平成13（2001）年3月23日

調査担当者 西口圭介 鈴木敬二 海邊博史（現：香川県善通寺市役所）



(2) 芝ヶ端古墳

芝ヶ端古墳 (所在地：朝来市山東町和賀字芝ヶ端108-7、108-8番地)
平成11（1999）年度 確認調査（第1次） 調査番号990192
調査担当者 別府洋二 川村慎也（現：高知県四万十市教育委員会） 田中秀明
平成11（1999）年度 確認調査（第2次） 調査番号990277
調査担当者 岸本一宏 井本有二（現：兵庫県新宮高等学校）
平成11（1999）年度 全面調査 調査番号990285
調査面積 518m²
調査期間 平成11（1999）年12月17日～平成12（2000）年3月25日
調査担当者 岸本一宏 井本有二
現場補助員 中村真也 山本亮司
現場事務・室内作業員 足立智美 加門美智代 木村智子 西田みゆき

(3) 芝ヶ端遺跡

芝ヶ端遺跡 (所在地：朝来市山東町和賀字芝ヶ端91、191-2、192-2、192-3番地)
平成11（1999）年度 確認調査 調査番号990191
調査担当者 別府洋二 川村慎也 田中秀明
平成11（1999）年度 確認調査 調査番号990254
調査担当者 岸本一宏 井本有二
平成11（1999）年度 全面調査 調査番号990225
調査面積 1,487m²
調査期間 平成11（1999）年10月13日～平成11（1999）年12月17日
調査担当者 岸本一宏 井本有二
現場補助員 中村真也 山本亮司
現場事務・室内作業員 足立智美 加門美智代 木村智子 西田みゆき

(4) 芝花古墳群

芝花古墳群 (所在地：朝来市山東町和賀字向山117-2、118番地)
平成11（1999）年度 確認調査 調査番号990221
調査担当者 池田征弘
平成12（2000）年度 全面調査 調査番号2000200
調査面積 2,247m²
調査期間 平成12（2000）年7月31日～平成12（2000）年11月7日
調査担当者 種定淳介 池田征弘 大崎晃司

なお、上に記すことができなかつたが、和賀向山1号墳および芝花古墳群の調査についても、現場補助員・現場事務員・室内作業員の補助があつたことを付記しておく。

第3章 出土品整理の経過と体制

第1節 出土品整理の経過

和賀向山1号墳・芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡・芝花古墳群の出土品整理は、「芝ヶ端遺跡他」の名称で一括して平成18年度と平成19年度の2年間実施した。

平成18年度は、土器類・石器等出土遺物の接合・補強、実測、復元、金属器の保存処理の工程を実施し、遺物の写真撮影も行った。これらの作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

平成19年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が組織改変によって兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となり、7月から加古郡播磨町大中500に所在する兵庫県立考古博物館に場所を移して、遺物写真撮影、トレース、レイアウト、印刷・製本の工程を実施した。

印刷・製本にあたっても、上記4遺跡の報告を含めて合冊とした。

第2節 出土品整理作業の体制

(1) 和賀向山1号墳

整理担当職員 調査第3班（平成18年度）・調査第1班（平成19年度） 鈴木敬二

整理保存班 岸本一宏（工程管理）・岡本一秀（金属器保存処理）

整理担当非常勤嘱託員 尾鷲都美子

(2) 芝ヶ端古墳

整理担当職員 整理保存班 岸本一宏（工程管理兼務）・岡本一秀（金属器保存処理）

整理担当非常勤嘱託員 村上京子 池内（溝上）くみ 長濱（三島）重美

(3) 芝ヶ端遺跡

整理担当職員 整理保存班 岸本一宏（工程管理兼務）・岡本一秀（金属器保存処理）

整理担当非常勤嘱託員 村上京子 池内（溝上）くみ 長濱（三島）重美

(4) 芝花古墳群

整理担当職員 調査第2班（平成18年度）・調査第1班（平成19年度） 池田征弘

整理保存班 岸本一宏（工程管理）・岡本一秀（金属器保存処理）

整理担当非常勤嘱託員 宮田麻子 西村美緒

遺跡ごとの出土品整理作業の体制は上記のとおりであるが、各遺跡を通じた接合補強、復元作業と金属器保存処理については下記の非常勤嘱託員が担当した。

整理担当非常勤嘱託員 真子ふさ恵 西口由紀 木村淑子 小野潤子 三好綾子
奥野政子 又江立子 荒木由美子 藤池かづさ 嶺岡美見

金属器保存処理担当非常勤嘱託員 栗山美奈 大前篤子 藤井光代 清水幸子

II 和賀向山 1号墳

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置

円山川水系与布土川の支流である栗鹿川が、さらにその支流である三保川と分岐する地点の南東側に、南北約1km東西約0.8kmの丘陵があり、この丘陵中央部に和賀向山古墳群が所在する。

古墳群はこの丘陵の頂上をはさんで南北約500mにわたる帶状に広がっており、なかでも中心的な位置を占めるのが和賀向山10号墳（直径約35mの円墳）である。10号墳をはさんで南北両側に、直径20m以下の円墳や一辺25m以下の方墳等、10号墳より小規模な23基の古墳が分布しているが、この古墳群の最北端に位置するのが和賀向山1号墳である。

第2節 遺跡の環境

和賀向山1号墳は和賀向山古墳群が分布する丘陵の北端に位置する。北側の眼下には栗鹿川と柴川にはさまれた平野が広がっている。この平野は交通の要衝であり、律令期には都と日本海側の諸国を結ぶ古代山陰道が通じており、また栗鹿駅家が近くに所在する。また古墳時代の拠点的な集落遺跡である栗鹿遺跡もこの平野に所在する。

和賀向山古墳群が所在する丘陵には他に複数の古墳群等が分布している。南北方向に細長く延びる尾根上に位置する和賀向山古墳群の西側には、北から順に芝花古墳群、柿坪向山古墳群があり、逆に和賀向山古墳群の東側には、北から順に切戸山古墳群、五反田1号墳、馬場古墳群が分布する。五反田1号墳の周囲には五反田遺跡があり、このうち五反田遺跡Cでは木棺墓5基、土器棺墓4基が検出されている。芝花古墳群の北西側には芝ヶ端遺跡が所在する。また和賀向山古墳群の所在する丘陵の東側の、さらに谷を隔て東側の丘陵上には若水古墳群および若水城跡が所在する。芝花古墳群、芝ヶ端遺跡および若水古墳群、若水城跡については和賀向山1号墳とおなじく一般国道483号春日和田山道路Ⅱ事業に伴い発掘調査が実施され、芝ヶ端古墳と芝ヶ端遺跡および芝花古墳群の報告は本報告書のⅢ、Ⅳ、Ⅴ部に所収されている。

第3節 調査の経過

1. 分布調査（遺跡調査番号930013）

一般国道483号春日和田山道路Ⅱ事業について、事業計画が概ね確定した平成5年度に、埋蔵文化財の分布調査を遠阪トンネルから和田山ジャンクションの区間で実施した。その結果、道路路線内に周知

の埋蔵文化財である和賀向山古墳群の一角が含まれていることが明らかになった。

2. 発掘調査

(1) 確認調査（遺跡調査番号 990220）

平成 5 年度の分布調査の結果を受け、兵庫県教育委員会は建設省近畿地方整備局豊岡工事事務所（当時：現国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所）からの依頼に基づき、和賀向山古墳群および隣接する芝花古墳群の埋蔵文化財確認調査を平成 11 年度に実施した。

確認調査では、古墳群の最北端に位置する和賀向山 1 号墳の墳丘上に、幅約 1 m の試掘トレンチ 3 本を設定し、古墳の範囲、残存状況および墳丘規模の把握、さらに埋葬主体の位置、規模および残存状況の把握に努めた。その結果、墳丘南側斜面に設定したトレンチ 1 で周溝を検出したこと等より、古墳は尾根の先端に築かれた概ね直径 15 m 以内の円墳であると推測した。また、墳丘頂上に設定したトレンチ 2 では横穴式石室と考えられる埋葬主体を検出した。石室は全長 3 m 以上、幅 1 m 以上で、東側に開口部が認められた。さらに墳丘東側のトレンチ 3 では 2 m の深度まで掘削しても地山に達しないことから、墳丘東半部は攪乱により一部墳丘が損壊していると推測された。

① 調査担当者 池田 征弘

② 調査期間 平成 11 年 9 月 29 日～平成 11 年 10 月 8 日

③ 調査面積 20.5 m²

(2) 全面調査（遺跡調査番号 2000256）

平成 11 年度の確認調査の結果を受け、兵庫県教育委員会は建設省近畿地方整備局豊岡工事事務所（当時）からの依頼に基づき、和賀向山古墳群の本発掘調査を平成 12 年度に実施した。調査対象は古墳群の最北端に位置する和賀向山 1 号墳である。

調査の結果、横穴式石室 1 基を検出した他、墳頂部および墳丘斜面で円筒埴輪や家形等の形象埴輪が出土した。古墳に伴わない遺構としては、古墳の北側斜面で弥生時代の木棺直葬墓を検出したほか、墳丘南側では律令期に属する土坑を検出した。

① 調査担当者 西口 圭介、鈴木 敏二、海邊 博史（現香川県善通寺市役所）

② 調査期間 平成 12 年 11 月 1 日～平成 13 年 3 月 23 日

③ 調査面積 1,236 m²

3. 出土品整理等

和賀向山 1 号墳の発掘調査は一般国道 483 号春日和田山道路Ⅱ事業に伴うものであり、出土品整理および報告書作成作業は、同道路事業地内に所在し和賀向山古墳群に隣接する、芝ヶ端遺跡等の出土品整理と同一事業として、平成 18 年度から 2 カ年にわたり兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（平成 18 年度）および兵庫県立考古博物館（平成 19 年度）で実施した。

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

今回の本発掘調査の対象となったのは古墳群の最北端に位置する和賀向山1号墳である。1号墳は和賀向山古墳群の立地する丘陵北側の先端部（標高約124m）に所在し、北側の眼下に栗鹿川を望む。栗鹿川の流れる平野と1号墳墳頂部との比高差は約10mである。

発掘調査の実施に先立ち、現況地形の実測（1/50平板測量）を実施した（図版3）。発掘の実施にあたり、表土は原則的に人力で掘削した。ただし古墳の南東から東側は元々土取り工事等のために本来の地形が改変されており、その結果生じた搅乱土が厚く堆積していた。この範囲に限りバックホウにより表土および搅乱土を掘削した。墳丘と石室内の掘削にあたっては南北および東西方向の土層観察用の畦を設け、土層堆積状況を確認しながら掘削を行った。土層断面観察用の畔については、本発掘調査の実施前に石室石材が地表に露出しており、石室の主軸方向が概ね把握できたため、東西方向は石室の主軸方向にあわせて畦を設定し、南北方向は石室中央付近で主軸に直交する方向に設定した。この畔をさらに延長し、墳丘の土層観察にも同一の畔を用いた。

調査前の地形測量および調査時の個別の遺構実測は調査担当者と補助員が行ったが、調査後の墳丘測量は空中写真測量を実施した。墳丘の空中写真測量は墳丘盛土を検出した段階で実施した。空中写真測量を実施した後、墳頂部では墓壙の検出を行い、また墳丘では盛土を撤去し地山の検出を行った。

古墳以外の遺構としては、墳丘の北側斜面で弥生時代後期の木棺直葬墓を検出した。木棺墓は古墳の調査終了間際の墳丘盛土を除去した後に検出した。木棺の主軸をほぼ東西に向けており、遺構の横断面図は墳丘の土層観察用畦が木棺墓の中央を横断したため、木棺埋土の土層堆積状況の確認等にはこの畦をそのまま利用した。また1号墳南側の周溝内で、2基の律令期の土坑を検出した。土層断面を観察した結果、どちらも周溝埋没後に掘削されていること、片側の土坑で律令期の須恵器壺（水瓶）が出土していることから、これらは火葬墓または火葬に関連する遺構であると考えられる。

なお1号墳の南西に伸びる尾根線上に全長約12m、幅約5m、高さ約1.5mの地形の隆起を確認し、別の古墳の存在が予想されたため、この箇所まで調査範囲に含めたが、墳丘の大半が土取り工事により失われていることと、主体部や明瞭な盛土等が検出されなかったことから、この箇所を古墳と断定することは不可能であった。

第2節 調査前の状況

和賀向山1号墳が所在する尾根の周辺は元々土砂採取場のあった場所で、土取り工事等のために本来の地形が改変されている箇所が多く、旧地形を復元することは困難であった。特に尾根の南東側は山腹から尾根筋まで地形の改変が著しかった。そのような状況の中でも、尾根の北側先端に明瞭な平坦面が存在したため、調査前から1号墳の位置を把握することは可能であった。また平成11年度の確認調査の結果、1トレンチ内で周溝が確認されたことから墳丘裾を概ね把握することができ、墳丘径が約14mと推測された。墳頂部は搅乱を受けているため、ほぼ平坦に均されていた。墳頂東半部は西半部より約1

m隆起していたが、これは後世の盛土のためである。埋葬主体は横穴式石室であることが確認されてい
たが、石室の規模および形状までは把握しきれていなかった。

第3節 墳丘

1. 規模と形状

墳丘はほぼ円形で直径約14mである。墳頂部と西側墳裾部の比高差は約3mで、この北側斜面で墳頂
と墳裾部の比高差が最大になる。反対に墳丘の南側は弧状に掘られた周溝により墳丘の内外が明瞭に区
画されており、周溝底と墳頂の比高差は約1.5mである。

墳丘は盛土が多く流出しているため築造当初の状況がかなり改変されているが、墳丘西側と南側の墳
裾部は残存状況が比較的良好である。標高120m付近で墳丘裾と考えられる傾斜変換点を確認したが、
北半部では明瞭な墳丘裾を認めることができなかった。北側斜面は傾斜が急なため墳丘盛土の流出が著
しかったものと考えられる。

墳丘東側は現代の土取り工事による搅乱を受けて古墳築造当初の地形が失われており、急傾斜の崖面
を形成している。墳丘西側斜面で墳裾が見つかった標高120m付近までも搅乱が及んでいることから東側
斜面では墳丘の形状を明らかにすることはできなかった。

2. 盛土の状況

墳丘盛土は地山に近い黄褐色土と、旧地表と考えられる黒褐色土が混在していた。盛土の残存状況は、
墳頂部では北側の最も厚い箇所でも厚さは0.4m以下である。墳頂の西半部では残存する盛土は認めら
れなかった。

墳丘斜面においては、南側および西側斜面は0.3~0.4mの厚さの盛土が残されているが、北側斜面に
ついては下層の弥生時代の木棺墓上に墳丘が築かれており、木棺墓築造時に地山が平に削られているこ
とから、盛土の厚さも最大約1mにおよぶ箇所がある。東側斜面については現代の土取り工事により、
墳丘盛土および地山が抉り取られていた。

3. 周溝および墳裾

墳丘南側で周溝を検出した。周溝は墳丘を全周しておらず、墳丘南側斜面に沿った弧状を呈しており、
尾根を垂直に切断する格好になっている。周溝は長さ約10.5m、幅約2.5m、深さは最大0.8mである。
また墳丘西側では、標高120.0mから120.5m付近で墳丘の傾斜が緩やかになる箇所が見られた。この傾
斜変換点は南側周溝から連続していることから墳丘裾を意識した可能性があるが、墳丘北西側では消滅
している。

4. 墳丘等での遺物出土状況

墳丘構築時に据えられた可能性のある遺物として、周溝西端よりさらに西側の緩斜面上で、円筒埴輪
2基が地山上に直立した状態で出土した。2基の埴輪の間隔は0.85mである。据えられた埴輪基底部の
標高は約120.75mと122.6mで、0.15mの標高差があり、位置的にも墳丘裾と並行した弧状に位置するの
ではなく、墳丘裾より西側にやや開いたライン上に並んでいるため、2個体の埴輪の検出位置は原位置

に近いながらもやや当初の設置位置から動いている可能性がある。これらの円筒埴輪の掘方を検出することはできなかったが、土砂の流出により地山が本来の高さより削平されたため、流出土砂とともに掘方および埴輪の上部も押し流され、埴輪基底部だけが残されたものと考えられる。

墳頂部では、玄室北側にある土坑（SK03）の埋土中より家形埴輪が出土した。SK03は、盛土除去後の旧地表面でようやく認識したもの、土層断面では墳丘の盛土を切っていることから、古墳より新しいという以上のことは言えない。他の遺物としては墳丘上より須恵器と円筒埴輪の破片が出土している。

5. 莢石

墳丘南東側斜面に人頭大の丸石が散布している。これらの配置には規則性が無いため原位置を留めているとは考えられないものの、かつて墳丘に葺石が施されていた可能性も否定できない。ただ、このような丸石が分布する範囲は墳丘南東側から南側斜面に限られているが、その斜面は集落が所在したと考えられる栗鹿川北側の平野から視認不可能な点から、これらを葺石と考えるには不自然な点もある。

第4節 埋葬主体

1. 検出状況および残存状況

1号墳の埋葬施設は、東西方向に主軸を持ち東側に開口する横穴式石室である。石室主軸は東西方向から3°南側に偏る。石室内部には側壁等の石材が転落している状況が確認され、これらの転落石を除去することから調査を進めていった。

石室の残存状況については、墳丘北半部と羨道部付近が攪乱を受けて損壊していた。原位置を保っているのは南壁の玄室部分と奥壁の基底石の他、南壁の奥壁に近い部分に残された2～3段分の石材のみである。残存する玄室部の規模は、全長4.05m、幅1.15mである。

羨道部でも、石室南壁に連なる石材が検出されているが（図版8の網かけのある石）、羨道部の床面は攪乱を受けており、これらの石材は攪乱に溜まった埋土上に位置していることから、原位置を保っていないと判断された。これらの石材が示す形状と同様の平面形の羨道が存在したとは考えられない。また後述のとおり玄室の石室石材は、平滑な面を石室壁面に向いているが、これら羨道部の石材上面は平滑面の向きが揃っていない。このことも羨道部石材は原位置を保っていないことを裏付けている。

2. 石室構造

(1) 奥壁

石室の奥壁部分での幅は1.15mである。奥壁の床面からの残存高は最大0.3mである。基底石は2石で構成されており、このうち南側石材は板状の石材で、高さ0.42m、幅0.87m、厚さ0.22mで全体的にほぼ均一の厚さである。壁面には石材の平滑な面を向いている。北側石材は、高さ0.2m、幅0.3m、厚さ0.34mである。この石材は壁面として用いる面にも自然面を残している。また北側石材の高さは南側石材より約0.22m低いが、上にもう1石積むことにより、南側石材と高さを揃えているようである。

(2) 南壁

石室南壁の、玄室部における基底石は計10石で構成されている。前に記したとおり羨道部は攪乱を受

けているため、確実に原位置を保っている部分は、玄室部分の長さ4mのみとなる。

残存状況は悪くほぼ基底石しか残っていないが、奥壁に近い西側部分のみ3段分の石材が残存しており、その部分での床面からの残存高は約0.6mである。基底石には厚い板状または柱状の石材が用いられている。これらの石材の最も広い面を床に接するように据えられ、石材上面の高さはほぼ標高122.5mに揃えられている。

石室内に面する基底石の裏には、同様の石材を用いて控え積みを行っている。控え積みに用いた石は上面を水平に揃えるとともに、基底石の上面とも標高が揃えられている。側壁2段目の石材は上面をほぼ標高122.7mに揃えている。南壁の東端付近の基底石はやや大型の石材が用いられており、この基底石の上面の高さは、他の石材の2段目とほぼ同一である。3段目の石材は奥壁側に3石残っているのみである。上面は概ね標高123.0m前後に位置するが、面は不揃いである。

(3) 北壁

石室検出時に、北壁に相当する位置の奥壁側で2つの石室石材を検出したが、石室床面を精査した結果いずれの石材も搅乱土上に乗っており、いずれも原位置を留めていないことが判明した。これらの石の床面からの残存高は最大で0.3mであり、上面の高さが一律ではない上に、南側の石材とも対応していないことからも、基底石などと考えることには無理がある。

(4) 床面

床面に厚さ約0.1mの置き土が認められた。玄室床面も搅乱が著しく、玄室の南側3分の2程度のみ置き土が遺存している。置き土は基底石を据えた後に敷かれており、単層で構成されている。墳丘盛土や墓壙埋土と近似した土が使用されており、置き土のみ特別な土を使い分けた状況ではなかった。

(5) 玄門付近の構造

玄室南壁に用いられた石材のうち、最も東（玄門側）に位置する石材は他と比べて大きいことや、墓壙の南肩がこの石材の背面付近で主軸側に屈曲していることから、この石材が袖に相当するものと考えられ、従ってこの石室は有袖式の石室と判断される。北壁側には原位置を保った石材がなく墓壙も検出されていないことから、両袖か片袖かの区別は確認されなかった。

3. 墓壙

和賀向山1号墳では石室を据えるにあたり墳頂部に墓壙を設けている。元来標高の高かった南壁と奥壁に相当する西壁部分のみを掘削しているが、北壁および東壁部分は側壁を設げず地山を削って水平に整形しているようである。北壁側の墓壙側壁は墳頂部が搅乱を受けた際に石室石材とともに滅失した可能性も否定できない。玄室の南壁と西壁のみ墓壙の壁面が残存しており、検出時にはL字形の平面形を呈していた。墓壙の残存する規模は東西約5m、東西約1.2mである。墓壙の深さは最も残存状況の良い南壁中央付近で約0.15mである。

墓壙床面の側壁付近には、基底石を据え付けるための穴が設けられていた。これらの据え付け穴を検出できたのは南壁側と西壁（奥壁）側のみであり、玄室北壁および羨道では据え付け穴を検出することができなかった。

4. 石室内遺物の出土状況

石室内の床面は搅乱を受けていたため遺物の残存状況は悪く、石室床面等から原位置を保った状態で出土した遺物は存在しない。石室内からは鉄剣、鉄鎌と須恵器の細片が出土したが、これらの遺物はいずれも石室埋土内からの出土であり原位置は保っていない。鉄剣は玄室中央付近から出土した。また石室羨道部付近を中心に、石室裏込等から鉄鎌が21本出土している。これらも大半は出土時に原位置を留めていなかったが、本来は玄室入口から羨道付近に副葬されていたものと考えられる。

5. 石室の形状

石室の平面形については玄門以東および北壁が残っていないため、正確な形状は不明である。奥壁には基底石2石が残っており、その残存幅は1.15mである。その北側に北壁に用いられたと見られる石材が散布していたことから、奥壁の残存幅は石室の幅とほぼ同一と考えられる。従って玄室の規模および平面形は、ほぼ残存する規模に近い全長約4m、全幅約1.2mと東西に細長い形状であると考えられる。

玄室の東側の羨道部には石材が帶状に分布し、あたかも羨道が存在したかのように見えるが、これらの石材は搅乱の上に存在するため原位置を留めておらず、石室築造時の羨道の姿を窺うことはできない。

また後述のとおり、今回の調査で出土した円筒埴輪および須恵器から、古墳の築造年代は6世紀前葉を想定している。6世紀前葉の但馬における横穴系埋葬施設としては一般的に竪穴系横口式石室が採用されていることから、この石室も竪穴系横口式石室の可能性を否定することはできない。

第5節 出土遺物

1. 墓輪

(1) 円筒埴輪 (W-1~W-18) (W-31~W-35:写真のみ)

W-1は口縁部から体部(3段目中位)にかけての破片である。墳丘北東斜面で出土した。口縁部から2段目までは直立しているが、2段目中位から3段目にかけて器形に歪みが認められる。2段目上位に円形の透かし穴が設けられている。外面の調整はタテハケを施した後、1~2段目のみ部分的にヨコハケを施している。ヨコハケは体部を一周させる意識はなく途中で途切れており、また施される間隔もまばらである。また口縁部は幅約2cmのヨコナデにより仕上げられる。3段目はタテハケのみで、ヨコハケは施されない。内面は、1~2段目はタテハケを施した後、ヨコナデにより調整される。口縁部だけはさらにヨコハケが施される。3段目内面は右下がりの板ナデによる調整が施される。色調は白みがかった明黄褐色で、黒斑は認められない。なお今回の発掘調査で出土した埴輪に黒斑が認められるものは一点も存在しない。

W-2~W-4は口縁部の破片である。

W-2は墳丘南西斜面で出土した。口縁部がやや開いている。外面の調整はタテハケ、内面はヨコハケである。色調は橙褐色である。

W-3は墳丘南西の周溝内で出土した破片で、口縁端部はほぼ直立する。外面の調整はW-1と同様にタテハケを施した後、ヨコハケにより調整される。更に口縁部のみ幅2cmにわたりヨコナデによって平滑になるよう仕上げられる。内面はヨコハケである。色調もW-1と同様に白みがかった明黄褐色である。

W-4も墳丘南西の周溝内で出土した。口縁端部がさらに開く形状である。残存状況が悪く外面調整は

不明であるが、内面にはヨコハケの痕跡が認められる。色調は橙褐色である。

W-5～W-13は底部の破片である。W-5とW-6は、墳丘南西斜面に直立していた埴輪である。

W-5は2基のうち西側（標高の低い側）、W-6は東側の埴輪である。どちらの埴輪も歪みが顕著でタガも水平ではない。外面調整はタテハケで、底部付近は指で押圧して整形した後、ヨコハケにより仕上げられる。底部の一箇所にはヘラ状工具により粘土が持ち上げられた痕跡があり、作業台から焼成前の埴輪を切り離すためにヘラを持ち上げた跡と考えられる。この痕跡の上にヨコハケが施されている。内面調整は横方向または右下がりの指ナデで、底部付近のみ板ナデが施される。色調は橙褐色である。

W-7は墳丘北東の搅乱内で出土したが、やはり歪みが認められる。外面調整はタテハケで底部付近のみヨコハケである。基底部の1箇所に、ヘラ状工具により粘土が持ち上げられた痕跡が残る。内面は板ナデの痕跡が認められる。色調は橙褐色である。

W-8は墳丘南東側で出土した。外面調整はタテハケで底部付近をヨコハケにより仕上げる。内面は底部付近を板ナデにより仕上げている。色調は橙褐色である。

W-9は墳丘北東側で出土した。外面調整はタテハケで底部付近をヨコハケにより仕上げる。内面には指頭での押圧により整形された痕跡が残される。断面には粘土の接合痕が明瞭に認められる。色調は橙褐色である。

W-10とW-11は墳丘南西の周溝で出土した。表面の残存状況が悪く表面調整法は不明であるが、底部は指頭の押圧により整形されている。色調は明橙褐色である。

W-12は墳丘南側で出土した。外面調整はタテハケで底部付近をヨコハケにより仕上げる。内面は底部付近を板ナデにより仕上げている。色調は黄褐色である。

W-13は墳丘南西の周溝内で出土した。外面調整はタテハケで底部付近をヨコハケにより仕上げる。内面には指頭の押圧により整形された痕跡が残される。色調は橙褐色である。

W-14～W-18はタガを含む体部の破片である。

W-14は墳丘南西の周溝で出土した。タガの直下に円形の透かし穴が設けられている。外面調整はタガを付ける前にタテハケを施し、タガを付けた後にタガの上部のみヨコナデにより調整している。内面もタガを付ける前にタテハケを施し、タガ部の裏面は指ナデの跡が認められる。またタガの上下は指ナデの後にヨコハケが部分的に施される。タガの断面形は台形であるが稜がやや丸味を帯びている。色調は橙褐色である。

W-15は羨門付近の搅乱内で出土した。やや丸味のあるタガを付ける前に、外面調整としてタテハケを施している。残存状況が悪く内面調整は不明である。色調は橙褐色である。

W-16は墳丘北東側で出土した。残存状況が悪く内外面の調整は不明である。摩耗しているせいもあるが、タガは丸味を帯びている。色調は橙褐色である。

W-17は墳丘南西の墳裾で出土した。やや丸味のあるタガを付ける前に、外面調整としてタテハケを施している。残存状況が悪く内面調整は不明である。色調は橙褐色である。

W-18は石室付近の搅乱内で出土した。タガの断面は台形であるが、他の個体と比べて稜が明瞭である。外面調整はタテハケのみ、内面もタテハケの跡が認められる。色調は明黄褐色である。

和賀向山1号墳の円筒埴輪は川西宏幸氏の分類による第V期にあたる。その根拠は、一部を除き外面の二次調整が省略されている点、器形が歪んでおり、基部から体部を一気に巻き上げたと考えられる点、底部調整が行われる点、内面調整はナデ調整を行った後、口縁付近に改めてヨコハケを施している点等

による。さらに一部の埴輪に部分的ながら二次調整が残る（W-1, W-3）ことから、第V期の中でも新しい時期を想定することは難しく、第V期の比較的古い時期に相当する。

（2）朝顔形埴輪（W-19～W-21）

W-19は体部最上段付近の破片である。タガ直下に円形の透かし穴が設けられ、円形透かし穴の左上に方形の透かし穴が開けられている。表面の残存状況が悪く外面調整は不明である。内面はタテハケが施され、タガの裏はナデによる調整が施される。色調は橙褐色である。

W-20, W-21は朝顔形埴輪の口縁部の破片である。外面調整はタテハケが施され、内面はヨコハケにより調整されている。色調は橙褐色である。

W-31とW-34は底部付近の破片である。W-31は外面調整はタテハケ、内面はタテハケの後、板ナデにより調整される。W-34の内面は指での押圧により調整される。色調はどちらも橙褐色である。

W-32, W-33は体部の破片であるが、外面調整はタテハケ、内面も縦および斜め方向のハケ目が残されている。色調は橙褐色である。

W-35も体部の破片である。内面はヨコハケにより調整される。色調は黄褐色である。

（3）形象埴輪（W-22, W-36）

W-22は家形埴輪の裾部の破片と考えられる。石室西側のSK03で出土した。隅丸方形の埴輪のコーナー付近にあたり、器壁の厚さは2～1.5cmである。底部から約1.5cm上方に幅約2cmのタガが巡らされる。またタガから器壁を貫くような孔が1箇所に開けられている。穴は外面がタガの下面から、内面上方に向けて斜めに開けられており、直径は約7mmである。胎土の色調は明橙褐色である。

W-36は形象埴輪の破片と考えられる。石室奥壁の裏込内で出土した。緩く湾曲した板状の埴輪であるが、上面と下面とは平行ではなく、場所により厚さが異なる。片面はナデにより平滑に仕上げられるが、裏面は指頭での押圧により整形された跡が残されている。厚さは1.3～2.5cmで、色調は明橙褐色である。

2. 須恵器（W-23～W-25）

W-23とW-24は蓋の口縁部付近の破片である。口縁部はほぼ直立するが、中位はやや外に膨らむと共に、口縁端部はやや外反する。また口縁部の端面はやや段をなす。口縁部と天井部との境界の稜が明瞭で鋭角的である。

W-25は杯である。杯の立ち上がりはやや内傾し、端面はやや丸味がある。受け部は短く内傾し、端部はやや丸味がある。体部もやや丸味を帯びる。蓋、杯とも田辺編年のTK47型式に相当する。

3. 鉄器

（1）鉄鎌（W-M1～W-M21）

鉄鎌は全て同じ型式で、杉山秀宏氏の分類によれば長頸鎌群、C形式（片刃鎌）、第IV形式（頸部長7cm以上、逆刺あり）に該当する。さらに逆刺の長さにより分類される1, 2型式については今回は分類不可であるが、両型式の中間にあたる可能性もある。

鎌身は片方のみに刃を持ち、刃には逆刺がある。頸部、茎部とも断面方形で、茎部には矢柄を固定するための植物質が残存している。大きさはすべて全長15cm未満である。鎌身部は長さ2.5～3.5cm、幅約

1 cm で、逆刺の長さは0.3~0.6cmである。頸部は長さ約9cm、幅0.4~0.7cm、厚さは0.4~0.5cmである。茎部長は最大5.8cmである。これらの鉄鏃は杉山秀宏氏の時期区分によるⅦ期に相当すると考えられ、鉄鏃の時期は5世紀末葉と考えることが可能である。

(2) 鉄剣 (W-M22)

残存長7.5cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmの鉄器である。両面の中央部に鎬と思われる稜線が認められることがから鉄剣と考えられる。

(参考文献)

川西 宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻 第2号 1978年9月

杉山 秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『樋原考古学研究所論集』第八 1988年10月

第6節 古墳に伴わない遺構と遺物

1. 木棺墓

(1) 検出状況

1号墳石室より約4m北側の斜面上に位置し、東西方向に主軸を持つ。墳丘盛土の下層で検出した。

(2) 墓壙

平面形は隅丸長方形で、規模は上面で東西3.0m、南北1.6mである。墓壙埋土は3~5層で構成されているが、大別すると地山を構成するにぶい黄褐色または橙褐色砂質土、田表土が中心となる黒褐色または暗灰色砂質土、さらに双方が混じり合った土より成る。墓壙内（棺外）の北東側埋土上面で、弥生土器の甕が出土したことから築造時期は、弥生時代後期に比定できる。

(3) 木棺

棺は箱形木棺で、規模は全長2.0m、幅は東小口側が0.7mで西小口側は0.72mである。残存高は北側が0.35m、南側は0.52mである。棺材は残存していなかったが、墓壙底面を精査し、棺の痕跡を検出した結果、木棺の構造は東西の小口板を長側板で挟み込む形態と判断される。側板は底板の上に載せられていたことが断面観察により確認できた。なお棺内では副葬品等は出土しなかった。

(4) 出土遺物 (W-27)

弥生土器の甕が1点出土した。表面は剥離している箇所があり、特に内面の調整の観察が困難であった。体部の形状は卵形で、器壁の厚さは一様である。外面調整はタテハケで、頸部付近はヨコハケである。内面はナデにより調整されている。口縁部は短く外反し、ヨコナデ調整が施される。端部はやや肥厚する。弥生後期の甕である。

2. 土坑

(1) SK01

①遺構

1号墳墳丘南側の周溝内で土坑を2基検出した。2基はどちらも東西方向に主軸を向けた楕円形の土坑で、北側の土坑がSK01、南側の土坑がSK02である。

SK01の上端は、土層断面を観察すると周溝埋土の中層に求めることができる。規模は長径1.3m、短径0.6m、深さ0.45mで、底は丸底である。

土坑の底で、北側の墳丘裾に接する位置で須恵器の壺（水瓶）が出土した。水瓶はほぼ完形で、底部を下に、口縁部を上に向かた状態で検出した。出土状況から水瓶は土坑内に埋納されたものと考えられる。

土坑埋土には炭化物や焼土等が混じった砂質土が堆積していたが、土坑の壁面や床面が熱を受けた痕跡は認められないため、他所で熱を受けた土が埋められた可能性が高い。また水瓶が埋納されたことを考え合わせると、律令期の火葬墓である可能性も否定できないが、骨片等は検出していない。

②出土遺物(W-28)

須恵器の壺である。体部は上半部にやや膨らみのある球形で、口縁の下半部は直立するが上半部は水平に近く外反し、口縁端部は短く直立する。底部は平底であるが、体部下端より一段下がった位置に付けられる。底裏には回転糸切りの痕跡が認められる。用途は水を入れるための仏具（水瓶）で、時期は10世紀頃と考えられる。

(2) SK02

1号墳墳丘南側の周溝内で検出した土坑のうち、南側の土坑がSK02である。隣接するSK01と同様に主軸を東西に向けた楕円形の土坑である。規模は長径2.4m、短径0.85mで、深さは0.6mである。埋土は3層にわたって堆積しているが、いずれも地山が起源となる黄褐色の砂質土が堆積している。埋土中で円筒埴輪の細片が出土しているが國化は不可であった。

3. その他の出土遺物

(1) 須恵器(W-26)

墳丘南側の周溝埋土中で、須恵器の壺が出土した。体部は内外面ともナデ調整が施される。底は平底で、底裏には高台（幅1.0cm、高さ0.8cm）が貼り付けられており、7世紀以降の遺物と考えられる。

(2) 土師器(W-29, W-30)

墳丘北東側の攪乱内で、土師器皿2点が出土した。どちらも直径約7.5cm、器高約1.3cmの小皿である。どちらの皿も表面は全面的に摩耗しており、調整手法を観察し難いものの、実測図の断面形を見ると体部は中位がやや凹んでいることから、ヨコナデにより調整され、底裏は平滑ではないため、指により押圧して整形した後ナデ調整を施していると考えられる。時期は不明である。

第3章 まとめ

第1節 和賀向山1号墳で出土した円筒埴輪について

この節では、和賀向山1号墳で出土した円筒埴輪について、古墳が所在する南但馬地域（ほぼ兵庫県朝来市および養父市域に相当）における埴輪の年代的な位置付けと、埴輪生産および埴輪を用いた葬送儀礼が行われた歴史的背景についてのまとめを記す。

なお本稿において埴輪の編年は川西宏幸氏の編年を参考を行い、川西編年による時期区分を採用している。また南但馬地域における埴輪の受容と展開については中島雄二氏が検討を行っており、和賀向山1号墳の築造および円筒埴輪生産の歴史的背景については中島氏の成果に沿って検討を行う。

1. 和賀向山1号墳の円筒埴輪

まず和賀向山1号墳で出土した円筒埴輪について器形および表面調整等に認められる特徴を記す。

円筒埴輪の形状については、平面形および側面とも歪みが認められるものが一般的である。

表面調整は、外面は1次調整にタテハケがすべての個体に施されるが、2次調整のヨコハケは省略されるものが多い。仮にヨコハケが残っている場合でも表面に部分的に施されるに過ぎず、器体を全周するようなヨコハケは認められない。内面調整はタテハケを基本とする。

底部調整については、畿内第V期の埴輪に見られるような板状工具による押圧痕等の顕著な調整痕は認められない。整形の痕跡としては指による押圧の痕跡が内外面ともに認められる。さらに表面を調整するため、外面にヨコハケ、内面にはヨコ方向の板ナデ等が施される。

タガは断面形が台形であるものの稜が丸まっているものが多いことから、退化の過程にあるものと考えられる。また埴輪を側面から見るとタガが波打っている個体が多いことも、これらの埴輪が退化の過程にあることを示している。スカシ孔は円形で、タガ間の孔数は2個である。黒斑は無く窯窓で焼成されたものと考えられるが、須恵質の埴輪は存在しない。

時期は川西編年の畿内第V期のものに併行すると考えられる。畿内第V期の埴輪と比較して2次調整の省略、タガの退化という点は共通であるが、底部調整については畿内の技法を踏襲していない。須恵器のTK47型式～MT15型式に併行し、絶対年代は6世紀前葉である。

以上に和賀向山1号墳の埴輪の製作年代と特徴を列挙した。次に南但馬地域における同じ時期の埴輪の類例を記し、6世紀前葉の南但馬地域における埴輪の特徴について記す。

2. 同時期の古墳と埴輪

和賀向山1号墳の埴輪の類例として、観音塚古墳（養父市養父町）と岡田2号墳（朝来市和田山町）の埴輪を取り上げる。これらの古墳は埴輪および須恵器に時期幅があり一部に和賀向山1号墳よりも先行する型式の個体も含まれるが、同型式の円筒埴輪も多く認められることから、主要な時期を和賀向山1号墳と共有すると考えられる。

(1) 観音塚古墳

尾根上地形の先端に位置する長径27m、短径23mの楕円形の古墳である。主体部は竪穴系横口式石室

で、墳裾部に円筒埴輪列を巡らせている。

2次調整のB種ヨコハケが残るものと省略するものとが共存するが、省略されるものが多数を占める。タガは断面形が台形、M字形、三角形のものが共存するが、どれも稜は丸味を帯びており退化している。黒斑が認められる個体は存在しない。供伴する須恵器にTK208型式が1点含まれるが、大半がMT15型式であることから、古墳の時期は6世紀前葉に位置付けられる。

(2)岡田2号墳

岡田2号墳は標高約100mの扇状地上に立地する直径約26mの円墳である。

円筒埴輪は2次調整のB種ヨコハケが残るものと省略するものとが共存するが、後者のヨコハケを省略するものが多数を占める。タガの断面形は台形、三角形、M字形のものがあり、和賀向山1号墳と同様、稜が丸味を帯びる。底部調整は、畿内第V期で見られるような板状工具による押圧は見られないが、タタキにより整形した痕跡が認められるものがある。ただし整形の痕跡がないものが多数を占める。

黒斑はなく、一部に須恵質の埴輪を含む。これによりタタキによる調整は、須恵器の製作技法の影響とも考えられる。スカシ孔は円形で、タガ間に2箇所設けられるが、割付は不正確である。

供伴遺物から時期を決めることは出来ないが、円筒埴輪の特徴から畿内第V期に併行し、一部にB種ヨコハケが残り、第IV期の末期に併行すると考えられるものも含まれるが、主として畿内V期の埴輪に併行している。

以上、南但馬地域における畿内第V期（川西編年）併行期の埴輪の代表例として、和賀向山1号墳、觀音塚古墳、岡田2号墳の埴輪の製作・調整技法の特徴を記した。

觀音塚古墳と岡田2号墳の埴輪には二次調整としてB種ヨコハケの残る点が、和賀向山1号墳よりもやや古い要素と見なす必要があるが、どちらの古墳にも見られるような、二次調整を省略したタテハケのみの埴輪については和賀向山1号墳とほぼ同じ時期に製作されたものと考えられる。

これらの埴輪の特徴として2次調整の省略、タガの退化という点は畿内第V期と共通であるが、底部調整については畿内の技法を踏襲しておらず、畿内の埴輪製作技法とは異なる技法を採用している。ちなみに岡田古墳群に須恵質埴輪が存在することより、タタキによる底部の整形技法は須恵器製作技法の影響が考えられる。

以上の点から、南但馬地域での畿内第V期併行期の埴輪は畿内の影響を受けたとは考えられない要素が認められ、特に底部の整形の手法などで地域の独自色が認められるようである。

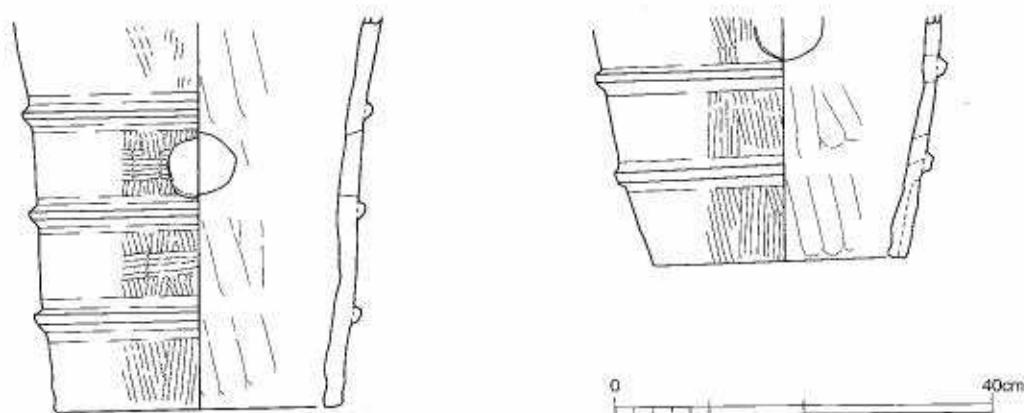
3. 南但馬地域での和賀向山1号墳の埴輪の位置付け

次に和賀向山1号墳が、南但馬地域の埴輪を用いた古墳の中で、年代的にどのような位置付けをすることができるかという点について記す。

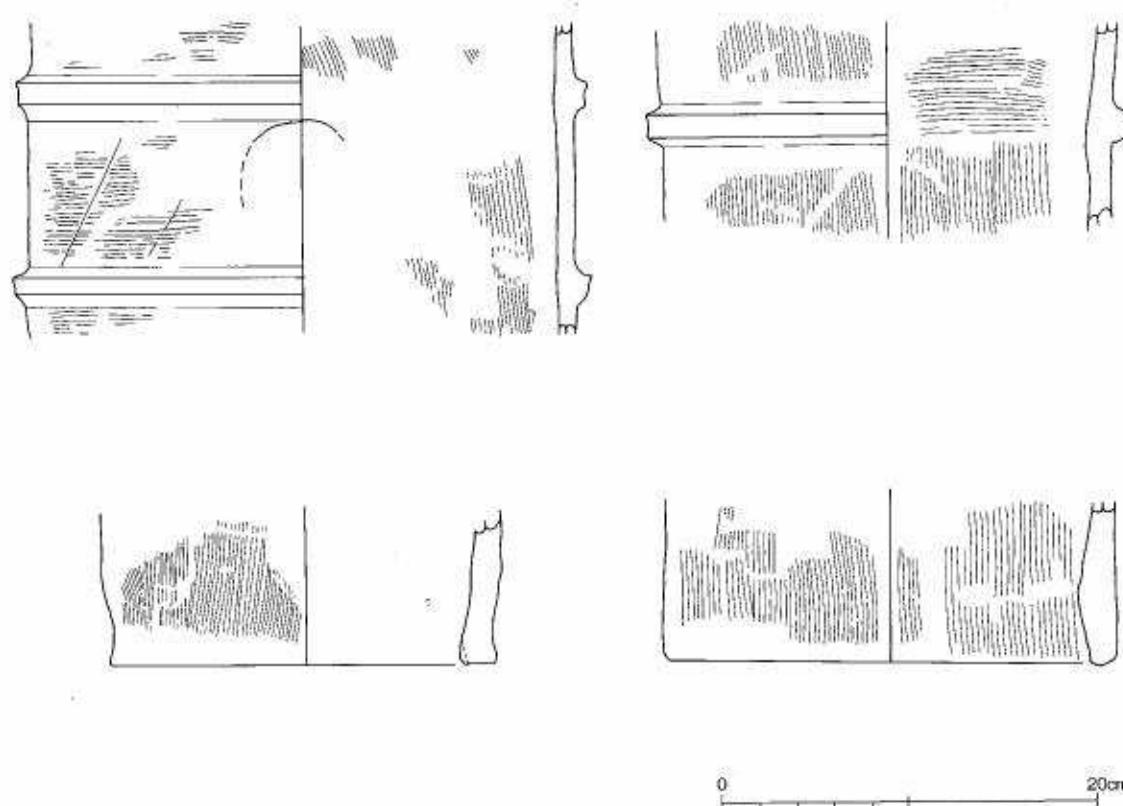
中島雄二氏は南但馬での「埴輪文化」の展開過程を、導入前・消滅後も含め0～IV期の5段階に分け、それを南但馬の首長と畿内政権との関係の変化として捉えている。中島氏の時期区分による0期は埴輪導入の前段階、V期は埴輪消滅後の時期であり、埴輪導入期のI期～III期の概要は以下の通りである。

I期

埴輪文化が南但馬に伝播した時期で、同時に前方後円墳の出現、および粘土襷、竪穴式石室が採用された時期でもあり、南但馬が畿内政権の勢力下に入ったことを明示している。川西編年の畿内第III期～第IV期に併行する時期で、時期は5世紀中頃～末葉に相当する。



養父觀音塚古墳出土埴輪



岡田 2 号墳出土埴輪

第 4 図 養父觀音塚古墳・岡田 2 号墳出土埴輪

II期

直径約10~20mの小規模古墳にも埴輪が導入される。2次調整が省略されるようになる。埴輪はすべて無黒斑で窯窯焼成される。川西編年の畿内第IV期~第V期に併行する時期と考えられ、5世紀末~6世紀初頭に相当する。

III期

主体部に横穴式石室が導入された時期である。前方後円墳が消滅し小規模古墳が増加する。埴輪はII期と比べ、タガの造りと外面調整で粗雑化が進む。川西編年の畿内第V期に併行すると考えられ、時期は6世紀前半とされる。ただし埴輪そのものからII期と時期的に重複する可能性もあるとされる。

和賀向山1号墳の埴輪は、タガの造りと外面調整の粗雑化から判断してIII期にあたるものと考えられる。埋葬主体に横穴式石室（竪穴系横口式石室）が採用されていることもこの時期の古墳として適當である。ただ出土した須恵器にTK47形式のものが含まれる点と、鐵鎌の年代が5世紀末葉と考えられる点で、II期の範囲に入る可能性も考えられる。

4. 6世紀の埴輪生産と歴史的背景

中島分類では6世紀前葉に相当するIII期における、南但馬と畿内政権との関係については、前方後円墳の消滅により互いの政治的関係は薄れるものと理解される。埴輪生産および埴輪を用いた葬送儀礼については、前方後円墳や竪穴式石室の導入と同じく、元来、畿内の政治的影響の受容とともに、5世紀中頃に南但馬に伝わったものと考えられる。

ところが6世紀以降、畿内と南但馬地域との政治的関係が希薄化した後も、埴輪生産および埴輪を用いた葬送儀礼は、南但馬地域でも引き続き独自に行われた。その際に用いられた埴輪は、底部調整に関して畿内と同じ技法を採用しない、南但馬独自の埴輪を採用していることが、和賀向山1号墳をはじめとしたこの地域の古墳出土の埴輪から窺い知ることができる。

（参考文献）

川西 宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64号 第2号 日本考古学会 1978年9月

中島 雄二「南但馬における埴輪文化の伝播」『岡田2号墳』 兵庫県教育委員会 1989年3月

第2節 まとめ

1. 概要

今回の発掘調査の結果、和賀向山1号墳の墳丘、主体部の構造等については、以下のとおりの結果が判明した。古墳の築造年代は出土遺物から6世紀前葉と考えられる。また弥生時代後期の木棺墓や、律令期の火葬墓の可能性がある土坑を検出するなど、古墳に伴わない遺構についても成果があった。

2. 和賀向山1号墳

（1）墳丘

和賀向山1号墳は直径約14mの円墳で、南北方向に延びる尾根の先端に古墳が築造されている。墳丘の築造にあたっては、幅約20mの尾根上に円形の盛土を施すとともに、墳丘の南側に弧状の周溝を巡ら

すことにより墳丘の内外を明瞭に区画している。墳丘東側は墳頂部から墳裾部にかけて搅乱を受け、土砂の流出が著しく、古墳築造時の姿を復元することが困難であった。

墳丘南東側斜面に人頭大の丸石が散布している。これらは墳丘に葺石が施された可能性を示している。墳丘面の他の部分には同様の石材がなく葺石がない可能性が高い。ただし古墳の麓の平野から視認可能な墳丘北斜面に葺石がなく、麓から見ることの出来ない南東斜面にのみに葺石が施されるのは不自然な点である。

(2) 横穴式石室

埋葬主体は横穴式石室で、ほぼ東向きに開口する。石室は墳頂部の搅乱に伴い玄室北半部および羨道部が損壊しており、玄室の南壁と奥壁（西壁）の基底石が原位置を留めて残存していた。部分的であるが南壁の奥壁に近い位置で2～3段分の石材が残存している箇所もある。残存する石室の規模は全長約4m、幅約1.2mである。

基底石は控え積みの石材とともに、厚い板状または柱状の石材を横位に配置し、さらに高さを揃えることにより水平面を作り出しているが、これは石材を上に積み重ねるのを容易にするためと考えられる。

今回の報告では、和賀向山1号墳の埋葬主体部については横穴式石室という用語を用いて表記しているが、前節で記したとおり堅穴系横口式石室の可能性がある。本稿で和賀向山1号墳の埋葬主体については、これらの横穴系埋葬施設を包括する用語として広い意味で横穴式石室と呼称している。

(3) 石室の類例

和賀向山1号墳が所在する南但馬地域では、堅穴系横口式石室を持つ古墳に観音塚古墳（養父市養父町）がある。観音塚古墳はTK208型式の須恵器が出土するものの、主としてMT15型式を中心で、和賀向山1号墳とほぼ同時期か若干古い古墳である。また墳丘に樹立した円筒埴輪にもB種ヨコハケを持つものとタテハケのみのものが混在する点も、和賀向山1号墳より若干古い様相を示している。

観音塚古墳の主体部は堅穴系横口式石室で、全長5.4m、全幅1.2mで、和賀向山1号墳と比べて全長は約1m長く、幅はほぼ同一である。石室の石材は自然石および割石を用いている。石材は横位に配置し、小口面を石室内部に見せている。小型の割石を用いているものの石を横位に配置する手法は和賀向山1号墳に通じる点がある。

但馬地域におけるこの時期の堅穴系横口式石室の類例としては、他に大師山第5号墳（豊岡市）、見手山1号墳（豊岡市）がある。見手山1号墳は全長35mの前方後円墳である。石室のうち玄室は全長約4m、幅約1.28m（奥壁部）で、和賀向山1号墳と類似しているが、石室床面に河原石による敷石を施す点と、石室築造にあたり墓壙を設けず、平坦面上に石積みと盛土を交互に行うという手法を採用している点は、和賀向山1号墳と異なる点である。

このように築造時和賀向山1号墳の石室構造の詳細は不明であるが、和賀向山1号墳が築造された6世紀前葉は、但馬地域では堅穴系横口式石室が導入された古墳が多く見受けられることから、和賀向山1号墳の主体部も他の古墳と同様の堅穴系横口式石室と推定することは可能である。

(4) 墓壙

残存する墓壙の規模は東西約5m、東西約1.2mで、深さは最大で約0.15mである。墓壙の側壁も南

壁および奥壁（西壁）側のみで検出可能であった。更に深さが0.15mと墓壙と呼ぶには浅い点から、墓壙というよりも、石室の設置を容易にするために丘陵頂部を部分的に平坦に整地したとするほうが適当とも考えられる。玄室の南壁と奥壁に相当する場所のみ墓壙の壁面が残存しており、北壁と羨門側では検出できなかつたため、検出時にはL字形の平面形を呈し、さらに墓壙の底面には基底石を据え付けるための穴が設けられていた。据え付け穴についても玄室南壁および奥壁のみで検出することができた。

(5)出土遺物

墳丘斜面および前底部から埴輪が出土した。埴輪は大半が円筒埴輪または朝顔形埴輪である。形象埴輪も出土しているが、このうち墳頂部の石室の北側で家形埴輪の破片が出土している。

円筒埴輪列により墳丘が囲まれている状況は確認できなかった。墳丘南西斜面で検出した2点の円筒埴輪のみが古墳築造時の原位置を留めていると考えられる。この他、円筒埴輪の出土位置は周溝付近および石室前庭部が特に多い。円筒埴輪は川西編年の畿内第V期に併行する時期のものである。

墳丘前庭部を中心に鉄鎌が出土した。鉄鎌はすべて逆刺のある長頸片刃鎌である。また石室内で鉄劍が出土したが、床面から浮いており出土位置は副葬時の原位置から離れていると考えられる。

石室付近で須恵器蓋と杯が出土した。須恵器蓋はTK47型式、杯はMT15型式に相当する。

(6)古墳の築造年代

横穴式石室の羨道付近を中心に出土した鉄鎌は5世紀後半から末葉のものと考えられる。石室および墳丘出土の須恵器はTK47～MT15型式に相当することから5世紀末葉～6世紀前葉に相当する。しかし墳丘から多く出土した円筒埴輪は6世紀前葉の遺物で、5世紀代の年代を与えることは難しい。以上より和賀向山1号墳の築造年代は6世紀前葉と判断される。

3. 木棺墓

木棺墓は墳丘北側斜面に所在し、墳丘盛土の下層で検出した。弥生時代後期の築造と考えられる。墓壙および木棺の主軸はほぼ東西方向であるが、これは等高線に平行な方向を指向しており、築造にあたっては地形を意識し、築造しやすい向きに主軸を向けたものと考えられる。

木棺墓の存在より、古墳築造以前よりこの場所が周辺の集落の墓域として利用されていたと考えられる。ただし古墳と木棺墓の間の時期に位置付けられる遺構が存在しないため、継続的に墓域として機能したかどうかは不明である。

4. 律令期の遺構

和賀向山1号墳南側周溝内の土坑のうち、SK01では須恵器壺（水瓶）が出土した。水瓶は土坑の床面に立つような状況で出土しており、意識的に埋納された可能性が高い。また水瓶が仏具として用いられることから火葬骨等を埋納する等の祭祀遺構の可能性がある。古墳築造後から律令期にかけても、1号墳周辺が埋葬に関連する用途に使用されており、当地が断続的に埋葬の場として利用されたことが窺われる。

III 芝ヶ端古墳

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

芝ヶ端古墳は平成5年度および10年度の詳細分布調査により北近畿豊岡自動車道内No.116地点として登録され、一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴って、当時の建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所（現在は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所、以下同じ）からの依頼（建近農工第108号）にもとづき、平成11年7月に確認調査を実施した。その調査では盛土であることを確認したもの、埋葬施設や蓋石などの外表施設は検出されず、時期も不明であることから古墳としての確証を得ることができなかった。

ところが、平成11年10月～12月に実施した芝ヶ端遺跡の全面調査区内において、本墳に近い部分から円筒埴輪片が多数出土したことから、埴輪をめぐらせた古墳である可能性が高まった。

そこで、再度墳丘から墳裾と思われる部分にトレンチ（第9図TTr）を設定して確認したところ、墳丘南側裾から数多くの埴輪片が出土したうえ、盛土は古墳墳丘盛土の堆積状況を示していたことから、古墳と断定するに至った。

その調査結果をうけて、同年12月に建設省と協議した結果、東接する芝ヶ端遺跡と併行して同年度内に全面調査を行なうことで合意に達したため、建近農工第212号の依頼により、同月17日から調査を開始した。

第2節 調査の経過と方法

（1）確認調査

平成11年7月に実施した第1回目の確認調査は、墳丘部分に2箇所のトレンチ（第9図7Tr・8Tr）を設定し、重機によって掘削を行ない、さらに人力によって断面の精査および掘削を行った。

同年11月に実施した第2回目の確認調査は、南側の墳丘から墳裾にかけての部分に1m×6mのトレンチ（第9図TTr）を設定し、すべて人力で掘削した。調査は、古墳裾部で埴輪片が多く出土するかどうか、また、盛土が古墳によるものであるかの判断が必要となった。

調査の結果、表土下の灰褐色土中に多くの円筒埴輪片が含まれており、墳裾にあたる部分で集中的に認められた。また、盛土は途中から段をもって盛り上げられており、盛土上部は黒色・黄色系の土、盛土下部はやや薄い黒色の砂質土をほぼ水平に積み上げており、古墳の盛土と判断することができた。また、後世に削平され、中世頃には盛土も行われていたことも判明した。

なお、古墳は新発見であったため、地元教育委員会と協議の結果、所在地の字名をとて芝ヶ端古墳と称することになった。

(2) 本発掘調査

発掘調査区は、古墳および墳裾と推定される部分に加え、西部では周溝状を呈する部分も表面観察により推定できることから、その推定部および外堤にあたる部分も含めて設定した。ただし、北側については、墳裾も含め崖状になって三保川水面に続いていることから、残存していない可能性が高く、安全面をも考慮して調査範囲から除外した。なお、調査区西側は芝ヶ端遺跡B地区と接している。

調査前の地目は竹林となっており、孟宗竹が繁茂していたため、本発掘調査は竹の伐採および伐採後の竹除去から開始し、表土剥ぎを行なった。現状の地形測量を行なった後、墳丘残存状況に合わせて土層観察用の畔を十字に設定したが、内部主体が横穴式石室である可能性も考えられたため、畔は四分法を用いた。

調査の方法は、畔以外の部分を表土より人力で掘削するとともに、竹の抜根についても人力により実施した。また、西側の後世盛土についても人力掘削を行ない、墳丘残存部分を検出し、内部施設および樹立埴輪や葺石といった外部施設の残存状況を精査した。主体部については、平面的な精査によっても検出できなかったことから、明確な主体部を確認するため、畔ぎわにサブトレーンチを掘削して土層断面の観察を行ない、主体部の有無を確認できるようにした。その結果、確認調査の7Tr部分の底部に存在する落ち込みが主体部の痕跡であると判断できた。ただし、この時点ではすでに畔部分以外は主体部底より深く掘削してしまっていたため、墳丘内における主体部の位置を写真によって平面的に示すことができなくなってしまっており、平面的な記録としては、トレーンチ埋土を掘削した際に行なったメモ写真や平板図のみとなってしまった。

主体部の調査以降、ヘリコプターによる空中写真撮影および足場やぐら上からの写真撮影を実施し、残存墳丘部分の平板測量を行なった。その後、豪雪により調査工程に大幅な遅れが生じたため、墳丘部の掘削を急ピッチで行なわざるを得なくなり、墳丘盛土前の旧地形までの掘削はバックホーを使用することとなった。掘削の際には機械本体は墳丘部に上がることなく、墳丘外からアームを伸ばして徐々に掘削していく。

古墳構築前の旧地形面は北に下がる緩傾斜面となっていたが、墳丘盛土内には弥生土器が含まれていることが判明しており、旧地形面に弥生時代の遺構が残存している可能性が考えられた。そこで、旧地形面の精査を実施したが、弥生時代の遺構は検出されなかった。なお、足場やぐら上からの旧地形面の全景写真撮影を行ない、平板による地形測量も実施した。

(3) 出土品整理

芝ヶ端古墳の出土品整理作業は、平成18年度と平成19年度の2年間実施した。

平成18年度は、埴輪・土器・石器等の接合・補強、実測、復元、鉄器の保存処理の工程を実施し、遺物の写真撮影も行なった。これらの作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

平成19年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が組織改変によって兵庫県立考古博物館となり、7月から加古郡播磨町大中500に場所を移して、トレース、レイアウト、印刷・製本の工程を実施した。

印刷・製本にあたっては、芝ヶ端古墳所在地に隣接し、同じ一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路II事業により調査した遺跡のうち、芝ヶ端遺跡、芝花古墳群（その1）、和賀向山1号墳の報告も含めて合冊とした。

第2章 調査の結果

第1節 調査の概要および基本土層

(1) 調査の概要

芝ヶ端古墳が立地するのは、芝花古墳群や和賀向山古墳群などが群集存在する山塊の北西端部に位置し、三保川が西側に接して北流している。

芝ヶ端古墳は北にのびる支尾根の先端部に存在し、同一丘陵に存在する芝花古墳群の最北端のものは約40m隔てている。また、墳裾の標高は海拔114mで、墳頂は117mほどである。

調査の結果、墳丘は径21m程度、高さ3.5m程度の円墳で、木棺直葬を内部主体とし、墳丘には円筒埴輪・朝顔形埴輪などを巡らせ、葺石を伴った古墳であったことが判明した。但し、調査時点では墳丘の多くの部分が削り取られ、埴輪および葺石はすべて原位置から転落し、基底部が原位置で出土したものではなく、主体部も盜掘により攪乱を受けていたようである。したがって、墳丘規模および墳丘高、主体部の数については未確定の数値である。

(2) 主体部

本墳の主体部と考えられるものには、墳丘の推定中心部の北寄りに存在していた土壙がある。この土壙は確認トレーンチ内に収まるかたちで検出され、埋土も汚れた土と判断したために、搅乱と誤認してしまい、気づいたときには詳細な作図・写真撮影が不可能な状態となってしまっていた。

土壙は東西に近い方向に主軸をもち、検出面での規模は長さ約2.7m、幅約1.3mを測り、底部は長さ約1.75m、幅約1.0mの平坦面となっていた。検出面からの最大の深さは約1.04mを測る。

埋土は図版20に示したが、棺の痕跡は認められなかったものの、2段墓壙状であり、木棺の墓壙であった可能性が高い。また、鉄器が墳裾から出土していることに加え、主体部が石室であった痕跡が認められなかったことから、木棺直葬の主体部であった可能性が高く、本土壙が主体部の最有力候補となる。

(3) 墳丘

墳丘は東側で後世の著しい改変を受け、北西側は流出が多く、本来の形状は残していなかったものの、墳丘構築に際して黒ボク土と黄色系の土を使用していたために、その構築法が明瞭に看取できた。

墳丘はすべて盛土（図版19・20）で、その築造工程により大きく4段に分けて積み上げられている。

まず、墳丘基底部を平坦に削るが、東西・南北ともに約3.7%の傾斜となっている。削平の際、ベース土であった弥生時代中期後半の遺物包含層を削っており、その土を第1段目に盛っている。

第1段目の盛土は図版の下層であり、総体的には茶色系の色調を呈し、肉眼では白・灰・橙色の砂質土と黒色系および灰褐色系の粘質土を互層になるように、主として内側から80cm程度盛り上げている。

上面を平坦にした第1段の上には、黒ボクと茶色系の土を中心付近から盛り上げ、周囲には第1段目と同じ土や黄色系砂質土を混ぜた土を使用して、高さ約60cm盛り上げ、上面をほぼ水平に均している。

第3段目の厚さ70cmの盛土は、中心部に第2段と同じ土を置いたのち、周囲に上層黄色系と同じ土を置いているが、各土層の色は黄色・白黄色・茶色・肌色・乳白色などであり、やや粘質土の割合が多い。

第4段目の盛土も第3段目周囲に近いが、赤色系が加わり、傾斜をもって中心から盛り上げている。

第2節 古墳に伴う遺物

古墳に伴う遺物は、主として古墳裾から出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪などがある。また、古墳時代の須恵器片や鉄器も墳裾などから出土しており、それらのうち、古墳に伴うと考えられるものについても本節で述べることとする。

(1) 墓輪

出土した埴輪では円筒埴輪がほぼ全体を占め、数点の形象埴輪片が認められる。円筒埴輪には朝顔形埴輪と普通円筒埴輪が認められ、口縁部の出土量から、10:3程度の比率となっており、普通円筒埴輪が圧倒的に多い。

朝顔形埴輪 (図版21・22、写真図版20~22)

朝顔形埴輪は後述の円筒埴輪の上に肩部をのせるかたちで製作されていると考えられ、頸部突帯先端と肩部突帯間は8cm程度で、肩部突帯幅は2cm程度である。したがって、体部は4段の突帯となり、頸部突帯までの体部高は55cm程度となる。口縁部には1条の突帯を施し、そこを境にやや屈曲するようである。頸部突帯先端から口縁部突帯下端までの高さは、8cm以上であることは確実で、10cm程度になるものと思われる。また、口縁部突帯上端から口縁端部までの高さは13cm以上であることは確実で、14cm程度と思われる。突帯先端の幅はほぼ1cmであることから、頸部突帯から口縁端部までの高さは25cm程度となる。したがって、朝顔形埴輪の総高は80cm程度になるものと考えられる。

K-1は南側墳裾出土の朝顔形埴輪の口縁上半部で、もう少し聞く可能性もある。復元口径は52.0cmである。屈曲部から緩やかに外反しながら外上方にのび、端部付近でやや曲折すると同時に、内面から厚みを減じている。端部の厚さは0.9cmで、端面は凹面をなす。外面は8~9条/cmと目の細かい縦ハケを施している。内面は屈曲部の下半との接合部が横ハケであるが、それより上は基本的には縦ハケで、左斜め上方向のものが多い。口縁端部付近屈曲部から端部にかけては横ハケのち横ナデ調整となっている。内面のハケ目の単位は内外面とも同じである。なお、図の下端面は平坦な縫口縁となっており、口縁下部との接合面である。接合をより強固にするための接合面には下部側上面にヘラのような原体によって、約2cm間隔で刻みが施されていたようであり、上部側下端面には陽刻となった痕跡が残存している。また、朝顔形埴輪の口縁部の上半・下半の境目であることから、この朝顔形埴輪の口縁上半部の高さはほぼ15cmであると判断できる。残存破片は遺存状況が比較的良好となっており、やや硬質で2.5Y8/2灰白色を呈する。

K-2も口縁部上半の破片であるが、K-1に較べて軟質である。北東区の墳裾から出土している。わずかに外反しながら外上方にのびた後、曲折して端部となる。端面は丸みのある面をもつ。器壁は下部で厚さ1.1cm、端部付近では0.7cmを測る。口径は49.2cmと思われ、残存高は13.5cmであり、K-1と同様の高さであるとすれば、あと1.5cm下方に屈曲部がくるものと思われる。外面の調整は6~7条/cmで上部がやや左に傾く縦ハケで、端部は横ナデである。内面も同じ単位の刷毛を左斜め上を基本とする方向に施すが、その後、横方向のハケも重ねている。色調は10YR8/4浅黄橙色で、黒斑は認められない。また、K-6と同様に、外表面の砂粒周囲の微細な隙間に、赤色顔料とも思える色調の変化が認められるものがあるため、外表面にベンガラ等の赤色顔料を塗布していた可能性がある。北東区の墳裾から出土している。

K-3は同様に軟質で2.5Y8/2灰白色を呈する2点を同一個体と判断したものである。口縁端部は曲折

し、厚みを減じる。外面調整は9条/cmの細かい縦ハケ、内面にも縦方向の細かいハケが一部残る。脆弱なため、調整痕の遺存状況は悪い。口径は推定で、49.3cmである。

K-4は口縁部の小片で、北東部の墳裾から出土したものである。口径は49.6cmになるものと思われる。口縁端部は外反し、内面の稜はある。端面は4mm程度で、凹面をなす。口縁端部付近には横ナデを施す。外面は5条/cmのやや太筋の縦ハケで、内面は下部に縦方向、上部には横方向のハケを施している。外面と同じ原体を使用しているようである。10YR8/3浅黄色を呈し、やや軟質である。この破片の外面においても、ルーペで観察すると、砂粒周囲の微細な隙間に赤色顔料とも思える赤化部分が認められるものがあるため、外面にベンガラ等の赤色顔料を塗布していた可能性が考えられる。

K-5は芝ヶ端遺跡B地区のSK-B01から出土した口縁屈曲部である。古墳裾からは31m以上離れた遺構から出土したものであるが、その経緯は不明である。2.5Y8/2灰白色・10YR8/3浅黄橙色を呈する軟質な破片で、屈曲部の突帯は水平方向に約1.2cm突出し、磨滅により端部は丸くなっている。突帯より上の外面は6条/cmのやや太い縦ハケを施しているが、突帯貼り付け後にも部分的に縦ハケを加えている。内面にも外面と同じ単位の縦ハケが遺存しているが、残存部分が限られている。

K-6は北東区の墳裾を中心に出土した朝顔形埴輪の口縁部の一部と肩部の破片であるが、1/5程度を欠損するのみであったため、全周するようにモルタルで復元した。

肩から口縁下半にかけての部分であるが、口縁部の遺存部分は少ない。肩部の突帯は断面「M」字形に近く、上面が窪む。突出高は約6mmを測り、突帶上部の幅は8mm、下部幅は14mmである。体部外面には縦ハケ後に横ハケを重ねているが、肩部では横ハケを2~3段に施している。縦ハケの幅は5条/cmとやや粗いが、横ハケは6条/cmと縦ハケに較べてやや細かい。肩部では縦ハケの静止は取れない。肩部突帶下には円形の透孔が2方向にあけられており、推定孔径は6.5cmである。内面の残存下端付近には縦ハケが部分的に認められ、それより上は横ナデや斜め方向のナデ調整となっている。肩部での直径は27.6cmを測る。肩部の突帯と頸部突帯の間隔は垂直距離で6.5cmである。

頸部には断面三角形の突帯を貼り付け、横ナデを加えている。頸部内面は板ナデ状になっている。

なお、はっきりとは確認できないが、表面に見えている砂粒周囲の微細な隙間に、赤色顔料とも思える色調の変化が認められるものがあるため、外面にベンガラ等の赤色顔料を塗布していた可能性がある。

口縁部外面は突帶貼り付け前の縦ハケ調整で、肩部の横ハケと同じ目単位である。図の外面上端部には屈曲部の突帶貼り付け時の横ナデが認められる。内面下部は横ナデ、その上には横方向を基本としたハケが認められるが、縦方向も施している。

焼成は良好で、口縁部など部分的に須恵質のようになっている部分があり、黒斑は認められない。外面は10YR7/4にぶい黄橙色、内面は7.5YR8/4,8/6の浅黄橙色を呈する。

K-7は朝顔形埴輪の肩部～口縁部下半である。体部直径は30.5cmで、1条の突帯がめぐっている。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられているが、口縁部側のハケは突帶貼り付け後に施されている。全体的に軟質で遺存状況が悪いが、肩部の突帯から上は横ハケが上下2段に施されているようである。突帶以下も横ハケのようであるが、器表剥離が著しく、静止部分は確認できないが、ハケ目は9条/cmと細かい。体部の突帶の断面形状は台形を呈し、上辺0.7cm、下辺1.8cmを測るが、磨滅が多く、やや丸みがある。突帶の突出高は7.5mmである。肩部と頸部の突帯間隔は垂直距離で8.5cmを測る。体部内面の調整は横ナデのようであるが、器表残存部分が非常に限られているため、十分な観察ができない。

口縁部外面は左斜め上方向の縦ハケで、9~10条/cmの細かさで、体部の横ハケと同じ程度である。

口縁部屈曲部分外面の突帯は、下方に若干反るように付けられ、断面は台形で、下辺2.5cm、上辺1cm、突出高約1.2cmを測り、上面はやや凹面をなす。口縁部内面は横ハケである。頸部と屈曲部の突帯間隔は垂直距離で10.3cmである。

見た目は乳黄白色と表現できる色調で、土色帖によれば2.5Y8/2灰白色もしくは10YR6/2灰黄褐色となる。チャート・クサリ礫・凝灰質砂岩・石英などの砂粒を含む。残存高は35cmを測り、肩部の突帯とその下の突帯との間隔は少なくとも10.5cmの間隔がある。破片の残存部分には黒斑は存在していない。南西区墳裾から出土した。

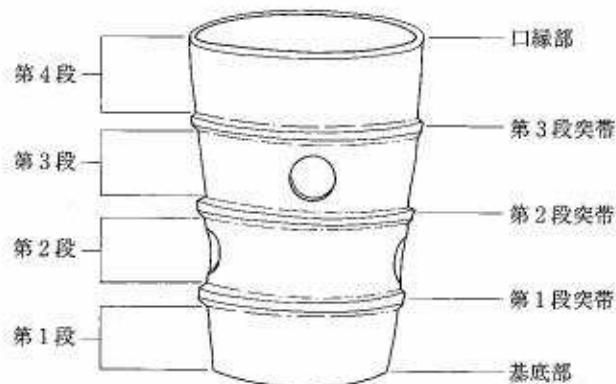
K-8は北東区の近世以降盛土中から出土した頸部の破片である。硬質で、割れ口が灰色を呈することから須恵質の埴輪と判断される。外面の色調は10YR7/3~7/4に近い黄橙色、内面は7.5YR7/4に近い橙色から7.5YR5/3に近い褐色を呈する。頸部の突帯は剥落し、その部分には縦ハケが看取できる。このハケ目は口縁部から連続するもので、5~6条/cmのやや粗い単位のものである。内面は同じく粗い単位のハケを横方向に施しているが、静止部分が数箇所認められる。最も径が小さくなる部分の内面は粘土接合痕およびユビオサエが認められるのみで、ハケ等は施していない。また、その下部は横ナデ調整である。

円筒埴輪 (図版22~25、写真図版20・23~26)

普通円筒埴輪は突帯間が9.2cm前後、突帯幅は2.5cm前後、第4段が高さ10cmで口縁部となる。突帯は3段になると思われ、第2・3段に円形透かしが穿たれていると判断している。したがって、円筒埴輪の総高は45cm程度になるものと思われる。外面の調整は一瀬分類のB c種ヨコハケに属すると思われるが、一部B d種ヨコハケのものも認められる?

K-9は南側墳裾から出土した軟質の円筒埴輪で、口径は37.8cmを測る。口縁端部は器表剥離や磨滅により丸みをおびているが、端面の凹面は残存している。第4段の外面は縦ハケのうち6~7条/cmの横ハケを施しているが、静止する部分は1~2箇所で推定できる程度である。第4段の高さは9.0cmである。第3段外面にも横ハケが残存しているが、残存部分は少ない。また、透孔の一部が残存している。第3段突帯は磨滅により丸くなっている。

内面は6条/cmの縦ハケがかろうじて看取できるが、口縁部付近には残存していないため、横ナデを施している可能性が高い。また、内面には粘土帶および粘土紐の接合痕が明瞭に残存している。色調は2.5Y8/2灰白色を呈する。



第5図 芝ヶ端古墳出土円筒埴輪模式図および部分名称

K-10は外傾度が強い口縁部である。口径は35.0cmを測り、10YR8/3浅黄橙色を呈する。南西区から出土しており、軟質で脆弱なものである。全体に磨滅しており、特に内面は表面の剥離が著しい。口縁端部も磨滅した部分が多いが、かろうじて外面が角張った状況を看取できる部分が残存している。端面は凹面をなしている。第4段の高さは10cmを測る。第4段外面は縦ハケのち横ハケを加えているが、器表の凹凸により横ハケが施されない部分が認められる。ハケ目の単位は9条/cmと細かく、縦・横ともに同一である。横ハケは1箇所で静止しているように見えるが、ハケの重なり部分である可能性もある。第3段突帯は磨滅により丸みをおびているが、部分的に器表が残存している箇所が認められる。内面の調整は剥離のため全く看取できないが、粘土帶や粘土紐接合痕が明瞭に認められる。

K-11は軟質のうちでも比較的硬質に近く、10YR8/4浅黄橙色を呈し、南東区から出土している。形態的にはあまり外上方へは開かず、むしろ垂直に近い。口径は31.8cmを測り、器厚は9mm程度である。口縁端部は若干外側に張り出し、端面はゆるい凹面をなすようであるが、内面剥離により確定できない。第4段外面は9~10条/cmの細かいハケ目で縦方向のち横方向に密に施している。横ハケは上下2段に分けて行なわれているよう、上段の静止部分が1箇所残存しており、上側がやや左に傾いている。ハケは右から左方向である。下段の横ハケの静止位置は上部横ハケ静止位置とは約2cm右にずれている。第4段外面横ハケ残存部分の静止痕は1箇所のみ認められることから、静止位置の間隔は少なくとも7cm以上である。なお、第4段の高さは10.0cmである。

第3段外面も第4段と同一単位のハケが施され、縦方向後横方向の継続的なハケが残存している。第3段では静止痕は2箇所認められ、その間隔は約5.5cmである。なお、器表の残存状況が良好であるにもかかわらず、朝顔形埴輪でみられたような赤色顔料付着痕跡は看取できない。

第3段突帯は断面が「M」字形に近く、端部上側が下側よりも外に張り出している。

内面は第3・4段ともに10条/cm程度の細かな縦ハケを施し、その後部分的に縦・横方向のナデを加えている。第4段内面口縁端部から下5cmまでは器表剥離により調整痕を看取することができないが、そこから3cmの間は横ナデにより縦ハケを消しているようである。

K-12は北東区墳裾から出土した、軟質で10YR8/3浅黄橙色を呈する口径の約1/4弱の破片で、口径は29.4cmを測る。第3段突帯の表面は磨滅しており、器表は残存しておらず、断面形も丸みがある。

第4段外面には縦ハケ後継続的な横ハケを上下2段に分けて施しているが、先に施された下段の静止部分と上段の静止部分の位置は異なっている。ハケの単位は縦横ともに8~9条/cmと細かいものである。ハケ目の条線底は暗赤褐色を呈しており、赤色顔料が塗布されていたことを予想させる。なお、口縁端部下約1cmの位置には幅約1mm程度の沈線状のものがめぐっている。第4段の高さは11cmである。第3段外面には第4段と同じ単位の横ハケが残存しており、径6cmの円形透孔が穿たれている。器厚は全体的に8~9mmの厚さである。口縁端部は平らな面となっており、両端は角張る。内面の調整は磨滅のためほとんど残っていないが、僅かに縦ハケが散在している以外には、口縁部下の横ハケが残っているにすぎない。

K-13も軟質であるが、外面器表は比較的良好に残存している一方、内面は磨滅が著しい。口径は27.4cmで、器厚は8mm程度である。北東区北端の崖面から出土しており、2.5Y8/2灰白色を呈する。口縁端部は角張り、端面は平面をなす。第3段突帯断面は「M」字形に近いが、中央の窪みは少ない。

第4段の高さは約10cmを測り、外面には縦ハケののち、9~10条/cmと細筋の横ハケを連続的に施しているが、静止部分が3.5~4.5cm間隔で4~5箇所認められる。横ハケは1段もしくは2段で施されて

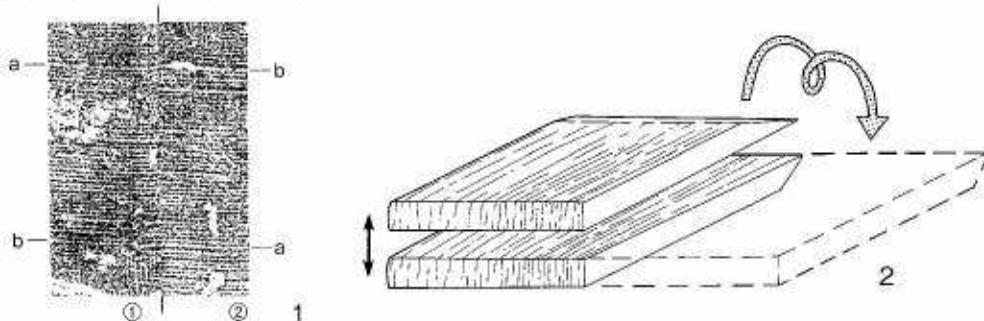
いると思われるが、上部の約1/4のハケ目の残存状況が良くないため、確定できない。横ハケの静止痕はほぼ垂直で、一瀬分類のB c種ヨコハケと思われる。なお、突帯に近い部分の横ハケは横ナデにより消されている。

また、下部の3/4に施されている幅約6cmのハケは一回で施されているが、その原体は単純な1点とはいえないようである。すなわち、第6図1に示したのはK-13のハケ目の拓本であるが、図中の①の枠で切り取った左辺を転写してみると、①・②でそれぞれa・bとした太目のハケ条線がうまく合致し、ハケ目の凹凸の深さが浅く拓本があまり明瞭でないため、ややわかりにくいものの、a・b以外のハケ条線もほぼ合致する。つまり、このハケ原体は少なくとも2点の原体を組み合わせて单一としたものとしてとらえられよう。ハケ原体を薄い板状のものとした場合、薄板2枚になるように分割し、その2点を横に並べて組み合わせ、幅広のハケ原体としたことが考えられる。その状況は第6図2のような行為が想定される。

なお、ハケ目の条線底および表面に見えている砂粒周囲の微細な隙間に、顔料の痕跡と考えられる赤色が看取できることから、外面にベンガラ等の赤色顔料を塗布していたものと判断できる。また、部分的にではあるが、褐色が表面に付着している部分があり、これも何らかの顔料で彩っていたことが予想されることから、赤色顔料の地色に褐色の顔料を重ねていた部分があったものと想定される。想像をたくましくすれば、褐色のものは文様的に施していたのかもしれない。

K-14は芝ヶ端遺跡B地区のSK-B05から出土したもので、東側墳丘裾のすぐ東にあたる部分である。口径は27.4cmを測り、口縁端部は面をもつが、全体に軟質で磨滅しており、外表面の調整痕はほとんど残っておらず、かろうじて第3段の一部に横ハケを確認できるにすぎない。第4段の高さは約7cmと低い。第3段突帯も磨滅によりかなり丸くなっている。内面は外面よりも遺存状況が良好で、6条/cm単位の縦ハケが残存している。突帯貼付部分の内面は横ナデによりハケ目が消されている。器壁厚は8mm程度である。内外面とも2.5Y8/2灰白色を呈する。

K-15は南西区墳裾出土の第4段部分の破片で、高さは約11.5cmである。口径は19.4cmと小さく、口縁端部は角張り、端面はやや凹面を呈する。外面には7~8条/cmの連続的な横ハケを2段で施している。静止部分は上側が右に傾くやや斜め方向で、約6.5cm間隔になっている。下段横ハケの静止部分は上段とは少しずれている。口縁端部付近は横ナデによりハケ目を消している。軟質で、内面の口縁部近く以外には横ハケが残存しているが、それ以下は磨滅により看取できない。内面には粘土紐接合痕が顕著に残る。外面のハケ目の条線底の一部および表面に見えている一部の砂粒周囲の微細な隙間に、顔料の痕跡と考えられる赤色が看取できることから、外面にベンガラ等の赤色顔料を塗布していたものと判断できる。器厚は1.1cm程度である。



第6図 円筒埴輪ハケ目 (K-13) とハケ原体予想模式図

K-16は上部の器厚が1.05cm、下部が1.3cmであり、やや厚いところから、第2・3段部分と判断される。硬質で、外面は10YR8/3浅黄橙色を呈し、断面は灰白色に近い。北東区の墳裾からの出土である。

第2段外面は縦ハケのうち8～9条/cmの細条の横ハケを施しているが、明瞭な静止痕は看取できない。また、少なくとも上下6cm幅のハケ目は单一原体により一気に施している。破片の下端には横ナデが認められることから、直下に第1段突帯が貼り付けられていたと判断できる。そうすると、第2段の高さは8cm程度となり、推定径6cmの円形透孔の下端直下に突帯がめぐることとなる。

第3段外面にも第2段と同じ原体によると思われる横ハケが施されているが、ハケを分断し重ねていくような施しかたである。その重ね部分は少なくとも4箇所認められる。残存部分上端では径が24.6cm、第3段下端では径24.0cmである。突帯端は上側が外に張り出しが、下側は弧状になりほとんど角張っておらず、断面が三角形に近い。

内面は縦ハケのうち、横ナデや右斜め上方向のナデを加えている。

なお、外面ハケ目の条線下底部分に茶褐色を呈する顔料のようなものが残存していることから、外面に顔料が塗布されていたことが予想される。

K-17は南東区墳裾から出土した破片で、上部の器厚が1.2cm、下部は1.7cmであるところから、第1段から第3段にかけての部分と判断できる。やや軟質で、外面10YR8/4浅黄橙色を呈する。

第1段の外面調整は磨減により縦ハケが一部に残存しているにすぎない。ハケ単位は6条/cmとやや太い。

第2段は外面縦ハケのうち横ハケを1段で施している。静止痕のうち、上から下まで明瞭に残っているものではなく、下方でのみ明瞭に確認できる。それによると、残存部分内に2.5cm～3.5cm間隔で4～5箇所認められ、すべて方向は垂直である。横ハケの単位は6条/cmで、第1段と同じ原体と思われる。なお、第2段には推定径6cmの円形透孔の一部が残存している。第2段の高さは約9cmで、下端の径は22.0cm、上端では22.9cmの径を測る。

第3段は下端の一部分が残存するのみであり、7条の横ハケが確認できるにすぎない。6条/cmであることから、第1・2段と同じ原体が使用されているものと思われる。

第1段突帯の断面形は台形に近く、底面幅約1.5cm、上面幅約0.7cmで、高さは約0.8cmである。上面はやや凹面となる。第2段突帯も形状は第1段突帯とほぼ同じであるが、上面上端が丸みをおびる。底面幅約1.5cm、上面幅約0.8cm、高さ約0.8cmであることから、第1段突帯とほぼ同じ数値となる。

内面は6条/cmで外面と同じ単位で縦ハケを下から上方向に施し、突帯貼付部分の内面は横ナデを加えている。第1段の内面には刷毛は認められず、指頭圧痕や縦方向のナデが多く認められ、粘土紐接合痕跡が明瞭に残っている。

K-18は北東区墳裾から出土した軟質のもので、内外面とも10YR8/2灰白色を呈する。器厚は上部で1.1cm、下部で1cmであることと、下部に円形透孔が認められるところから、第2段および第3段の部分であると判断される。全体的に脆弱で、調整痕の残存状況は良好とはいえない。また、図は転地逆の可能性があるが、その場合でも第2・3段と考えられる点は同じである。

第2段外面には横ハケのみ残存し、6～7条/cmの単位である。第2段上端での径は25.9cmを測る。第3段の外面も横ハケのみ微かに残存し、単位は第2段とほぼ同じである。静止痕が2箇所からうじて看取でき、約3.7cm間隔である。なお、第3段の高さは9.5cm以上で、残存部分の最上部では径27.9cmである。第2段突帯は断面台形を呈し、下底幅約2cm、上辺幅約8mm、高さ約7.5mmで、上面は凹面をなし、

両端はやや角張る。

内面には縦ハケが所々残存し、ハケ単位は外面とほぼ同じである。

K-19は芝ヶ端遺跡B地区のSD-B3埋土から出土したもので、古墳の東側裾から直線距離で15m離れた位置にあたる。埴輪は突帯2段分が残る破片であり、上端の器厚は9.5mm、下端は14.5mmと厚いことから、第1段から第3段にあたる部分と思われる。やや硬質で外面は7.5YR8/4浅黄橙色を呈し、破断面は灰色に近い。

第1段は上端の一部分が残存している程度であり、横ハケの一部が残存しているにすぎない。第2段の高さは約9.5cmを測り、円形透孔の一部が残存している。第2段の外面には連続的な横ハケを上下1段で施しており、一部にハケを重ねている部分がある。横ハケの静止部分は、動きが完全に止まっているものではないが、2箇所残存しており、その間隔は約5cmである。ハケの単位は5~6条/cmとやや粗い。第2段下端の径は24cm、第2段上端では25.2cmの直径を測る。第3段の外面にも第2段と同じ単位の横ハケが認められるが、第3段が残存しているのは下端の一部に限られている。

第1段突帯は断面台形を呈し、下端幅15mm、上端幅6.5mm、高さ7mmを測り、上面は凹面にはならない。第2段突帯の残存部分では、突帯上面が丸みをもつ。下端幅1.5cm、高さ0.8cmである。

内面には凹凸が多く、粘土紐巻上げ痕が認められるが、部分的に縦ハケが残存している。ハケ単位は5~6条/cmと外面と同じ単位となっている。その後縦方向のナデも重ねているが、突帯部分の内面は横ナデを施している。

K-20の上端は器厚1.0cm、下端では1.2cmの厚さであり、突帯上部に円形透孔が認められるところから、第2段および第3段部分の破片である可能性が高い。第2段上端の径は33.4cmとやや大きいことから器厚もやや厚めになっているものと思われる。やや硬質で、外面は10YR8/3浅黄橙色を呈し、北東区墳裾から出土している。

第2段の外面は中央やや下部で約2cm重ねながら上下2段に連続的な横ハケを施しており、上段を先に施している。上段ハケを確認できた範囲での原体幅は5.5cmである。上段ハケの単位は5条/cm、下段ハケの単位は5~7条/cmで、同一の原体を使用している可能性が高い。また、上段ハケの静止部分は不完全でやや屈曲する程度であるが、下段ハケは3.5cm・4cmの間隔で静止部分が3箇所認められ、その方向は、上部がやや右に傾いている。残存範囲では第2段の高さを測定することはできないが、少なくとも9.5cm以上はあることが判断できる。

第3段は残存部分が少なく、外面に横ハケが認められるが、限られた部分であるため、詳細不明である。また、円形透孔の一部が残存している。第2段突帯の断面形は半円形に近く、下底幅11mm、上辺幅約8mmで、上辺の上下端は丸みをもっている。高さは8mm程度である。

内面の調整は横ナデのち5~6条/cmの縦ハケを施すが、突帯部分の内面には横ハケを施し、部分的にナデしている。突帯直上の内面には粘土貼付痕が明瞭に認められ、横ナデのち縦方向のハケを一部に加えている。

K-21は上下端とも器厚が9.5mmで変化がないが、ハケの方向と施す位置および突帯の形状により上下方向を判断した。また、突帯の上側には円形透孔の一部が残存していることから、第2段もしくは第3段であり、下端の器厚が1cmに満たないことから、第2段および第3段部分の破片であると判断した。

北東区北端の崖面から出土しており、上半部はやや硬質で、外面は10YR8/3~8/4の浅黄橙色を呈している。

第2段は軟質となっているが、横方向のハケ目が残存している。単位は6条/cmで、縦ハケの後に施しているようである。第3段の確認できる部分では、横ハケを1段で継続的に施している。器表が凹面を呈し、横ハケが施されなかった部分については、第1次調整である縦ハケがはっきりと確認できる。その単位は5~6条/cmで、横ハケの単位と近似している。横ハケの残存部分には2箇所の静止痕が認められ、ほぼ垂直方向となっている。静止痕の間隔は約4cmである。第3段下端での直径は28.6cmを測る。

内面の第2段部分は5条/cm単位の縦ハケのみであるが、突帯貼付部分では横ナデ後部分的に横ハケを加えている。さらに第3段部分の内面は、縦ハケのち斜め右上方向のナデを部分的に加えている。

第2段突帯は幅が約7mmと狭く、断面形状では下部が丸みをもつが、軟質であるため、剥落している可能性もある。

K-22は南西部墳裾出土の軟質の破片で、10YR8/2灰白色を呈する。上端の器厚は11mmであるが、下端は内面が摩滅することにより8mm程度と薄くなっている。突帯は太く、下端幅約2cm、上端幅8mm、高さ1.1cmを測り、断面は台形を呈し、上端面は凹面をなす。突帯下端での直径が21.4cmと小さいことから、残存下部は第1段であると判断される。第1段の外面には8条/cmの横ハケが部分的に残存している。第2段外面の横ハケも器表剥離により遺存状況が良くないが、7~8条/cmの単位である。静止痕は確認できない。第2段には円形透孔の一部が残存しており、横に長い梢円形に近く、最大径は7cm程度である。内面には粘土紐巻上げ接合痕が認められるが、器表が磨滅・剥離しているため調整痕は確認できない。

K-23は芝ヶ端遺跡B地区のSD-B2埋土から出土した破片であるが、残存墳裾から東へ直線距離で約15m離れている。軟質で、2.5Y8/2灰白色を呈する。残存部上端の器厚は1.5cm、下端の器厚は1.45cmを測る。上下端ともに厚みに変化はないが、図の下部の外面調整が縦ハケで終わっているようであるため、下部を第1段と判断している。ハケの単位は5条/cmである。

第2段の横ハケ残存部分では1段で施しているようであるが、磨滅により消失している部分が多く、断定的なことはいえない。また、縦ハケを加える部分も認められる。ハケの単位は5~6条/cmであることから、第1段とともに同じ原体を使用していた可能性が高い。第2段には円形透孔の一部分が残存している。なお、第2段下端での直径は22.5cmを測る。

第1段突帯は断面が半円形に近くなっているが、磨滅によるものと思われる。突帯の下端幅は約2cm、高さは1cmである。

内面は磨滅により器表が全く遺存していないため不明となっているが、粘土紐接合痕は確認できる。

K-24は芝ヶ端遺跡B地区の谷状遺構南端から出土したもので、古墳東裾から直線距離で22m以上離れた位置にあたる。やや軟質の破片で、外面は2.5Y8/2灰白色を呈する。突帯とその上下が残存する破片で、上下はハケの方向により判断した。部位は不明であるものの、破片上下端の器厚がともに1.2cmを測ることから、第2段および第3段部分の可能性が高い。以下、その判断にもとづき記述する。

第2段と考えられる部分の外面調整は、連続的で8~9条/cmの横ハケが残存しているが、静止部分は垂直よりも上が右側にかなり傾いたラインになっている。静止痕は明確なものでは3箇所残存しており、3cm~3.5cmの間隔となっている。第3段と思われる部分は下端のみ残存しているため、横ハケの一部を看取できるにすぎない。ハケ単位は想定第2段と同じものと思われる。想定第2段上端での直径は歪みがあるため正確ではないが、25.9cmを測る。なお、透孔は残存部分では確認できなかった。

想定第2段突帯は磨滅のため上端部が丸みをおびているが、下端幅1.8cm、上端幅0.8cm、高さ1.0cmを測る、断面が台形に近いものである。

内面は磨滅のため器表が残存している部分が少ないが、7条/cmの縦ハケが部分的に残存している。また、粘土紐接合痕は明瞭に残存し、接合面にハケを施している部分も認められる。

K-25はやや硬質の破片で、外面は2.5Y8/3淡黄色を呈し、破断面中央部分は淡灰色に近い。南東区の墳裾から出土した破片で、上端の器厚が0.8cm、下端部で1.2cmを測ることから、第3段および第4段部分の破片と判断している。

第3段と思われる部分の外面には10条/cm単位の細かい横ハケを幅5cm程度の帯として1段で連続的に施してある。器表が窪んでいる部分には第1次調整の縦ハケが残存しているが、ハケ単位は第2次調整の横ハケと同じである。静止部分は上がやや右側に傾いたものが3箇所残存し、そのストローク幅は4.5~5cmである。ハケは見た目では左方向に動いている。なお、外表面下端に横ナデ痕が見られることから、突帯の下端に最も近い部分であると思われる。第3段と思われる部位の高さは約8.5cmを測り、想定第3段上端での直径は27.8cm程度になっている。第4段と思われる部分は下端のみ残存しており、縦ハケのち横ハケ調整が看取できる。

想定第3段突帯は斜め下方に向いており、下端幅は約1.4cm、上端幅は約1cmを測り、上端面はやや凹面状を呈し、両端は角張っている。突帶上部側での高さは0.7cm程度である。

内面には9~10条/cmの縦ハケをやや疎らに施し、左斜め上方向のナデを加えている。また、突帶貼付部分の内面にはさらに横ナデを加えている。粘土紐や粘土帶接合痕は看取できない。

K-26はやや硬質の基底部の破片であり、北東区墳丘斜面の表土下から出土している。外面の色調は2.5Y8/2灰白色を呈し、破断面は明灰色に近い。底外径は20.6cmで、残存部上端の器厚は1.45cm、下端の器厚は2.2cmと下端がかなり厚くなっている。底面には直径3mm以上の草茎もしくは板端を想定させる圧痕が残っており、埴輪製作中の乾燥時に付着したものと考えられる。

第1段の高さは約9cmで、やや歪みがある。外面には縦ハケと横ハケが残存しているが、ここでは縦ハケは横ハケのうちに部分的に施したものが多く残存している。ハケ目の単位は8条/cmで、横ハケは幅約6cmの1段で連続的に施している。静止痕は3箇所残存し、上側が右に傾いている。そのストローク幅は3cm程度である。第2段は下端の一部に限られるが、円形透孔の一部が残存している。第2段の外面調整は不明である。

第1段突帯は、磨滅により上部が丸くなっているが、下端幅は約1.5cmで、残存高は0.6cm程度である。内面のほぼ全体には縦ハケが明瞭に遺存しており、7~8条/cmで原体幅は4.8cm以上である。ハケは垂直に施すものと左斜め上方向に施すものがあり、斜め方向が後から施されている。第1段突帶貼付部分の内面には横ナデ痕が残る。

K-27は北東区墳裾から出土した軟質の基底部で、内外面ともに10YR8/4浅黄橙色、破断面中央は暗緑灰色に近い。器表の大半が剥離・磨滅しており、不正確ではあるが、残存上端部の器厚は1.2cm、下端の基底面の器厚は2.15cmである。底面には直径8mm程度の棒状や段状の圧痕が残っており、製作乾燥時に下に敷いていたものの痕跡であろう。基底部外径は23.8cmと推定している。

第1段は高さ約9.5cmで、外面には横ハケがかろうじて観察できる。6条/cm程度の単位と思われるが、正確ではない。第2段は下端のみで、調整も不明である。第1段突帯は磨滅により上部が丸くなっている。現状では下端幅1.3cm、高さ0.7cmである。内面の調整痕はまったく残っていないが、粘土紐接合痕

らしきものが部分的に観察できる。

K-28も軟質の基底部破片で、南東区墳裾から出土している。第1段の長さは8.5cmで、基底面には製作時のものと思われる、幅2.5cmの板状および径4mm程度の棒状の圧痕が認められる。外面の調整痕は磨滅により残っていないが、微かに横ハケが残っているようである。また、外面には楔形に窪んだ部分がある。外面の色調は10YR8/4浅黄橙色で、破断面中心部は灰色を呈している。基底面の器厚は2.6cm、残存上端部は1.1cmの厚さであるが、磨滅・器表剥離のため、本来はもう少し厚かったものと思われる。内表面は外表面と較べて残存している部分が多く、7.5YR7/6橙色を呈し、縦方向のナデおよび指頭圧痕が看取できる。基底部外径は23.4cmを測る。

第1段突帯は磨滅・剥離によりかなり変形しているが、現状では下端幅2.4cm、高さ0.7cmである。

K-29は芝ヶ端遺跡B地区のSD-B3裡土上層から出土した軟質の基底部片である。表面は内外面とも磨滅が著しく、2.5Y8/2灰白色を呈する。残存上端部の器厚は1.35cm、下端基底面の器厚は1.85cmと他に較べてやや薄いが、基底下面に製作乾燥時のものと思われる圧痕が残存していることから、基底部であることは間違いない。

第1段の高さは約9cmで、外表面の調整痕は全く残っていない。第2段についても同様である。第1段突帯も磨滅が著しく、0.4cmと低いものになってしまっている。内面の調整についても全く残っていない。なお、基底部外径は24.4cmを測る。

K-30は南東区墳裾から出土した基底部で、軟質のため器表は残っていない。内外面とも2.5Y8/2灰白色を呈する。第1段は高さ約9cmで、若干丸く歪んでいる。基底面には幅1cm程度の圧痕が残っている。突帯および内面も器表が残っていないため、形状や調整痕は看取できない。基底部外径は20.8cmを測る。

K-31も軟質の基底部で、北東区の北端斜面から出土している。基底部外径は21.2cmで、内側に折れ曲がったようになっている。外面には6条/cmの縦ハケが部分的に残存しているが、内面は不明である。基底下面には圧痕が認められるが、大きさ等は判断できない。残存高は5.4cmである。外面は2.5Y8/2灰白色を呈する。

K-32は北東区出土の軟質基底部で、外面は2.5Y8/2灰白色を呈する。内外面ともかなり磨滅しているが、基底部下端の器厚は1.5cm程度である。残存高は6.8cmであるが、歪みがある。基底部外径は21.9cmである。

K-33も軟質の基底部で、北東部墳裾からの出土である。磨滅が激しいため調整痕は残っていない。基底面には5mmや8mm程度の棒状などの圧痕が看取される。製作時のうちの乾燥時についたものと思われる。基底部外径は35cmとなっているが、歪みが大きく不正確である。内外面とも2.5Y8/2灰白色を呈する。

その他の埴輪 (図版23・25、写真図版20・27)

K-34はヘラで綾杉文を描いている小片で、南西区から出土している。図上部には下底幅約10mm、上端幅5mmで、高さ5mm程度の突帯がめぐっている。小片のため、径・傾き・器種に加えて上下方向も不明である。壺形あるいは甲冑形草摺部分の一部かもしれないが、羽状文部分が縦位であるため、理解に苦しむ。朝顔のような形態かもしれないが、突帯の形態が異なっている。いずれにしても簡単には類例を探し出すことができなかった。ここでは形態不明として、類例の探索を行ないたい。色調は10YR8/2灰白色である。

K-35も小片であるため器種が不明であるが、4条の直線文様が鎧齒文状になっていることと、横断

面がわずかに弧状を呈していることから盾形埴輪の一部分として考えておきたい。南西区墳裾から出土しており、10YR8/2灰白色を呈する。

K-36も盾形埴輪の一部かも知れないが、細片であるため、想像の域を出ない。南東区墳裾から出土し、10YR8/2灰白色を呈している。

K-37は中空から中実になる截頭椎円錐形とも称すべき現形状である。両端は欠失している。形象埴輪と思われ、形状的には人物埴輪の腕のようにもみえるが、不明である。残存長12.2cm、最大幅7.2cm、最大厚4.9cmである。南西区墳裾の葺石除去時に出土したものであり、10YR8/3浅黄橙色を呈する。

K-38は径約5.6cmで中空の筒状を呈する形象埴輪片である。一部に張り出す部分が残存しているが、埴輪の種類および部位は不明である。10YR8/3浅黄橙色を呈し、西側墳裾から出土した。

K-39も筒状を呈する小破片である。外径は5.5cm程度になるものと思われる。K-38同様、埴輪の種類は不明である。南東区の墳丘部分から出土しており、10YR8/4浅黄橙色を呈する。

(2) 土器等その他の遺物

埴輪以外の出土遺物には、埋葬施設に関係すると推定される須恵器・土師器・鉄器がある。

土 器 (図版26、写真図版26・28)

K-40・41は須恵器杯蓋である。K-40は口縁端部付近の小片で、口径は11.8cmと推定される。口縁部はほぼ垂直に垂下すると思われ、端部は内傾する凹面をなす。西側墳裾から出土しており、7.5Y7/1灰白色を呈し、焼成は良好である。碎片のため不正確であるが、MT15～TK10型式期頃の所産と思われる。

K-41は口径12.0cmと推定される破片で、N6/灰色を呈し、南側墳裾から出土している。天井部外面のヘラ削りの範囲は広く、口縁部との境は鋭く尖り、口縁部は外反する。口縁端部は外側に引き出すことによって、凹面を呈する端面を幅広くしている。端面の内面側は鋭く尖る。焼成は非常に良好である。細部の特徴をみると、TK47型式期頃と思われるが、断定できない。

K-42・43は土師器杯である。K-42は口径10.4cm、器高3.3cmを測り、墳丘南側部分から出土している。内面はナデ仕上げであるが、外面は器表が磨滅している。口縁端部は丸くおさめる。

K-43は口径11.4cm、器高2.8cmを測る小片である。10YR7/4にぶい黄橙色を呈する。口縁端部は丸く、内外面の調整は不明である。

金属器 (図版26、写真図版26)

K-M1～K-M4は古墳に伴うと考えられる鉄器である。なお、K-M5は南東側墳裾の盛土中から出土した寛永通宝(銅銭)である。

K-M1・K-M2は鉄劍の破片であり、幅はK-M1が3.8cm、K-M2が3.6cmであるが、K-M2の片側刃部が欠損していることから、この2点は同一個体である可能性が高い。K-M1の厚さは5mm、K-M2はK-M1よりも少し厚く7mmを測り、ともに鏽は無い。なお、K-M2の欠損している刃部付近には木質が残存している。K-M1は残存長7.3cmで、南側墳裾から出土し、残存長4.3cmのK-M2は南東側墳裾から出土したものである。

K-M3は、刃部から残存幅である3.1cmのところまでの横断面形をみると、表面が直線的であり、弧状を呈さないことから刀の破片と思われる。残存長は4.7cmを測り、外表面には木質が残存している。北東側墳丘斜面から出土している。

K-M4は刀子の破片と思われるが、刀の可能性も考えられる。身部の破片で、残存長は5.5cmを測る。

最大幅は1.8cmで、そこからさらに幅広くなる部分は刃部が欠失している。背側の厚さは5.5mmもあるところから、刀の可能性も残されている。南西部の墳裾から出土したものである。

なお、K-M5の寛永通宝（銅錢）は、南東側墳裾の中世以降の盛土中から出土したものである。直径2.4cm、厚さ1mmを測る。

第3節 古墳築造以前の遺物

古墳盛土中の黒褐色土および盛土基盤層である暗茶褐色～黒褐色砂質土から、古墳築造以前の弥生時代中期の土器が出土している。芝ヶ端遺跡では同時期の遺構が検出されていることから、古墳築造場所が弥生時代中期の遺物包含層であり、盛土採取地にはその時期の遺構ないしは遺物包含層が存在していたものと思われる。古墳築造以前の遺物で、出土したのは以下の弥生中期後葉（第IV期＝但馬第IV様式）の土器および貝岩と思われる剥片に限られる。

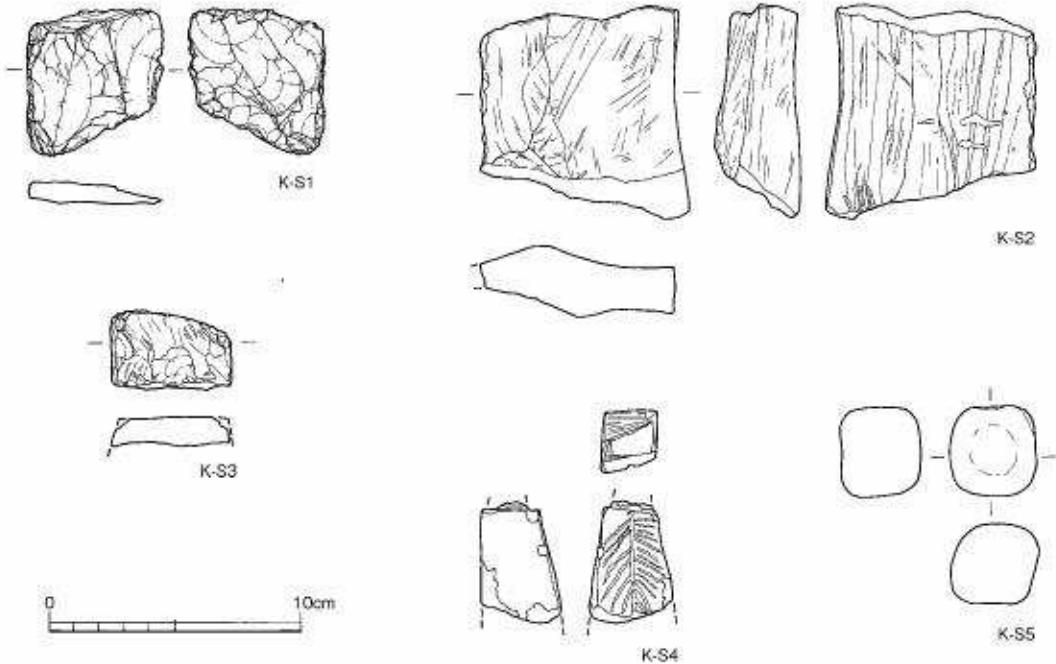
弥生土器（図版26、写真図版28）

K-44は口径26.0cmを測る大型の甕である。口縁部は「く」字形に外折し、口縁端部は少し肥厚させるとともに、端面には幅広い2条の凹線を施している。体部内外面に縦ハケが残る以外は、すべてナデ調整となっている。墳丘盛土から出土している。

K-45は高杯または台付鉢の口縁部である。外面には2条の凹線文を施しているが、口縁端部直下では段状になっている。口径21.4cmの口縁端部は内傾し、若干凹面となる面をもつ。古墳北西区の基盤層から出土している。

K-46は高杯の破片であるが、口縁部が欠失しているため、垂下するか否かは不明である。杯部口径は18.6cmを測る。出土位置・層位は不明である。

K-47は盛土出土の高杯脚部で、脚端径は12.1cmである。残存高は9.4cmを測り、上部に4条の凹線文が残存している。脚端部は上方に拡張し、端部は面をもつ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケ



第7図 芝ヶ端古墳出土石製品等

ズリ調整である。

K-48は古墳盛土中に含まれていた底部で、底径9.1cmを測る。体部外面は縦方向のヘラミガキであるが、不明瞭となっており、内面は器表磨滅により調整不明である。

K-49も古墳盛土中に含まれていた底部であるが、内外面の調整は器表磨滅のため不明である。底径は7.5cmを測る。

K-50も墳丘南西部の黒褐色盛土中に含まれていた底部で、底径は7.1cmを測る。器表磨滅のため調整痕は残っていない。

石器（第7図、写真図版30）

第7図に示したK-S1は、57.5mm×53.8mmで厚さは9mmを測る、扁平で頁岩製と思われる剥片である。墳丘盛土中から出土したもので、図の左側縁はプライマリーの可能性が高い。同様の石材を使用した石包丁未成品が芝ヶ端遺跡から出土していることから、K-S1も石包丁あるいはその未成品の可能性が高いものと思われる。

第4節 古墳築造以降の遺物

出土遺物のうち、古墳築造以降のものは主として墳丘東側部分の後世の盛土中から出土した。それらの遺物では大半が中世に属するものであり、近世以降のものが若干含まれる。中世の遺物については、隣接の芝ヶ端遺跡の時期と合致することから、後世に古墳に盛られた土の供給源が、遺跡の包含層や遺構部分であった可能性、もしくは中世に古墳に土を盛った可能性の二通りが考えられよう。

ここではいずれかに決することができないが、中世の集落跡が廃絶した以降には水田として利用されていることから、水田構築の際に余った土を古墳東側に盛った可能性が高いと思われ、あるいは竹林として古墳を利用する際に芝ヶ端遺跡部分から土を供給したことも考えられる。いずれにしても、中世よりも後の時代に盛土を行なった可能性が高いと思われる。

中世の土器・磁器等（図版26、写真図版28・29）

K-51～53はいわゆる土鍋である。いずれも玉縁状の口縁端部で、偏球形の体部を有するもので、13～15世紀頃のものであろう。K-51は口径17.8cmを測り、口縁部はやや外傾してのびる。体部はあまり肩が張らず、外面は平行タタキ、内面はハケののちナデを施している。5YR6/6橙色を呈するが、須恵質の焼成となっている。K-52は内傾しながらのびる口縁部を有するもので、端部の肥厚は少ない。口径は19.6cmである。体部は丸みがあり、偏球形であることが窺える。土鍋の中では時期的に遡るものと思われる。体部外面は平行タタキ、内面は板ナデ調整を施している。7.5YR6/3にぶい褐色を呈する硬質の土師器である。K-53も硬質で、直立する口縁部をもち、端部は玉縁状に肥厚させている。口径は24.3cmと大きい。体部は、口縁部下で一度肩が張り、その後直線的に下外方にのびる。体部最大径は下方にあるものと思われる。体部外面は平行タタキ、内面には当て具痕が残る。

K-54は須恵器こね鉢の底部である。直径9.6cmの底面には回転糸切り痕が残る。内面はナデ調整であるが、使用による磨耗が著しい。東播系須恵器の可能性が高いと思われる。墳丘西裾の表土下から出土している。

K-55は土師器の小型碗である。口径10.5cm、器高3.7cm、底径6.0cmを測る。底面はその形状から回転糸切りと思われるが、内外面の調整とともに糸切り痕も残存していない。墳丘南西側斜面の表土下か

ら出土している。

K-56～K-58は土師器の皿である。口径では、後述のK-59～K-61の小皿よりも平均で3.6cm大きい、11.05cmである。K-56は口径11.8cm、器高3.4cmを測るが、小片である。内外面にはナデおよびユビオサエの痕跡が残る。墳丘南東側の表土下から出土している。K-57は口径11.6cm、器高3.3cmを測り、接合によりほぼ完形となった。調整痕は残存していないが、ナデ仕上げと思われる。東部の盛土中から出土している。K-58は口径9.8cm、器高2.8cmを測る、やや小さめのものとなっているが、小片のため不正確である。内外面の調整はナデと思われるが、明確な調整痕は残存していない。

K-59～K-61は土師器小皿片である。すべてユビオサエおよびナデにより整形している。K-59は口縁部がやや長く、器高2.0cmである。口径は7.2cmを測る。墳丘南側から出土した。K-60は南西区の表土下から出土したもので、口径7.6cm、器高1.7cmである。K-61は墳丘東部盛土内から出土しており、口径7.5cm、器高1.6cmを測る。土師器小皿の形状では、いずれも口縁部が垂直ないし垂直気味に立ち上がる特徴がある。

K-62～K-64は青磁碗の破片である。K-62は口縁端部が外反するもので、口径14.0cmを測る。K-63は外面口縁部下に雷文帯を施すもので、口径は13.3cmを測る。K-62・63ともに西側墳裾から出土している。K-64は高台径4.3cmを測る。皿の可能性もある。高台およびその内部は露胎となっている。南西区の転落墓石の除去時に出土した。K-62・63は14世紀末頃から15世紀のものと思われ、K-64についても同じ時期と推定される。

K-65は肥前系磁器の広東碗底部である。高台高く、径は6.1cmを測る。内外面に呉須で文様を描いている。

K-66は瓶の底である。底径7.8cmで、上げ底になっていることと、全体が黒褐色～暗い飴色を呈することから、葡萄酒瓶の可能性が高い。東部の盛土中から出土した。

以上の出土遺物のうち、葡萄酒瓶が示すように、明治時代以降にも盛土されていることが窺えるとともに、盛土が行なわれた主たる年代も、その頃である可能性が高いものと推察される。

石製品 (第7図、写真図版29・30)

第7図に示した遺物のうち、K-S2～K-S4が古墳築造以降の所産と考えられる。

K-S2は両端を欠損するが、両側は当時の状態を残しているものと思われる。幅8.3cm、残存長8.5cm、厚さ2.8cmを測る。平面部の底面は上下面とも縦方向の2面に分かれ、いずれも凹面をなす。墳丘東部分の後世盛土中から出土しており、凝灰質砂岩製である。

K-S3は平面片側および両端を失する砥石である。残存する上面と両側縁が底面となっている。幅4.8cm、残存長3.2cmを測る。石材は凝灰質砂岩と思われ、墳丘南側の後世盛土中から出土した。

K-S4は砥石と思われるが、細い部分に切込みを入れて分割しているようである。細くなったため、分割して携帯用として使用する意図があったものとも推察される。4面とも底面となっているが、1面には綾杉状の文様が線刻されている。残存長4.85cm、最大幅3.3cmで、古墳東部分の後世盛土から出土している。凝灰質砂岩製と思われる。

K-S5は墳頂部から出土した石英である。サイコロ状の正六面体に近い形状で、角は丸い。全体に極めて平滑で、その形に加工した可能性がある。一辺3.2cm～3.5cmを測り、重量は68gで、乳白色を呈する。機能・用途等は不明である。

第3章 まとめ

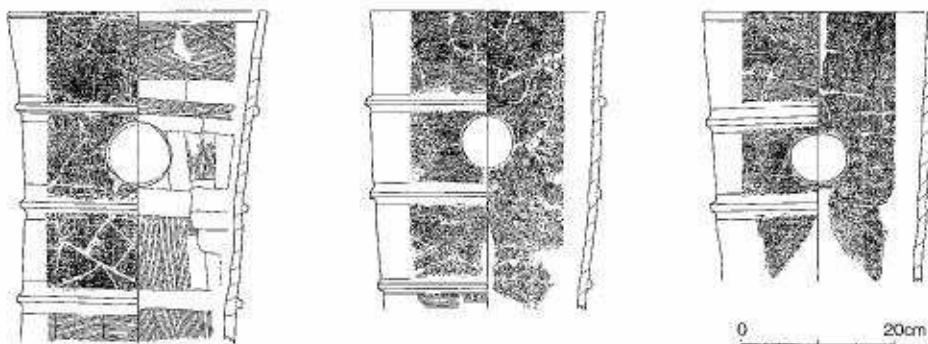
芝ヶ端古墳築造前の弥生時代中期後葉には、遺構は検出されなかったものの、芝ヶ端遺跡で検出された集落の縁辺部にあたり、遺物包含層となっていた。古墳時代中期末～後期初頭には芝花古墳群の一支群として築造され、主体部は木棺直葬であった。その後、芝ヶ端遺跡の中心時期である12～15世紀に古墳がある程度改変を受けたと思われるが、その状況は不明である。ただし、削平された墳丘東半側に芝ヶ端遺跡側から土が盛られたのは中世または近世のいずれかであろう。

最後に、芝ヶ端古墳出土埴輪について、類例をもとに若干の推定を行っておきたい。

芝ヶ端古墳から出土した円筒埴輪の外面二次調整には、あまり明瞭でないものの、一瀬和夫氏分類（一瀬2005）のB c種ヨコハケおよびB d種ヨコハケが施されており、川西編年（川西1978）の第IV期、一瀬編年では四期中相に編年され、須恵器ではON46・TK208型式に併行するとされる。しかし、芝ヶ端古墳から出土した須恵器はMT15型式前後で、遡ってもTK47型式であるため、埴輪編年と須恵器編年は合致しない。和田山町茶すり山古墳（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編2003）から出土した埴輪は黒斑を有し、B c種ヨコハケに限られ、古墳時代中期中葉の5世紀前葉の時期が与えられる。山東町森向山1号墳の円筒埴輪（中島1993）ではB c種ヨコハケが多く認められ、B d種ヨコハケも存在しているようであり、和田山町岡田2号墳（岡崎正雄編1989）の円筒埴輪はB d種ヨコハケを施し、森向山1号墳とともに審査焼成と考えられている。本墳に最も近い様相を呈するのは、森向山1号墳の埴輪であり、出土須恵器もTK47～MT15型式と時期的にも合致することから、茶すり山古墳—森向山1号墳・芝ヶ端古墳—岡田2号墳という時期的変遷を描くことができそうである。ただし、5世紀後半と考えられる朝来市船宮古墳（田畑編1990）の円筒埴輪ではB d種ヨコハケが多くを占めているが、王墓と推定される船宮古墳には、早い段階に新型式の埴輪が導入された可能性が高い。

文献

- 一瀬和夫2005『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館
岡崎正雄編1989『岡田2号墳』兵庫県文化財調査報告第68冊 兵庫県教育委員会
川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
田畑基編1990『船宮古墳』朝来町文化財調査報告書第2集 朝来町教育委員会
中島雄二1993「森向山1号墳の馬形・人物埴輪について」『但馬考古学』第8集 但馬考古学研究会
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編2003『茶すり山古墳 調査概報』兵庫県教育委員会・学生社



第8図 朝来市山東町森向山1号墳出土の円筒埴輪（中島1993より）

IV 芝ヶ端遺跡

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

芝ヶ端遺跡の調査は、一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴って、当時の建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所（現在は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所、以下同じ）の依頼にもとづき、実施したものである。

芝ヶ端遺跡は旧名称を北近畿No.114地点と称し、平成5年および10年の分布調査により発見された散布地である。その範囲（第3図）は、東側の芝花古墳群・弥生墓群（旧名称No.113地点）から西側の芝ヶ端古墳（旧名称No.116地点）までの間で、中央に存在する芝花古墳群（旧名称No.115地点）を除いた部分である。

No.114地点の確認調査は、建近豊工第108号の依頼にもとづき平成11年7月に実施した。その結果、芝花古墳群が存在する丘陵尾根北裾（A地区）および、その西側の谷状地形部分（B地区）において遺構・遺物が検出された。確認された遺跡は地元教育委員会と協議の結果、字名をとつて「芝ヶ端遺跡」と呼称することとなった。

平成11年10月には、建設省の依頼（建近豊工第121号）にもとづき、芝ヶ端遺跡A・B両地区の本発掘調査を開始したが、調査過程において、当初のB地区範囲よりさらに北側にも遺構がひろがっていることが判明した。そこで、建設省と協議の結果、建近豊工第122号の依頼により、その部分についても同時に調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過と体制

（1）確認調査 図版15 第9図

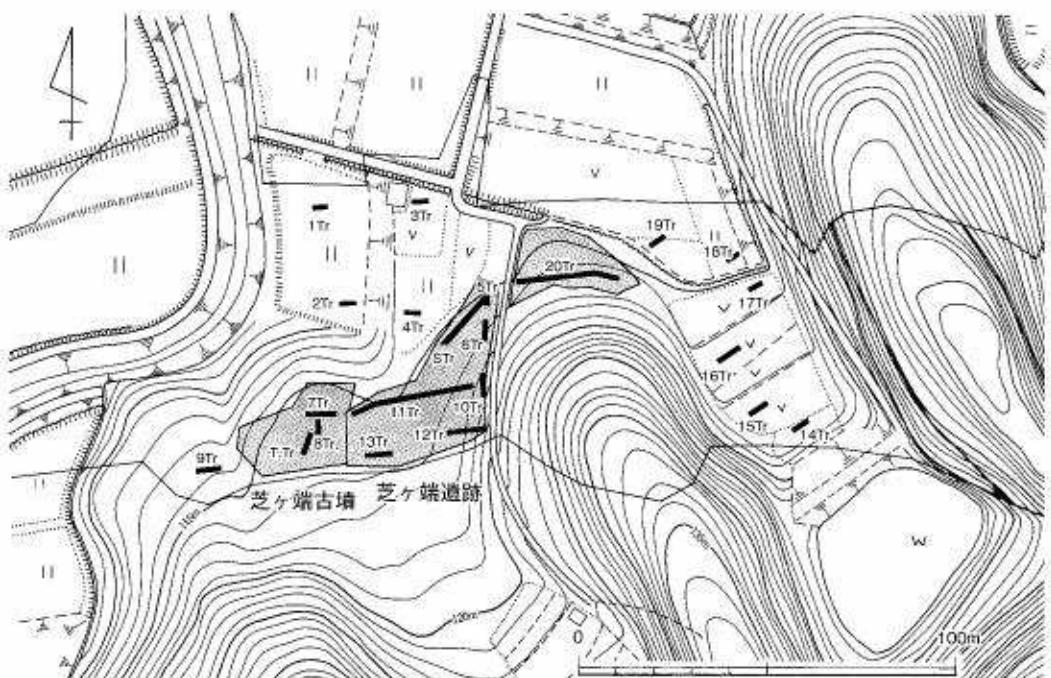
確認調査はNo.114地点の範囲内に幅1mのトレンチを20箇所設定し、重機により表土を除去を行なった後、遺構面上部以下について人力により掘削・精査を実施した。

調査の結果、北西部の1Tr～6Trでは遺構・遺物とともに検出されなかつたが、10Tr～13Trにおいては柱穴・溝・流路状落ち込みなどが検出された。特に谷部を横断するかたちで設定した11Trにおいては、溝・柱穴・土壤などが密集した状態であった。

20Trは丘陵尾根裾部分に設定した長いトレンチであるが、ここでも溝と多くの柱穴が検出された。

一方、東側の谷内に設定した14Tr～19Trにおいては、谷内堆積土中から流木とともに若干の土器や加工木が出土したが、遺構は検出されなかつた。なお、15Trからは須恵器甕片の転用硯が出土している。

No.116地点にあたる7Tr～9Trのうち、9Trでは表土直下で地山となっていたが、芝ヶ端古墳部分である7Tr・8Trでは盛土が確認された。ただし、この段階では古墳と判断するにはいたらなかつた。



第9図 芝ヶ端遺跡他確認調査トレンチ配置図

(2) 本発掘調査 図版15・27 第9図

確認調査の結果により、遺構・遺物が検出された20Tr部分をA地区、10Tr～13Tr部分をB地区として、本発掘調査を実施した。

発掘調査は、表土部分を重機により除去し、包含層以下を人力により鋤削した。その後、遺構が検出できる面（地山）を精査して、検出できた遺構については、その埋土を人力により鋤削した。

調査の過程で、B地区の北東部において溝（S D-B.1）が調査区外にのびることが判明したため、その広がりをトレンチ（Sトレンチ）で確認した。その結果、溝は約13m以上北側まで続くことが判明し、さらにその北には柱穴も検出された。そこで、田・畑で削平されていないと想定される部分について範囲を広げ、調査を実施した。

遺構の鋤削後は、足場上からの全景写真やヘリコプターによる空中写真測量を実施し、細部については写真および実測図を作成して記録につとめた。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡4棟をはじめ、墓・溝などのほか、古墳時代と想定される土壙を検出した。また、中世の遺構として掘立柱建物跡や谷状遺構および墓と想定される土壙をはじめ、多数の溝・土壙・柱穴を検出した。そのことから、芝ヶ端遺跡の調査部分においては、弥生時代に人々の暮らしの痕跡が認められた以降、芝ヶ端遺跡の中心をなしているのは中世の時期であることが判明した。

なお、B地区西部では調査の過程で円筒埴輪片が多く出土し、至近に古墳が存在していた可能性が考えられた。そこで、B地区西側の古墳状隆起の確認調査を実施したところ、埴輪片が多く出土し、古墳の盛土であることも確認できた。

(3) 出土品整理

芝ヶ端遺跡の出土品整理は平成18・19年度の2年間実施した。平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実測・復元・写真撮影までの工程を行ない、平成19年度は兵庫県立考古博物館においてトレース・レイアウト・印刷の工程を実施した。

第2章 調査の結果

第1節 調査の概要および基本土層

(1) 調査前の状況および地形 図版15 卷頭図版9~13 写真図版31・32・37

芝ヶ端遺跡の今回の調査区はA・Bの2地区に分かれている。A地区は東側の丘陵尾根裾部にあたる。この尾根は、多くの古墳が存在する山塊から北西にのびる支尾根のひとつで、尾根上には本書所収の芝花古墳群が存在している。

この尾根の裾部にあたるA地区は、調査前は荒地となっていたが、以前は畠地であったようである。この畠は尾根裾の北~北東部にかけて最大幅約23mの平坦地を造成したもので、その形状は尾根の等高線に沿って三日月形に近い形状を呈している。調査区は東端の一部を除いた平坦地のほぼ全域であり、南側は丘陵への傾斜変換部分、北側は下段に存在する水田との段差部分までを対象としている。

B地区は南北方向の道路1条を挟んで、この尾根の西側部分にあたる。調査前は荒地となり、休耕田の状態であった。B地区内の休耕田面は3面存在しており、最も高い位置の南東部と最も低い西部および中間の高さの北東部である。これらのうち東側の2面については檜の植林がなされていた。なお、西側は竹林となっており、芝ヶ端古墳の調査区と接している。

(2) 基本土層 図版15・28・29 卷頭図版9・10・12・13 写真図版31~33・37

A地区では削平のため耕土直下が黄褐色系の地山となっているが、北側では自然地形が部分的に残存しており、地山の上に暗褐色系および黒褐色系土層の堆積が認められた。この黒褐色系土層は黒ボクの二次堆積と推定される。

B地区の西部では耕土直下が粘質の黄灰色系地山となっており、削平によるものと思われる。遺構埋土には暗褐色系、黒褐色系のものが存在していることから、地山上にそれらの土層がかつて堆積していたことを示しているものと思われる。B地区東部のうち、南端部では耕土直下が地山であったが、北部および西部の斜面下方にゆくにつれ、暗褐色系土層を挟んでいる。その部分の遺構埋土は、基本的に黒褐色系土層となっている。B地区北東部では、黒ボクに非常に近い黒褐色系土層が厚く堆積しており、地山との境界では地山が褐灰色系に土壤化していた。

(3) 検出遺構 図版27~29 卷頭図版9・10・12 写真図版31~33・37・38

A地区で検出した遺構には、円形の竪穴住居跡3棟や木棺墓、溝・土壙などがあり、弥生時代中期と中世に大きく分けられるが、検出面は同一面で、埋土にも大きな違いはなかった。また、平坦部北部の地山傾斜残存部分以外では、削平をほとんど受けていなかったが、非常に限られた範囲であった。したがって、大部分は削平のため遺構の残存状況は悪く、竪穴住居跡の壁面は遺存しておらず、周壁溝も大部分が削平され、床面すら不確実な状況であった。

B地区は全体的に北西に向かって傾斜する地形となっているが、中央部が幅約10mの谷状地形となつており、西半部側が削平により東半部側よりも1m前後低くなっている。

B地区で検出した遺構では、竪穴住居跡などA地区と同じ弥生時代の遺構が北東部に集中して検出された。また、溝・柱穴・土壙などの中世の遺構がB地区の全体に分布している。谷状遺構埋土に含まれる遺物の大半は中世である。ほかに、古墳時代と想定される土壙もわずかながら認められる。なお、中央南端部付近で遺構が検出されていないのは削平のためと考えている。

第2節 弥生時代の遺構とその遺物

弥生時代の遺構には竪穴住居跡4棟のほか、木棺墓・溝などがある。竪穴住居跡はすべて円形で、A地区では3棟、B地区で1棟検出したが、それらの位置はすべて丘陵裾部にあたり、B地区南東部や西部のやや広い平坦部では検出されなかった。時期は出土土器から、いずれも中期後半と思われる。

(1) 竪穴住居跡

S H - A 1 図版30 巻頭図版11 写真図版33・34・37

位置および検出状況

A地区西部で検出した。住居の壁は削平のために遺存しておらず、斜面上側の周壁溝のみ残存していた。柱穴および中央土壙が認められ、柱穴の位置から推定される住居の範囲内に後述の木棺墓・溝が存在していることから、それらとは重複・先後関係にあり、土層の観察により本住居が先に構築されていたことが判明している。

埋土

検出時においてすでに、住居跡内外での高さの差がなくなっていたことから、埋土の状況は観察できなかつた。

形態・規模

前述のように、本住居跡は削平を受けていたために、残存している部分は少なかつた。ただし、南側に一部残存する周壁溝の形状と柱穴の配置から、円形であったことが判断できる。その規模は、南側では主柱穴から周壁までの距離が約1mであることから、北側でも柱穴と壁とが同じ間隔であると仮定するならば、直径約6.8~7.0mであったと推定される。

柱穴

柱穴は本住居跡の範囲内に数多く検出されているが、本竪穴住居跡に伴うと考えられるのは6基である。いずれも円形～楕円形の掘り方のもので、柱痕も円形であった。柱穴掘り方の直径は25~30cmで、柱痕の直径は15~20cmである。柱穴掘り方の検出面からの深さは12~34cmであった。柱穴間の距離では、S P-A07~S P-A09間が最も狭く1.65m、最も広い柱間は北に面した部分で、2.67mである。

屋内施設

屋内施設には、南側に残存した周壁溝と中央土壙（SK-A2）が認められる。

周壁溝

周壁溝は幅20cm程度、検出面からの最大深13cm、長さ約4mにわたって検出できた。周壁溝底のレベルは標高116.03mであり、それ以下に削平されていた北部では検出できなかつた。なお、周壁溝の西側は後述の溝SD-A1によって切られている。

中央土壙（SK-A2）

中央土壙はSK-A2と遺構番号を付したもので、長径95cm、短径53cmの平面楕円形を呈し、深さは16cm、底は平らに近く、断面形状は逆台形であった。埋土は10YR1.7/1黒色で、色覚的には黒褐色を呈していた。極細粒砂～細粒砂で、粗粒砂を少量含んでいた。埋土からは弥生土器が出土している。

出土遺物 図版39 写真図版47・48・63

出土遺物の多くは中央土壙から出土しており、壺・底部といった土器のほか、加工痕のある剥片も出

土している。また、柱穴からも土器小片が出土している。土器の特徴から、中期後葉のIV期（但馬第IV様式）に属する。

土器 T-1は中央土壙SK-A2から出土したもので、口径11.8cm、体部最大径16.6cmを測る、やや小型の広口壺である。ほぼ直立する頸部から大きく外反し、短くおさめる口縁部となる。口縁端部は上下に拡張し、端面には2条の回線文を施している。頸部外面は縦方向のヘラミガキ、体部外面は細かい（9条/cm）ハケを施している。体部上半は直線的である。なお、頸部には小さな段が認められる。

T-2も中央土壙から出土した壺頸部～肩部の小片で、櫛描の直線文と波状文が1条ずつ確認できる。

T-3は中央土壙出土の底部で、壺の可能性が高い。体部外面は縦ハケ（8～9条/cm）調整で、底面はケズリを施している。内面の調整は不明である。底径は10.5cmと大型である。

なお、SP-A10柱痕内より中空の高杯脚柱部片が出土しているが、図示できなかった。

石器 T-S1は質の悪いサヌカイトの横長剥片を利用したもので、自然面側からの小さな剥離を施しているようである。横断面は楔形に近い。長さ29.5mm、幅52.0mm、厚さ7.5mmで、重量は9.2gである。

SH-A2 図版30 写真図版37

位置および検出状況

A地区西部の北端で検出したものである。北側の半分以上が水田構築によって削り取られており、その段は60cmの差がある。床面は南側の約1/3が遺存していたにすぎないが、深さはある程度残存していた。

埋土

壁が残存していた部分での埋土を観察すると、3層に分かれており、最下層は壁付近に堆積していたもの（第3層）で、7.5YR1.7/1黒色を呈し、極細粒砂～粗粒砂を含んでいた。その上部に堆積していた第2層は7.5YR2/1黒色で、感覚的には暗褐色を呈し、極細粒砂～細粒砂に粗粒砂を少量含んでいた。最上層の第1層は7.5YR1.7/1黒色で、色覚的には黒褐色を示し、極細粒砂に粗粒砂を少量含んでいた。なお、遺構ベース土（地山）は10YR6/8明黄褐色で、感覚的には黄褐色を示し、極細粒砂で粗粒砂～極粗粒砂を微量含んでいた。

形態・規模

残存部分の形態から、平面円形であることが判断でき、推定径は5m程度の小規模なものとなる。検出面から床面までの深さは最も残存状況の良好な南側部分で16cmを測る。

柱穴

柱穴は1箇所のみ検出したが、主柱穴の本数は不明である。ただし、住居の規模から4本または2本であったことが推察される。掘り方は長径58cm、短径50cmの楕円形で、柱痕も長径30cm、短径20cmの楕円形で、深さは24cmであった。

屋内施設

屋内施設では周壁溝が検出された。中央土壙については床面の残存部分が少なく、存在は不明である。

周壁溝

床面残存部分全体にわたって検出できた。幅は30cm～50cmとやや幅広く、深さは4cm程度と浅い。

遺物出土状況

南側中央部の第3層中から壺体部や底部の破片が出土し、柱穴からも土器小片が出土している。土器

の特徴から、中期後葉のIV期（但馬第IV様式）に属するものと考えられる。

出土遺物 図版39 写真図版48

T-4は埋土から出土した底部小片である。底径は9.0cmと大きいが、器厚は0.6cmと薄い。体部外面はヘラミガキ、内面はナデのようである。

埋土からは、図示できなかった甕体部の破片も出土している。外面には10条/cmの縦ハケを施し、内面は5条/cmの粗いハケ調整で、内面にはオコゲ状、外面には煤が多く付着している。

また、SP-A18の柱痕からも同一個体と思われる甕の小破片が出土している。

S H - A 3 図版31 写真図版33・37

位置および検出状況

A地区東部の調査区南壁に接して検出された竪穴住居跡である。本住居跡も周壁溝の一部と柱穴が検出されたに過ぎず、壁は削平を受けていた。

埋土

削平のため耕土直下で検出され、床面の残存状況も不明となっており、埋土は残存していなかった。

形態・規模

南東側の周壁溝の形状から平面円形であることが判断され、主柱穴と考えられる柱穴と周壁溝外側との間隔が約1mであることから、北側に存在する主柱穴と判断される柱穴の位置により、長径8m、短径7.4m程度の規模であったと推定される。ただし、主柱穴と判断される柱穴のうち、北端のものが外側と内側に存在し、そのいずれとも決しがたいため、内側の柱穴の場合では短径7m程度の円形となる。

柱穴

住居跡の主柱穴と推定されるものは8基存在する。柱穴掘り方の平面形はSP-A17のように長径70cm、短径30cmの橢円形のものも存在するが、直径20cm～40cmの円形のものが大半である。柱痕が確認できたものでは、径15cm～22cmを測る。柱穴の検出面からの深さは16cm～40cmで、SP-A16が最も浅い。

柱穴間距離は1.25m～2.25mであり、おおむね2m前後である。

屋内施設

周壁溝は残存していたが、中央不土壤は検出できず、痕跡も認められなかった。

周壁溝

周壁溝は住居跡南部の一部に残存していた。長さ3.5m程度検出でき、幅は平均30cm、検出面からの深さは最も深いところで6cmを測る。一部2重に検出できた部分がある。斜面下側では自然消滅している。

遺物出土状況

SH-A3から出土した遺物は、SP-A13の柱痕から出土した石斧の1点のみである。住居跡埋土がほとんど残っておらず、削平を受けていたためと思われる。

出土遺物 図版39 写真図版53

T-S2の磨製石斧（扁平片刃石斧）は、残存幅4.7cm、残存長5.05cm、厚さ0.5cmである。刃部は弧状を呈し、片側から刃部を造り出している。側縁の横断面は丸みがあり、3分割して仕上げている。5GY9/1で明緑灰色を呈し、凝灰岩を使用していると思われる。重量は17.4gを測る。

S H - B 1 図版31・33 卷頭図版10 写真図版39・41・42

位置および検出状況

B地区北部の西向き斜面に位置する竪穴住居跡で、北西部は水田構築時と思われる大きな段差によつて削り取られている。また、南東部は中世の溝S D-B 1と重複し、これも削り取られている。なお、周壁溝は一部で残存・検出されたが、壁はまったく残っていなかった。

埋土

住居跡そのものの深さがまったく遺存していなかったため、埋土も不明である、ただし、北西端に近い部分では、黒ボクに近い層(7.5YR3/1黒褐色の極細粒砂)が上部を覆っていた。

形態・規模

南西側に遺存していた周壁溝の形状から、平面は円形であることが推定できる。また、主柱穴と判断できる柱穴をひろってゆくと、5基の柱穴が半円形にめぐることとなる。その柱穴と周壁溝外肩との間隔は約90cmであることから、周壁溝が遺存していない部分についても柱穴からの距離で壁の位置を推定すると、8.4m程度になる。

柱穴

本住居跡に伴うと推定される柱穴は5基存在する。掘り方平面は円形～橢円形であり、橢円形のものでは長径60cm、短径30cm、円形のものでは径40cm(S P-B 23)が最大で、最小は25cmである。柱痕を確認できたものでは、径15cm～22cmである。柱穴の検出面からの深さは、S P-B 23が最大で39cm、他は13cm～31cmである。

柱間はS P-B 23～S P-B 30間が最も広く2.2m、その他は1.65m～2.1mを測る。

屋内施設

屋内施設には周壁溝および中央土壇のほかに屋内床面に溝が存在していた。

周壁溝

南側の一部で検出された周壁溝は、幅約30cm、検出面からの深さは5cm程度であった。長さは3.8m遺存していた。

中央土壇

中央土壇は平面橢円形を呈し、長径125cm、短径78cm、深さ54cmで、断面は逆台形に近い形状を呈していた。埋土は単一層で、7.5YR1.7/1黒色(色覚的には黒褐色)の粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂を少量含んでいた。

屋内溝

屋内溝は中央土壇から壁に向かって放射状にのびており、周壁溝につながるもの、主柱穴までのものなど3条が認められた。幅約36cm、検出面からの深さは4～7cm程度である。

屋内溝のうち、東方向から中央土壇にのびる溝の埋土は、7.5YR2/1黒色(色覚的には黒褐色)粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含んでいる。また、南方向から中央土壇にのびる屋内溝は7.5YR3/1黒褐色(色覚的には暗茶褐色)の極細粒砂～細粒砂で、中粒砂～粗粒砂を少量含んでいた。

溝の機能としては間仕切りのための施設といったことが考えられるが、一部、分岐する溝も存在することから、一概には言えないようである。

遺物出土状況

中央土壇脇のS P-B 24部分から壺口縁部が出土しているが、本住居跡に伴うかどうかの判断はでき

ない。また、そのほかには図示できる遺物は出土していない。

出土遺物 図版39 写真図版48

S H-B 1 出土の遺物には、中央土壙脇の S P-B 24 から出土した壺口縁部 1 点が図示できたにすぎない。時期はやや不確定であるものの、付近の遺構の状況なども考慮して、弥生時代中期後葉のIV期と推定される。

T-5 は口径14.3cmを測る壺口縁部で、器表の磨滅が著しい。口縁端部は上方に拡張していた部分が剥離した可能性があり、口縁端部上面に黒色化した部分が認められる。

(2) 墓・土壤

S X-A 1 図版32 卷頭図版II 写真図版34~36

位置および検出状況

A地区西端の中央部で検出した長方形の土壙である。堅穴住居跡 S H-A 1 と位置的に重複しているが、その前後関係は確認できなかった。ただし、後述の溝 S D-A 1 が S H-A 1 より新しいことが判明しており、S X-A 1 と S D-A 1 が一連の遺構であるとすると、S H-A 1 よりも後出することになる。なお、土壙の遺存状況は良好であった。

形態・規模

墓壙の平面形状は長方形を呈し、長軸207cm、短軸105cmで、検出面からの深さは60cmを測る。墓壙底部は平坦で、肩から垂直に近いかたちで落ちており、断面形は「コ」字形に近い。棺は腐朽のため遺存していないことから、木棺であったと考えられ、西側では長側板が外側にはみ出していたことから、いわゆる「H」形木棺であったと推定される。棺の外長は126cm、幅47cmであろう。棺検出面からの深さは55cmを測る。棺底は西側がやや高く東側に下がっている。このことから、被葬者は西枕であった可能性も考えられる。

埋土

埋土は大きく棺内埋土と墓壙埋土に分けられる。棺内埋土は棺蓋の普及に伴い上部から落ち込んだ状況を呈しており、黒褐色と茶褐色および茶灰色系の埋土であり、極細粒砂～細粒砂である。下部には黄褐色系の混じりも認められることから、一部棺壁外側の墓壙埋土が落ち込んだようである。

墓壙埋土は人為的に埋めたものであり、黄褐色系の地山土が混じったものが多いが、黒褐色系の黒ボクに近いものや茶灰色系も混じっていることから、構築時の旧表土や表土下に含まれていたであろう黒ボクも一緒に混じった土で埋められたようである。埋める際には何處かに分けて水平に固めながら行なわれた状況が看取できる。なお、墓壙底と棺底の間には2cm～5cmの厚さに明茶褐色(10YR5/4にぶい黄褐色)の極細粒砂～極粗粒砂が敷かれていたことから、棺底を水平にするために埋められたものであると思われる。

遺物出土状況

棺内より壺小片が出土したのみである。

出土遺物

図示できなかつたが、弥生中期土器壺頸部の小片が棺内から出土している。頸部には断面三角形の貼付突帯が2条残存している。調整痕は磨滅のため確認できない。

SK-B10 図版33 卷頭図版11 写真図版39

位置および検出状況

B地区北東隅に近い部分で検出した長方形の土壙である。溝SD-B8と重複し、本土壙のほうが古いようである。また、柱穴とも重複しているが、柱穴のほうが新しい。土壙の残存状況は、大きく削平を受けているため、悪い。

埋土

埋土は10YR2/1黒色（色覚的には黒褐色）の極細粒砂で、中粒砂～粗粒砂を少量含んでいた。

形態・規模

平面は長方形で、長軸128cm以下、短軸75cmの規模であるが、深さは10cmしか遺存していなかった。形状から墓の可能性が高いが、棺の痕跡を見出すことはできなかった。

遺物出土状況

土壙内南側には10cm～20cm大の弥生土器甕等の破片が検出されたが、その出土状況からは機能を推定することはできなかった。

出土遺物 図版39 写真図版47・48

T-6は南部から出土した弥生土器甕である。口径21.6cm、体部最大径22.3cm、残存高23.5cmを測る。口縁端部は面をもつが、器表磨滅により詳細部分は不明である。体部外面下半には黒斑および煤が付着している。外面には9～10条/cm程度の目の細かい縦ハケを施している。内面の調整は不明である。弥生時代中期後半の所産であるが、詳細時期は不明である。

T-7は壺と思われる底部片である。径8.8cmの平底から横外上方にのびる体部をもつ。体部外面にはヘラミガキを施している。内面は刷毛調整である。弥生時代中期中頃の所産である可能性が高い。

（3）溝

SD-A1 図版32 卷頭図版11 写真図版34・35

位置および検出状況

A地区の西端に近い位置で検出した溝状遺構である。北側約2.7mの位置には木棺墓SX-A1が存在し、主軸方向が木棺墓SX-A1と同一であるため、関連性が高いものと思われる。また、溝の両端の範囲内に木棺墓が位置していることから、これらをセットとして周溝墓と考えることもできよう。なお、溝の形状からも周溝墓の特徴を示している。なお、溝の残存状況は良好である。

形態・規模

全長5.8m、幅60cm～90cmで、中央東寄り部分が最も深く、検出面からの深さ75cmを測る。その部分から東側へは徐々に浅くなり、検出面に至る。最も深い部分から西側は、溝中央部で一度段を有し、そこから西側へは徐々に浅くなる形状である。横断面の形態は、最も深い部分では「V」字形に近い「U」字形で、他の部分では「U」字形を呈している。横断面の形状は山側の傾斜が斜面下側よりも急になってしまっており、周溝墓の周溝によく見られる形状を示している。

前述のように、この溝と木棺墓SX-A1とで周溝墓と判断した場合、溝が1箇所しか掘られていないことになり、疑問が残る。ただし、本溝と木棺墓の位置関係などにより、密接な関係にあることが推定できるため、ここでは方形周溝墓の変形タイプとしてとらえておくことにしたい。

埋土

埋土は4層に分けられたが、主として山側から堆積した状況が窺え、溝壁が崩れて落ち込んだ状況を示す土層も認められた。斜面下側からの流入が斜面山側よりも少ないと想われるが、仮に周溝墓とした場合、方丘部の盛土が低かったことを示しているものと思われる。木棺の遺存状況が良好であったことからも首肯できよう。

遺構ベース土となっているのは、上面では色覚的には暗黄褐色の極細粒砂～細粒砂であるが、その下部15cm～20cm程度以下では、軟質の花崗岩盤となっていた。

遺物出土状況

溝検出面から弥生土器高杯脚部が出土した。

出土遺物 図版39 写真図版48

T-8は高杯脚部片である。脚端部は上方に拡張し、端面中央には凹線文状の窪みを有する。脚端径は14.6cmである。脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整である。弥生時代中期後葉の所産と思われる。

SD-A2 図版28 写真図版34

位置および検出状況

A地区北西隅付近で検出した溝状遺構である。東端は段差により消失している。

埋土

埋土は10YR2.5/2黒褐色（色覚的には暗茶褐色）の極細粒砂～細粒砂に中粒砂～細礫を少量含んだものと、10YR1.7/1黒（色覚的には黒色）で極細粒砂～細粒砂がそれぞれブロックとなって交じり合ったものであった。

形態・規模

残存する平面形状は「L」字形で、斜面下側は自然消滅している。東西方向の長い部分で5.3m、北側に折れた短い部分は1.4mの長さまで確認できた。溝幅は45cm程度、検出面からの深さは15cm程度である。

遺物は出土しなかったが、埋土から弥生時代～古墳時代に属する可能性が高いものと思われる。また、住居跡の周壁溝の可能性も捨てきれない。

SD-B7 図版33 写真図版38・39

位置および検出状況

SD-B8とともにB地区北東端付近で検出した。斜面上側のSD-B8とは同一方向である。北東端は自然消滅し、西端は段差により消失している。

埋土

10YR1.7/1黒色（色覚的にも黒色）の極細粒砂で、中粒砂～粗粒砂を少量含む埋土であった。

形態・規模

「L」字形に折れ曲がる平面形を呈し、幅50cm前後、深さ20cm程度である。その形状から、SD-B8とともに住居跡の周壁溝である可能性も捨てきれないが、深さが深い点で否定的にならざるを得ない。

遺物出土状況

主として溝の南部で、底から約10cm浮いた状態で土器片と石斧片が出土した。

出土遺物 図版39 写真図版47・48・53

弥生土器

T-9・T-10は弥生土器甕口縁部である。T-9は口径22.0cmを測るが、細片のためやや不正確である。口縁部は体部から「く」字状に曲折し、外上方に短くのびる。口縁端部は上方に若干拡張しているようであるが、断定はできない。体部外面は6~7条/cm単位の縦ハケで、屈曲部から約1cm幅部分に横ナデを加えている。体部内面は同単位のハケを斜横位に施している。T-10は口径の約半分で、肩部まで残存している破片である。口縁部は「く」字形に曲折し、外上方に短く直線的にのびる。口縁端部は平坦な面をもっているようであるが、磨滅のため確認できない。口縁部中央下部は下方にやや膨らんでいる。なお、端部の上方拡張の痕跡は認められない。口径14.4cmで、残存部分での体部最大径は14.7cmである。体部外面には6条/cm単位の縦ハケを施し、屈曲部から約2cm幅部分に横ナデを加えている。口縁部下面および体部外面には煤が付着している。体部内面には右斜め上方向に6条/cm単位のハケを施している。T-9・T-10とともに弥生中期後半の所産であるが、Ⅲ期あるいはⅣ期のいずれかの限定はできない。ただし、T-9はⅣ期初頭頃の可能性が高いと思われる。

T-11は直口壺の口縁部片である。2.5YR5/8明赤褐色を呈し、端部内端での口径は15.4cmを測る。口縁端部は水平な平坦面を呈し、内側に少し拡張している。外面には8条/cmの縦ハケ、内面はナデ調整のようである。中期中葉第Ⅲ期（但馬第Ⅲ様式）の所産と思われる。

T-12~T-14は底部である。T-12は底径7.2cm、外面がヘラミガキ調整であることから、壺の底部の可能性が高い。内面はハケ調整であるが、器表剥離により残存部分が少なく、単位等は不明である。

T-13は底径5.0cmのやや突出気味の平底を有し、外上方にあまり広がらない体部となる。体部外面は細かい目で幅1.3cm程度の縦ハケを、板ナデあるいはヘラケズリ条に施しており、底面から5cm以上に煤が付着している。内面は上方向へのヘラ削りにより、薄く仕上げている。中期後葉である第Ⅳ期の可能性が高いが、後期前半（第Ⅴ期前半）の可能性もある。なお、残存部分での体部最大径は14.3cmを測る。

T-14は底径6.0cmの平底小片である。磨滅のため内外面の調整は不明である。形状から、中期中葉（第Ⅲ期）の可能性が高い。

石 器

T-S3は磨製石斧（大型蛤刃石斧）であるが、刃部を欠失する。調査時には小片の出土が確認できたのみであったが、翌年度の芝花古墳群調査時に排土中より採集されたものと接合した。排土中出土のものは出土位置・遺構および層位等が不明であるが、SD-B7出土遺物として報告する。花崗岩に似た石材を使用し、表面を平滑に磨き上げている。横断面は梢円形を呈し、基部に近い部分では長径5.0cm、短径4.5cmを測り、刃部に近い位置では長径6.1cm、短径5.0cmである。刃部につながる平坦面が一部で確認できる。残存長は11.15cm、残存重量は560gを測る。

SD-B8 図版33 写真図版38・39

位置および検出状況

SD-B7とともにB地区北東端付近で検出した。斜面下側のSD-B7とは同一方向である。北東端は調査区外の道路下にのび、西端はSK-B1と重複するとともに、傾斜により自然消滅している。

埋土

10YR1.7/1黒色（色覚的には黒灰色）の粗粒シルト～極細粒砂で、中粒砂を少量含む埋土1層であった。

形態・規模

検出できた部分の平面形状は「L」字形を呈し、幅30cm程度、検出面からの深さは20cm前後を測る。形状から竪穴住居跡の周壁溝のようにも思えるが、溝で囲まれた範囲内には竪穴住居跡の主柱穴と判断できるものは認められなかった。なお、南東側および南西側に柱穴列が存在するが、柵列のようなもののが存在していた可能性がある。

遺物出土状況

埋土からは土器は出土せず、棒状石製品のみ認められた。遺物および遺構の時期は不明であるが、SD-A 2やSD-B 7と類似していることから、それらと同じく弥生時代の所産と推定される。

出土遺物 図版42 写真図版54

T-S 10は磨石あるいは砥石の可能性がある棒状の石製品で、一辺4cm程度の角が丸い四角柱状に近い形をしているが、側面では明瞭に砥面となっているところは見当たらない。端部にも明瞭な敲打痕は認められないものの、磨ったような痕跡ともとれる摩滅部分が両端に認められる。全長130.0mm、最大幅43.5mm、厚さ31.5mm、重量は240gである。

(4) 柱穴

S P - A 03 図版30 写真図版34

位置および検出状況

竪穴住居跡SH-A 1の範囲内に存在する柱穴である。竪穴住居跡との関係は不明であるものの、主柱穴である可能性も捨てきれない。

形態・規模

平面はほぼ円形を呈し、掘り方の直径は26cm、検出面からの深さは28cmを測る。柱痕を検出することはできなかった。

遺物

埋土中より弥生土器壺口縁部が出土している。図示できなかつたが、頸部の直径10cmを測る広口壺で、口縁端部を欠失する。外面は4~5条/cmの縦ハケ調整、内面は横ナデを施している。弥生中期後半の所産であろう。

S P - A 14 図版31 写真図版33

位置および検出状況

竪穴住居跡SH-A 3内の北部に存在する柱穴であるが、住居跡との関係は不明である。

形態・規模

平面はやや楕円形を呈し、掘り方の直径は23cm、深さ12cmを測る。柱痕は一辺20cm前後の方形に近い形を呈する。

遺物

図示できなかつたが、甕あるいは壺口縁部もしくは高杯等の脚端部と思われる小片が柱痕理土から出土している。口縁端部は面をもち、中央に1条の凹線を施している。小片のため時期を決定することは難しいが、弥生時代の所産であることは間違いないと思われる。

ただし、この土器が柱穴の時期を示すか否かは不明といわざるを得ない。

第3節 古墳～奈良時代の遺構とその遺物

古墳～奈良時代と想定される遺構は非常に少なく、B地区で確認できた土壙2基に限られる。

S K-B06 図版34 写真図版42

位置および検出状況

B地区西端で検出した土壙であるが、西部は調査区外にのびているようであったが、西隣の古墳調査の際には検出できなかつたことから、本調査区内でおさまっていることが確認できた。ただし、西部の形状は不明である。

形態・規模

平面形は全容を知り得ないが、矩形に近いものと推定される。検出できた部分の東西方向短軸規模は2.0m、南北の長軸方向では2.5mを確認できた。検出面からの深さは24cmしか遺存しておらず、底は平坦であった。

柱穴と重複しているが、柱穴が後出する。

埋土

埋土は単一層で、7.5YR3/1黒褐色（色覚的には暗褐色）の極細粒砂～細粒砂に中粒砂～粗粒砂含んでおり、SK-B07と同色・同質の埋土である。

遺物出土状況

土壙内中央部の埋土中から土師器高杯片が出土している。

出土遺物 図版40 写真図版47

T-15は土師器高杯であるが、脚端部を欠失する。口径は16.8cmであり、杯部は深く内底面まで7.7cmを測る。杯部は有稜高杯の形態を示すが、稜は鈍く丸みがある。脚部は「ハ」字状に開いた後、屈曲してさらに開く形態のようである。脚柱部は中空となっている。残存高は13.3cmを測り、焼成は不良でもなく、器表は全く残っておらず、調整は不明である。7.5YR8/6浅黄橙色を呈する。

S K-B01 図版34 写真図版41・42

位置および検出状況

B地区東部中央南寄りに存在した円形に近い土壙である。

形態・規模

平面は円形～椭円形を呈し、東西方向の長径は5.0m、南北の短径は3.9mを測る。底部は凹凸が多いが、概ね南東側が最も深い插鉢形の断面形を示す。検出面からの深さは最深部分で1.04mである。いくつかの柱穴等と重複しているが、いずれも柱穴等の方が新しい。

埋土

埋土は、概ね、黒ないし黒褐色系の第1層・第2層と黄褐色～黄橙色系の第3層・第5層～第9層に分けられる。埋土の大半を占めるのは第1層の7.5YR1.7/1黒色（色覚的には黒褐色）で、下部の第5層は地山の土壤化層、第6層は砂層であることから、土壤底付近は滯水していた可能性が高い。

遺物出土状況

土壙内中央部の第1層下端付近より奈良時代初期の須恵器長頸壺破片が出土し、第1層を中心とした

埋土から弥生土器・土師器片が出土している。

出土遺物

出土遺物には弥生土器・土師器などがあるが、最も大きな破片はT-22の須恵器長頸壺である。

弥生土器 図版40 写真図版49

T-16は口径12.4cmの小型甌口縁部である。直線的な肩部から「く」字形に外上方に外折し、短くおさめる口縁部を呈する。端部には面をもっているが、拡張はしていない。体部内面は横方向のヘラケズリ調整で、外面には縦ハケの痕跡が若干残っている。二次焼成を受けているものと思われ、2.5YR6/6橙色を呈する。

T-17は大型広口壺口縁端部の小片である。口縁端部は主として下方に拡張し、平坦な端面にはヘラ描斜格子文を施している。弥生中期Ⅲ期（但馬第Ⅲ様式）に属する。小片のため口径は不明である。

T-18は壺肩部の小片で、半截竹管による斜格子文を描き、その下部には直線文を施している。体部内面は9条/cm単位のハケを施している。器厚および破片の状態から、あまり大きな壺とはならないようである。

T-19～T-21は弥生土器底部片である。T-19は底径9.0cmを測り、直立気味の体部となっている。内面はヘラケズリを施している。T-20は底径6.4cmで、体部外面は縦ヘラミガキ調整となっている。内面はヘラケズリとも思われるが、磨滅により確認できない。T-21は軟質で、調整痕は残っていない。底径は5.7cmである。

須恵器 図版40 写真図版47

T-22は長頸壺であるが、底部を欠失する。口縁部はラッパ状に開き、端部はさらに横外方に引きのばす。口径は12.2cmを測る。肩部は鋭く屈曲し、稜線の上下に各1条の沈線を施したようになっている。体部最大径は肩部にあり、18.2cmである。体部下半外面はヘラケズリのち回転ナデ調整となっている。なお、底部付近には高台が貼り付けられていた痕跡が残っている。残存高は23.0cmを測り、上半部には灰釉が付着している。体部の特徴および平城宮S D 1900下層出土土器に類例が存在することから、平城宮1の時期と判断できる。

土師器 図版40 写真図版49

T-23は土師器杯または皿の破片で、口径は10.9cmである。内外面の調整痕は残存していない。残存高は2.7cmを測る。平安時代以降の可能性が高い。

T-24は土師器高杯または鉢、もしくは杯あるいは皿の口縁部片である。口径は13.6cmを測る。内湾気味の体部から屈曲気味に一度立ち上がった後外反し、短くのびる口縁部となっている。端部は丸くおさめているようである。外面には煤の付着がみられ、内面は横ナデ調整である。中世より前の所産と思われるが、時期不明である。

第4節 平安時代以降の遺構とその遺物

平安時代以降の遺構は、時期が確認できたものだけでも獨立柱建物跡・溝・土壙・柱穴・谷状遺構といった多くの種類・数量が検出された。また、A・B両地区に存在する時期不明の遺構の多くが、当該時期である可能性が高いと考えられる。ただし、ここでは時期が判明あるいは推定できるものに限定し、時期不明の遺構は後節で記述する。

(1) 掘立柱建物跡

S B - B 1 図版35 写真図版42

位置および検出状況

B地区西部の北端で検出した掘立柱建物跡である。検出できた南北規模は1ないし2間であるが、調査区北端が段差で削り取られているため、確定できない。

形態・規模

東西4間で、南北1ないし2間の側柱建物跡で、東西棟である。東西両端については確定しているものの、南北方向についてはさらに北側にひろがっている可能性もある。検出された状況からは東西が棟方向になるものと判断され、その柱穴中心での規模は9.0m～9.05m、梁方向は3.0m～3.23mを測る。梁方向は座標北を基準にN 5° 30' Wであり、磁北より1° 40' 東側に振れている。なお、真北からは5° 11' 西側に振れている。

柱痕が確認できたものが少ないため柱穴中心で測定した各柱間のうち、桁方向では2.10m～2.60mの間であり、西から2間目の柱間が南北ともに広く、2.58m・2.60mである。その他の棟方向の柱間では2.10m～2.23mの間におさまる。

梁方向では、1間であるのか2間なるのかは確定できないが、2間の場合の西側では、1.35mと1.65mとなる。同様の東側では北から1.10mと2.13mとなる。

柱穴は楕円形～円形を呈するものであり、楕円形では長径50cm、短径38cmのものがあり、円形では25cm～45cmのものまで認められる。柱痕を確認できたものは少ないが、いずれも円形もしくは円形に近いもので、直径13cm～25cmのものまで認められる。

柱穴の深さは浅いもので12cm、深いものでは55cmのものまで存在し、ばらつきが多い。

なお、本建物跡の長軸と似た方向の柱列が建物内南寄り部分を貫いている。柱穴は7基認められ、柱穴中心での柱間は2.10m～2.70mである。柵列のようであるが、S B - B 1との前後関係は不明である。

遺物出土状況

建物跡に伴う柱穴の一部から遺物が出土している。S B - B 1から土器が出土した柱穴は、南側中央に位置するS P - B 02、北西部に位置するS P - B 03、北東部のS P - B 04、南西部のS P - B 11がある。これらのうち、S P - B 02からの出土量が最も多い。

S P - B 02では柱痕上部から土師器・須恵器片がまとまって出土した。S P - B 03の柱痕下部からは、土師器托の完形品が底部を上にした状態で出土した。S P - B 04の柱痕の端に近い位置からは土師器皿片が出土している。出土した深さは柱痕のほぼ中央部である。柱の裏込めの中に入れられたか入ったものと思われる。なお、S P - B 11の柱痕からは弥生土器口縁部片が出土している。

出土遺物 図版40 写真図版49・50

S P - B 02出土土器

S P - B 02から出土した土器にはT-25～T-28の土師器・須恵器があり、S B - B 1関係の遺物としては最も多い。

T-25は外面全面に厚く煤が付着している大型の鉢である。口縁部は体部から緩やかに外反しただけで、明瞭な境は確認できない。口縁端部は外傾する面をもつ。外面の調整は縦ハケのようであり、内面は3条/cm単位の太筋横ハケを施している。口径は35.2cmを測る。平安時代末も含めた中世の所産であろう。

T-26は須恵器碗の破片である。口径14.8cmを測り、底部はやや突出する平底になるものと思われる。器高は4.8cmで、径高指数（器高÷口径×100）は32と低いもので、須恵器碗としては新しい時期のものと思われる。口縁部外面には幅約1cmの重ね焼きの痕跡が認められる。柱痕から出土している。

T-27は底部中央に孔を穿った、托と呼ばれるものであろう。突出した径6.0cmの平高台は回転糸切りとなっている。体部はほとんど残っていないが、T-30のような形態であると思われる。2.5Y8/2灰白色を呈し、柱痕から出土したものである。

T-28は甕口縁部である。口径19.2cmを測り、「く」字形に曲折して外上方に短くのびる口縁部となる。口縁端部付近はやや内湾し、端部は外側がやや丸く内側につまみ上げたようになっている。外面は5条/cm単位の縦ハケ、口縁部内面も同原体による横ハケ、体部内面は左斜め上方向のハケであるが、同一原体によるものと思われる。体部へ口縁部外面には所々に煤が残存している。弥生土器の可能性もあるが、中世の所産としておきたい。柱痕最下層から出土したものである。

SP-B03出土土器

SB-B1 北西部のSP-B03から出土した土器にはT-29・T-30の土師器があり、ともに托と思われる。T-29は口縁部の破片であるが、外上方に直線的にのびる口縁部で、端部が薄く尖るようになっている。口径は15.1cmを測り、10YR8/3浅黄橙色を呈している。柱痕から出土している。

T-30は接合により完形品となった托である。口径15.1cm、器高5.0cmを測り、突出する平らな高台径は6.4cmを測り、底部は回転糸切りとなっている。底部中央には貫通する孔が穿たれ、上側の孔の直径は約4mm、下側では2.5mm程度となっていることから、孔は上から穿たれたものと思われる。内面の底部付近ではいちど屈曲する。外面にはロクロ目が顕著に残る。柱痕から出土したものである。

SP-B04出土土器

T-31は柱痕から出土した土師器小皿である。口径9.0cm、器高1.4cm、底径6.0cmを測る。底面は回転糸切りとなっている。底部の器厚は7mmと厚い。10YR8/3~8/4浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

SP-B11出土土器

南西部のSP-B11柱痕からはT-32の弥生土器広口壺口縁部片が出土している。磨滅が著しく、器表は全く残っていない。口径は23.7cmとなり、口縁端部は上下に拡張しているようであるが、上部が剥離しているために確認できない。口縁端部は平坦面をなすが、文様等は認められない。弥生中期中葉の所産と考えられるが、確定できない。

(2) 墓・土壙等

SX-B1 図版35 写真図版44

位置および検出状況

B地区のほぼ中央部、谷状遺構の南端に近い位置で検出した不定形の土壙である。

形態・規模

主軸方向を北北西—南南東にとる長方形に近い歪な形態の土壙であり、南北2基が重複している可能性もある。北端の肩は谷状遺構に削られているため、不明確であるが、北側の土壙の長軸規模は推定1.6m、短軸は70cm前後である。南側の土壙は後出と思われる北側のものと重複しているため全容は窺い得ないが、長軸1.1m以上、短軸70cm前後の規模である。また、南北両者を合わせてひとつの土壙とした場合には、推定全長は2.55mとなる。

形状および遺物の出土状況から墓と推定しているが、2基の重複か单一の墓であるかの断定はできない。ただし、規模の点や礫も含めた遺物の出土状況から、2基の墓跡である可能性が高いと思われる。

埋土

埋土は単一層で、10YR1.7/1黒色（色覚的には黒褐色）の極細粒砂で、細粒砂～粗粒砂を少量含む。

遺物出土状況

土器は西側辺に沿って須恵器と土師器小皿が並んだ状態で出土した。北から土器3として取り上げた須恵器碗（T-33）が正立状態で、土器2で取り上げた須恵器碗（T-34）が底部を上にして、土器1で取り上げた土師器小皿（T-37）が正立状態でそれぞれ出土した。また、南側では土器4として取り上げた土師器で小型の托もしくは卓上型皿（T-36）がやや傾いて出土し、ほかに埋土中から白磁皿の口縁部片（T-38）が出土している。

また、土壇内北側に偏って10数点の角礫が底からやや浮いた状態で検出された。礫の大きさは35cm×20cmのものが最も大きく、10cm×5cmのものが最も小さい。大きな礫は土壇内で2～3列に並んだようにもみえ、上面の高さもほぼ一致していたが、その機能については不明である。

出土遺物 図版40 卷頭図版14 写真図版49・50

S X-B 1からはT-33～T-38に図示した須恵器碗、土師器托・小皿、白磁小皿が出土している。

T-33～T-35は須恵器碗である。T-33は口径16.3cm、器高4.2cm、底径4.9cmを測り、底部は回転糸切りとなっているが、突出しない。径高指数は26で、鎌倉時代の所産と思われる。焼成は良好である。出土時の土器3である。T-34もT-33と同様の形態で、径高指数は28である。口径は15.8cm、器高4.5cm、底径は5.8cmを測る。底面は回転糸切りで、外面全体に自然釉がかかる。焼成は良好である。出土時の土器2である。T-35は口縁部の破片である。口径は16.2cmでやや厚手のつくりとなっている。口縁部には重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。出土時の土器2に含まれていた。

T-36は出土時の土器4である、土師器で小型の托もしくは卓上型皿である。口径は9.6cm、器高3.4cm、高台部は部分的に欠損するが、底径4.5cm程度と思われる。底面は回転糸切りとなっている。杯部は中央が大きく窪む形態であり、托に似ている。口縁端部は丸いが、上方に少しつまみ上げたようになっている。杯部外面下部にはロクロ目が顕著に認められる。

T-37の土師器小皿は底部回転ヘラ切りで、外面の底部と口縁部の境は稜をもつ。底径は6.2cmを測る。口径は8.2cm、器高1.5cmで、焼成良好の完品である。出土時に土器1で取り上げたものである。

T-38は白磁皿の口縁部で、口径は10.8cmと小型である。体部は丸みをもつ。口縁部端部はやや丸みのある面をもち、外上方に引き伸ばされている。残存高は2.0cmで、5Y8/2灰白色を呈する。

S E-B 1 図版38 写真図版42

位置および検出状況

B地区中央部やや西寄りで、谷状構造の西隣に接するかたちで存在する円形の土壇である。

形態・規模

平面はほぼ正円形を呈し、直径は1.7mである。検出面からの深さは88cmを測り、底部は平坦・水平で、壁は垂直に近い。形状から溜め井戸の可能性が高いと判断できよう。なお、遺物は全く出土しなかった。

埋土

埋土は大きく2層に分けられ、黒褐色系の上層と黄褐色ないし黄灰色系の下層である。下層は地山土

をブロック状に多く含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

S K - B 02 図版38 写真図版43・45

位置および検出状況

B地区中央北部に所在し、谷状遺構と重複した円形の土壙で、谷部よりも新しく構築されたものであることが断面観察により判明している。

形態・規模

平面は直径2.2mの円形に近いもので、検出面からの深さは46cmを測る。断面形は皿状に近く、壁面の傾斜は緩やかである。底部は平坦であるが、その部分は南北1.4m、東西1.1mの梢円形に近い。

埋土

埋土は2層に分けられ、上層は7.5YR3/1黒褐色の極細粒砂～細粒砂で、東側に向かってやや傾斜して堆積している。下層は7.5YR1.7/1黒色（色覚的には暗黒褐色）の極細粒砂で、下層堆積土の色調の方が暗い。また、下層は主として西側から堆積していることが窺え、SD-B2やSD-B3によって谷状遺構埋土を削って供給された可能性が高い。

遺物出土状況

上層埋土に少量の土器片が含まれていたが、下層では上面に角礫～亜角礫を数点含んでいた。

出土遺物 図版40 写真図版49・54

S K - B 02から出土した遺物のうち図示できたものには土師器杯または皿と、砥石または礎石がある。

T-39は口径12.0cm、器高3.4cmを測る杯または皿である。体部は丸く、口縁端部も丸くおさめている。器表磨滅のため調整痕は残っていない。

T-S4は安山岩のような石材製の砥石または礎石片である。1面のみ表面がやや平滑となっているが、凹凸が多い。側面には自然面を残すが、その他は破面となっている。残存長17.7cm、残存幅9.8cm、残存厚9.2cmで、残存重量は1,840gを測る。

S K - B 03 図版38 写真図版45

位置および検出状況

B地区北西部に位置し、掘立柱建物跡S B - B 1の東端で建物跡と重複して存在する土壙である。中央部には柱穴が重複して存在し、柱穴の方が新しい。S B - B 1の梁間を2間とした場合、本土壙は掘立柱建物跡よりも先行することになる。一方、梁間1間の場合には掘立柱建物跡と同時存在の可能性が生じる。遺物は出土しなかった。

形態・規模

平面形は梢円形もしくは豆形に近く、長軸2.65m、短軸1.35mを測る。検出面からの深さは最も深い部分で53cmを測る。横断面は皿形に近いが、柱穴が存在する中央部ではかなり歪な形となっている。

埋土

埋土は3層に分けることができ、最下層は砂層であることから、滲水していた可能性が高い。埋土の大半は黒褐色・暗褐色の極細粒砂である。

S K - B 04 図版38 写真図版45

位置および検出状況

B地区南西隅付近に位置する円形の土壙である。周囲2mの範囲内には他の遺構は認められず、単独で存在する遺構である。遺物は出土しなかった。

形態・規模

平面は直径1.36mのほぼ円形を呈し、深さ46cmを測る。底面は径50cm程度の円形を呈し、平坦である。壁は垂直に近い部分と法面幅が55cmと緩やかな部分がある。

埋土

埋土は基本的にブロック状堆積土ばかりとなっており、人為的に埋められたものと判断される。このような埋土の状況を示すものには井戸が多いため、本遺構も溜め井戸である可能性を考えておきたい。

S K - B 07 図版29

位置および検出状況

B地区西部中央に位置し、柱穴S P - B 01と一部重複して存在している。本土壙の方が古い。

形態・規模

平面は北東一南西に長い橢円形状を呈し、長径100cm、短径56cmを測る。底面は平坦に近く、検出面からの深さは10cmである。図示できる遺物は出土しなかった。

埋土

7.5YR3/1黒褐色（色覚的には暗褐色）の極細粒砂～細粒砂に中粒砂～粗粒砂含む層が堆積しており、S K - B 06と同一埋土であった。

（3）谷状遺構・溝

谷状遺構は、谷を流れる水路を拡幅したものと思われ、規模もやや大きいものである。また、B地区を中心として数多くの溝が検出されており、排水が必要であった状況が地形からうかがえる。

谷状遺構 図版36 卷頭図版13 写真図版43

位置および検出状況

B地区中央部で検出した谷状遺構は、地形的に最も低い谷部分を流れる流路でもある。調査区の範囲内では南端までは続かない。北方向では、調査区からさらに北西方向が谷状地形となっていることから、そのまま北西方向に流れ、三保川へと続いているようである。

形態・規模

谷状遺構の東肩は明確に落ち込んでいるが、西肩はあまり明瞭ではなく、緩やかに落ち込むかたちとなっている。また、北部では大きく削り取られるかたちとなり、約70cmの落差がある。その部分から北側の状況は、調査区外にあたるため不明であるが、周囲の地形から勘案すると、水田の山側肩部につながっているようである。

また、南側の不明瞭な肩は、山側を「く」字形に削って平坦面を造り出した畠状遺構基盤へとつながっている。

谷状遺構内には前述のS K - B 02をはじめSD - B 3が存在し、重複しているが、どちらについても谷状遺構が先行しており、谷状遺構が埋まった後に掘削されたものである。一方、北東側にはSD - B

1、南西側にはSD-B2が存在しているが、後述のように、2条の溝は同一の遺構である可能性が高く、谷状遺構により途切れているものの、もとは谷状遺構部分を貫通した1条の溝であったと判断される。したがって、SD-B1・B2は谷状遺構およびSK-B02に先行する溝であると判断できる。なお、南部に存在するSX-B1については、谷状遺構と重複しているようであるが、先後関係は不明である。

谷状遺構の規模は、南北12.5m、東西8.5mの範囲に検出され、平面は概して楕円形に近い。また、南東部には径約5mの円形に落ち込む部分があり、東側の谷状遺構肩から最深部までの深さは1mを測る。ただし、この最深部はSK-B01のような土壌であった可能性もある。なお、他の部分の谷状遺構底部は比較的平坦となっている。

埋土

谷状遺構横断方向の埋土土層断面を観察すると、埋土は12層に分割できたが、それらは大きく3つに分けることができる。すなわち、最下層である、底面付近の黒褐色・黄褐色・乳灰色（いずれも色覚による—以下同じ）を呈する土層、暗褐色を呈する極細粒砂を中心とした中層、黒褐色を呈する粗粒シルト～極細粒砂の上層の3層である。最下層を詳細に観察すると、砂層（第11層）やブロックが混じり合った層などが認められることから、流水および滲水があったものと思われる。なお、調査によって谷状遺構を完掘した際にも湧水・流水および滲水がみられた。

遺物出土状況

明確に出土状況を示せるほど多量の遺物は認められなかったが、埋土中には奈良時代から中世までの比較的多くの土器片が含まれており、中世のものが最も多く出土した。なお、鉄器1点も出土した。

出土遺物

谷部・谷状遺構内から出土した遺物のうち、図示できたものには、須恵器、土師器、黒色土器のほか、白磁がある。

土器等 図版41 写真図版50・51

T-40・T-41は土鍋である。T-40は須恵器の焼きとなっており、口径21.4cmを測る。体部外面は平行タタキ、内面は当て具の同心円文が残る。口縁端部は外方に引き伸ばしている。13～14世紀頃と思われる。T-41は土師器であり、口径20.4cmである。口縁端部は玉縁状になり、上面は凹線状に窪む部分がある。体部外面は平行タタキ、内面は当て具痕が残る。14～15世紀頃のものであろう。

T-42は須恵器杯Bである。口径14.4cm、器高4.6cmで、高台径は9.5cmを測る。内面底部は使用により極めて平滑になっている。径高指数は32で、T-22の存在からも平城宮Iと同時期と思われる。

T-43～T-47は須恵器椀である。T-43は最も古く、径7cmの高台は5～7mmの高さがあり、底面は回転糸切りである。内面見込み部分には小さいながらも段を有している。なお、内面口縁下に小さな段が認められる。口径13.9cm、器高5.1cmを測り、径高指数は37である。焼成はやや悪い。11世紀代のものと思われる。T-44は口径15.0cm、器高4.7cmで、平高台の径は4.2cmを測る。底面は回転糸切りとなっている。体部は外面中位下部で少し屈曲している。径高指数は31であることと、高台が極めて低いことから、12世紀後半頃の所産と思われる。T-45は口径の一部分しか残存していないため、不正確であるが、径は15.7cm、器高6.0cmとなった。底部は高台がほとんどなくなり、回転糸切り痕が残存している。また、口縁端部外面に重ね焼きの痕跡が顕著に認められる。T-46は口縁部のみの小片である。口径は13.4cm程度と思われる。器壁はやや厚い。口縁端部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。T-47は回転

糸切りの低い底部である。底径は4.8cmを測る。焼成はやや良好で5Y6/1灰色を呈し、やや厚手である。

T-48は土師器の碗であると思われる。口径13.6cmを測り、器厚は口縁部に向かって徐々に薄くなっている。内外面とも横ナデ調整である。

T-49は口縁部を欠失するが、土師器杯であろう。底径9.3cmで、底面はヘラ切り後ナデを施している。内面にはロクロ目が残存している。

T-50・T-51は土師器皿である。T-50は口径10.7cm、残存高2.6cmで、口縁部の器厚が厚くなっている。ユビオサエおよび横ナデ調整で仕上げている。T-51は口径9.5cm、器厚2.9cmであり、ユビオサエおよびナデにより成形・調整を行なっている。特に口縁下部外面は強い横ナデにより凹面を呈している。

T-52・T-53はともに土師器小皿である。T-52は底面回転糸切りで、底径は4.9cmを測る。底部中央は盛り上がって厚くなっている。なお、口縁部は欠失している。T-53はほぼ完形品で、口径7.9cm、器高1.4cm、底径5.9cmを測る。底面は回転糸切り、口縁下部外面にはロクロ目が顕著に残る。底部内面は盛り上がって器厚が厚くなっている。

T-54は土師器壺もしくは鉢と思われる。底径は6.3cm、体部最大径は9.3cmで、底面は回転糸切りである。10YR8/4浅黄橙色を呈し、淡い色の土師器である。南あわじ市鈴田遺跡南地区の溝から類例が出土している。鈴田遺跡では12世紀末～13世紀前半頃に比定している。

T-55は小さな注口部を持つ杯または小鉢である。口径6.4cm、器高3.0cmを測る。ユビオサエおよびナデにより成形・調整を行なっている。

T-56・T-57はともに内黒の黒色土器碗である。T-56は口縁部であるが、小片のため径は不明である。内面の全面と外面端部下1cm幅が黒色化している。内面にはヘラミガキ（暗文）を横位および放射状に施し、外面もヘラミガキを施しているようであるが、断定しにくい。T-57は底部の破片である。低い平高台の底面は回転糸切りとなっている。内面には放射状のヘラミガキ（暗文）が認められる。平安時代後期（12世紀頃）の所産と思われる。

T-58は小片のため傾きが不正確であるが、白磁皿と思われる。内面の口縁部と底部の境には、圓線状に小さな段を彫り出している。外面高台付近は露胎となっている。

T-59は白磁碗底部である。削り出しの輪高台外径は6.4cmであり、高台部および底面が露胎となっている。釉色は10YR6/2灰黄褐色を呈し、気泡が多く含まれている。内面は使用により平滑となっている。なお、胎土は10YR8/1.5灰白色である。

金属器 図版41 卷頭図版14 写真図版50

T-M1は刃部の残存長約10cm、最大幅1.85cmを測る直片刃の鐵器である。刀子の可能性が高く、図では茎が刃部から「く」字形に折れているようにみえるが、ひしゃげているためである。また、折損しているため茎の形状は不明である。なお、身部背の厚みは4.5mmとなっている。確認調査No.11トレンチの谷状遺構部分から出土している。

S D-B 1 図版29・37 卷頭図版13 写真図版38・43・46

位置および検出状況

B地区北東部に位置する溝で、北北東方向にほぼ直線的にのびている。中央部分では弥生時代の住居跡SH-B1と重複し、住居跡南東壁部分を削り取っている。溝の南西側は谷状遺構と重複し、途切れ

ている。しかし、谷状遺構の南西側にはSD-B1と同一方向の溝SD-B2が存在していることから、SD-B1とSD-B2は谷状遺構により途切れてはいるものの、もとは同一の溝であった可能性が非常に高い。

形態・規模

ほぼ直線的に北北東にのびている。地形および等高線の状況から、溝は北流していたものと思われるが、北端から2.5m手前までは、長さ25.5mに対して溝底の高低差は僅かに8cmであり、傾斜は0.3%と非常に緩やかである。なお、北端は底の傾斜が急になり、長さ2.5mで10cmの落差があり、溝は自然消滅している。

以上の状況から、溝の水はけについては、あまりよくなかったものと推定され、溝底はぬかるんだ状態であったことが想定される。人間の足跡や、鹿などの偶蹄類の足跡が非常に多く残っていたのは、そのせいであろう。また、溝底が平らであることを加味して、想像をたくましくすれば、溝底を道として利用していたことの可能性も考えられ、人間が牛とともに歩いていたのではなかろうか。

検出できたSD-B1の全長は28m、最大幅2.0m、南端では幅1.5m、北端では幅0.85mであるが、幅1.3mの部分が最も多い。溝底は前述のように平坦に近く、その幅は75cmでほぼ一定している。検出面からの深さは、最も深い部分で52cmを測り、南部の50cm程度から北に行くにつれ徐々に浅くなり、北端から約3分の1のところでは30cm、北端から2.5m南側で16cmとなっている。

なお、図示できる遺物は出土しなかったが、遺構の重複関係から中世の所産であることはほぼ間違いないものと思われる。

埋土

溝の横断面形は逆台形に近く、埋土は基本的に3層に分けられ、上層の第1層は暗褐色～黒褐色（色覚による—以下同じ）の極細粒砂、中層（第2層）は茶褐色～暗茶褐色を呈する粗粒シルト、下層（第3層）は暗褐灰色の粗粒シルト～極細粒砂となっている。なお、底面の足跡が認められた部分は濃黄灰色の極細粒砂～中粒砂で、底を貼り土したもの、あるいは遺構ベース土である10YR6/8明黄褐色（色覚的には黄褐色）の極細粒砂が変化したもののいずれかであろう。

SD-B2 図版29・37 写真図版38・46

位置および検出状況

B地区南部中央に存在し、SD-B1と同一方向で、谷状遺構を挟んでその南西延長部分にあたる位置関係にある。断面形状はやや異なるものの、位置関係からSD-B1と同一の溝と判断され、谷状遺構によって分断されたものであろう。

SD-B2の北端、谷状遺構ぎわではSD-B3と重複し、SD-B3は谷状遺構が埋まつた後ものであることから、SD-B2が谷状遺構により分断された後でも、埋まりきらずに水流があったものと推測され、谷部が埋没した後は水流を変えてSD-B3となったものと想定される。

形態・規模

検出できた部分の長さは15.5m、幅0.9m～1.5mで、1.25mの部分が最も多い。検出面からの深さは南端で21cm、中央部で34cm、北端では27cmである。南端部で浅くなっているのは、削平によるものと考えられる。溝底の高さは、南側が高く北に低くなっているが、長さ14.5mでその差が11cmと傾斜は緩やかである。SD-B1よりも傾斜はやや急であるが、それでも0.8%にすぎない。溝底の幅は38cm～105

cmでやや不定である。なお、溝底からは動物の足跡は認められなかった。

溝内埋土からは図示できる遺物は出土しなかったが、前述のようにSD-B1と同時期と思われる。

埋土

横断面の形状は、SD-B1に較べて底がやや丸い。埋土は基本的に2層で、上下層とも黒褐色（色覚による—以下同じ）で、底付近では褐灰色の埋土が認められた。

SD-B3 図版36 写真図版46

位置および検出状況

B地区中央北部に位置し、溝SD-B2の北側に連続するように存在する溝である。溝北端部では幅が広くなり、小礫と共に埴輪片が認められた。

形態・規模

「S」字状に蛇行する溝で、検出長は7.0mである。南端は土壌状となっている。北端は高低差約60cmの段差をもって削平された平坦面に続くが、この平坦面によって削り取られたものか、平坦面の形成時期と同一であるのかの判断は難しい。溝幅は70cmの部分が最も多いが、中央北寄りの部分で、幅約30cmの狭い箇所がある。また、北端では溝幅が90cmとやや広くなり、上部に長径15cm～20cm程度の角礫～亜円礫が長さ2mに広がって検出され、北西端では円筒埴輪片も混じっていた。この礫集中部の機能については堀などが想定されるが、上部にのみ認められたことから、埋没後にぬかるみ防止のために足場を固めたものと推定され、礫のみならず、西側の芝ヶ端古墳に伴う円筒埴輪片を持ち込んで入れたものと推測される。したがって、古墳裾から最短でも17.5mもの距離を埴輪片が動いた理由はそこにあるものと思われる。

溝底の高さは、狭窄部より南側ではほぼ水平であるが、狭窄部から急に30cmほど深くなっている。検出面からの深さは、南部では40cm～45cm程度であるが、北部では60cmに近い。

遺物は、埋土より少量の土器片と砥石が出土したのみである。溝の時期は、谷状遺構が埋没した後であることから、中世でも末に近い時期を想定している。

出土遺物 図版41 写真図版51・54

T-60は焼成が悪いが、須恵器椀の底部である。底面回転糸切りの平高台は、高さが7～8mmあり、高台周囲をナデている。体部と高台部の境は明瞭である。底径は5.6cmを測る。高台が高く、高台側面に調整を加えていることから、時期的に遡るものと思われ、11世紀前半代の可能性がある。

T-S5の砥石は横断面三角形で、平面は豆形に近い。長さ15.3cm、幅8.1cm、最大厚5.1cmを測る。3面とも砥面として使用しているが、最も幅の狭い面の使用頻度は少ない。左図の面の使用頻度が最も高く、凹面を呈している。右図の面には3条の太い筋が刻まれているが、その要因は不明である。なお、重量は720gを測る。

SD-B4 図版29

位置および検出状況

B地区南東隅に近い位置で検出した、等高線に直交する方向の溝である。溝東端では「J」字状に北方向に曲折する部分があり、また、溝中央部では溝SD-B5と「T」字形に接続しているが、いずれも前後関係が存在するかどうかは不明である。なお、東部には土壌状遺構と重複しているが、土壌が新

しいようである。

形態・規模

検出できた全長は9.0m、幅は50cm～105cmを測る。溝底のレベルは東側が高く西側が低く、その差は約45cmである。検出面からの深さは10cm程度である。溝の西側は削平により途切れているが、西側平坦面西端中央の溝痕跡がその延長方向にあたることから、あるいはこの溝につながるかもしれない。

埋土

10YR3/2黒褐色（色覚的には灰褐色）の極細粒砂に中粒砂～粗粒砂を含んだ層が堆積していた。

遺物出土状況

埋土中より、瑪瑙製で火打石と想定されるものが出土している。

出土遺物 卷頭写真図版14

T-S12は赤橙色（10R5/15）を呈する赤瑪瑙である。一辺2cm程度であるが、各辺の稜線中央部が長さ8mm程度にわたって潰れて窪んでいることから、火打石として使用されていた可能性がある。稜線が潰れている部分は火打金に当たった部分であろう。

S D-B 5 図版29

位置および検出状況

B地区南東隅付近南端で検出した溝である。北端でS D-B 4と「T」字形に接続しているが、同時存在かあるいは時期差があるのか等については不明である。また、溝の中央部は確認調査時のトレーナー（11Tr）が横断している。

形態・規模

検出できた長さは3.25mであり、幅38cm～60cm、検出面からの深さは15cm程度である。等高線に近い方向の南南西～北北東に直線的に伸びている。南側ではやや幅が狭い。南端と北端での底のレベル差は16cmを測る。溝内からは図示できる遺物は出土しなかった。

埋土

10YR3/2黒褐色（色覚的には灰褐色）の極細粒砂に中粒砂～粗粒砂を含んだ層が堆積していた。

（4）柱穴

S P-A 02 図版30

位置および検出状況

弥生時代の竪穴住居跡S H-A 1の範囲内北端に存在する柱穴であるが、S H-A 1とは無関係である。

形態・規模

掘り方平面はほぼ円形で、径30cmである。柱痕は南側に偏っているが、径20cmの円形であった。柱痕の深さは17cm、掘り方の深さは25cmであった。

遺物

図示できなかったが、青磁碗の体部片が出土している。底部に近い部分であるが、内面に印花文を施している。柱痕出土であると思われる。

SP-A04 図版28

位置および検出状況

A地区中央部の南西端に近い位置で、弥生時代の竪穴住居跡SH-A1の東側に存在していた。

形態・規模

柱穴掘り方の平面形は南北35cm、東西28cmの梢円形を呈している。柱痕は北に偏っているが、径20cmのほぼ円形で、深さは21cmを測る。

遺物出土状況

掘り方からは中世後期の青磁碗破片が出土し、柱痕埋土から近世陶器が出土している。柱穴の時期は掘り方出土青磁碗の時期に近いものと判断している。

出土遺物

磁器 図版41 写真図版52

T-61は青磁碗の破片である。口縁端部は外反し、口径15.4cmを測る。14世紀末～15世紀とされるものであろう。柱穴掘り方から出土したものである。

T-62は猪口の形をした白磁に近いものである。口径は7.4cmで、口縁端部は薄く丸いが、下方にゆくにしたがい、厚みを増す。高台部は欠失している。2.5GY8/1灰白色を呈する。

T-63は施釉陶器皿である。口径9.2cmを測るが、底部を欠失しているため器高は不明である。外面下端部以外には5Y8/1灰白色を呈する施釉がみられる。柱痕から出土したものである。近世と思われる。

なお、図示できなかったが、青磁碗の破片がもう1点出土している。柱穴掘り方から出土した碗であり、口縁端部を欠失するものの、端部に向かって外反しているところから、T-61と同形態であり、釉の色調や貢入の入り方も似ていることから、同一個体の可能性が高い。

SP-B01 図版29 写真図版46

位置および検出状況

B地区西部中央に位置し、土壌SK-B07と一部重複して存在している。本柱穴の方が新しい。

形態・規模

柱穴掘り方平面は梢円形に近く、南北45cm、東西32cm、深さ11cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土土器 図版41 写真図版51

T-64は内黒の黒色土器片である。小片のため不正確であるが、口径は16cmと思われる。内外面とも磨滅のため調整痕は残っていない。ほかに須恵器體部片や土師器片が出土したが、図示できなかった。

SP-B05 図版29

位置および検出状況

B地区南西部に位置する。

形態・規模

柱穴掘り方平面は梢円形に近く、長径38cm、短径33cmを測る。柱痕は南東に偏って存在し、径13cmの円形であった。掘り方の深さは9cmを測る。掘り方から砥石片が出土した。

出土石器 図版42 写真図版53

T-S11は砥石片である。広い2面を底面として使用し、側面は使用していないか欠損している。残

存長は5.9cm、残存幅4.9cm、最大厚は3.0cmである。重量は800gである。掘り方から出土している。石材は凝灰質砂岩と思われる。

S P - B 13 図版29 写真図版45

位置および検出状況

B地区東部中央、溝S D - B 1の東岸ぎわに存在する柱穴である。後述の柱穴S P - B 21・B 22とは3.7m程度のほぼ等間隔で溝S D - B 1と平行で一列に並んでいる。

形態・規模

平面形は東部がやや歪な楕円形を呈し、長径63cm、短径53cmと大型の柱穴である。柱痕はほぼ中央に位置するが、南北30cm、東西23cmのやや楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。柱痕の深さは34cmであった。

遺物出土状況

柱痕部分の上面から土師器椀片および礫が出土している。

出土土器 図版41 写真図版50・51

T-65は土師器椀片である。口径14.7cm、器高4.6cmを測る。内面口縁端部下には2条の沈線がめぐらしている。径高指数は31である。外面は横ナデ調整で、内面も同様と思われる。底面は回転糸切りで、高台部は低い。底面は回転糸切りとなっている。外面に赤色顔料あるいは朱泥を塗っている。柱痕上から出土したものである。

T-66も椀と思われるが、口縁の一部分の破片であることから、口径・傾きが不正確である。口径は18.7cmと推定され、外面にはロクロ目が顕著に残存している。調整痕は残っていない。柱痕から出土した土器である。

S P - B 21 図版29 写真図版45

位置および検出状況

B地区北東部の南部で、溝S D - B 1の東岸ぎわに存在する柱穴である。柱穴S P - B 13・B 22とは3.7m程度のほぼ等間隔で溝S D - B 1と平行で一列に並んでいる。

形態・規模

掘り方の平面は円形に近く、径35cmを測る。柱痕は南西に偏っているが、径23cm程度の円形を呈する。柱痕の深さは柱穴検出面から18cm、掘り方の深さは検出面から24cmである。

掘り方部分上面から土師器、柱痕埋土中位部から須恵器椀片がそれぞれ出土している。

出土土器 図版41 写真図版51

T-67は須恵器椀片である。口径は15.6cmを測り、器高は5cm以上である。高台部を欠失するが、椀部の形状から、高い平高台を有するものと思われる。11世紀前半頃の可能性が高いと思われる。柱痕から出土したものである。

なお、ほかに土師器卓上型皿と思われる破片が柱穴上面から出土している。底部および口縁部を欠失しているため図示できなかったが、内外面にはロクロ目が顕著に残り、後述のT-68のように突出した平底になるものと思われる。

S P - B 22 図版29 写真図版45

位置および検出状況

B地区東部中央北部で、溝S D - B 1の東岸ぎわに存在する柱穴である。先述の柱穴S P - B 13・B 22とは3.7m程度のほぼ等間隔で溝S D - B 1と平行で一列に並んでいる。

形態・規模

柱穴掘り方の平面形は南北に長い楕円形を呈し、長径63cm、短径50cmを測る。柱痕は南寄りに位置し、長径18cm、短径13cm、検出面からの深さは20cmを測る。

遺物出土状況

柱痕部分の上面から土師器、掘り方部分上面から土師器小皿片がそれぞれ出土している。

出土土器 図版41 写真図版50・51

T-68は土師器の托または卓上型皿と呼ばれるものである。口径15.5cm、器高4.7cm、高台径6.1cmである。高台は1.3cmと高く、底面は回転糸切りである。側面の調整は特に施していない。杯部にはロクロ目が残り、器厚は厚い。端部は丸くおさめている。上面から出土したもので、5YR6/6橙色を呈する。

T-69は土師器椀である。1/4の破片で、口径は14.0cm、器高4.3cm、高台径6.0cmを測る。平高台底面には回転糸切り痕が残り、側面には工具の当たり痕が残存しているが、切り離し用糸の痕跡かもしれない。体部内外面にはロクロ目が頗著に残る。なお、体部下半に円孔を穿っており、半分残存している。上面から出土したものである。

T-70は土師器小皿片で、掘り方から出土したものである。口径は9.0cm、器高1.1cmを測り、底面には回転糸切り痕が残る。

S P - B 25 図版31

位置および検出状況

B地区北西部の弥生時代竪穴住居跡S H - B 1内の東部に存在する柱穴である。

形態・規模

掘り方平面は長径55cm、短径31cmの東西に長い楕円形に近い形状を示す。柱痕は西端に偏って存在しており、径28cmのほぼ円形を呈する。柱痕の深さは柱穴上面から15cm、掘り方は12cmの深さであった。

出土土器 図版41 写真図版51

T-71は口径7.8cmの土師器小皿の約半分の破片で、柱痕から出土している。器高は1.4cmで、底面には回転糸切り痕が残っている。比較的薄手のつくりとなっている。

S P - B 27 図版33 写真図版39

位置および検出状況

B地区北東部で、溝S D - B 8の屈曲部南側に存在する。

形態・規模

柱穴平面はやや歪であるが、概ね円形を呈し、径30cm程度である。検出面からの深さは12cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土土器 図版41 写真図版51

T-72は土師器椀の口縁部片で、外面には煤のような黒色付着物が認められる。口径14.2cmで、外面

にはロクロ目が残っている。内面は7.5YR8/4浅黄橙色を呈する。

第5節 所属時期不明の遺構とその遺物

調査区内で検出した遺構のうち、時期を決定または推定できる遺物が出土せず、重複関係も不明なため、所属時期が不明なものが多く存在する。それらは柱穴を中心として土壙、溝がある。ただし、本節では主要なものに限定しているため、本節で述べている以外にも、非常に多くの時期不明遺構が存在する。なお、時期不明遺構の多くは中世に属する可能性が高いと推定している。

(1) 土壙

S K-A 1 図版28

位置および検出状況

A地区西部、弥生時代の竪穴住居跡S H-A 1の北側東寄りに位置する土壙である。

形態・規模

平面形は平行四辺形に近く、長辺80cm、短辺68cm、検出面からの深さは24cmを測る。遺物は出土していない。

S K-B 05 図版29 写真図版45

位置および検出状況

B地区西端中央で検出した不定形な土壙である。北西側は溝状を呈している。

形態・規模

検出できた全長は3.3m、東側の土壙状を呈する部分の平面は1.3m×1.0mの梢円形に近い。検出面からの深さは溝状部分で8cm、土壙状部分では17cmで、底面は平坦である。

遺物

埋土中より円筒埴輪片が数点出土した。これらは芝ヶ端古墳に伴うことが確実であるため、芝ヶ端古墳の報告において記述している。

S K-B 08 図版29

位置および検出状況

調査区中央南端付近に存在する土壙である。付近には遺構は少ないが、削平がほとんど及んでいない位置にあたる。

形態・規模

南北に長い平面形態を示し、北端は人為的な段差が存在しているが、かろうじて全容が残っているようである。全長1.90m、最大幅75cm、検出面からの最大深は20cmを測る。底部形状は溝状遺構に近く、南が高く北に低くなっている。遺物は出土しなかった。

埋土

10YR3/2黒褐色（色覚的には灰褐色）（S D-B 4・B 5と同じ中世の埋土）の極細粒砂に中粒砂～粗粒砂含む層が堆積していた。

S K - B 09 図版29

位置および検出状況

B地区南東部南端に位置するが、多くが調査区外にひろがっている。溝状遺構とするほうが適切かもしない。

形態・規模

溝とも土壙とも判断できそうな平面形状であるが、北東端の底の状況から土壙と判断した。残存長は2.20m、残存最大幅65cmで、検出面からの最大深は26cmである。時期が判断できる遺物は出土しなかった。

埋土

7. SYR1.7/1黒色(色覚的には黒色)の粗粒シルト～極細粒砂に極粗粒砂を少量含む層が堆積しており、弥生時代～古墳時代の埋土とほぼ同じである。

S K - B 11 図版29

位置および検出状況

B地区東部中央に位置する土壙である。

形態・規模

平面は等高線と平行の東西方向に長い楕円形を呈している。2段に落ち込んでおり、外側は133cm×58cm、内側は90cm×39cmを測る。1段目の検出面からの深さは23cm、2段目は13cmであり、検出面からの最大深は36cmと深い。一部柱穴と重複する部分があり、本土壙のほうが新しい。遺物は出土していない。

埋土

5YR3/1黒褐色(色覚的には茶褐色)の粗粒シルト～極細粒砂に中粒砂～粗粒砂含む層が堆積していた。

(2) 溝

S D - B 6 図版29

位置および検出状況

B地区中央部の西侧中央に位置する、東西方向の溝である。溝の西部は水田構築時の段差により途切れている。

形態・規模

残存長は1.68m、幅58cmで、検出面からの深さは24cmを測る。東側よりも西側の溝底の方が高い。法面幅は北側の方が広く、33cm幅である。時期を特定できる遺物は出土していない。

埋土

7. 5YR3/1黒褐色(色覚的には暗褐色)の極細粒砂に中粒砂～粗粒砂を含んだ層が堆積していた。

(3) 柱穴

S P - A 01 図版28

位置および検出状況

A地区西端付近、弥生時代の竪穴住居跡S H - A 1の北側西寄りに位置する柱穴である。

形態・規模

柱穴平面は東西にやや長い梢円形を呈し、長径42cm、短径33cmを測る。柱痕は掘り方中央からやや東寄りに位置し、径25cm程度のほぼ円形を呈する。掘り方の深さは検出面から84cmと非常に深い。柱痕の深さは39cmであった。遺物は出土しなかった。

S P - A 05 図版30 写真図版34

位置および検出状況

A地区西部、弥生時代の竪穴住居跡S H - A 1 のほぼ中央の南東寄りに位置する柱穴である。

形態・規模

平面は径23cm～27cmのほぼ円形を呈する。柱痕は検出できず、検出面からの深さは40cmであった。また、図示できる遺物は出土しなかった。

S P - A 06 図版30 写真図版34

位置および検出状況

A地区西部、弥生時代の竪穴住居跡S H - A 1 の中央土壙東隣りに位置する柱穴である。

形態・規模

柱穴平面は梢円形に近く、長径28cm、短径24cmを測り、検出面からの深さは36cmを測る。柱痕は検出できなかった。東側の柱穴と接する位置にあるが、先後関係は不明である。遺物は出土しなかった。

S P - A 08 図版28

位置および検出状況

A地区北西端に位置する。

形態・規模

径35cm程度の円形平面を呈する柱穴で、柱痕は北側に偏って存在している。柱痕は径20cm程度の円形で、深さは24cmを測る。掘り方の深さは検出面から67cmであった。なお、遺物は出土しなかった。

S P - A 11 図版28

位置および検出状況

A地区中央南部に存在する柱穴である。

形態・規模

ほぼ南北に長い梢円形を呈する掘り方平面で、長径68cm、短径40cm、検出面からの深さ62cmを測る。柱痕は中央南寄りに位置し、径18cmの円形を呈し、柱穴上面からの深さは29cmを測る。図示できる遺物は出土しなかった。

S P - A 12 図版28

位置および検出状況

A地区中央部北東端近くの傾斜面に存在する柱穴である。

形態・規模

柱穴平面は橢円形に近く、長径33cm、短径28cmを測る。検出面からの深さは28cmで、柱痕は検出できなかった。また、遺物は出土しなかった。

SP-A15 図版31 写真図版33

位置および検出状況

A地区中央部北東端に位置し、弥生時代の竪穴住居跡S H-A 3の北側壁の位置に存在している。

形態・規模

柱穴平面形は径40cmの略円形で、検出面からの深さは23cmである。柱痕は検出できなかった。

SP-B06 図版29

位置および検出状況

B地区西部の西端付近で、土壙SK-B 05の南側に存在する。

形態・規模

柱穴掘り方は平面円形で、径24cm、検出面からの深さは18cmを測る。柱痕は検出できなかった。また、遺物も出土していない。

SP-B07 図版35

位置および検出状況

B地区西部北寄りで、建物跡S B-B 1の南に位置する柱穴である。

形態・規模

平面円形で径25cm、検出面からの深さは22cmで、柱痕は検出していない。遺物も出土しなかった。

SP-B08 図版35

位置および検出状況

B地区西部北寄りで、建物跡S B-B 1の北西内部に存在するが、建物跡とは無関係である。

形態・規模

平面は径32cmの円形を呈し、検出面からは30cmの深さである。柱痕および遺物は検出できなかった。

SP-B14 図版29

位置および検出状況

B地区南東部の南端近くに存在する。搅乱の可能性もある。

形態・規模

平面略円形を呈し径63cm、検出面からの深さは11cmである。柱痕・遺物とともに検出されなかった。

SP-B15 図版29

位置および検出状況

B地区南東部の南端近くに存在し、土壙SK-B 09の北に位置する。

形態・規模

円形平面の小規模な柱穴で、径22cmを測る。柱痕は検出されなかった。検出面からの深さは20cmで、遺物は出土しなかった。

S P - B 16 図版29

位置および検出状況

B地区中央部の南東端に位置する。

形態・規模

径21cmの小規模なもので、平面は円形を呈する。検出面からの深さは17cmで、遺物は出土しなかった。また、柱痕は検出されなかった。

S P - B 17 図版31 写真図版39

位置および検出状況

B地区北部の西部に位置し、弥生時代の竪穴住居跡S H - B 1 内南部に存在する柱穴である。

形態・規模

平面形は円形に近いが、長径30cm、短径27cmである。柱痕は掘り方の南寄りに存在し、径18cmの円形を示す。遺構面からの柱痕の深さは23cmである。遺物は出土しなかった。

S P - B 18 図版31 写真図版39

位置および検出状況

B地区北部の西部に位置し、竪穴住居跡S H - B 1 内中央土壙の北ぎわに存在する柱穴である。

形態・規模

平面形は矩形に近く、28cm×25cmを測る。検出面からの深さは9cmで、柱痕および遺物は検出されなかつた。

S P - B 19 図版33 卷頭図版11

位置および検出状況

B地区北東部の土壙S K - B 10と重複して存在する柱穴である。土壙よりも新しい。

形態・規模

平面は梢円形に近く、長径40cm、短径33cmを測る。柱痕は掘り方中央に位置し、径22cmの円形を呈する。掘り方の深さは検出面から16cm、柱痕の深さは14cmである。図示できる遺物は出土していない。

S P - B 20 図版33

位置および検出状況

B地区北東部の土壙S K - B 10の西側に存在する柱穴である。

形態・規模

柱穴掘り方平面は径32cmの円形を呈する。柱痕は南西寄りに位置し、長径24cm、短径20cmの梢円形を呈する。遺構面からの柱痕の深さは23cmを測る。遺物は出土していない。

S P - B 24 図版31 写真図版39

位置および検出状況

B地区北部の西部に位置し、竪穴住居跡SH-B1内中央土壌に接して北側に存在する柱穴である。

形態・規模

中央土壌に半分が切られる状態で掘削したが、中央土壌との新旧関係は不明である。掘り方平面は円形と思われる、径約30cmを測る。柱痕は中央に位置し、径12cmの円形平面を呈する。柱痕の深さは遺構面から35cmである。弥生土器壺口縁部が出土しているが、竪穴住居跡の中央土壌に伴うものと判断される。

S P - B 26 図版29

位置および検出状況

B地区東端北部の壁際に位置する柱穴で、東半分は調査区外の道路下になっている。

形態・規模

掘り方平面は円形または梢円形と思われる。残存部分での規模は34cm×18cmである。検出面からの深さは14cmを測る。柱痕は検出されなかった。埋土から土師器体部が検出されたが、脆弱なため時期は不明であり、図示できなかった。

S P - B 28 図版29

位置および検出状況

B地区北東部西側に存在し、竪穴住居跡SH-B1と溝SD-B7のほぼ中間に位置する。

形態・規模

掘り方平面は卵形に近く、長径28cm、短径24cmを測る。柱痕は検出されず、遺物も出土しなかった。
掘り方の深さは検出面から17cmである。

S P - B 29 図版31 写真図版39

位置および検出状況

B地区北部の西部に位置し、竪穴住居跡SH-B1内中央土壌の東側に存在する柱穴である。

形態・規模

掘り方平面は梢円形を呈し、長径32cm、短径28cmを測り、検出面からの深さは36cmである。柱痕と遺物は検出されなかった。

S P - B 31 図版33 写真図版38

位置および検出状況

B地区北東隅の溝SD-B8に囲まれた範囲内に存在する柱穴である。

形態・規模

掘り方平面は円形を呈し、径22cmである。柱痕は掘り方の中央に位置し、径16cmの円形平面を呈する。
柱痕の深さは遺構面から17cmである。遺物は出土していない。

SP-B32 図版29

位置および検出状況

B地区東部中央西半に位置し、溝SD-B1の西肩部に重複して存在するが、先後関係は不明である。

形態・規模

検出状態平面では橢円形を呈し、長径32cm、短径21cm、検出面からの深さは34cmを測る。柱痕および遺物は検出されなかった。

確認トレンチNo.11のSP-1

位置および検出状況

確認トレンチNo.11は、B地区のほぼ中央を東西方向に貫いているが、その調査により、溝・土壤など数多くの遺構が検出された。同時に柱穴も数多く検出されたが、それらのうち、時期判断の可能な遺物が出土したものにSP-1がある。残念ながらその位置は不明となってしまっているため、本発掘調査での位置は明確にすることはできない。したがって、柱穴の形態や規模なども不明である。

遺物

黒色土器碗の体部小片が出土している。内外面とも黒褐色を呈し、内外面にミガキを施している。

第6節 包含層出土の遺物

主としてB地区の遺物包含層である、旧耕土および暗褐色系・黒褐色系といった地山までの堆積土中に含まれていた遺物のうち、図化できたものを示す。それらには弥生土器、土師器、須恵器、磁器、石器があり、順に述べる。

弥生土器 図版42 写真図版51

T-73・T-74は弥生土器底部である。T-73は底径14.0cmで大型の壺と思われる。底面および体部外面には細かくヘラミガキを施している。内面の調整は、器表剥離のため不明である。T-74は底径8.0cmの底部片であるが、体部外面は刷毛調整、底面はヘラケズリとなっている。内面は器表剥離のため調整不明である。T-73・T-74とともにB地区北部から出土している。

土師器 図版42 写真図版51

T-75は土師器杯片である。口縁部下外面にはにぶい稜をもち、底から上はほぼ直立する。口径は14.3cmとなっているが、やや不正確である。器表磨減のため調整痕は不明となっている。

T-78は内黒の黒色土器碗の破片である。口縁端部は外反気味に丸くおさめている。内面には横方向のヘラミガキ（暗文）を密に施しているようであるが、それらの多くが磨滅している。外面も器表磨減のため調整を確認することができないが、横ナデの可能性が高い。口径は15.9cmで、胎土には金雲母を含んでいる。出土場所不明のものである。

T-80は土師器杯上半部の破片である。口縁端部は内側から厚みを減じ、少し外傾させている。口径12.4cmを測り、古墳時代の所産と考えられよう。器表の多くが剥離しているが、横ナデおよびナデ調整の残存部分がある。古墳に近い部分から出土した。

T-81は土師器杯と思われる破片である。口径は9.3cm、器高は3.3cm程度と考えられる。厚手のつくりで、古墳に近い部分から出土したものである。

T-82も土師器杯片である。口縁部は徐々に厚みを減じ、外反気味となる。口径は8.8cm、器高は2.6cm程度と思われる。これも古墳に近い部分から出土している。

T-83は、外反する口縁部を有する土師器皿片である。口径は10.9cm、器高2.8cm、回転糸切りの底部は径5.9cmとなる。内外面とも横ナデ調整で、内面には煤様の黒色付着物が看取できる。

T-84の底部中央には貫通する小円孔がみられることから、托と思われる破片である。平高台底面は回転糸切りで、底径4.9cmを測る。外面は10YR8/3.5浅黄橙色の淡い色調である。谷部上層から出土した。

T-85は土師器椀と思われる底部片である。径6.0cmの底面は回転糸切りで、平高台側面にもナデ等の調整を加えている。

T-86は底径5.8cmを測る土師器平高台部分である。器種は椀の可能性が高いと思われる。底面は回転糸切り、側面にはナデ等の調整を加えている。内面中央部には横ナデの痕跡が残っている。

なお、確認トレンチNo.11内のサブトレンチ内から、瓦器椀もしくは黑色土器椀の底部小片が出土している。貼付高台の断面は三角形に近く、内外表面が黒灰色を呈している。炭素吸着は内部に及んでいないことから、瓦器椀の可能性が高いと思われる。内面には放射状の暗文を密に施している。

須恵器 図版42 写真図版51

T-76は須恵器杯Bの底部である。径7.6cmの輪高台は内側に寄った位置に貼り付けられているが、低く、断面は矩形を呈する。飛鳥V期と思われ、体部下半の形状から、稜椀の可能性も考えられる。内面は平滑になっており、残存形状を加味して、転用硯の可能性もある。

T-77は口径10.7cmを測る須恵器壺口縁部である。口縁端部は外下方に折り返し、端面は平坦である。口縁部のみであるため断定はできないが、平城宮IIIに多くみられる器形のようである。表採品である。

T-79は須恵器椀口縁部片である。口径は15.5cmであるが、小片のためやや不正確である。口縁端部は丸く、やや厚手のつくりとなっている。口縁部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。

なお、図示できなかったが、古墳時代の須恵器杯蓋片が1点出土している。径は13cm強と思われ、天井部と口縁部の境の段はややにぶい。天井部外面のヘラ削りの範囲は広く、TK-10型式期の可能性が高いものと思われる。B地区北部斜面の暗褐色たまり部分から出土した。

その他の土器類 図版42 写真図版52

T-87は白磁碗の底部である。内面には小さな段が圓線のようにめぐっている。高台径は5.1cmを測り、高台高が1.6cm程度と高いことから、端反りの口縁部になるものと思われる。高台付け根あたりから高台全体が露胎となっている。釉は5Y8/2灰白色を呈し、胎土は2.5Y8/1.5の灰白色となっている。細かな貫入が全体にみられ、使用の痕跡が確認できる。

石器 図版42 写真図版53

T-S6はN2/黒色を呈するチャート製の凹基無茎式石鏟である。摺理がある石材部分を素材としており、一方の脚部はそこで折損している。両側縁はゆるやかな弧状を呈し、基部の抉りはやや深い弧状となっている。全長29.0mm、残存幅20.5mm、厚さ5.0mm、現重量は2.3gである。谷状遺構の上層から出土

した。

T-S 7はB地区北方で表面採集したサヌカイト剥片である。平面は台形に近く、断面は楔形を呈する。1側縁に細かい二次加工を施し、刃部としているようであるが、反対面の加工は認められない。他の2側縁に新しい欠損が認められることから、火打石の可能性も指摘できる。長さ30mm、幅36.7mm、厚さ8.0mm、重さは10.0gである。

T-S 8は粘板岩のような石材を素材とした磨製石包丁である。両端は欠失し、上部も部分的に欠損している可能性が高い。刃部は主として片側から薄くなるようにつくられ、もう片方は刃部先端のみ研磨してつくりだしている。刃部は外湾している。紐孔は1箇所のみ残存し、両側穿孔であるものの、ともに貫通していない。また、水平方向では両者の位置が合致しているものの、垂直方向では約5mmのずれがある。以上のことから、外湾刃石包丁の未成品であることがいえよう。残存長は68.0mm、残存幅82.5mm、厚さ10.0mm、現重量は82.0gである。B区北部の斜面落ちから出土したものである。

T-S 9は頁岩もしくは粘板岩あるいは安山岩と思われ、長さ164.5mmの棒状の素材に大きな剥離を加えたものである。最大幅は37.8mm、最大厚14.0mmで、重量は98.5gを量る。谷部の最下層から出土した。

第3章 まとめ

芝ヶ端遺跡の発掘調査の結果、弥生時代中期後葉、古墳時代～奈良時代、中世の遺構および遺物が検出された。また、それらに伴うと考えられる土器類では、弥生土器・土師器・須恵器・磁器などがあり、完形品は少ないものの、多くの破片が出土した。また、石器類では縄紋時代と推定される石鏃をはじめ、弥生時代の石斧・石包丁、中世と思われる瑪瑙製の推定火打石も出土した。

(1) 弥生時代

弥生時代には丘陵尾根北端平坦部とその北西側を中心に、居住地および墓地として利用されている。また、丘陵部の芝花古墳群調査時に、斜面を約5m上がった標高121mあたりの丘陵斜面に竪穴住居跡が1棟と、その西側には段状遺構が多数検出されていることから、弥生時代集落は丘陵斜面も含めた広範囲にわたっていたようである。

(2) 古墳～奈良時代

弥生時代中期後葉以降は、古墳時代前期末頃の土器が出土した土壙が存在するが、1基単独である。その後の奈良時代初期の遺構も規模は大きいものの、単独で存在している。したがって、遺跡が再び活発となるのは、次の平安時代末～鎌倉時代以降のことである。

なお、古墳時代後期初頭には西側に芝ヶ端古墳が築造されている。

(3) 中世

この時期になると、芝ヶ端遺跡調査区内の遺構は非常に多くなる。掘立柱建物跡や井戸および墓・谷状遺構をはじめ、時期が推定できる溝5・土壙4基があり、当該時期の土器出土量も多い。また、中世の柱穴の数も9基と多く、それら以外にも時期不明の遺構のうちの大半が中世の所産と推定できる。

これらのことから、芝ヶ端遺跡の中心をなす時期が中世であり、山麓に所在する小規模な集落ないしは作業に関連した施設であった可能性が考えられる。その時期は出土土器から、平安時代末から室町時代の12世紀～16世紀の中世ほぼ全般にあたる。なお、掘立柱建物跡と墓は13世紀頃、谷部は15世紀頃の所産のようである。

V 芝花古墳群

第1章 調査の経過と概要

第1節 確認調査

調査地は芝花古墳群（北近畿豊岡自動車道春日和田山道路ⅡNo.115地点）が存在する南の丘陵部から延びる3つの尾根筋のうち中央に位置する尾根筋の先端部に位置している（第10図）。対象範囲内の尾根筋には既に古墳の存在が知られていたことから、平成11年度に確認調査（遺跡調査番号990220）を実施した。

尾根筋と尾根の中腹に見られた帶曲輪状の平坦面の部分にトレンチを設定し、調査を行った。T1・2・4で周溝、主体部、T3・5で周溝、T6で主体部を検出した。（ただし、T6の主体部は全面調査の結果、攪乱と判明した。）調査の結果、尾根筋に古墳3基、尾根中腹に古墳5基の古墳が存在するものと考えられた。

第2節 全面調査

全面調査は確認調査で明らかとなった古墳群の部分から平成11年度に調査された芝ヶ端遺跡の南側に隣接する丘陵裾の部分までを対象にして実施した。

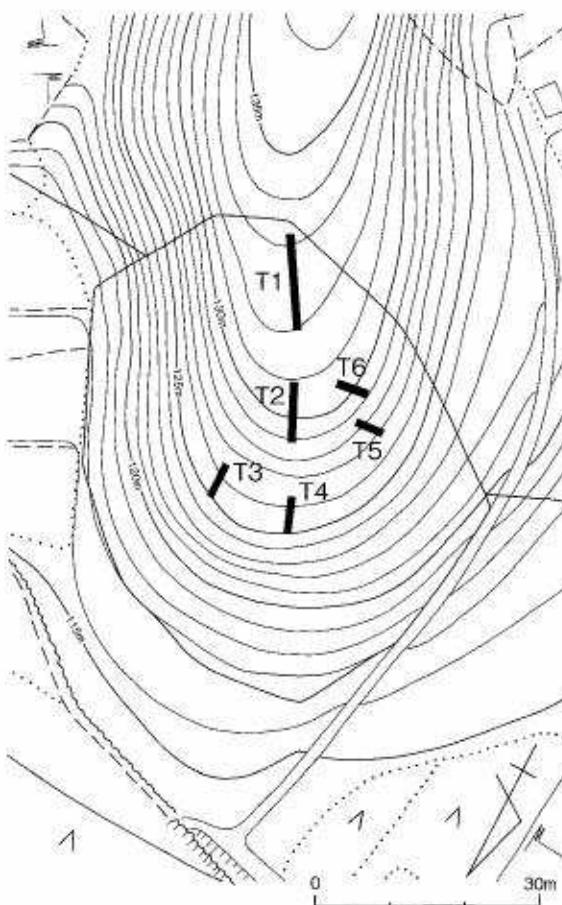
調査の結果、当初存在を想定していた古墳群とそれ以外の縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の4時期にわたる各種の遺構・遺物が検出された。

縄文時代は尾根の東側で落とし穴が検出され、包含層から完形個体の後期の土器が出土している。

弥生時代は尾根先端部で中期の竪穴住居跡、北西斜面で中期の段状遺構や木棺墓、北東斜面裾では中期の土坑が検出された。

古墳時代は尾根筋及び中腹部で前期の古墳6基（芝花26～28・72～74号墳）、中腹部で前期の段状遺構、尾根先端部の弥生住居上で後期の平坦面などが検出された。

中世は尾根先端部の低い位置で中世前期の土坑と中世後期の集石墓が検出された。



第10図 芝花古墳群確認調査トレンチ配置図

第2章 繩文時代

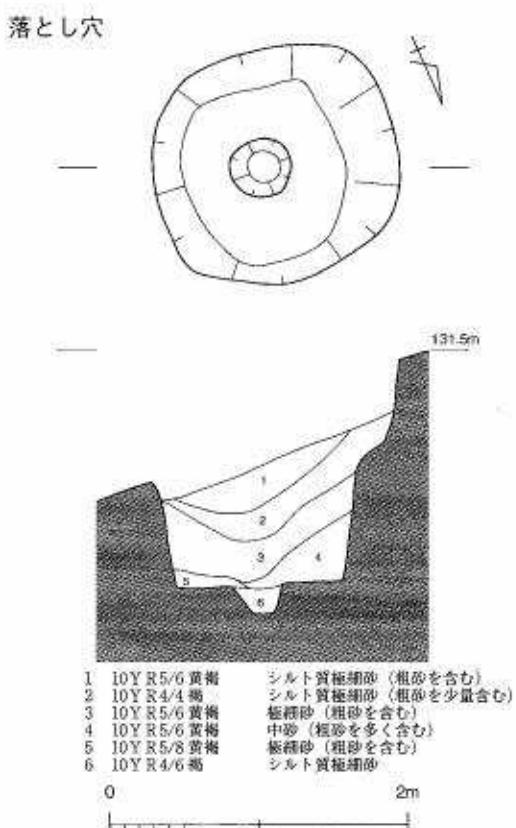
第1節 概要

芝花26号墳の東の墳裾斜面から、繩文時代後期の粗製の深鉢（H-1）が単独でほぼ1個体分検出された。本来埋甕であったものが、芝花26号墳の築造時に土ごと外へ押し流されたものと考えられる。また遺物は出土していないことから時期は不明確ながら芝花28号墳の東側から落とし穴が検出された。

第2節 遺構

落とし穴 第11図、写真図版60

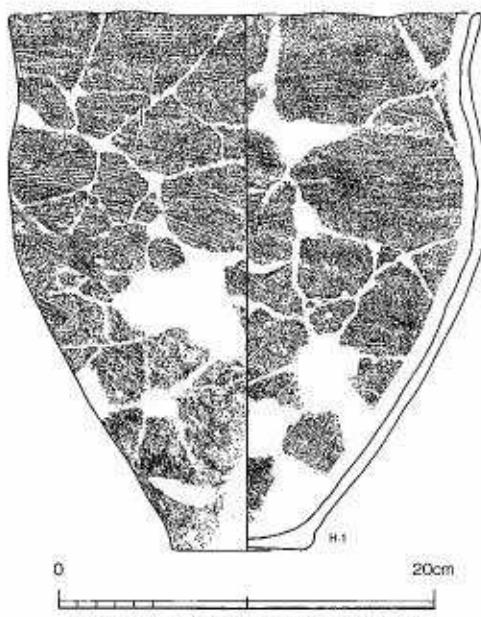
芝花28号墳の東側で検出された。尾根頂部の芝花28号墳より1.5m低く位置している。直徑は1.6cm、深さ1.5cmである。底部中央には直径40cm、深さ18cmのピットが設けられている。遺構に伴って遺物は出土していない。



第3節 遺物

包含層 第11図、写真図版95

H-1は繩文土器の深鉢である。芝花26号墳の東側で出土した。完形の個体である。頸部のくびれは弱く、口縁部もあまり開かない。外面及び内面上半は貝殻条痕、内面下半はナデが施されている。時期は繩文後期と考えられる。本来埋甕であったものが、芝花26号墳の築造時に土ごと外へ押し流されたものと考えられる。



第11図 繩文時代の遺構と遺物

第3章 弥生時代

第1節 概要

弥生時代の遺構は丘陵の北西斜面から北東斜面の中腹から裾にかけて広がっている。北西斜面では段状遺構が9基検出された。72号墳墳丘下の標高125m前後から118mまでに認められ、最高所は山裾の芝ヶ端遺跡からの比高差約8mである。段状遺構の多くは長さ4mから10mで、コの字状に溝を設け、その周辺に柱穴が密集している。73号墳墳丘下に位置するもの（段状遺構9・10）のみ溝やピットは設けられていない。段状遺構の東側に接した尾根の先端には、直径7.0mの円形の大型住居跡（SHO1）が存在する。北東斜面の裾付近には土坑が存在している。

第2節 遺構

SHO1 図版46、写真図版60・61

段状遺構4の東側に接した尾根の先端に位置する直径7.0mの円形竪穴住居跡である。斜面の上位の標高122m付近から尾根先端に向けて円形に大きく掘削を行い、標高119.6m前後で水平な平坦面を獲得している。前面の平地との比高差は約3mである。住居跡の中心には、不整楕円形の中央土坑があり、その東西の対称位置に2個の柱穴が付設されている。梁を支える6個の主柱穴が、中央土坑を中心としてややいびつに配列している。掘削によって形成された斜面には柱穴が認められ、屋根を支える垂木材が懸架されていたことがうかがえる。周壁溝は、遺存状態が良好な南壁に沿って3条検出され、南側の周壁溝は床面よりやや高い位置に設けられている。また、中央土坑の周囲に2箇所、被熱のため床面が赤変している部分が認められた。埋土からは弥生土器甕（H-2）、甕（H-3・4）、砥石（H-S7）などが出土している。また埋没後の平坦面は古墳時代後期に利用されている。

段状遺構1 図版47、写真図版62

北西斜面の南端部に位置し、南端部は調査区外まで延びているようである。木棺墓に切られている。長さは12m以上、平坦面の幅は1.6cm程度である。床面の標高は120m前後である。周壁溝は2回造り替えられているようで、北端部は直角に折れている。ピットは周壁溝上から平坦面のやや下ぐらいの間で検出されている。ピットの深さは深いものは40cmもあるが、20cm程度のものが多い。弥生土器甕（H-6）、楔形石器（H-S3）が出土している。

段状遺構2 図版47、写真図版62・63

北西斜面の中央部、段状遺構3のすぐ上に位置している。長さは5.2m、平坦面の幅は1.2cm程度である。床面の標高は122.7m前後である。周壁溝は1回造り替えられている。山側の溝は北端部が弧状に折れ、谷側の溝は南端部が弧状に折れている。ピットは山側の周壁溝のすぐ内側から平坦面のやや下ぐらいの間で検出されている。山側の周壁溝のすぐ内側のピットは比較的よく並んでいる。ピットの深さは10cm程度のものが多い。弥生土器の破片しか出土していない。

段状遺構3 図版47、写真図版62・63

北西斜面の中央部、段状遺構2のすぐ下に位置している。長さは8.8m、平坦面の幅は2.0m程度である。床面の標高は121.3m前後である。周壁溝は2回造り替えられているようである。山側の溝は北端部が直角に折れている。ピットは山側の周壁溝内から平坦面のやや下ぐらいいの間で検出されている。ピットの深さは10~40cm程度である。弥生土器壺(H-8)、打製石鎌(H-S1)が出土している。

段状遺構4 図版48、写真図版63

北西斜面の北部、SHO1の西隣に位置している。長さは21mと長く、平坦面の幅は1.0m程度である。床面の標高は119.6m前後である。周壁溝は南端部で確認されていないが、本来は存在していたものと考えられる。周壁溝の北端部と中程で直角に折れている。ピットは段状遺構の中程より南側の周壁溝の内側から平坦面のやや下ぐらいいの間で検出されている。ピットの深さは20~30cm程度のものが多い。北端部のすぐ内側には深さ20cm程度の土坑が設けられている。中程の周溝の折れの部分より北側は追加されたものである可能性が高い。弥生土器壺(H-9・10)、甕(H-11・12)が出土している。

段状遺構5 図版48、写真図版64

北西斜面の南部、段状遺構4の南西隣に位置している。長さは4.0mと短く、平坦面の部分もほとんど残っていない。床面の標高は118.3m前後である。周壁溝は北端部で直角に折れているようである。ピットは周壁溝の内側から平坦面のやや下ぐらいいの間で検出されている。ピットの深さは20cm程度で、石のつまつたピットも存在している。弥生土器の底部(H-14)が出土している。

段状遺構6 図版48、写真図版64

北西斜面の東部、段状遺構9の下、SHO1の南西隣に位置している。長さは7.6m、平坦面の幅は1.6m程度である。床面の標高は122.8m前後である。周壁溝は1回造り直されている。山側の周壁溝は両端が直角に折れ、谷側の周壁溝は北端が弧状に折れている。ピットは山側の周壁溝の内側から平坦面の間で検出されているが、数は少ない。ピットの深さは10~20cm程度である。弥生土器壺の破片・打製石鎌(H-S2)が出土している。

段状遺構8 図版49

北西斜面の南部、芝花72号墳の墳丘下に位置している。南部は芝花72号墳の主体部1・2に切られている可能性が高い。長さは3.2m、平坦面の幅は60cm程度である。床面の標高は125.3m前後と弥生時代の遺構中最も高所に位置している。周壁溝は北端が直角に折れている。ピットは検出されていない。遺物は出土していない。

段状遺構9 図版49、写真図版64

北西斜面の東部、芝花73号墳の墳丘下に位置し、段状遺構10と隣り合っている。西側を大きく掘り込み、平面形は直角三角形を呈している。長さは4.0m、平坦面の幅は1.2m程度である。床面の標高は124.0m前後で、隣の段状遺構10とはほぼ等しい。他の段状遺構と異なり周壁溝やピットは設けられていない。弥生土器高杯(H-15)・甕(H-16)が出土している。

段状遺構10 図版48

北西斜面の東部、芝花73号墳の墳丘下に位置し、段状遺構9と隣り合っている。平面形は橢円形を呈している。長さは2.6m、平坦面の幅は1.8m程度である。床面の標高は124.1m前後で、隣の段状遺構9とほぼ等しい。他と異なり周壁溝やピットは設けられていない。磨製石包丁（H-85）が出土している。

SKO1 図版49、写真図版65

北東斜面の裾部で検出された。遺構の標高は117m前後と弥生時代の遺構中最も低い位置に位置している。直径1m前後の円形土坑を2つ並べたもので、検出面よりの深さは50cm程度である。東側の土坑内にはこの土坑に据えられていたと思われる大型壺（H-17）の上半部が残っていた。

木棺墓 図版50、写真図版66

北西斜面の南端部に位置し、段状遺構1を切っている。墓壙は等高線と平行に設けられ、墓壙の北側1.4mの所に墓壙と直交して溝状の土坑が設けられている。

埋葬施設は箱形木棺と考えられるが、北側の掘方の両側のみ黒い土が見られることからH形の木棺である可能性も捨てがたい。ただし、棺の痕跡は確認できなかったため、組合式の箱形木棺と考えておく。棺の長さは1.8m、幅60cmである。

墓壙は長さ2.6m、幅1.1mで、深さは60cmである。北辺の中央付近がやや内側にせり出している。

溝状の土坑は長さ2.6m、幅60cmで、深さは50cmである。断面はV字形である。

遺構に伴って遺物は出土していないが、墓壙が浅く、埋土が弥生中期の遺構のものに近いことから、弥生時代に属するものと考えたい。

第3節 遺物

1. 土器

SHO1 図版78、写真図版96

H-2は弥生土器短頸壺である。頸部に押圧突帯が廻らされている。

H-3・4は弥生土器甕である。口縁端部は拡張しない。H-4は大型である。

H-5は弥生土器底部である。体部外面はヘラミガキ、体部内面はナデが施されている。

段状遺構1 図版78、写真図版96

H-6は弥生土器甕である。口縁端部はわずかに上方へ拡張している。

H-7は弥生土器底部である。体部外面はかなり摩滅しているがヘラミガキが施されているようである。

段状遺構3 図版78、写真図版96

H-8は弥生土器広口壺である。口縁端部は水平に開き、下端が垂下して縁帯を作り出している。縁帯部には矢羽根状のキザミ目文、縁帯部と口縁部内面には円形浮文が施されている。口縁部内面の円形浮文はほとんど剥離しているが3つ程度を1単位として断続的に施されているようである。

段状遺構 4 図版 78、写真図版 96

H-9 は弥生土器広口壺である。口縁端部はやや拡張し、端面には矢羽根状のキザミ目が施されている。

H-10 は弥生土器広口壺の体部と思われる。体部外面には櫛描格子目文が入れられている。

H-11・12 は弥生土器甕である。H-11 は大型の器形で、口縁端部はわずかに上方へ拡張している。体部内面にはハケ後ナデが施されている。H-12 は口縁部が拡張せず、体部内面にはハケが施されている。H-13 は弥生土器底部である。体部外面にはヘラミガキが施されている。

段状遺構 5 図版 78、写真図版 95

H-14 は弥生土器底部である。体部外面にはハケが施されている。

段状遺構 9 図版 78、写真図版 95・96

H-15 は弥生土器高杯である。口縁部は内湾し、端面は水平である。端部外縁にキザミ目、口縁部外面に櫛描直線文が施されている。

H-16 は弥生土器甕である。口縁端部はわずかに上方へ拡張している。

SKO1 図版 79、写真図版 95

H-17 は弥生土器壺である。大型の器形で、口縁端部はわずかに上方へ拡張している。頸部には押圧突起が廻らされている。体部は球形に近い。体部外面にはナデ、体部内面にはハケ後ナデが施されている。

包含層 図版 79、写真図版 95・96

H-18・19 は弥生土器甕である。口縁部はやや内湾し、端部は上方へ拡張している。体部内面はハケ後ナデが施されている。H-19 は口縁部が拡張しない。体部内面はナデが施されている。

H-20 は弥生土器底部である。底部は穿孔されている。

2. 石製品 図版 80・81、写真図版 97・8

H-S1・2 は打製石鎌で、サヌカイト製である。H-S1 は凸基式で、重量は 1.4 g である。段状遺構 3 より出土したものである。H-S2 は凹基式で、重量は 0.8 g である。段状遺構 6 より出土したものである。

H-S3 は楔形石器である。サヌカイト製で、重量は 5.7 g である。調査区南西端の SHO1P03 より出土したものである。

H-S4・5 は磨製石包丁である。粘板岩製である。H-S4 は平面台形を呈し、側面は平滑に研磨されている。北西斜面より出土したものである。H-S5 は平面梢円形を呈している。紐孔は片側にかたよっている。段状遺構 10 より出土したものである。

H-S6 は磨製石斧の破片である。北西斜面より出土したものである。

H-S7 は砥石である。砂岩製である。表裏両面、両側面、端面とも使用されている。表面は非常によく使われ、側面の片側の研磨面は溝状である。SHO1 の埋土より出土したものである。上層の古墳時代後期に属する可能性も考えられる。

H-S8 は大型の磨製石包丁である。安山岩製である。表裏両面はよく磨かれているが、刃部は研磨されていない。重量は 900 g である。南西斜面より出土したものである。

第4章 古墳時代

第1節 概要

芝花古墳群は丘陵の西北部に位置し、北に延びる3つの尾根と西へ延びる1つの尾根に沿って古墳が累々と築かれている。今回調査した古墳はそのうち北側中央の尾根に位置している。尾根上に位置する芝花26～28号墳は以前より知られていたものであるが、中腹に位置する芝花72～74号墳は新たに古墳の存在が明確になったことにより古墳番号を追加したものである。

調査を行った芝花26～28号墳を含め北側中央の丘陵尾根上の古墳は、下から26号墳から36号墳まで11基並んでいる。このうち下から7基は方墳、上の4基は円墳と考えられている。芝花72～74号墳は西側から尾根先端の中位を「U」字状に囲繞して立地している。墳形は方墳である。出土した土器から調査した古墳は前期のものと考えられる。

この他、芝花73・74号墳のすぐ下からは古墳時代前期の段状造構1基、古墳時代後期に弥生時代の堅穴住居跡SHO1が埋没した後の平坦面を利用した痕跡などが確認された。

第2節 芝花28号墳

1. 墳丘 図版51・52、写真図版68

調査区の南端部の最高位所にあたり、墳丘頂部の標高は133.1mである。墳丘の西部は後世の攪乱を受けて削平されている。墳丘は地山を削り出して成形されており、墳裾部で南北9.5m、東西7.0m以上の方形のプランと思われる方墳である。南に隣接する芝花29号墳との境界には尾根を断ち切る東西の深い周溝を設けて区画されている。墳頂部と溝との比高差は約90cmである。東側墳裾部は大きく地山を掘削して、平面直角三角形のテラス面が作り出されている。テラス面と墳頂部の比高差は約1.1mである。墳頂部の平坦面は南北6.7m、東西4.5m以上である。攪乱が顕著で、1基の埋葬主体部の残存を検出したにとどまる。

2. 主体部 図版52、写真図版69

主体部は墳頂のやや南よりに位置し、尾根と直交して東西に主軸方位をもつものと考えられる。主体部の大半は木根及びモグラの巣によって攪乱を受けており、主体部東半の小口部を部分的に確認したにとどまる。

埋葬施設の残された小口は丸く收まり、この小口と側面は少し湾曲して立ち上がっている。底部と側面にはわずかに粘土が貼りつけられており、棺を被覆していたようである。棺の幅は70cmで、残存部の深さは35cmである。墳頂部からの深さは約90cmである。残された棺の形状からすると直径70cm程度の刳り抜き式の木棺である可能性が高い。棺内には径10～20cmの角礫が残っており、棺を固定するために使われた可能性が考えられる。

墓壙は2段墓壙で、平面形は長方形であったと考えられる。幅は2.2mと推定される。

3. 出土遺物 図版82、写真図版99

遺構検出時に土師器の底部（H-21）が出土したのみである。底部は丸底にみえるが、わずかに平底の痕跡を残しているようである。内外面ともナデが施されているようである。

第3節 芝花27号墳

1. 墳丘 図版53・54、写真図版70

芝花28号墳の北に隣接する。墳頂部を平坦に整えるのみで、明瞭な墳丘はもたない。墳丘の西部裾は大きく搅乱されている。墳頂部の標高は131.6mである。墳頂部の平坦面は南北10.5m、東西8.0m前後の長方形のプランを呈している。平坦部の中央南よりに主体部1、平坦面の中央北端で主体部2の2基の埋葬主体部を検出し、中心部には主体部は存在しない。

墳丘上やその周辺から土師器壺（H-22・23）が出土している。

2. 主体部1 図版54、写真図版70・71

主体部1は28号墳の墳裾より1.5mのところに位置し、北側の主体部2とは4.5m離れている。主体部は尾根と直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、長さ2.6m、幅1.7m、深さ65cmである。

埋葬施設は木棺と考えられるが、埋土中で棺の痕跡を確認することはほとんどできず、掘方底の棺部分の凹みによってのみその存在を伺うことができたにすぎない。長さ2.0m、幅80cmで、調査時には組合式の箱形木棺と考えたが、棺部分の壁があまり立ち上がらないことから剝り抜き式の木棺の可能性も考えられる。

主体部に伴って遺物は出土していない。

3. 主体部2 図版54、写真図版71

主体部2は27号墳の北端に位置し、南側の主体部1とは4.5m離れている。主体部は尾根と直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、長さ3.35m、幅1.5m、深さ80cmである。

埋葬施設はH字形組合式木棺である。長さは2.4mで、幅は東小口側で64cm、西小口側で58cmと東側が広い。側板の厚さは6～7cm程度である。

直径30cm程度の扁平な石が棺上部で検出された。棺の陥没によってやや落ち込んだもので、当初は墓壙上に標石として据え置かれていたものと推定される。その他、主体部に伴って遺物は出土していない。

4. 出土遺物 図版82、写真図版99

主体部からは土器や鉄器などの遺物は出土しておらず、墳丘上やその周辺から土師器壺の破片がわずかに出土しているのみである。

H-22は土師器直口壺である。口縁端部のみつままれてやや外反している。墳丘東側から出土したものである。

H-23は土師器壺である。頸部にはキザミ目突帯文が廻らされ、その下には櫛描直線文と櫛描波状文が

ラフに施されている。墳丘上の南部から出土したものである。

第4節 芝花26号墳

1. 墳丘 図版55・56、写真図版72

27号墳の北、尾根の最先端部に位置する。墳頂部の標高は129.7mである。墳丘の規模は墳裾で南北8.7m、東西10.5mの長方形を呈し、墳頂部は南北6.4m、東西7.6mである。墳丘の高さは南側周溝底より60cmである。墳丘の南側はコの字形に周溝がめぐらされている。墳丘は、墳頂部南半を平坦に削平し、周溝部分を削り出した後、墳頂部南半では厚さ20cm、北半部では厚さ40cm程度の盛土がなされている。

墳頂部では木棺を埋葬施設とする主体部3基と土器棺2基を検出した。墳頂部中央南よりに主体部1、それを主体部1の北側辺を切って主体部2、主体部1の南東隅を切って主体部3、主体部1の南西隅を切って土器棺1、主体部2の北東隅を切って土器棺2が配されている。この他、東側周溝外では土壇墓が検出されている。

2. 主体部1 図版57、写真図版72・73

主体部1は墳頂部中央南よりに位置している。北側辺を主体部2、東南隅を主体部3、西南隅を土器棺1に切られている。主体部は尾根と直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、2段墓壙を呈している。長さは4.25m、幅は2.3m程度と推定される。棺底までの深さは115cmである。

埋葬施設は棺底でのみわずかに検出した側板の痕跡からH字形組合式木棺と考えられる。ただし、東側小口及び北東隅の側板は検出できなかった。棺の長さは3.0mで、幅は60cmである。側板の厚さは8cm程度である。

棺中央部の検出面より10~20cm下から土師器直口壺(H-24)・小型丸底鉢(H-26)・鼓形器台(H-28)・小型器台(H-27)が出土している。棺の陥没によって墓上の供獻土器がやや落ち込んだものと考えられる。また、50cm×25cm大の扁平な石が棺中央部の南側辺上の検出面で検出された。墓壙上に標石として据え置かれていたものと推定される。棺内床面から遺物は出土していない。

3. 主体部2 図版57、写真図版74

主体部1は墳頂部中央部北よりに位置している。南側に位置する主体部1の北側辺を切り、西北隅を土器棺2に切られている。主体部は尾根と直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、規模は長さ4.35m、幅は2.1m、深さ90cmである。

埋葬施設は東小口側の棺底でのみわずかに検出した側板の痕跡からH字形組合式木棺と考えられる。棺の長さは3.0mで、幅は65cmである。

埋葬施設に伴って遺物は出土していない。

4. 主体部3 図版58、写真図版74

主体部3は墳頂部南東部に位置し、主体部1の南東隅を切っている。主体部は尾根と直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、規模は長さ2.25m、幅85cm、深さ90cmである。

埋葬施設は棺底でのみわずかに検出した側板の痕跡からH字形組合式木棺と考えられる。棺の長さは1.8mで、幅は東小口側で37cm、西小口側で30cmである。側板の厚さは6cm程度である。

棺内床面の北側板沿いの東小口よりから鉈（H-M1）、北側板沿いの西小口よりから刀子（H-M2・3）が出土している。

5. 土器棺1 図版59、写真図版75

墳頂部の南西部に位置し、主体部1の南西隅を切っている。直径55cm、深さ35cmの円形土坑の掘方に、土器棺が据えられている。土師器壺（H-33）の頸部から上を割りはずして棺身とし、完形の土師器壺（H-32）を割って3重に重ねて蓋としている。棺身は口を斜めに向けて置かれている。

6. 土器棺2 図版59、写真図版76

墳頂部の北東部に位置し、主体部2の北東隅を切っている。長径60cm、短径48cm、深さ28cmの楕円形土坑の掘方に、土器棺が据えられている。土師器壺（H-30）の体部上部より上を削りとり棺身とし、同様の土師器壺（H-31）を合わせ口に載せて蓋としている。棺身は口を斜めに向けて置かれ、蓋も同様に傾けて載せられている。

7. 土壙墓 図版58、写真図版74

東側周溝外の東側約1mの斜面地で検出された。墓壙は等高線に平行に設定されている。

墓壙は平面長方形で、規模は長さ1.2m、幅60cm、深さ40cmである。東辺側は段をもち2段墓壙状になっている。東辺側でのみ掘方状の堆積が認められたが、木棺の痕跡は確認できなかった。

南側床面で鉈（H-M4）、木質片が出土している。

8. 出土遺物 図版82・83、写真図版99・100

土師器直口壺（H-24）・小型丸底鉢（H-26）・鼓形器台（H-28）・小型器台（H-27）は主体部1の棺上、土師器壺（H-25）は墳頂部検出時、土師器壺（H-29）は南側周溝から出土している。土師器壺（H-30・31）は土器棺1、土師器壺（H-32・33）は土器棺2の棺身として用いられたものである。

鉄製品は鉈（H-M1）、刀子（H-M2・3）が主体部3の棺内床面、鉈（H-M4）が土壙墓床面から出土している。

H-24は土師器直口壺である。口縁部は直線的に開き、体部は下ぶくれである。頸部には断面3角形の突帯が廻らされている。体部内面はナデ、底部内面はハケが施され、外面及び口縁部内面は摩減している。

H-25は土師器壺である。口縁部は内湾し、端部はやや外傾する面をもつていて。口縁部外面はハケ後ナデ、口縁部内面はヨコハケが施されている。

H-26は土師器小型丸底鉢である。口縁部は内湾し、底部はやや尖り気味である。底部内面は板ナデ、底部外面はナデが施され、体部内外面及び口縁部内外面はヘラミガキが施されている可能性が高い。

H-27は土師器小型器台である。受部は皿形で、口縁部はわずかに上方へつまみ出されている。脚部内面はヘラケズリが施され、外面は摩減している。

H-28は土師器鼓形器台である。表面はほとんど摩滅しているが、受部内面はわずかにヘラミガキが施されている。

H-29は土師器甕である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面はナデが施されている。

H-30は土師器壺である。体部は球形で、底部は平底である。体部外面は磨滅しているが、粘土紐の接合痕が顕著である。体部内面上半はナデ及びユビオサエが施され、体部内面下半は摩滅している。

H-31は土師器壺である。体部上端から上は土器棺として利用するため削り取られている。体部は球形で、底部は平底である。体部外面はほとんど摩滅しているが、体部上半に指頭痕が認められ、体部下端には板ナデが施されている。体部内面上半は板ナデが施され、体部内面下半は表面が剥離している。

H-32は土師器甕である。口縁部は内彎気味で、口縁部の下部がふくらんでいる。体部はわずかに倒卵形気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はヨコハケ、体部外面中位はタテハケ後部分的にヨコハケ、体部外面下位はタテハケ、体部内面はヘラケズリ、底部内面にはユビオサエが施されている。外面には所々にススが付着している。

H-33は土師器甕である。体部はやや上下に長細い。頸部から上は土器棺として利用するため削り取られている。体部外面はタテハケ及び斜め方向のハケ後上端のみヨコハケ、体部内面はハケ後ヘラケズリが施されている。底部は孔を開けている可能性がある。

H-M1は鎌である。残存長は7.05cmである。刃部と身部の幅はほぼ同じである。刃部は鍔をもち、反りは認められない。身部は幅0.65cm、厚さ0.4cmで、断面は長方形である。

H-M2・3は刀子と思われる。両者は近接した位置で出土しており、同一個体の可能性が高い。H-M2は刃が不明瞭であるが刃部と思われ、H-M3は幅が細く茎部と思われる。H-M2には片面の一部に木質、H-M3には片面一部に木質と布の付着が認められる。

H-M4は鎌である。残存長は7.5cmである。刃部と身部の幅はほぼ同じである。刃部はやや不明瞭であるが、先端部に反りをもっている。身部は幅0.8cm、厚さ0.35cmで、断面は長方形である。裏面に木質が付着している。

第5節 芝花72号墳

1. 墳丘 図版60～63、写真図版77・80

尾根先端中位を「U」字状に囲繞する古墳のうち、南西に位置し、南側は調査区外に延びている。北側の73号墳とは5m離れている。墳頂部の標高は126.3mである。墳丘の西南部は大きく攢乱を受けているが、墳裾で南北10m以上、東西は8mの台形を呈し、墳頂部の規模は、東西5m、南北は8.5m以上の長方形を呈している。墳丘の東側は深さ30cm程度の浅い周溝で区切られ、北側は周溝とするには明瞭ではないが、墳裾部分がわずかにくぼんでいる。

72号墳の東側から73号墳の南側にかけての斜面を大きく削りだして帶状の平坦面が造り出されていることから73号墳との間も平坦面となっている。墳丘はこの平坦面上に厚さ10～60cmの盛土がなされているが、最上層の明赤褐色土は埋葬後に墳頂部を覆った化粧土と考えられる。

墳頂部では木棺を埋葬施設とする主体部3基を検出した。墳頂部の南側で主体部3、墳頂部の北側で主体部2、主体部2の北西部を切って主体部1が配されている。この他、墳裾の1.5m北側で土器棺を検

出した。

2. 主体部3 図版64、写真図版77・78

主体部3は墳頂部南側に位置し、南端部は調査区外である。主体部は等高線に平行して南北に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、棺部分のみさらに浅く埋められており、2段墓壙を呈している。長さは4.5m以上、幅は3.0mである。棺底までの深さは1.5mである。

埋葬施設は棺底部の横断面が弧状で、北小口付近の底部がわずかに反り上がっていることから船底状木棺と考えられる。棺材の痕跡は底部で検出され、厚さは4cmである。棺の長さは3.1m以上で、幅は中央部で70cm、北側小口部60cmである。

棺内南よりの床面では遺物が出土している。中央に人の頭骸骨及び下頬骨の破片が残存しており、その西側で鉢(H-M5)が置かれていた。人骨のやや北東では、意図的に置かれたものか分からぬが径3cm程度の小石が2つ見つかっている。

3. 主体部2 図版65、写真図版79

主体部2は墳頂部北側に位置し、南側の主体部と80cm離れている。北西部は主体部1に切られている。主体部は等高線に直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、主体部3と同様に棺部分のみさらに浅く埋められており、2段墓壙を呈している。長さは3.6m、幅は1.35mである。棺底までの深さは1.5mである。

埋葬施設は棺底部の横断面が弧状であり、縦断面も弧状を呈している。主体部3と同様に船底状木棺の可能性が高い。棺材の痕跡は検出できなかった。棺の長さは3.1mで、幅は中央部で58cm、東側小口部で42cm、西側小口部で50cmである。

主体部に伴って遺物は出土していない。

4. 主体部1 図版65、写真図版79

主体部1は墳頂部北側に位置し、主体部2の北西部を切って設けられている。主体部は主体部2と同様に等高線に直交して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、主体部3と同様に棺部分のみさらに浅く埋められており、2段墓壙を呈している。長さは2.3m、幅は1.4mである。棺底までの深さは92cmである。

埋葬施設は棺底部の横断面が弧状であるが、縦断面は直線的である。棺の長さは2.2mで、幅は中央部と小口部ではほとんど変わらず40cm程度である。主体部2・3と比べると割竹形木棺の可能性がある。棺材の痕跡は検出できなかった。

主体部に伴って遺物は出土していない。

6. 土器棺 図版65、写真図版80

72号墳の墳裾より北側1.5m、浅い溝状の窪みのすぐ北側の平坦な部分に位置している。長径60cm、短径55cm、深さ27cmの楕円形土坑の掘方に、土器棺が据えられている。棺身は土師器壺(H-34)を横たえ、口縁部を平たい石で塞いで蓋としている。さらに口縁部と蓋石の接合部の上に別の平たい石を載せて、

目地を詰めている。

7. 出土遺物 図版83、写真図版101

主体部3棺内床面で鉈が出土し、土師器壺（H-34）は土器棺の棺身として用いられたものである。

H-34は土師器壺である。口縁部は直線的に高く伸び、端部は丸味をもっている。体部は倒卵形に近い。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、体部外面は不定方向のハケ、体部内面はヘラケズリ、底部内面はユビオサエが施されている。

H-M5は鉈である。残存長は17cmと長い。刃部と身部の幅はほぼ同じである。刃部は鎌をもち、反りは認められない。身部は幅0.6cm、厚さ0.35cmで、断面は長方形である。刃部付近の表面に布がわずかに付着している。

第6節 芝花73号墳

1. 墳丘 図版66・67、写真図版81

尾根先端中位を「U」字状に周囲する古墳のうち、北西に位置している。南側の72号墳とは5m、東側の74号墳とは3m離れている。墳頂部の標高は125.5mである。墳裾で東西13m、南北6.4mのいびつな台形を呈し、墳頂部の規模は、東西9.5m、南北は4.8mのいびつな台形を呈している。墳丘の南側と東側は深さ20cm程度の浅い周溝で区切られ、西側には周溝は認められない。墳丘は南側を72号墳の西側から一体的に大きく掘削して平坦面を造り出し、北側の斜面部に厚さ最高60cmの盛土がなされている。

墳頂部では木棺を埋葬施設とする主体部4基と土壙墓（SK02）を検出した。墳頂部の中央に主体部3が位置している。主体部1は主体部3の南東隅、主体部4は主体部3の北西隅、SK02は主体部3の南西隅を切り、主体部5は主体部3の北東側に位置している。

2. 主体部3 図版68、写真図版82・83

主体部3は墳頂部中央に位置し、主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。調査時には主体部3の中央南よりに主体部2を想定したが、その後の検討の結果、棺上部の落ち込みを棺と誤認したものと考えている。

墓壙は平面長方形で、棺部分のみさらに浅く窪められており、2段墓壙を呈している。長さは4.7m、幅は4.3mである。棺底までの深さは1.5mである。

埋葬施設は棺の小口部で側板間が削り残されていることから、H字形組合式木棺と考えられる。棺の長さは3.4mで、幅は90cmである。棺の痕跡は検出できなかった。

棺内西よりの床面では遺物が出土している。中央に赤色顔料（水銀朱）が薄く付着した人の頭骸骨の破片が残存しており、その北東側では赤色顔料が残存していた。人骨の南側では剣（H-M6）、北側では鉈（H-M7）が出土している。

棺中央部の南よりのほぼ検出面では土師器直口壺（H-35）・高杯（H-36）・鼓形器台（H-37）が出土している。棺の陥没によって墓上の供献土器がわずかに落ち込んだものと考えられる。

3. 主体部1 図版69、写真図版83

主体部1は墳頂部南東側に位置し、主体部3の南東隅を切っている。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、長さは2.45m、幅は1.0mである。棺底までの深さは70cmである。

埋葬施設は箱形の組合式木棺と推定されるが、棺材の痕跡は検出できなかった。棺の長さは1.9mで、幅は40cmである。

主体部に伴って遺物は出土していない。

4. 主体部4 図版69、写真図版84

主体部4は墳頂部南東側に位置し、主体部3の北西隅を切っている。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、長さは3.2m、幅は1.3mである。棺底までの深さは85cmである。

埋葬施設は箱形の組合式木棺と推定されるが、棺材の痕跡は検出できなかった。棺の長さは1.85mで、幅は78cmである。

主体部に伴って遺物は出土していない。

5. 主体部5 図版69、写真図版84

主体部5は墳頂部北東側に位置している。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は墳丘盛土を撤去した後に検出したため、規模は不明瞭であるが、断面で確認したところ幅は94cmである。棺底までの深さは66cmである。棺部分のみがさらにくぼむ2段墓壙であったと推定される。

埋葬施設は箱形の組合式木棺と推定されるが、棺材の痕跡は検出できなかった。棺の長さは1.5mで、幅は50cmである。

主体部に伴って遺物は出土していない。

6. SKO2 図版69、写真図版84

主体部5は墳頂部南西側に位置している。主体部3の南西隅を切っており、土壙墓と考えられる。

平面形は長120cm、幅85cmの隅丸方形を呈している。深さは50cmである。

土壙東よりのほぼ検出面で土師器甕（H-38）が出土している。

7. 出土遺物 図版84、写真図版101・102

土師器直口壺（H-35）・小型高杯（H-36）・鼓形器台（H-37）は主体部3の墓壙上面、土師器壺（H-38）はSKO2の埋土上面で出土したものである。

鉄製品は剣（H-M6）と鏃（H-M7）が第3主体部棺内床面で出土している。

H-35は土師器直口壺である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸味をもっている。外面はナデが施されている。

H-36は土師器高杯である。杯部は皿形で、口縁部が外反し、口径が大きい。杯部底部の充填粘土は剥離している。脚部は脚裾部で大きく外反し、3方の円形透かしが穿たれている。

H-37は土師器鼓形器台である。口縁端部は丸味をもち、脚端部は丸味をもっている。表面は摩減して

いる。

H-M6は剣である。全長は35.95cmである。剣身長は23.75cmで、鎬は認められない。関は直角關である。茎部は長く12.2cmを測る。目釘孔は2ヶ所認められる。剣身部の表裏両面の一部に布が付着している。布目は7本/5mm程度の粗いものと10~8本/5mm程度の細かいものが認められる。また片面には動物の毛状のものが付着している。

H-M7は鉈である。残存長は9.95cmである。身部より刃部に向かって細くなっている。刃部は鎌をもたず、反りがある。身部は幅0.55cm、厚さ0.2cmで、断面は長方形である。身部付近の表面と両側面のほぼ全体に木質が付着し、身部の裏面の刃部に近い部分では他の部分と木目の方向が直交する木質が付着している。

第7節 芝花74号墳

1. 墳丘 図版70・71、写真図版85

尾根先端中位を「U」字状に囲繞する古墳のうち、北東に位置している。西側の73号墳とは3m離れている。墳頂部の標高は125.5mである。墳裾で東西12.5m、南北6.5mのいびつな台形を呈し、墳頂部の規模は、東西10.7m、南北は4.2m以上のいびつな長方形を呈している。墳丘の南側と東西は周溝で区切られ、南側と東側は深さ20cmと浅く、西側は深さ50cmと深い。墳丘は南側を大きく掘削して平坦面を作り出し、北側の斜面部に厚さ最高80cmの盛土がなされている。

墳頂部では石棺を埋葬施設とする主体部3基と土壙墓と考えられる主体部（主体部4）1基を検出した。いずれも小規模な主体部で、明瞭な中心主体は見いだせない。墳頂部の西部に主体部1、中央部に主体部2、東部に主体部3が並んでいるが、軸線は南北にそれぞれずれている。主体部4は主体部2の南西隣で、周溝にかけて設けられている。

2. 主体部1 図版72・73、写真図版86・87

主体部1は墳頂部の西部に位置している。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。墓壙は平面隅丸長方形で、石棺底の部分のみさらに浅く掘りくぼめられている。長さは2.3m、幅は1.6mである。墓壙底までの深さは130cmである。

埋葬施設は小型の組合式石棺である。棺は蓋・側壁・小口・底の6面に石材を用いている。底石は浅く埋められた部分に4石を並べている。側壁は2石を用い、東側の石を内側にして重ねている。小口は1石を用いている。底と小口との隙間の棺内の部分に石を置いて目地を埋めている。蓋は4石を並べ、棺身との隙間を小石で埋めている。棺の規模は内法で、長さ90cm、東側小口の幅26cm、西側小口の幅16cm、高さ30cmである。

棺内東側の床面では鉈（H-M8）、棺直上から土師器短頸壺（H-39）が出土している。

3. 主体部2 図版74、写真図版88・89

主体部2は墳頂部の中央部に位置している。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。墓壙は平面梢円形で、側壁底の部分のみさらに浅く掘りくぼめられている。長さは1.9m、幅は1.0mである。墓壙底までの深さは134cmである。

埋葬施設は小型の組合式石棺である。棺は蓋・側壁・小口の5面に石材を用いている。側壁は3石で、東側により大きな石を用いている。側壁間の上部は小石で目地を埋めている。小口は1石を用いている。側壁と同様に東側壁により大きな石を用いている。蓋は比較的大きな2石で塞ぎ、蓋石間と西側小口との間をやや大きな石で塞いでいる。棺の規模は内法で、長さ96cm、東側小口の幅30cm、西側小口の幅14cm、東側小口の高さ26cm、西側小口の高さ20cmである。

棺直上からほとんど破損してしまっているがH-39と同様の土師器短頸壺が出土している。

4. 主体部3 図版75、写真図版90・91

主体部3は墳頂部の東部に位置している。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面橢円形で、長さは1.5m、幅は1.0mである。墓壙底までの深さは94cmである。

埋葬施設は小型の組合式石棺である。棺は蓋・側壁・小口の5面に石材を用いている。側壁は2石で、東側により大きな石を用いている。小口は1石を用いている。側壁と同様に東側壁により大きな石を用いている。蓋は比較的大きな1石で塞ぎ、西側小口との間を石を3重ねて塞いでいる。棺の規模は内法で、長さ58cm、幅24cm、東側小口の高さ24cm、西側小口の高さ18cmである。

主体部に伴って遺物は出土していない。

5. 主体部4 図版76、写真図版92

主体部4は墳頂部の南部に位置している。主体部2の南西隣で、周溝にかけて設けられている。主体部は等高線に平行して東西に主軸方位をもっている。

墓壙は平面長方形で、長さは2.0m、幅は1.35mである。墓壙底までの深さは84cmである。

埋葬施設は不明瞭で、土壙墓と考えられる。墓壙内には掘方が認められるが、木棺の痕跡は確認されなかった。掘方内の形状は隅丸方形で、長さ114cm、幅68cmである。

主体部に伴って遺物は出土していない。

6. 出土遺物 図版85、写真図版102

土師器短頸壺（H-39）が主体部1の棺直上から出土している。主体部2の棺直上からH-39と同様の土師器短径壺が出土しているが破損が著しいため図化していない。鉄製品は主体部1の床面から鏃（H-M8）が出土している。

H-39は土師器短頸壺である。口縁部は外反し、体部はやや扁平な球形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面上半はナデ、体部外面下半は板ナデ、体部内面はエビオサエが施されている。

H-M8は鏃である。残存長は5.5cmである。刃部は身部とほぼ同じ幅である。刃部には鷲は認められないようで、反りがある。身部は幅0.8cm、厚さ0.3cmで、断面は長方形である。

第8節 その他の遺構

段状遺構7 図版76、写真図版102

芝花73号墳の北東、芝花74号墳の南東に隣接して位置している。斜面を削りだして平坦面を造り出している。平面形は長方形を呈し、長さは6.0m、平坦面の幅は2.6cm程度である。床面の標高は123.3mで

ある。西端部の床面で古墳時代前期の土師器壺（H-40）・甕（H-41）・器台（H-42）が出土している。

S H O 1 上層平坦面 図版46、写真図版61

弥生時代の竪穴住居跡S H O 1の埋土上層（1～3層）からは古墳時代後期の須恵器杯身（H-43～45）、土師器高杯（H-46～48）・碗（H-49・50）・甕（H-51・52）などが出土している。この時期の遺物はこの地点でのみまとまって出土しており、明瞭な遺構は伴わないもののS H O 1埋没後の平坦面が利用されたことがうかがわれる。

第9節 その他の遺物

1. 土器

段状遺構7 図版83、写真図版102

H-40は土師器直口壺である。口縁部はやや外反しながら高く伸び、底部はやや尖り気味である。H-24ほど明瞭ではないが頸部下端に突帯が廻らされている。表面は摩滅している。

H-41は土師器器台である。口縁部は2重口縁で、2次口縁は外反している。口縁部内外面はヘラミガキ、脚柱部外面及び脚裾部外面はタテハケが施されている。

H-42は土師器甕である。口縁部は2重口縁で、1次口縁部の外縁が鋭く稜をなしている。

S H O 1 上層平坦面 図版103、写真図版85

H-43～45は須恵器杯身である。H-43は口縁部の立ち上がりが低く、端部に面をもたない。器壁が厚い。H-44は口縁端部に面をもたない。H-45は口縁端部に内傾する面をもっている。底部は板ナデが施されている。

H-46～48は土師器高杯である。H-46は碗形高杯の杯部である。H-47・48は高杯の脚部である。脚柱部は中実で、脚裾部は円盤状である。脚柱部外面はヘラミガキ、脚裾部外面はナデ、脚裾部内面はヨコナデが施されている。

H-49・50は土師器碗である。H-49は底部が丸底と思われ、口縁端部のみ外反気味である。底部外面にハケが施されている。H-50は口径が小さいが、深手である。底部が丸底で、底部外面にナデが施されている。

H-51・52は土師器甕である。H-51は口縁部が外反し、端部は丸味をもっている。H-52は口縁部が直線的に開き、口縁端部に面をもっている。

第5章 中世

第1節 概要

丘陵尾根裾の北端部付近で、12世紀の土坑2基（SKO2・03）と14・15世紀の集石墓が検出された。

第2節 遺構

SKO2

調査区北端より約5m南側、芝ヶ端遺跡との比高差約1mのところに位置している。長110cm、幅55cmの平面隅丸長方形を呈し、深さは20cmである。

埋土から土師器皿（H-53）が出土している。

SKO3

調査区北端より約5m南側、芝ヶ端遺跡との比高差約1mのところに位置している。長125cm、幅75cmの平面隅丸長方形を呈し、深さは60cmである。

埋土から須恵器碗（H-54）が出土している。

集石墓 図版77、写真図版94

丘陵尾根裾の北端部付近、芝ヶ端遺跡との比高差0.7mのところに位置している。長さ5.0m、幅2.6mの平坦面を造りだし、約40cmから握り拳大の自然石を、長さ2.8m、幅0.8mにわたって敷きつめている。あまり明瞭ではないが、中央のやや大きな石が用いられている部分とその両脇のやや細かい石が用いられている部分との3つ程度の分かれがある。集石の隙間からは火葬骨片のほか、土師器鍋、須恵器捏鉢、備前焼壺、集石の南側に接して石仏（H-S11）が出土している。

集石部の南側の斜面は直径1m程度の円形に掘りくぼめられている。この部分からは石仏2点（H-S9・10）が出土している。集石部出土の石仏もこの部分から転落したものであろう。

第3節 遺物

1. 土器

SKO2 図版85、写真図版104

H-53は土師器皿である。手づくね成形のものである。

SKO3 図版85、写真図版104

H-54は須恵器碗である。底部は糸切りである。

集石墓 図版85、写真図版104

H-56は土師器鍋である。鉄かぶと形の鍋で、体部外面に平行タタキが施されている。

H-57は須恵器捏鉢である。口縁部断面が半球状に丸味をもっている。

H-58は備前焼壺である。体部内外面は回転ナデ、底部内外面はナデが施されている。

包含層 図版85、写真図版104

H-55は土師器底部である。高い平高台をもち、底部は糸切りである。

2. 石製品

集石墓 図版86・87、写真図版105

H-S9～11は石仏である。いずれも板碑形石仏である。H-S9・10の像容は阿弥陀如来像で、頭部に肉髻をもたない。手は定印を結んでいることを示すのか上へ少し盛り上がっている。左腕の下は袈裟の垂れ下がった状態が表現されている。H-S11の像容は地蔵菩薩で、胸部に前掛け状の表現が認められる。手は合掌し、下部は弧状の線で表現されている。鑿痕が顕著である。

H-S12は砥石である。撥形を呈し、側面の4面が使用されている。砂岩製である。

第6章 自然科学的分析

第1節 芝花古墳群出土の人骨について

京都大学大学院理学研究科
片山一道

芝花73号墳主体部3と芝花72号墳主体部3では直葬されたとおぼしき人骨、集石墓では火葬骨が遺存していた。

1. 芝花73号墳主体部3 写真図版106

人間の頭蓋骨の破片が少々出土しただけである。以下の1～9では、どの部位か同定できた骨片について、その部位と形態特徴を記す。

1. 前頭骨の眼窩上縁部の微小破片であり、前頭骨頸骨縫合を含む。眼窩上縁が鈍角気味に厚いことから男性骨の特徴が認められる。
2. 左頭頂骨の鱗状縫合を含む断片である。
3. 頭蓋冠の破片であるが、頭頂骨の一部であろうか。
4. 側頭骨の外耳道上部周辺の破片である。
5. 右側頭骨の外耳道周辺（外耳道骨腫、フュケ孔ともになし）の破片である。
6. 左蝶形骨の破片であり、卵円孔を含む。
7. 後頭骨の底部の断片である。右後頭頸前部の三分の2ばかりと斜台の右半分を含む。右側の舌下神経管を観察できるが、二分されてはいない。蝶形骨後頭骨軟骨結合は完全に癒合しており、成人骨であること、20歳をかなり過ぎた年齢で死亡したことが推測できる。
8. 左側頭骨の断片であり、錐体の一部である。
9. 右側頭骨の断片であり、錐体の一部である。

上記の1から男性骨と判別でき、7からは、すでに成人に達した年齢で死亡した人物の遺骨であると推測できる。

2. 芝花72号墳主体部3 写真図版107

ここからは人間の頭蓋骨および下顎骨の破片が出土した。それらの内訳は次の通りである。ごく僅かの骨しか残っていないので、残念ながら、性別は判定できないし、死亡年齢も推定できない。でも、成人の骨であることは間違いないようだ。

1. 側頭骨の錐体の一部と思われるもの。
2. 同じく側頭骨の錐体の一部と思われるもの。
3. 下顎骨の破片で、右下顎枝の上部周辺（下顎孔が見え、筋突起と関節突起基部を含む）である。

3. 集石墓 写真図版107

ここで出土した骨は火葬骨と考えられる。長骨の一部が認められるが、人間の骨であるかどうか、判別できない。いずれにせよ、生骨が焼成したものである。焼け歪み、表面に多くのヒビが入り、完全に石灰化していることから、強い温度の火を受けたことが分かる。

第2節 芝花73号墳出土人骨付着赤色顔料分析

株式会社パレオ・ラボ（竹原弘展）

1.はじめに

朝来市山東町和賀に所在する芝花古墳群の芝花73号墳より出土した人骨に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、塗彩されている赤色顔料を検討した。

2.試料と方法

分析対象資料は、芝花73号墳主体部3より検出された人の頭蓋骨破片に付着している赤色顔料で、時期は古墳時代前期と見られている（第12図左上）。

分析装置は㈱堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。この装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのRhターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はNa～Uであるが、Na、Mgといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.58mA（自動設定による）、ビーム径100 μ m、測定時間1500s、パルス処理時間P4（分解能を重視した設定）に設定した。定量分析は標準試料を用いないFP（ファンダメンタル・パラメーター）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

分析箇所は、表面に付着物等の少ない箇所を選んで測定した。第12図に分析ポイントを示す。

3.結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第12図に示す。HgとSが検出された。他にAl、Si、P、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Cu、Srが検出された。

4.考察

古墳時代に使用されていた赤色顔料としては、朱（水銀朱）とベンガラに大別される。水銀朱は、硫化水銀HgSで鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄Fe₂O₃（鉱物名赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬、2004）、広範な地域で採取可能である。

当資料からは、骨の主成分P、Ca、土中成分と見られるAl、Si、K、Ti、Mn、Fe等に加えて、通常はほとんど存在しないHgが多く検出され、またSも多く検出されていることから、使用されている赤色顔料は水銀朱とほぼ特定できる。

5.おわりに

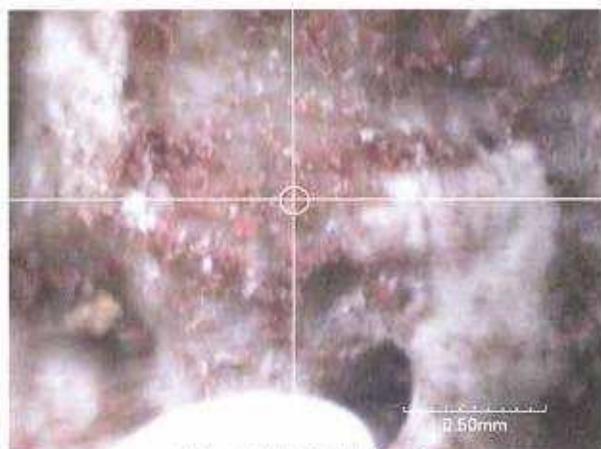
芝花73号墳出土人骨に付着していた赤色顔料について分析した結果、HgとSが多く検出されたことから、使用されている赤色顔料は水銀朱であることが判明した。

引用文献

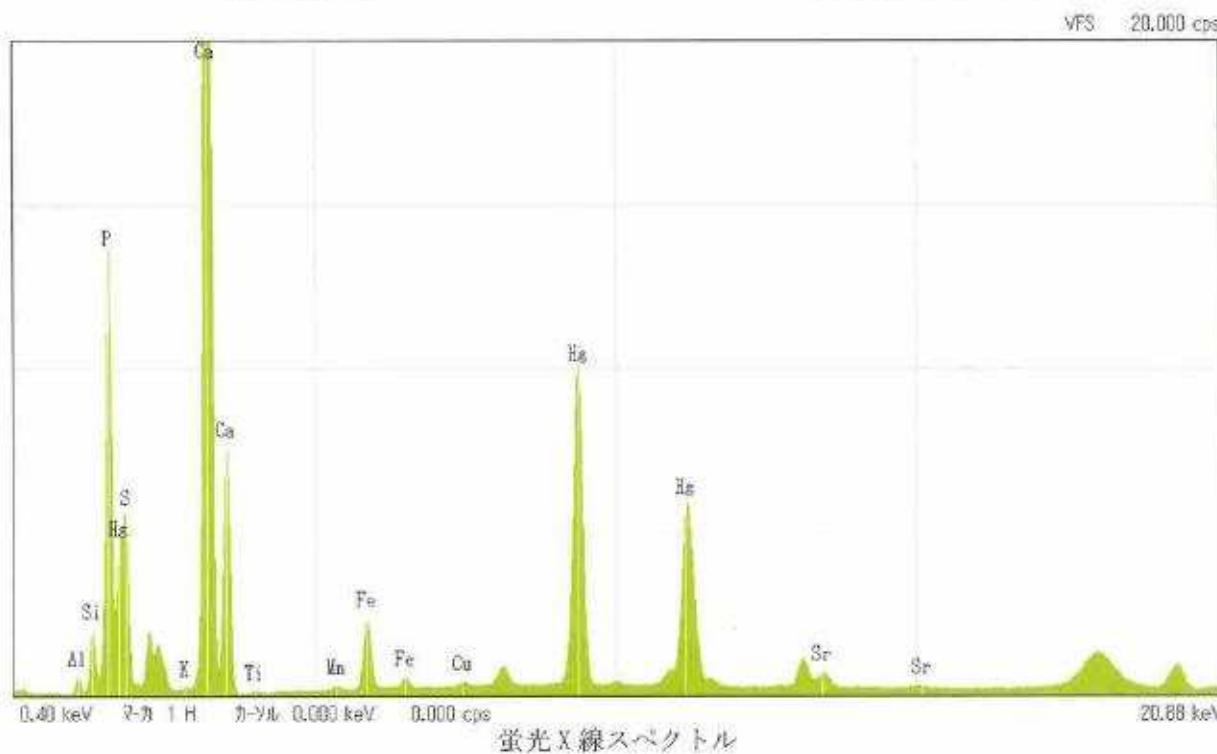
成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料、正倉院紀要、13-61、官内庁正倉院事務所。



分析対象資料



蛍光X線分析ポイント



元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/mA]
13 Al	K	3.23	0.21	9.21
14 Si	K	4.85	0.13	34.57
15 P	K	18.00	0.15	264.28
16 S	K	2.49	0.08	55.71
19 K	K	0.04	0.03	0.75
20 Ca	K	56.02	0.21	1140.35
22 Ti	K	0.09	0.02	1.72
25 Mn	K	0.07	0.02	2.61
26 Fe	K	1.11	0.02	54.96
29 Cu	K	0.03	0.01	2.14
38 Sr	K	0.20	0.01	14.15
80 Hg	L	13.87	0.09	326.10

第12図 芝花73号墳出土人骨付着赤色顔料分析

第7章 まとめ

第1節 弥生時代

弥生時代の遺構は丘陵の北西斜面から北東斜面の中腹から裾にかけて広がっており、堅穴住居跡1基、段状遺構9基、土坑1基、木棺墓1基が検出された。最高所の段状遺構8で山裾の芝ヶ端遺跡からの比高差が約8mである。木棺墓以外の時期は出土した土器からみると、壺に凹線文の施文が認められず、甕も口縁部のつまみあげが明瞭でないことから但馬第Ⅲ様式と考えられる。丘陵下の芝ヶ端遺跡と一連の遺跡である可能性が高いが、芝ヶ端遺跡が但馬第Ⅳ様式を中心とすることから考えると丘陵部から主に開発が始まり、山裾の平地部に主体が移るようである。

但馬では丘陵上に溝を廻らし、住居が設けられている例が朝来市大盛山遺跡・養父市東家の上遺跡などで見つかっているが、平地部との比高差が数十mと大きく、平地から一連に丘陵部を開発している点で今回見つかった遺跡は異なるタイプの集落と考えられる。また段状遺構は後期の朝来市大盛山遺跡・養父市箕谷遺跡などの例があるが、中期では但馬では初の検出例である。

第2節 古墳時代

古墳時代は尾根筋及び中腹部で前期の古墳6基（芝花26～28・72～74号墳）、中腹部で前期の段状遺構、尾根先端部の弥生住居上で後期の平坦面などが検出された。ここでは主として前期の古墳についてまとめておきたい。

墳丘 27号墳以外は山側に溝を切り、平面形は尾根筋に対して横長の長方形を呈している。中腹部の72～74号墳は斜面地に築かれ尾根筋方向には伸ばしにくいことからより横長で、ややいびつな形を呈している。墳丘頂部は地山を削平して平坦面を造り出し、26・72～74号墳では墳丘に盛土を行っている。特に中腹部の古墳は盛土部分が多く、厚い。28号墳ではテラス面を設けるほど側面を削平したり、26号墳では側面にまで溝を廻らすなど、尾根上の古墳ほど墳形を方形に整えることに意識を払っているようである。墳頂部の規模はいずれも面積40m²台である。中腹のものが若干小さいくらいで、各古墳に明瞭な格差があるというほどのものではない。27号墳については他の古墳と異なり明瞭な区画施設をもたず、尾根上に平坦部を形成するのみである。

埋葬施設の配置 72号墳主体部1・2を除いて尾根筋に対して直交している。被葬者の頭位が人骨の出土位置から明瞭なのは72号墳主体部3が南、73号墳主体部3が西で、75号墳主体部1～3では石棺の小口が広い方を頭側と考えれば東と考えられる。

26号墳は中心的な埋葬施設が2つ並び、72・73号墳は中心的な埋葬施設が1つ、27・74号墳は中心的な埋葬施設が不明瞭で、28号墳は擾乱が大きくよく分からぬ。

従属的な埋葬施設は26号墳・73号墳では中心的な埋葬施設の4隅を切るように設けられている。72号墳では中心的な埋葬施設の北側に少し離れて従属的な埋葬施設が設けられている。

埋葬施設の構造 埋葬施設の種類には剖抜式木棺、組合式木棺、組合式石棺、土壙墓、土器棺などがある。剖抜式木棺は28号墳主体部、72号墳主体部1～3で検出され、27号墳主体部1もその可能性が

ある。このうち72号墳主体部2・3は舟形、72号墳主体部1は割竹形を呈している。組合式木棺は26号墳主体部1～3、73号墳主体部1・3～5、27号墳主体部2で検出されている。このうち26号墳主体部1～3、73号墳主体部3、27号墳主体部2はH字形を呈している。組合式石棺は74号墳主体部1～3で検出されている。いずれも小型である。土壙墓は26号墳周溝東側、73号墳SK02、74号墳主体部4で検出されている。土器棺は27号墳土器棺1・2、72号墳北側で検出されている。

中心的な埋葬施設は棺長で3m以上、墓壇長で4m以上を有している。従属的な木棺は棺長で2m前後、墓壇長2～3m台、石棺は棺長で1m以下、墓壇長で2m前後、土壙墓は長2m以下と埋葬施設の種類によってその規模の差が認められる。

副葬品 棺内副葬品は鉄製品のみで、各主体部での出土数はそれぞれ1・2点と少數である。73号墳主体部3で剣、26号墳主体部3で刀子と考えられるもの以外の5点はすべて鏟で、鏟が多い点は但馬・丹後地域における特徴と共通している。

土器は26号墳主体部1、73号墳主体部3、74号墳主体部1・2で出土している。26号墳主体部1では土師器直口壺・小型丸底鉢・鼓形器台・小型器台、73号墳主体部3では土師器直口壺・高杯・鼓形器台が出土しており、その構成は似通っている。いずれも墓壇上に供獻されたものと考えられる。朝来市梅田東11号墳第1主体部でも墓壇上でやや構成が異なるものの供獻土器がみつかっている。埋葬施設がH字形組合式木棺であることも同一である。74号墳主体部1・2では棺蓋直上で土師器短頸壺が出土しているが、組合式石棺である梅田東10号墳第5主体部で同様の事例が認められる。

小結 組合式木棺（中心主体はH字形）を主たる埋葬施設とすることや土器供獻の方法からみると26号墳と73号墳が非常に似通っており、同系集団による造墓の可能性が高い。26・73号墳に対して28・72号墳は剖抜式木棺を埋葬施設としており、26・73号墳とは異なる系統の墓であることが考えられる。

27号墳については墳丘の区画がなく、中心的な埋葬施設も不明瞭で他の古墳と異なっている。主体部1は剖抜式木棺の可能性があり、主体部2はH字形組合式木棺で、埋葬施設の型式からみると主体部1は28号墳、主体部2は26号墳に附屬する可能性が考えられる。27号墳は単独の古墳ではなく、72号墳と73号墳間の平坦地と同様なものとみることができる。そうすると埋葬施設の型式を異にする26・73号墳と28・72号墳とは27号墳部分と72号墳・73号墳間の平坦地を挟んで隔てられているようであり、異なる系統の墓は意識的に間隔が置かれているのかもしれない。

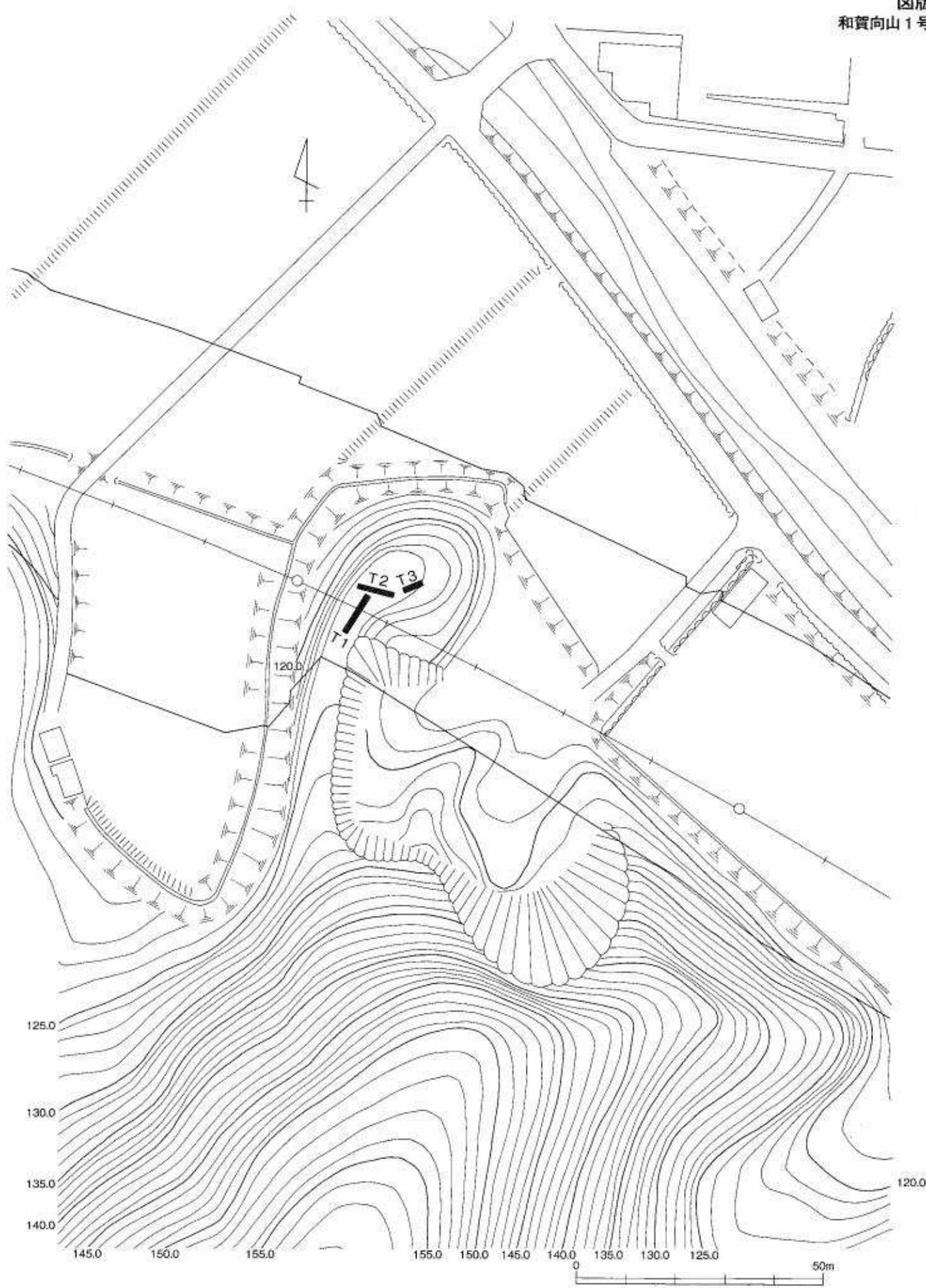
墳裾を明確にする墳形、埋葬施設の型式や土器供獻の方法など梅田東古墳群との共通性が高く、南但馬地域における前期の古墳の一類型をよく示すものといえるだろう。

第3節 中世

集石墓は尾根先端部の低い位置で検出された。集石部と集石部の南側斜面を円形に掘りくぼめられている部分に分かれている。集石部は3つ程度の区画に分かれる可能性があるが不明瞭である。下部に掘り込みをもっておらず、石の隙間から火葬骨が出土している。南側の円形に掘りくぼめられている部分には板碑形の石仏が並べられたと考えられる。このような板碑形石仏が出土しているのは豊岡市妙樂寺ヒシロ遺跡ぐらいで、ここの場合もD区上段では区画墓背後に7体の石仏並んで設けられている。時期は集石の隙間から出土した土師器鍋、須恵器捏鉢からすると15世紀前半から15世紀中頃のものと考えられる。

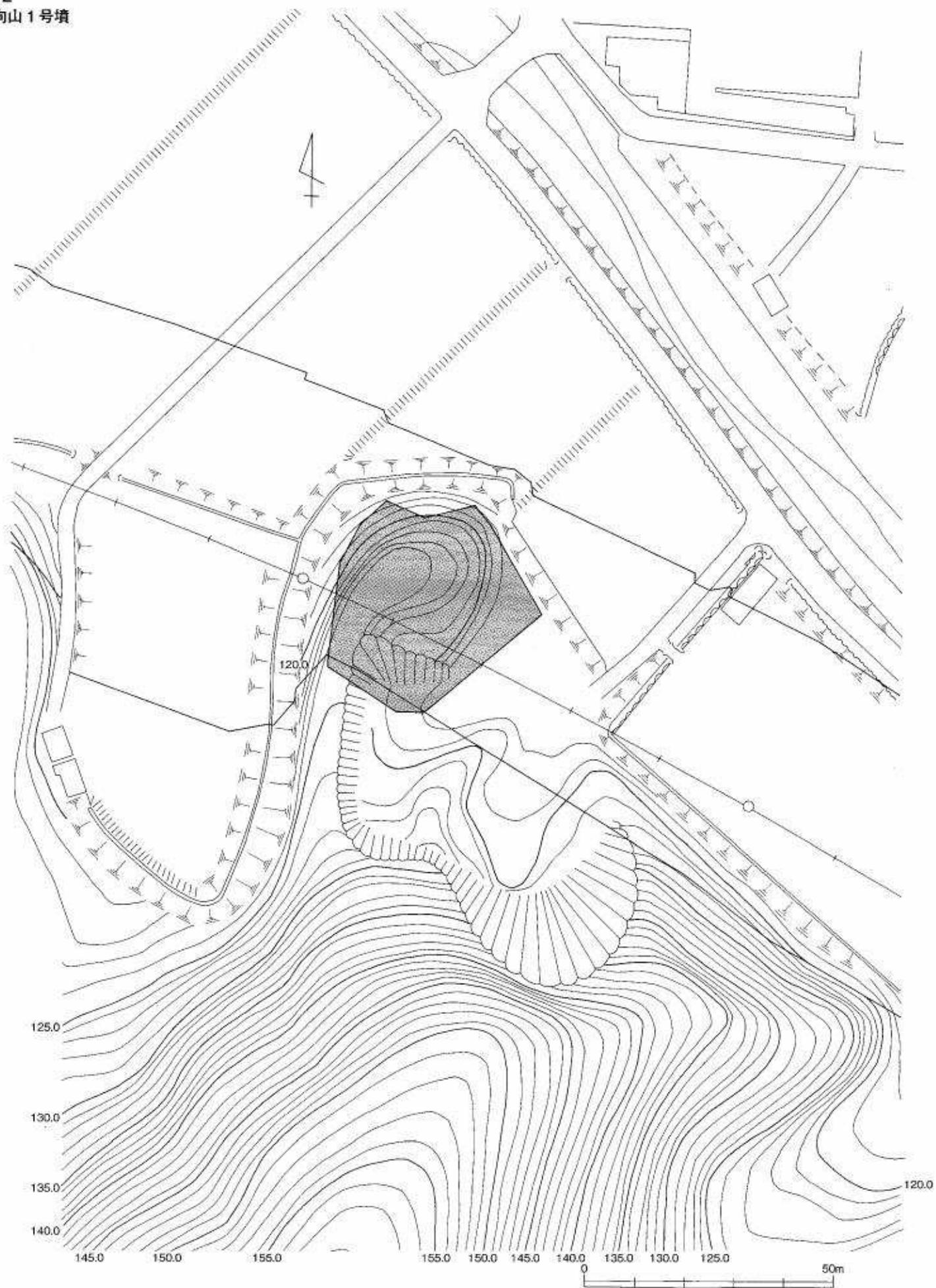
図 版

和賀向山 1 号墳

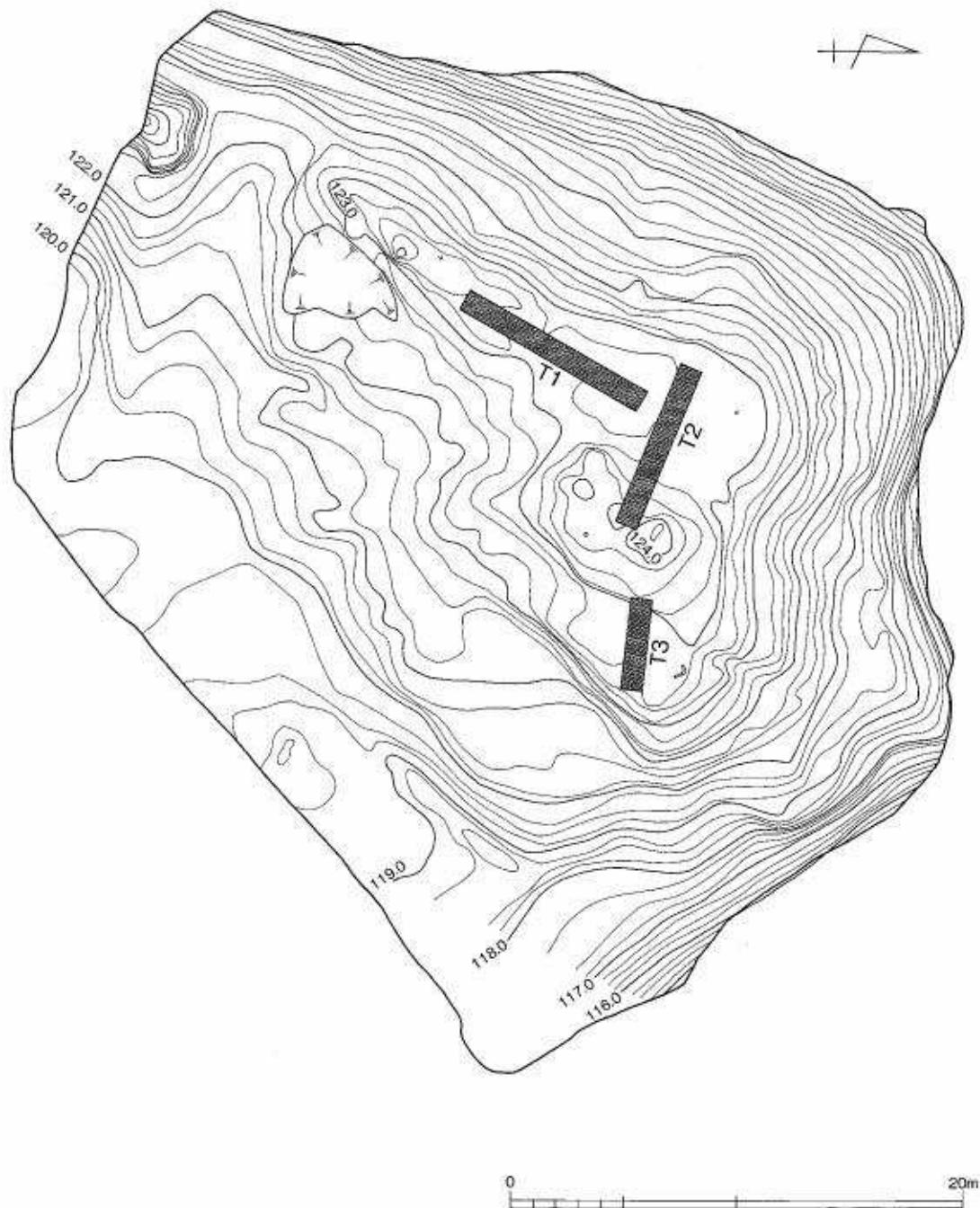


確認トレンチ配置図

図版2
和賀向山1号墳

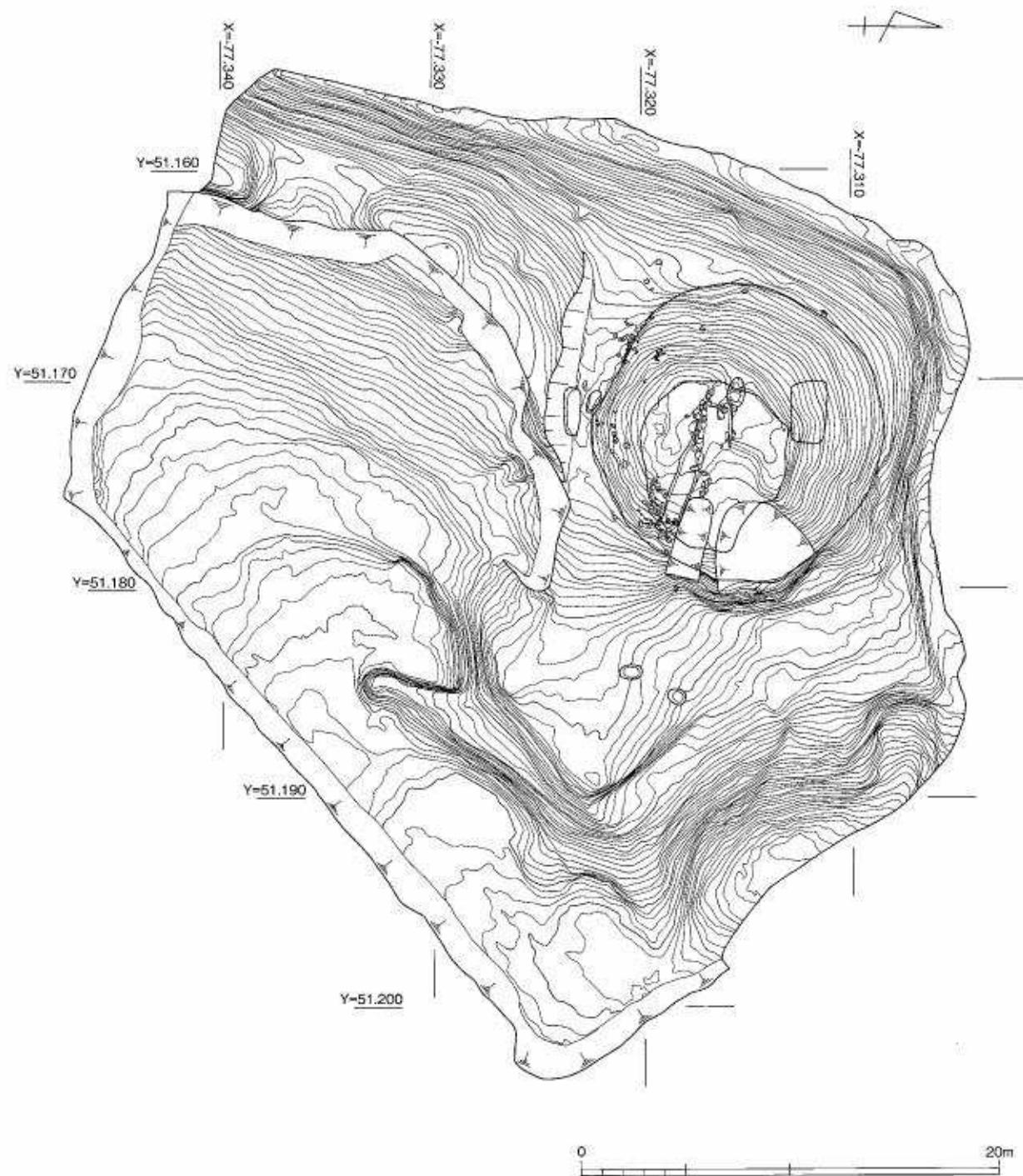


調査範囲図

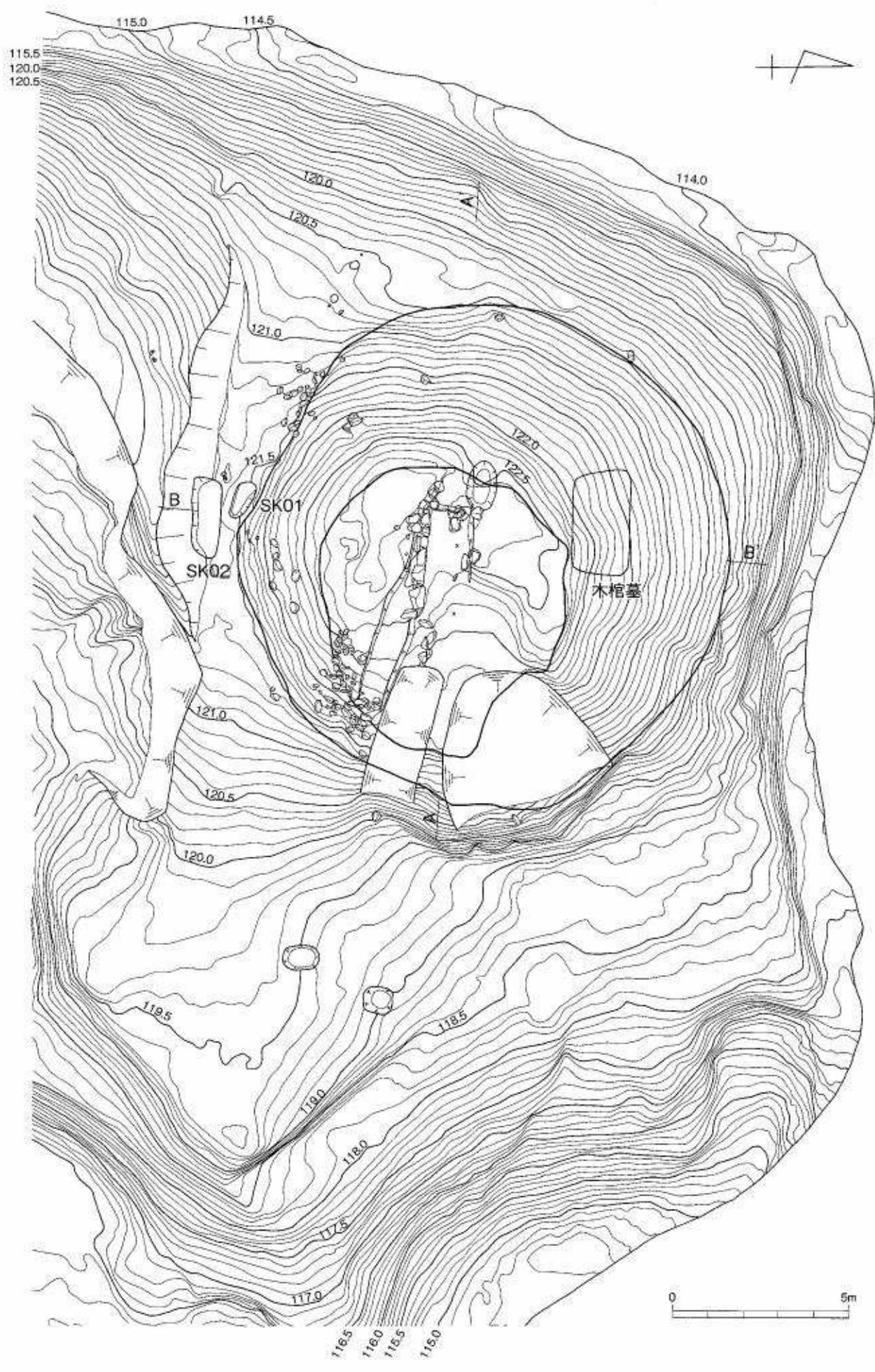


調査前墳丘測量図

図版4
和賀向山1号墳

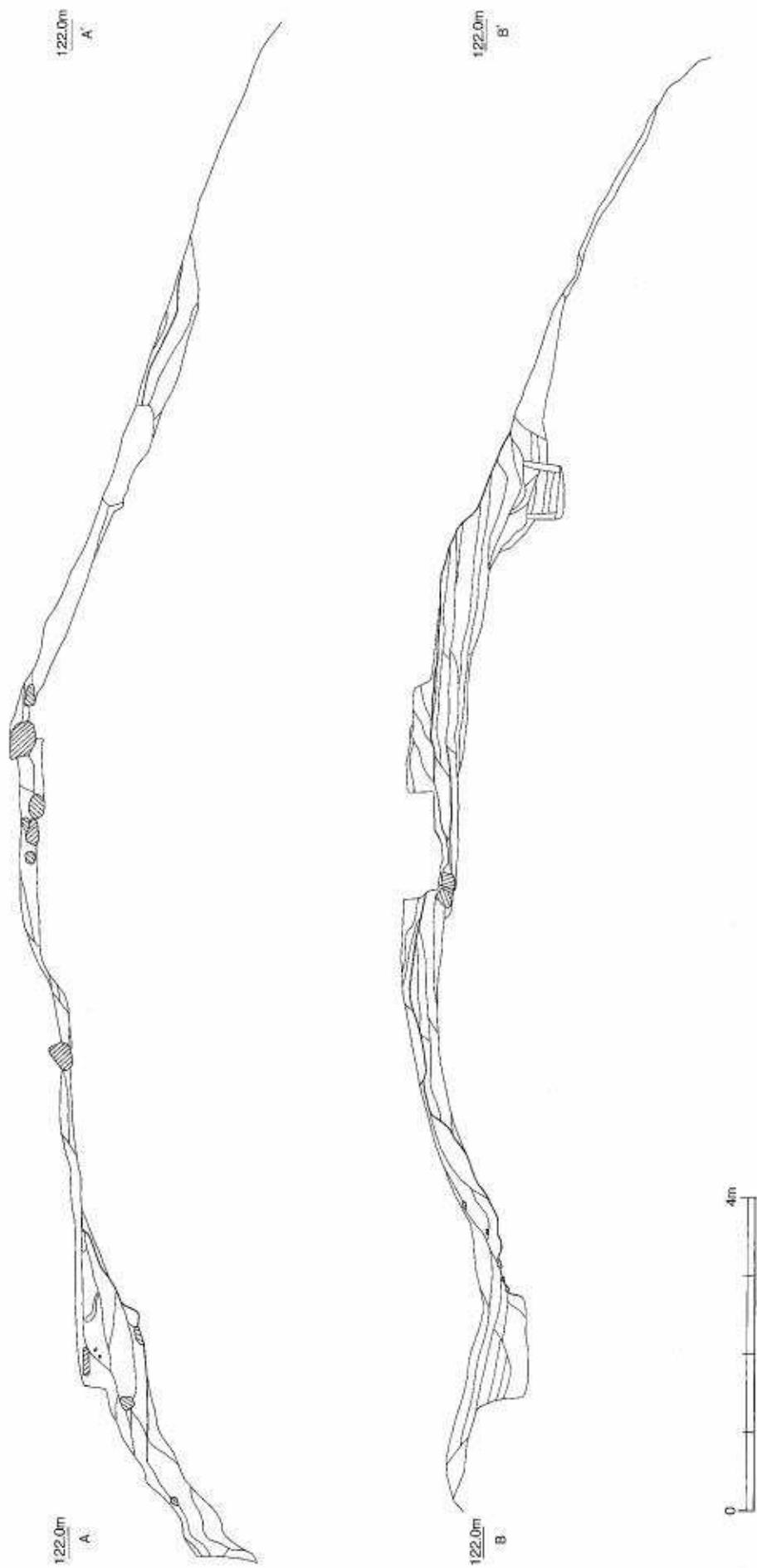


調査区全体図

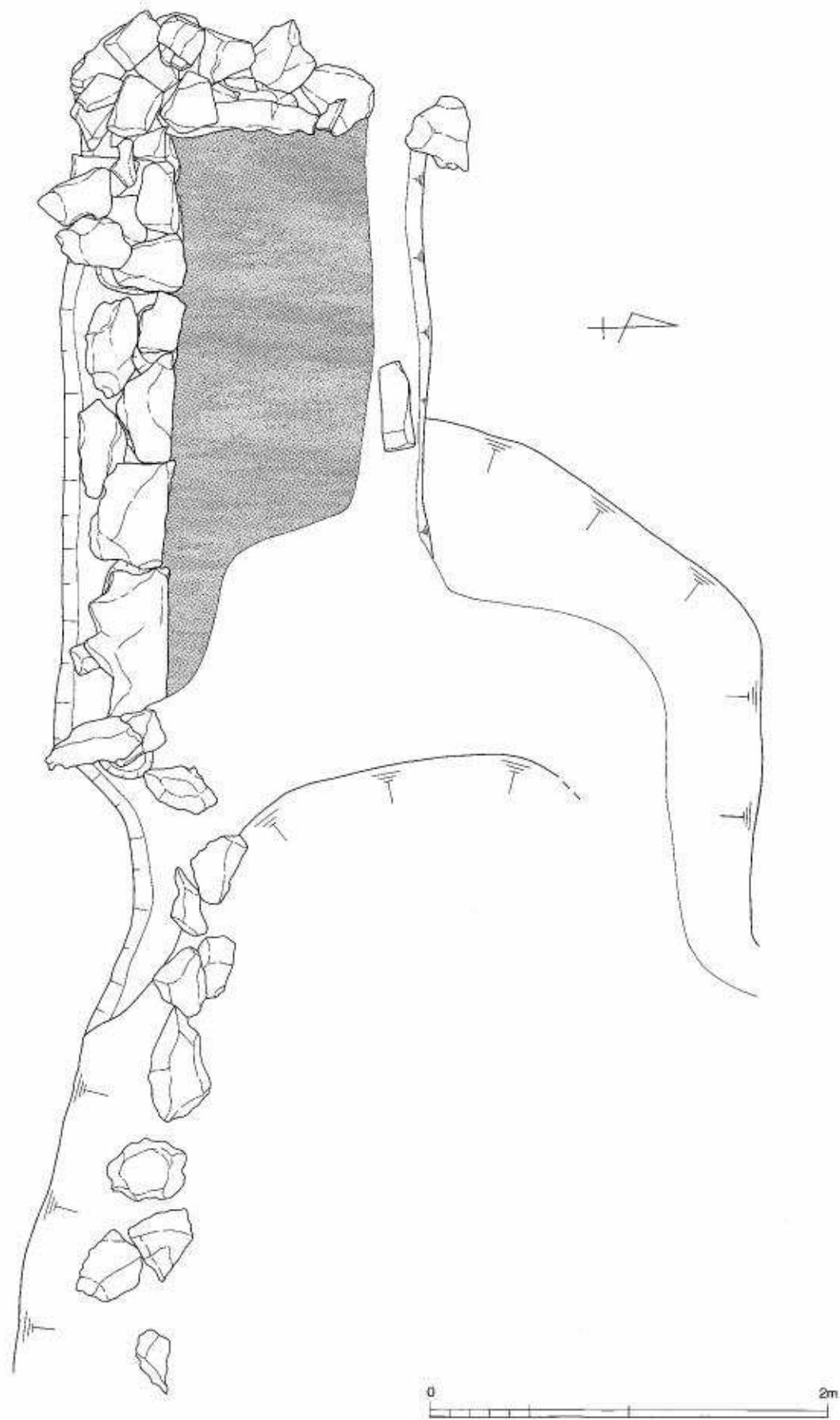


墳丘地形図

図版 6
和賀向山 1号墳

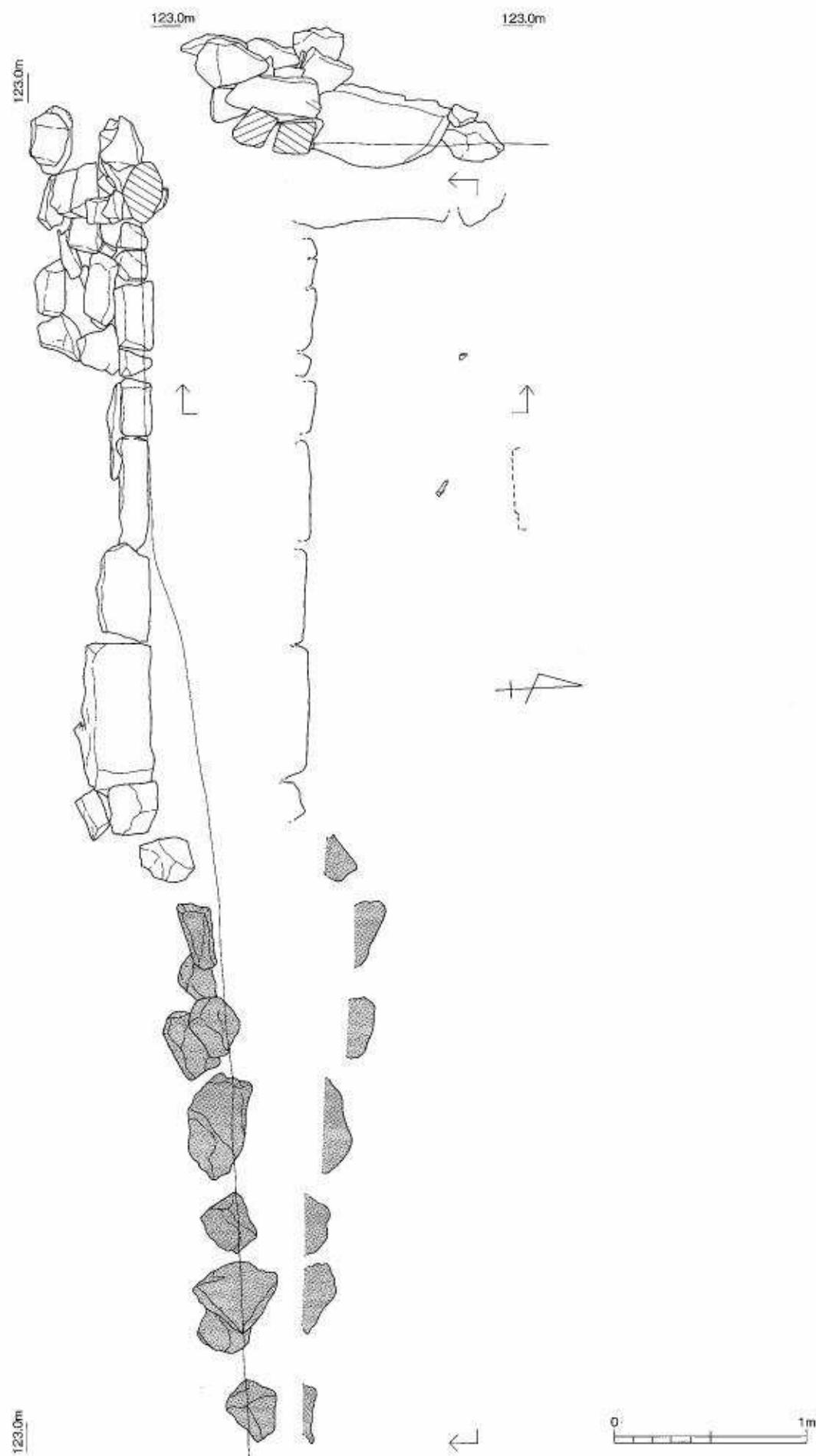


墳丘、周溝土層断面図

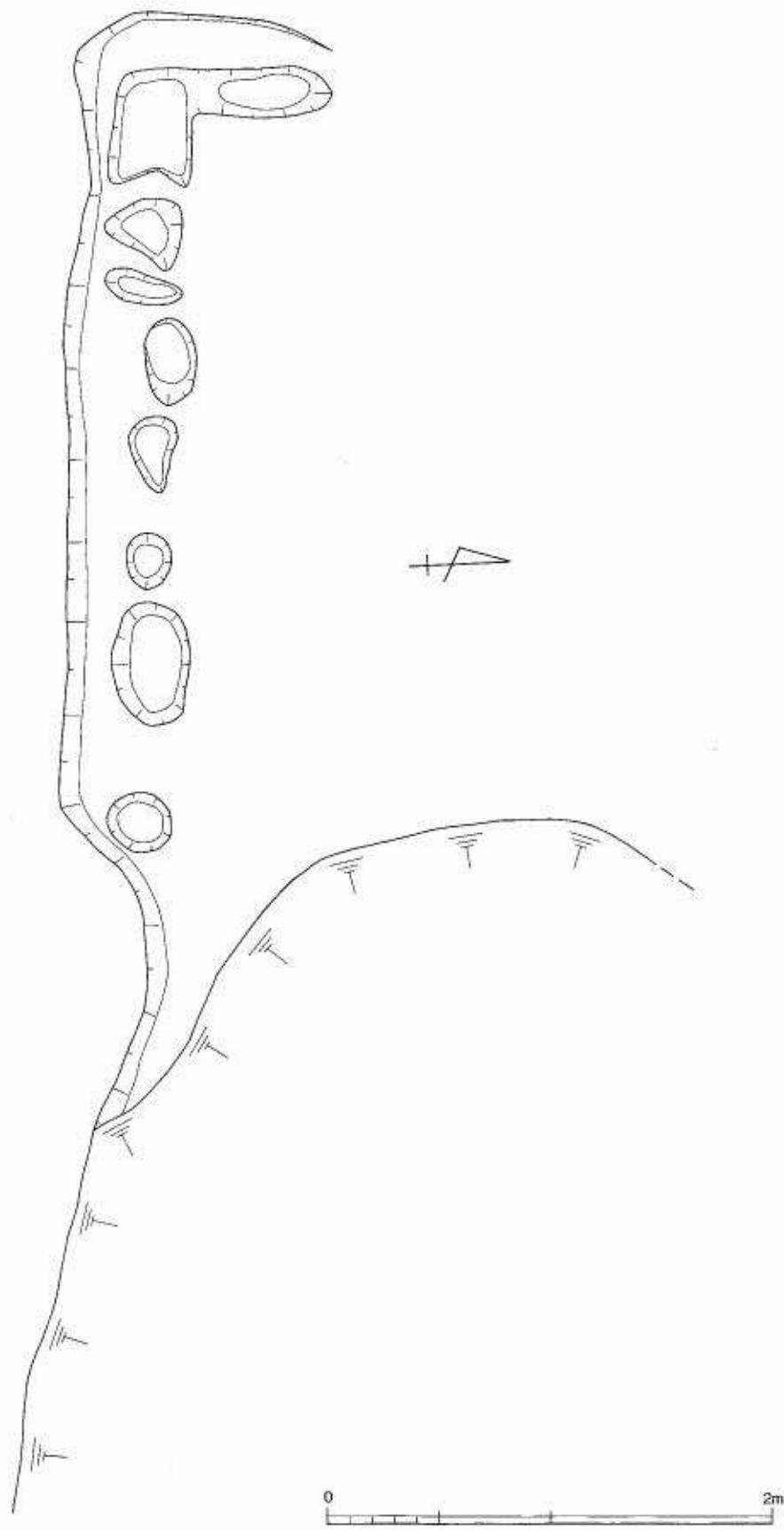


1号墳石室平面図

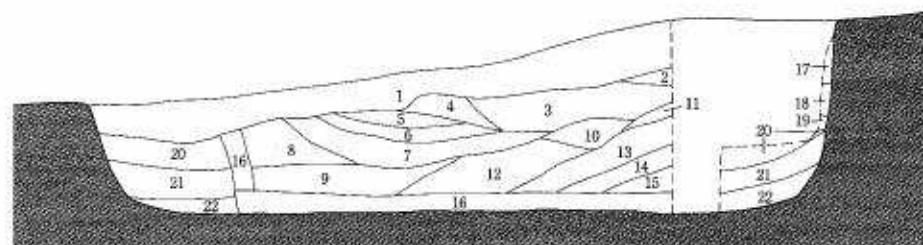
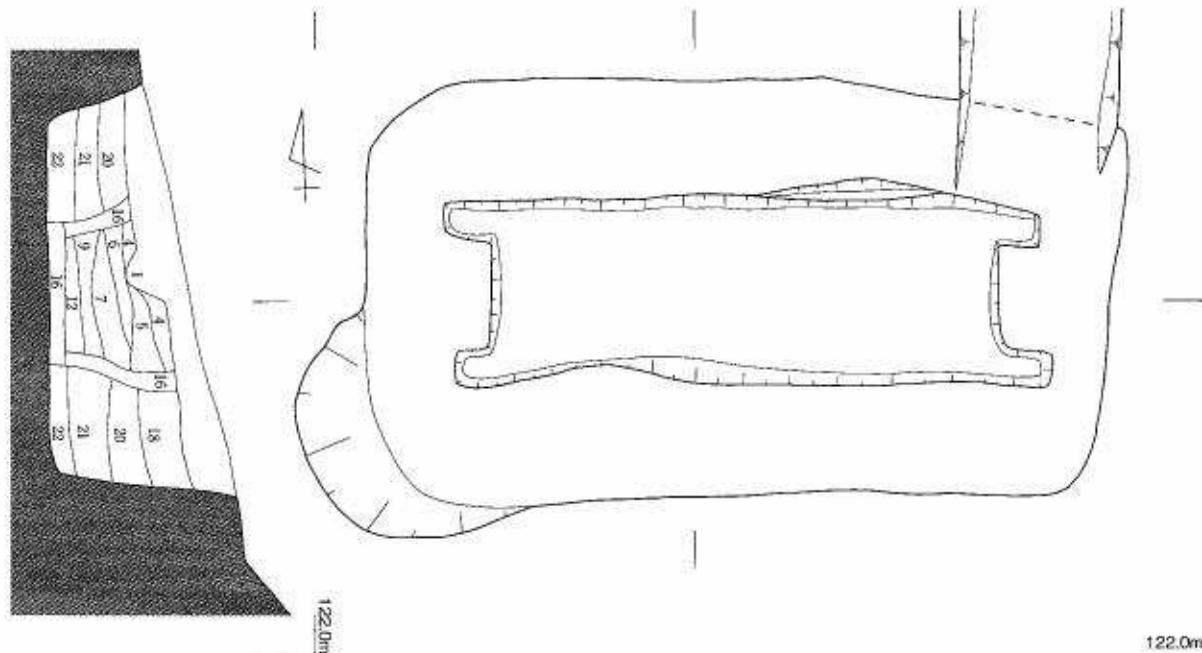
図版8
和賀向山1号墳



1号墳石室展開図

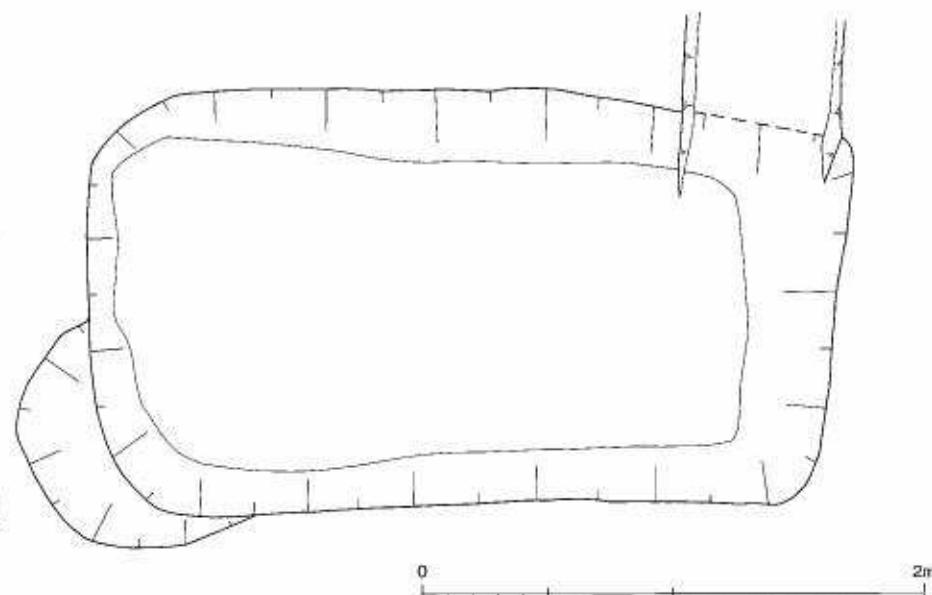


1号墳墓壇平面図

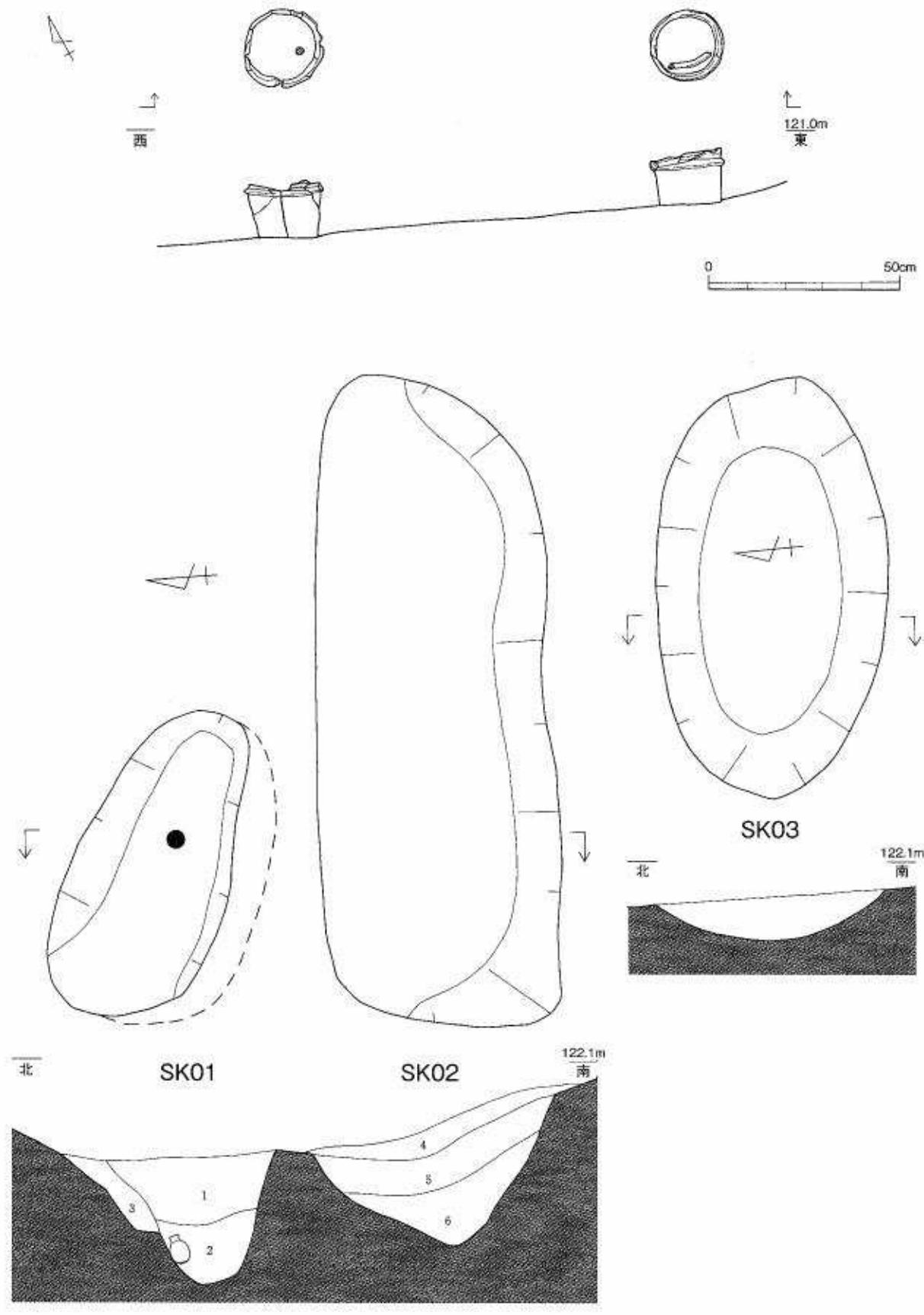


- | | |
|-----------------------------|--|
| 1 表土 | 12 灰青褐色 シルト |
| 2 淡黄色 砂混じりシルト | 13 にぶい黄褐色 砂混じりシルト 黄褐色土(地山)が多量に混じる。 |
| 3 淡黄色 砂混じりシルト 青灰色土が混じる。 | 14 灰青褐色 シルト |
| 4 にぶい黄褐色 粘細砂 黑褐色土が少量混じる。 | 15 にぶい橙色 シルト 灰褐色シルトを含む。 |
| 5 にぶい黄褐色 粘細砂 黑褐色土が多量に混じる。 | 16 喙灰黄色 砂混じりシルト 炭化物を若干含む。(木棺の痕跡) |
| 6 にぶい黄褐色 粘細砂 | 17 にぶい黄褐色 粘細砂 |
| 7 にぶい黄褐色 粘細砂 灰褐色土が若干混じる。 | 18 にぶい黄褐色 砂混じりシルト 黑褐色土が少量混じる。 |
| 8 黒褐色 粗砂 炭化物が若干混じる。 | 19 黄灰色 砂混じりシルト 黑褐色土が少量混じる。 |
| 9 深灰色 砂混じりシルト 黄褐色土(地山)が混じる。 | 20 にぶい橙一黄褐色 シルト一粘細砂 黑褐色土、黄褐色土(地山)が混じる。 |
| 10 にぶい黄褐色 粘粗砂 | 21 にぶい橙色 シルト一粘細砂 黄褐色土(地山)が混じる。 |
| 11 灰黄褐色 粘細砂 | 22 にぶい黄褐色 砂混じりシルト |

墓壙完掘状況



木棺墓 1 平面図・土層断面図

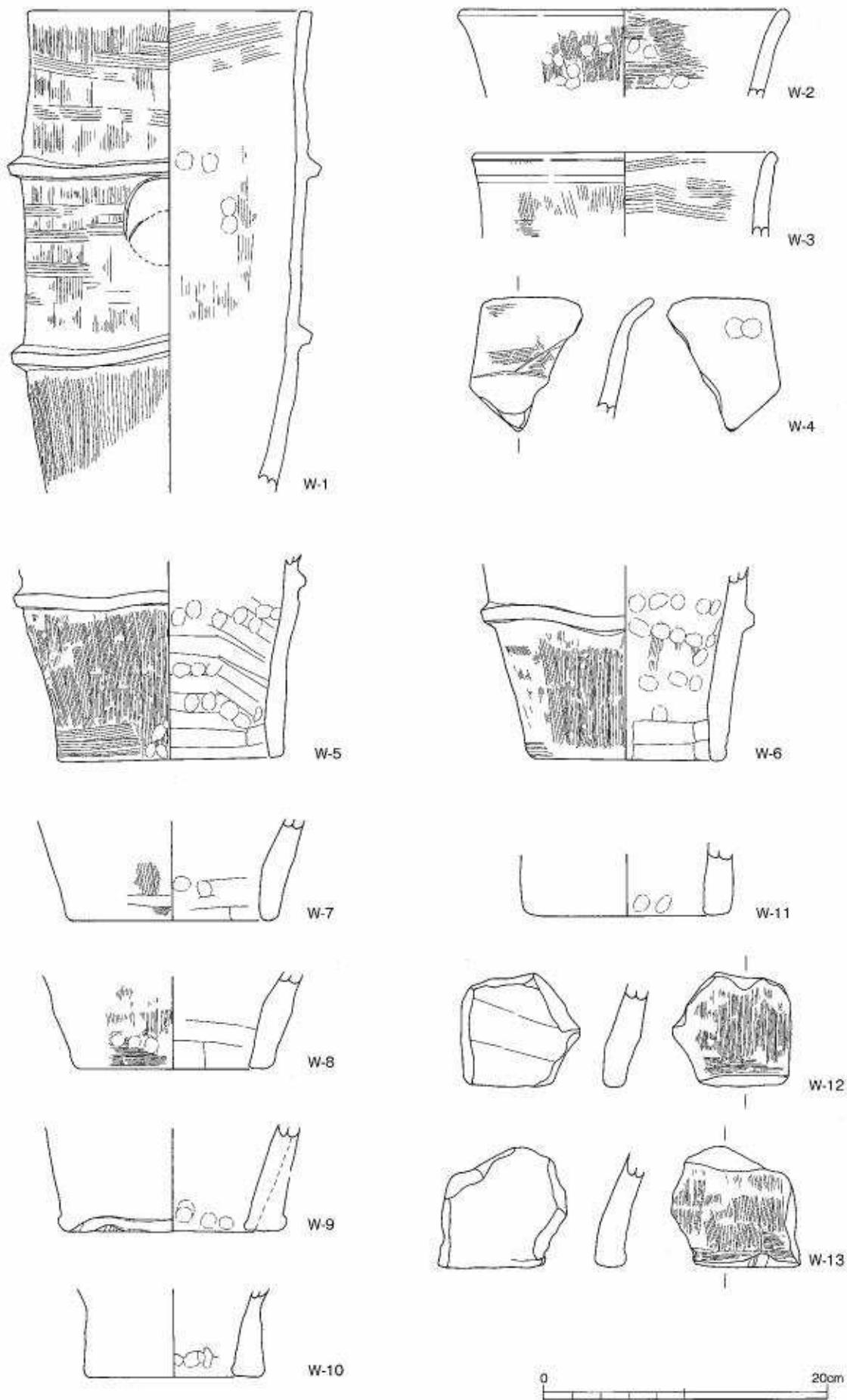


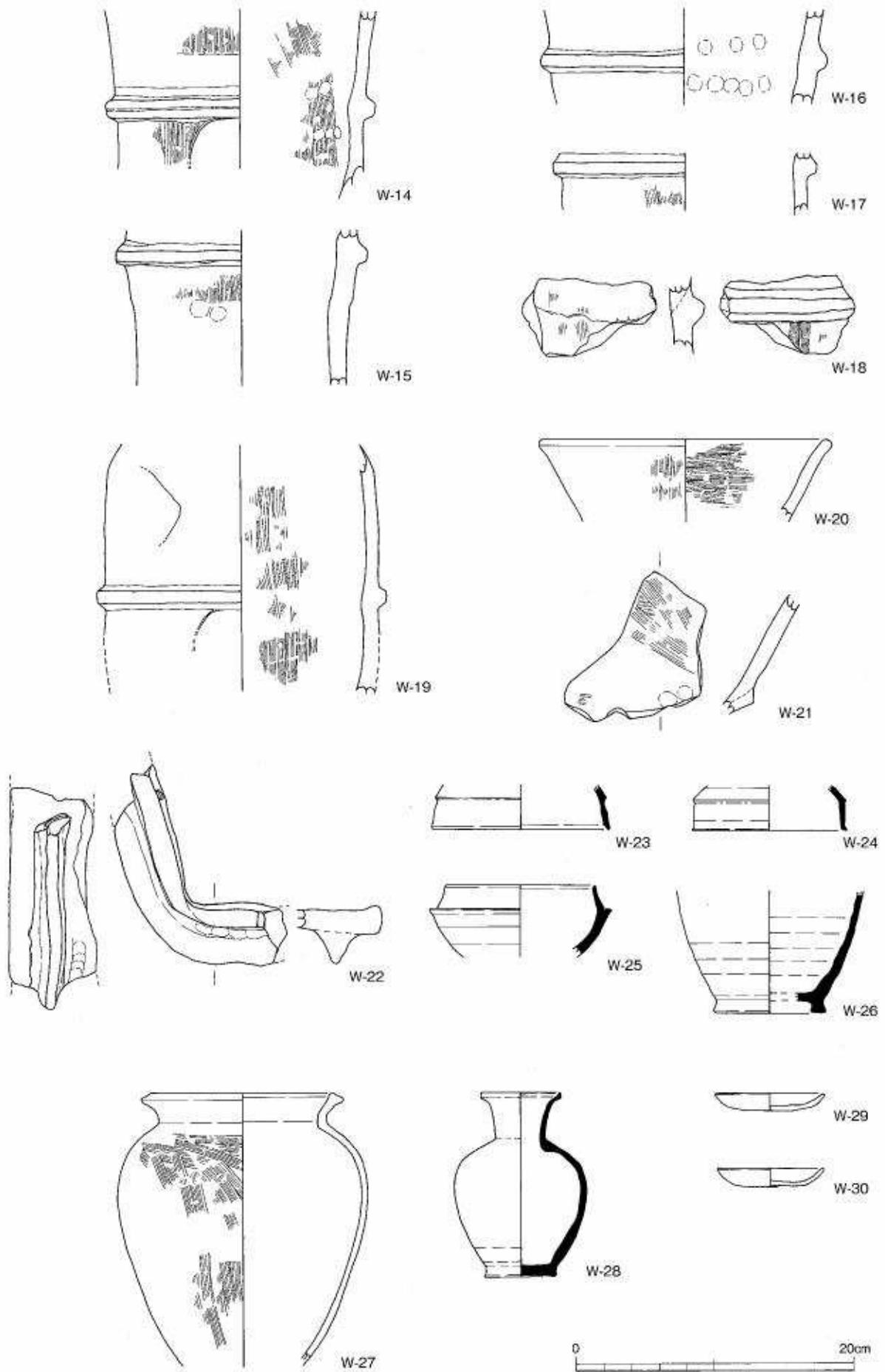
- 1 に赤い黄褐色 粗砂まじり極細砂 炭化物含む。
- 2 に赤い黄褐色 粗砂まじりシルト 炭化物と鐵土を含む。
- 3 黄褐色 粗砂まじりシルト
- 4 黄褐色 粗砂まじりシルト
- 5 に赤い黄褐色 粗砂まじりシルト 炭化物含む。
- 6 暗灰色 細砂混じりシルト 比較的粘性が強い。



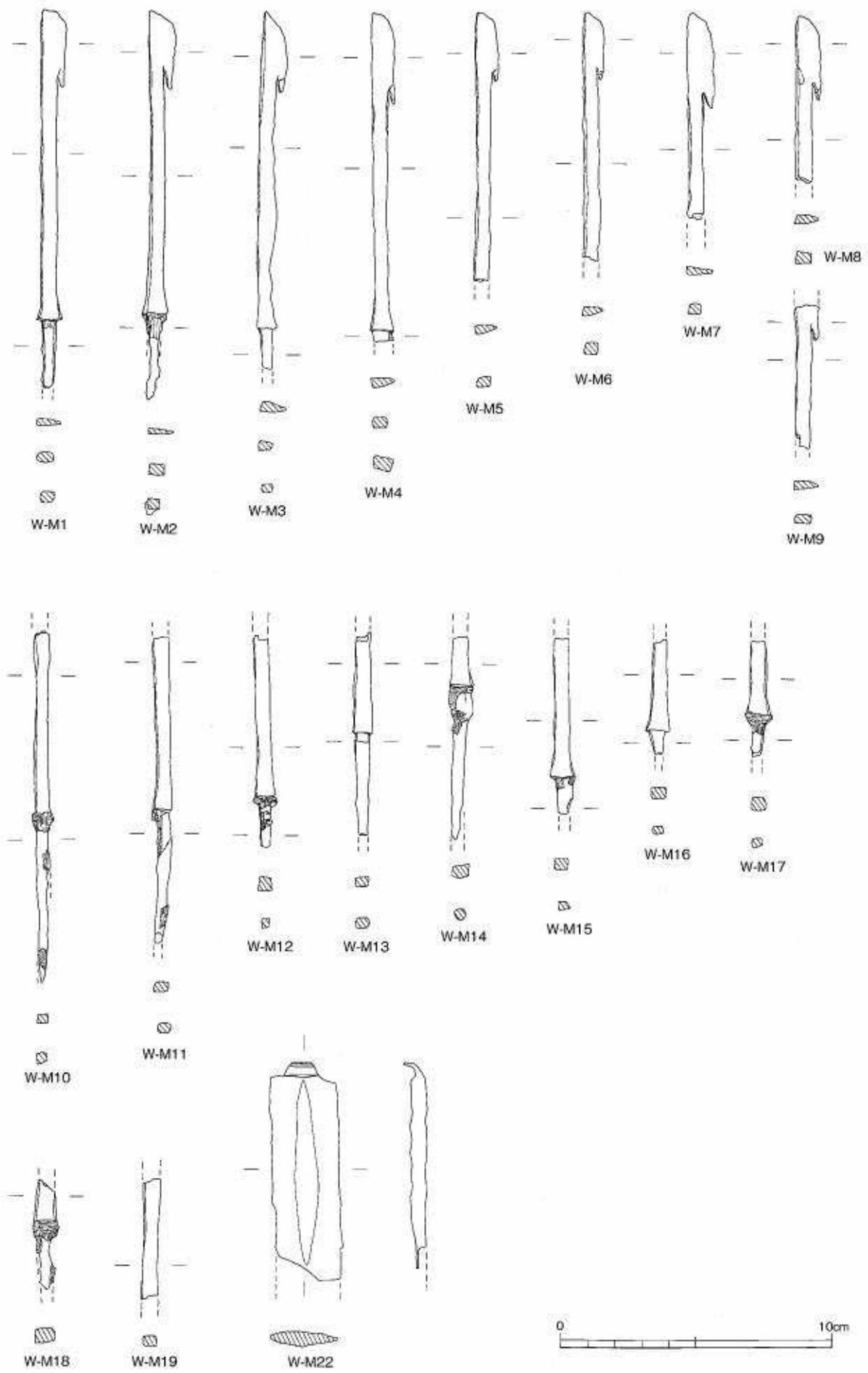
円筒埴輪配置図、土坑平面図・土層断面図

圖版 12
和賀向山 1 号墳





埴輪、土器



鉄器

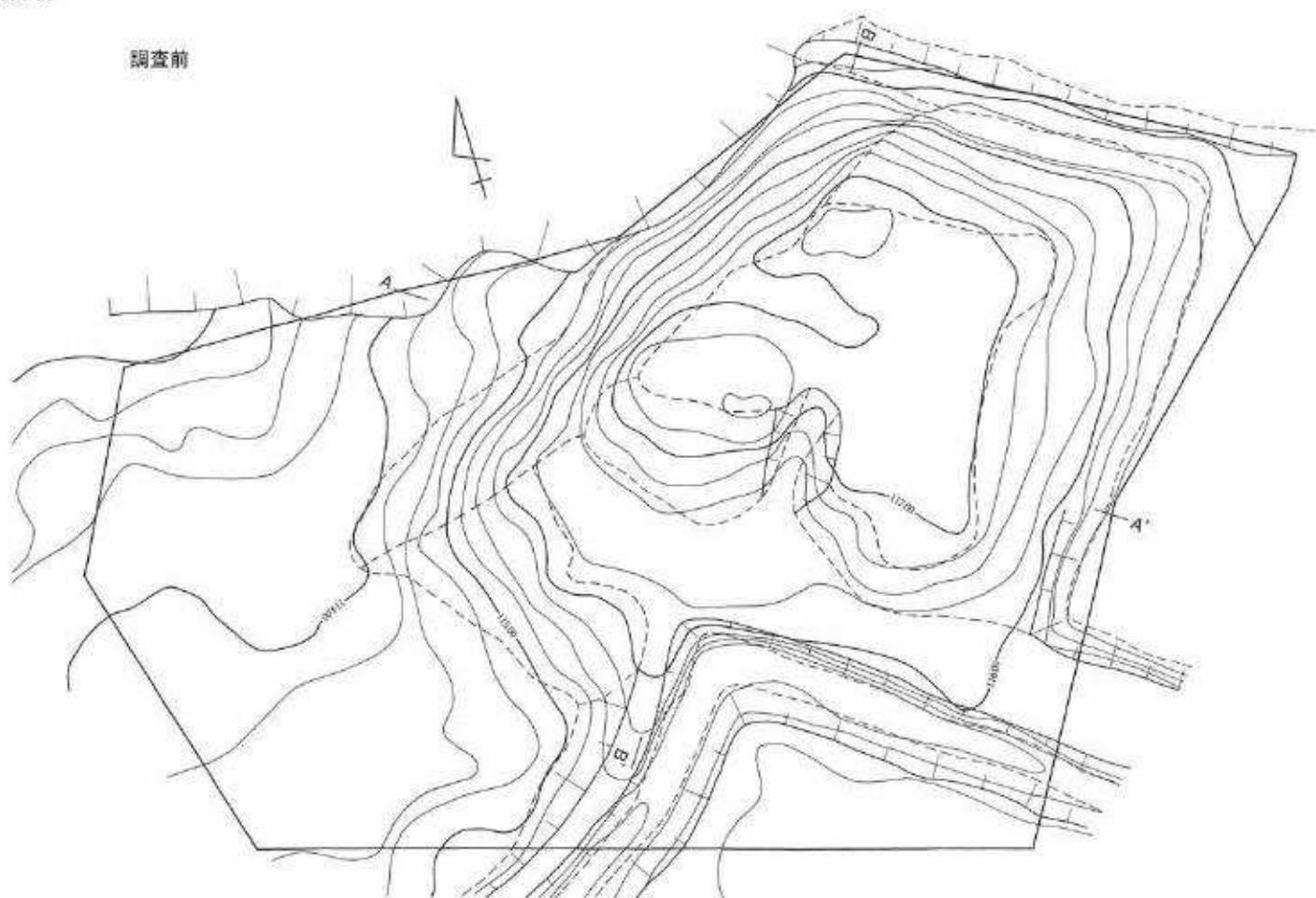
芝ヶ端古墳



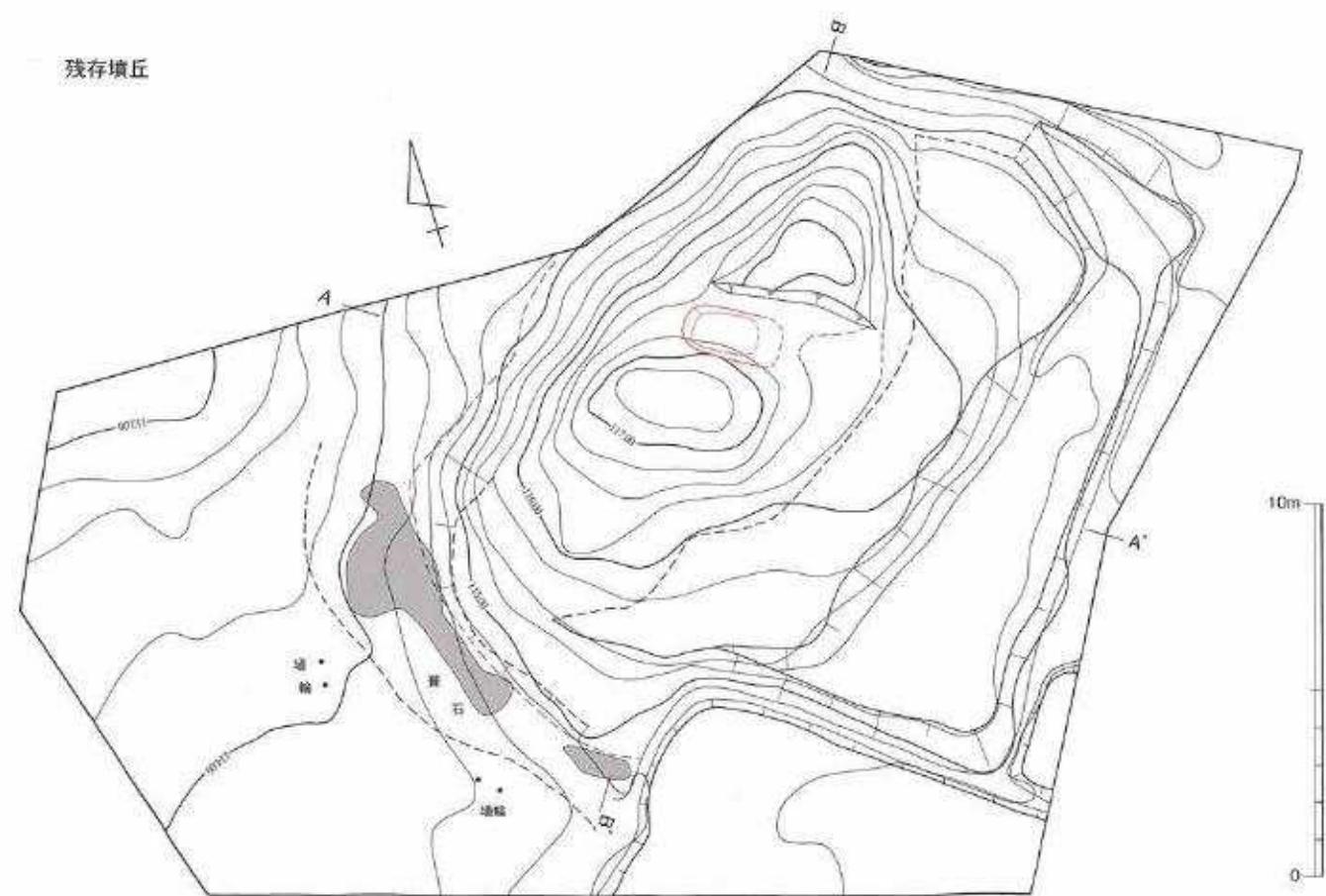
芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡調査区位置

図版 16
芝ヶ端古墳

調査前

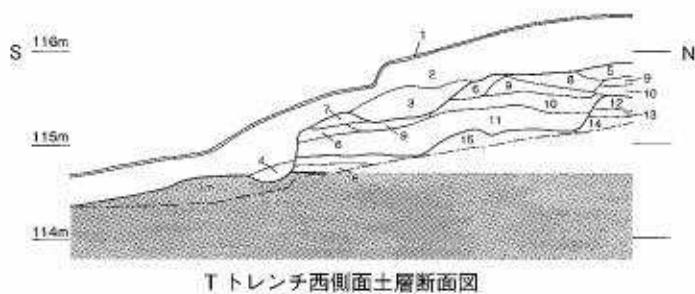
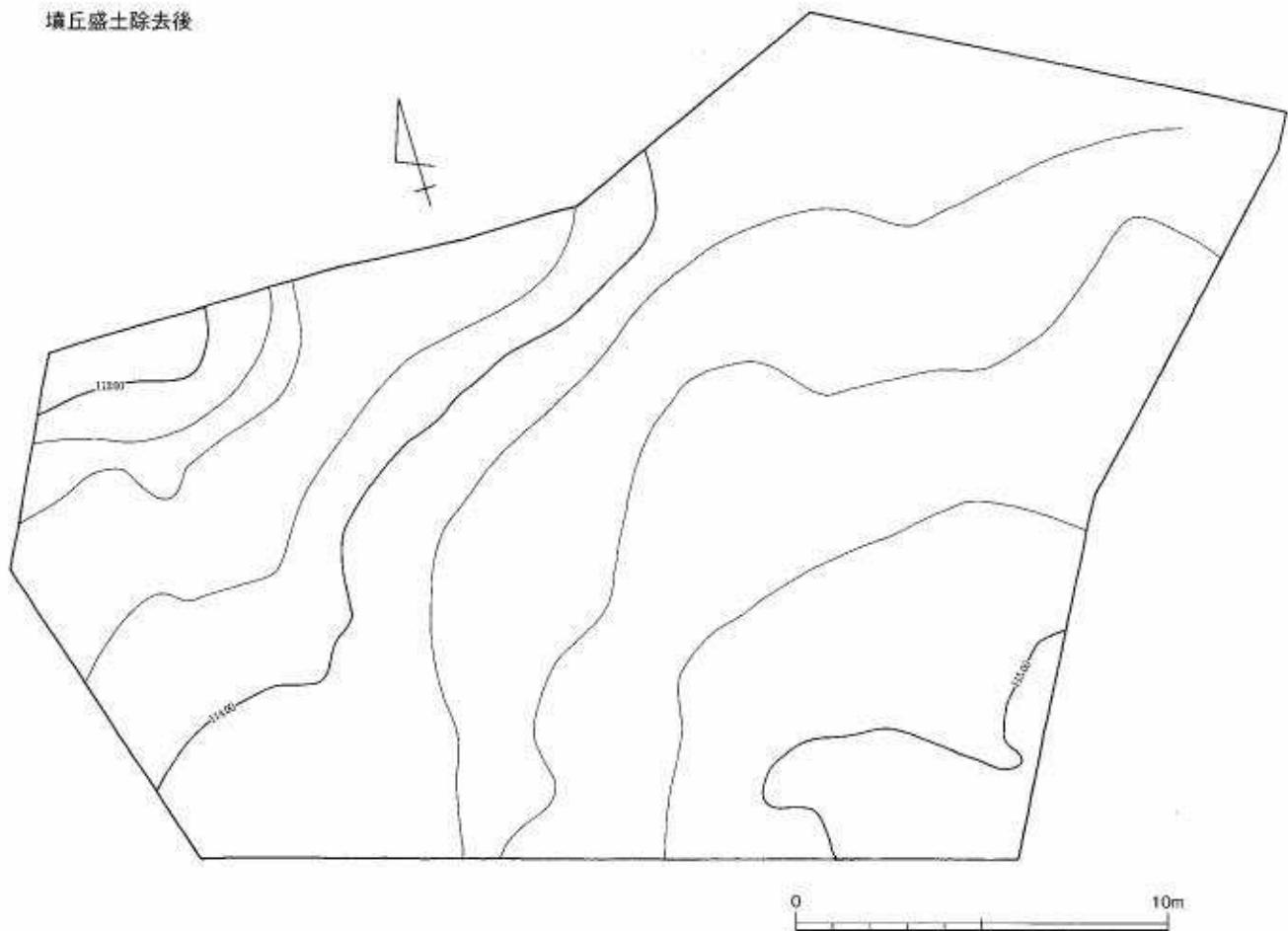


残存墳丘



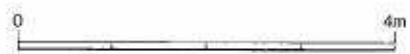
芝ヶ端古墳 墳丘

埴丘盛土除去後

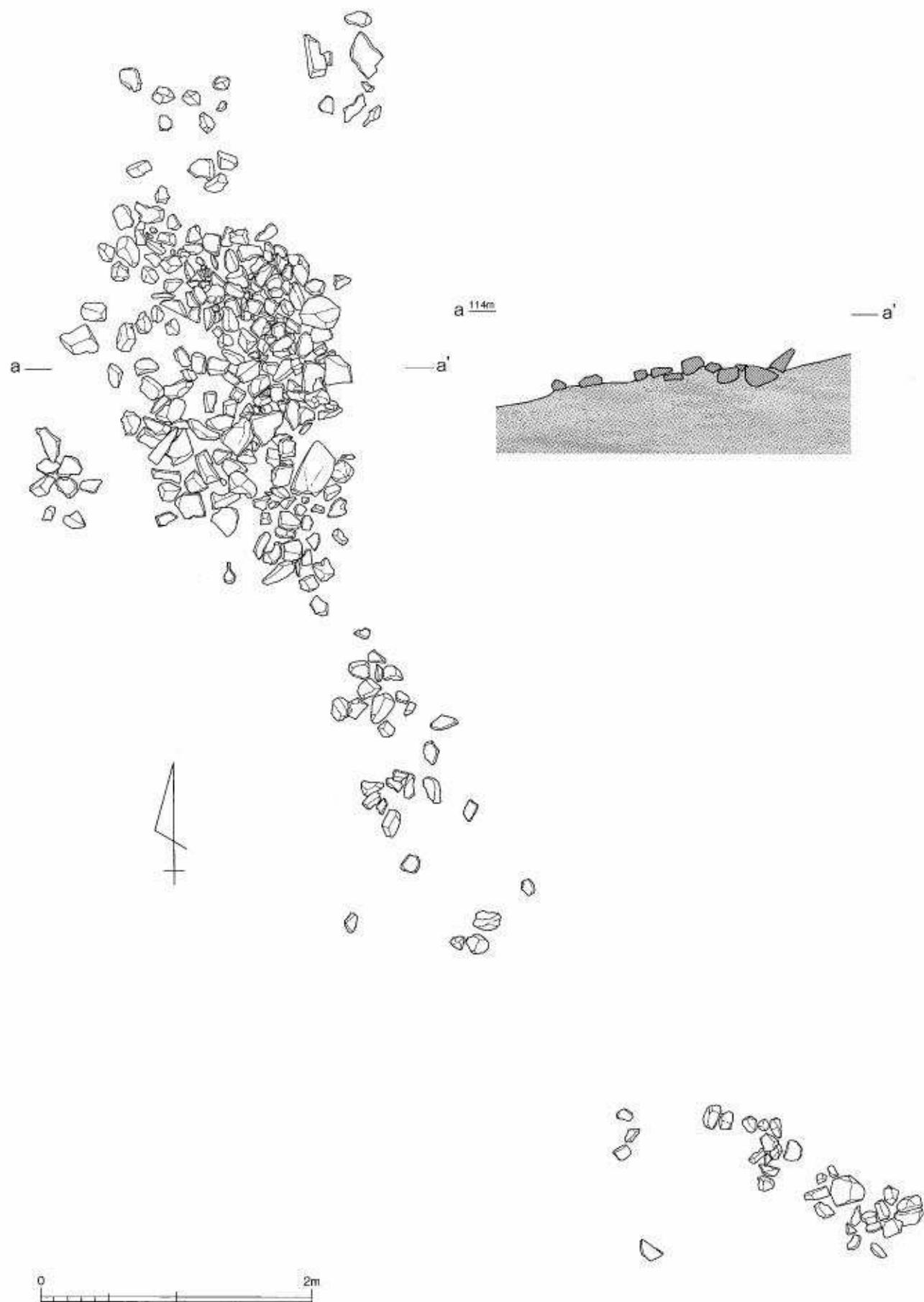


T トレンチ西側面土層断面図

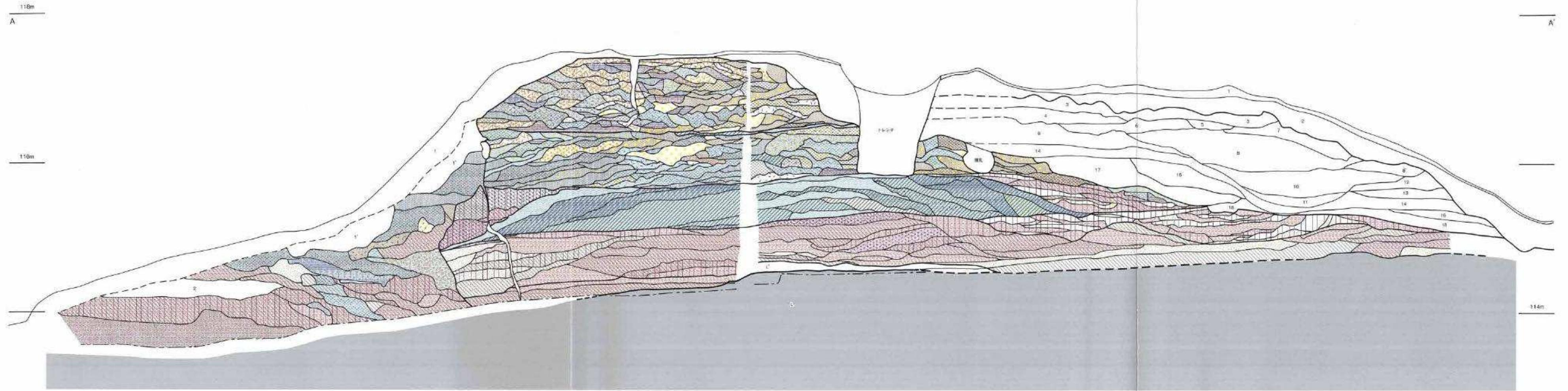
1. 表土(腐土)
2. 7.5YR3.5/1.5 灰褐色(灰褐色)極細粒砂で粗粒砂・粗粒砂含む 下端に塊状片多く含む(南西部に多い) 中世のこね跡含む
3. 10YR5/3.5 にぶい黄褐色(暗黃褐色)極細粒砂・粗粒砂 中粒砂含む
4. 7.5YR3/2 黒褐色(茶褐色)細粒砂・細砂・砂屑
5. 7.5YR1.7/1 黒色(黒褐色)極細粒砂で中粒砂・粗粒砂含む 黒ボク系盛土
6. 10YR7/8 黄褐色(明黃褐色)極細粒砂・細粒砂、中粒砂・粗粒砂含む 黑ボク系盛土(以下 A 層)
7. 10YR3/1 黑褐色(暗灰褐色)シルト質極細粒砂で中粒砂・粗粒砂含む 黑ボク系盛土
8. A 層+7.5YR1/1 黑色(真っ黒色)粗粒シルト・極細粒砂で粗粒砂・粗粒砂少量含む(以下 B 層) のブロック混じり合い 黑ボク系盛土
9. 7.5YR2/2 黑褐色(暗褐色)極細粒砂で粗粒砂・粗粒砂含む(以下 C 層) のブロック混じり合い 黑ボク系盛土
10. A 層+B 層+C 層のブロック混じり合いで、A が少ない 黑ボク系盛土
11. B 层 黑ボク系盛土
12. 25Y1.7/1 黑色(墨灰色)後細粒砂で粗粒砂・粗粒砂多く含む(以下 D 層)+10YR5/4 にぶい黄褐色(暗黃褐色)粗粒砂・細砂(以下 E 層)+10YR1.7/1 黑色(黒褐色)極細粒砂で中粒砂少量含む(以下 F 層) のブロック混じり合い 茶褐色砂質系盛土
13. D 层+E 层+F 层のブロック混じり合いで、E 层の比率が高い 茶褐色砂質系盛土
14. 12 层と同じ
15. 10YR2/1 黑色(暗褐色)極細粒砂・粗粒砂 中粒砂・粗粒砂含む 茶褐色砂質系盛土
16. 7.5YR2/1 黑色(暗褐色)極細粒砂・細粒砂 粗粒砂・粗粒砂多く含む 暗褐色砂質系盛土
17. 7.5YR4/1 暗褐色(褐色)粗粒シルト・極細粒砂 中粒砂・粗粒砂微量に含む(地山)



芝ヶ端古墳 地形・土層断面



芝ヶ端古墳 磁石残存状況

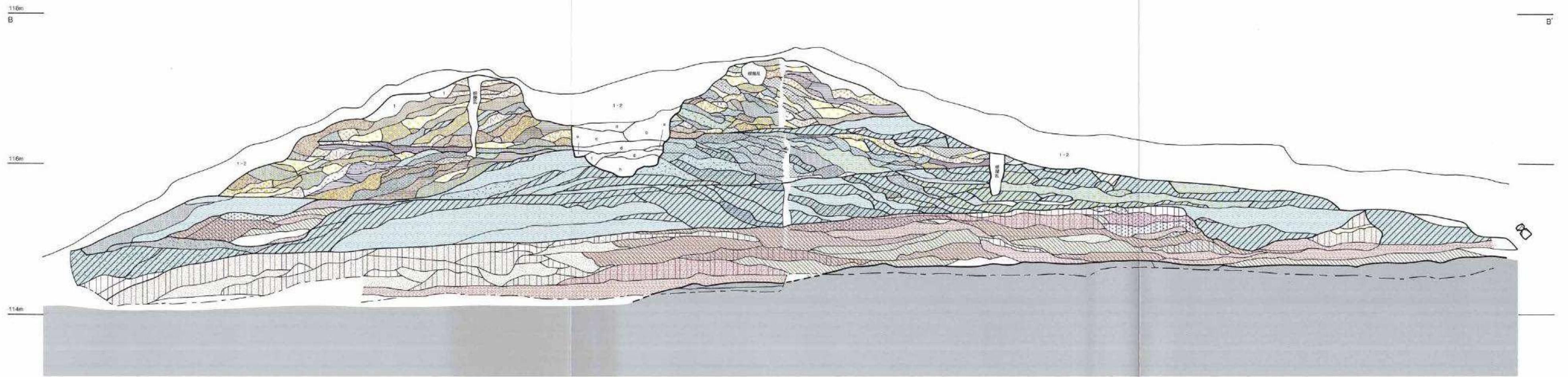


1. 表土 (腐植土)
1'. 竹根による攪乱
2. 7.5YR3/1 黒褐色 (暗茶褐色) 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂含む
3. 10YR8/8 黄橙色 (明黄褐色) 粗粒シルト～極細粒砂と細粒砂～極粗粒砂のブロック混じり合い (芝ヶ端B地区地山を削って盛り上げたものか)
4. 7.5YR2.5/1 黑褐色 (暗褐色) 極細粒砂で中粒砂少量含む (芝ヶ端B地区地山を削って盛り上げたものか)
5. 5YR3/1 黑褐色 (褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む (芝ヶ端B地区地山を削って盛り上げたものか)
6. 10YR5/5 にぶい黄褐色 (黄褐色) 粗粒シルト～極細粒砂と細粒砂～極粗粒砂のブロック混じり合い (芝ヶ端B地区地山を削って盛り上げたものか)
7. 5層と6層がブロック状に混じり合った層
8. 5層に6層のブロックが少量混じった層
8'. 6層のブロック混じりの量が少ないもの
9. 5層とほぼ同一だが、しまりが悪く、ブロック集合状態
10. 9層と同一
11. 10YR2/1 黒色 (明黒褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
12. 10YR3/1.5 黑褐色 (茶褐色) 極細粒砂で細粒砂～粗粒砂少量含む
13. 10YR3/1 黑褐色 (暗茶褐色) 極細粒砂で細粒砂～粗粒砂少量含む
14. 10YR4.5/1 褐灰色 (明茶褐色) 東端寄りでは 10YR4/2 灰黄褐色 (明茶褐色) 極細粒砂で細粒砂～中粒砂含む
15. 10YR5/2 灰黄褐色 (暗褐色) 極細粒砂～細粒砂
16. 7.5YR2/1 黑色 (淡黑褐色) 極細粒砂～細粒砂
17. 10YR7/8 黄橙色 (明黄褐色) 粗粒シルト
18. 7.5YR1.7/1 黑色 (黑褐色) 粗粒シルト～極細粒砂 (弥生包含層を削ってきて盛った層)

- 上層：黄色系**
- A1 (黄色粘質) 10YR6/8 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂
 - A2 (黄色砂質) 10YR5/8 黄褐色 極細粒砂～粗粒砂
 - B (白黄色粘質) 2.5Y6/4 にぶい黄色 極細粒砂～細粒砂
 - C1 (茶色粘質) 10YR4/4 褐色 極細粒砂で中粒砂含む
 - C2 (肌色粘質) 10YR6/5 明黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む
 - D1 (赤系粘質) 7.5YR6/8 橙色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む
 - D2 (乳白色砂質) 2.5Y7/4 浅黄色 細粒砂
- 中層：黑色系**
- E (黒ボク) 10YR1.7/1 黒色 粗粒シルト
 - F (茶色系) 10YR3/1 黑褐色 シルト

- 下層：茶色系**
- G (白色砂質) 2.5Y8/4 浅黄色 細粒砂～細粒砂
 - H (黒色粘質) 10YR2/1 黑色 極細粒砂で細粒砂含む
 - I (灰褐色粘質) 10YR3/2 黑褐色 粗粒シルト
 - J (灰色砂質) 10YR5/1 褐灰色 細粒砂～細粒砂
 - K (橙色砂質) 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂～細粒砂
- 基盤層 (地山)**
- L (地山) 5YR3/1 黑褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
 - L' (地山) 5YR3/1 黑褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
地山土壤化層

芝ヶ端古墳 墳丘東西方向土層断面



主体部埋土

- a. 10YR6/6 明黄褐色 細粒砂～粗粒砂
- b. 7.5YR6/8 橙色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む、
10YR6/8 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂、
- c. 10YR1.7/1 黒色 粗粒シルト（黒ボク） 以上が混じり合った層
- d. 10YR6/8 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂、10YR5/8 黄褐色 極細粒砂～
粗粒砂、25Y6/4 にぶい黄色 極細粒砂～細粒砂 以上が混じり合った層
- e. a層に e 層がラミナ状に混じる
- f. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂 粘質
- g. 10YR6/8 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂、10YR5/8 黄褐色 極細粒砂～
粗粒砂、10YR4/4 褐色 極細粒砂で中粒砂含む 以上の各ブロック堆積
- h. 10YR5/8 黄褐色 極細粒砂～粗粒砂と 25Y6/4 にぶい黄色 極細粒砂～
粗粒砂のブロック堆積
- i. 10YR6/8 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂、10YR1.7/1 黒色
粗粒シルト（黒ボク）、10YR3/1 黑褐色 シルト 以上の各ブロック堆積

上層：黄色系

- A1 (黄色粘質) 10YR6/8 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂
- A2 (黄色砂質) 10YR5/8 黄褐色 極細粒砂～粗粒砂
- B (白黄色粘質) 25Y6/4 にぶい黄色 極細粒砂～細粒砂
- C1 (茶色粘質) 10YR4/4 褐色 極細粒砂で中粒砂含む
- C2 (肌色粘質) 10YR6/5 明黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む
- D1 (赤系粘質) 7.5YR6/8 橙色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む
- D2 (乳白色砂質) 25Y7/4 淡黄色 細粒砂

中層：黑色系

- E (黒ボク) 10YR1.7/1 黒色 粗粒シルト
- F (茶色系) 10YR3/1 黑褐色 シルト

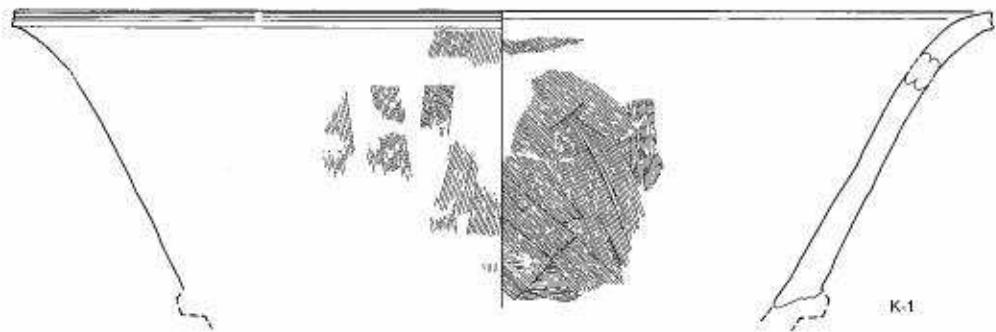
下層：茶色系

- G (白色砂質) 2.5Y8/4 淡黄色 細粒砂～細礫
- H (黒色粘質) 10YR2/1 黑色 極細粒砂で細粒砂含む
- I (灰褐色粘質) 10YR3/2 黑褐色 粗粒シルト
- J (灰色砂質) 10YR5/1 褐灰色 細粒砂～細礫
- K (橙色砂質) 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂～細礫

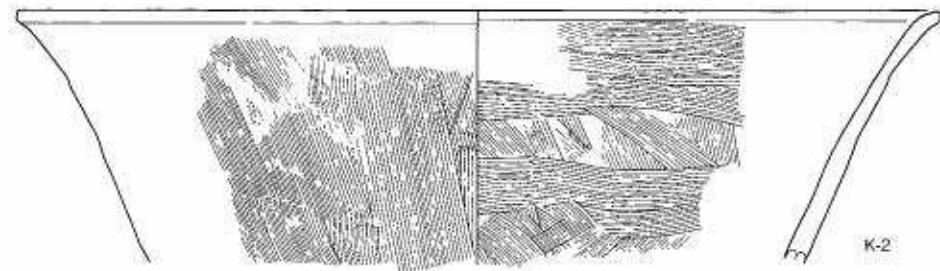
基盤層（地山）

- L (地山) 5YR3/1 黑褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
- L' (地山) 5YR3/1 黑褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
地山土壤化層

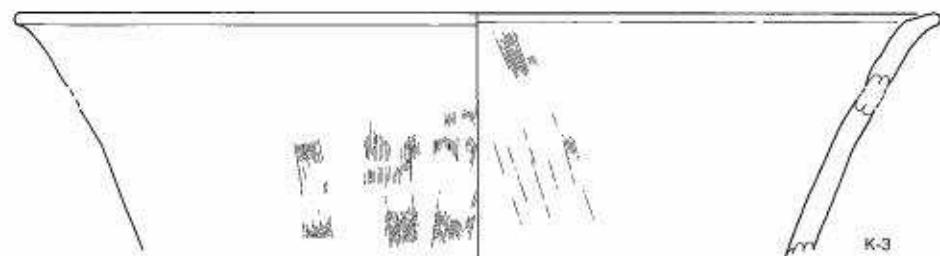
芝ヶ端古墳 墳丘南北方向土層断面



K-1



K-2



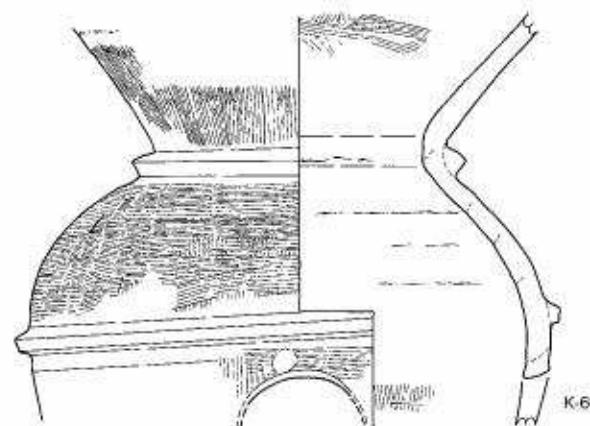
K-3



K-4

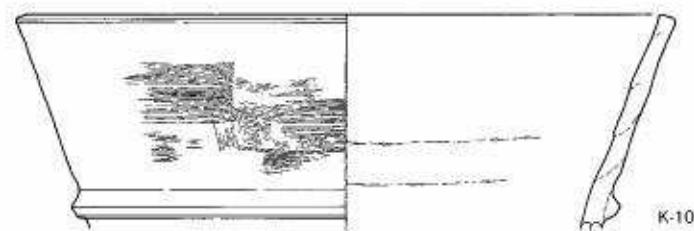
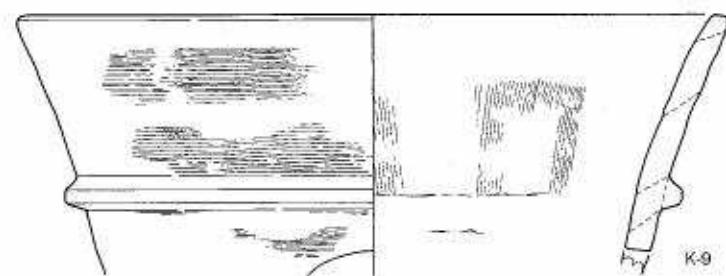
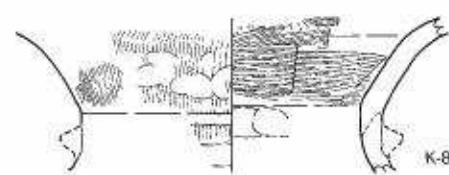
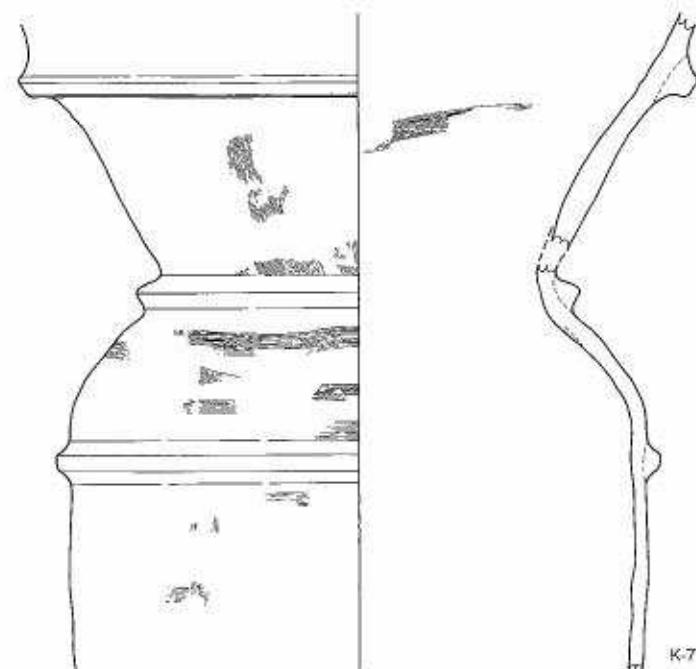


K-5



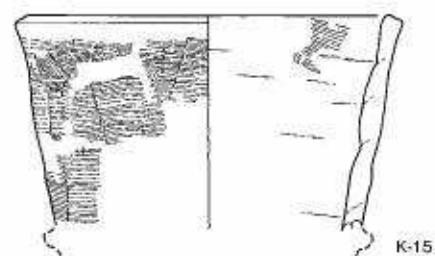
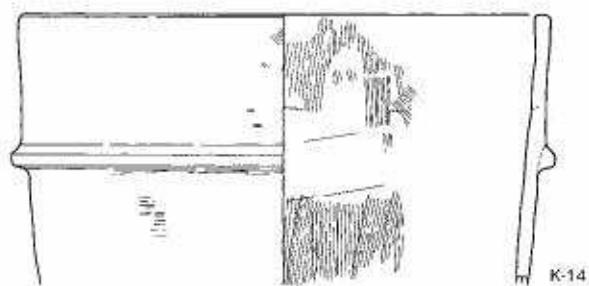
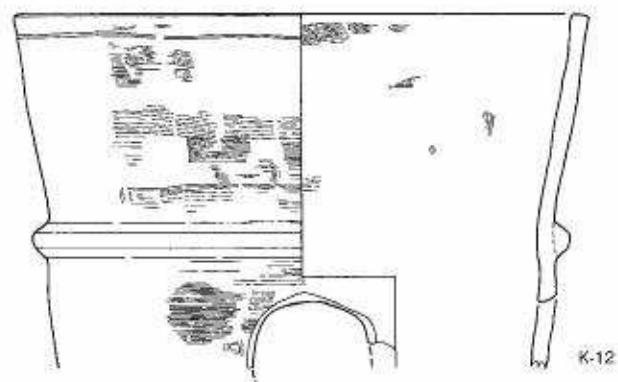
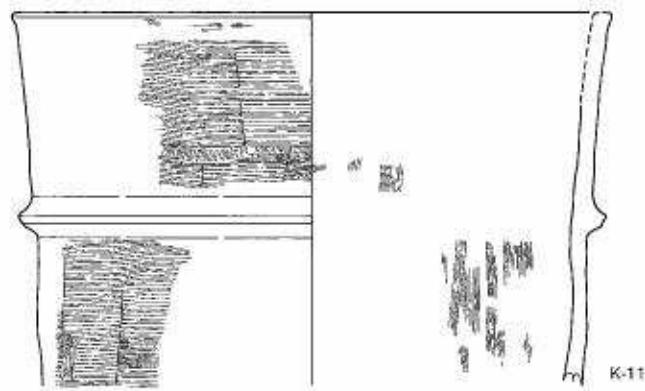
芝ヶ端古墳出土埴輪(1)

図版 22
芝ヶ端古墳



0 20cm

芝ヶ端古墳出土埴輪(2)



K-36

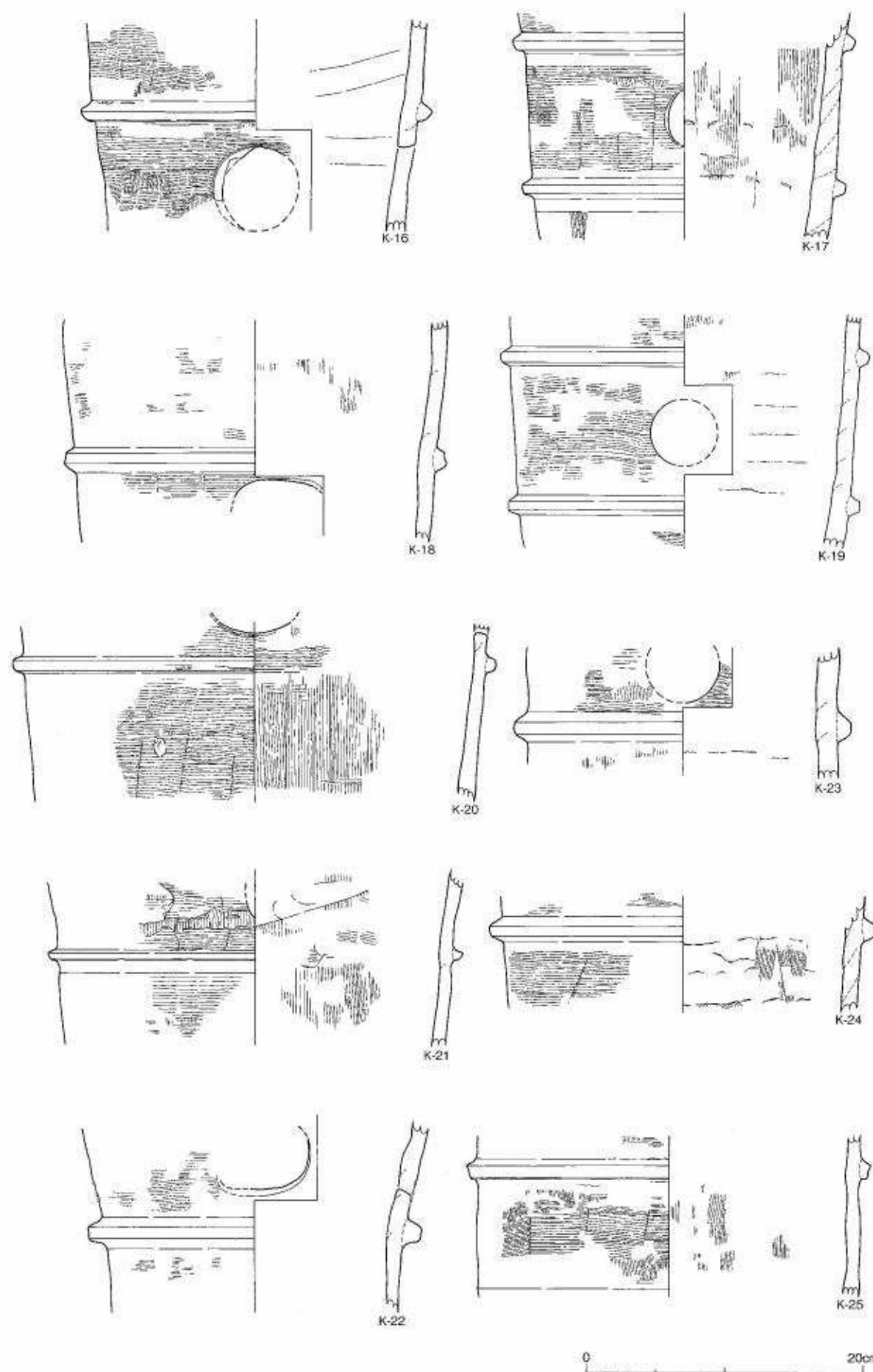
K-34

K-35

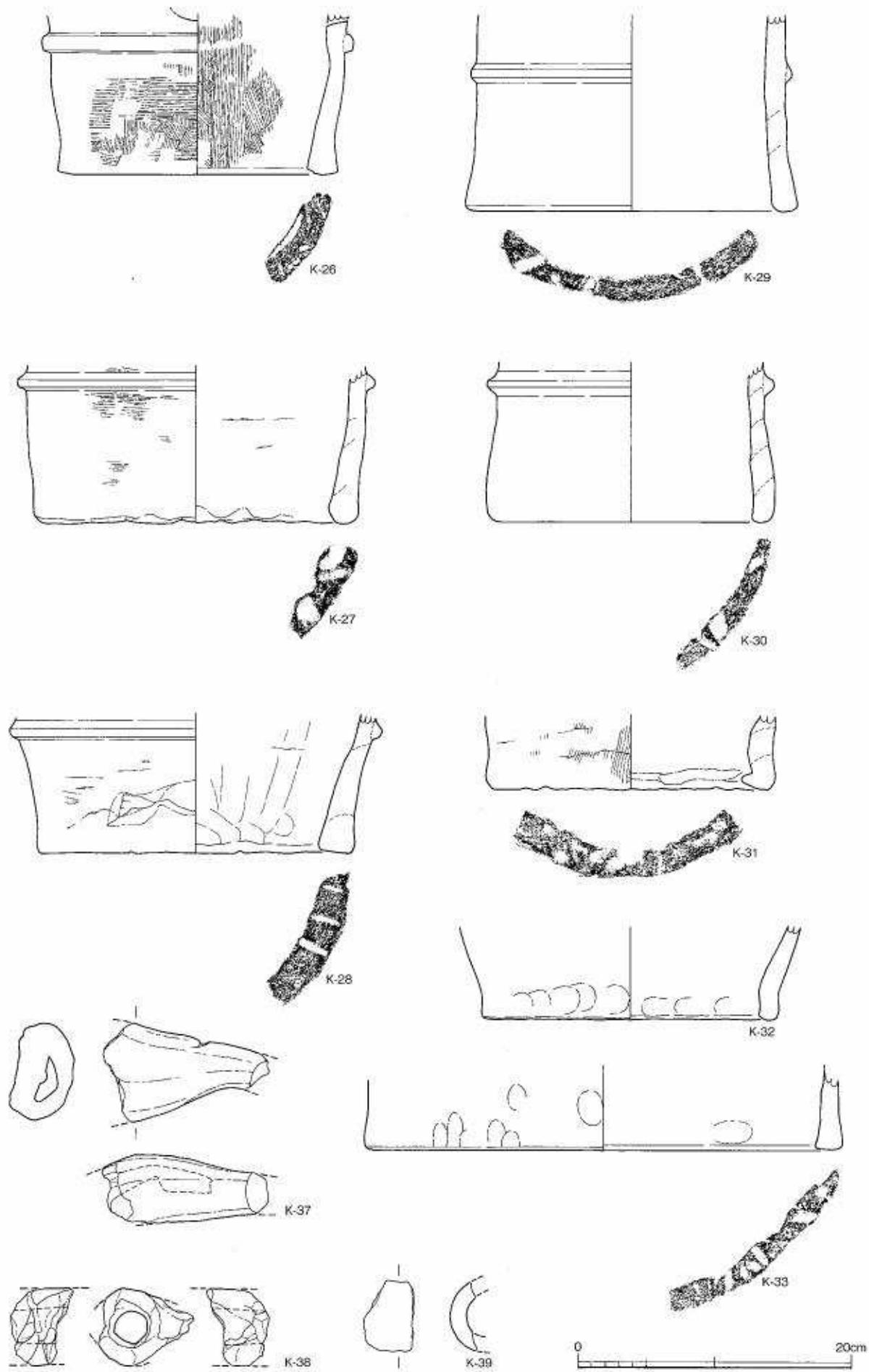


芝ヶ端古墳出土埴輪(3)

図版 24
芝ヶ端古墳



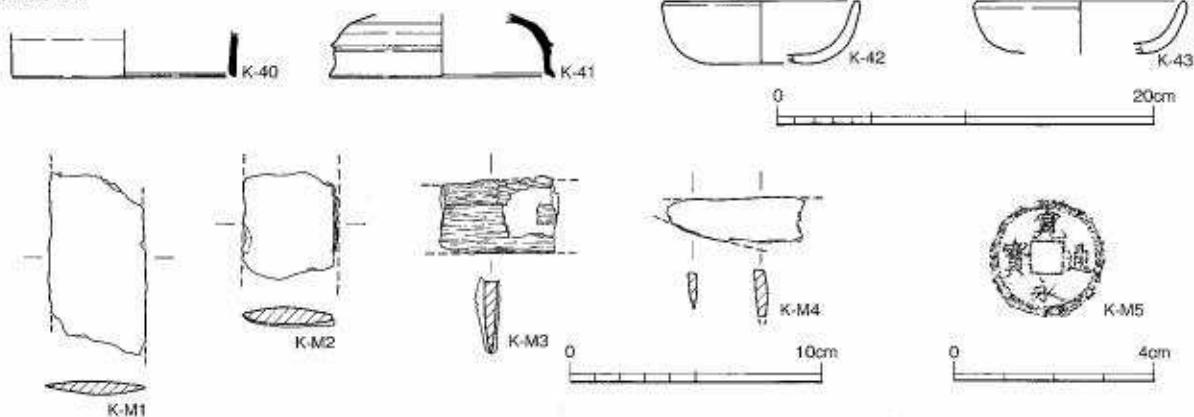
芝ヶ端古墳出土埴輪（4）



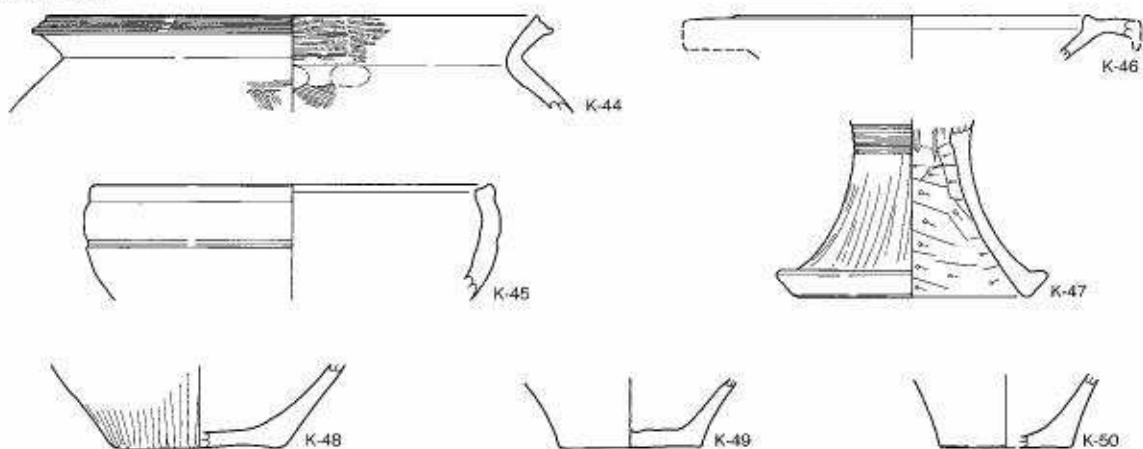
芝ヶ端古墳出土埴輪 (5)

図版 26
芝ヶ端古墳

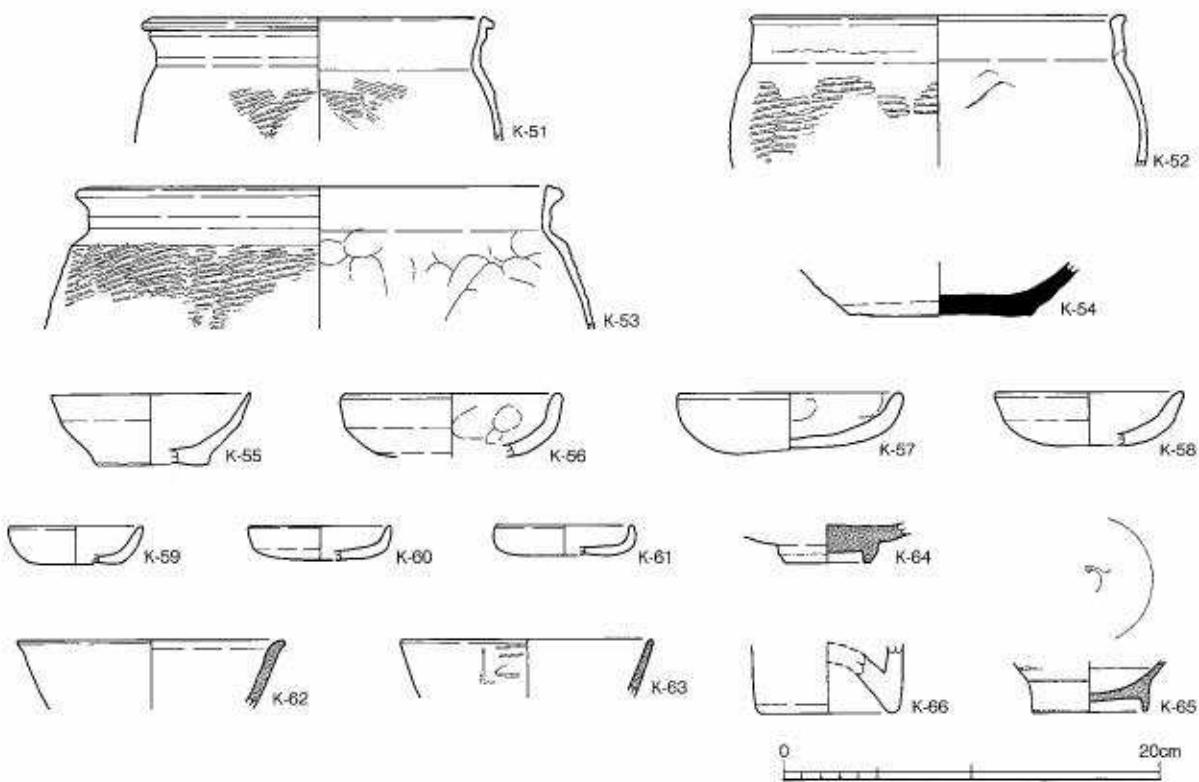
墳丘据ほか



墳丘盛土内ほか

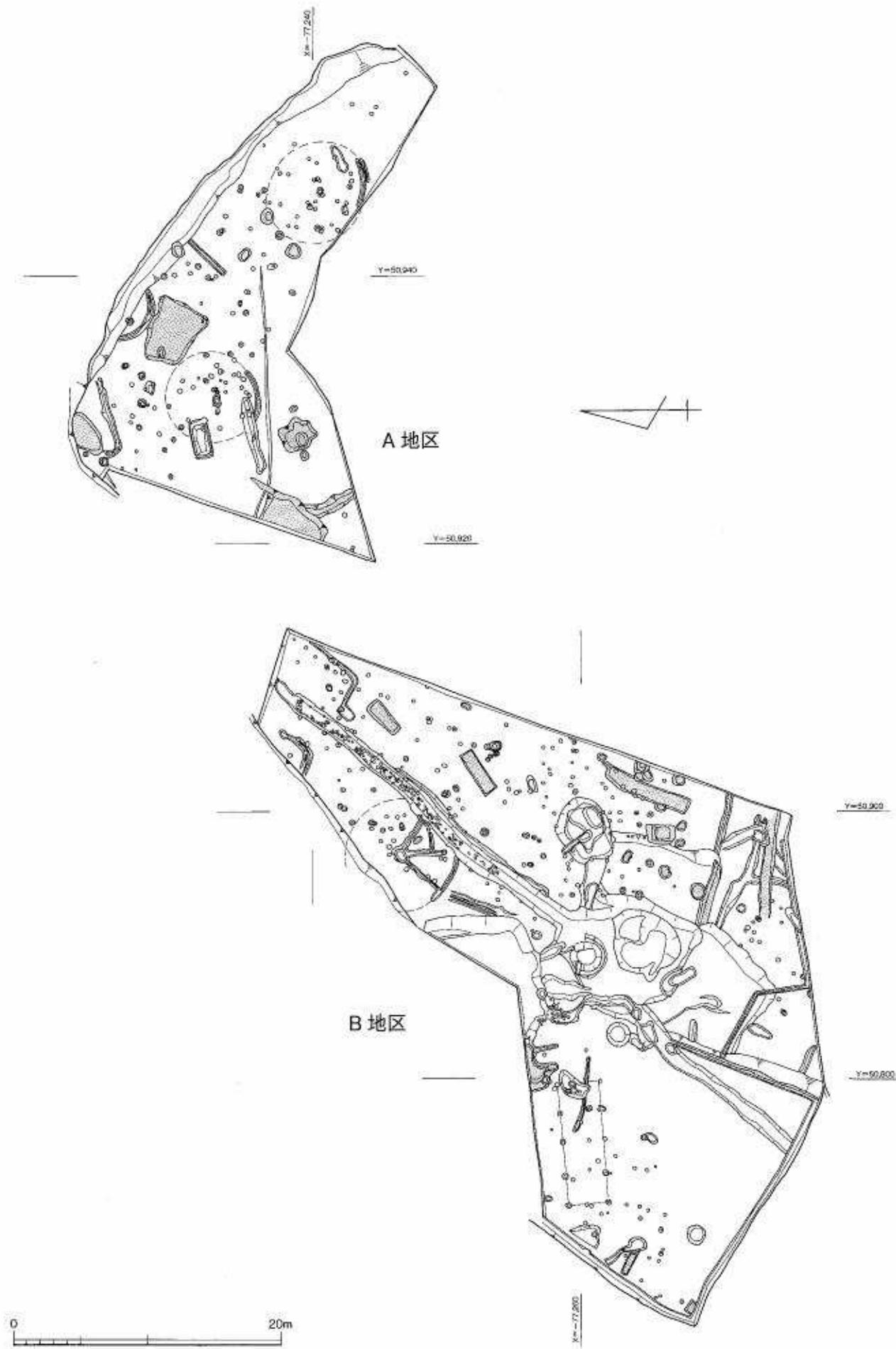


後世盛土・墳裾ほか



芝ヶ端古墳出土遺物

芝ヶ端遺跡



芝ヶ端遺跡 調査区全体

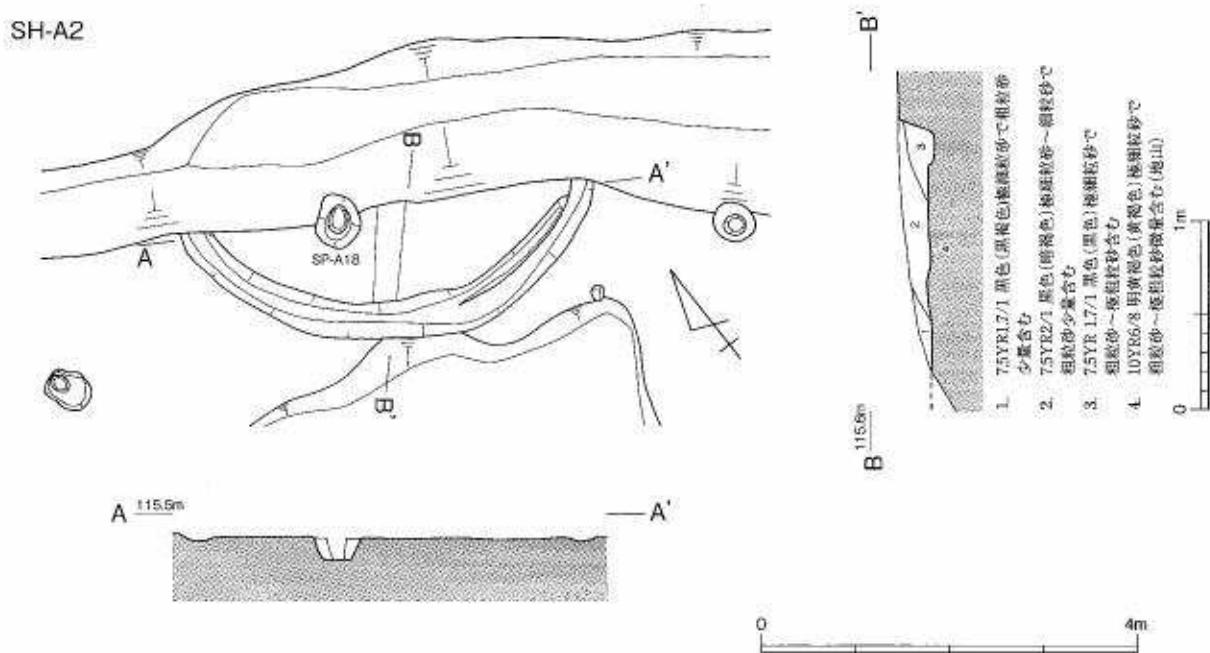
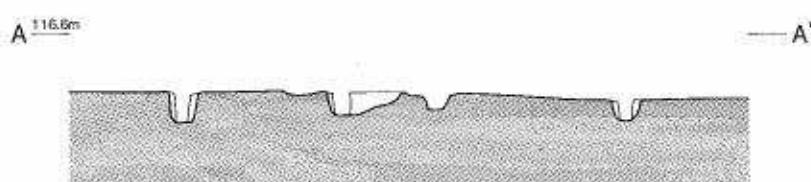
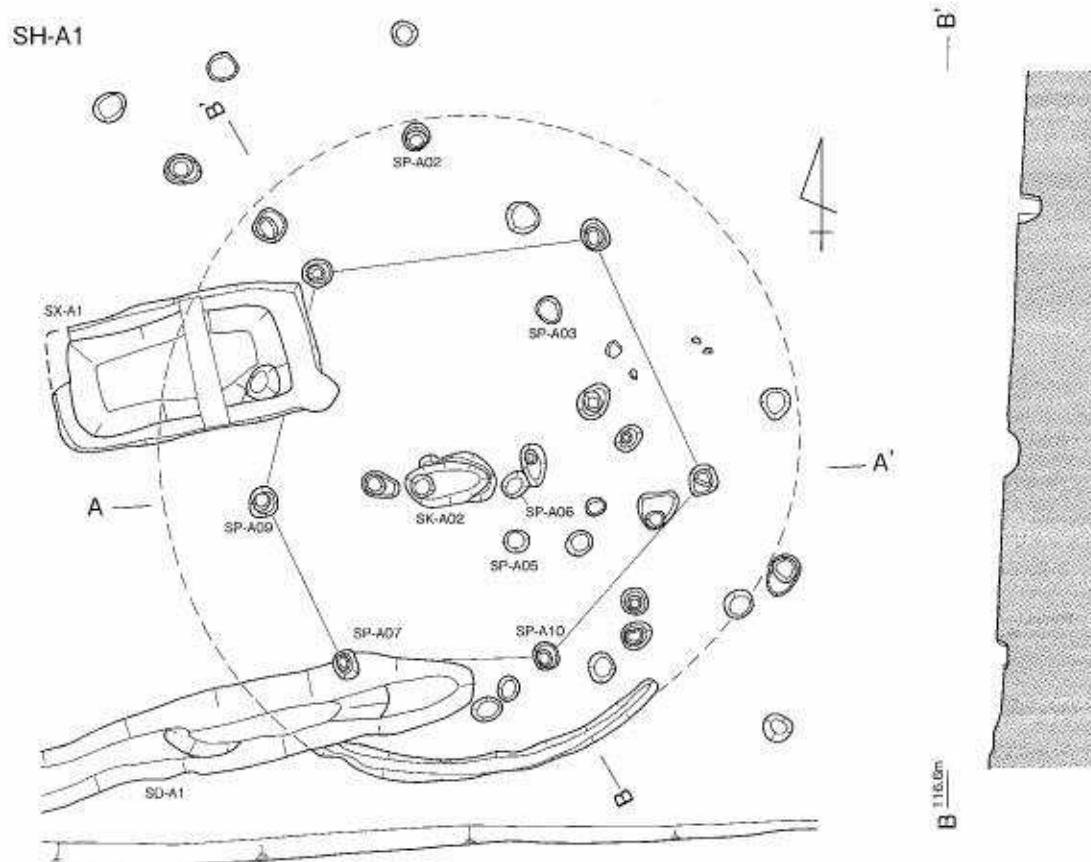


芝ヶ端遺跡 A 地区

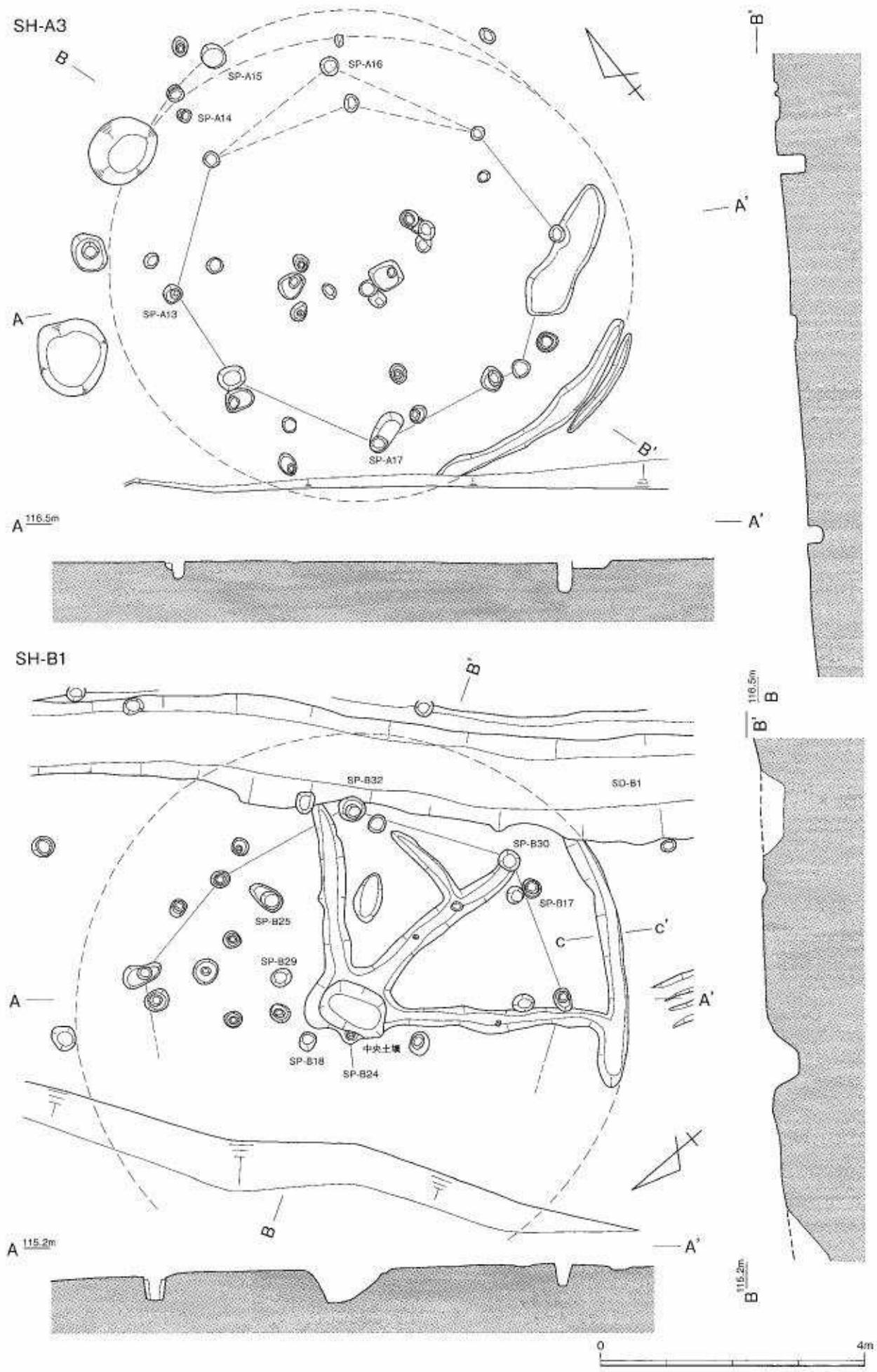


芝ヶ端遺跡 B 地区

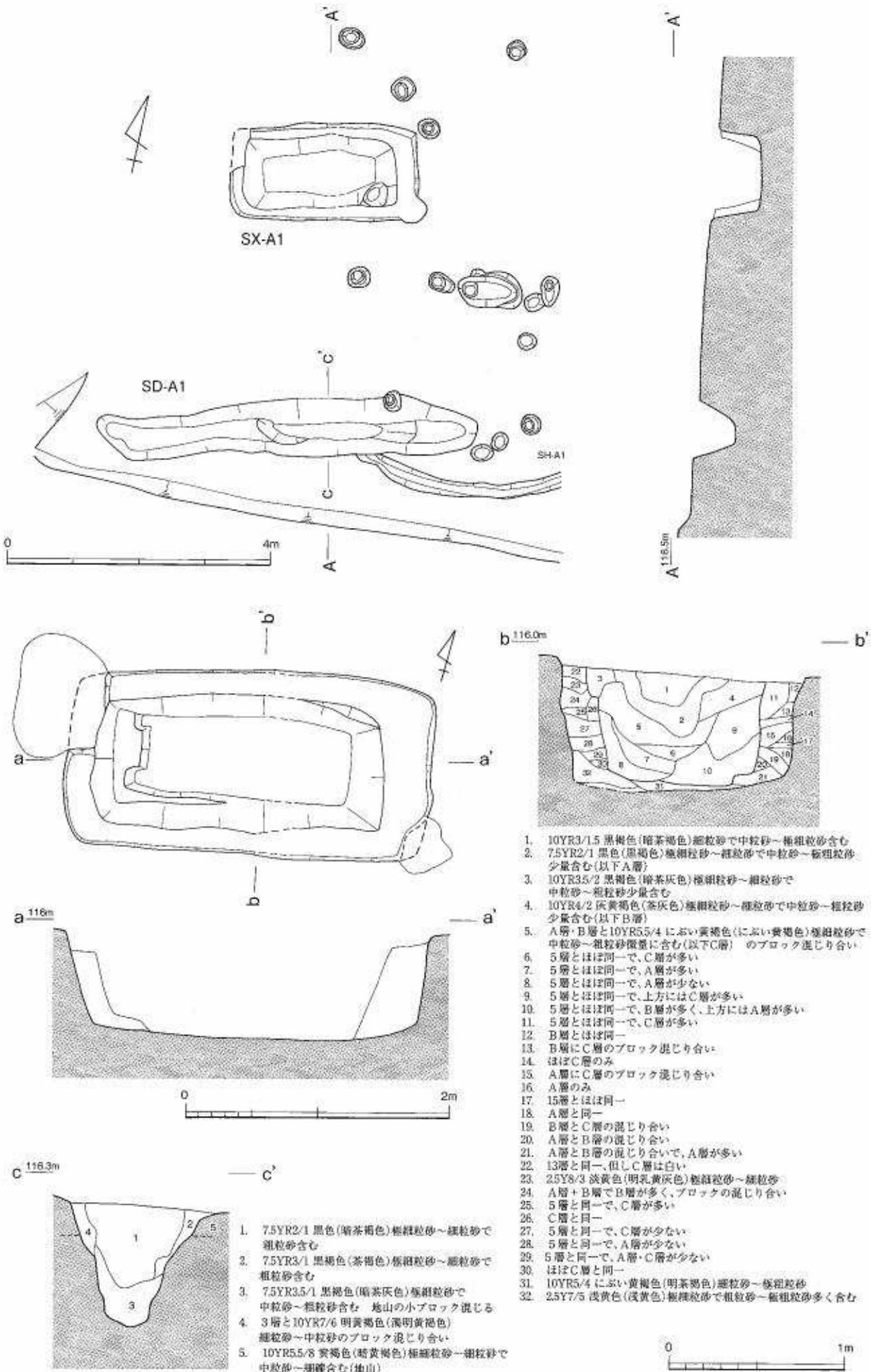
図版 30
芝ヶ端遺跡



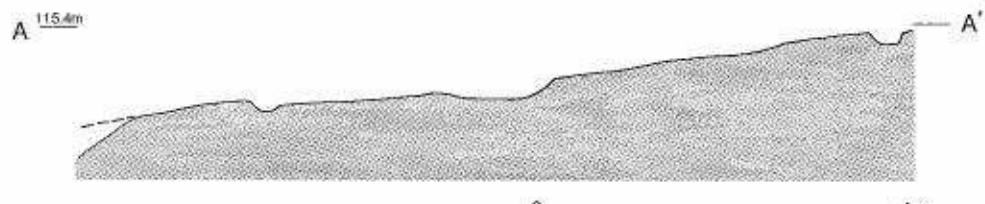
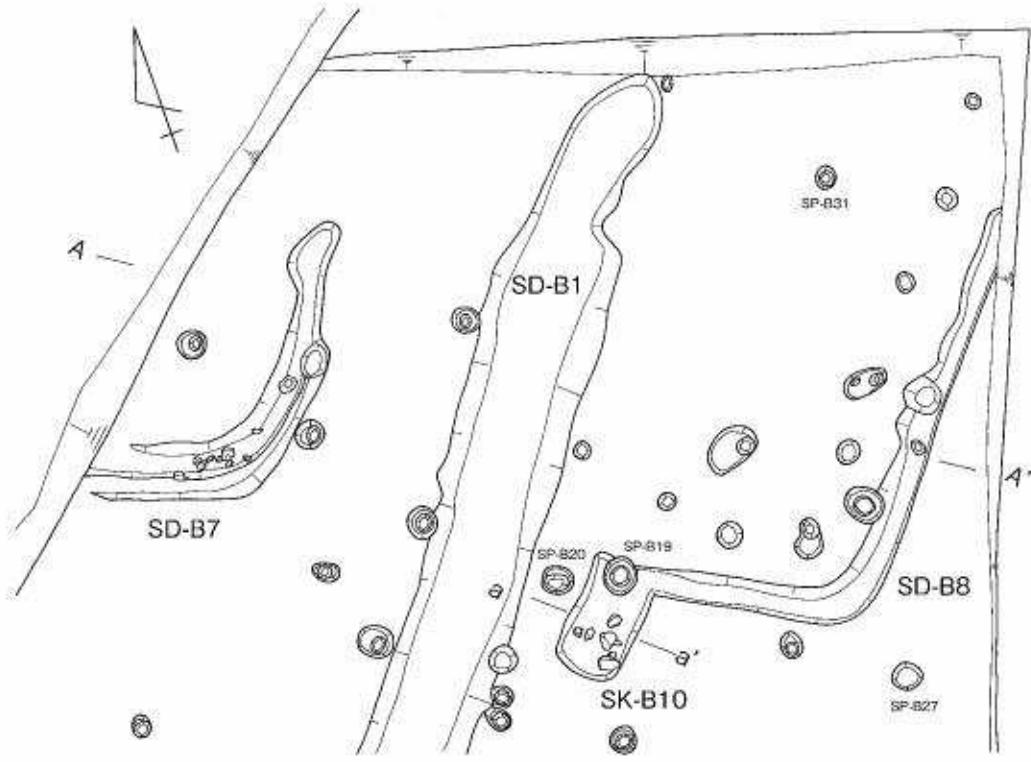
芝ヶ端遺跡 堅穴住居跡(1) SH-A1・A2



芝ヶ端遺跡 墓穴住居跡（2） SH-A3・B1



芝ヶ端遺跡 SX-A1・SD-A1

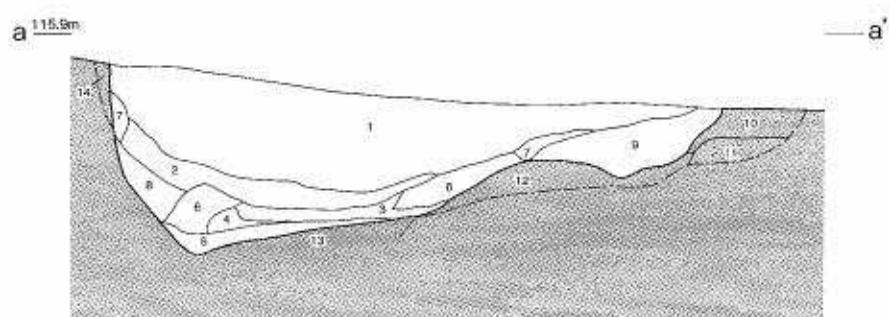
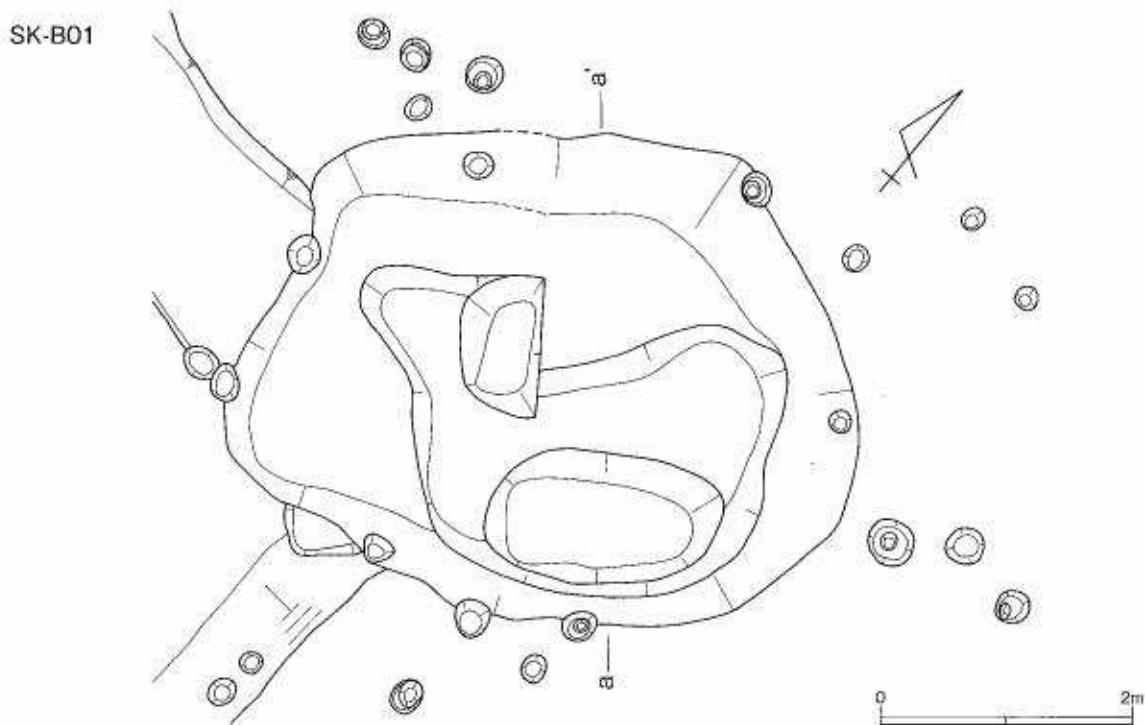


SH-B1 周壁溝



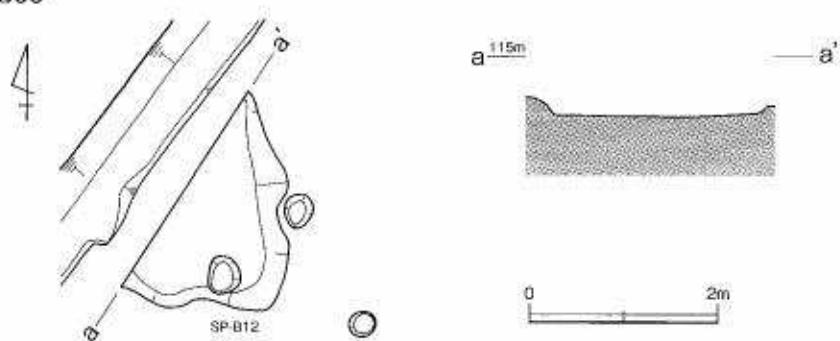
芝ヶ端遺跡 B 地区北部遺構

図版 34
芝ヶ端遺跡

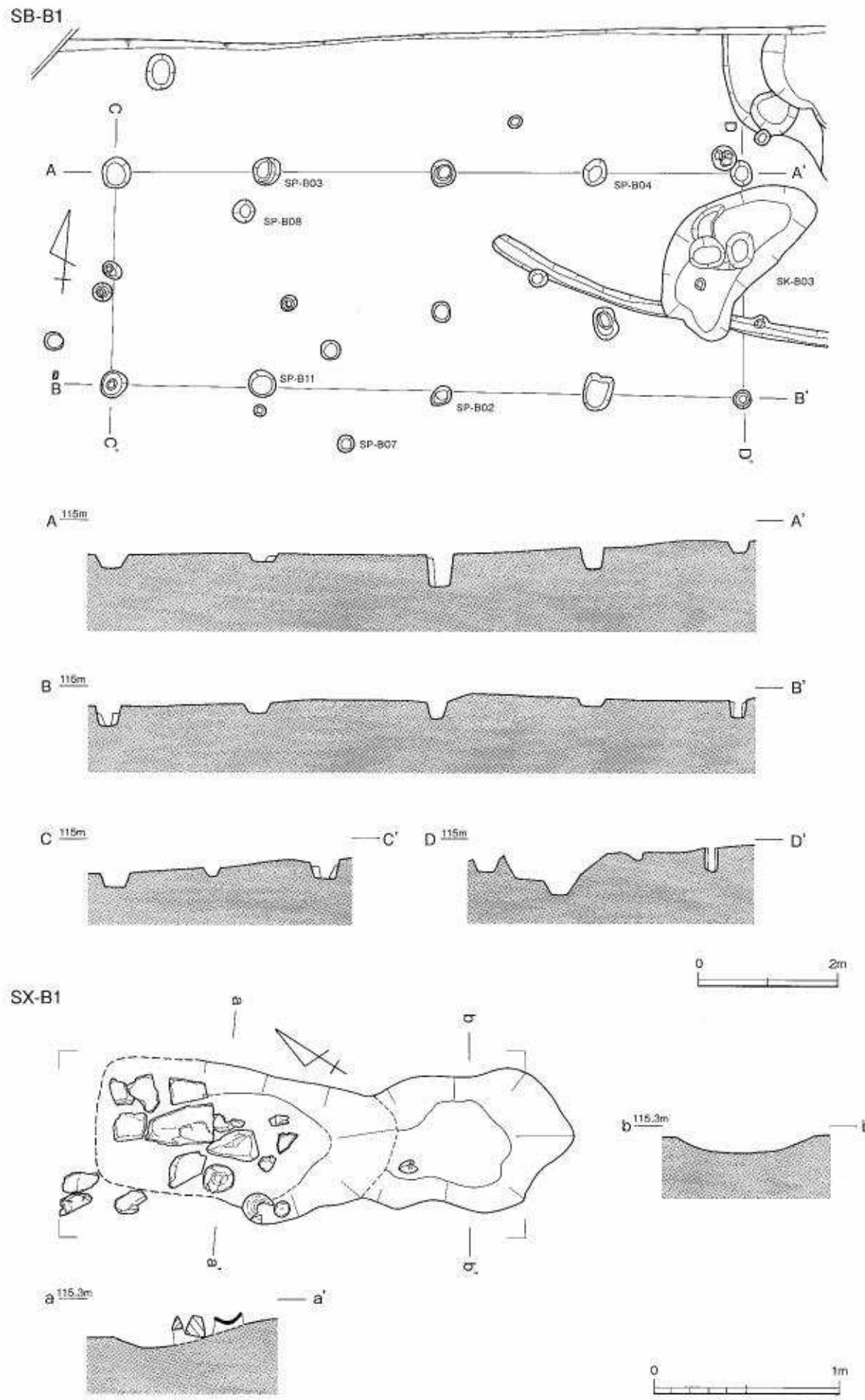


1. 7.5YR17/1 黒色(黒褐色)板細粒砂で粗粒砂を少量含む 奈良初期の土器出土
 2. 10YR17/1 黒色(黒色)粗粒シルトで粗粒砂少量含む
 3. 10YR6.5/8 明黄褐色(明黄褐色)粗粒シルト
 4. 7.5YR17/1 黒色(黒褐色)板細粒砂で粗粒砂・粗粒砂含む
 5. 10YR7/8 黄褐色(黄褐色)板細粒砂～極粗粒砂 地山の土壤化層
 6. 7.5YR5/3 にぶい褐色(明褐色)妙層 中粒砂～極粗粒砂
 7. 1層と14層(地山)が混じる
 8. 14層(地山)の崩落土に1層が混じる
 9. 10YR7/8 黄褐色(黄褐色)板細粒砂～粗粒砂で粗粒砂～板粗粒砂含む に10YR8/4 淡黄褐色(明乳褐色)粗粒シルトのブロック混じり
 10. 10YR4/2 灰黄褐色(灰褐色)板細粒砂～粗粒砂 と 10YR7/6 明黄褐色(明黄褐色)粗粒シルトの混じり合い
 11. 10YR6/8 明黄褐色(明黄褐色)細粒砂～極粗粒砂
 12. 10YR6/5 にぶい黄褐色(湖邊灰色)板細粒砂～極粗粒砂
 13. 10YR6/8 黄褐色(黄褐色)板細粒砂～粗粒砂
 14. 10YR6/8 明黄褐色(黄褐色)板細粒砂～粗粒砂
- 0 $\frac{1}{115.9m}$ 2m

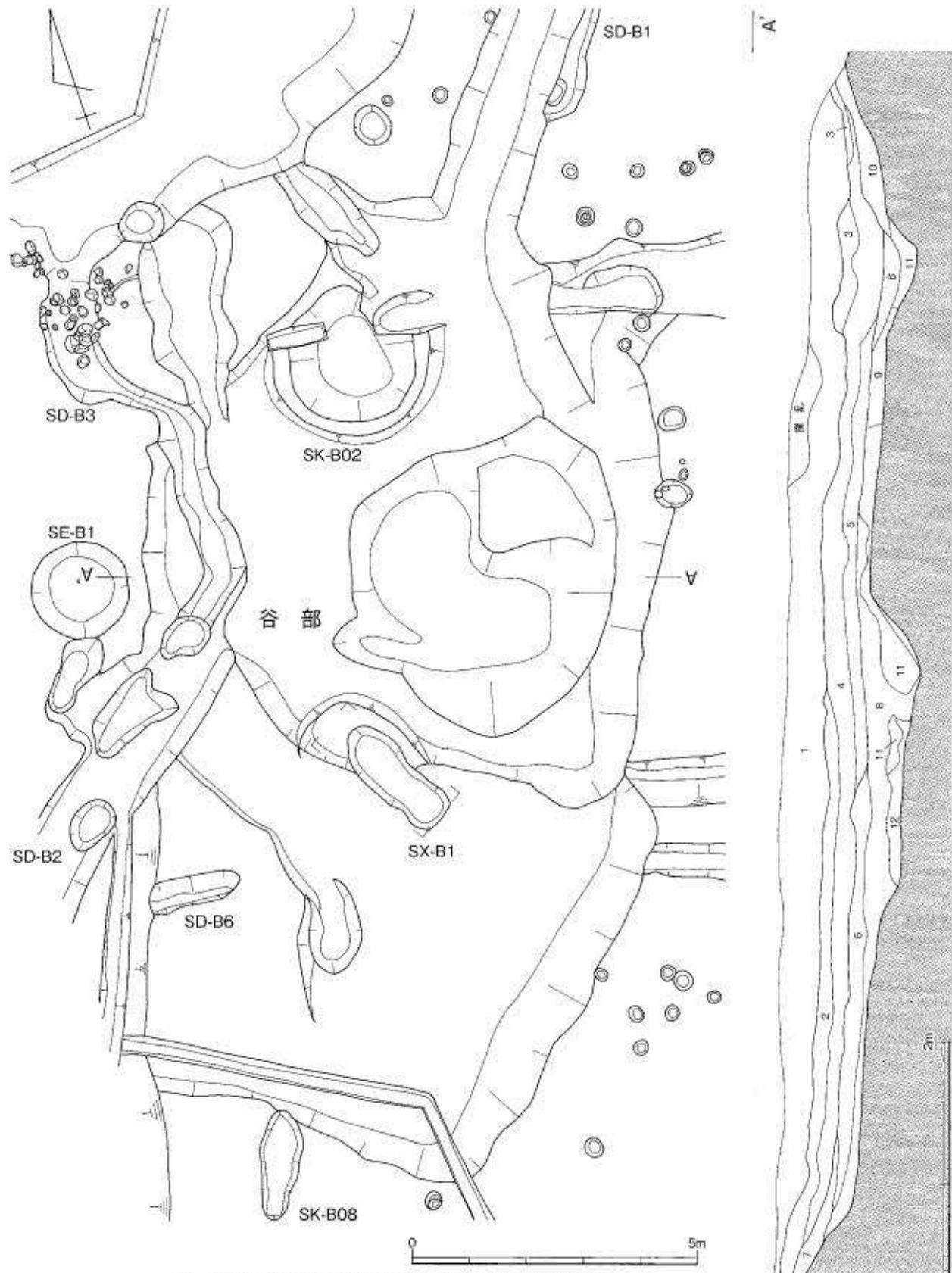
SK-B06



芝ヶ端遺跡 B 地区遺構

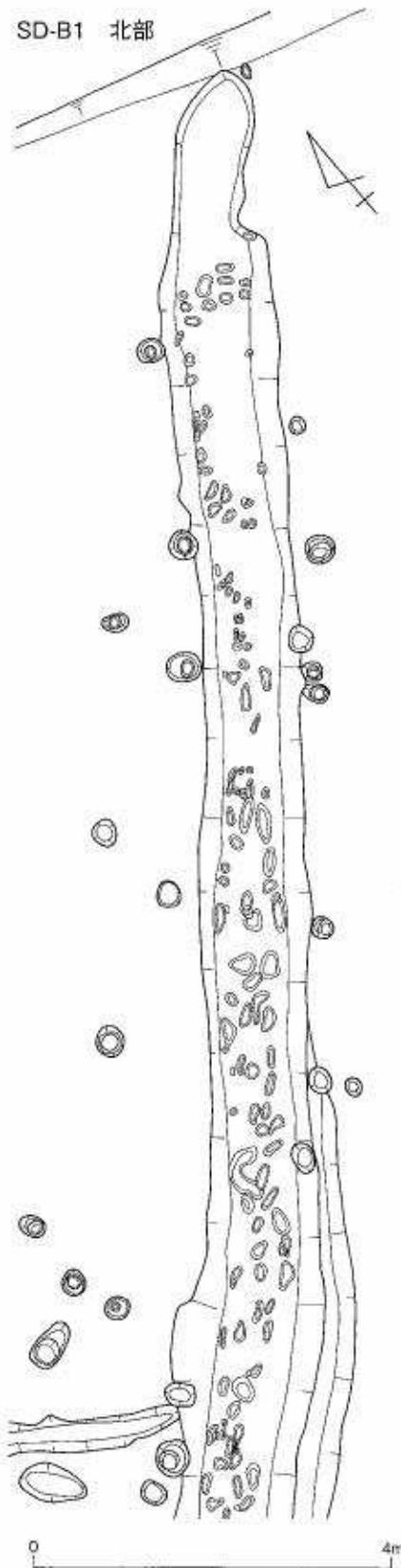


芝ヶ端遺跡 SB-1・SX-B1



- SYR2/1 黒褐色(黒褐色)粗粒シルト—極細粒砂で中粒砂～粗粒砂少量含む
- SYR3/1 黒褐色(暗褐色)粗粒シルト—極細粒砂で中粒砂～粗粒砂少量含む
- 7SYR3/1 黑褐色(黒褐色)極細粒砂で粗粒砂～細粒砂多く含む
- SYR3/1 黑褐色(暗褐色)極細粒砂で中粒砂～粗粒砂多く含む
- SYR2.5/1 黑褐色(黒褐色)極細粒砂で中粒砂～粗粒砂少量含む
- SYR1.7/1 黑色(黒褐色)粗粒シルト—極細粒砂で粗粒砂少量含む
- 4層と6層の混じった土
- 10YR1.7/1 黑色(黒褐色)粗粒シルト—板粗粒砂で中粒砂～粗粒砂微量に含む
- 10YR2/1 黑褐色(暗褐色)板粗粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
- 5-6-9-13層のブロック混じり合い(10cm程のブロック)
- 10YR5.2/2 灰青褐色(灰黄褐色)砂層 中粒砂～細粒砂 浸沫悪い
- 10YR4.5/1 細灰褐色(乳灰色)粗粒シルト
- 7SYR7.5/1 灰白色(灰白色)と10YR6/8 明黄褐色(明黄褐色)の粗粒シルト—板粗粒砂で中粒砂～粗粒砂含む 中粒砂～板粗粒砂の砂層部分もあり

芝ヶ端遺跡 B 地区谷部



- 1 5YR2/1 黒褐色（暗褐色～黒褐色）板細粒砂で中粒砂～板粗粒砂少量含む
地山ブロック少量混じる
1' 1層と同じ
2 10YR3/1 黑褐色（茶褐色～暗茶褐色）粗粒シルトで粗粒砂微量含む
3 10YR3.5/1 暗褐色（暗褐色）粗粒シルト～板細粒砂で粗粒砂少量含む
4 2.5Y6/5 にぶい黄色（深黃灰色）板粗粒砂～中粒砂で板粗粒砂～細隙合む
5 10YR6/8 明黄褐色（黃褐色）板細粒砂で中粒砂～板粗粒砂含む

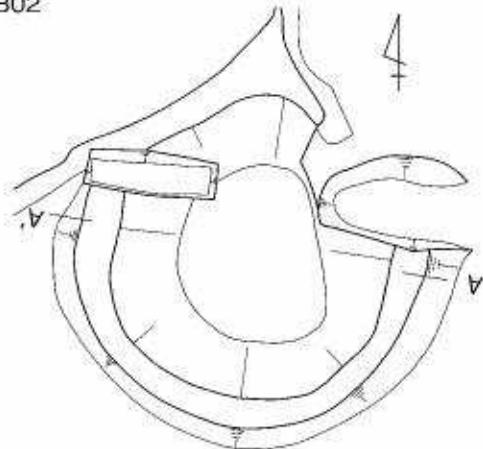
- 1 5YR3/1 黑褐色（暗茶褐色）板細粒砂で中粒砂～板粗粒砂含む
2 5YR2/2 黒褐色（茶褐色）板細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
3 5YR2/1 黑褐色（暗褐色）板細粒砂で中粒砂～粗粒砂多く含む
4 5YR1.7/1 黑色（黑褐色）粗粒シルト～板細粒砂
5 5YR3/1 黑褐色（暗茶褐色）板細粒砂～細粒砂で粗粒砂～板粗粒砂含む
6 5YR2.5/1 黑褐色（暗茶灰色）砂層 板粗粒砂～粗粒
7 10YR1.7/1 黑色（黑色）粗粒シルトで粗粒砂微量含む
8 7.5YR6/8 橙色（橙色）+ 2.5Y8/4 淡黄色（淡黄色）粗粒シルト～板細粒砂で
粗粒砂～板粗粒砂少量含む

- 1 10YR3/1 黑褐色（黒褐色）で 10YR4/2 黄褐色（灰黄褐色）を部分的に含む
粗粒シルトに粗粒砂～細隙の砂層混じる
2 7.5YR3/1 黑褐色（10YR 黑色）粗粒シルトで中粒砂～粗粒含む
3 7.5Y7/2 灰白色（2.5Y8/4 明黄褐色
4 10YR5/1 灰褐色（褐灰色）+ 7.5Y8/1 灰白色に 2.5Y7/6 明黄褐色を含む

- 1 7.5YR2/1 黑色（黒褐色）+ 10YR2/1 黑色（黑色）に 7.5YR3/1 黑褐色と
7.5YR5/1 褐灰色を部分的に含む 粗粒シルトに粗粒砂～細隙の砂層混じる
2 10YR4/1 暗灰色（褐灰色）粗粒シルトで中粒砂～粗粒含む
3 10YR1.7/1 黑色（黑色）粗粒シルトで中粒砂含む
4 10YR4/1 暗灰色（褐灰色）粗粒シルトと粗粒砂～粗粒砂の互層
5 10YR6/1 暗灰色（褐灰色）で 7.5Y8/1 灰白色を含む 中粒砂～細隙の
砂層に 板細粒砂・粗粒砂を含むブロック混じり合い

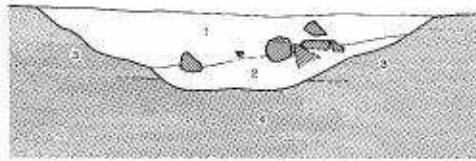
図版 38
芝ヶ端遺跡

SK-B02



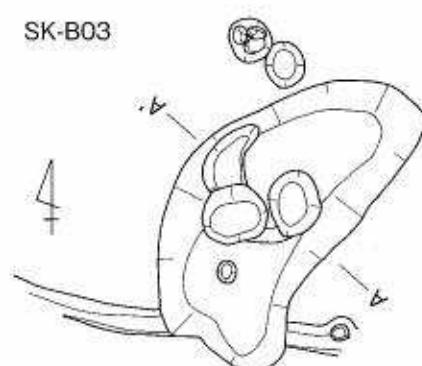
A 114.5m

— A'



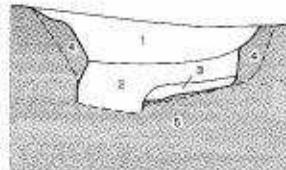
- 1 7.5YR3/1 黒褐色（黒褐色）極細粒砂～粗粒砂で中粒砂～粗粒砂含む土質少量含む
- 2 7.5YR17/1 黒色（暗黒褐色）極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を含む上面に大隙（角～重角隙）
- 3 10YR3/2 黒褐色（褐色又は暗褐色）極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂多く含む谷部堆土の第2層
- 4 10YR7/8 黄褐色（明黄褐色）粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂含む地山の粘質土

SK-B03



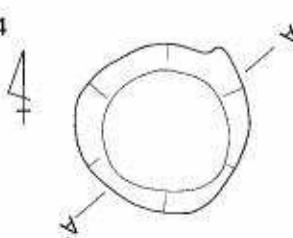
A 115m

— A'



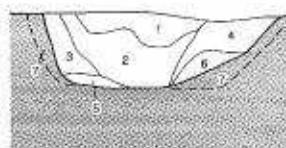
- 1 10YR3/2 黒褐色（黒褐色）一部明黄褐色泥じり細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
- 2 10YR2/3 黒褐色（暗褐色）極細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
- 3 10YR4/1 暗灰色+10YR5/4 にぶい黃褐色（褐灰色）砂層細粒砂～細粒砂
- 4 10YR6/6 明黄褐色（明黄褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む（地山）
- 5 25Y6/3 にぶい黄色（灰黄色）細粒砂 粘質土層（地山）

SK-B04



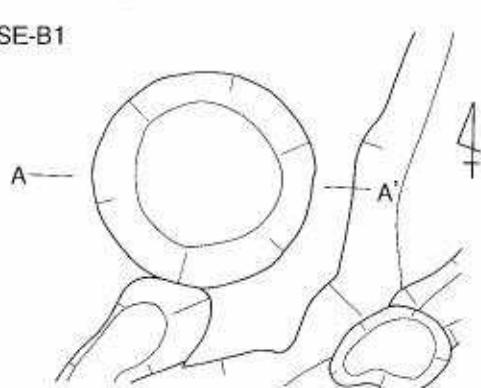
A 115m

— A'



- 1 7.5YR3/1 黒褐色（黒褐色）でまばらに橙色が混じる 粗粒シルトで粗粒砂含むに 極細粒砂で粗粒砂～極細粒砂含む のブロック混じり合い
- 2 10YR4/1 暗灰色（暗褐灰色）+10YR5/1 暗灰色（褐灰色）で、まばらに黄褐色混じる 粗粒シルトで中粒砂～粗粒砂含む に粗粒砂～細粒のブロック混じり
- 3 7.5YR3/1 黒褐色（黒褐色）+10YR4/1 暗灰色（褐灰色）で、粒度は1層と同じ
- 4 10YR3/1 黒褐色（黒褐色）+7.5YR3/1 黑褐色（黒褐色）で、一部 10YR4/1 暗灰色が混じる 粒度は2層と同じ
- 5 10YR2/1 黒色（黑色）粗粒シルトで中粒砂～粗粒砂微量に含む
- 6 10YR2/1 黑色（黑色）で全体的に黄褐色が混じる 粒度は5層と同じ
- 7 7.5YR3/1 黑褐色（黒褐色）粗粒シルトで中粒砂微量に含む

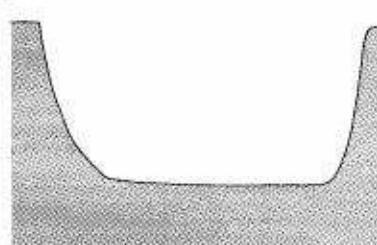
SE-B1



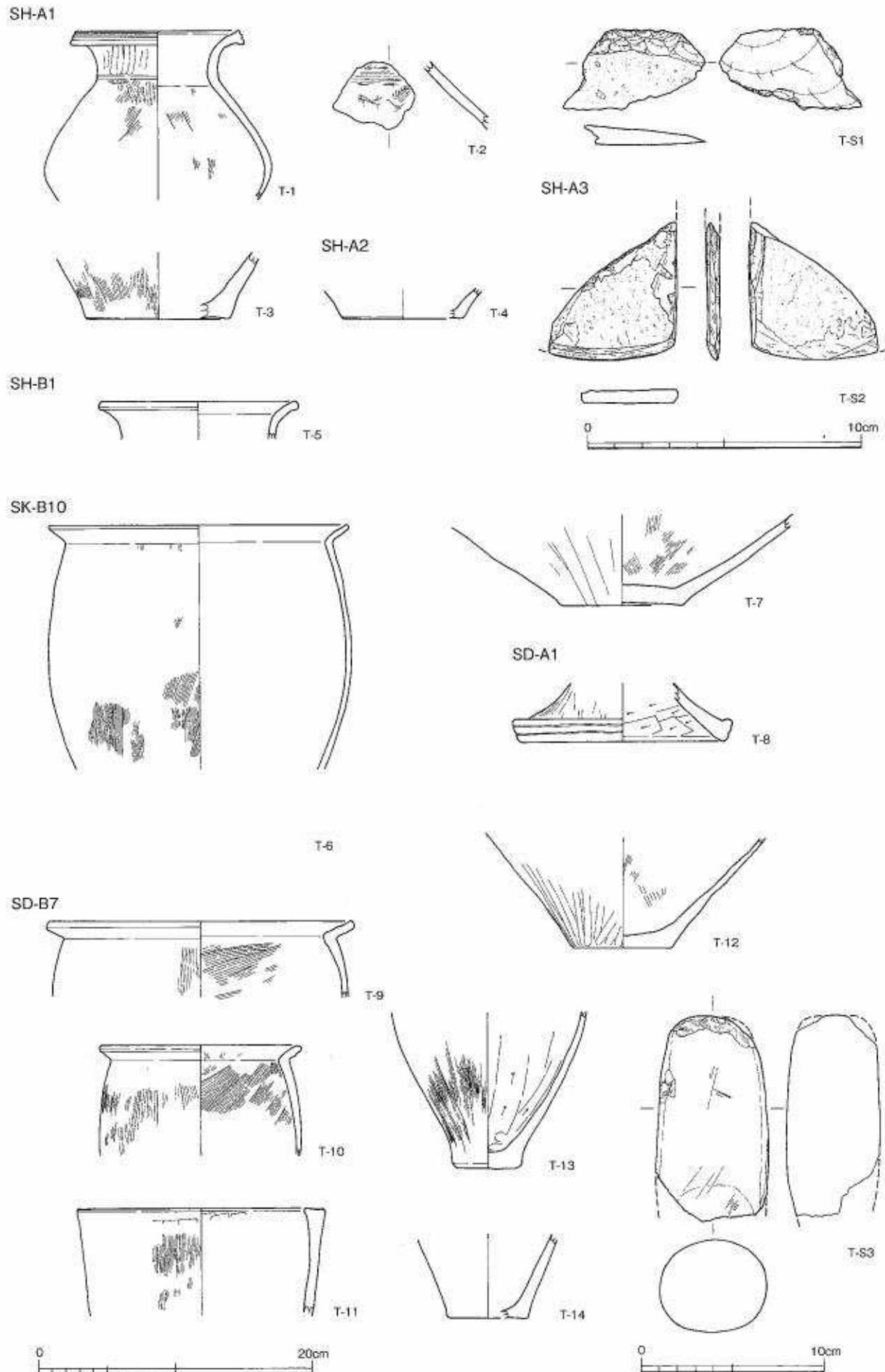
0 3m

A 115m

— A'

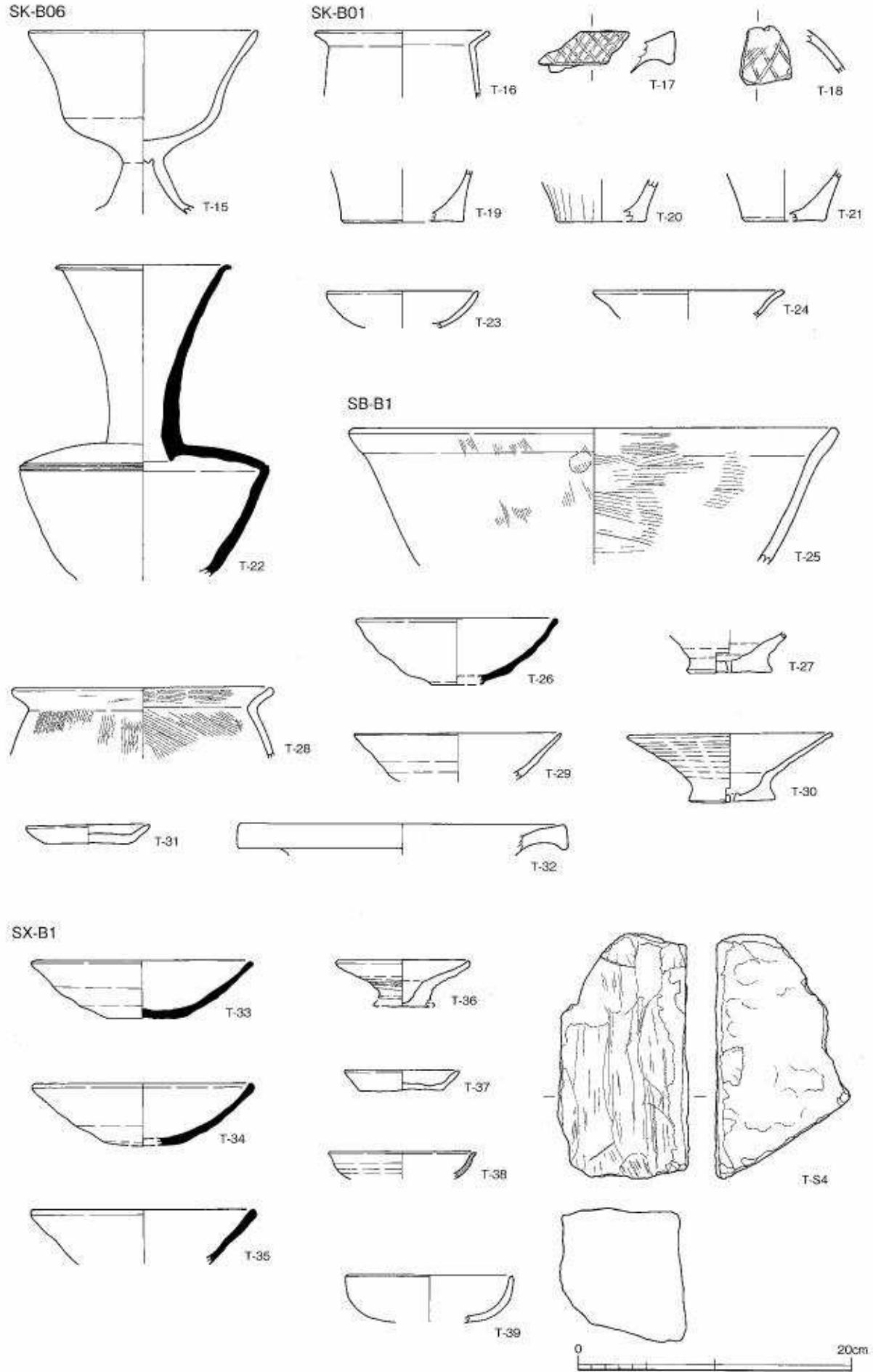


0 2m



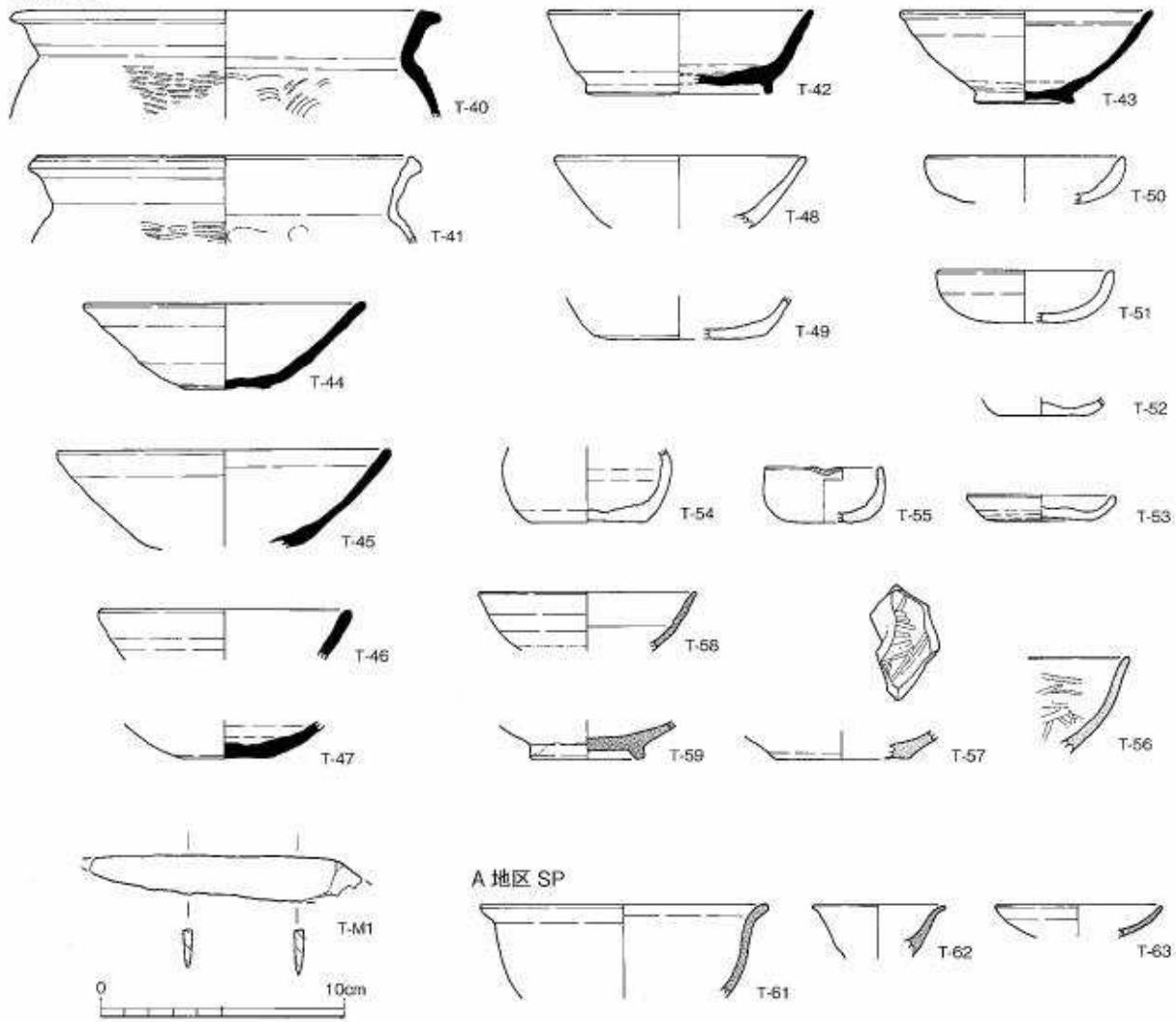
芝ヶ端遺跡 遺構出土遺物 (1)

図版 40
芝ヶ端遺跡

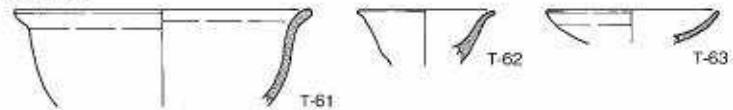


芝ヶ端遺跡 遺構出土遺物 (2)

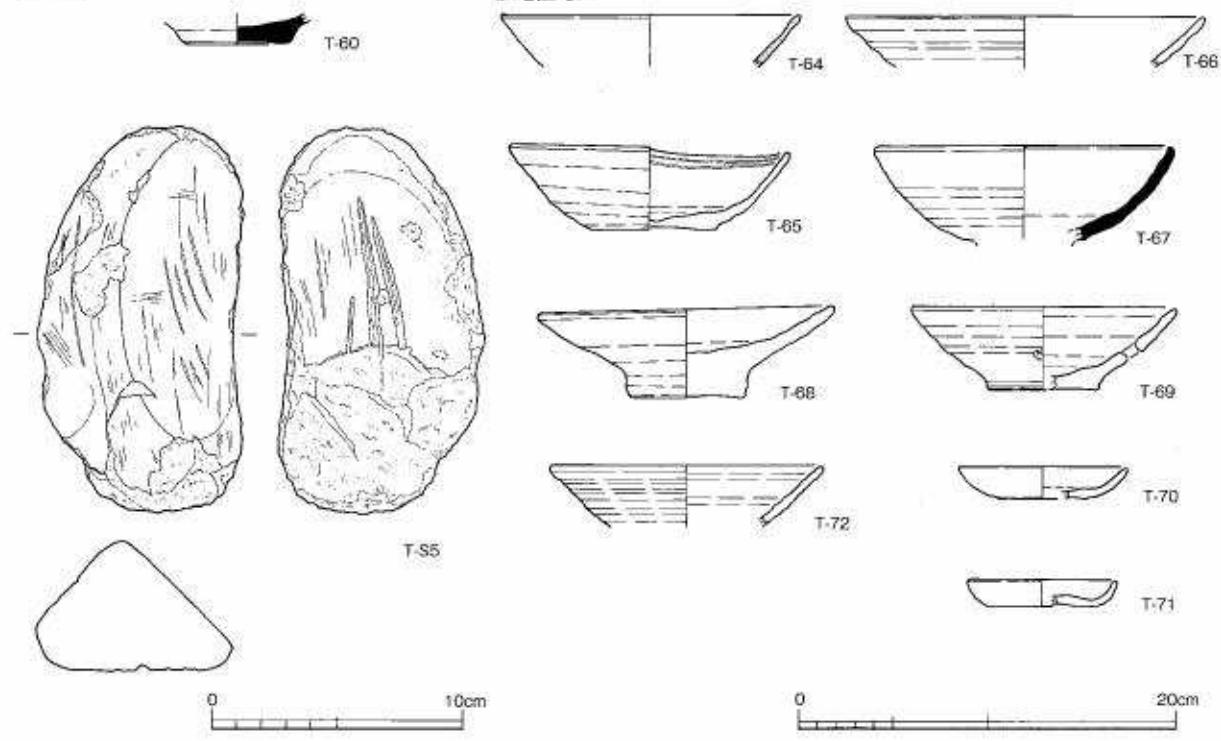
B 地区谷部



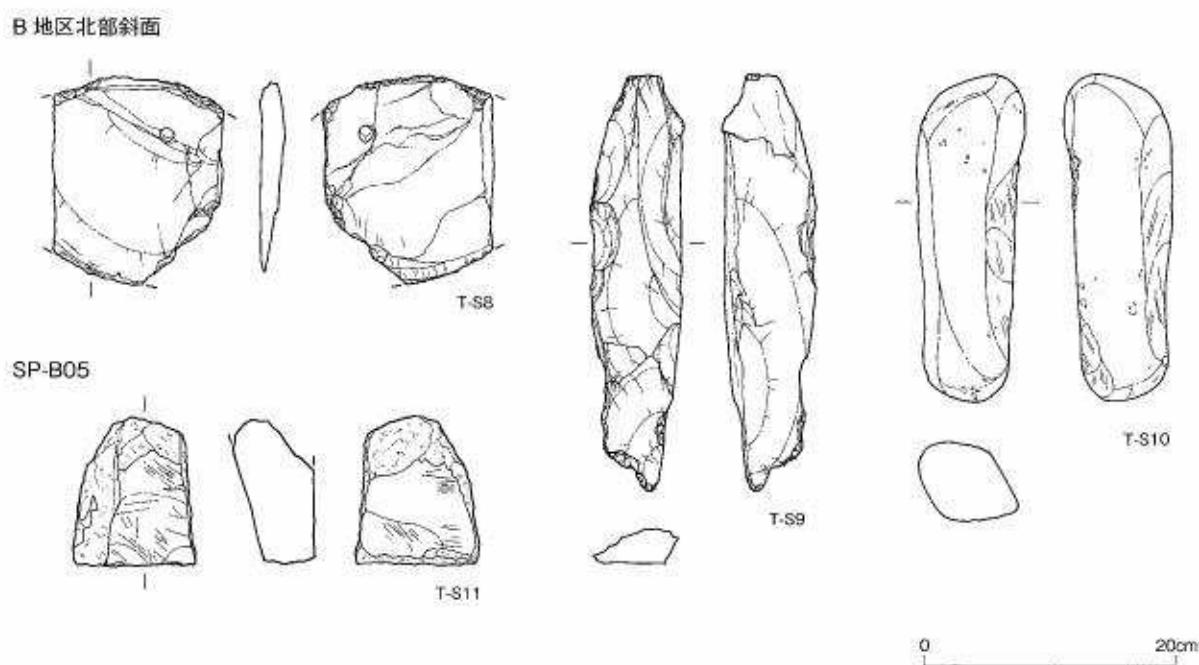
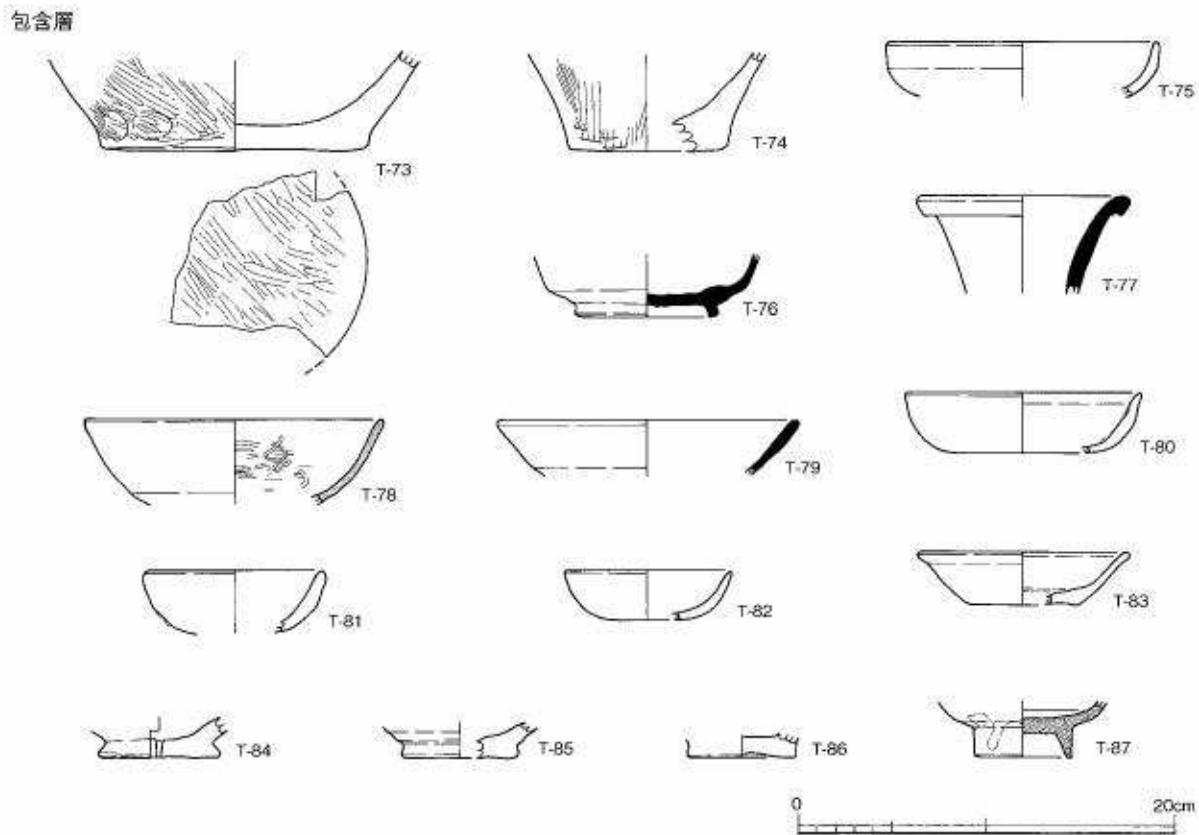
A 地区 SP



SD-B3

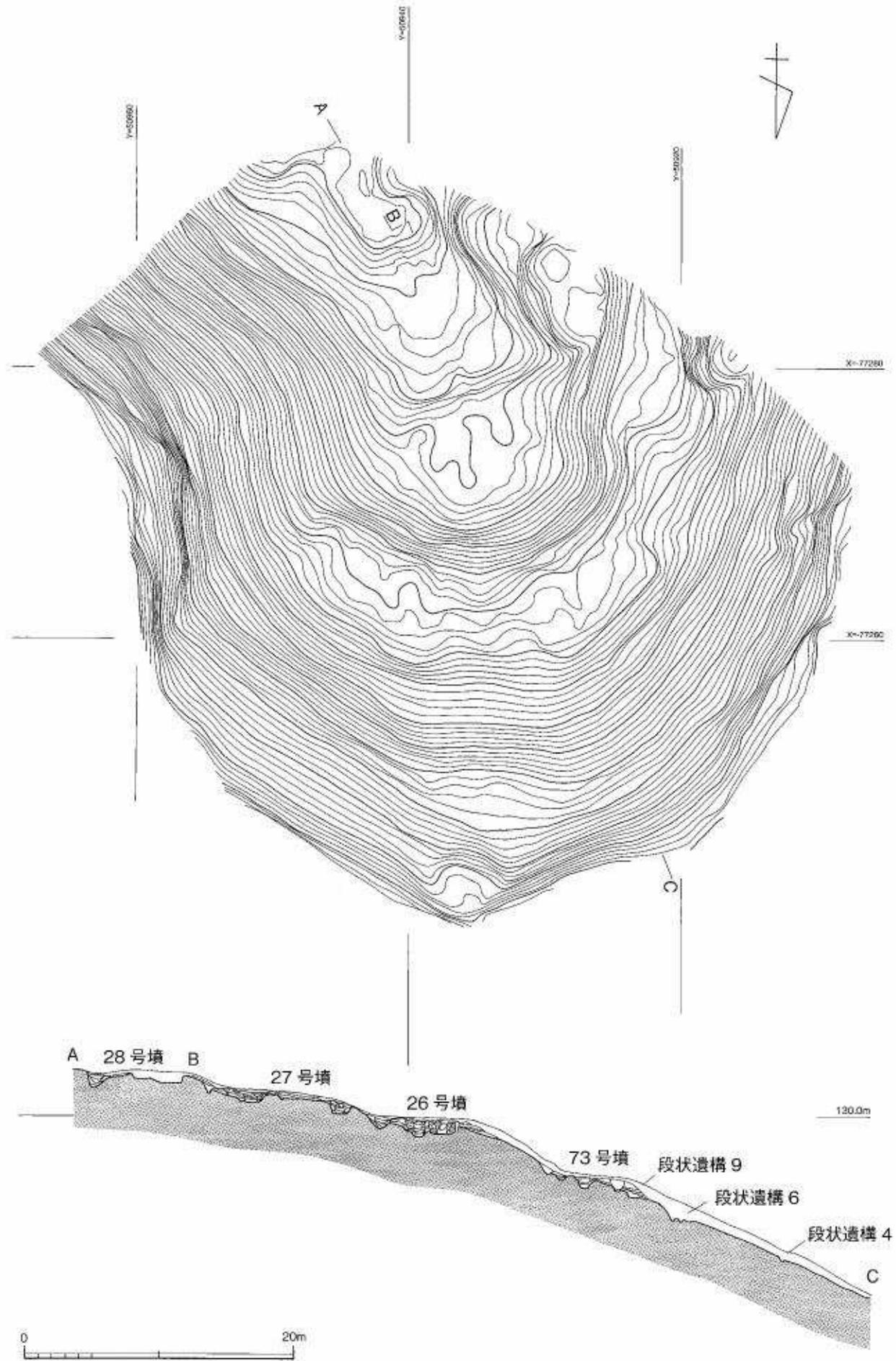


図版 42
芝ヶ端遺跡



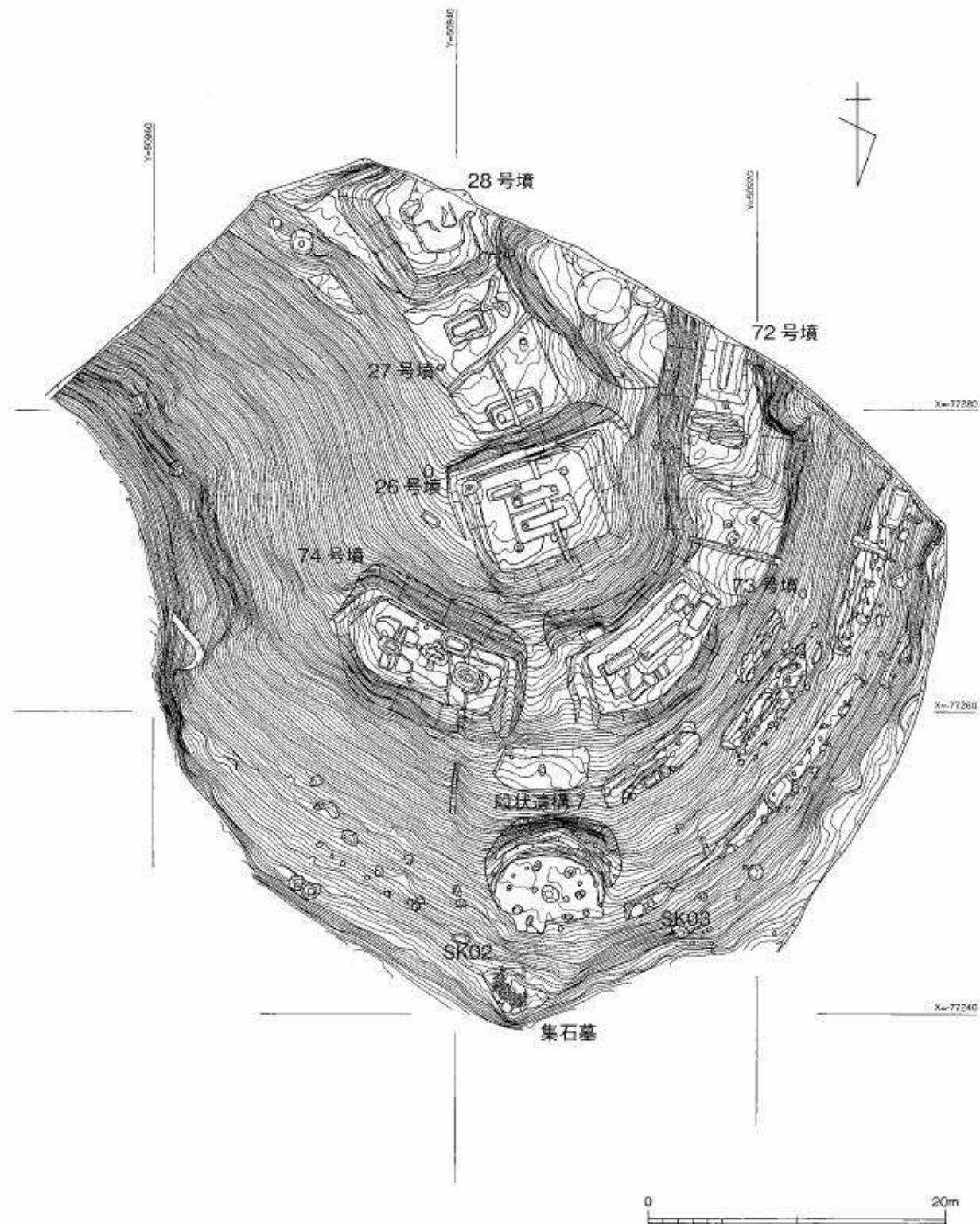
芝ヶ端遺跡 包含層出土遺物・遺構等出土石器

芝花古墳群

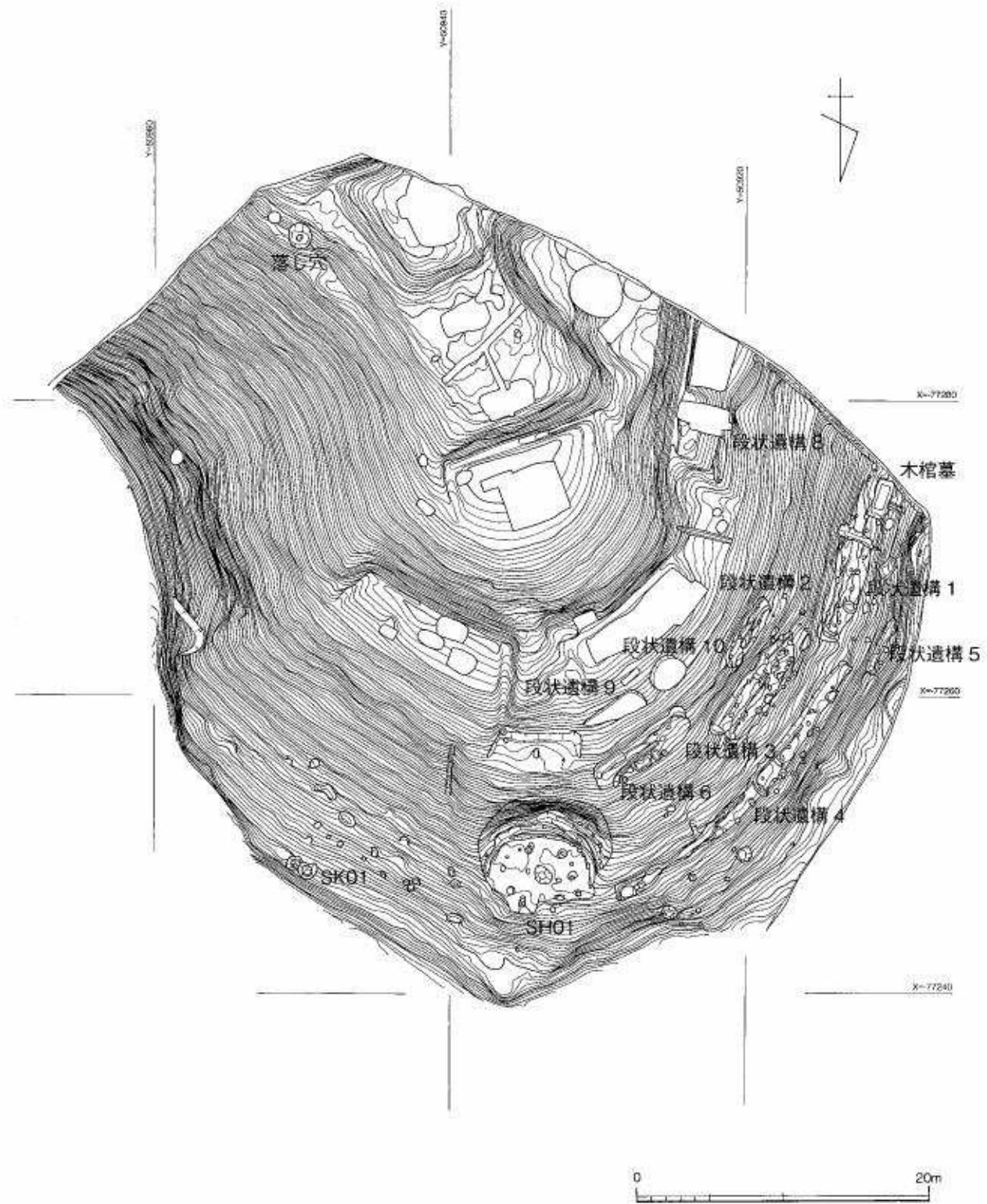


全体（調査前）・断面

図版 44
芝花古墳群

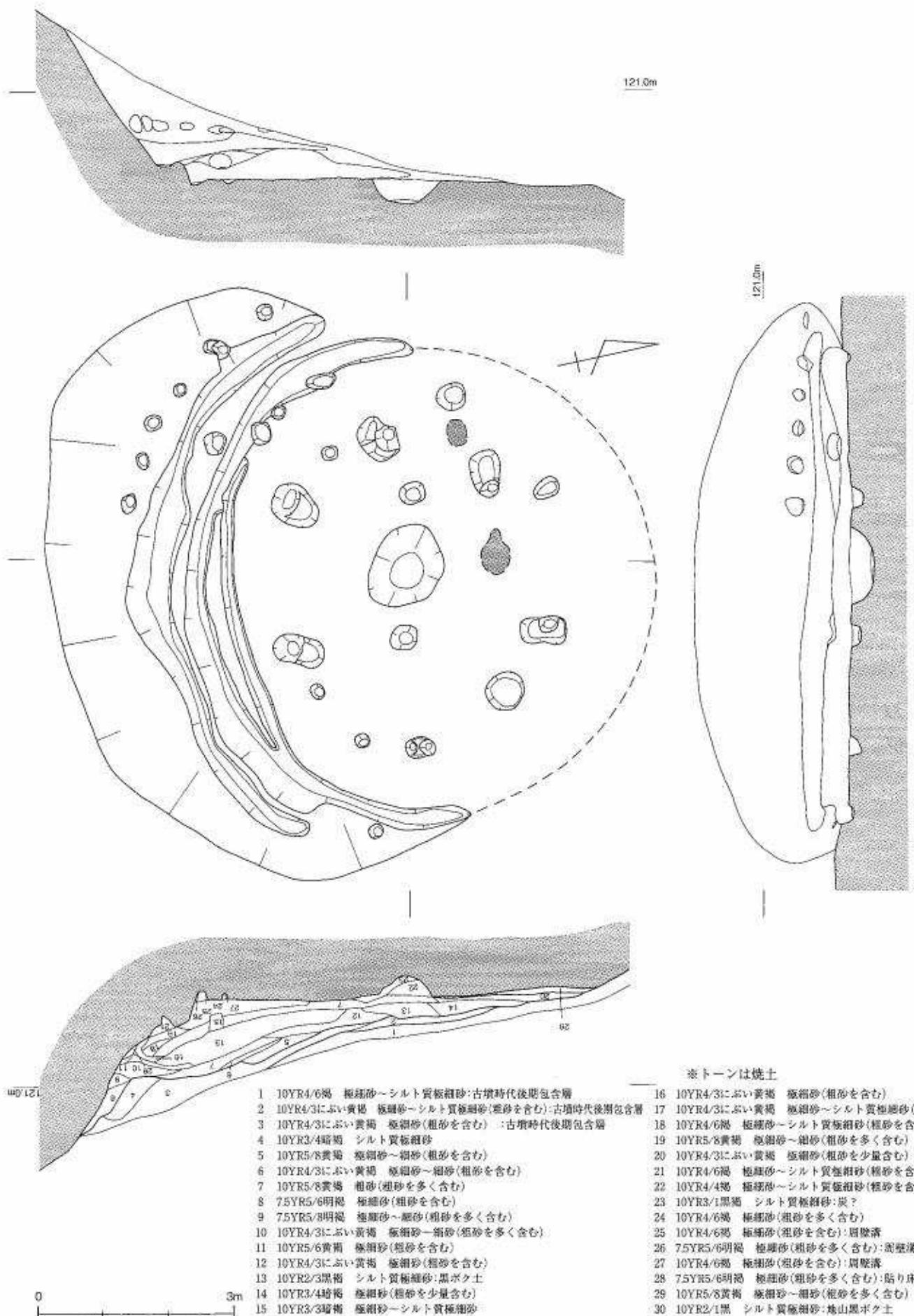


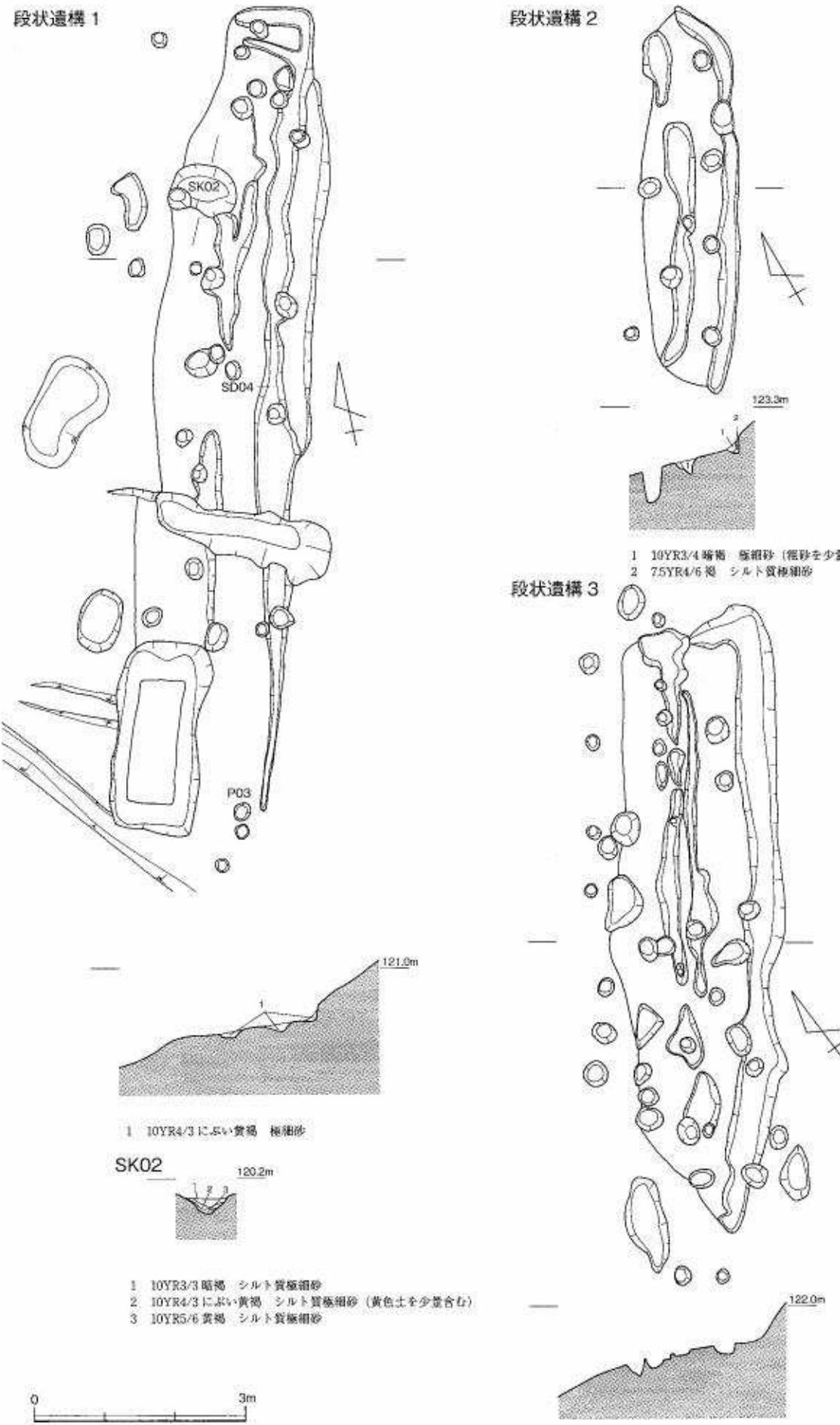
全体（古墳時代以降）



全体 (弥生時代以前)

図版 46
芝花古墳群

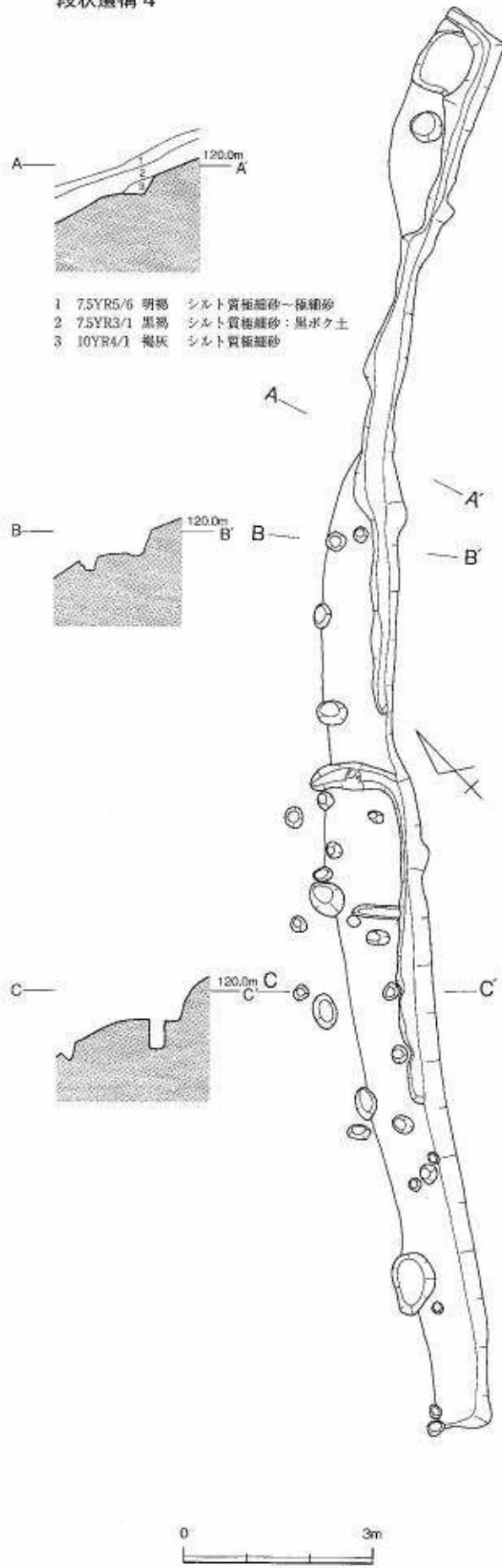




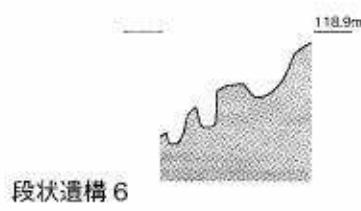
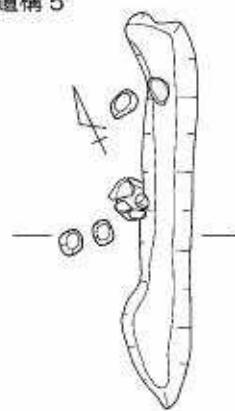
段状遺構 1~3

図版 48
芝花古墳群

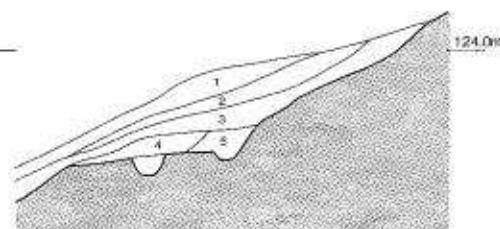
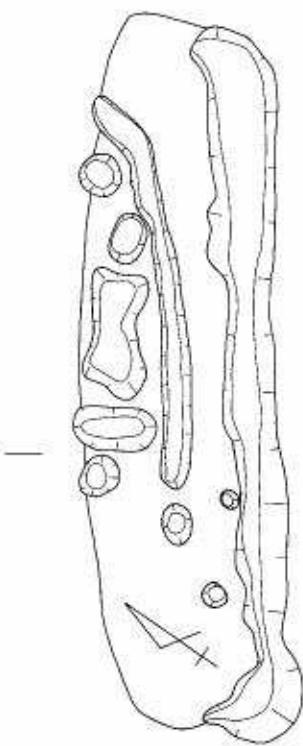
段状遺構 4



段状遺構 5



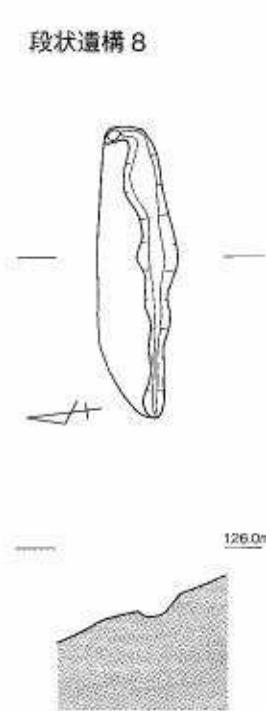
段状遺構 6



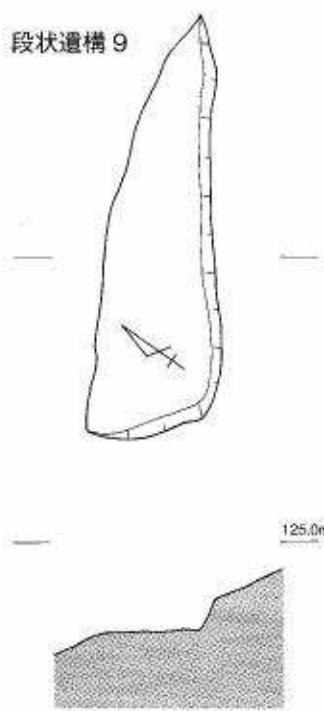
- | | |
|--------------|----------------|
| 1 7SYR5/6 明褐 | 5 10YR4/4 褐 |
| 2 7SYR4/2 黒褐 | 6 5YR5/3 にぶい赤褐 |
| 3 7SYR3/1 黒褐 | 7 5YR4/3 にぶい赤褐 |
| 4 10YR4/1 褐灰 | 8 25YR4/6 赤褐 |

段状遺構 4～6

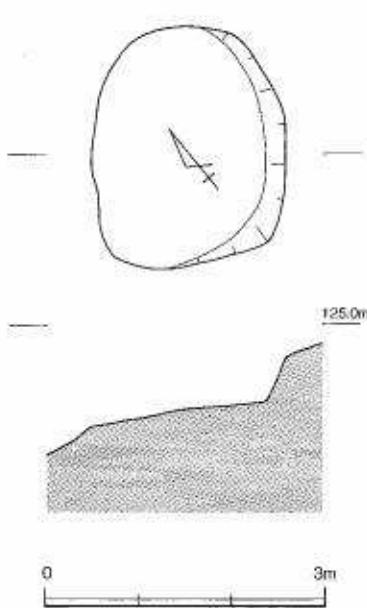
段状遺構 8



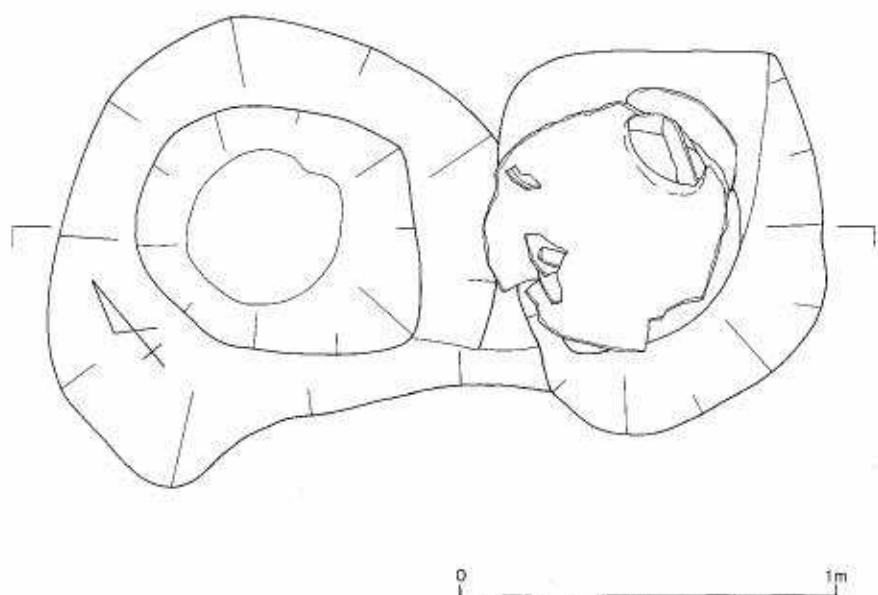
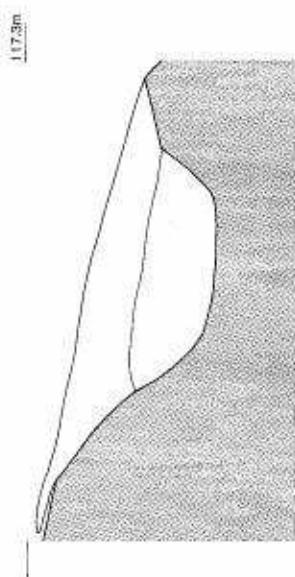
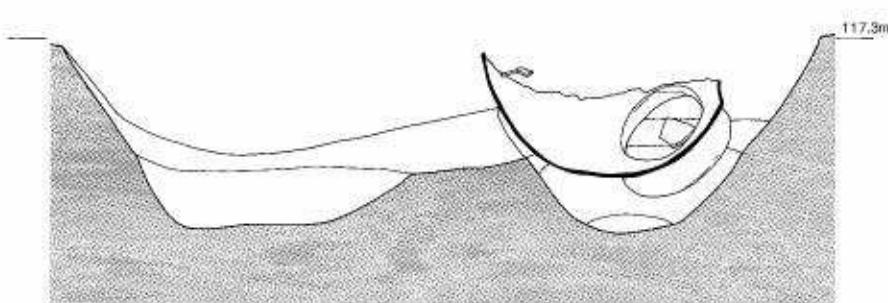
段状遺構 9



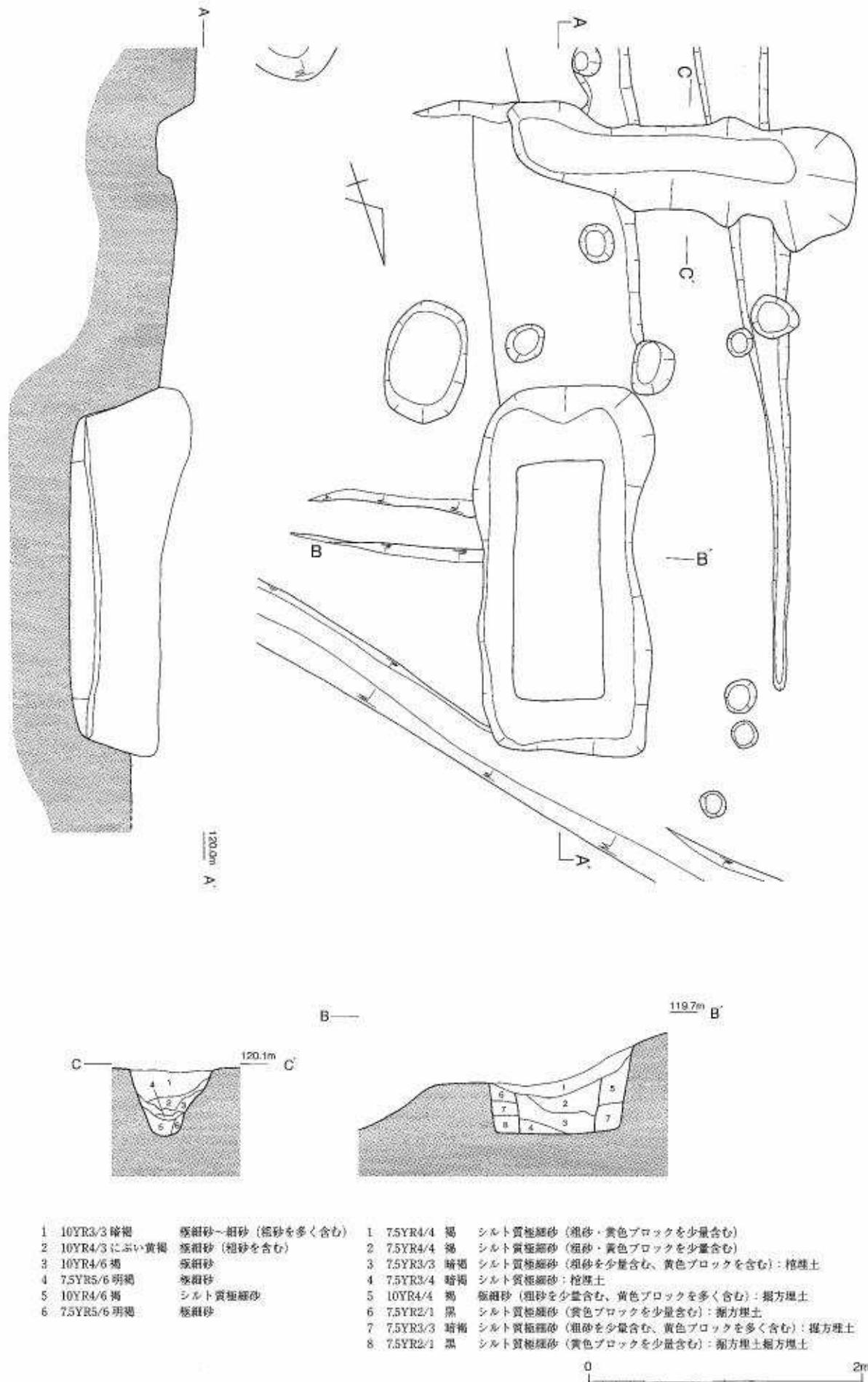
段状遺構 10



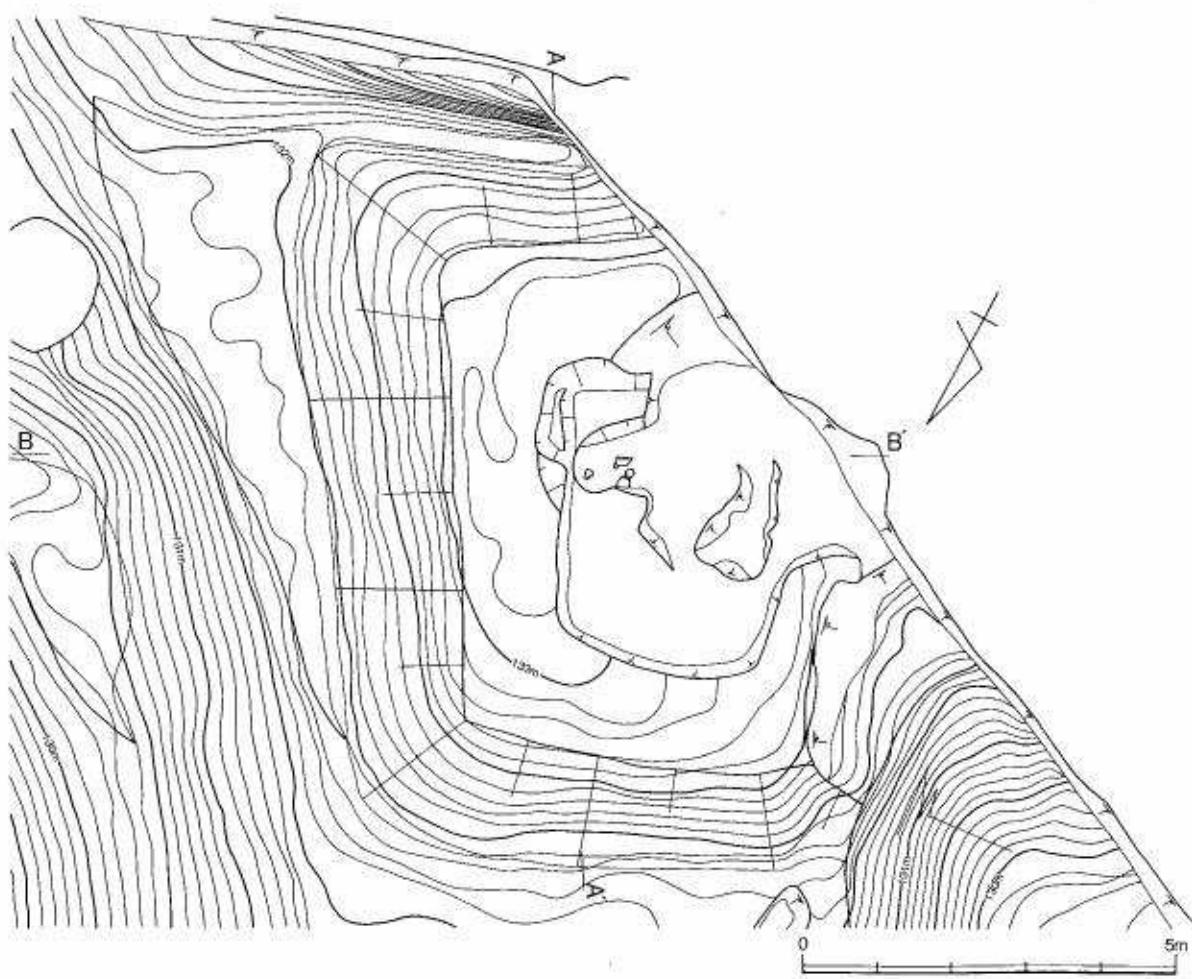
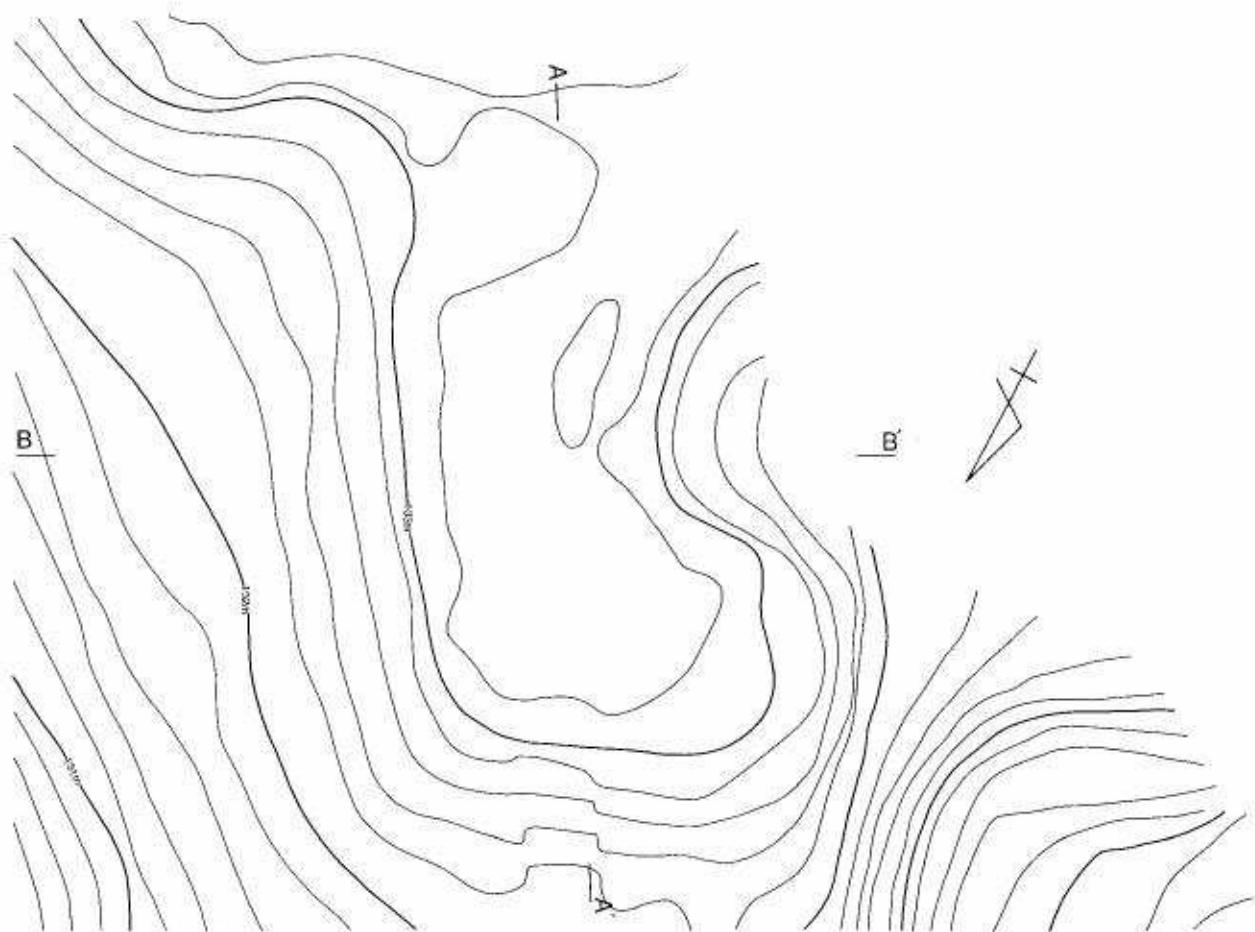
SK10



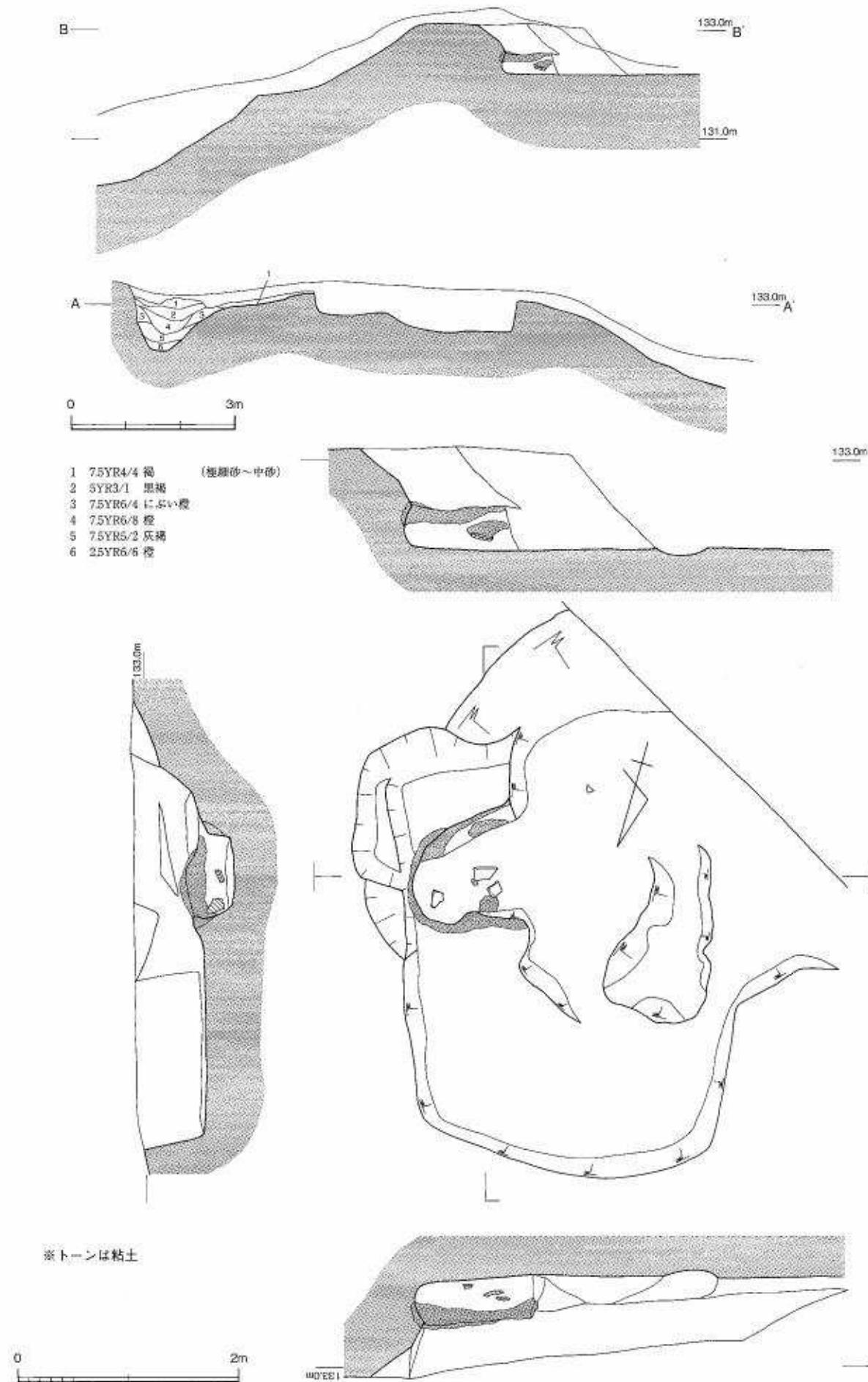
段状遺構 8~10・SK10



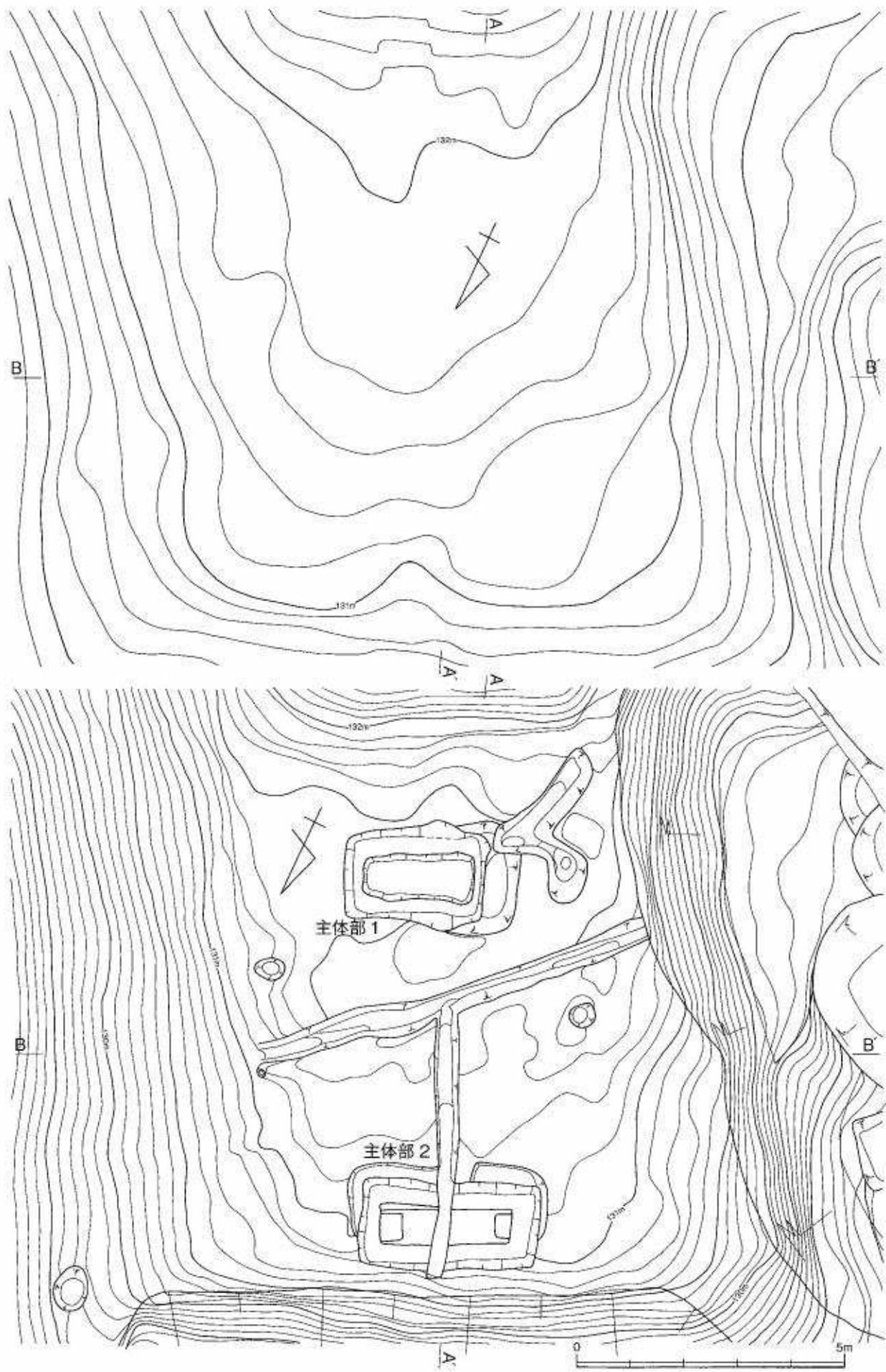
木棺墓



芝花 28 号墳墳丘（調査前・調査後）

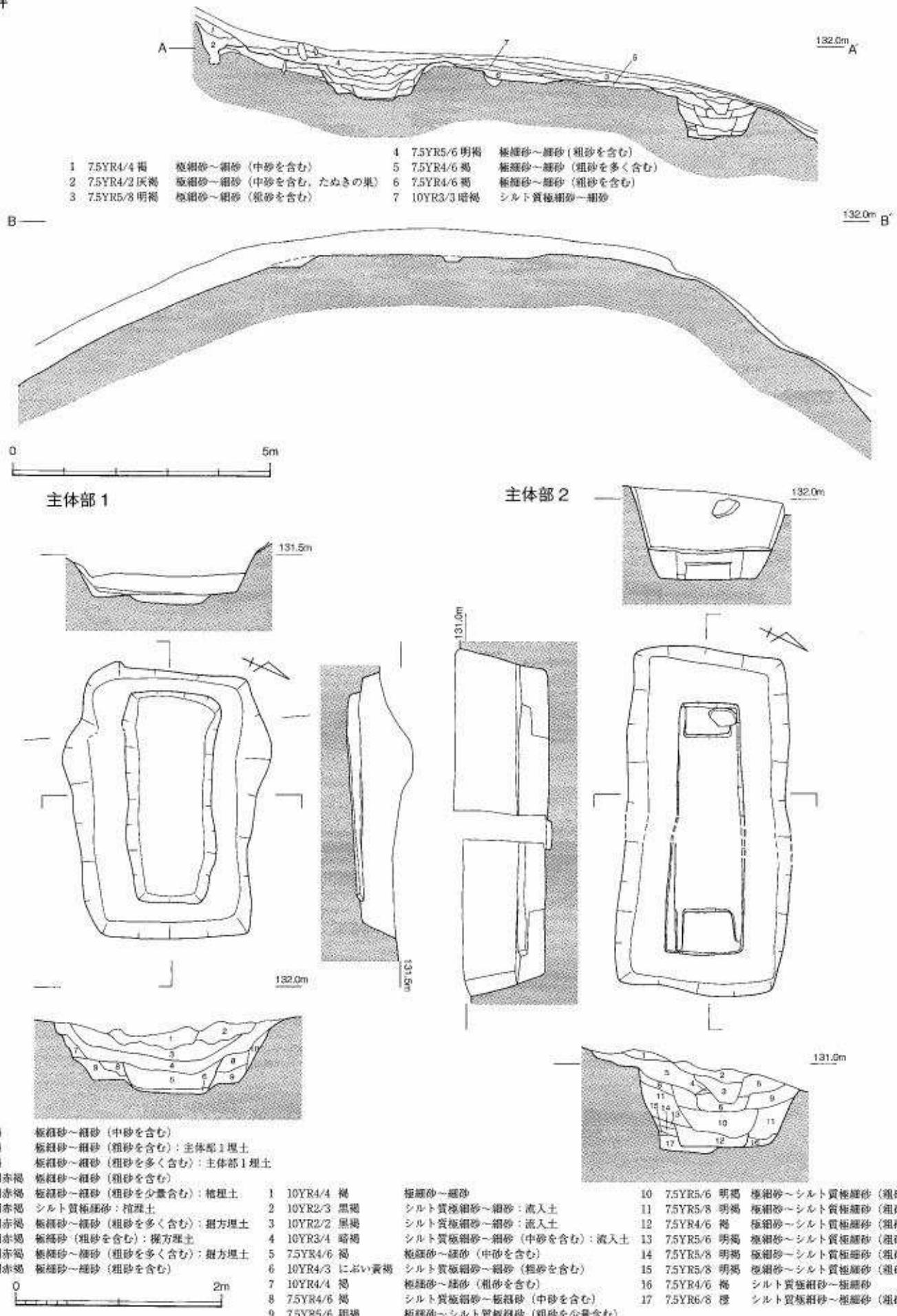


芝花 28 号墳墳丘断面・主体部

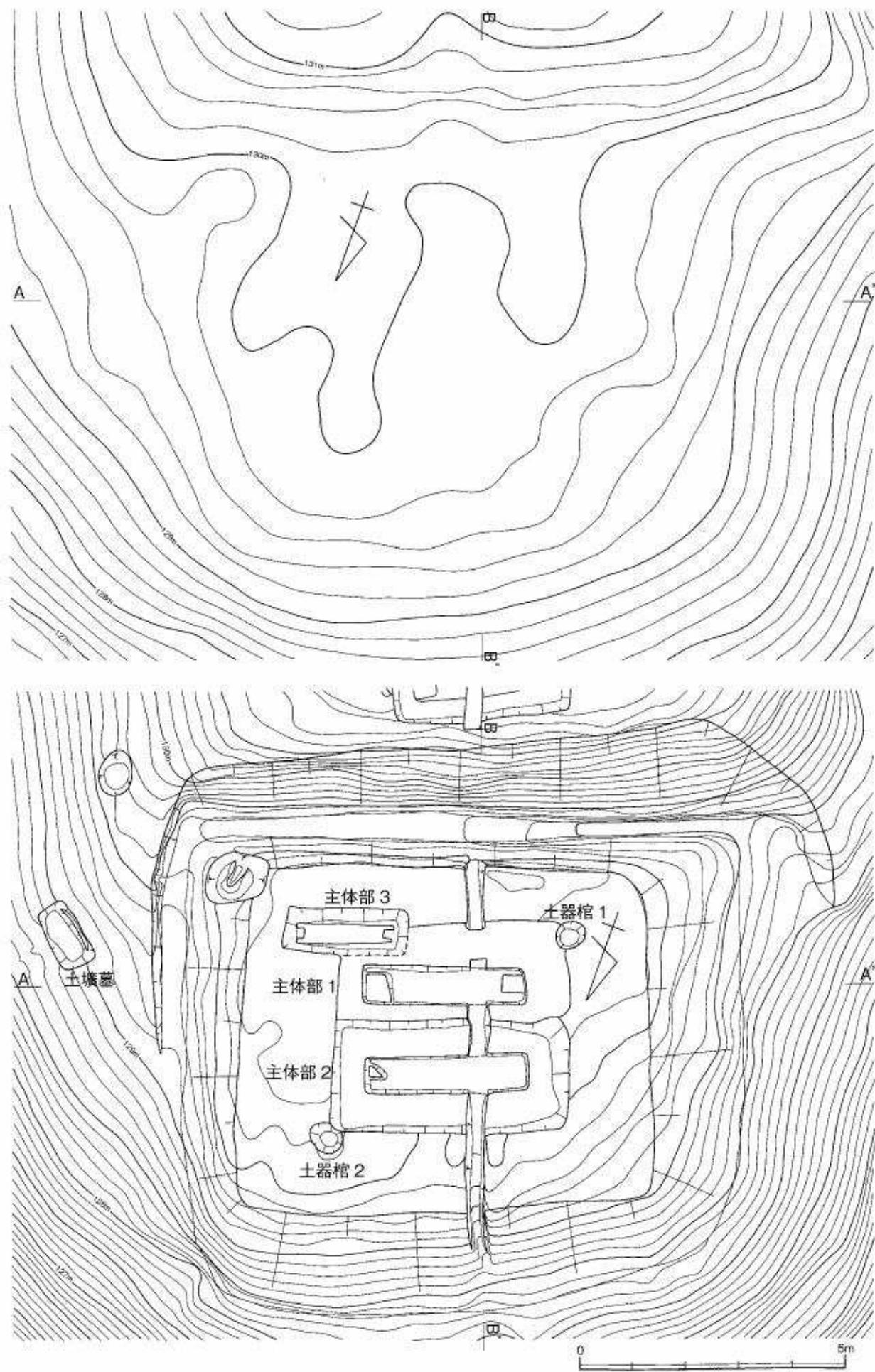


芝花 27 号墳墳丘（調査前・調査後）

図版 54
芝花古墳群

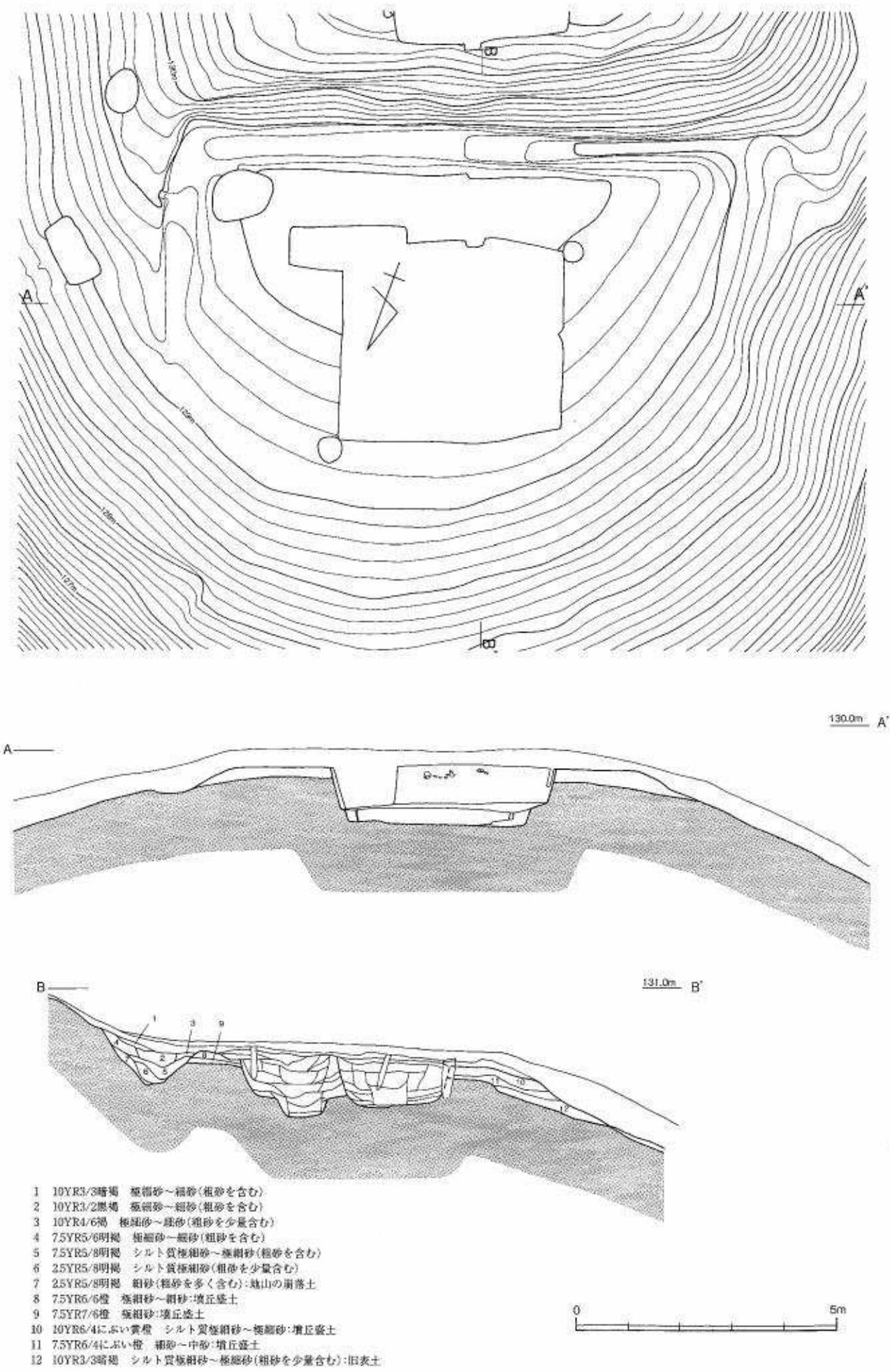


芝花 27 号墳墳丘断面・主体部 1・2

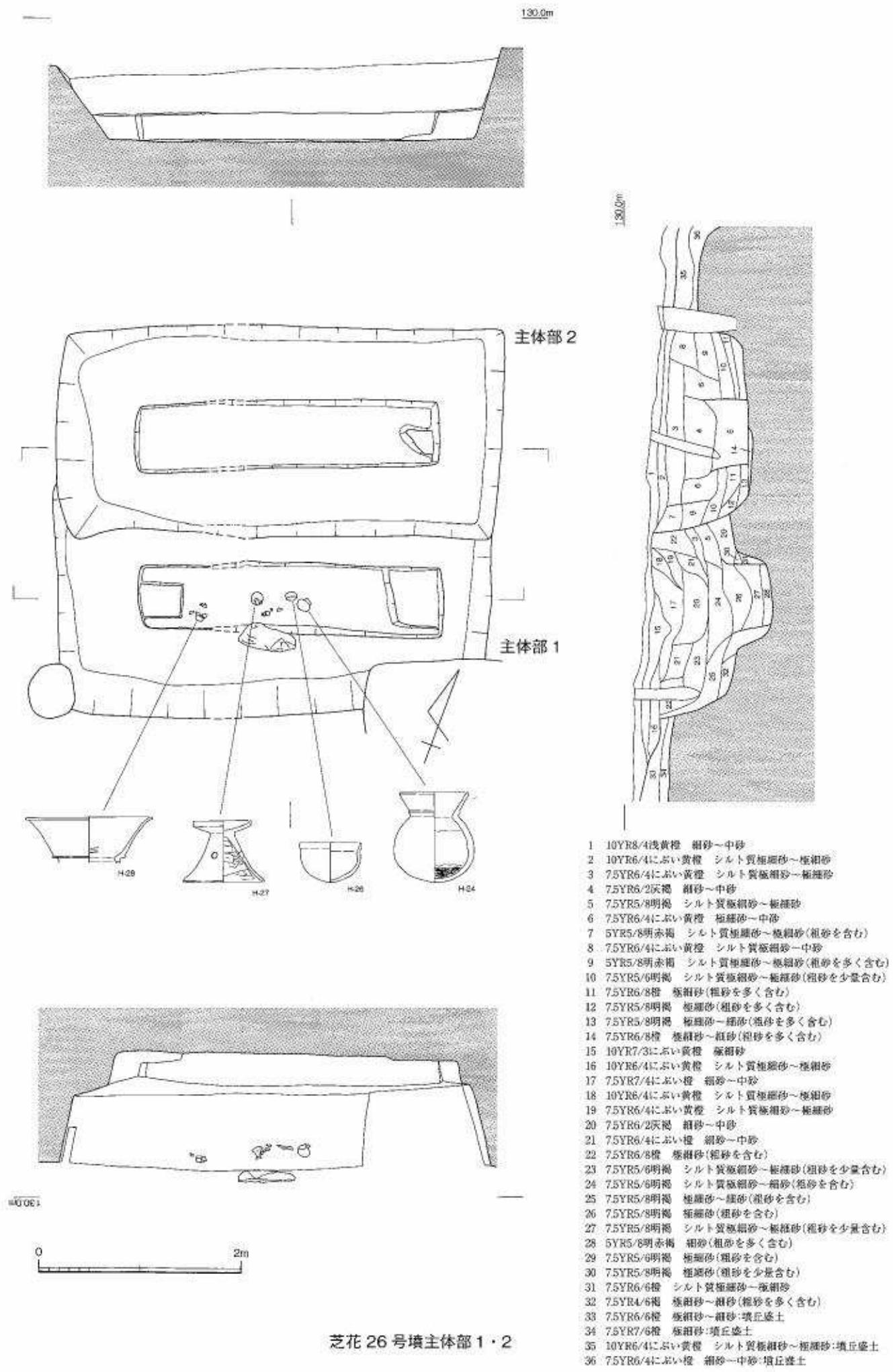


芝花 26 号墳墳丘（調査前・調査後）

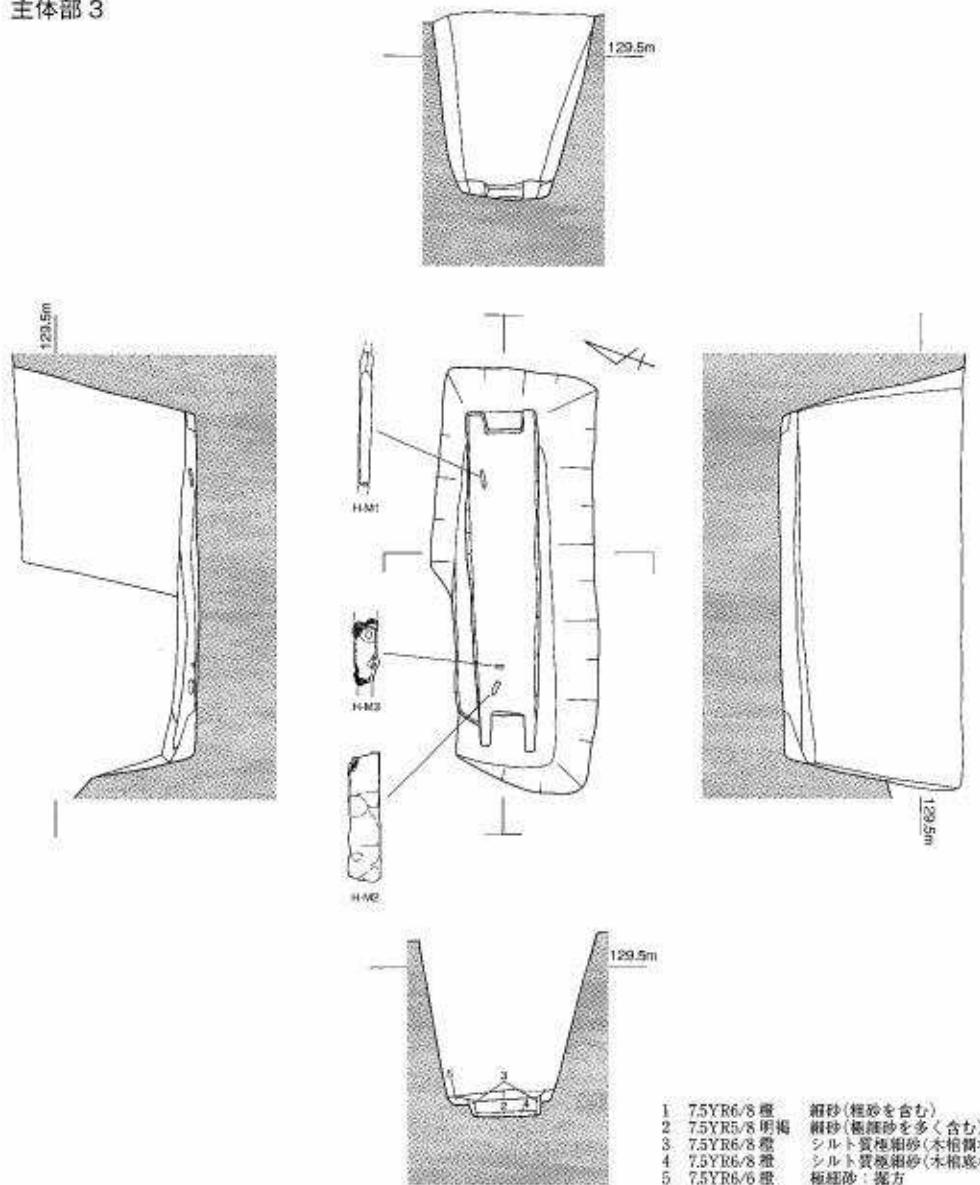
図版 56
芝花古墳群



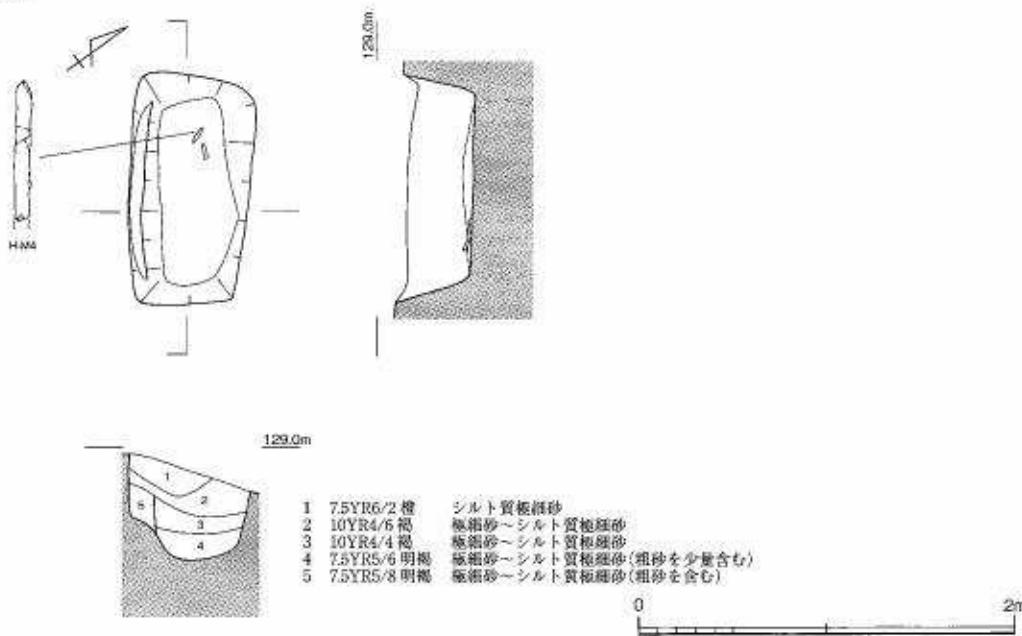
芝花 26 号墳墳丘（完掘後）・断面



主体部 3

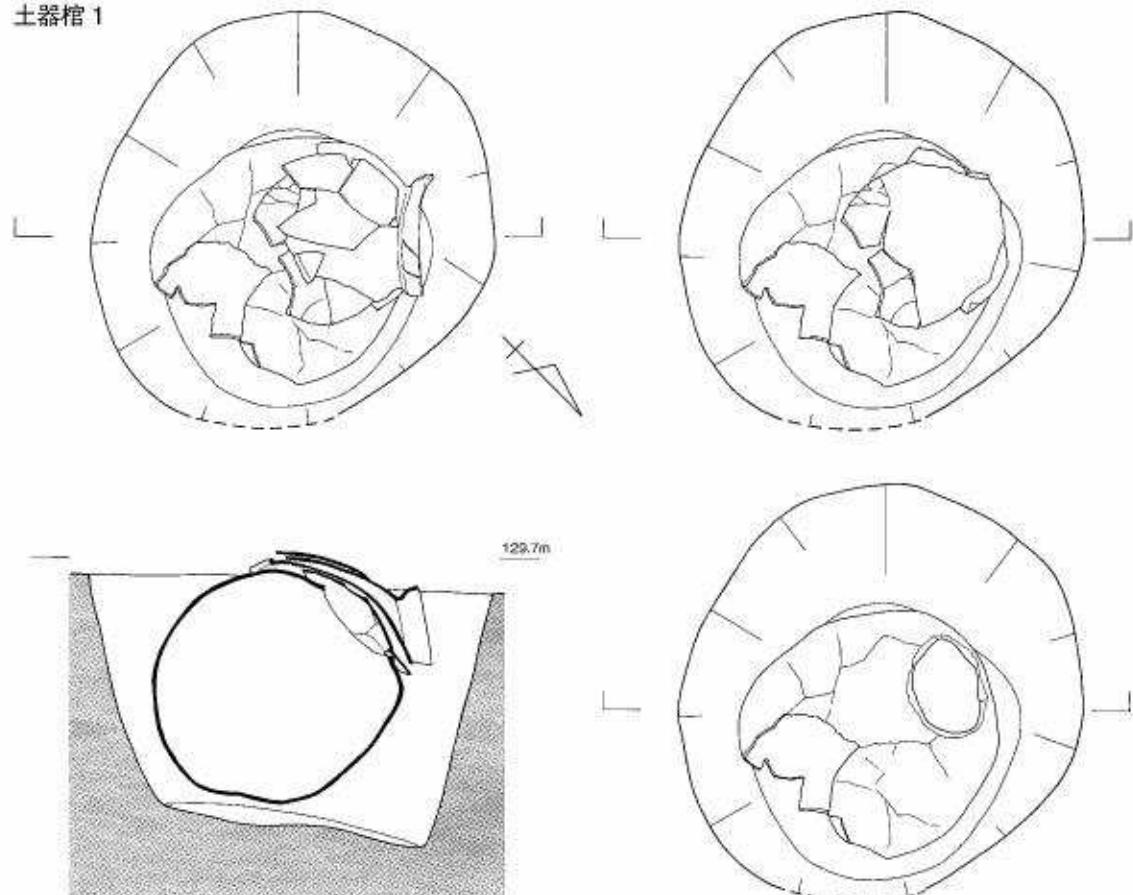


土壤墓

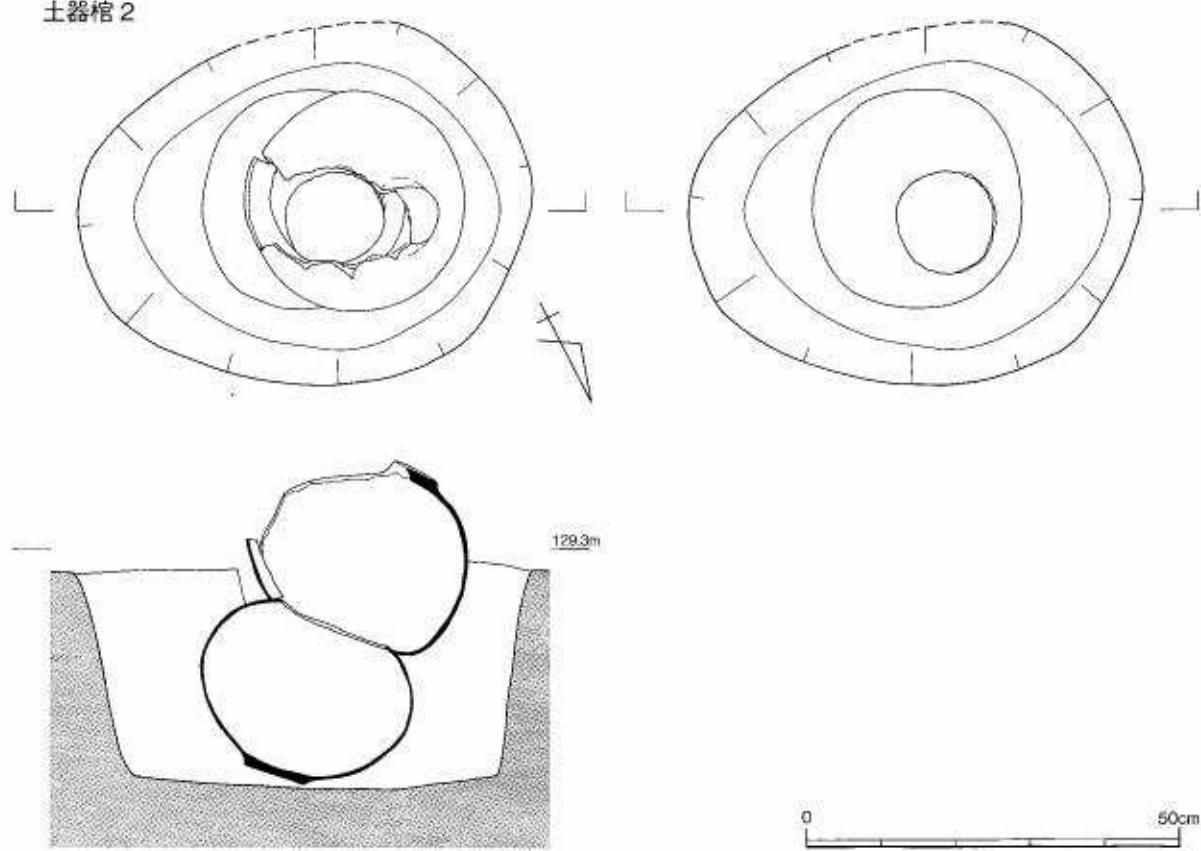


芝花 26 号墳主体部 3・土壤墓

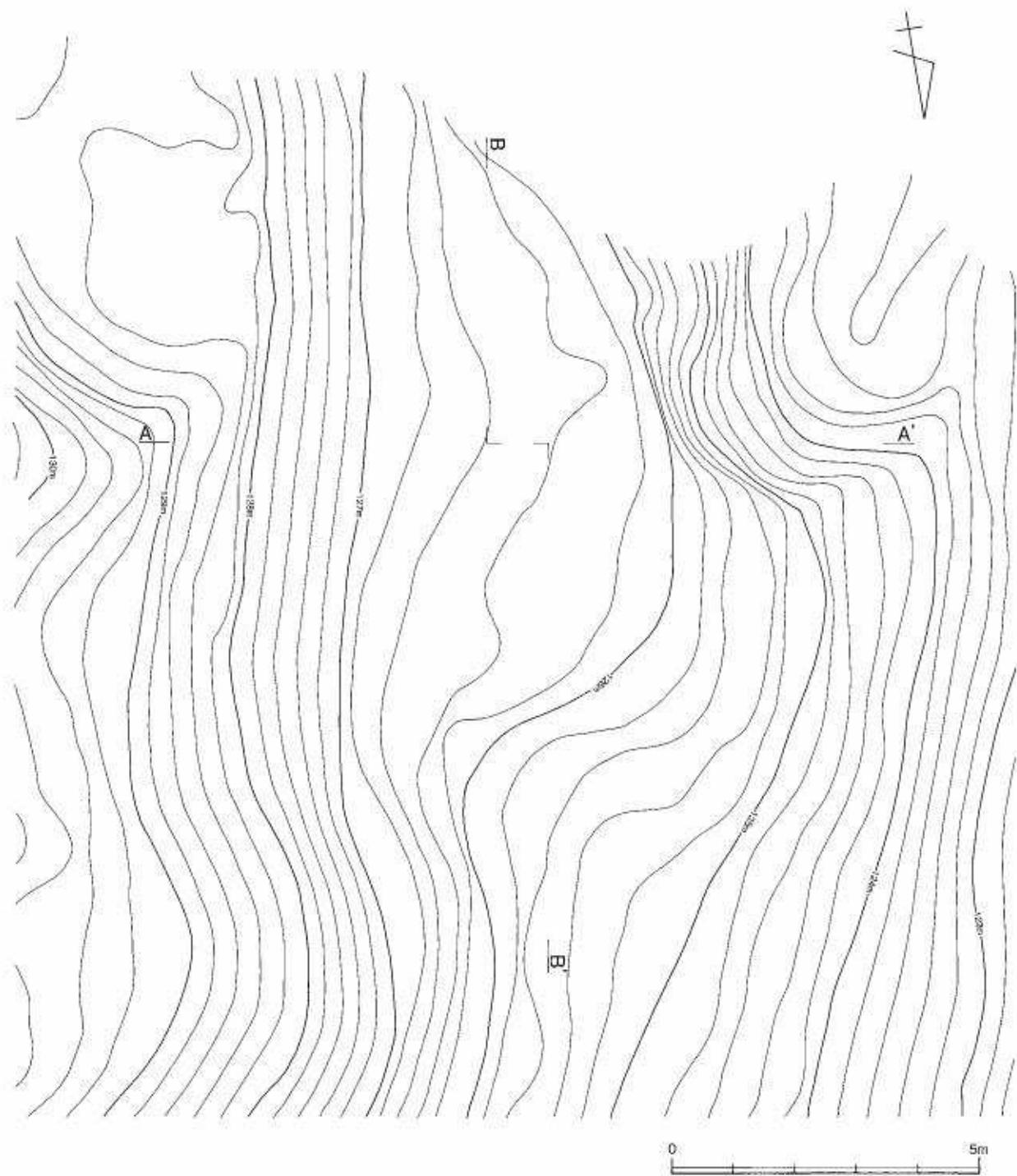
土器棺 1



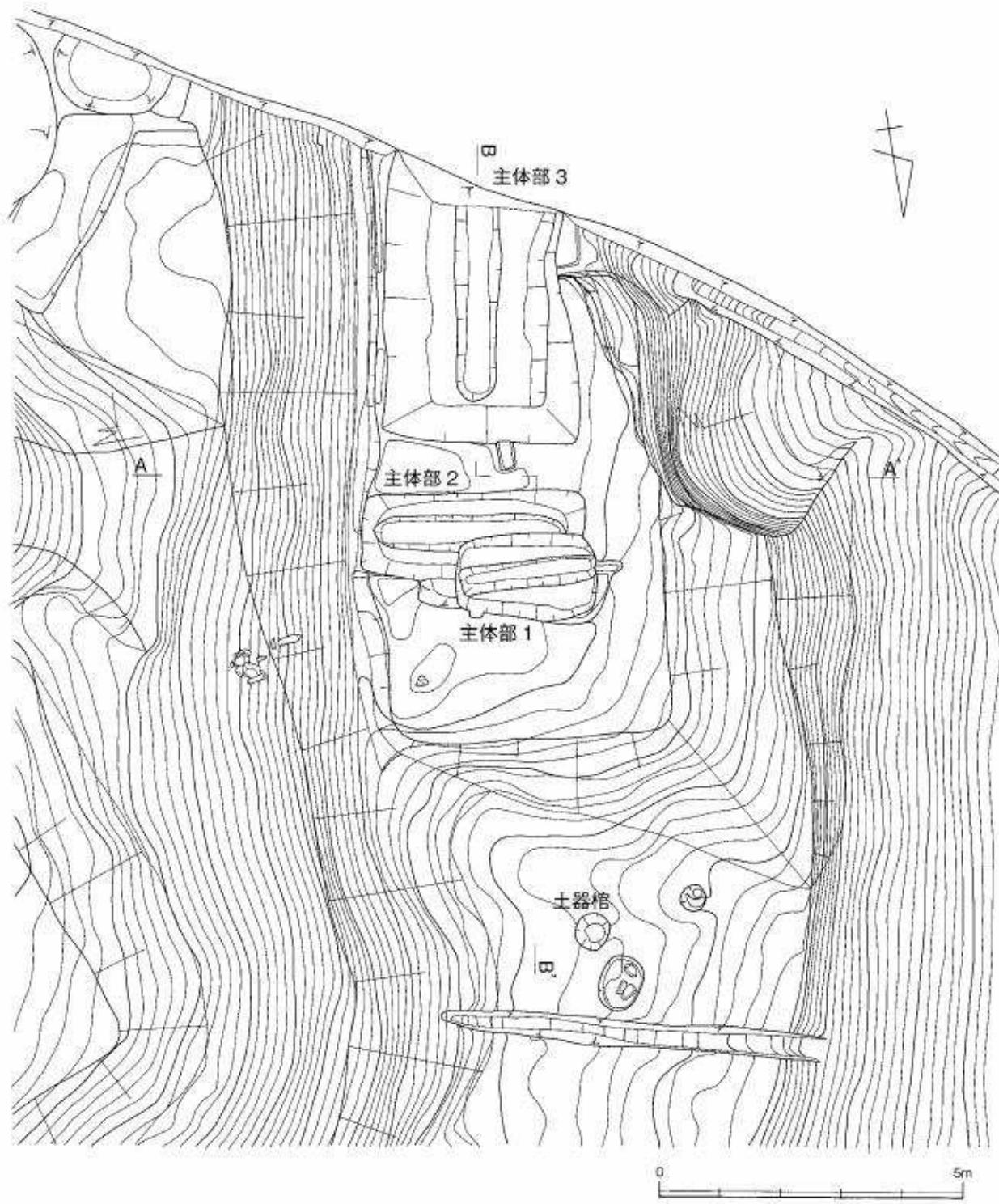
土器棺 2



芝花 26 号墳土器棺 1・2



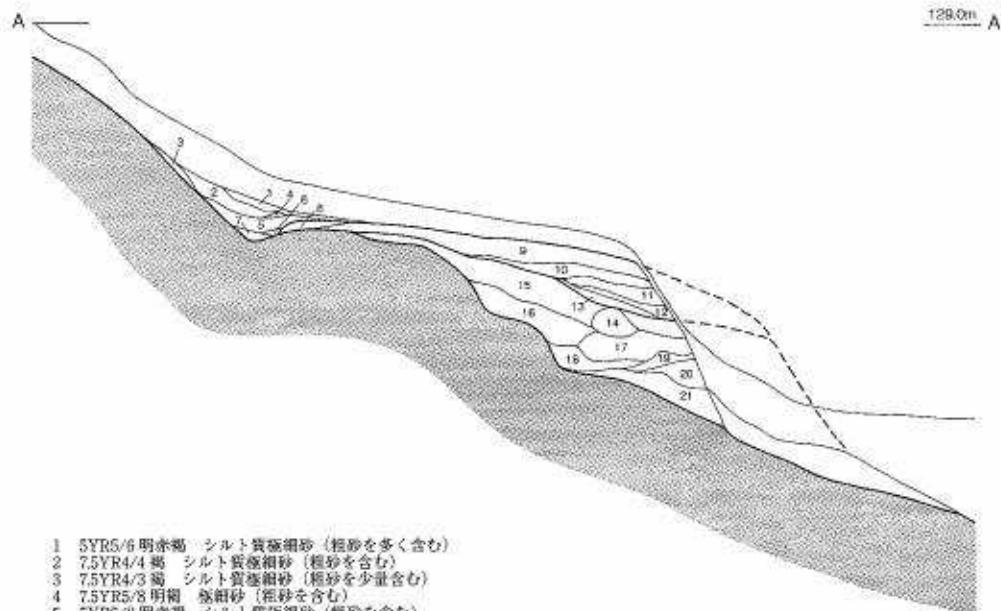
芝花 72 号墳墳丘 (調査前)



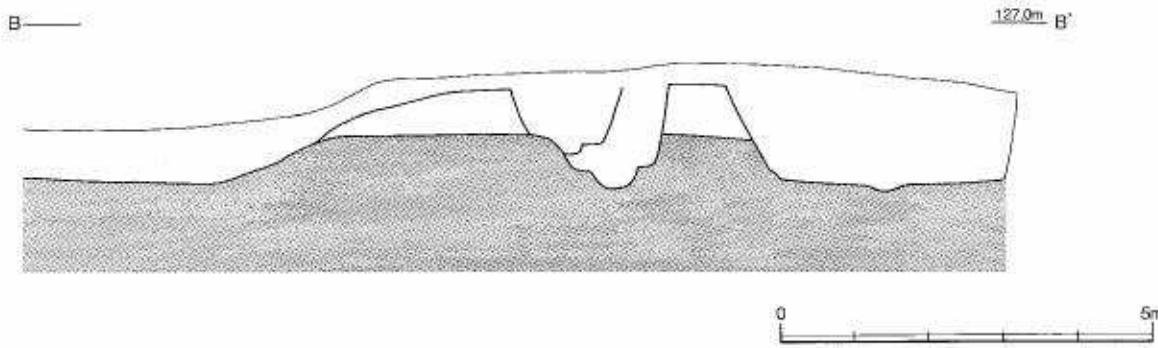
芝花 72 号墳墳丘（調査後）



芝花 72 号墳墳丘（完掘後）

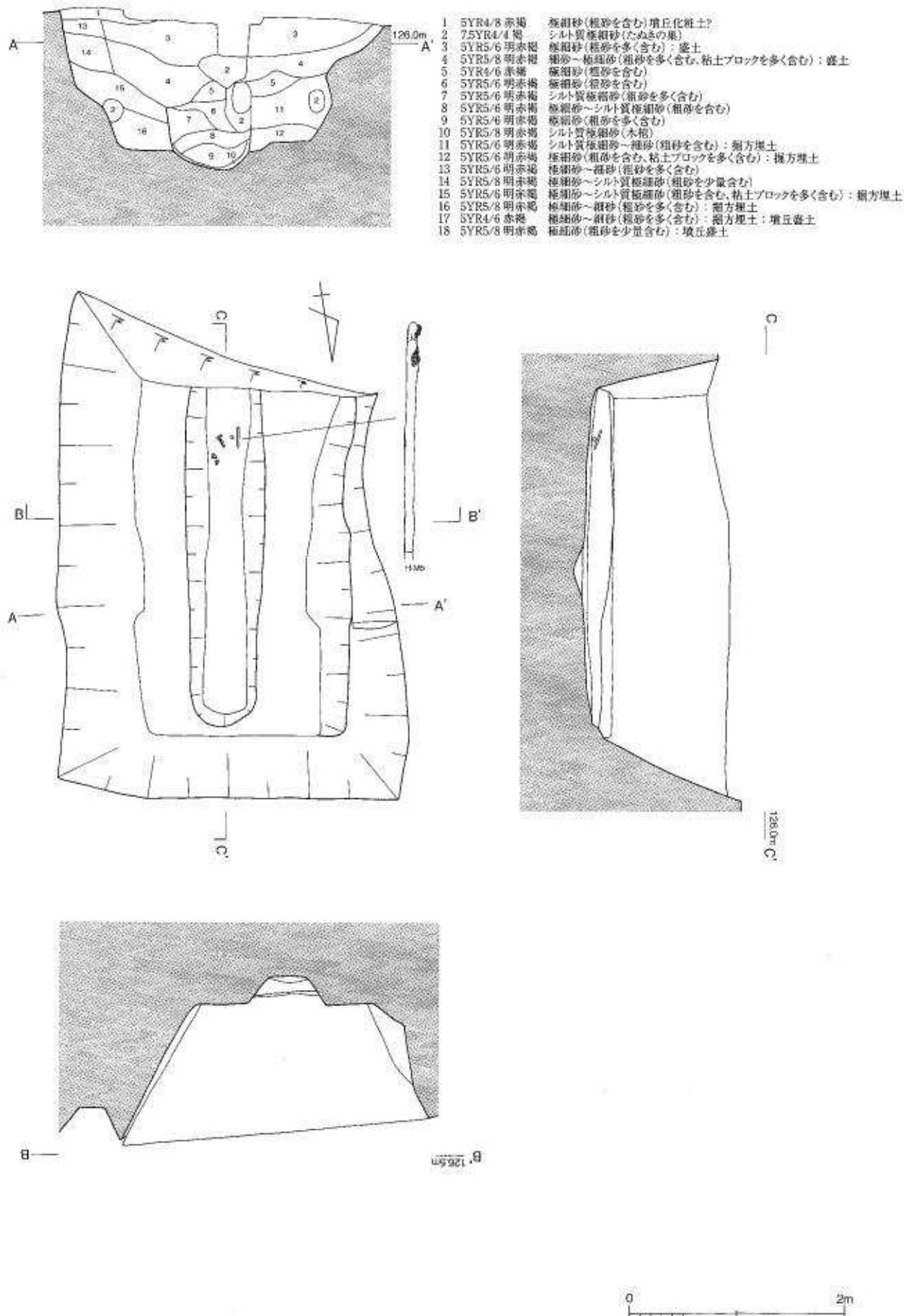


- 1 SYR5/6 明赤褐色 シルト質粘土細砂（粗砂を多く含む）
- 2 7SYR4/4 褐色 シルト質粘土細砂（粗砂を含む）
- 3 7SYR4/3 黄褐色 シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）
- 4 7SYR5/8 明褐色 粘土細砂（粗砂を含む）
- 5 5YR5/8 明赤褐色 シルト質粘土細砂（粗砂を含む）
- 6 5YR5/8 明赤褐色 粘土細砂（粗砂を多く含む）；座土崩落土
- 7 7SYR5/8 明褐色 シルト質粘土細砂
- 8 5YR5/8 明赤褐色 粘土細砂～粘土細砂（粗砂を含む）；化粧土
- 9 5YR5/6 明赤褐色 粘土細砂～粘土細砂（粗砂を含む）；化粧土
- 10 7SYR5/6 明褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂；塊状盛土
- 11 7SYR5/8 明褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂；塊状盛土
- 12 7SYR5/6 明褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂；塊状盛土
- 13 7SYR5/8 明褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂；塊状盛土
- 14 たぬきの糞
- 15 7SYR4/3 にぶい黄褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）；旧表土
- 16 7SYR4/6 褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）
- 17 7SYR3/3 暗褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）；旧表土
- 18 7SYR4/6 褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）
- 19 7SYR5/6 明褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）
- 20 7SYR4/3 にぶい黄褐色 粘土細砂（粗砂を含む）；旧表土
- 21 7SYR4/6 褐色 粘土細砂～シルト質粘土細砂（粗砂を少量含む）

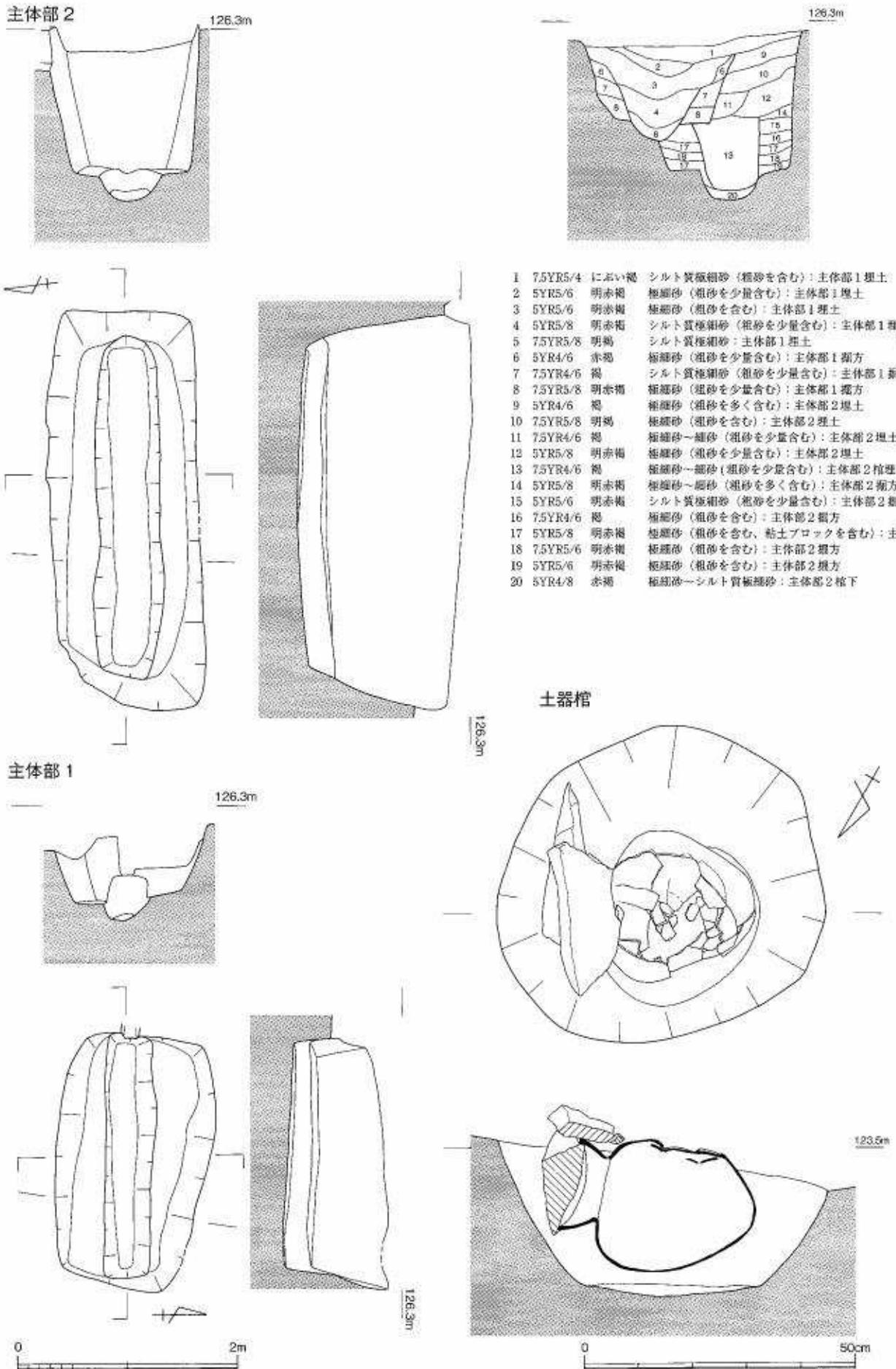


芝花 72号墳墳丘断面

図版 64
芝花古墳群

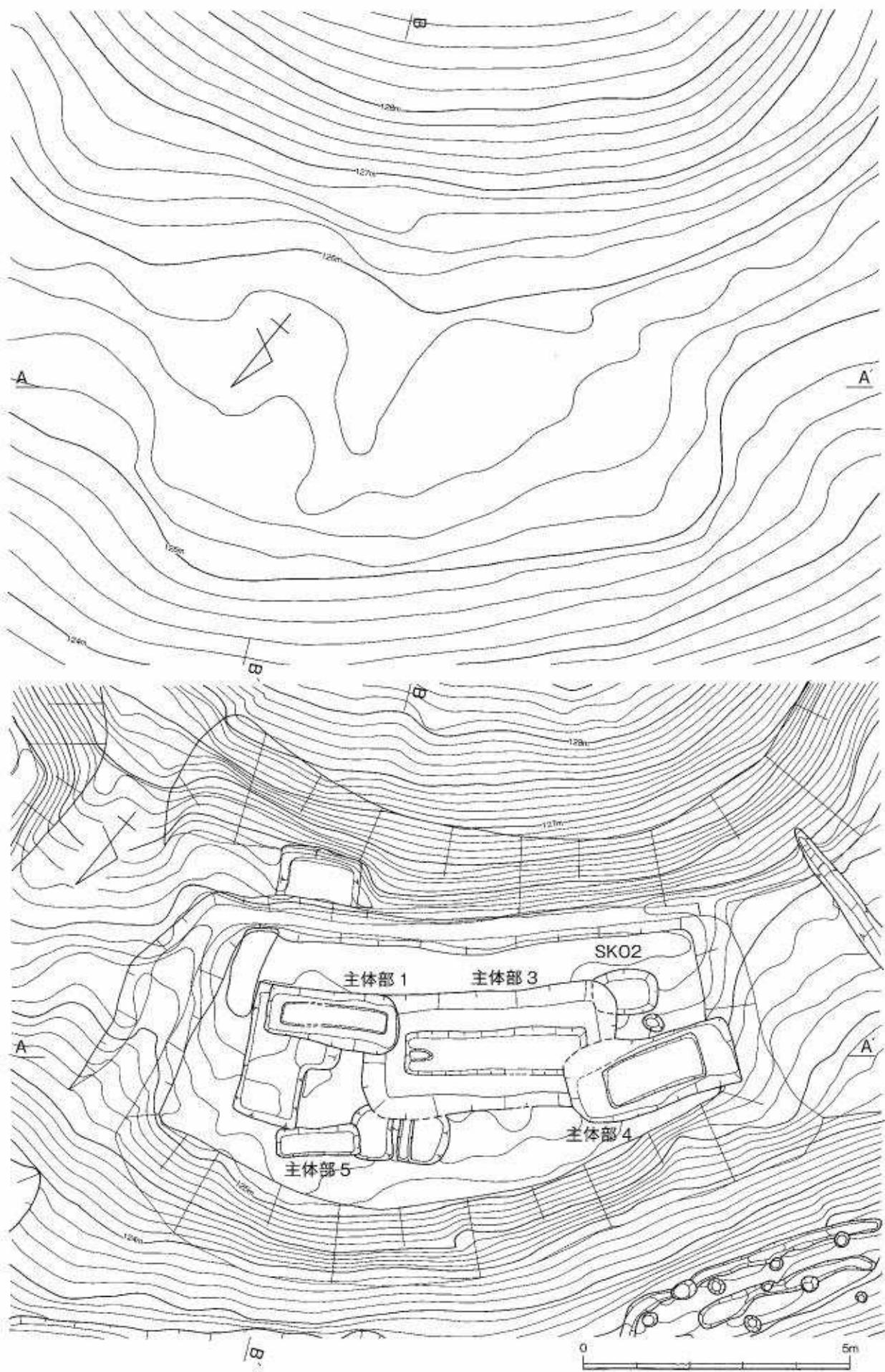


芝花 72 号墳主体部 3

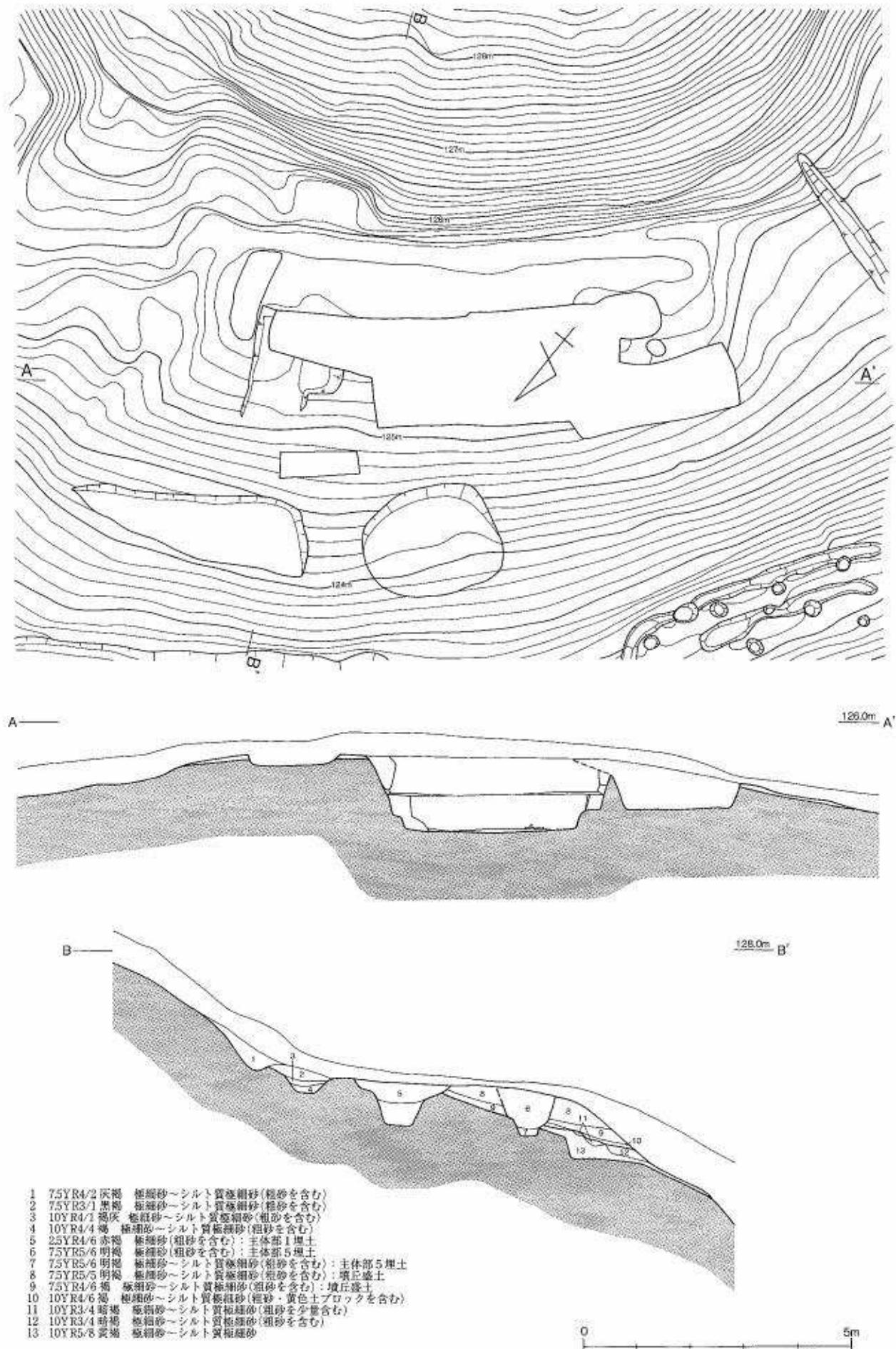


芝花 72 号墳主体部 1・2・土器棺

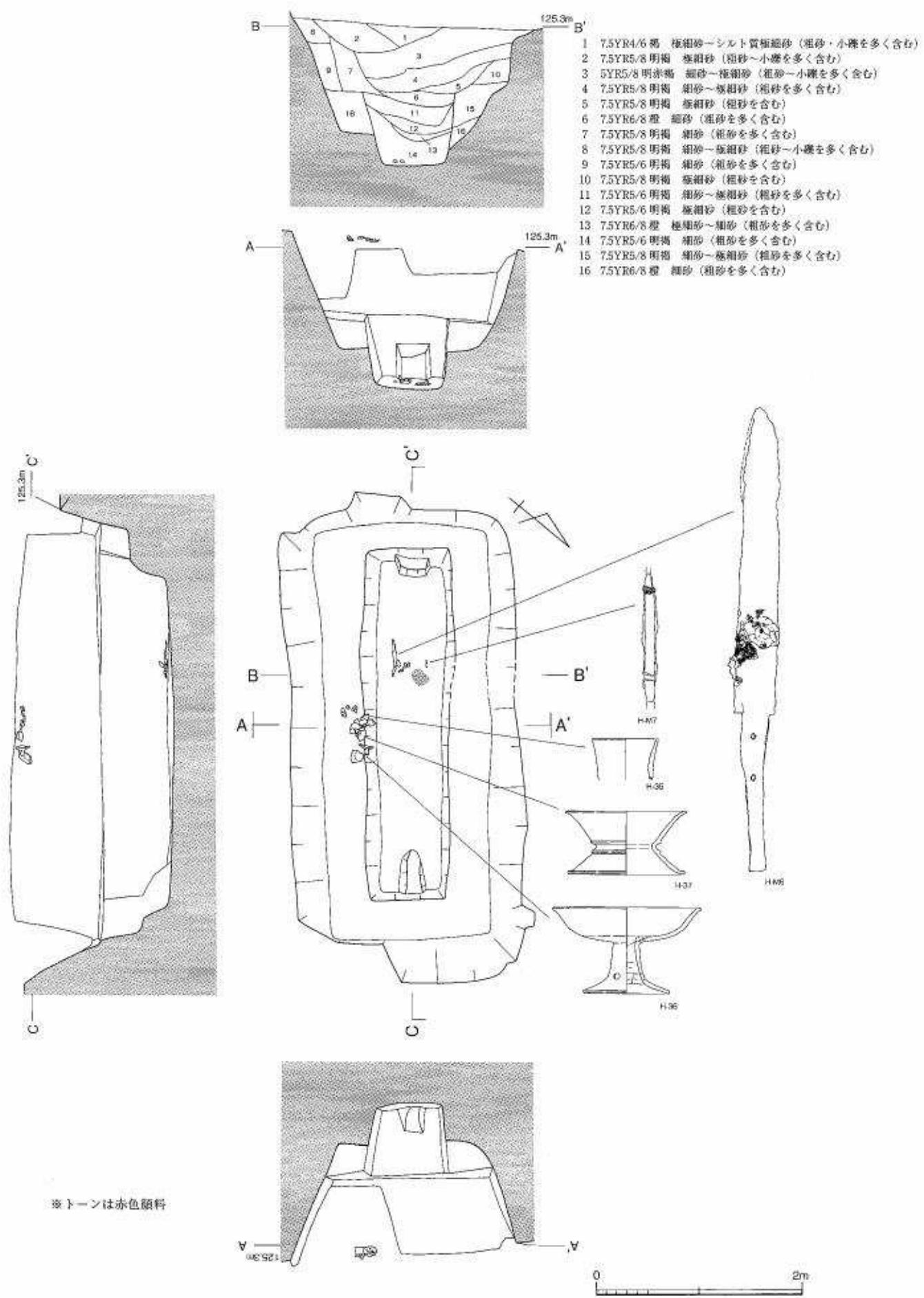
図版 66
芝花古墳群



芝花 73 号墳墳丘（調査前・調査後）

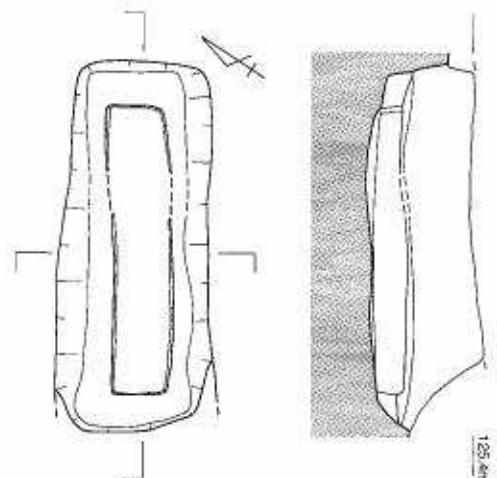
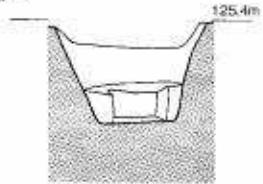


芝花 73 号墳墳丘（完掘後）・断面

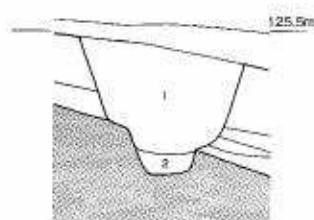
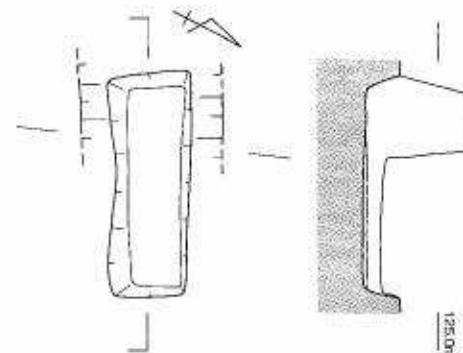


芝花 73 号墳主体部3

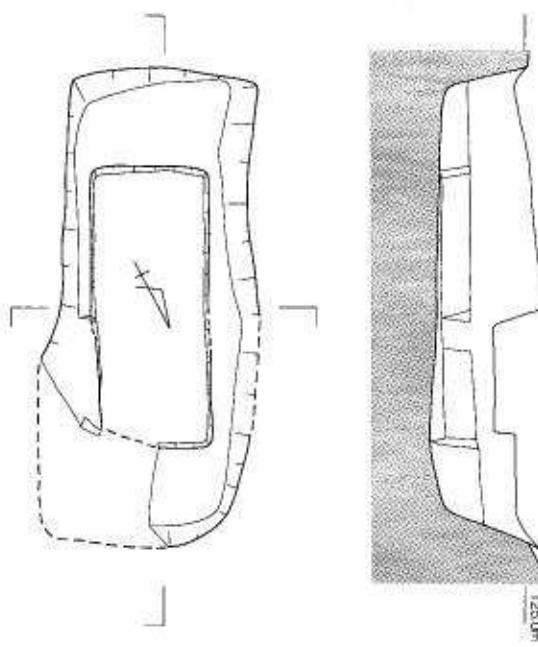
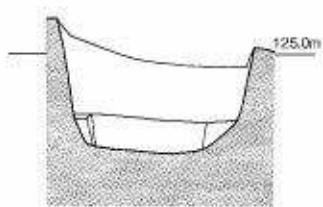
主体部 1



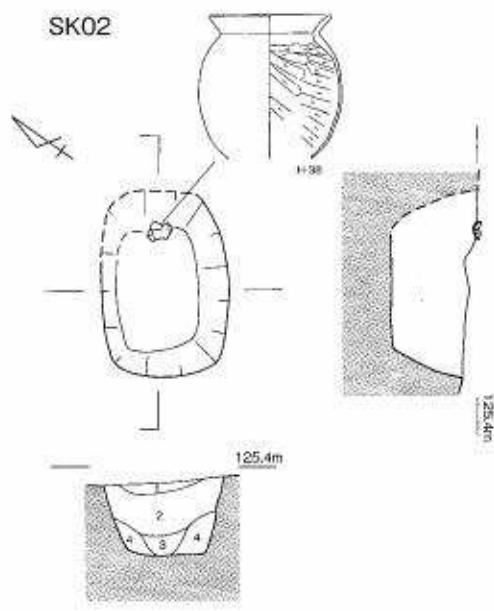
主体部 5



主体部 4



SK02

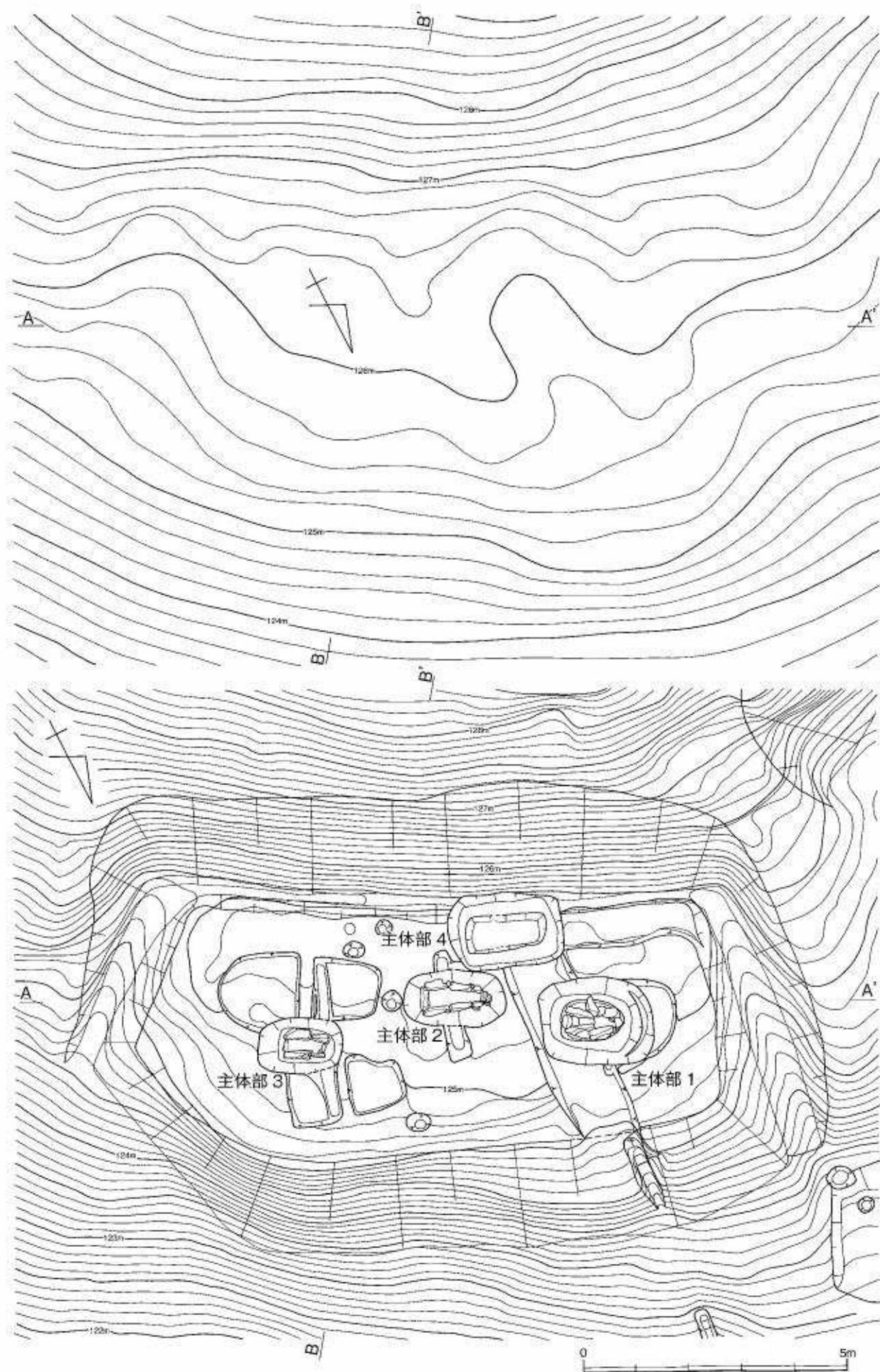


- 1 5YR5/8 明赤褐色 細砂～板細砂（粗砂を多く含む）
2 5YR5/6 明赤褐色 相砂～粗細砂（粗砂を多く含む）
3 7.5YR5/6 明褐色 細砂～板細砂（粗砂を含む）
4 7.5YR5/8 明褐色 粗砂（粗砂を多く含む）

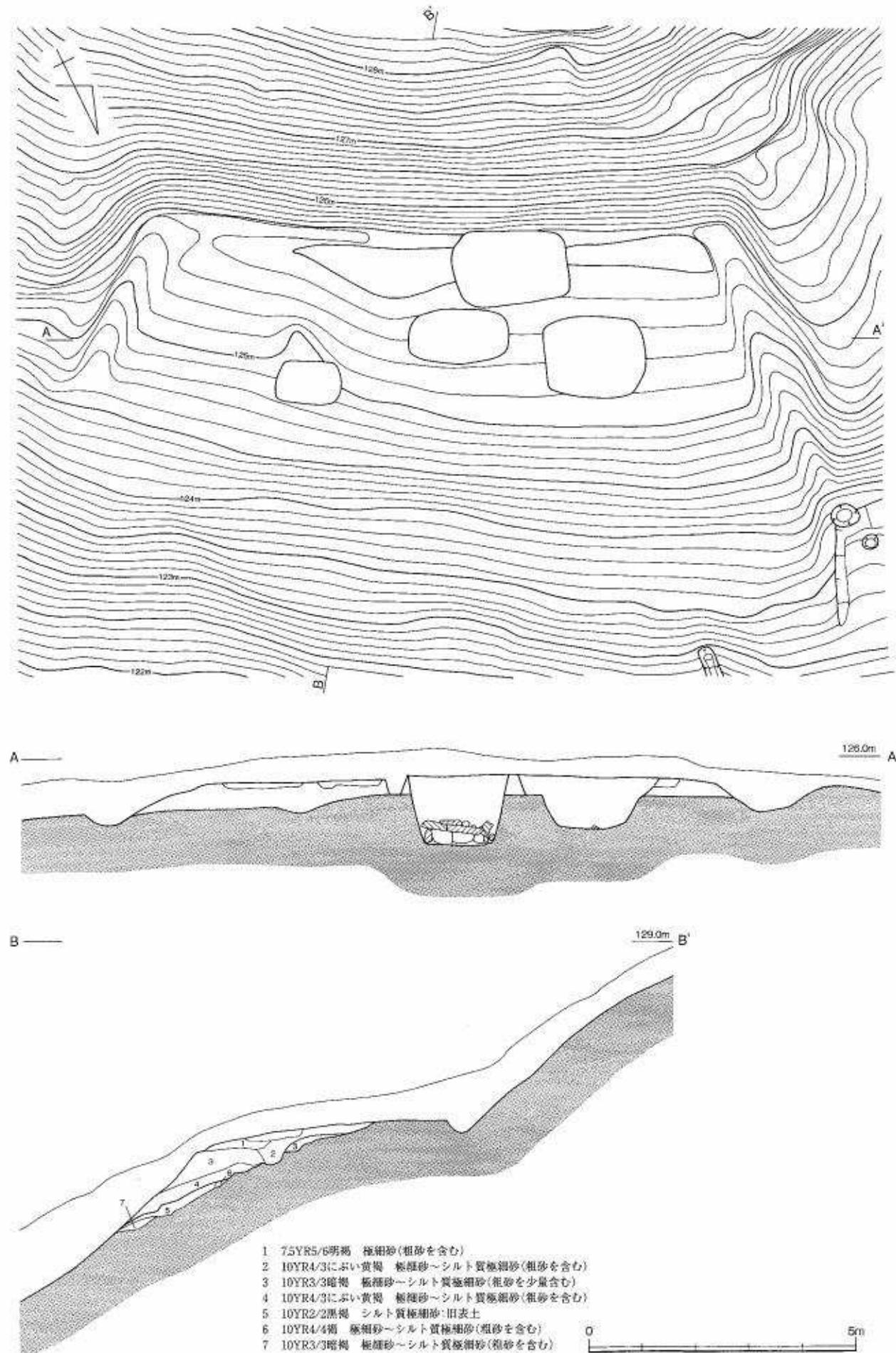
0 2m

芝花 73 号墳主体部 1・4・5・SK02

図版 70
芝花古墳群

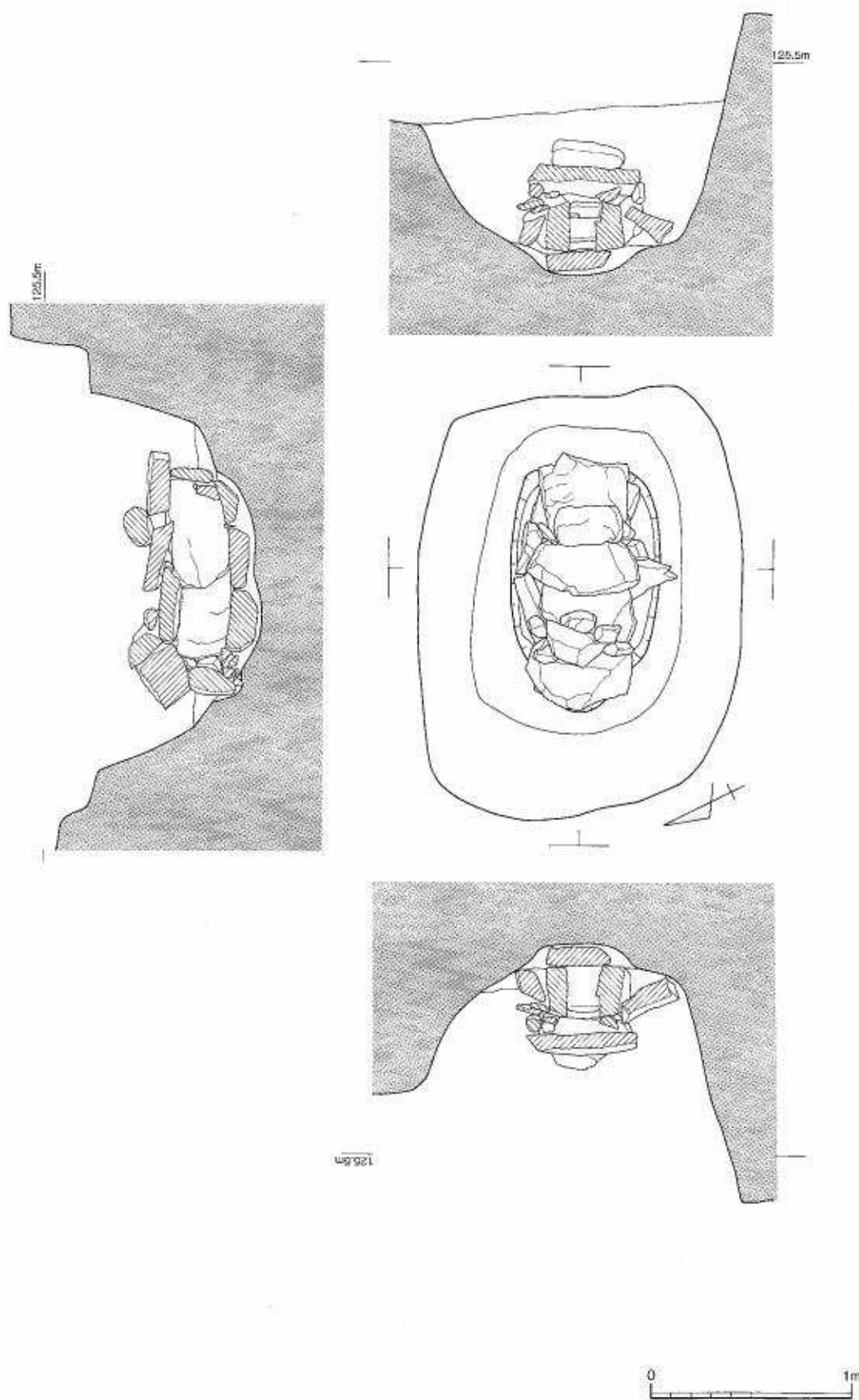


芝花 74 号墳墳丘（調査前・調査後）

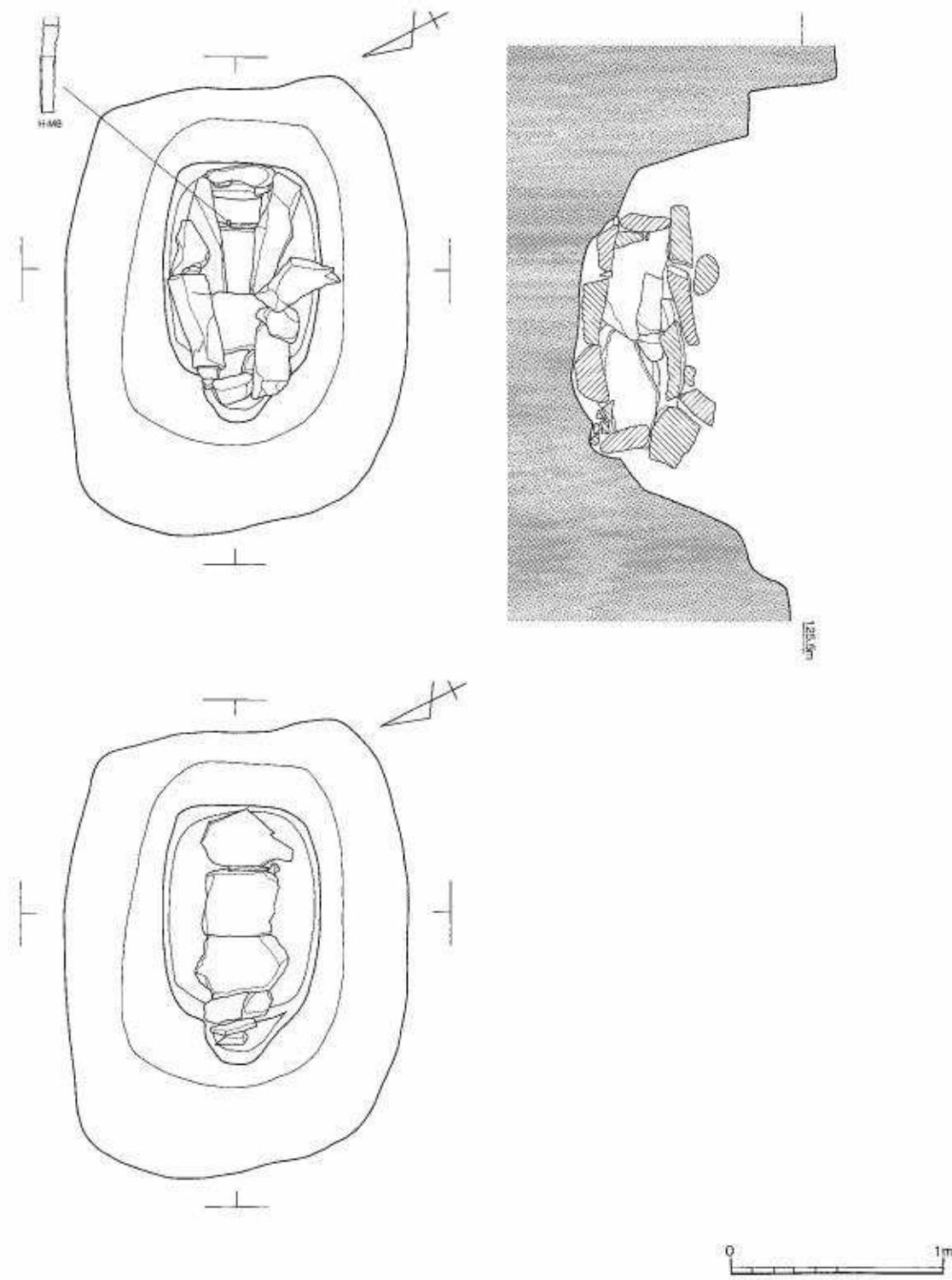


芝花 74 号墳墳丘（完掘後）・断面

圖版 72
芝花古墳群

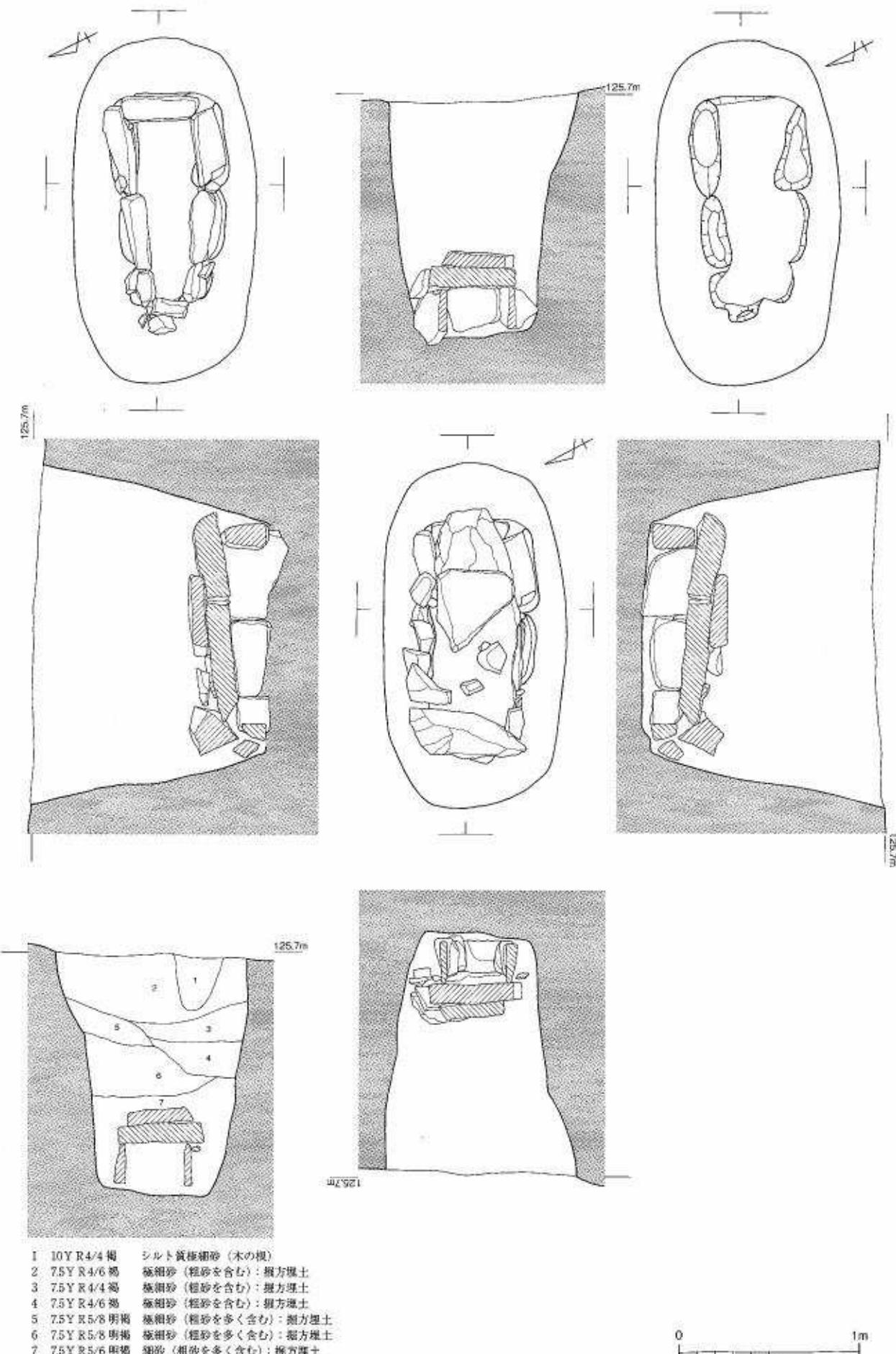


芝花 74 号墳主体部 1 (1)

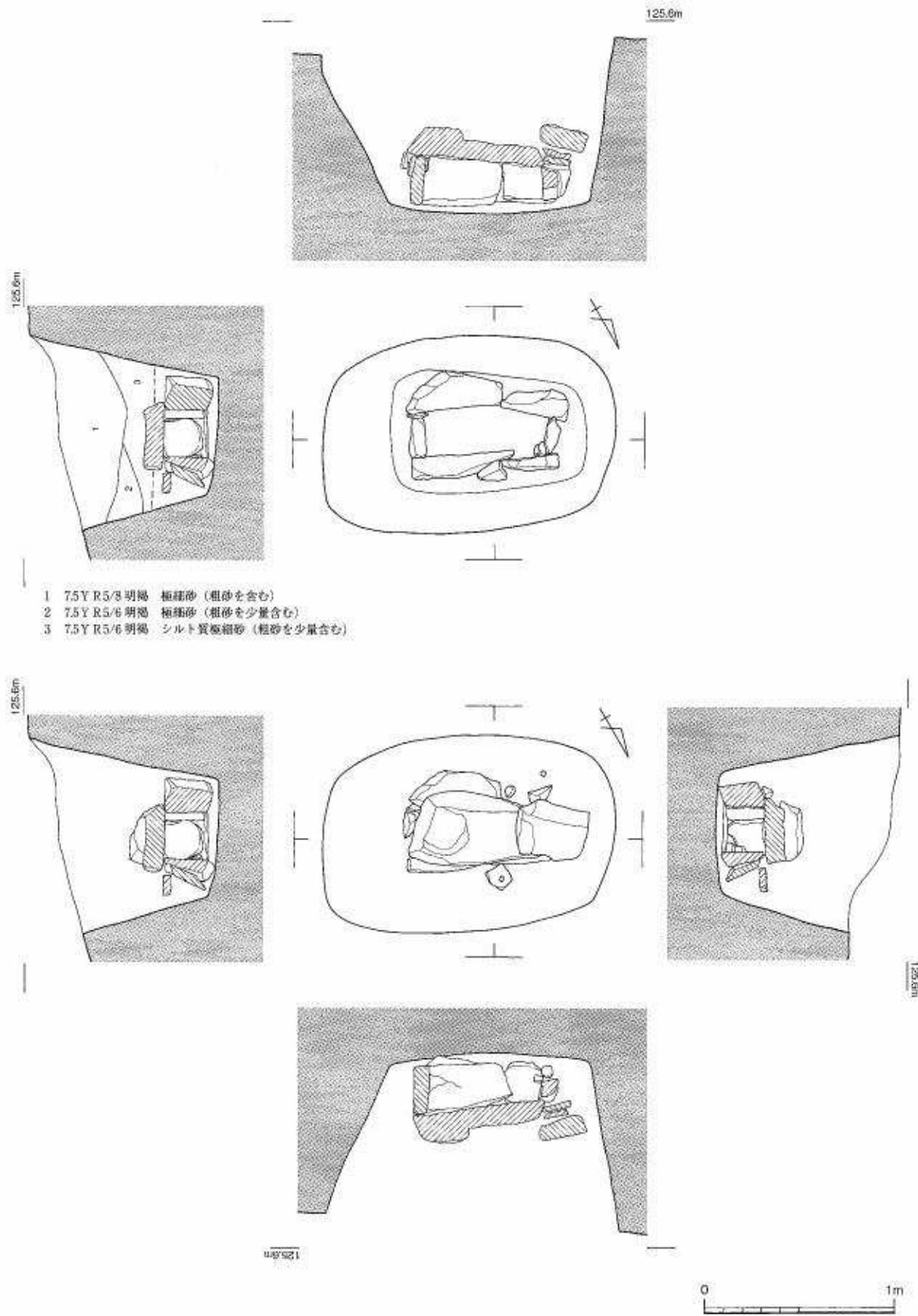


芝花 74 号墳主体部 1 (2)

図版 74
芝花古墳群

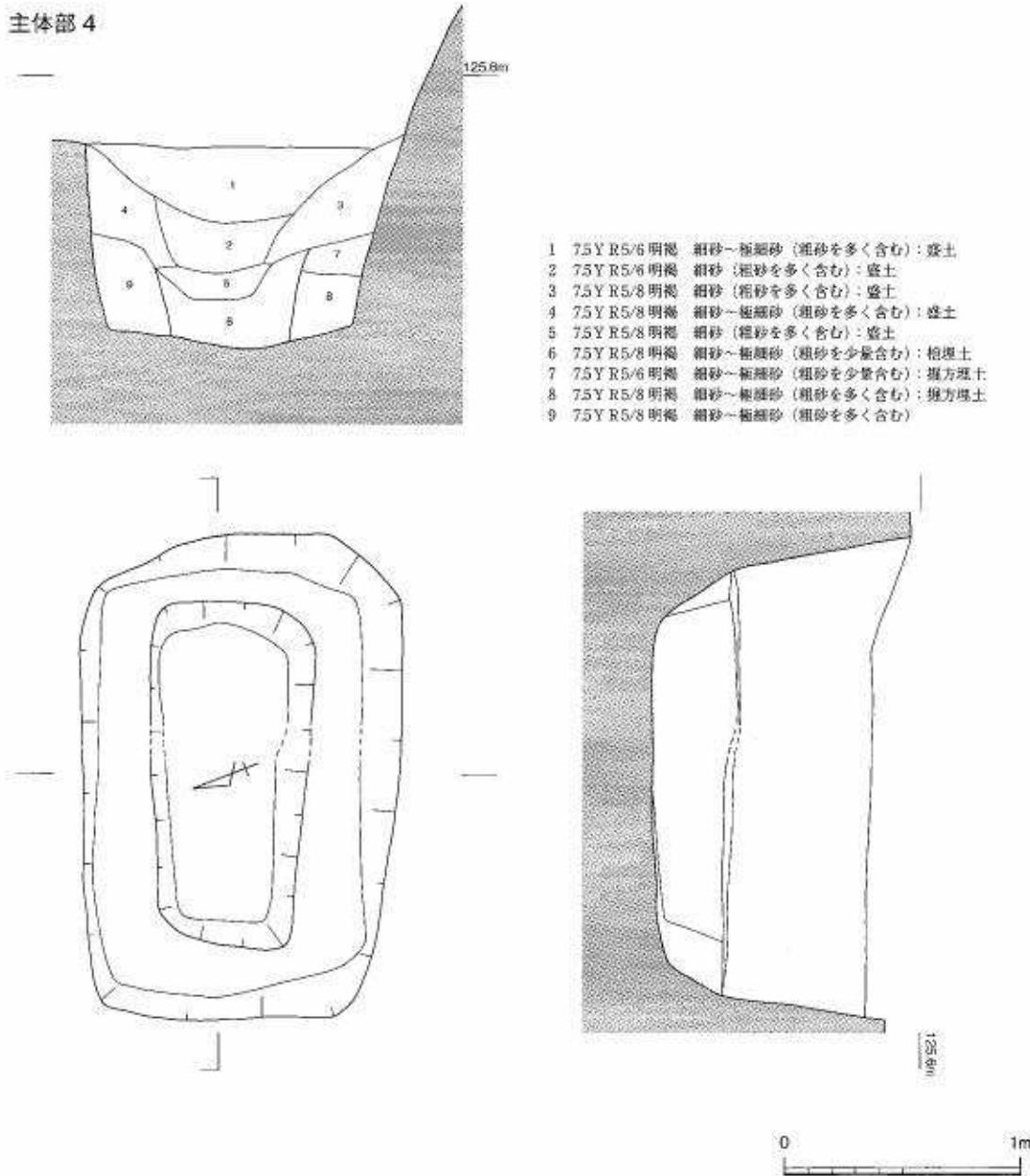


芝花 74 号墳主体部 2

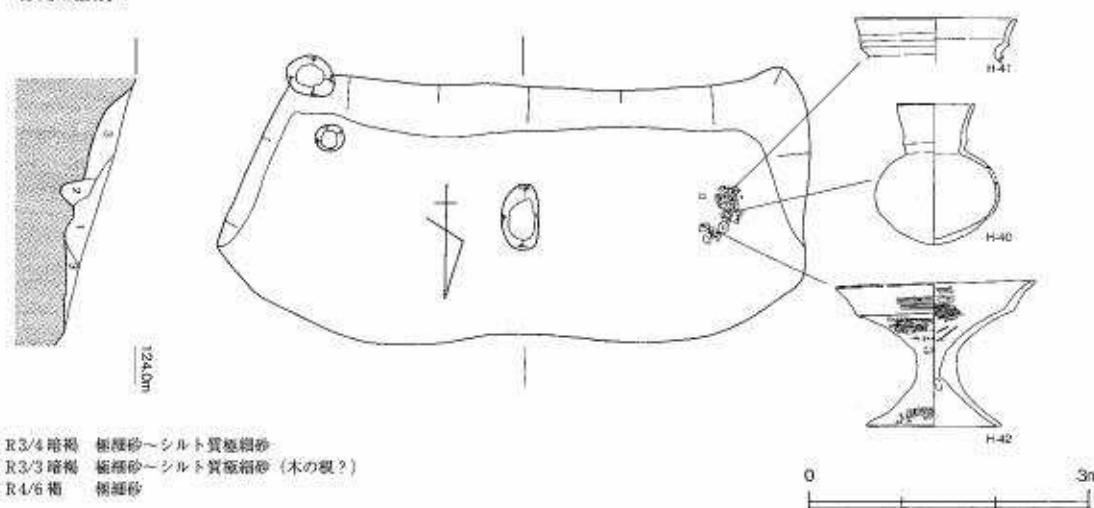


芝花 74 号墳主体部 3

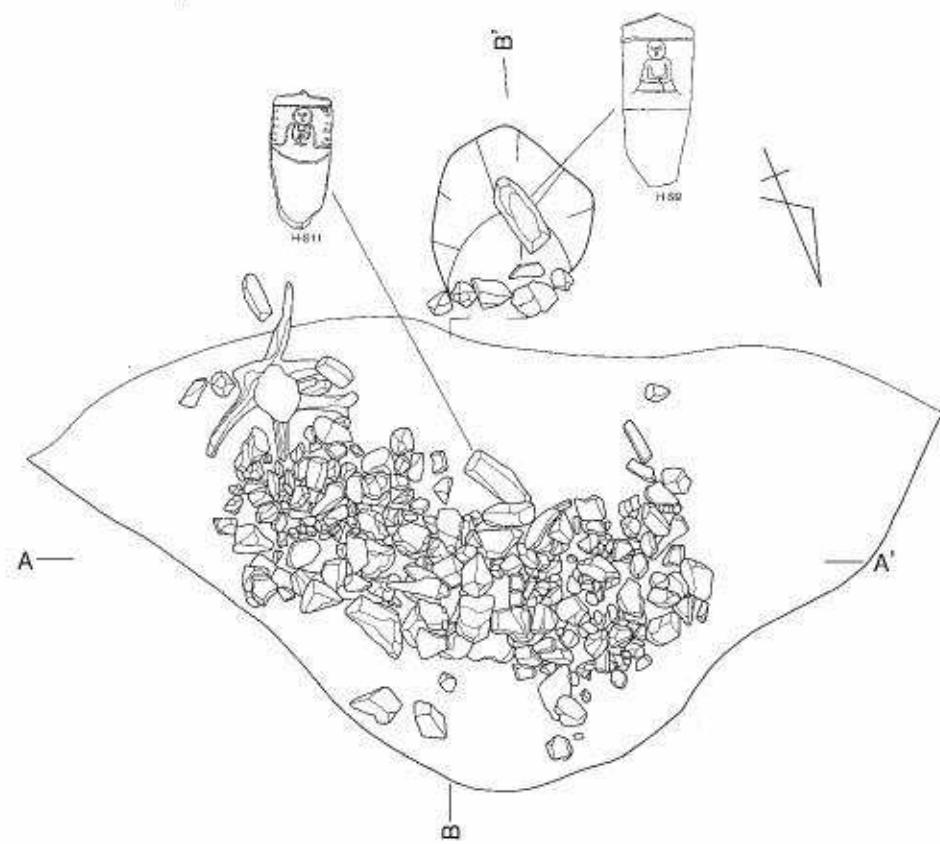
主体部 4



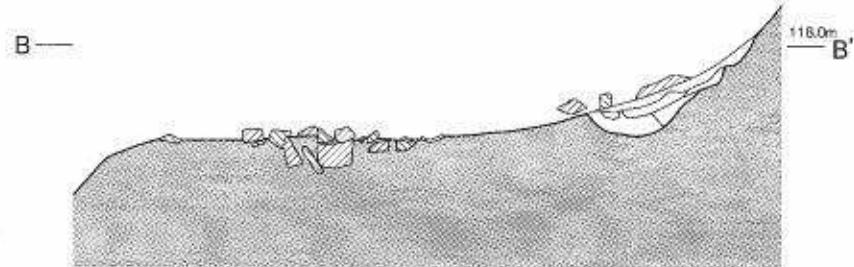
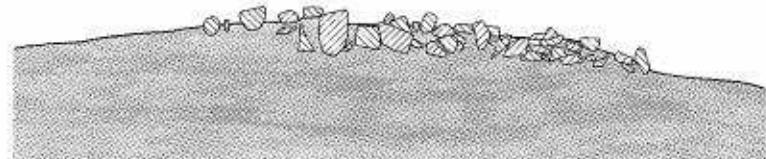
段状遺構 7



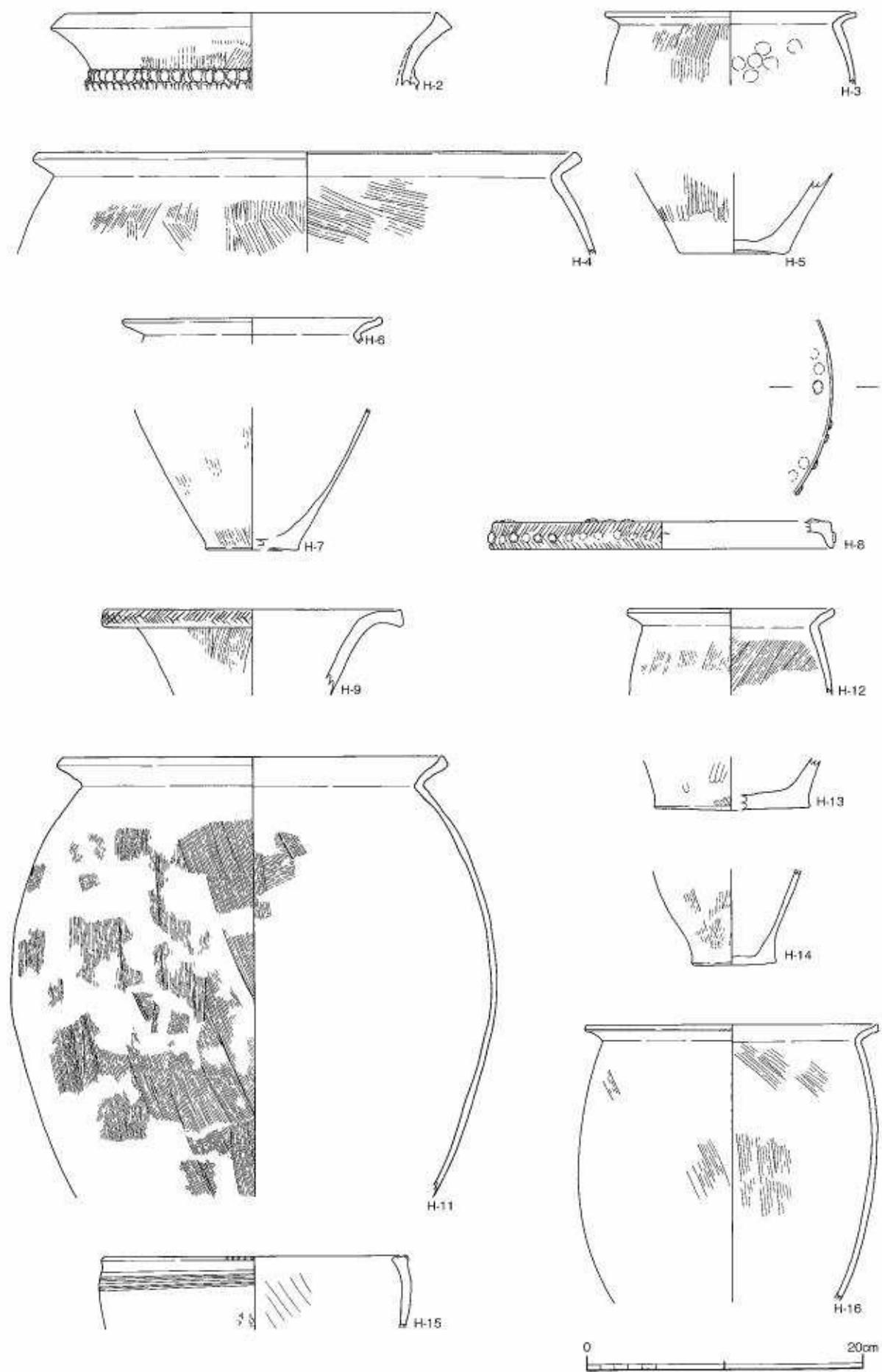
芝花 74 号墳主体部 4・段状遺構 7



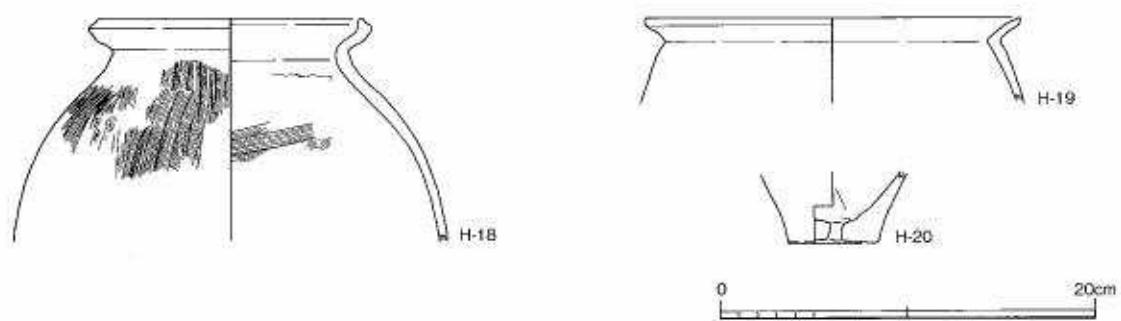
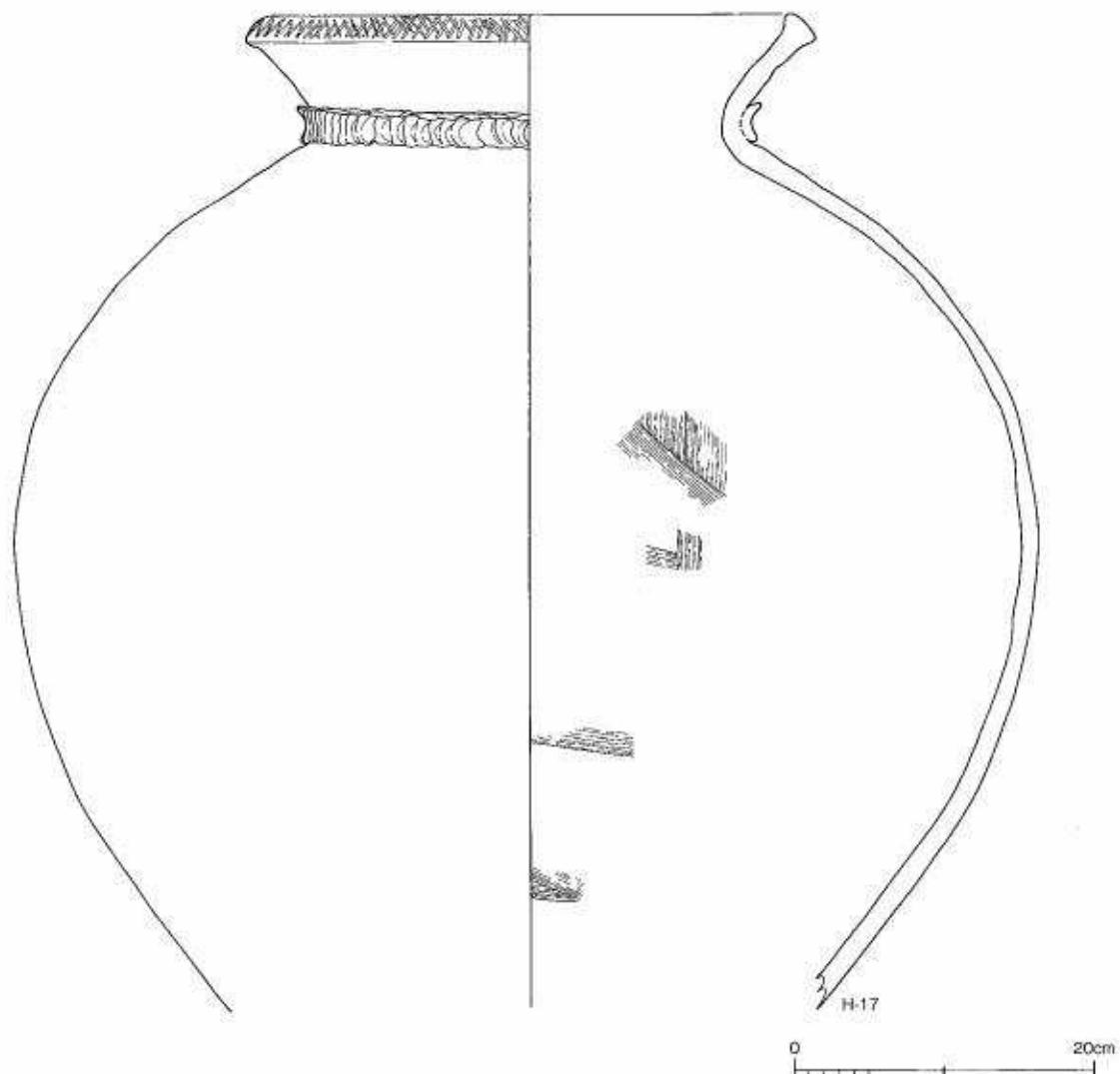
A— 118.0m A'



集石墓

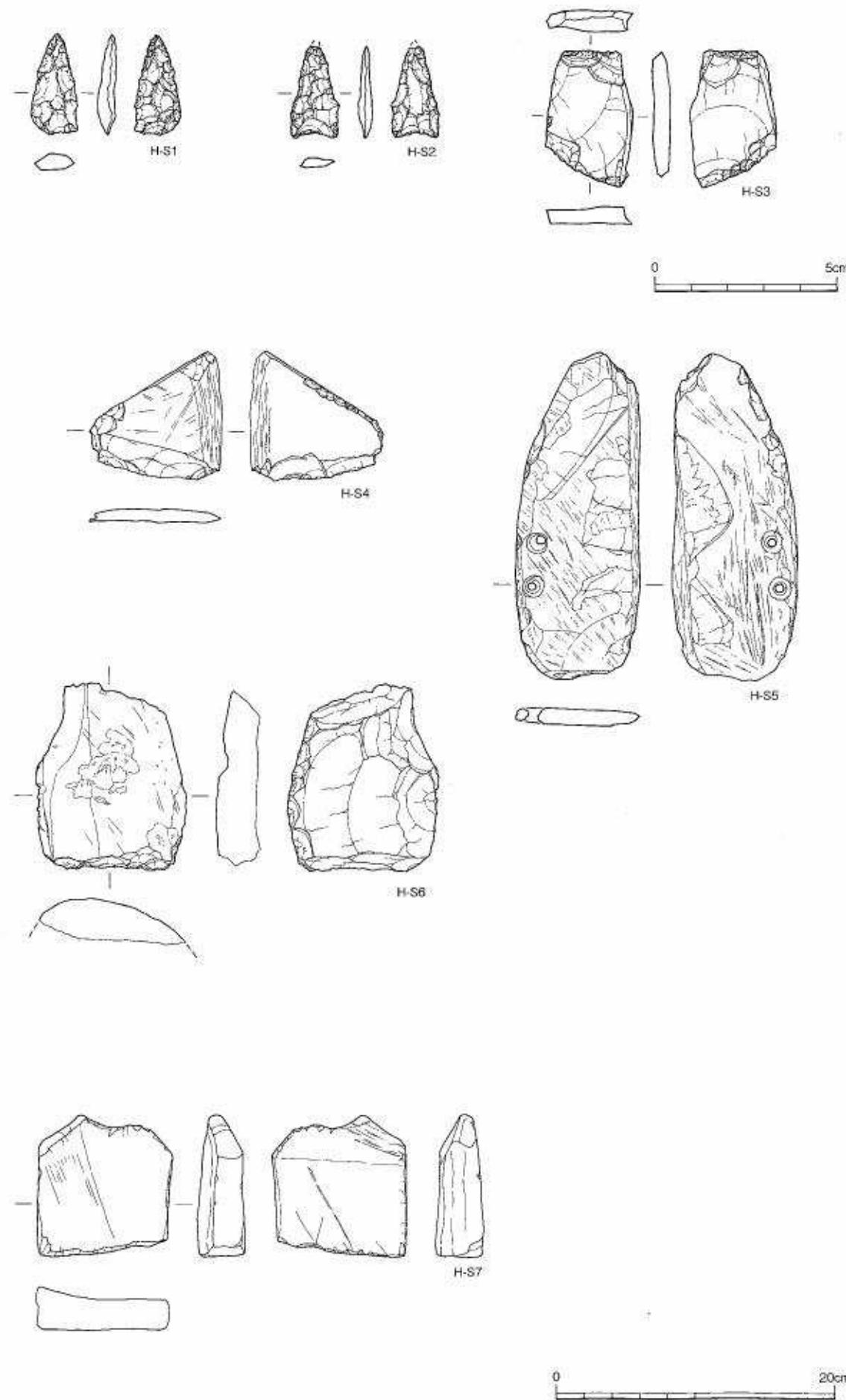


SH01 · 段状遺構出土弥生土器

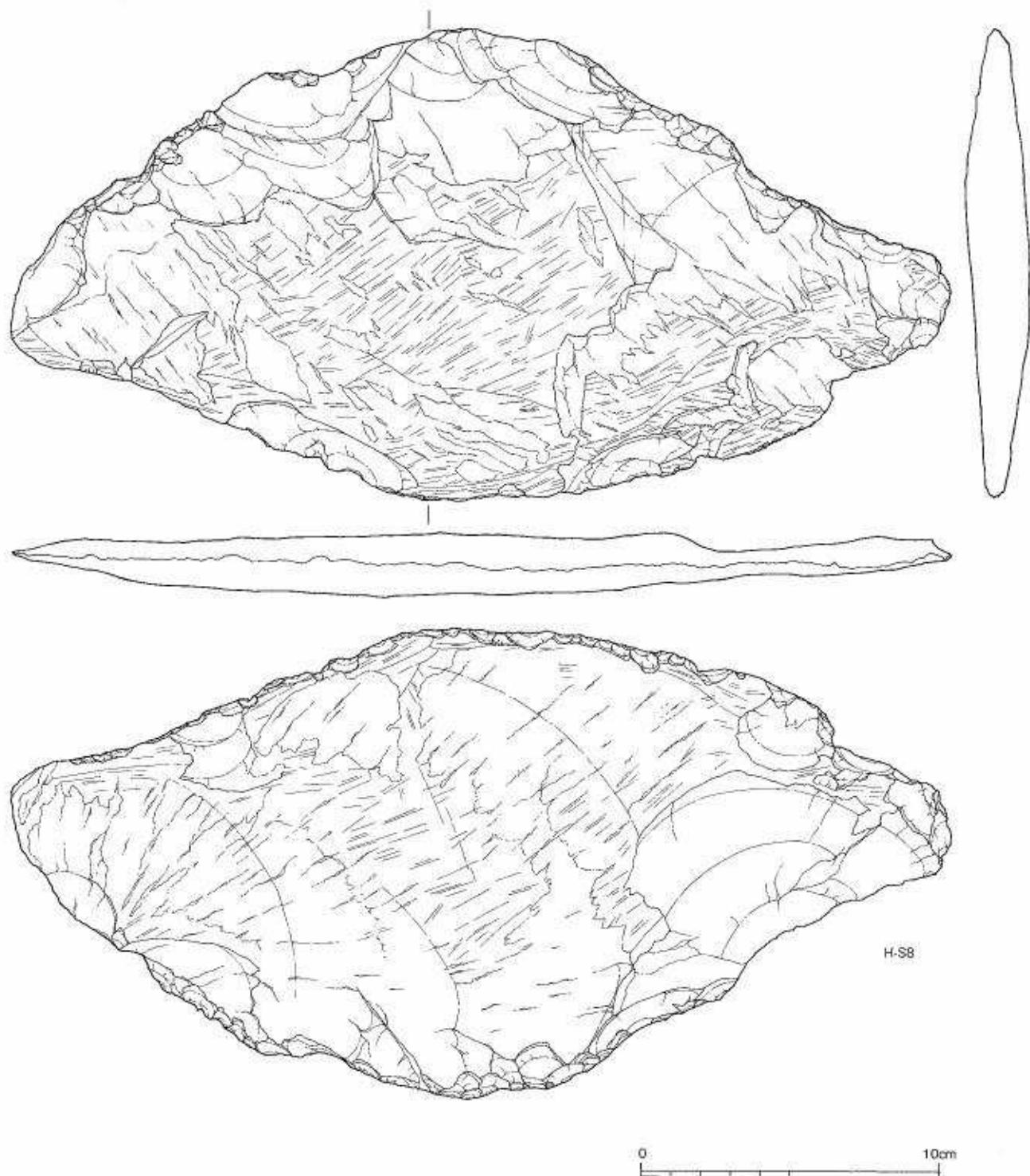


SK01・包含層出土弥生土器

図版 80
芝花古墳群

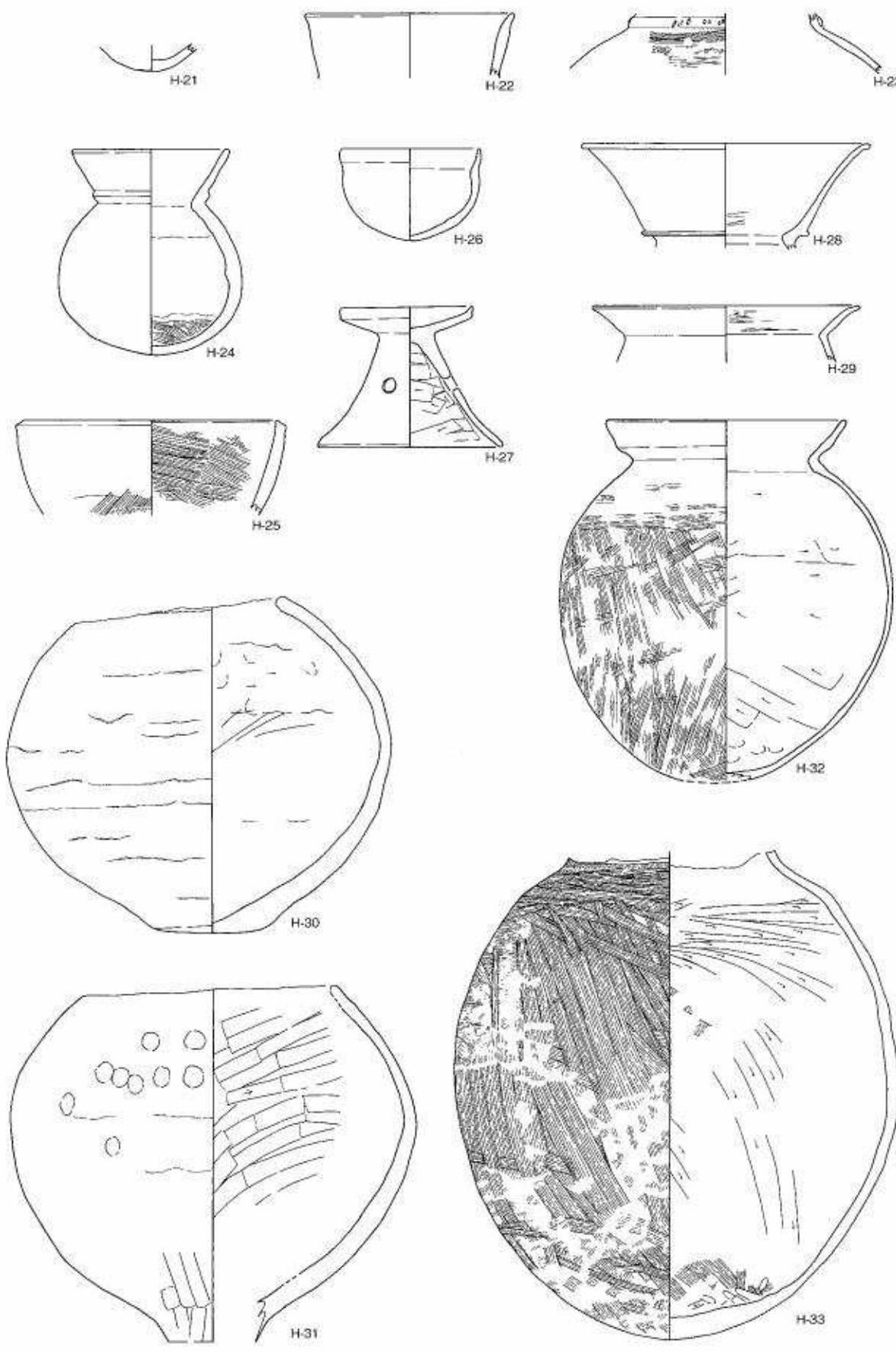


弥生時代出土石器（1）

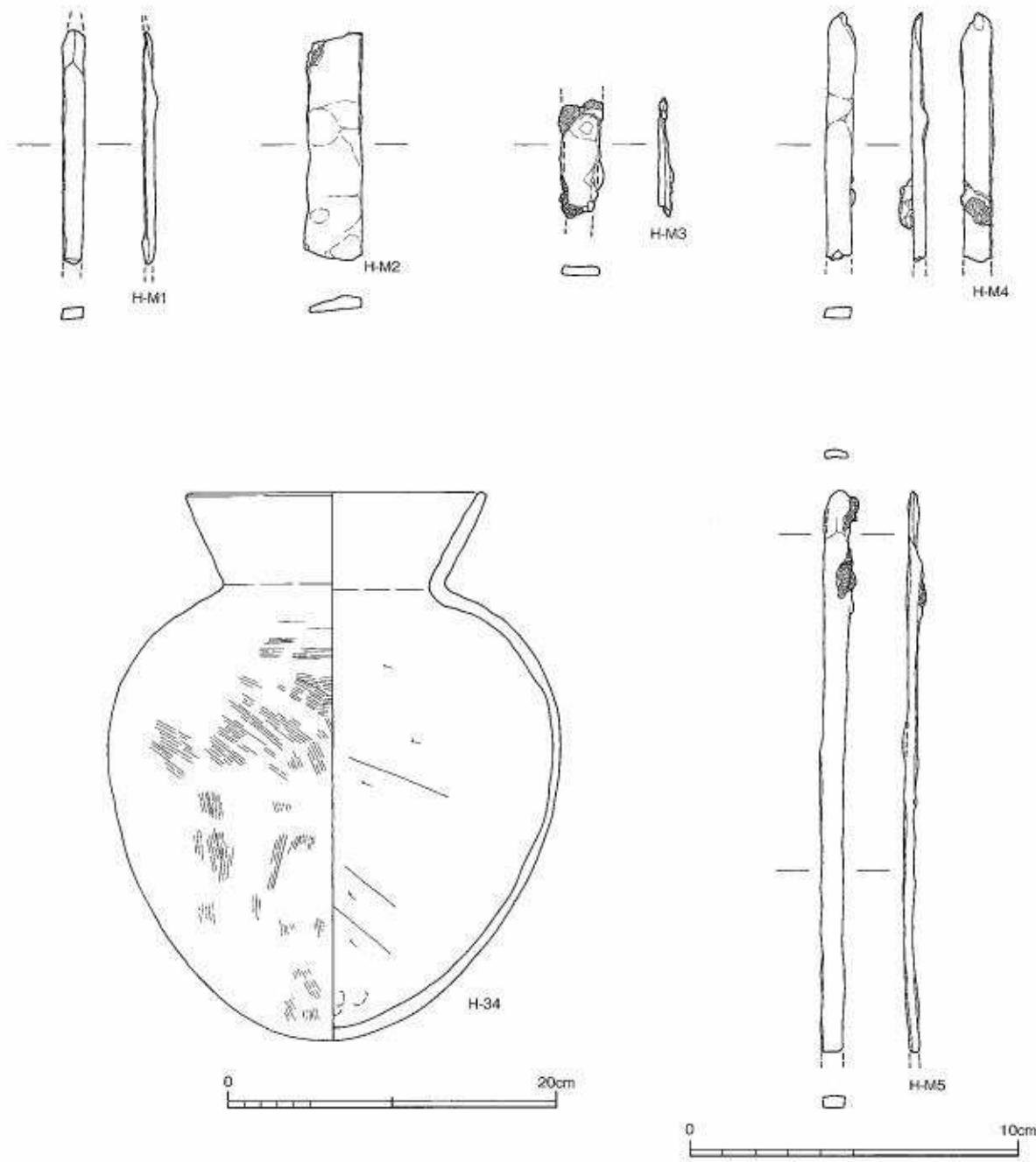


弥生時代出土石器（2）

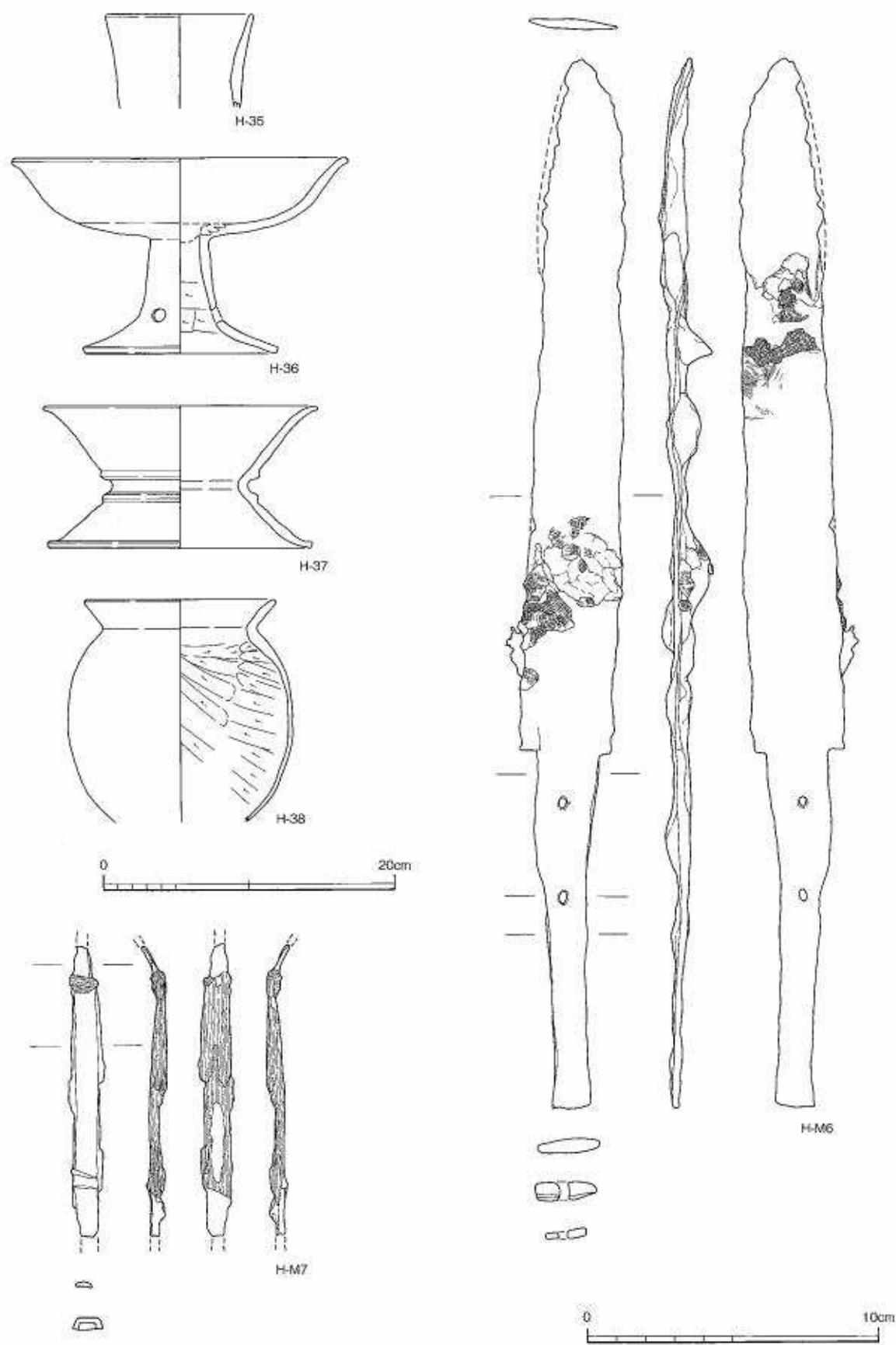
圖版 82
芝花古墳群



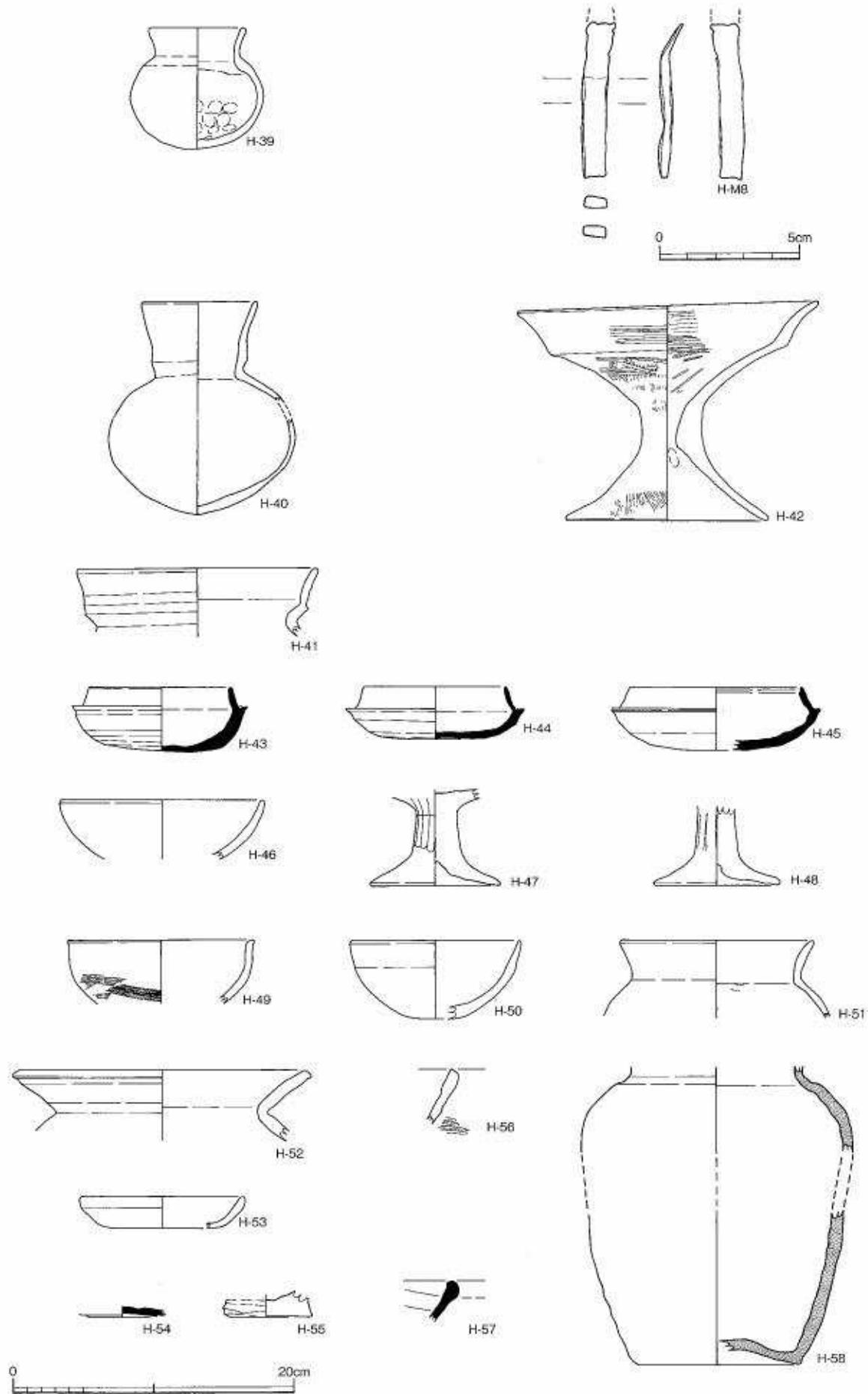
芝花 28·27·26 号墳出土土器



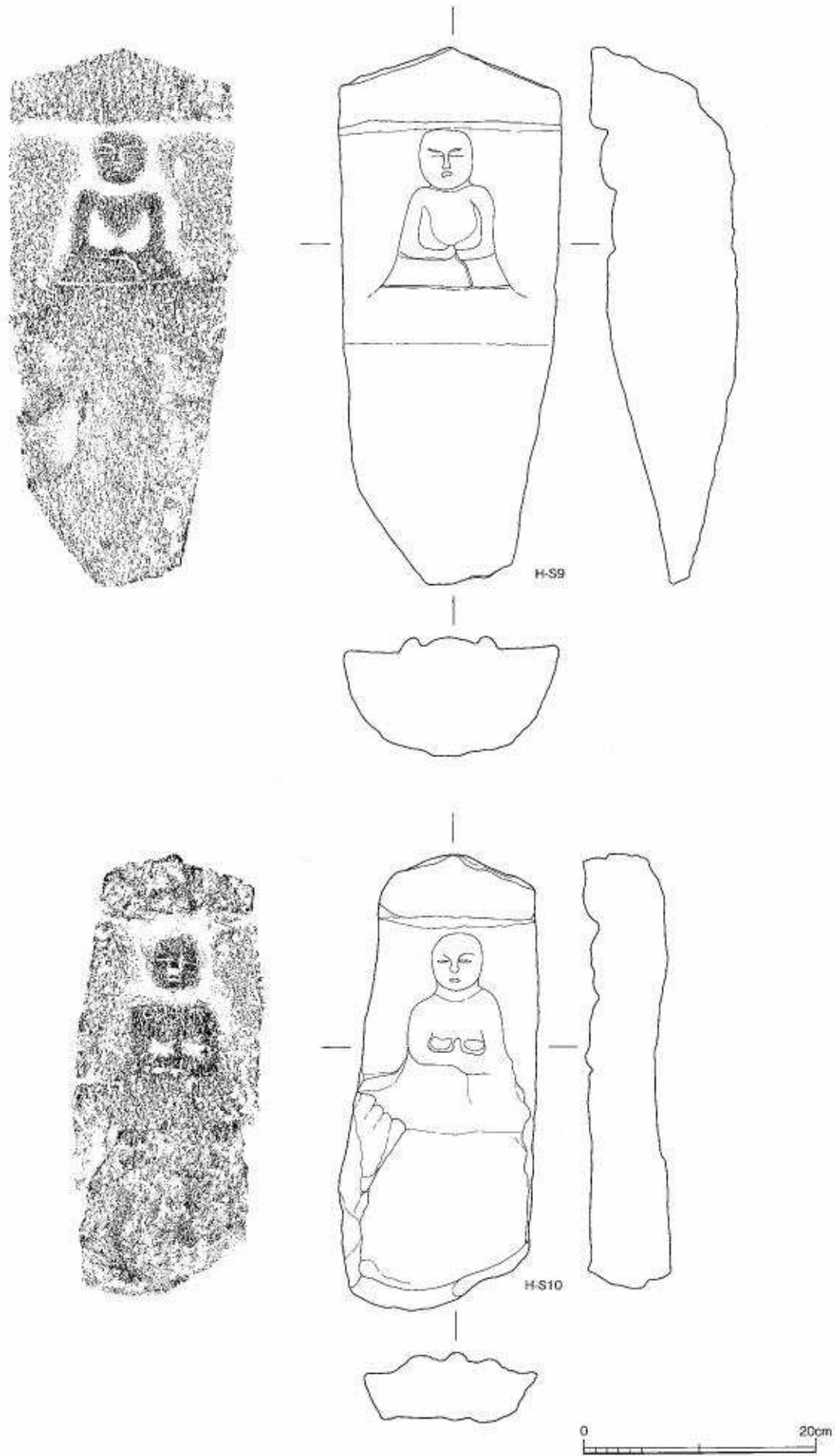
芝花 26・72 号墳出土土器・鉄製品



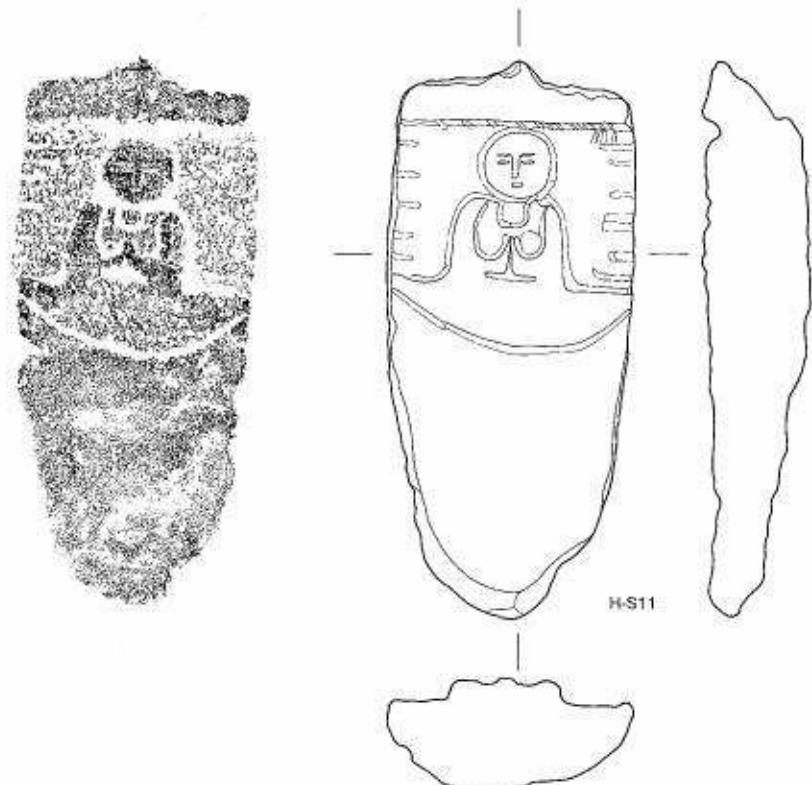
芝花 73 号墳出土土器・鉄製品



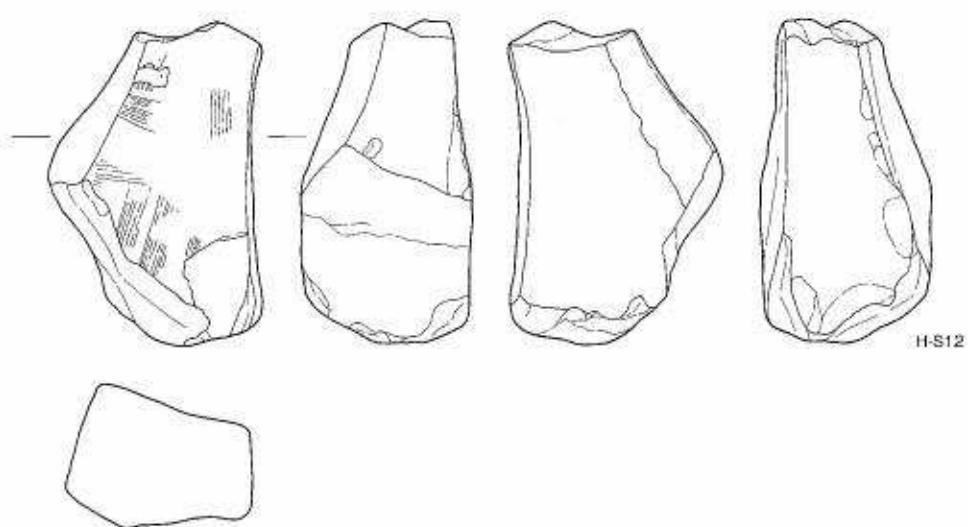
芝花 74 号墳出土土器・鉄製品、古墳時代・中世出土土器



集石墓出土石製品(1)



0 20cm

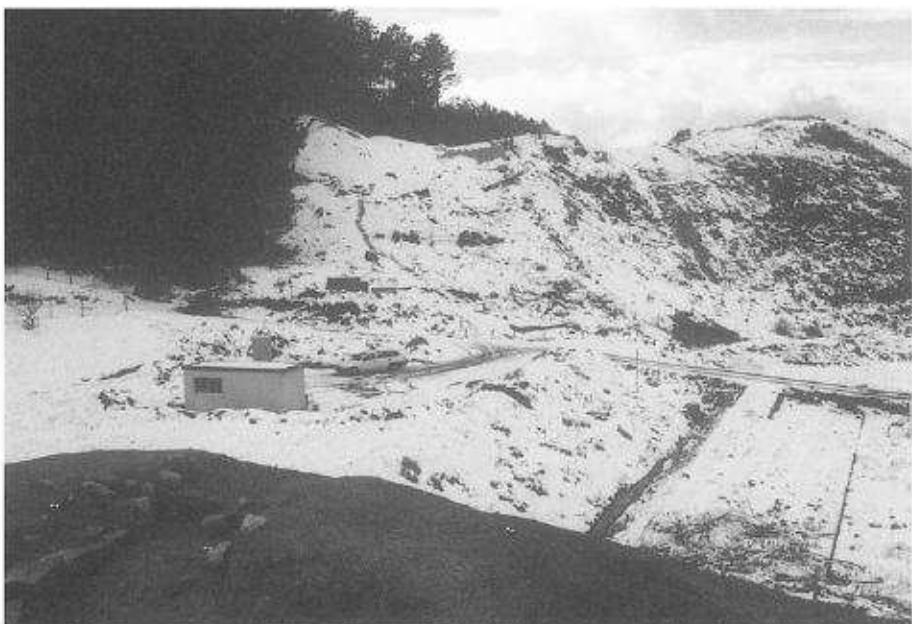


0 20cm

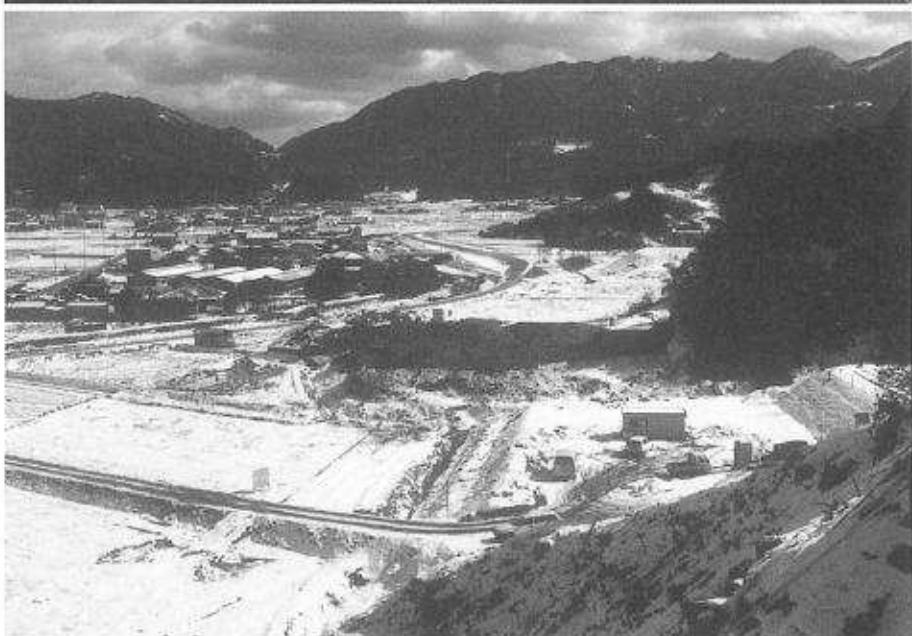
集石墓出土石製品(2)

写 真 図 版

和賀向山 1 号墳



和賀向山1号墳より
芝花古墳群を望む



芝花古墳群より
和賀向山1号墳および
若水古墳群を望む



和賀向山1号墳遠景
(西から)

写真図版2

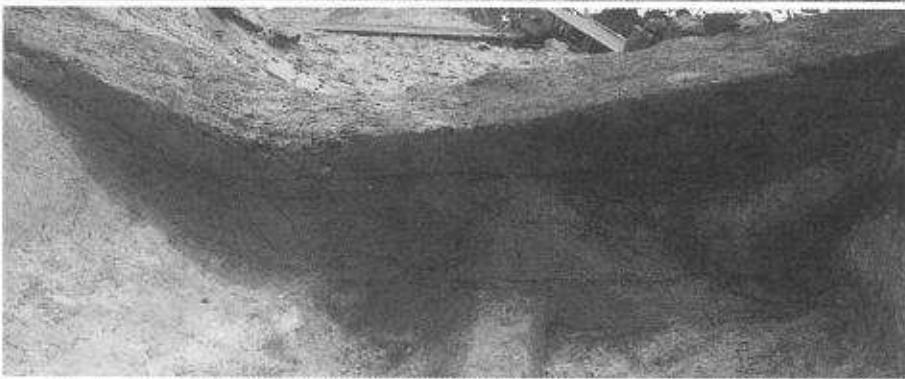
和賀向山1号墳



墳丘土層断面
(墳丘南西側斜面)
(東から)



墳頂部および
石室内土層断面
(東から)



周溝および
周溝内土坑
土層断面
(西から)



周溝内土坑
土器出土状況
(西から)



石室前庭部
土層堆積状況
(北東から)



石室側壁(西側)
羨道付近(東から)



石室側壁(西側)
中央部(東から)



石室側壁(西側)
奥壁付近(東から)

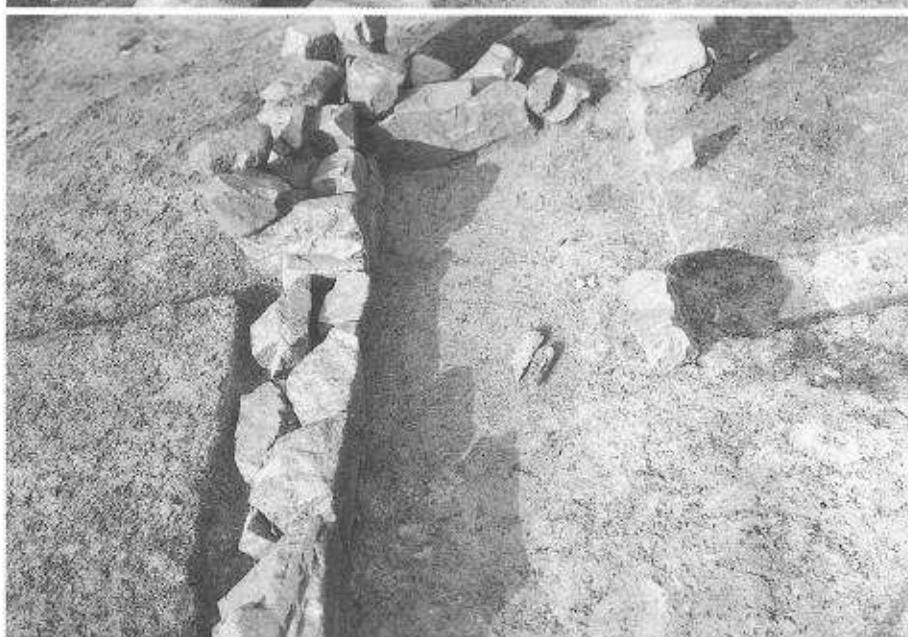
写真図版4
和賀向山1号墳



石室奥壁裏込
(東から)



石室側壁(東側)
および奥壁裏込
(西から)



鉄器出土状況
(石室床面)
(南から)



全景
(北東から 遠景)



全景
(北東から 近景)



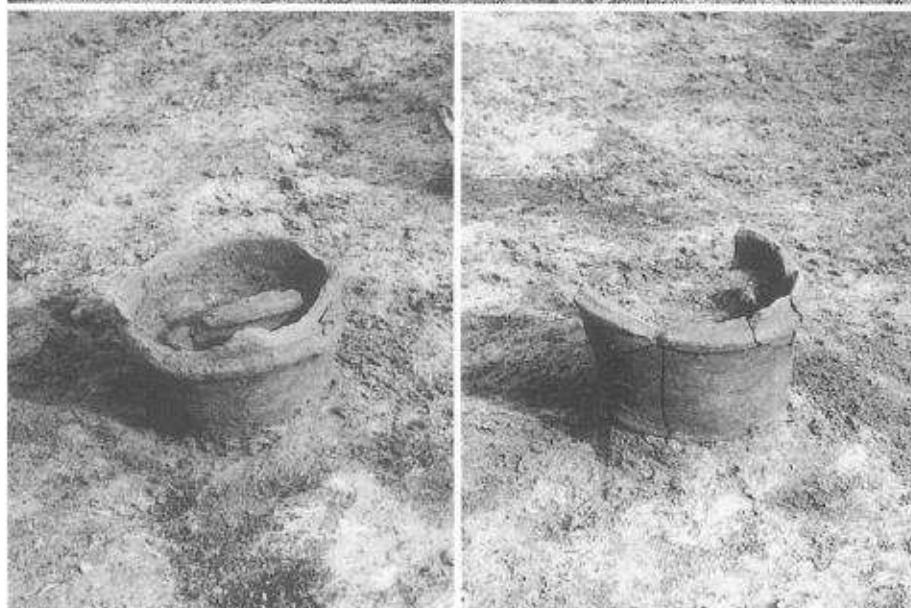
墓壙完掘状況
(東から)

写真図版6

和賀向山1号墳



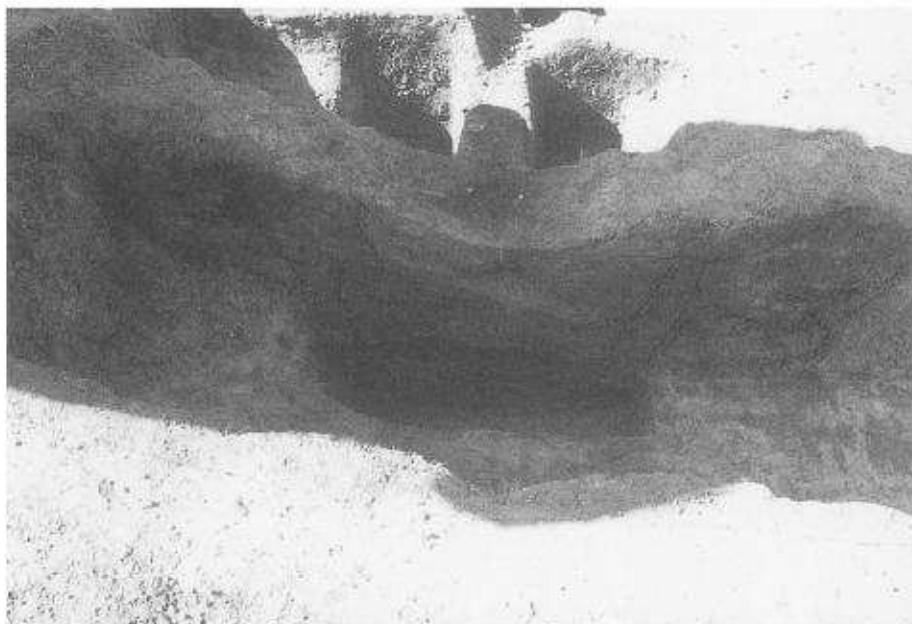
周溝内
円筒埴輪出土状況
(北西から)



[左][右]周溝内
円筒埴輪出土状況
(北西から)



1号墳南東斜面
葺石石材検出状況
(南東から)



木棺墓1土層断面
(東から)



木棺墓1棺内完掘状況
(東から)



木棺墓1完掘状況
(東から)

写真図版8
和賀向山1号墳



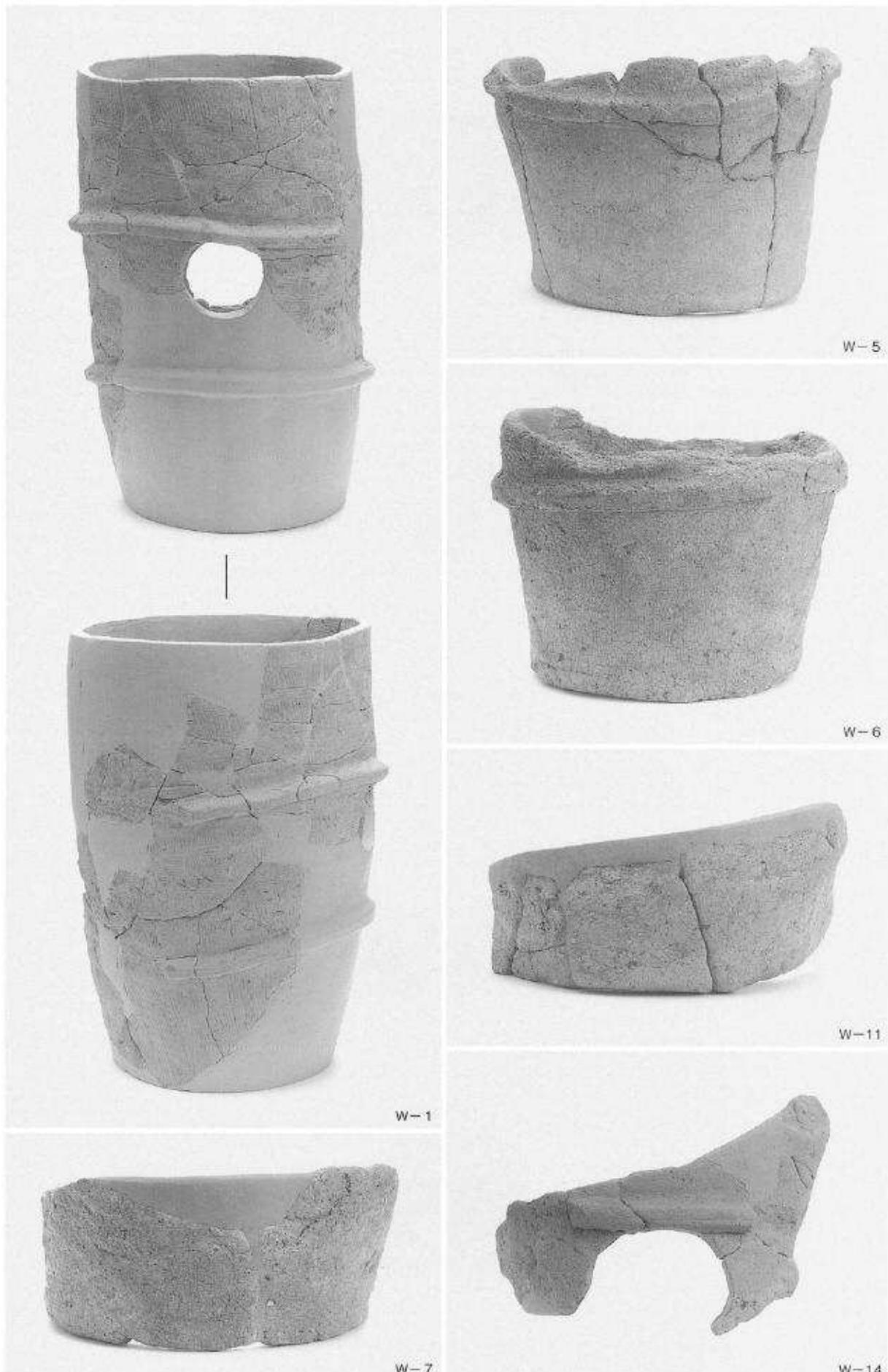
除雪作業状況



人力掘削状況

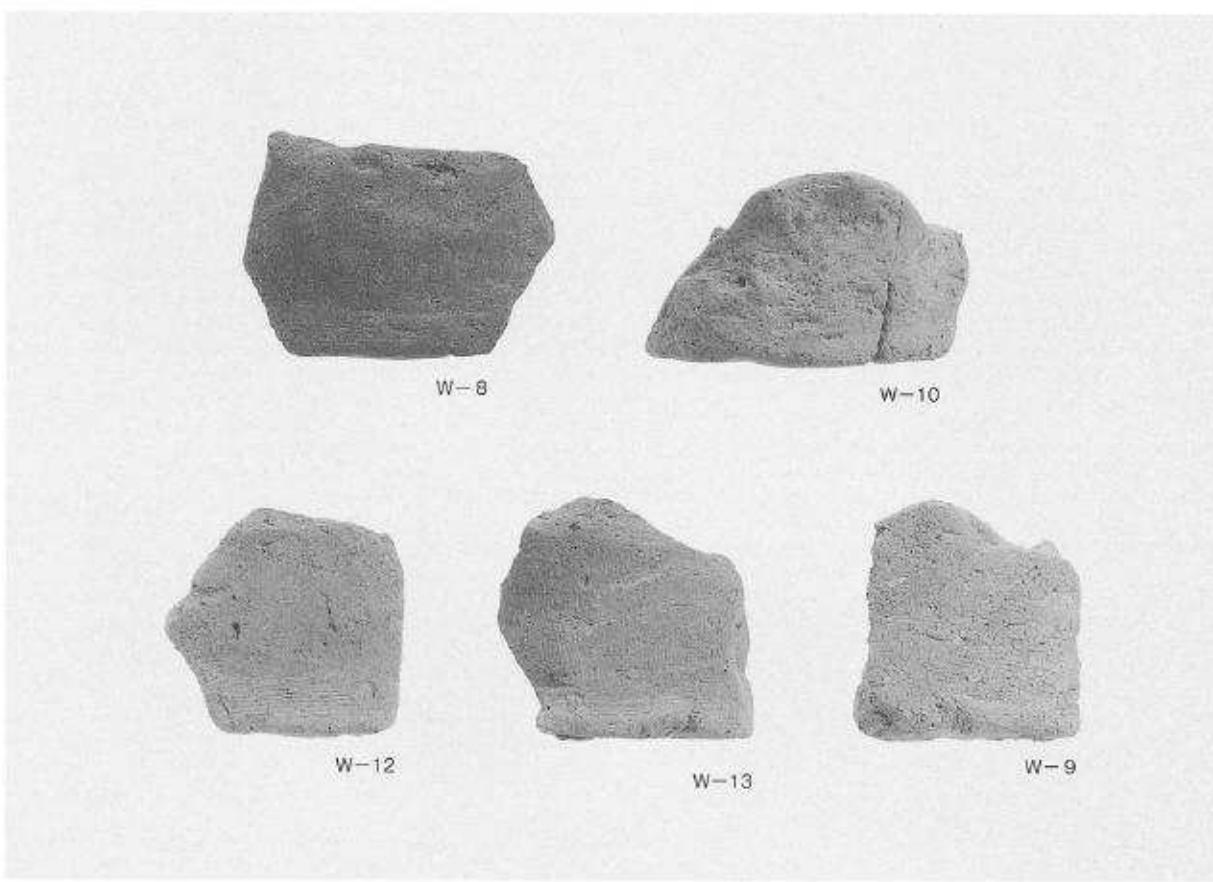
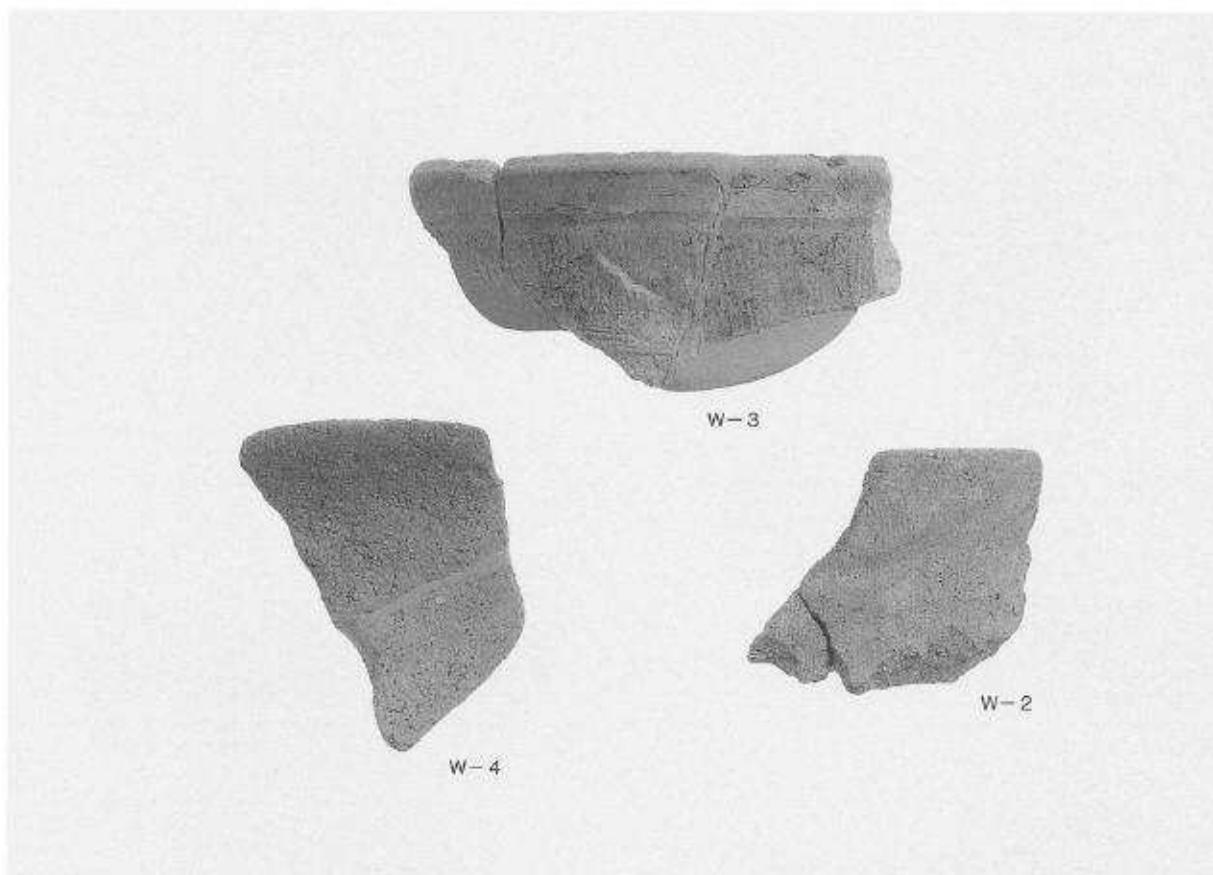


遺構実測作業状況

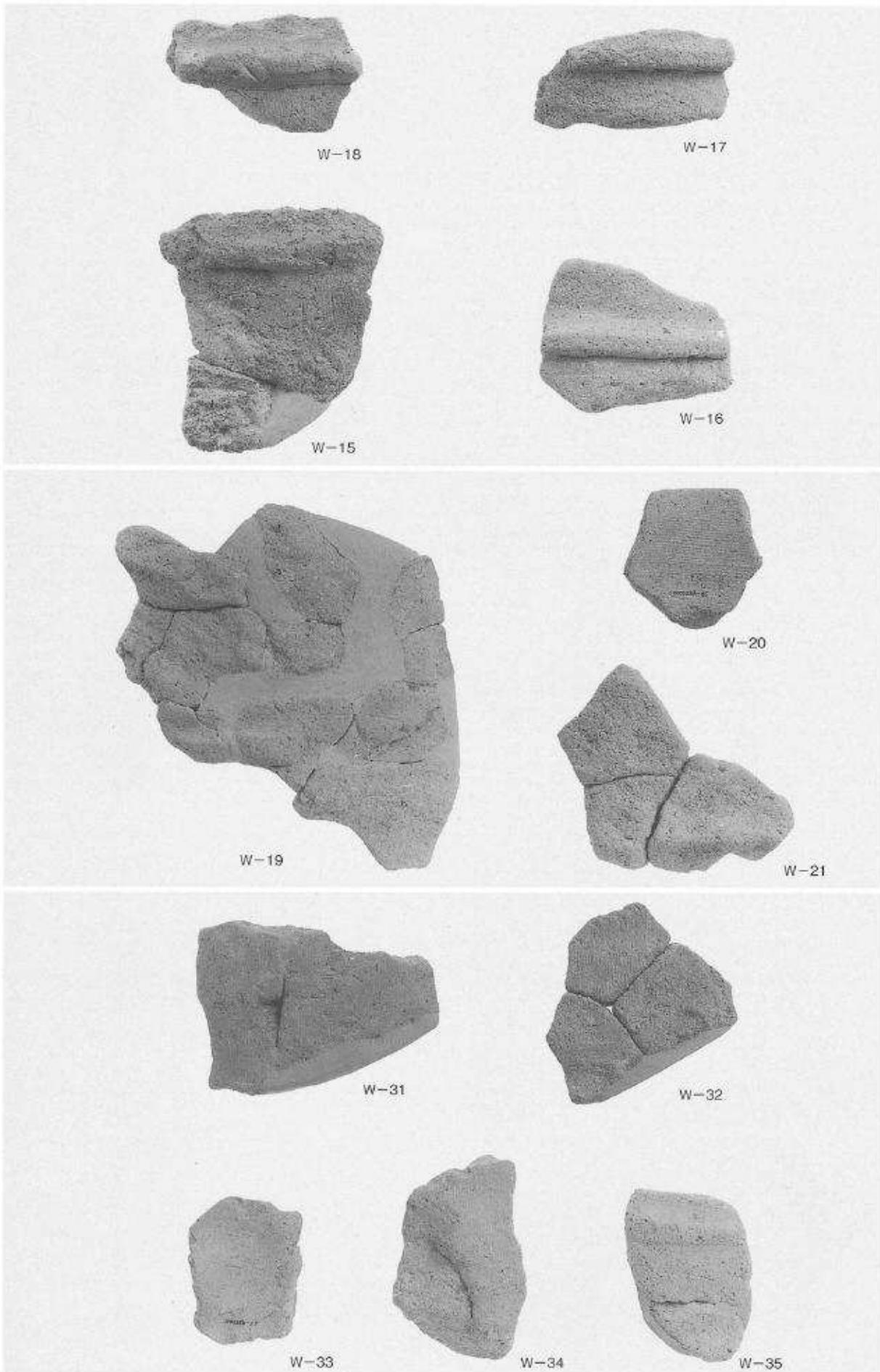


円筒埴輪(1)

写真図版10
和賀向山1号墳

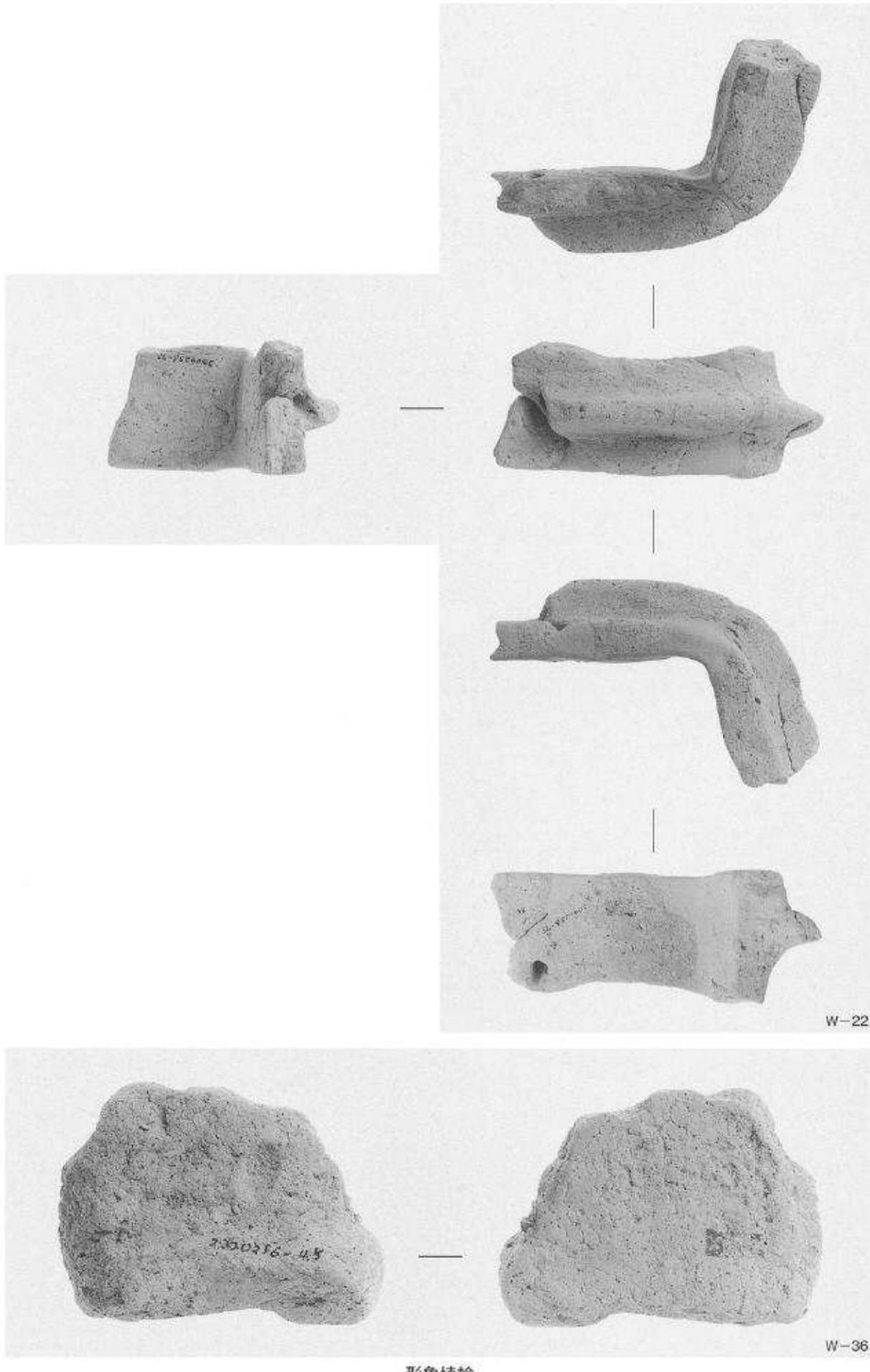


円筒埴輪(2)

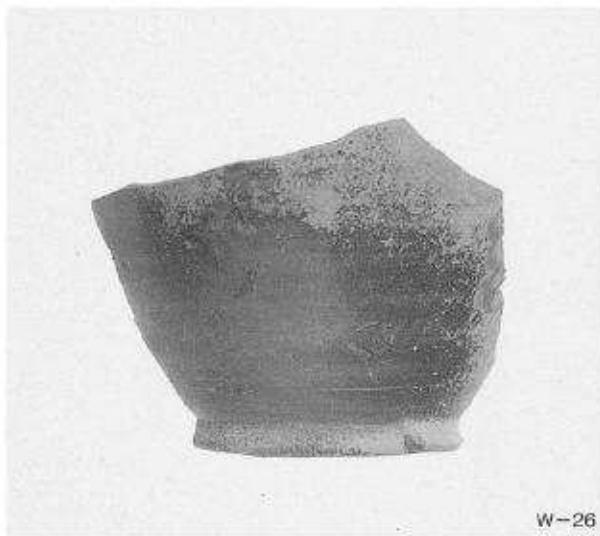


円筒埴輪、朝顔形埴輪

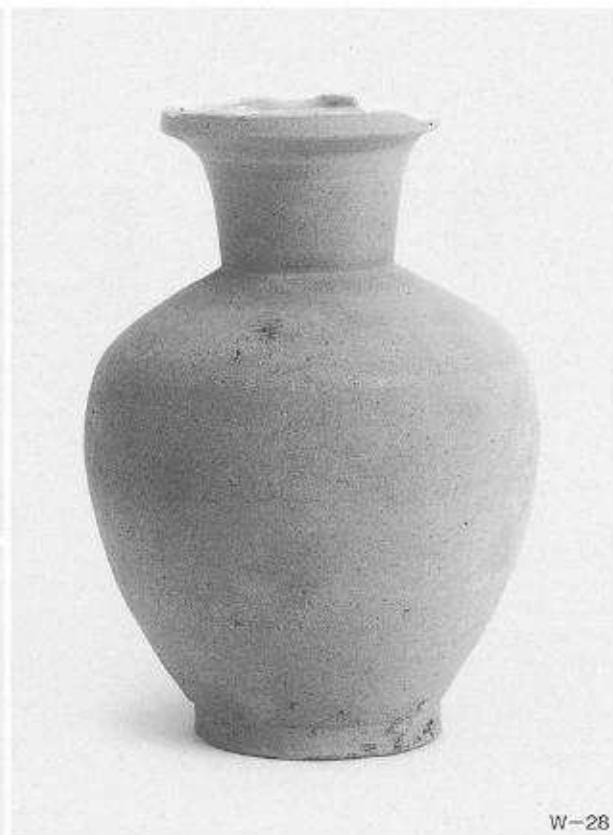
写真図版12
和賀向山1号墳



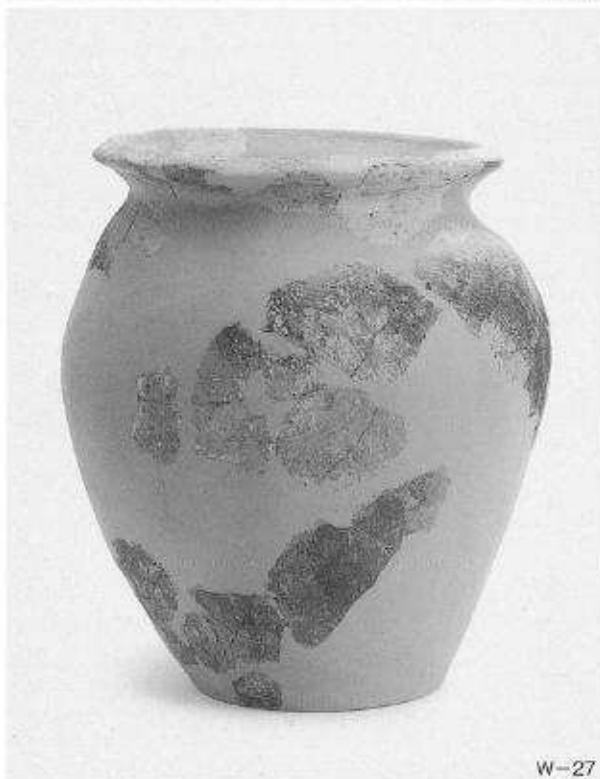
形象埴輪



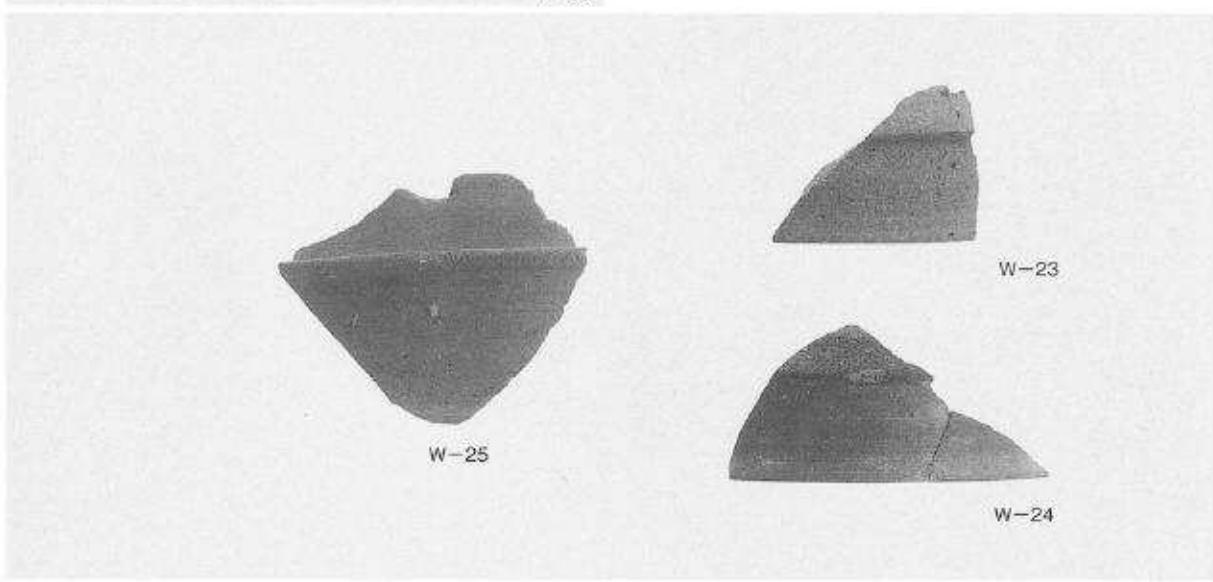
W-26



W-28



W-27

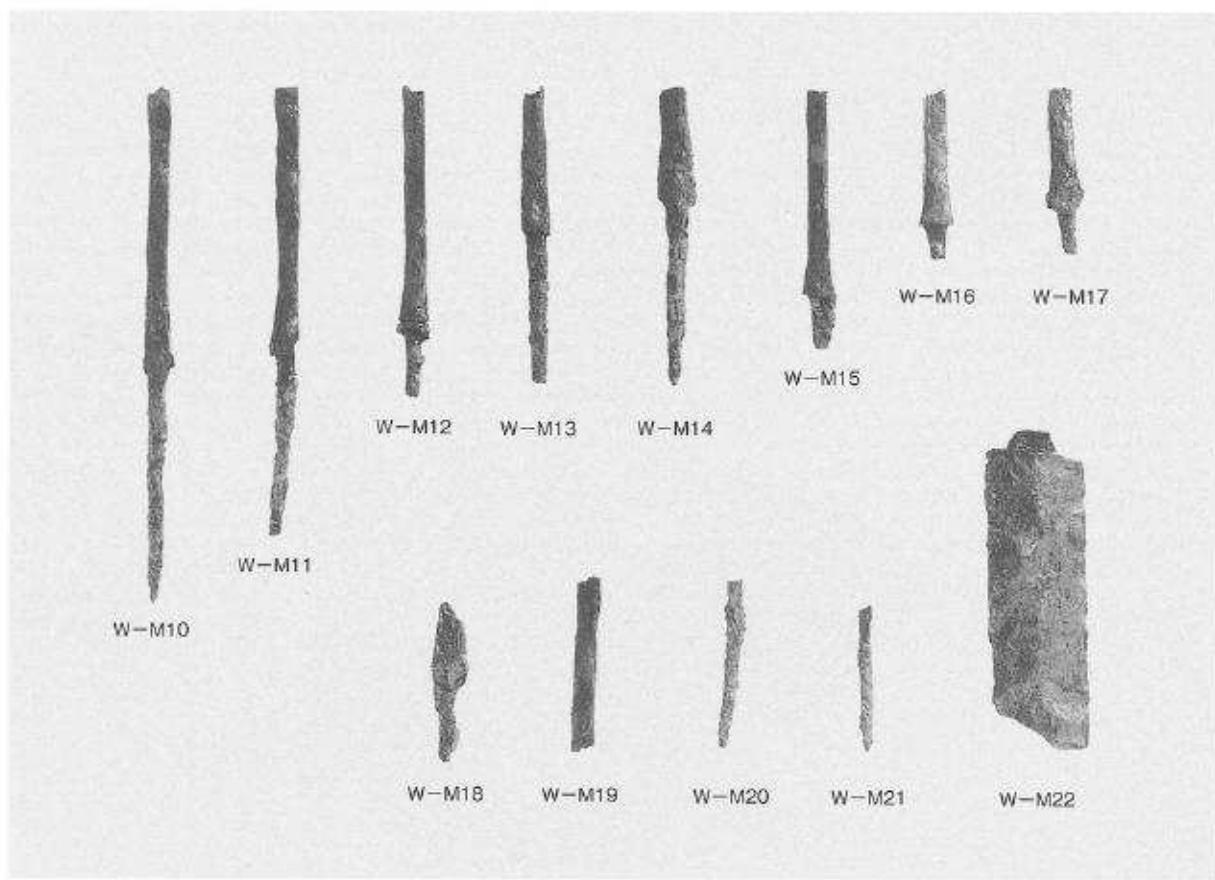
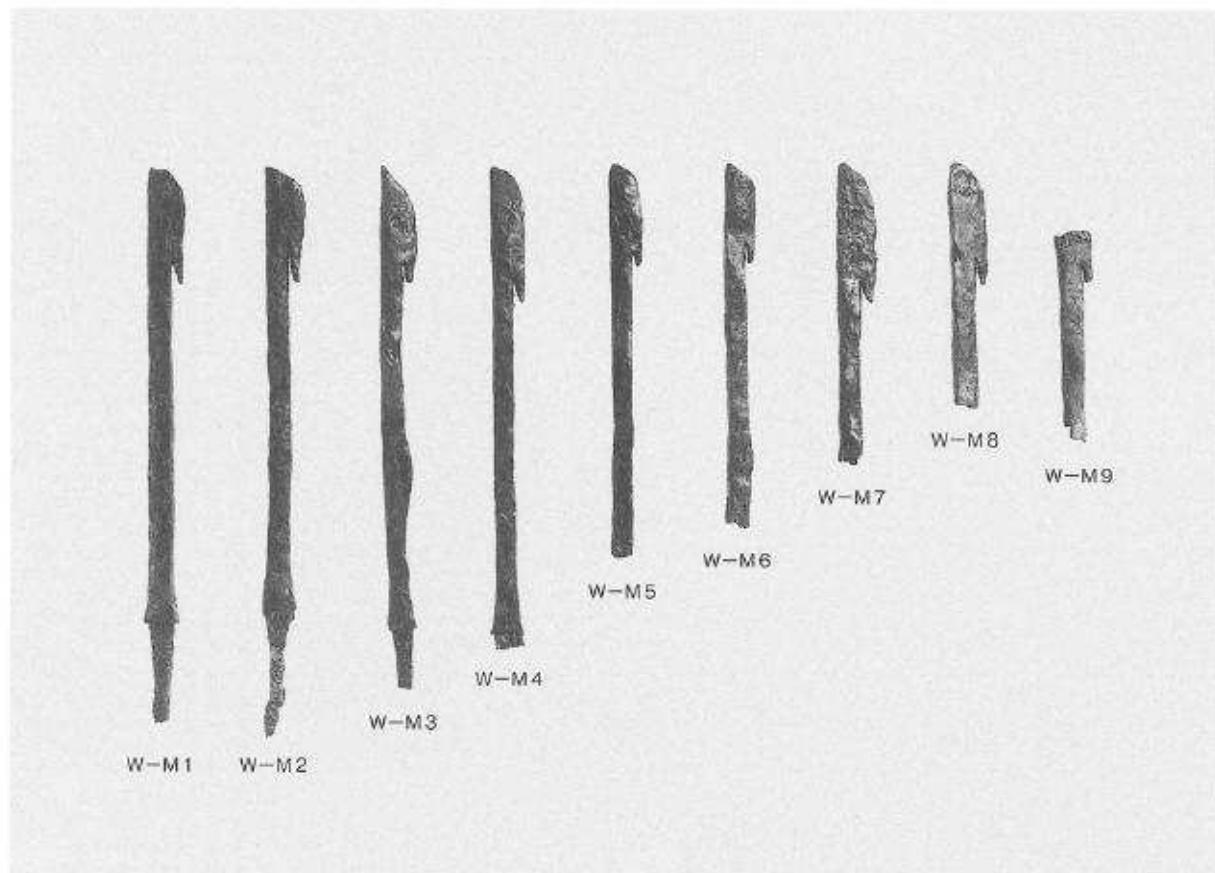


W-23

W-24

墳丘、木棺墓、土坑出土土器

写真図版14
和賀向山1号墳



鉄器

芝ヶ端古墳



調査前(東から)



近世以降盛土土層断面(南から)

写真図版16

芝ヶ端古墳



墳丘残存状況全景(南西から)



墳丘残存状況アップ(南西から)



墳丘残存状況全景(北東から)



北東部墳丘裾埴輪片出土状況(北東から)

写真図版18

芝ヶ端古墳



墳丘裾南部埴輪片出土状況(南から)



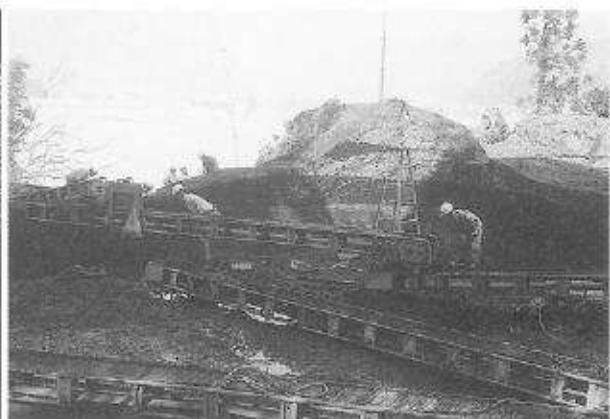
主体部全景(北東から)



主体部埋土土層断面(南東から)



墳丘盛土と主体部の関係土層断面(北から)



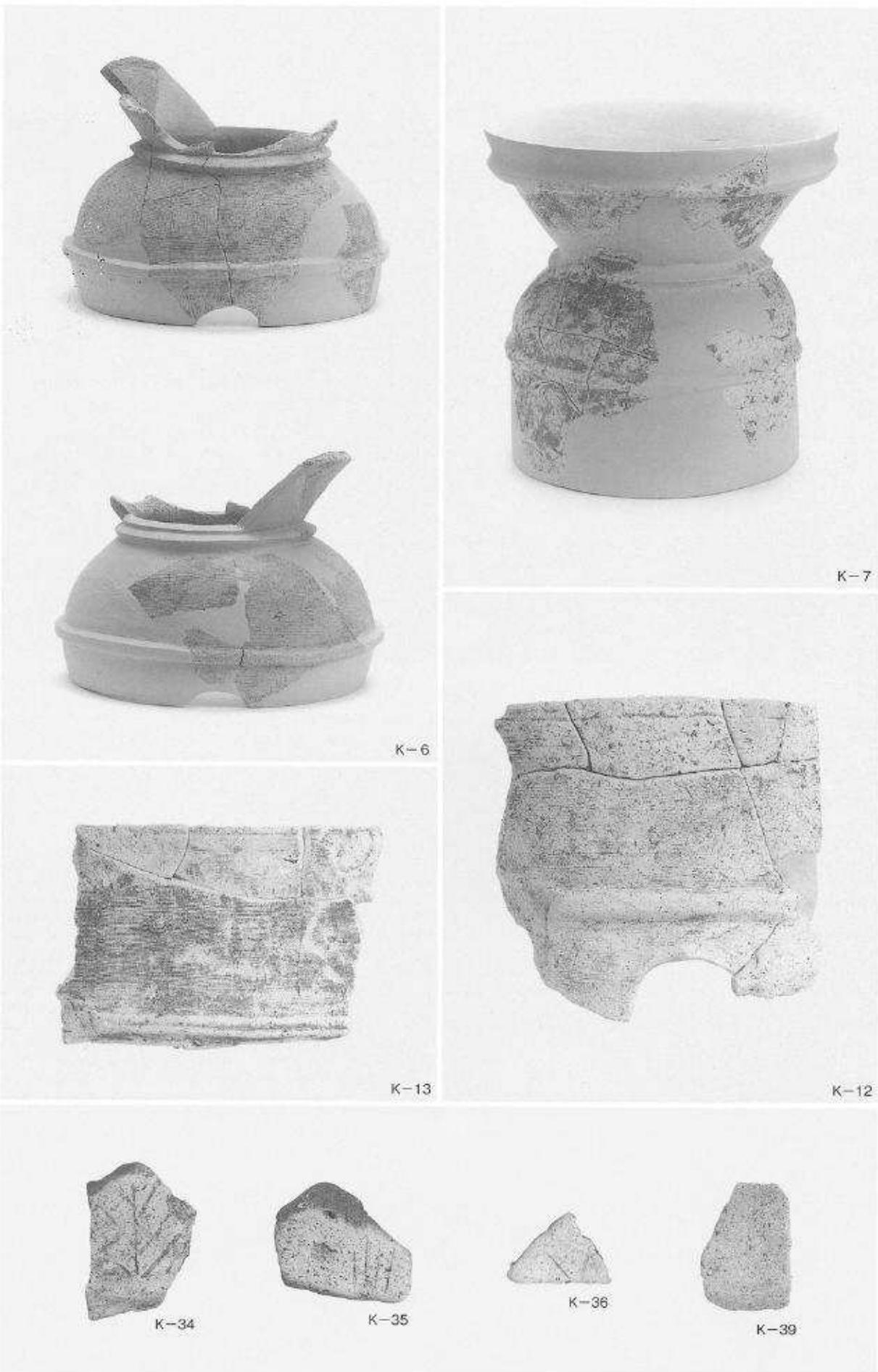
作業風景(南東から)



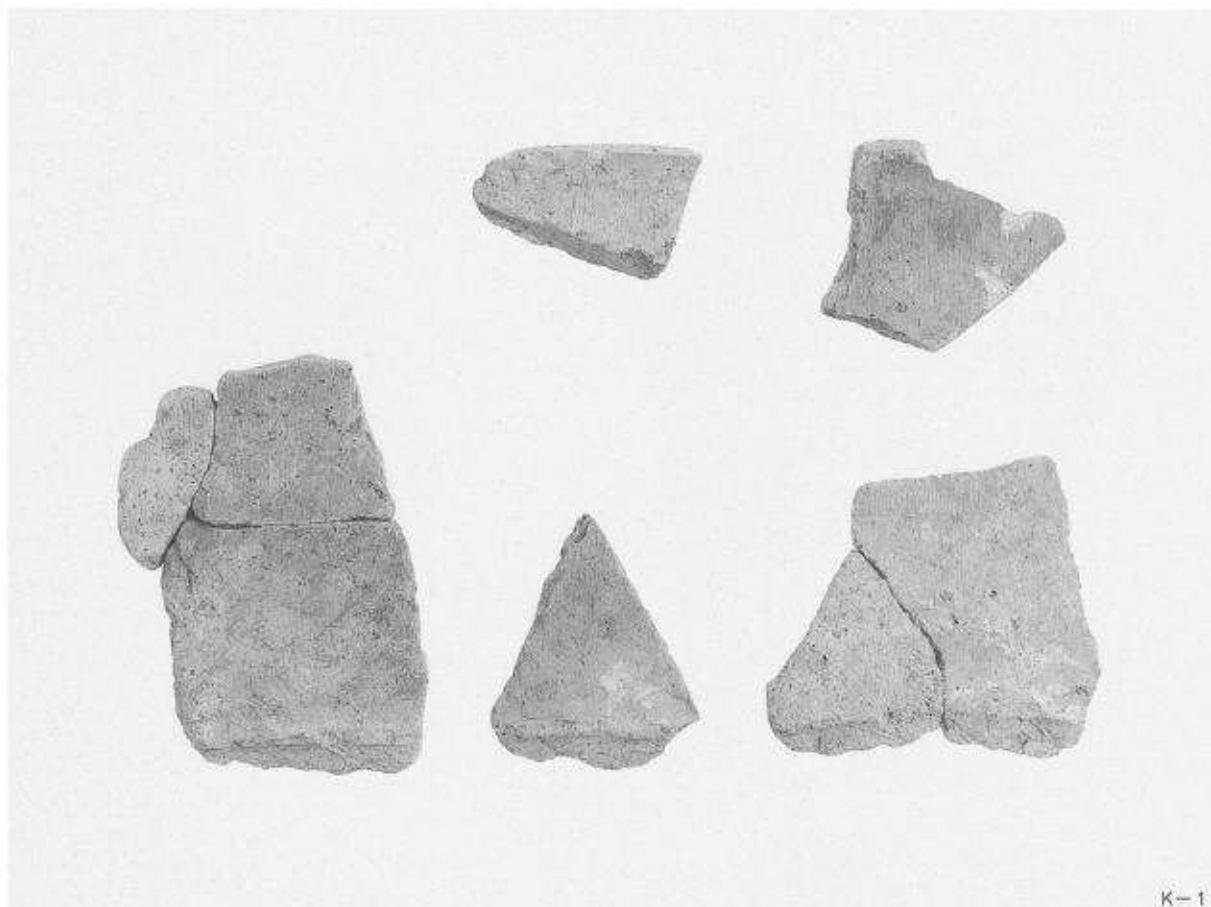
墳丘北西側土層断面(北西から)



墳丘盛土除去後の旧地形(南西から)

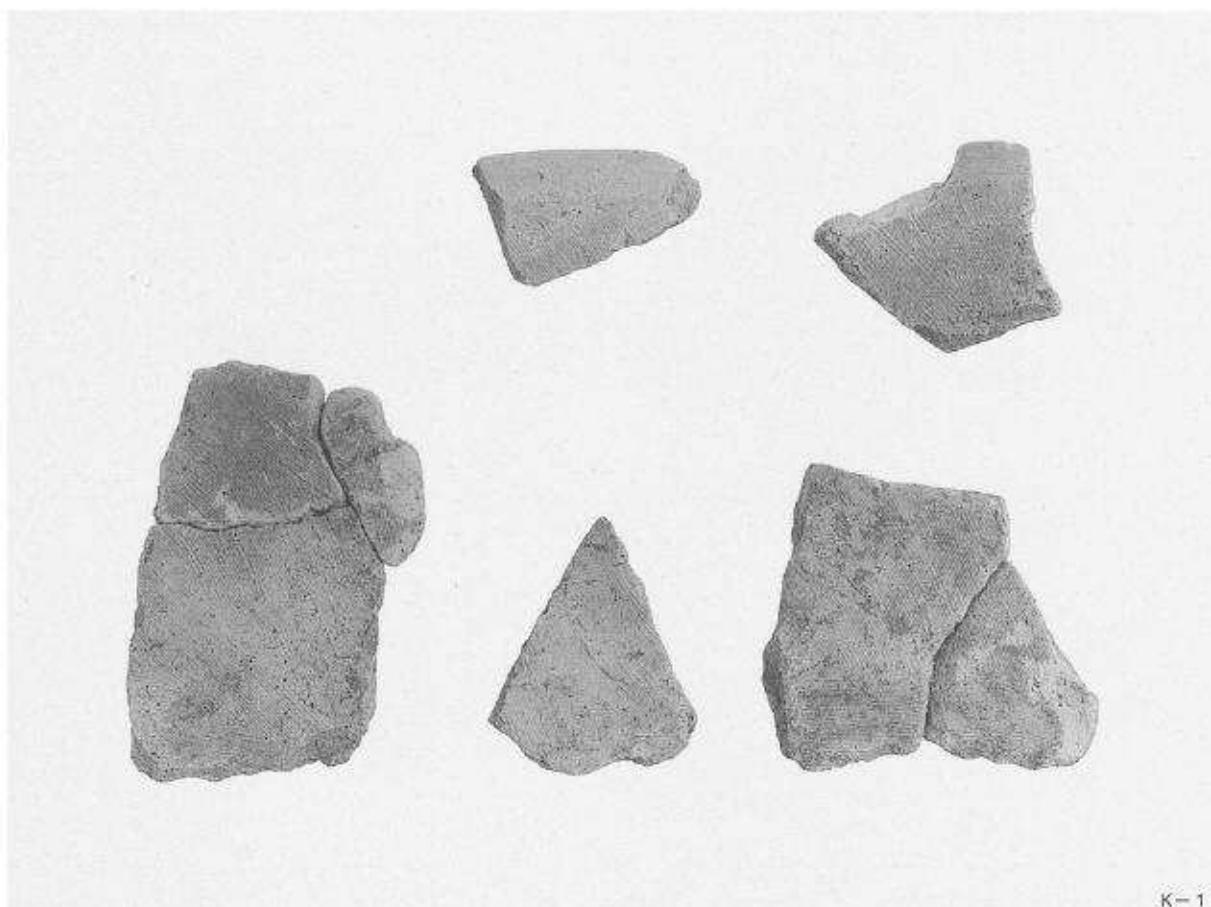


朝顔形埴輪・円筒埴輪・ヘラ描文を有する破片



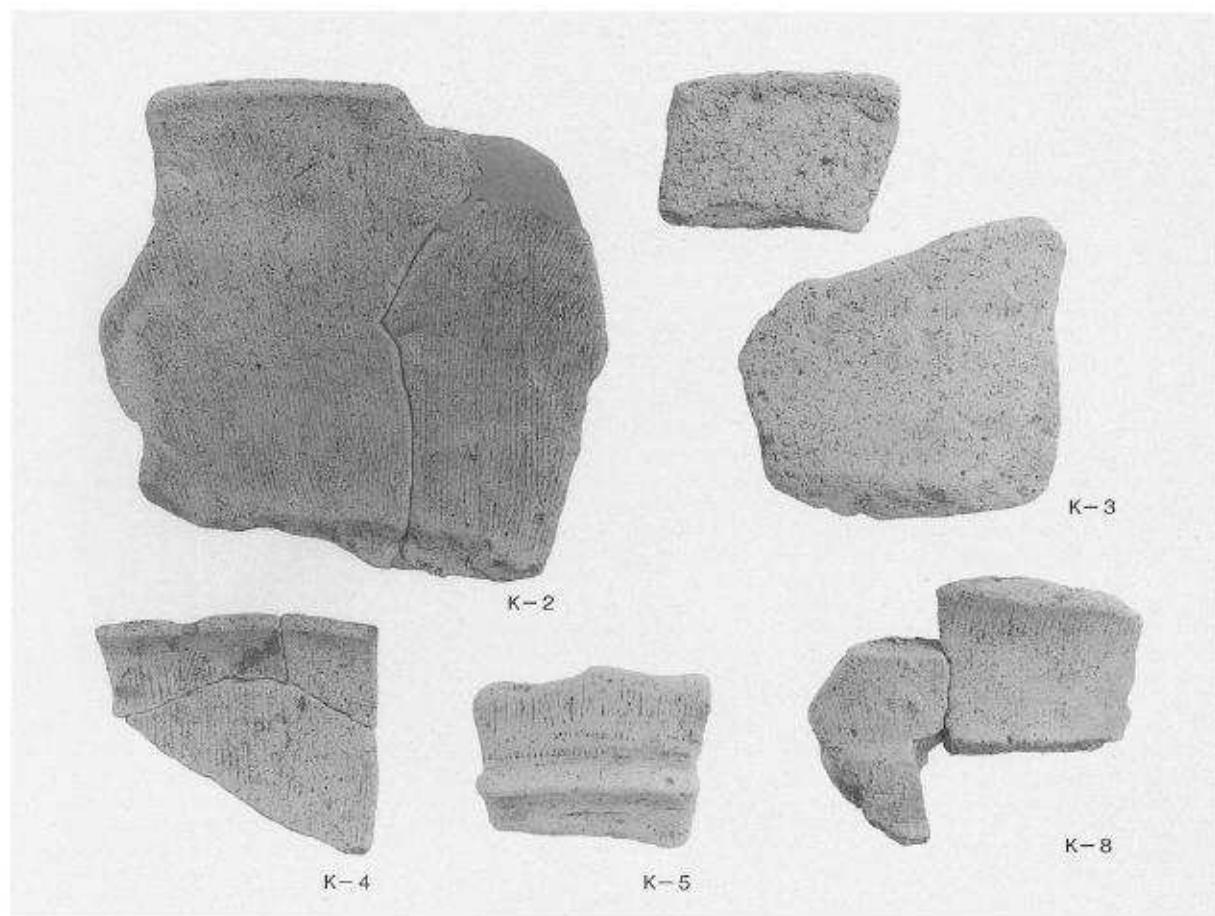
K-1

朝顔形埴輪口縁部①(外面)

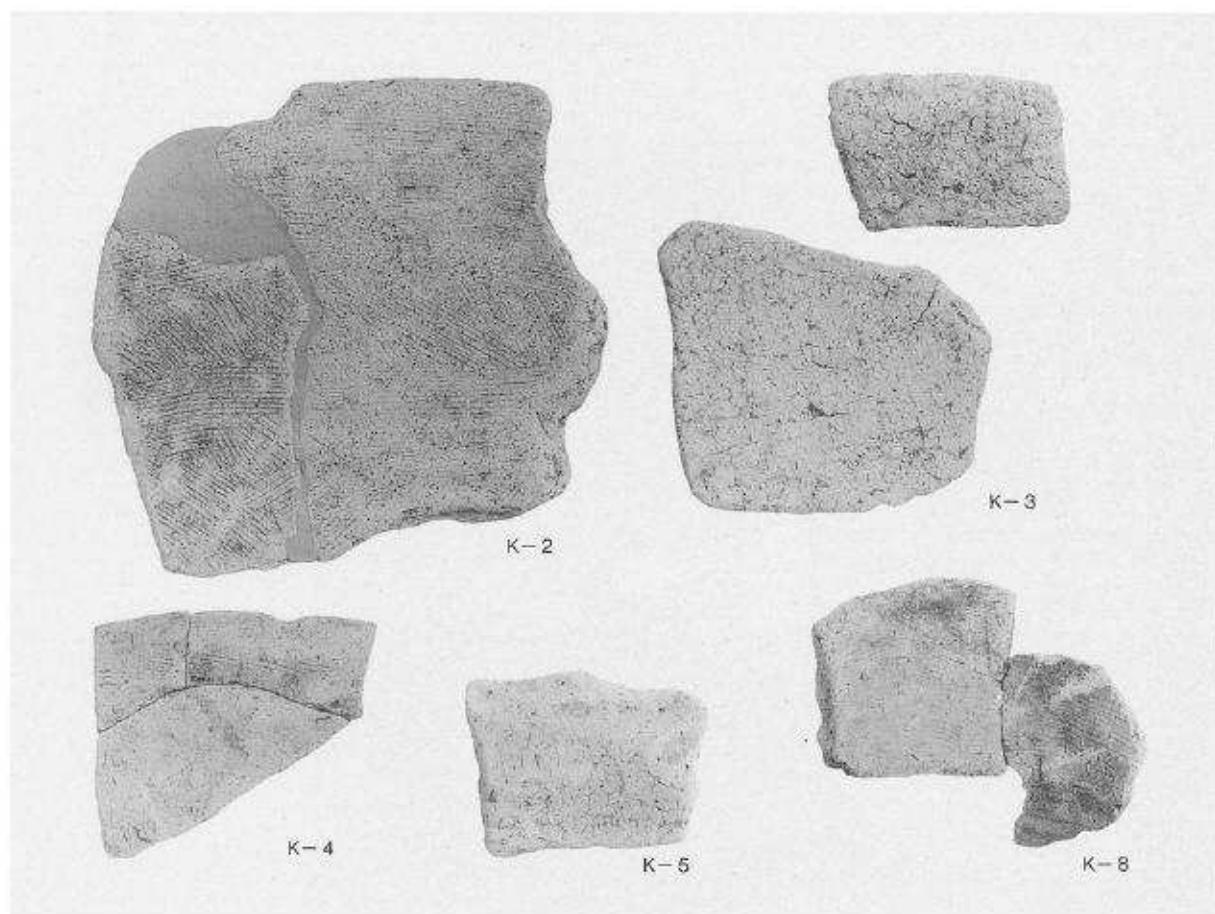


K-1

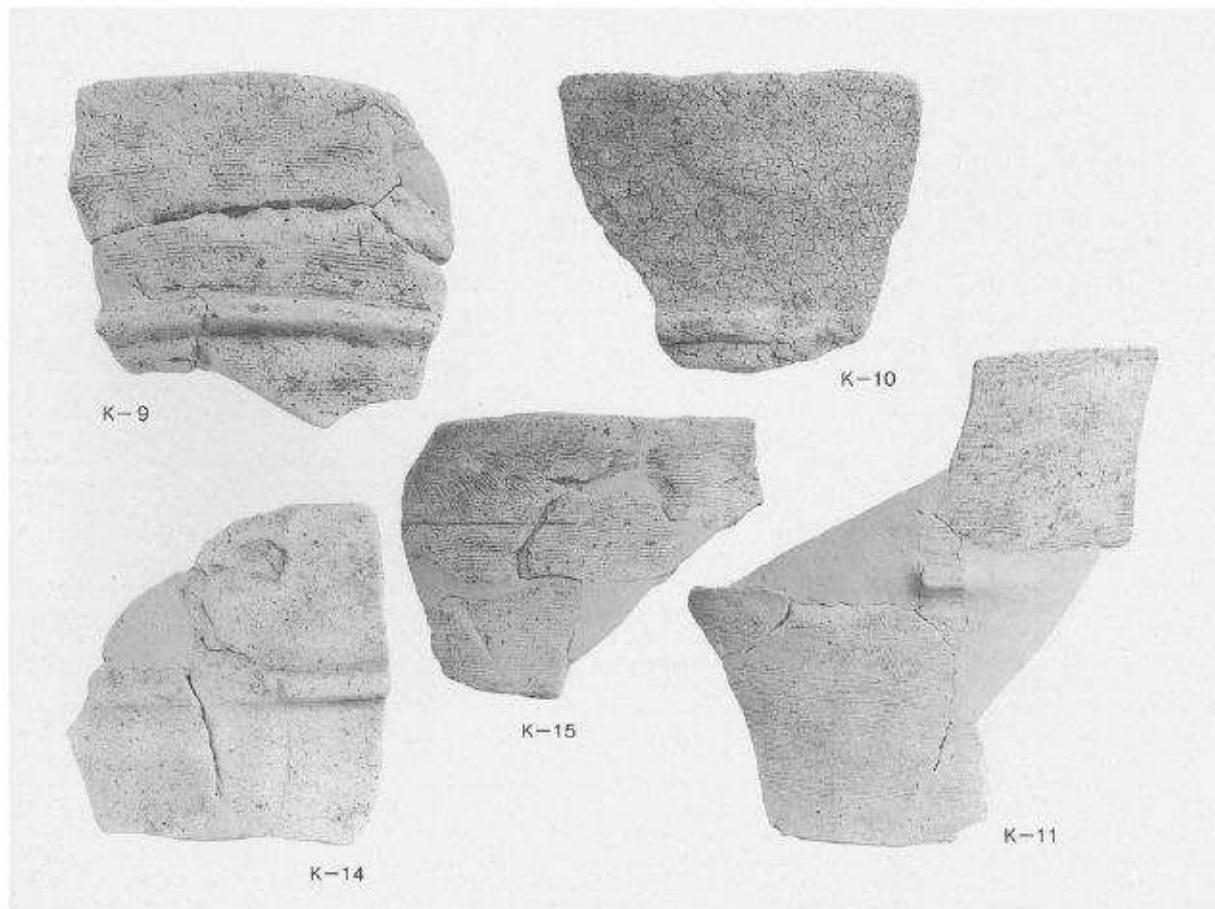
朝顔形埴輪口縁部①(内面)



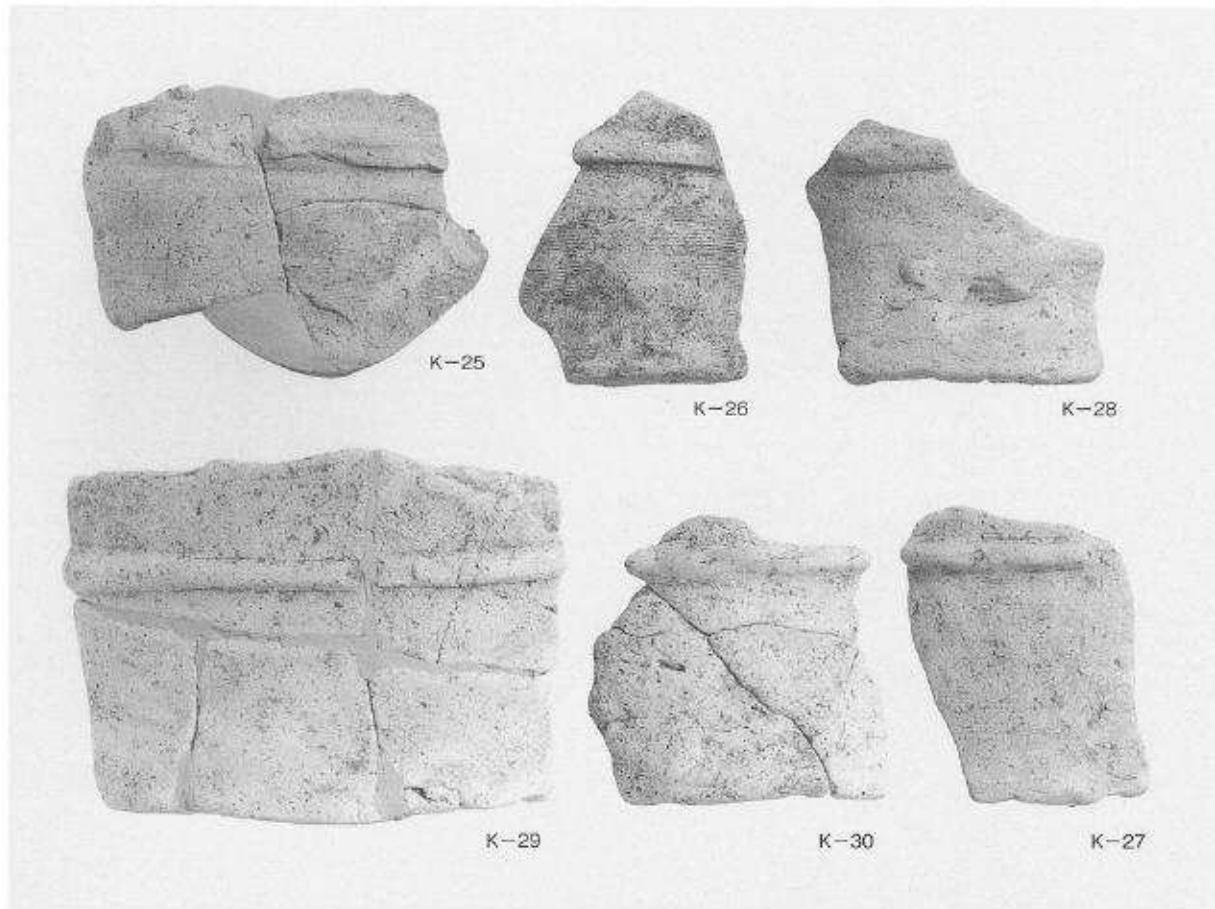
朝顔形埴輪口縁部②(外面)



朝顔形埴輪口縁部②(内面)



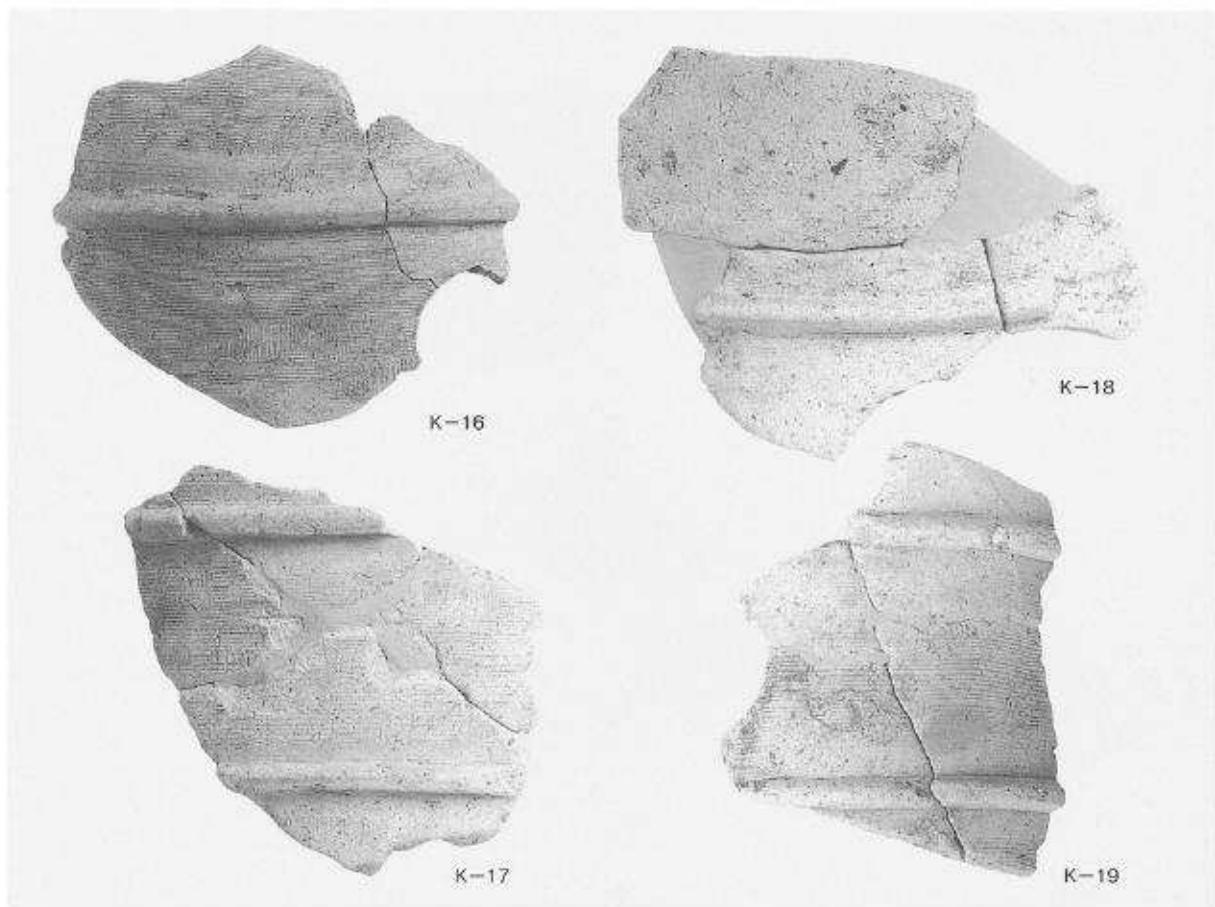
円筒埴輪口縁部③



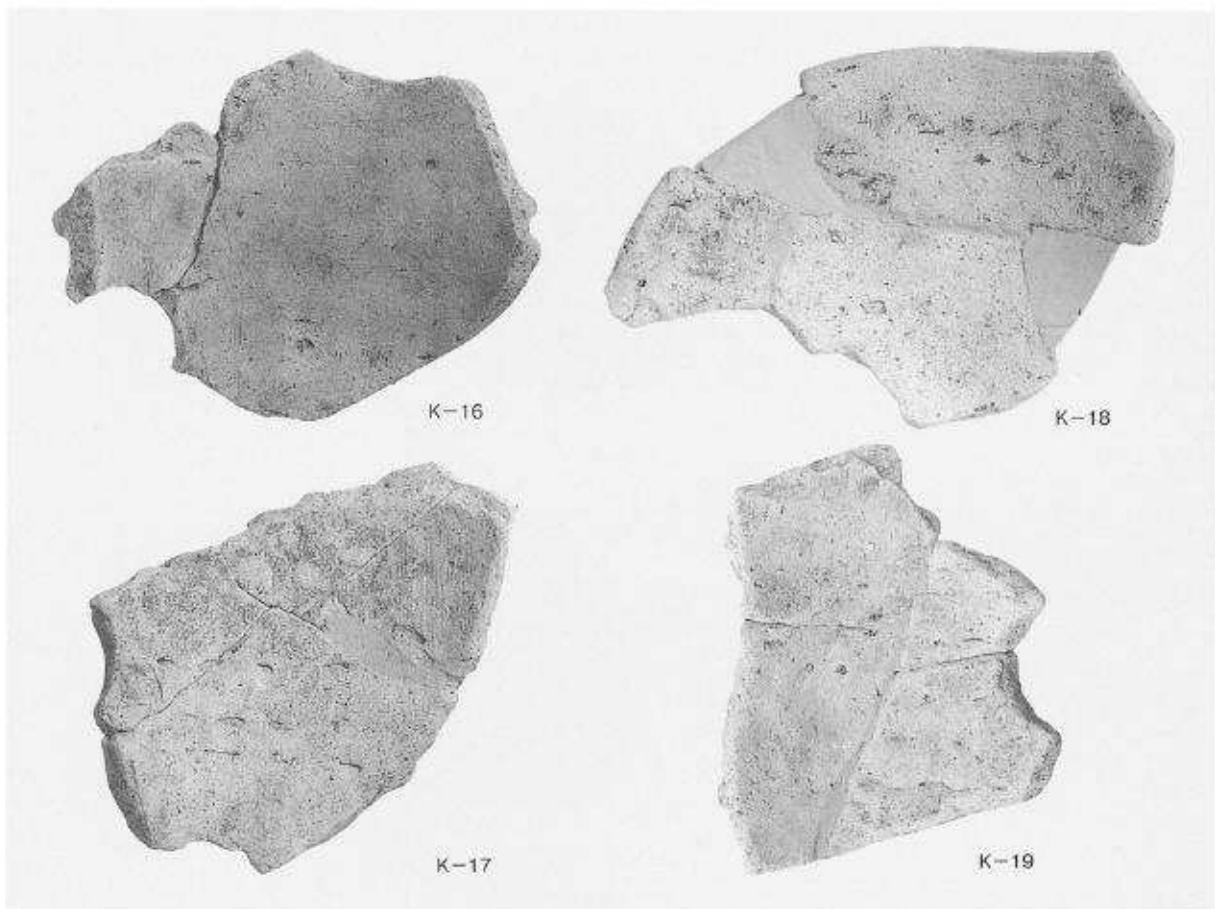
円筒埴輪基底部①

写真図版24

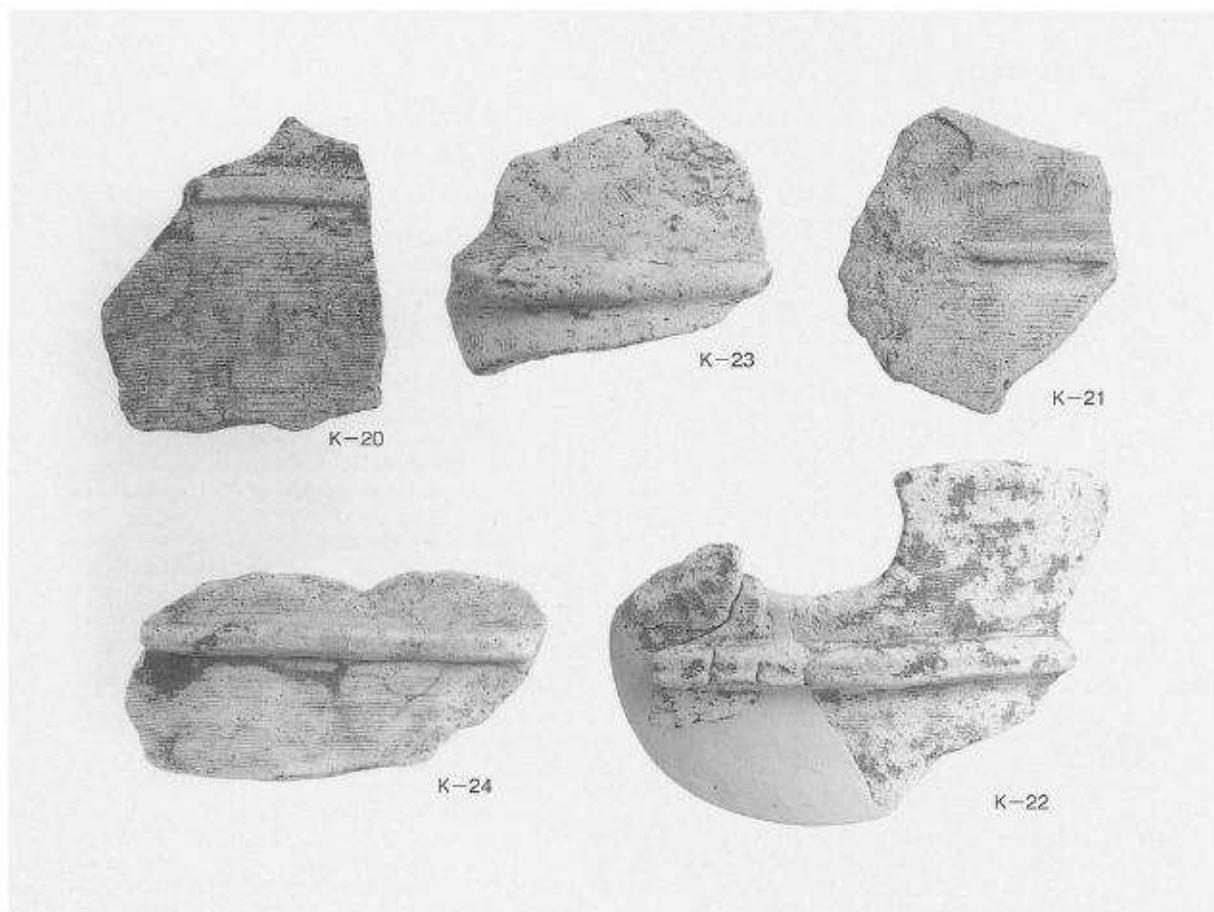
芝ヶ端古墳



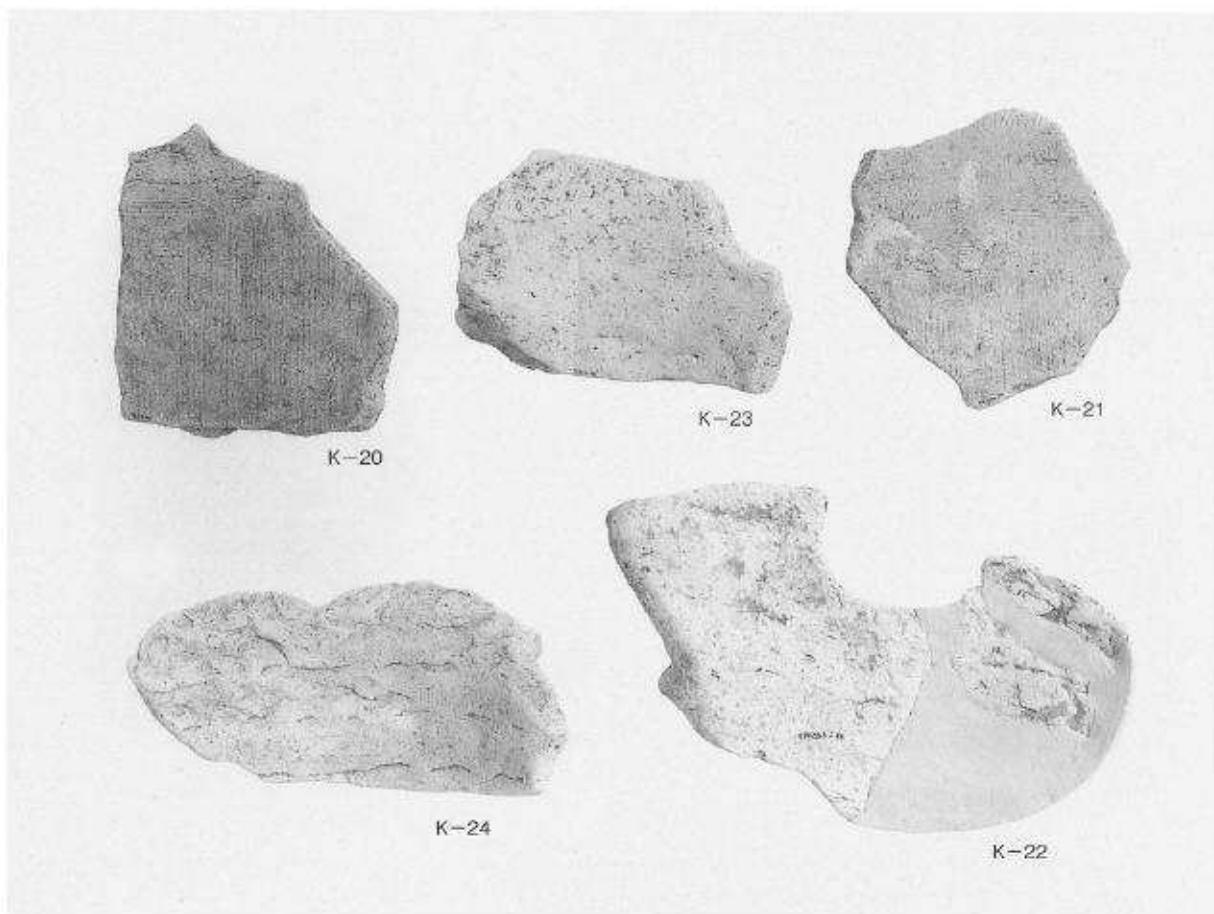
円筒埴輪体部①(外面)



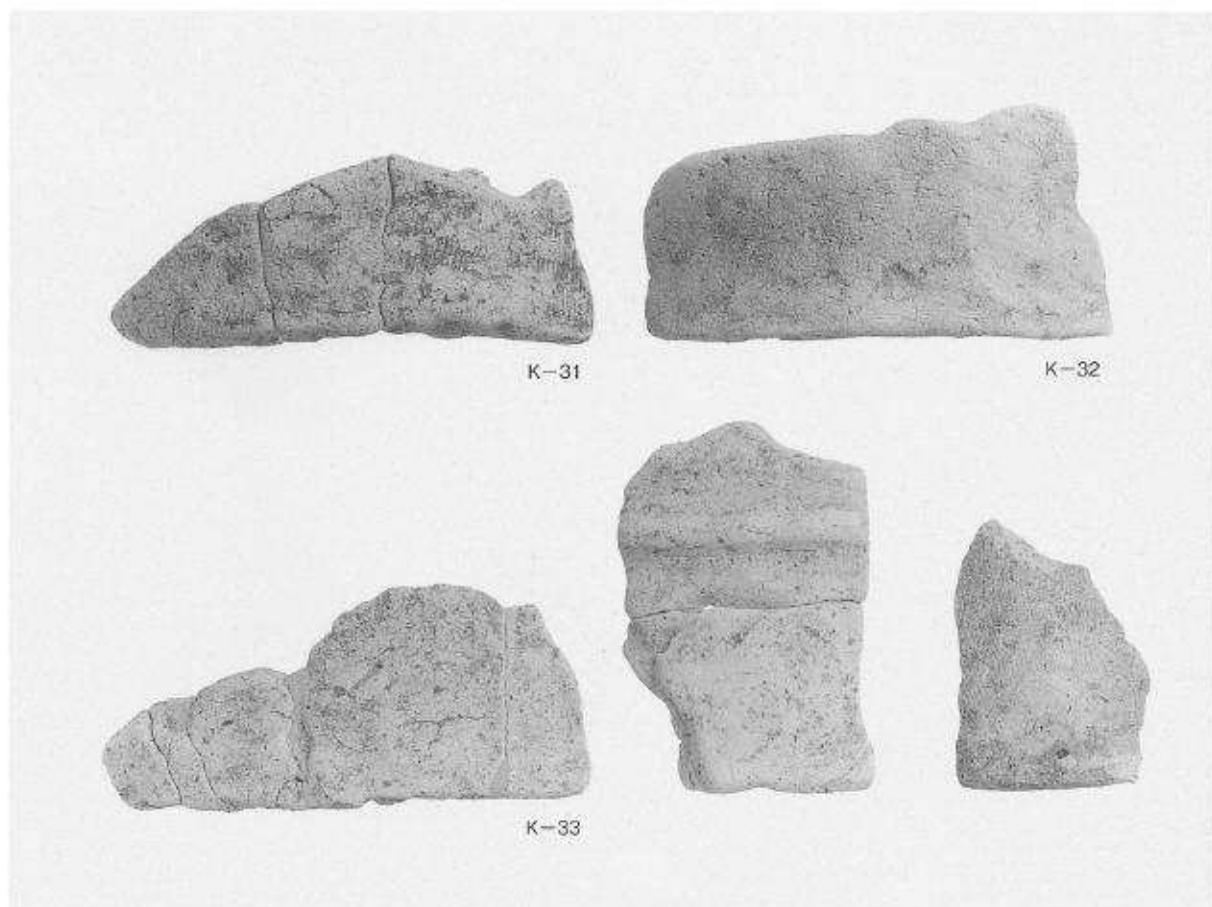
円筒埴輪体部①(内面)



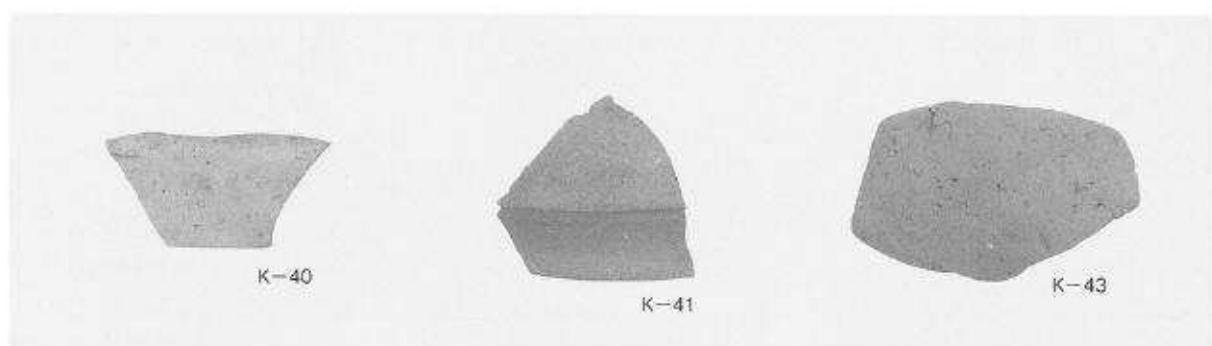
円筒埴輪体部②(外面)



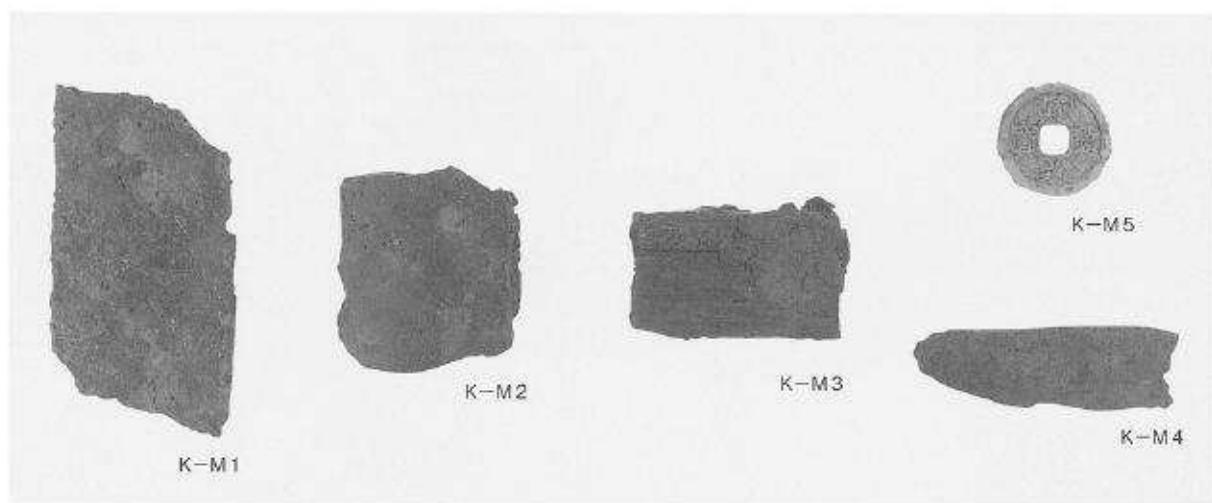
円筒埴輪体部②(内面)



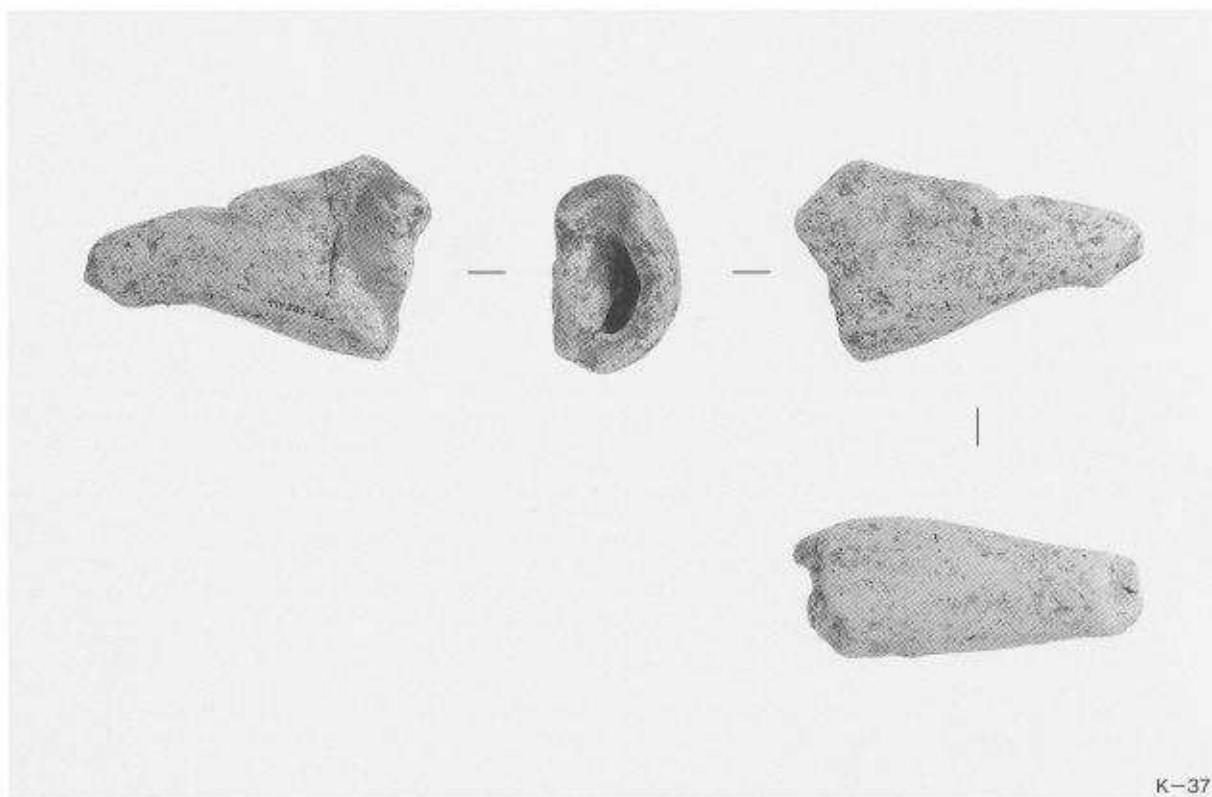
円筒埴輪基底部②



古墳据出土土器

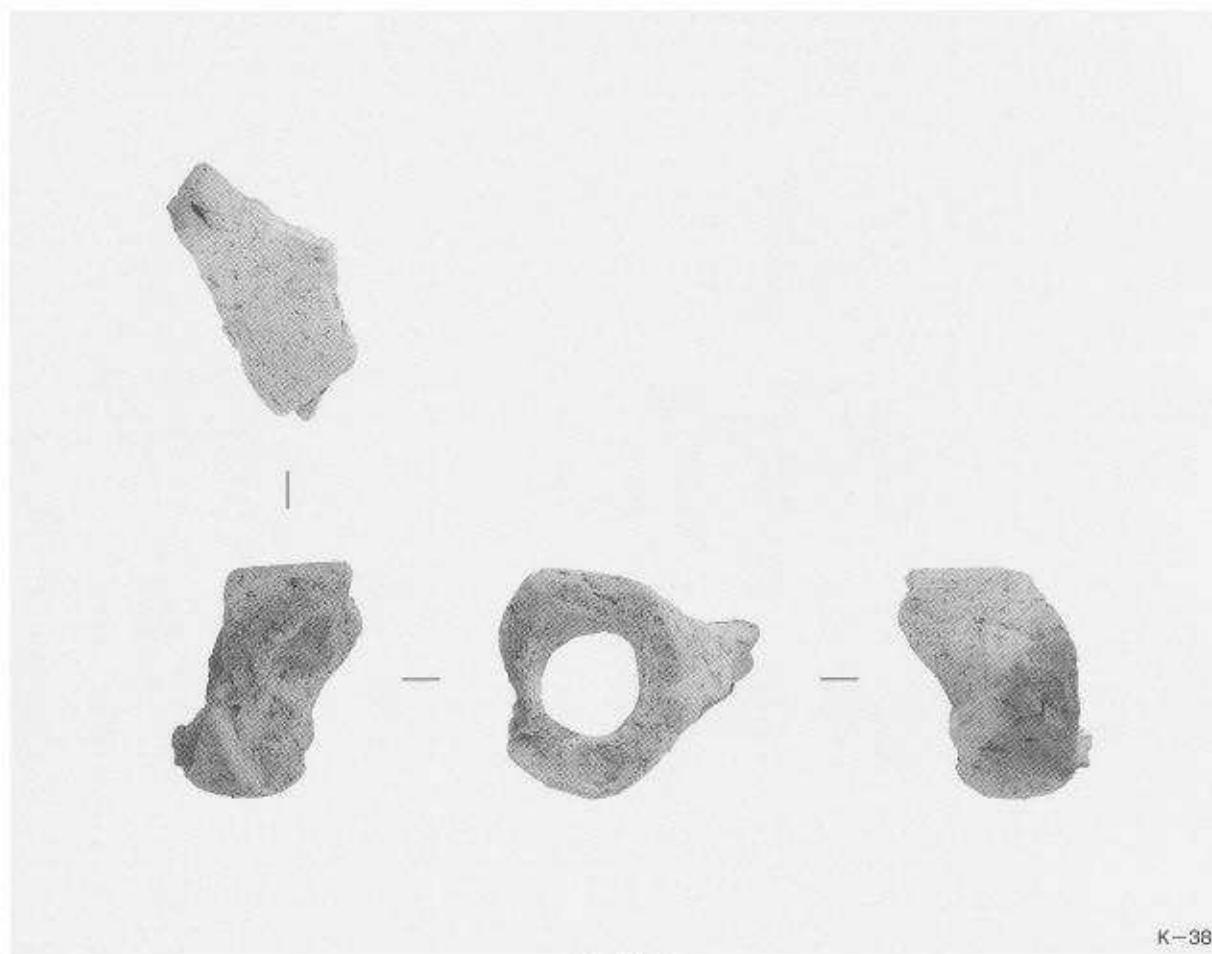


古墳据・表土下出土金属器



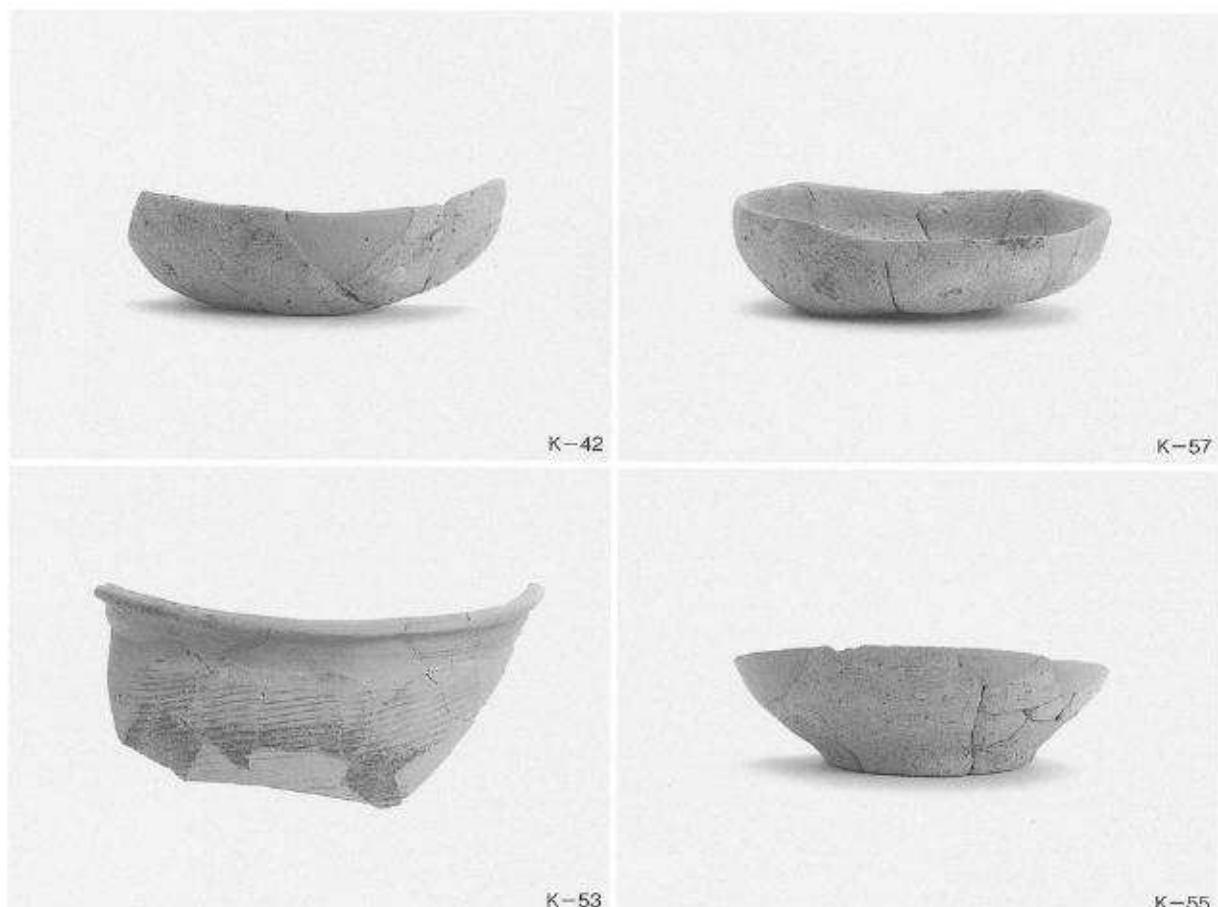
K-37

形象埴輪①

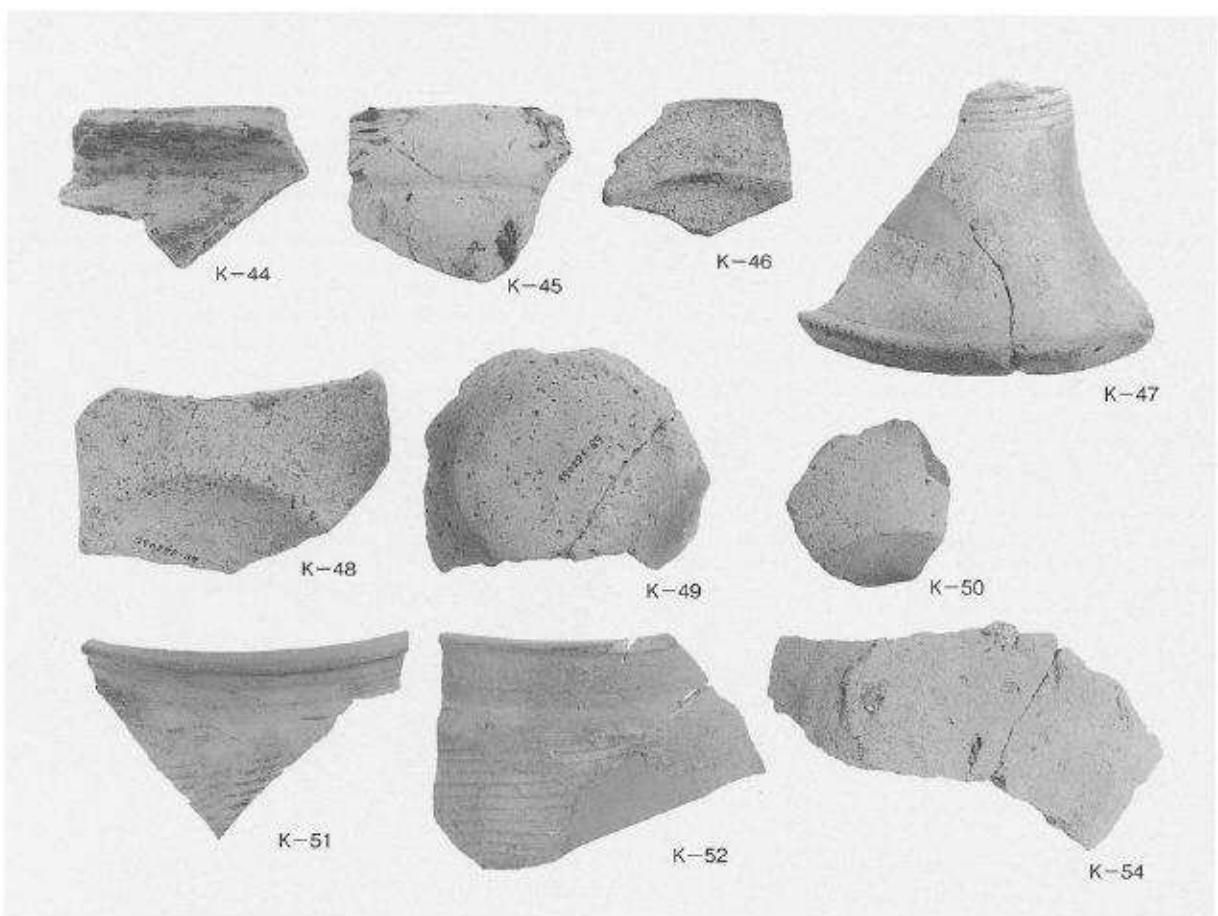


K-38

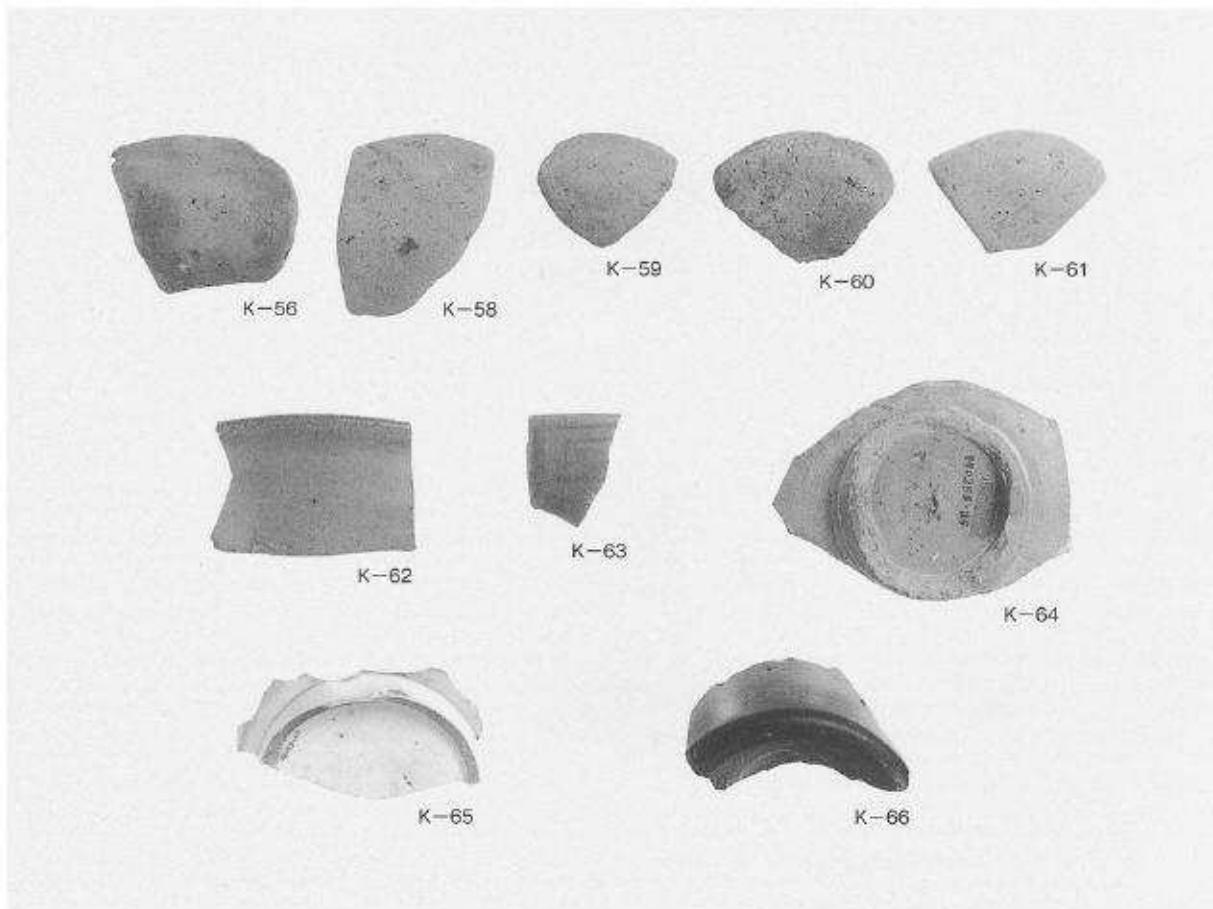
形象埴輪②



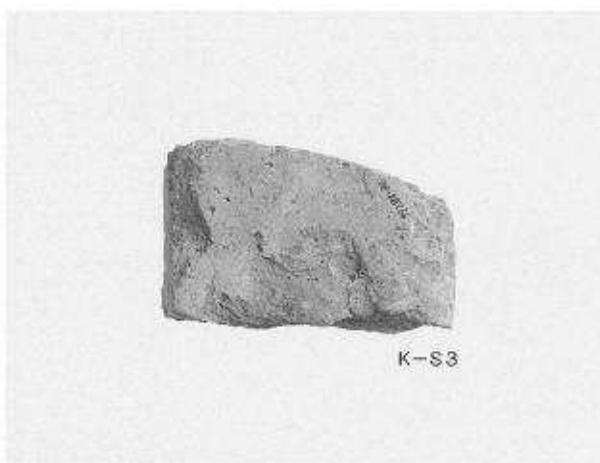
古墳鋸・表土下出土土器



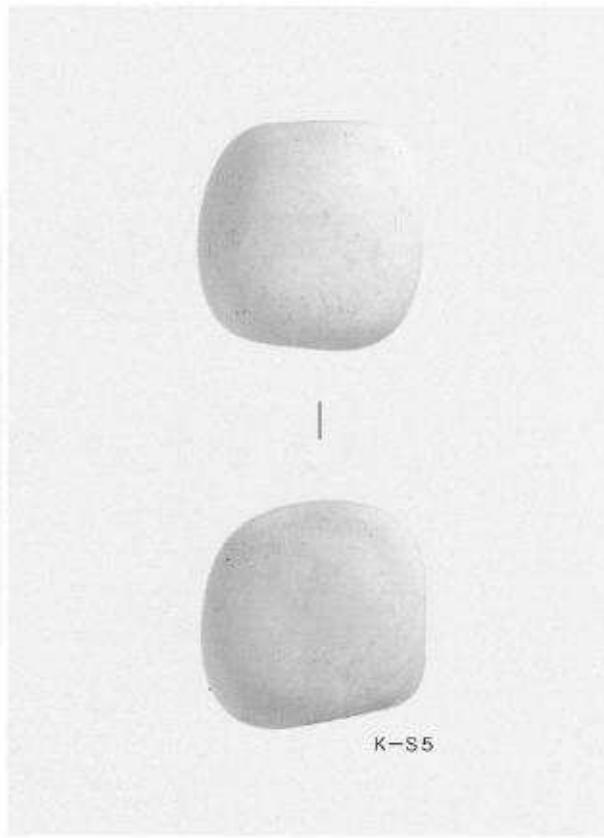
墳丘盛土・表土下出土土器



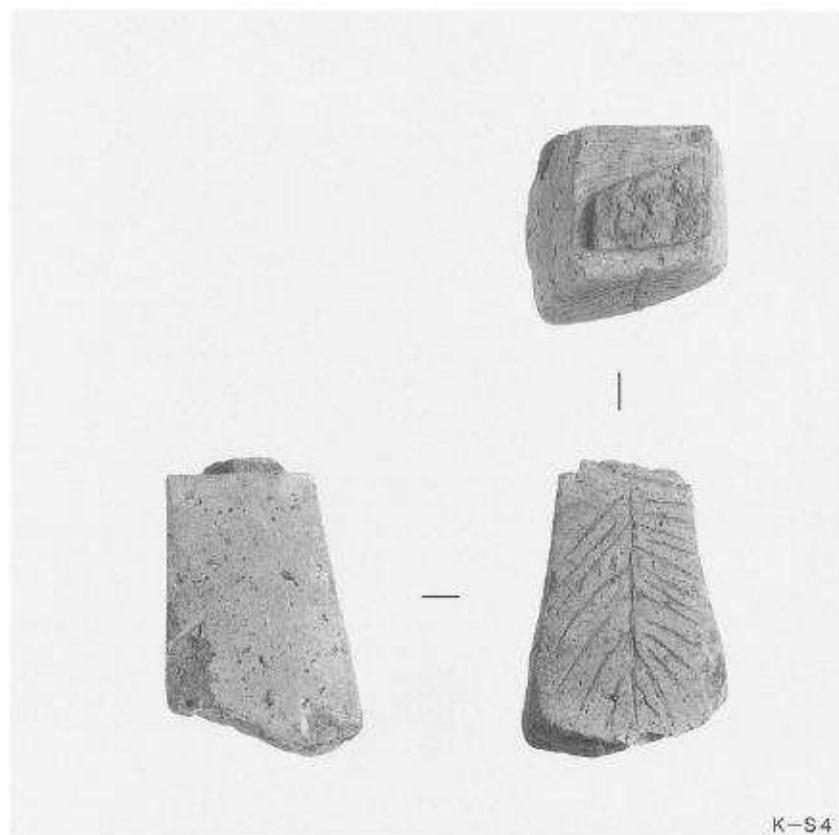
古墳裾・表土下出土遺物



墳丘掘出土砾石

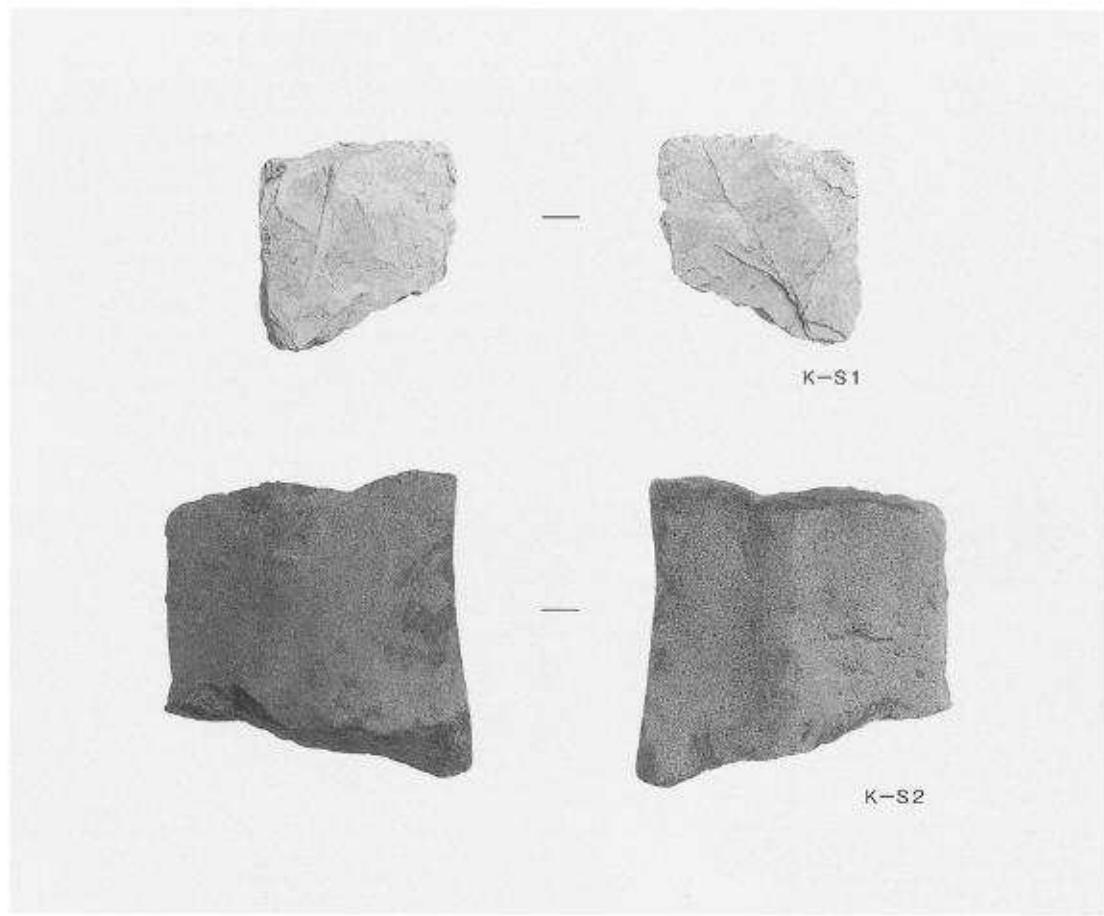


墳頂部表土下出土石英



墳丘裾出土刻線のある砥石

K-S4



墳丘盛土出土剥片・砥石

K-S2

K-S1

芝ヶ端遺跡



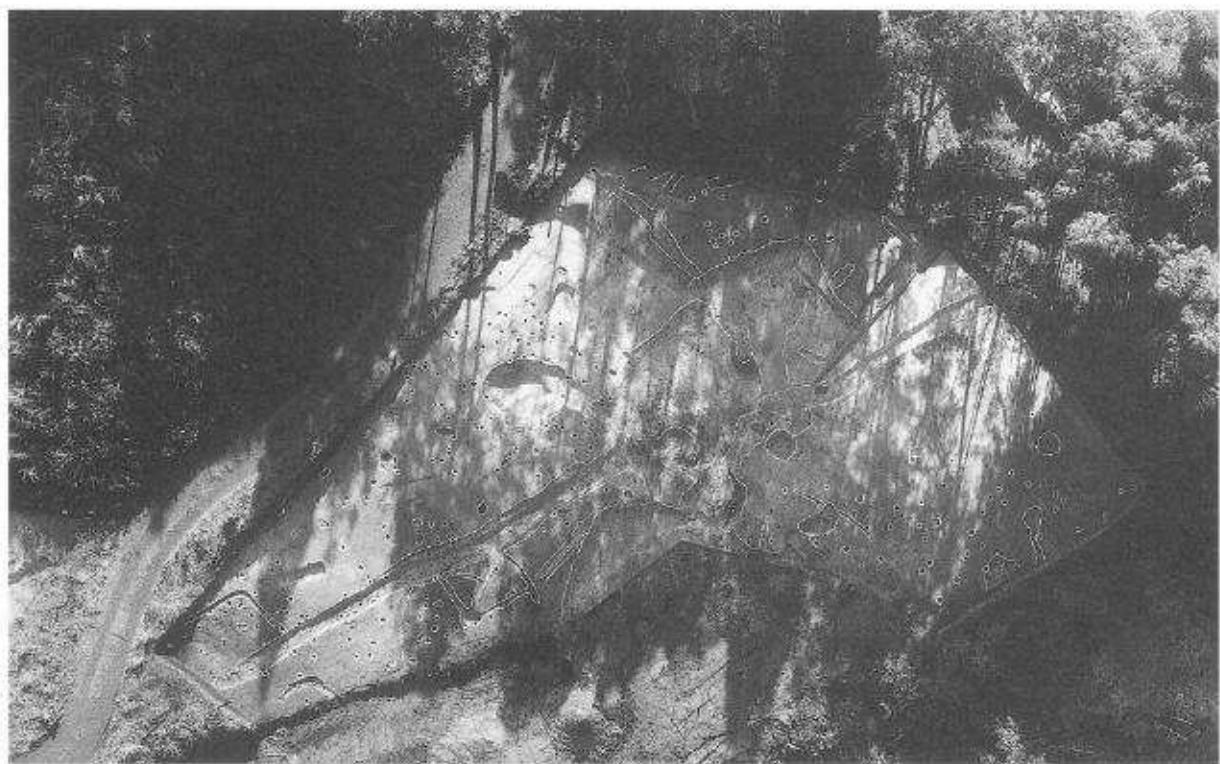
全景(北西上空から)

写真図版32

芝ヶ端遺跡



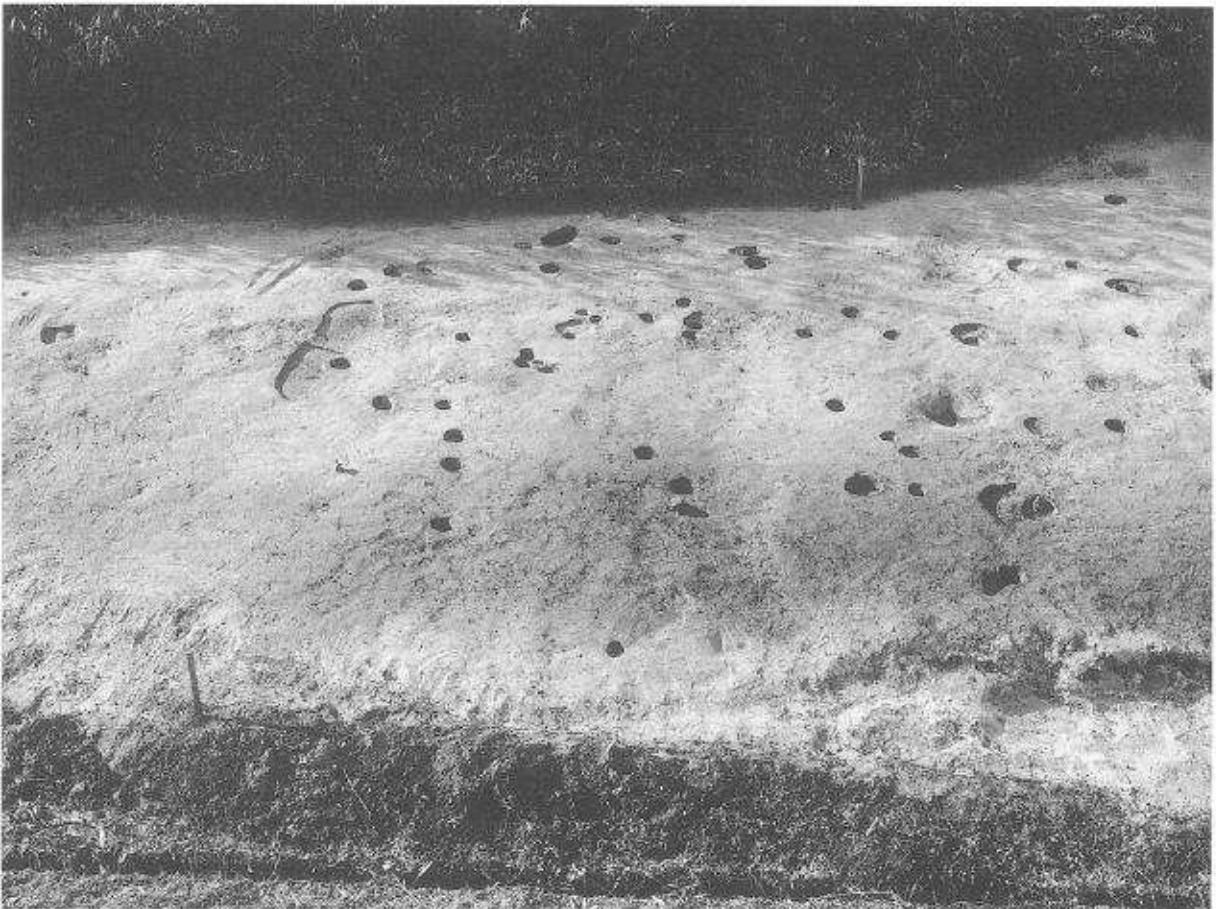
A地区全景(北上空から)



B地区全景(北西上空から)



A地区(西から)



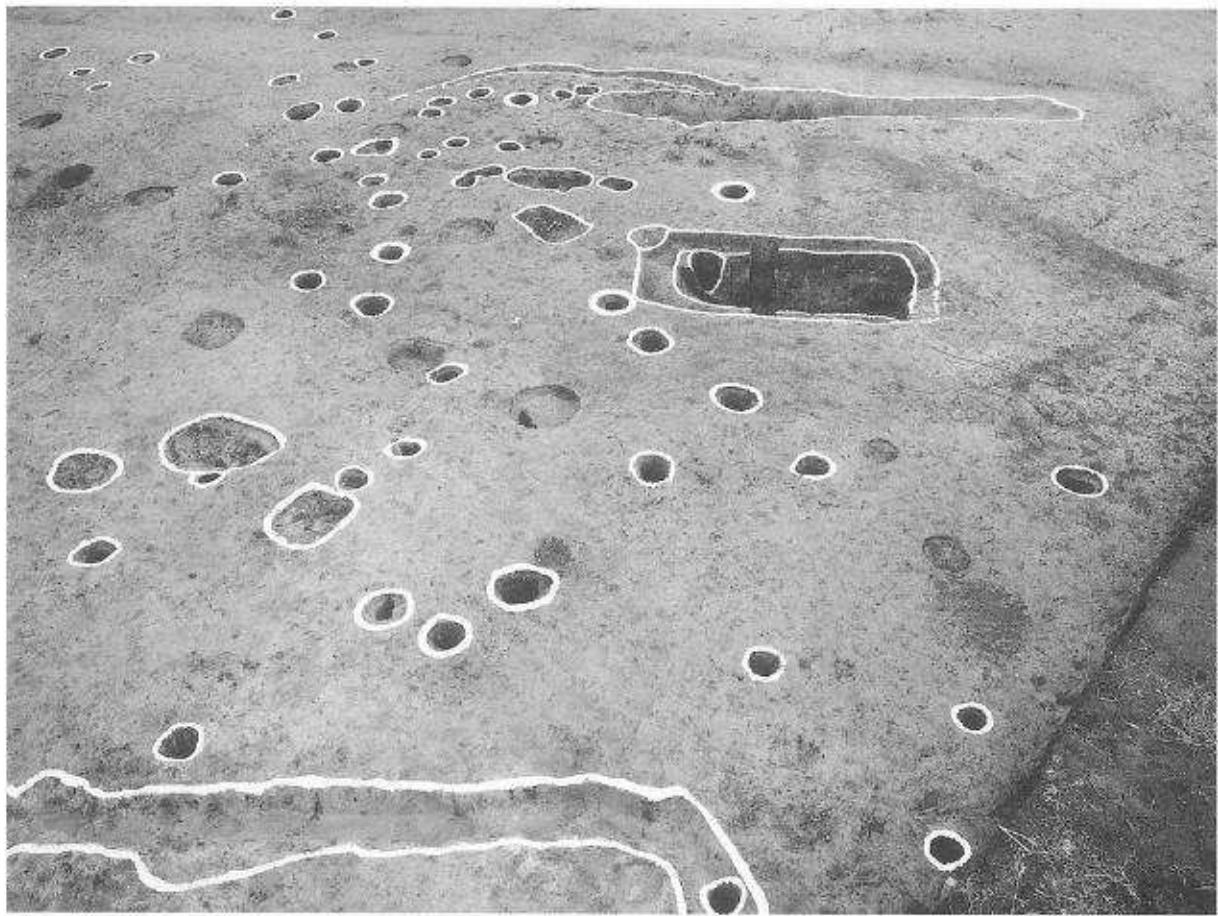
A地区東半(北東から)

写真図版34

芝ヶ端遺跡



SX-A 1 · SD-A 1 (北から)



SH-A 1 (北から)



S X - A 1 埋土土層断面(東から)



S D - A 1 埋土土層断面(東から)



S X-A 1 全景(北から)



S X-A 1 墓壙(北から)



A地区調査前遠景(東から)



B地区調査前全景(東から)



B地区調査前全景(西から)



A地区機械掘削状況(西から)



B地区人力掘削状況(南から)



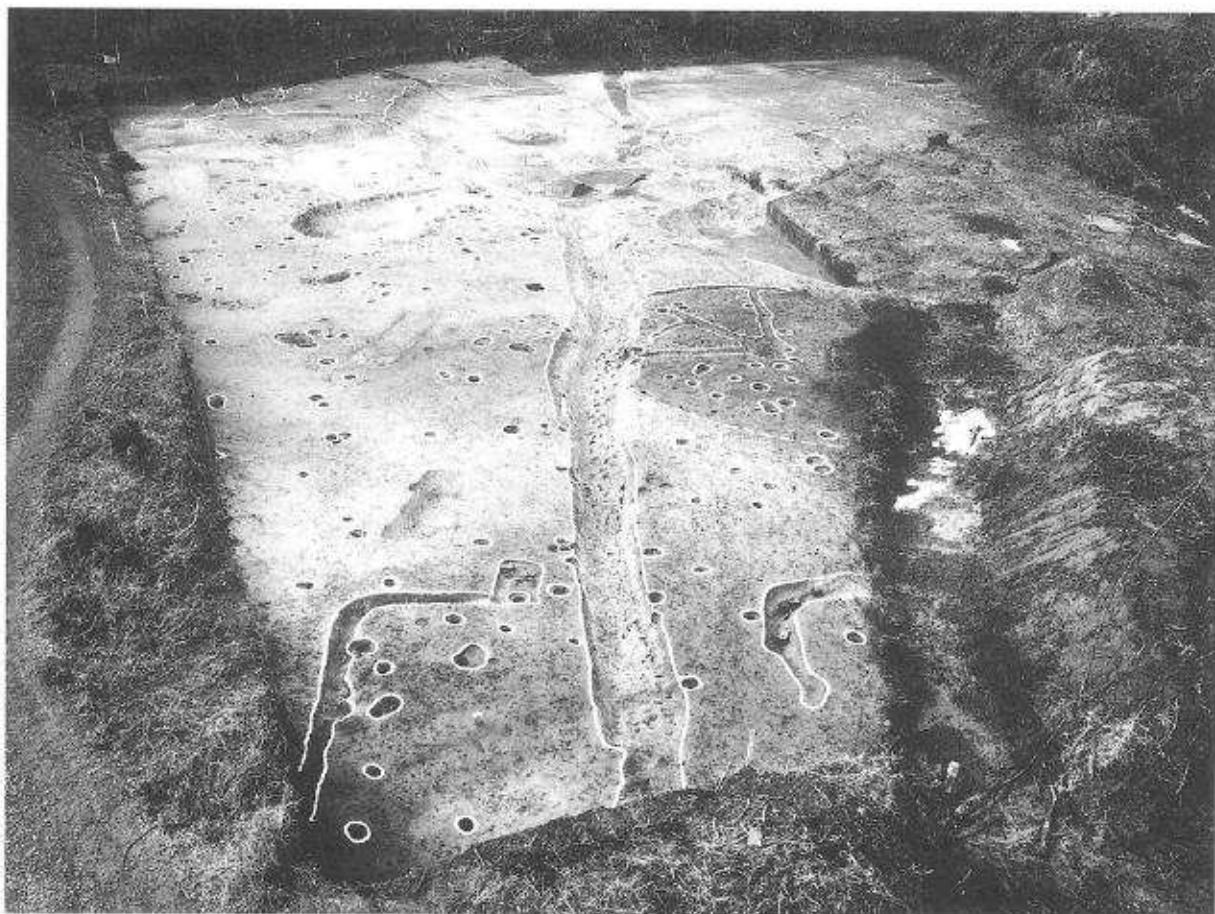
SK-A2 (SH-A1 中央土壤)(西から)



SH-A2 埋土土層断面(北西から)



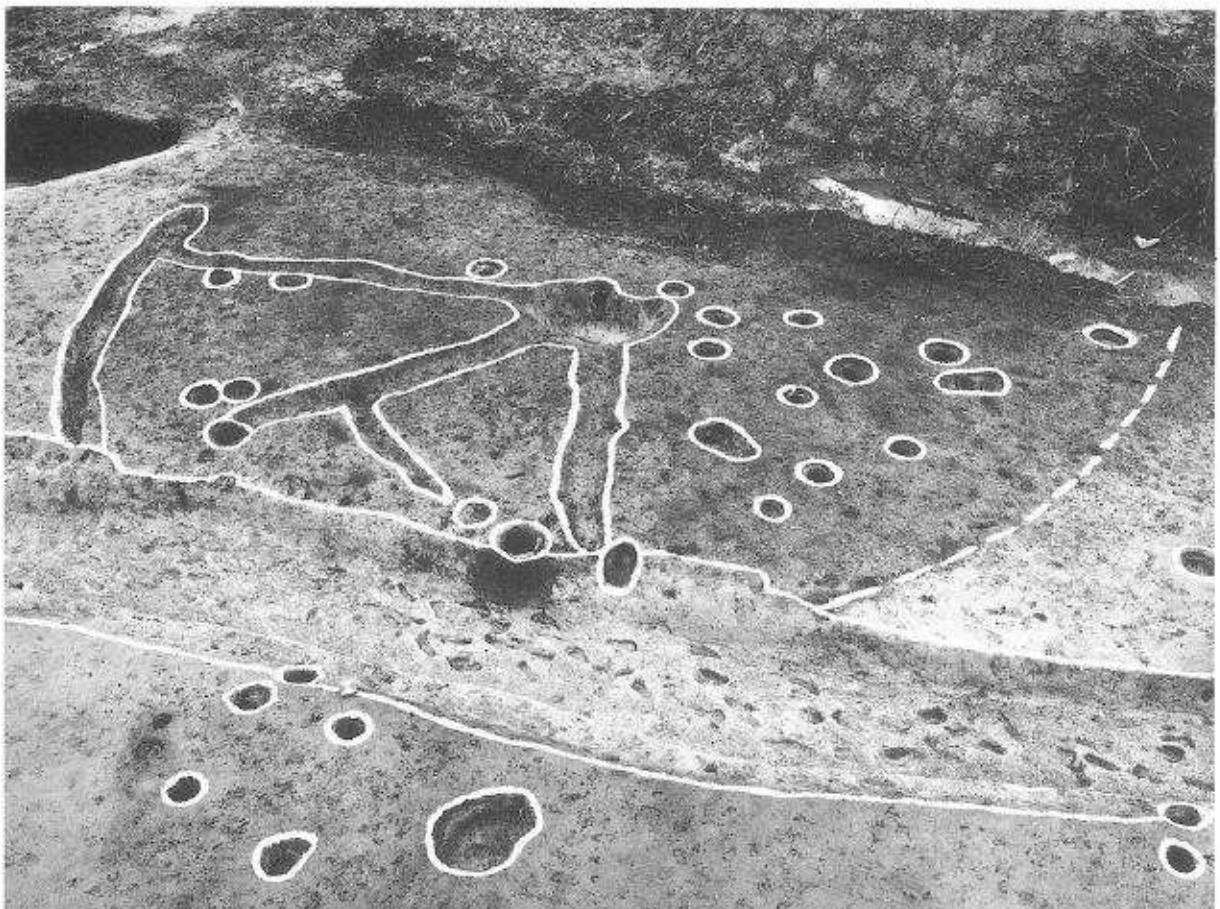
AH-A3 (北東から)



B地区北東部(北東から)



B地区南部(西から)



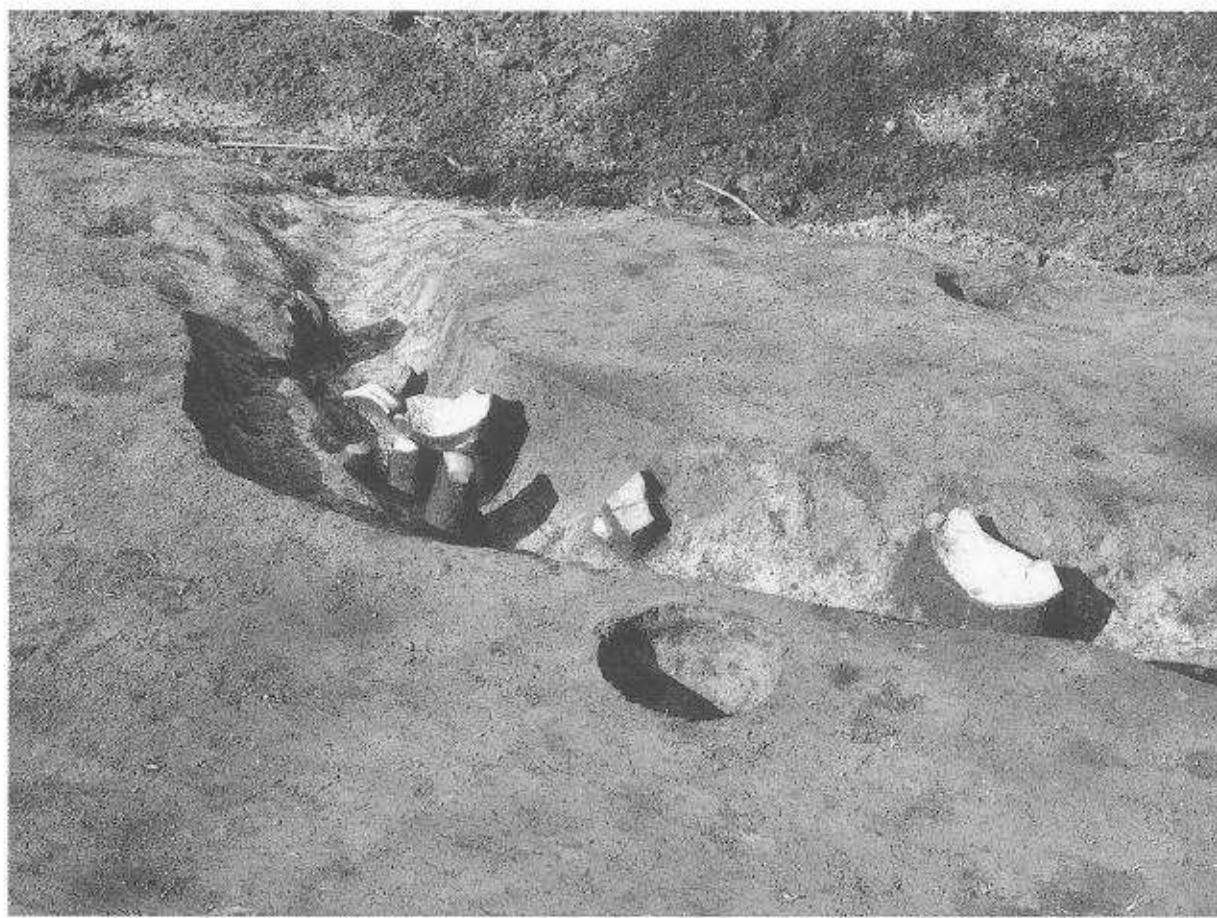
SH-B 1 (東から)



SD-B 7・B 8 および SK-B 10(南から)

写真図版40

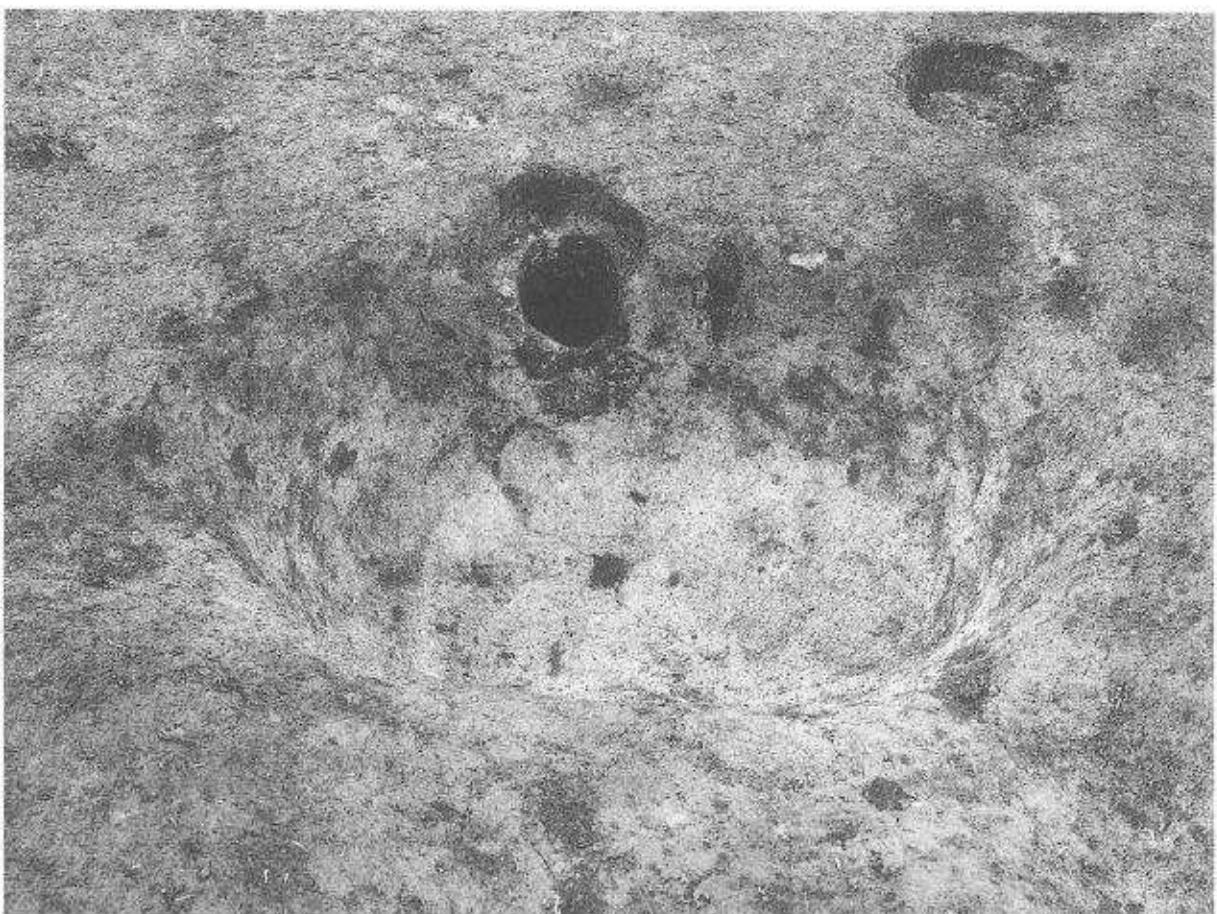
芝ヶ端遺跡



SD-B7土器出土状況(南東から)



SD-B7土器出土状況(南から)



S H - B 1 中央土壙(南東から)



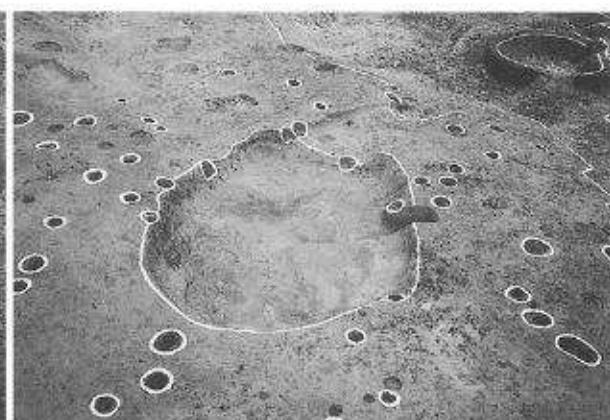
S K - B 01 埋土土層断面(北東から)

写真図版42

芝ヶ端遺跡



SH-B1 中央土壌埋土層断面(南西から)



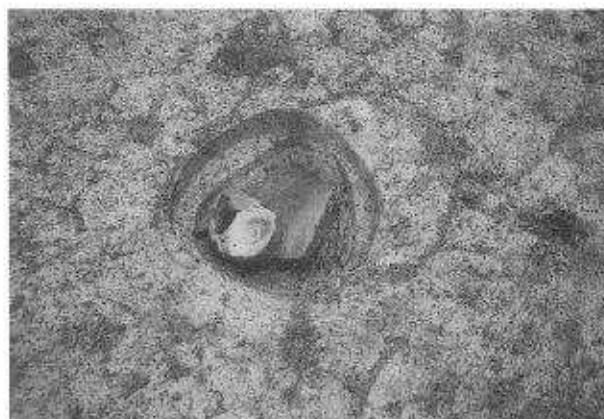
SK-B01全景(北東から)



SK-B06土器出土状況(東から)



SB-B1内SP-B03土器出土状況(北から)



SB-B1内SP-B02土器出土状況(北東から)



SB-B1および周辺の遺構(西から)



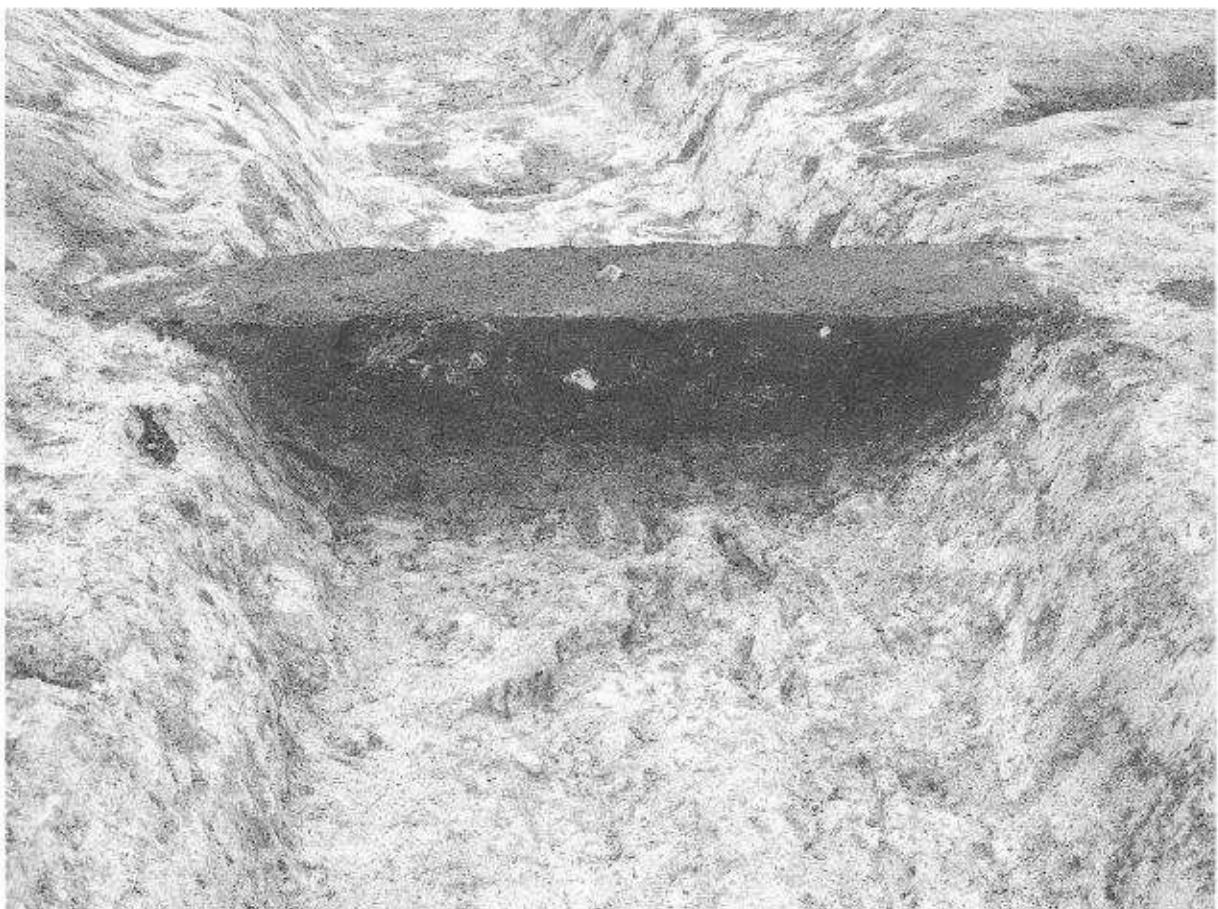
SK-B01須恵器出土状況(南西から)



SE-B1 埋土土層断面(北から)



谷部・SD-B1 連結部埋土土層断面(北から)bb



SD-B1 埋土土層断面(北東から)aa

写真図版44
芝ヶ端遺跡



SX-B 1 (北東から)



SX-B 1 (南西から)



SK-B02 埋土土層断面(北から)



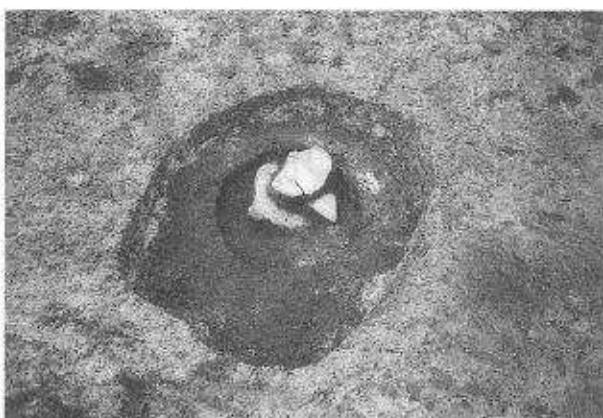
SK-B03 埋土土層断面(北東から)



SK-B04 埋土土層断面(北西から)



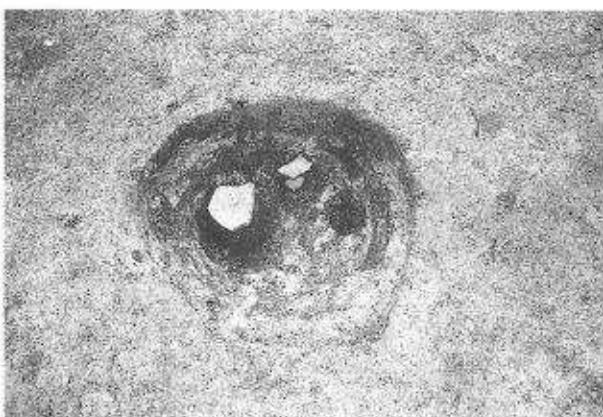
SK-B05 墓輪出土状況(西から)



SP-B13 土器出土状況(南東から)



SP-B21 土器出土状況(北から)



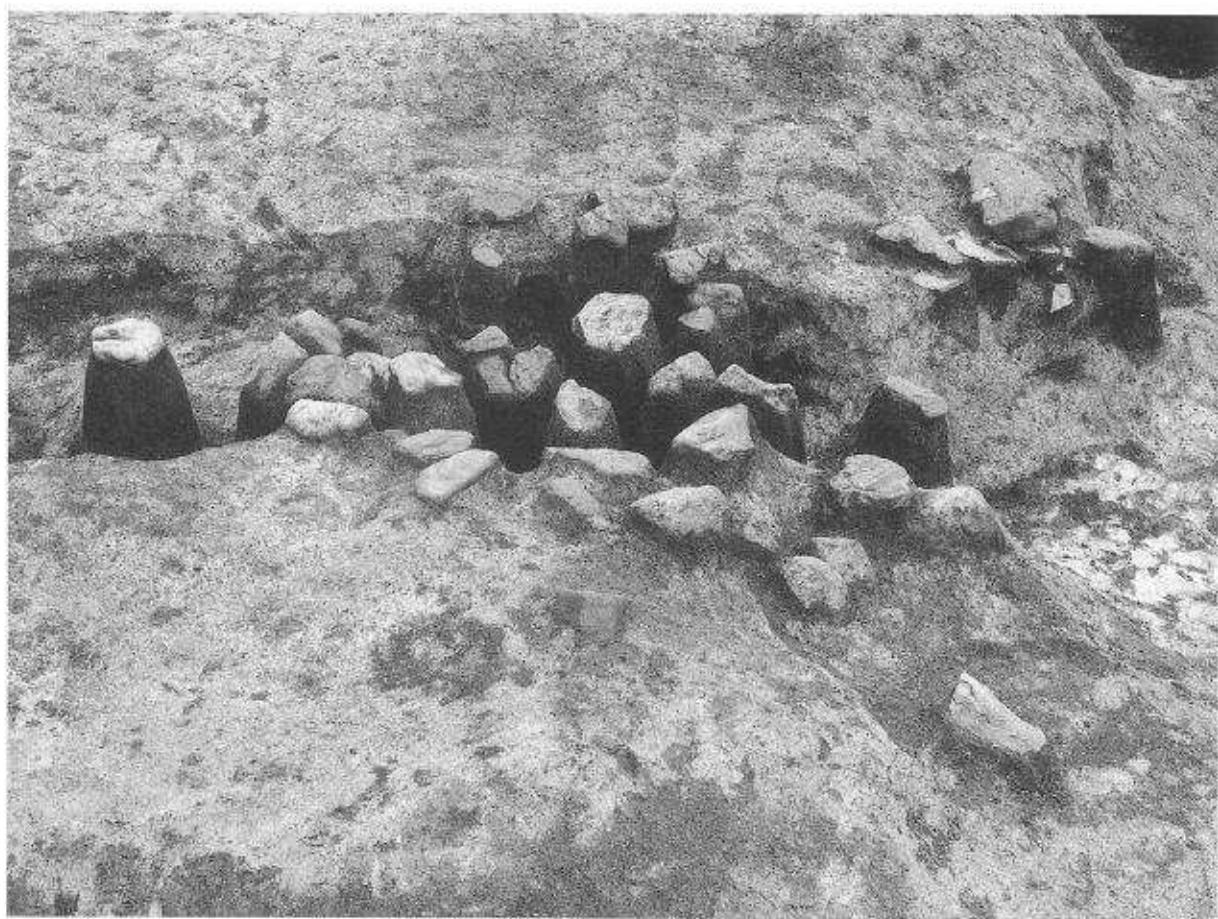
SP-B21 下部土器出土状況(北から)



SP-B22 土器出土状況(北から)

写真図版46

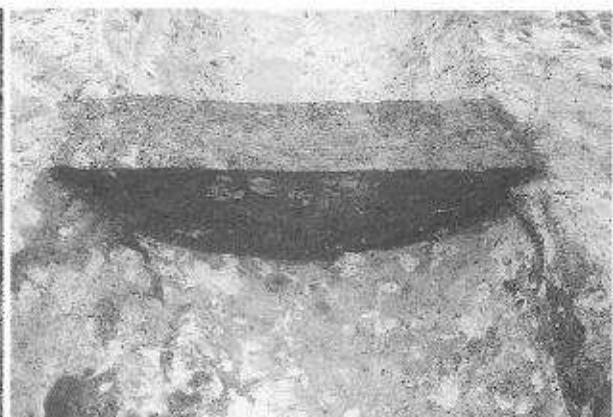
芝ヶ端遺跡



SD-B 3 磚・埴輪検出状況(東から)



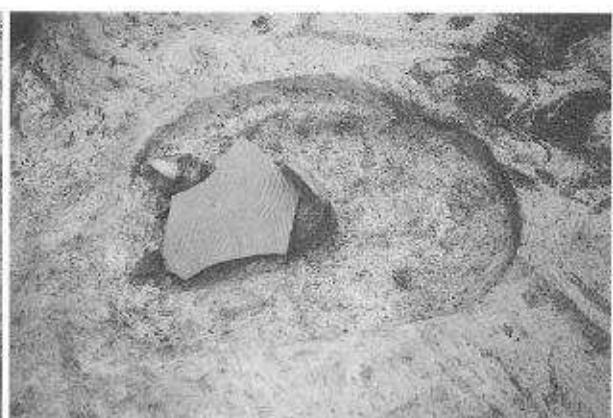
SD-B 1 底面の足跡(東から)



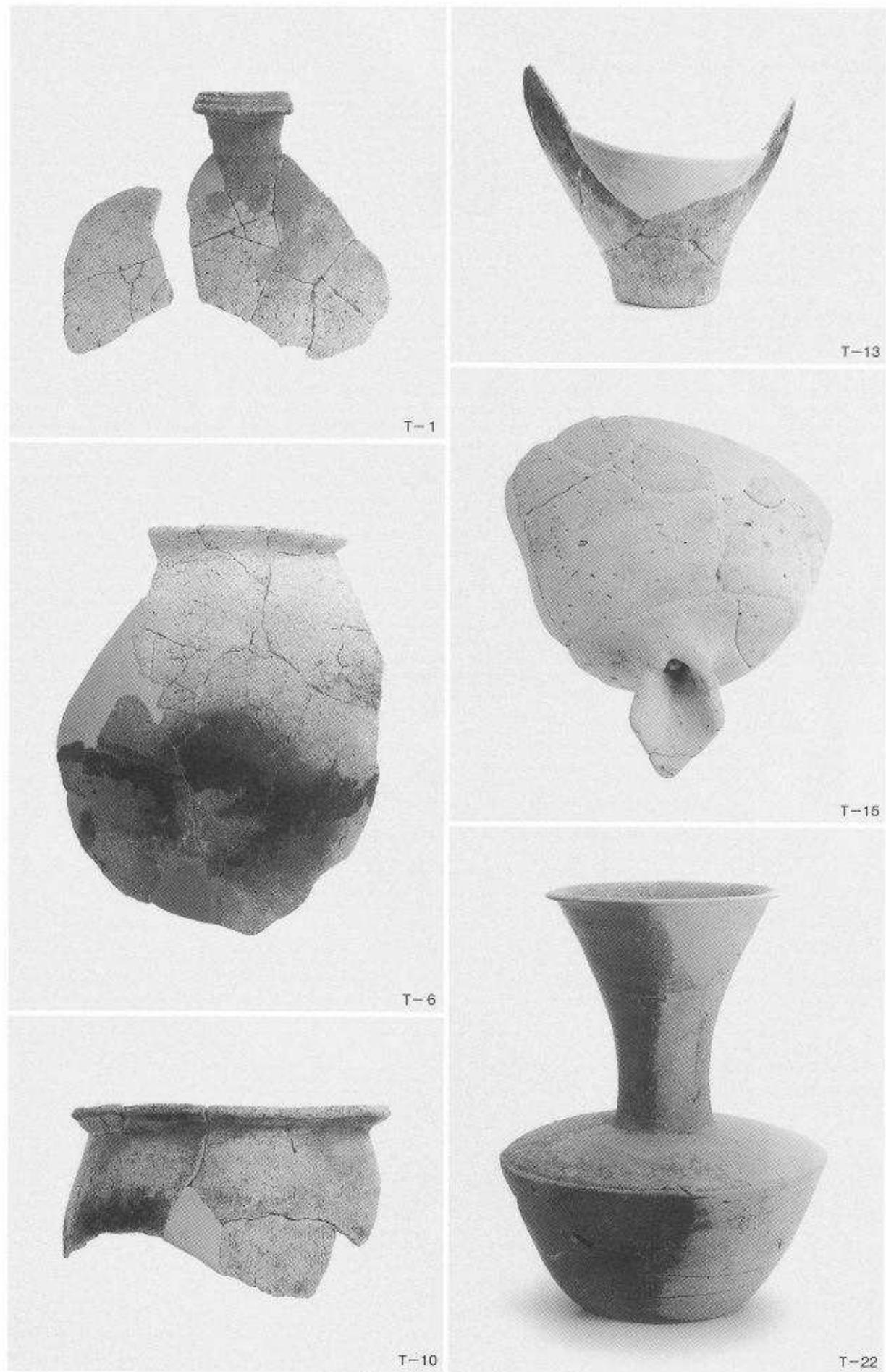
SD-B 2 埋土土層断面(北東から)cc



SD-B 3 磚・埴輪検出状況(北から)



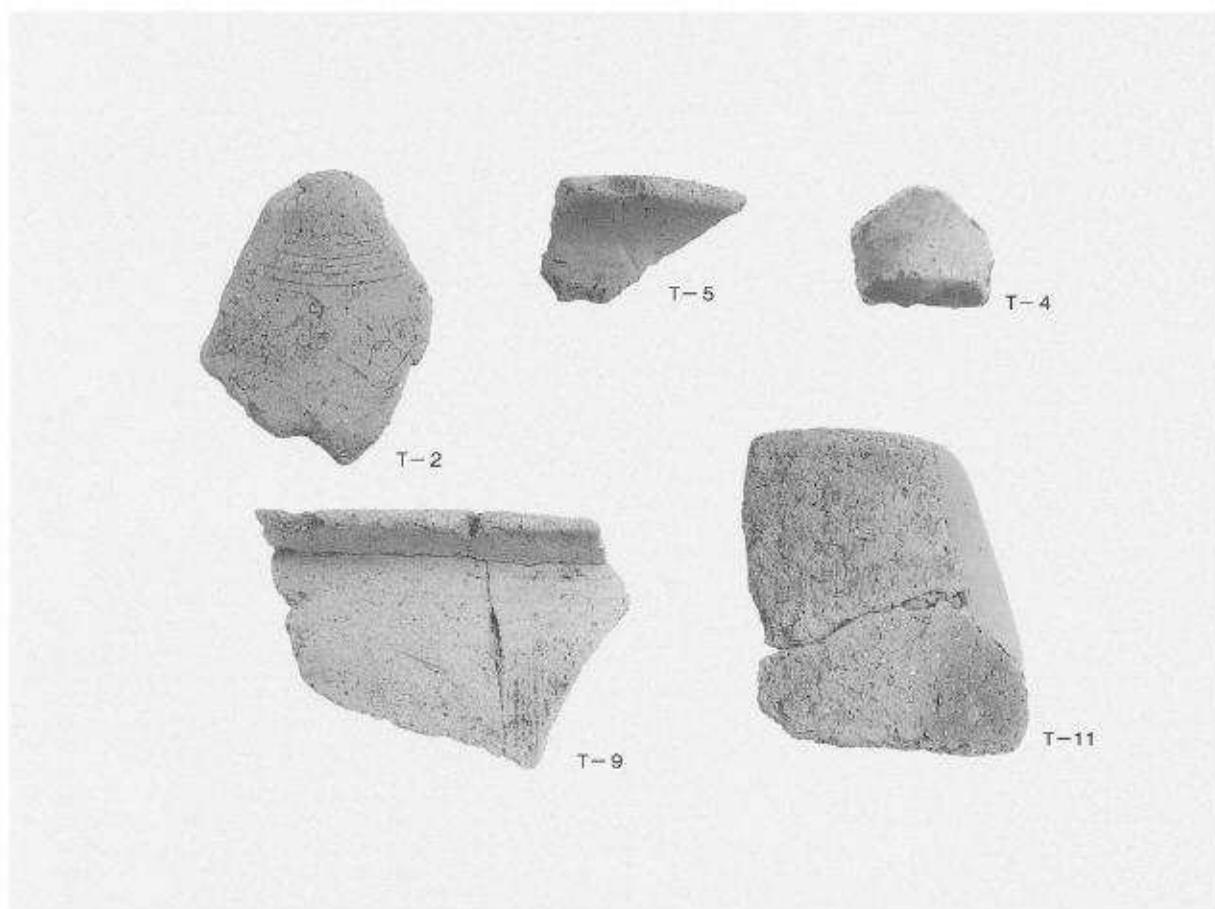
SP-B 01 土器出土状況(北東から)



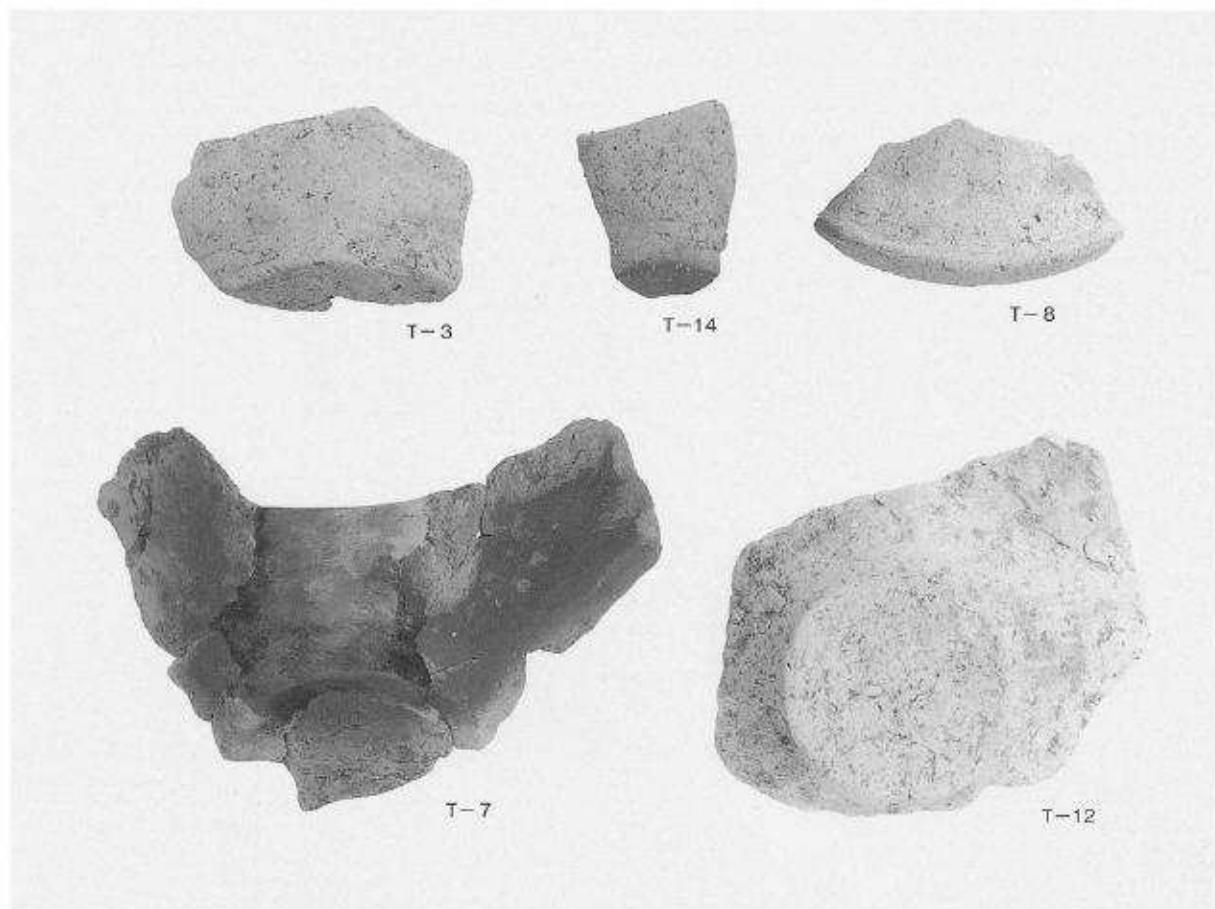
弥生時代～奈良時代遺構出土土器

写真図版48

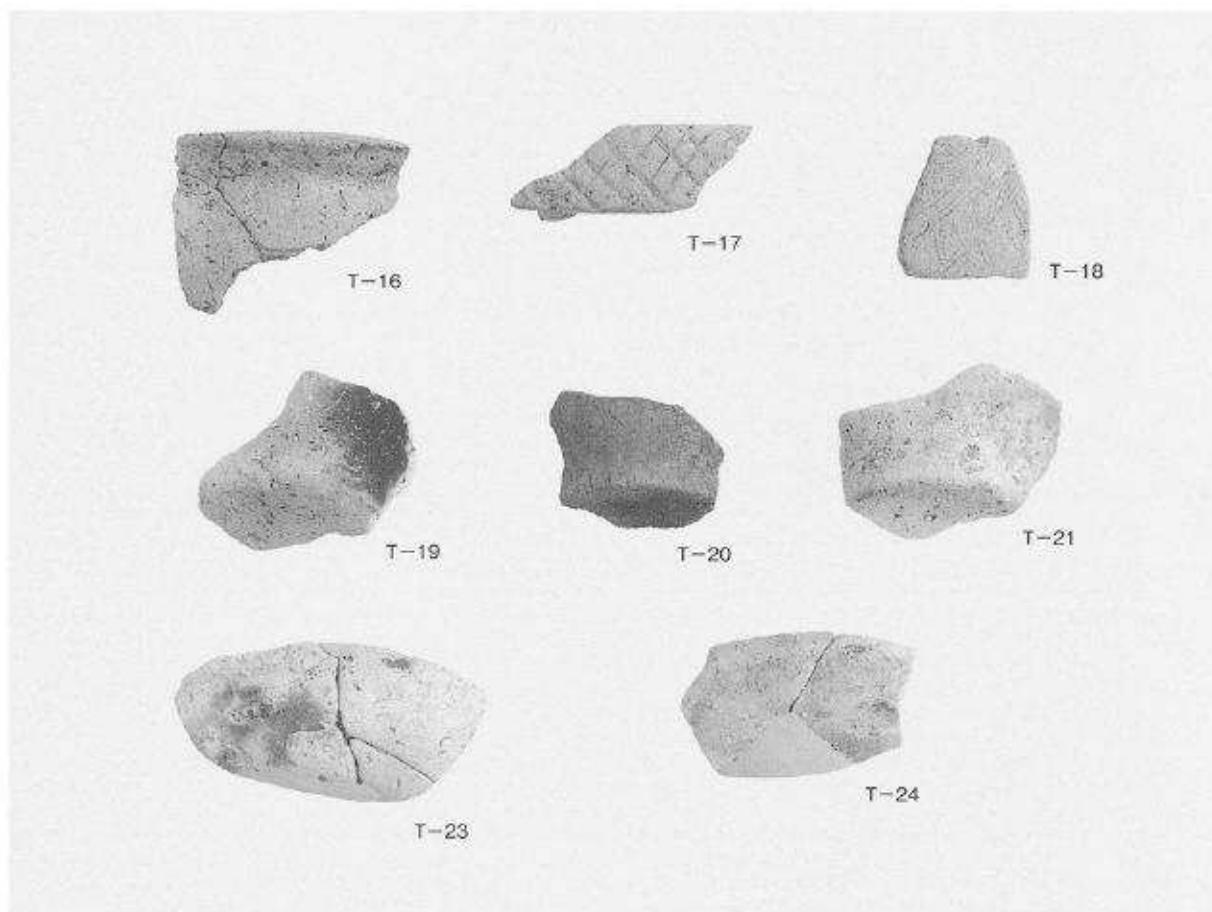
芝ヶ端遺跡



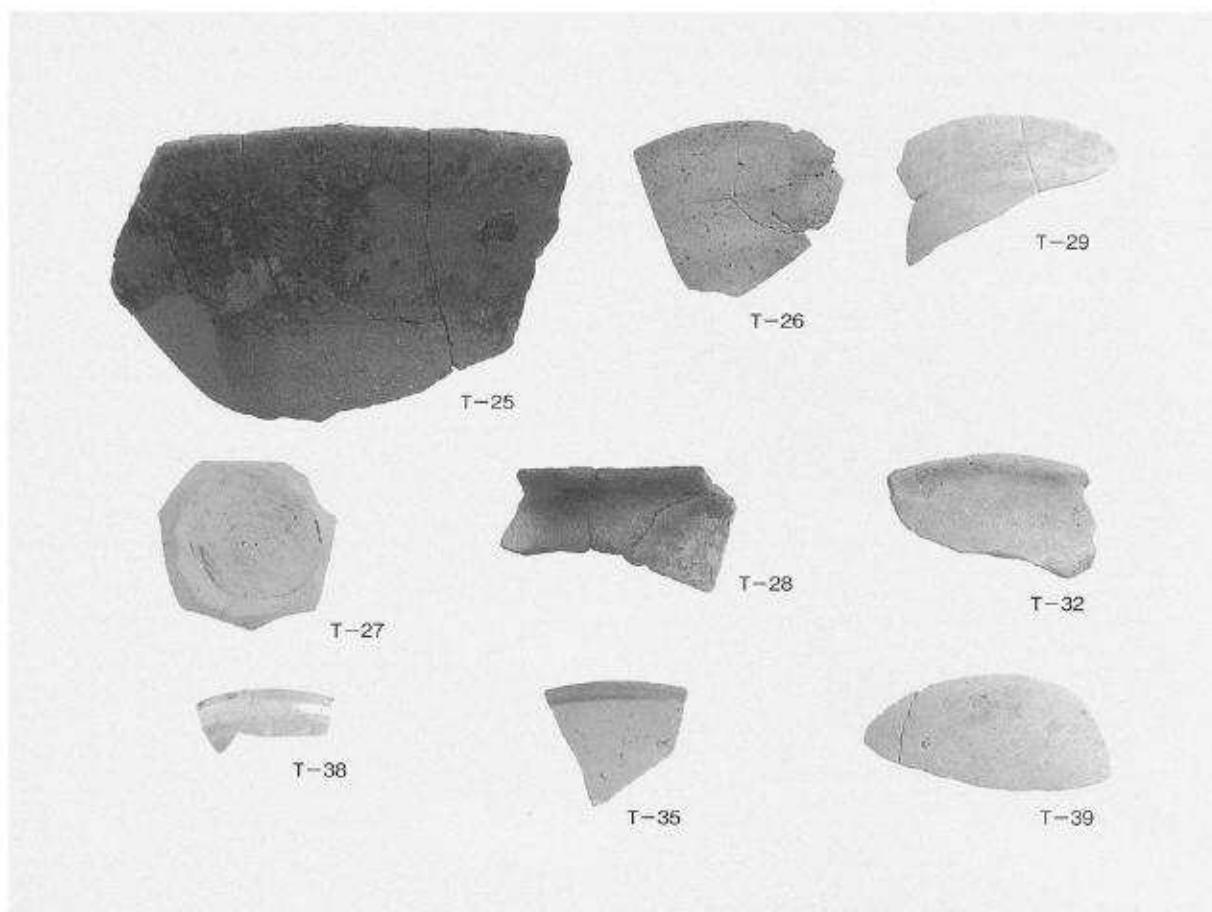
弥生時代住居跡・溝出土土器①



弥生時代住居跡・溝出土土器②



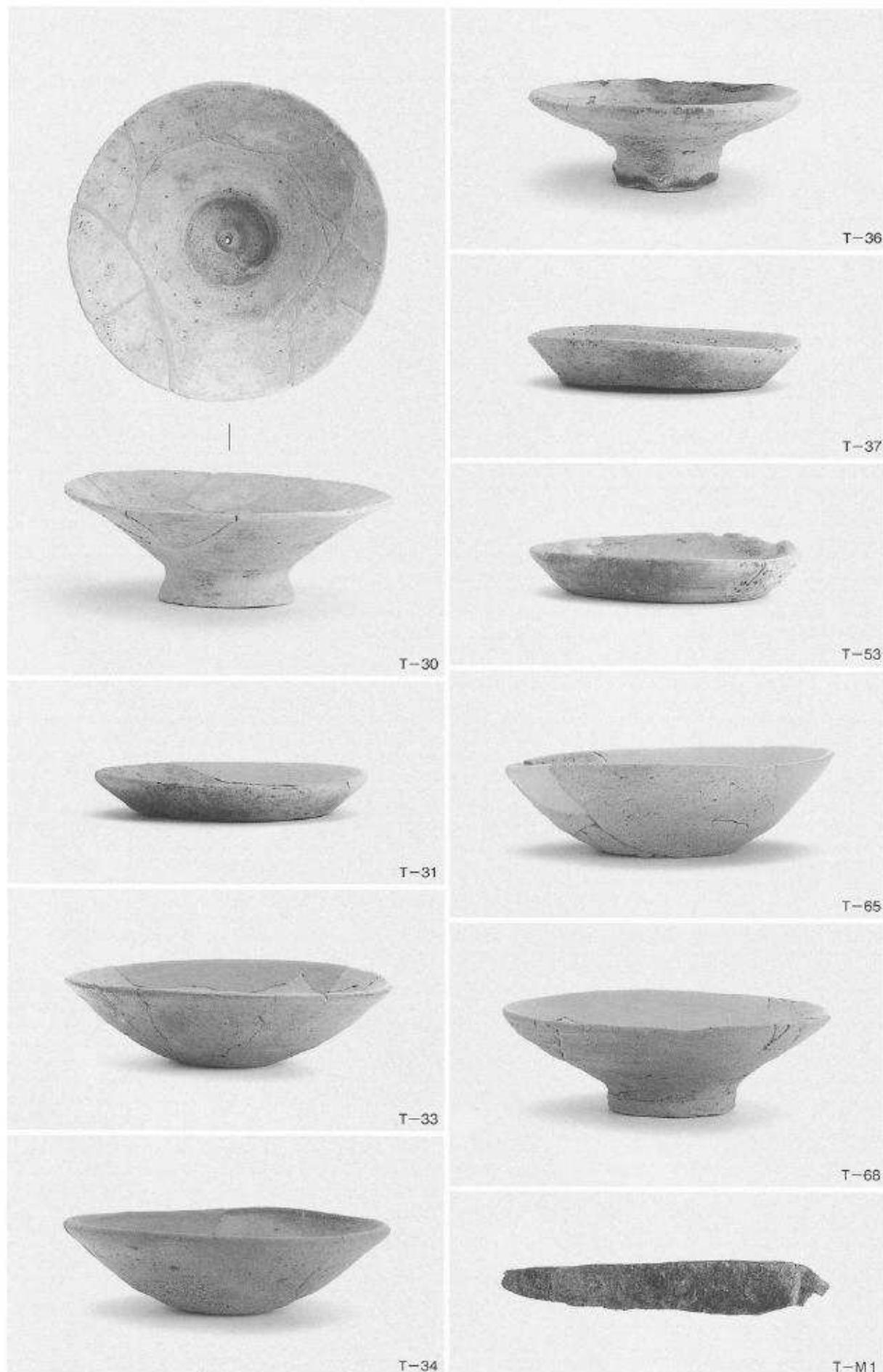
SK-B01出土土器



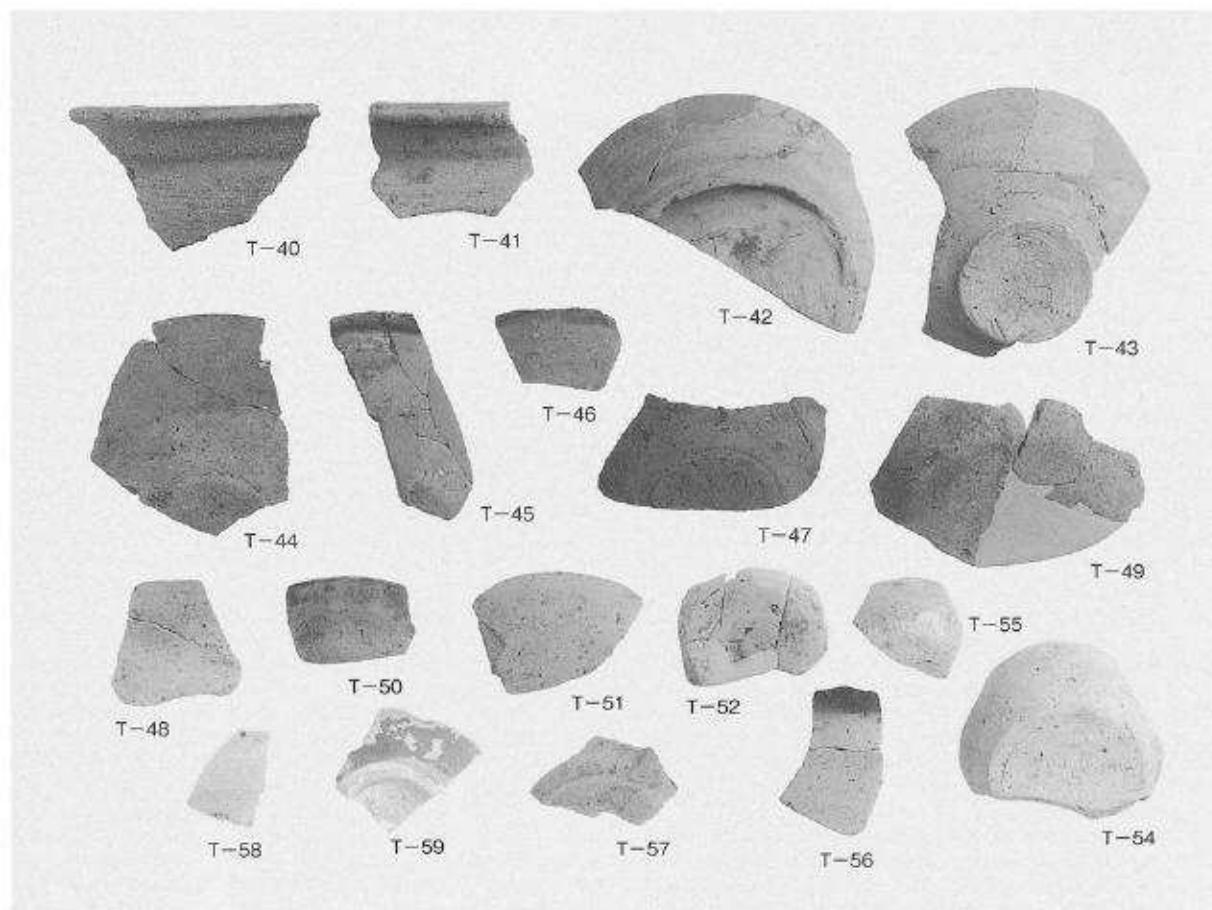
B地区遺構出土土器

写真図版50

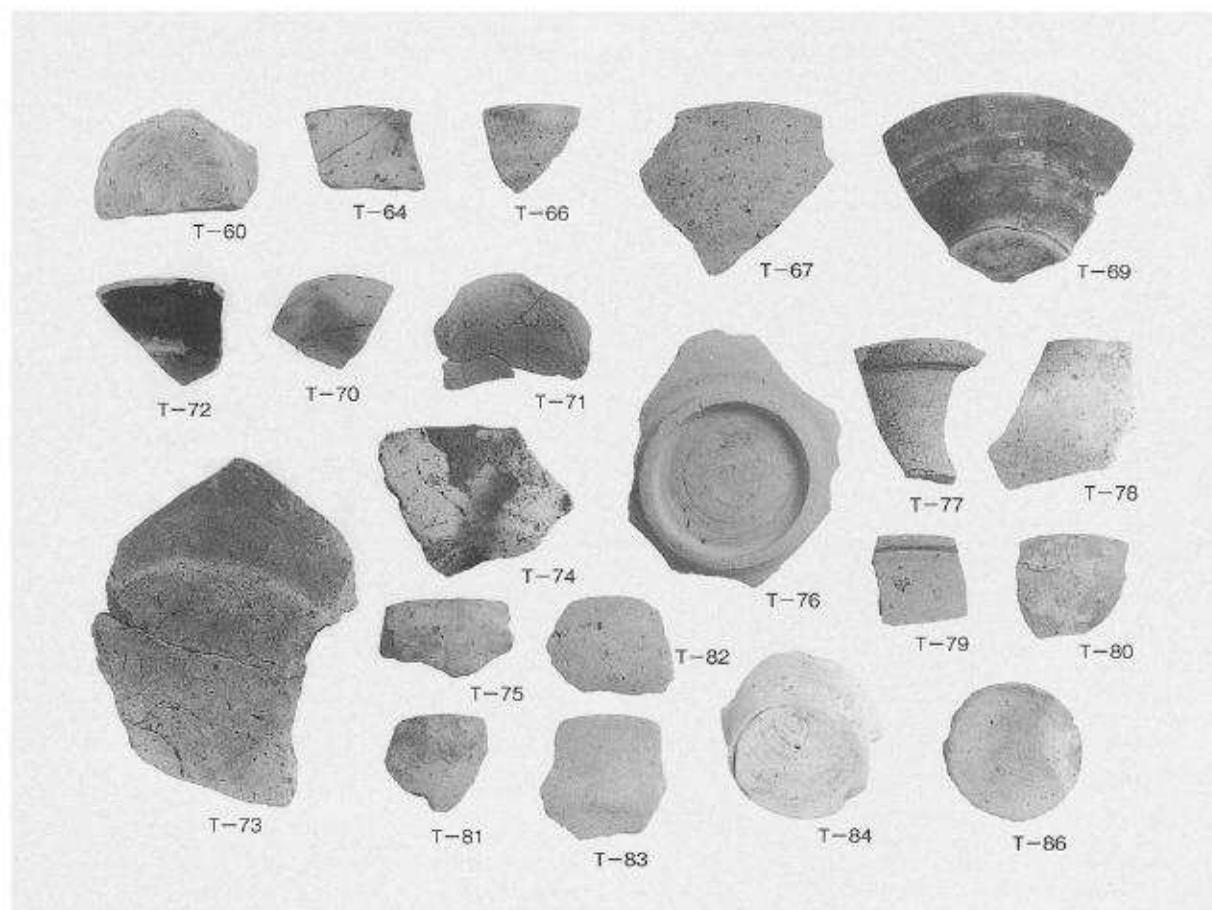
芝ヶ端遺跡



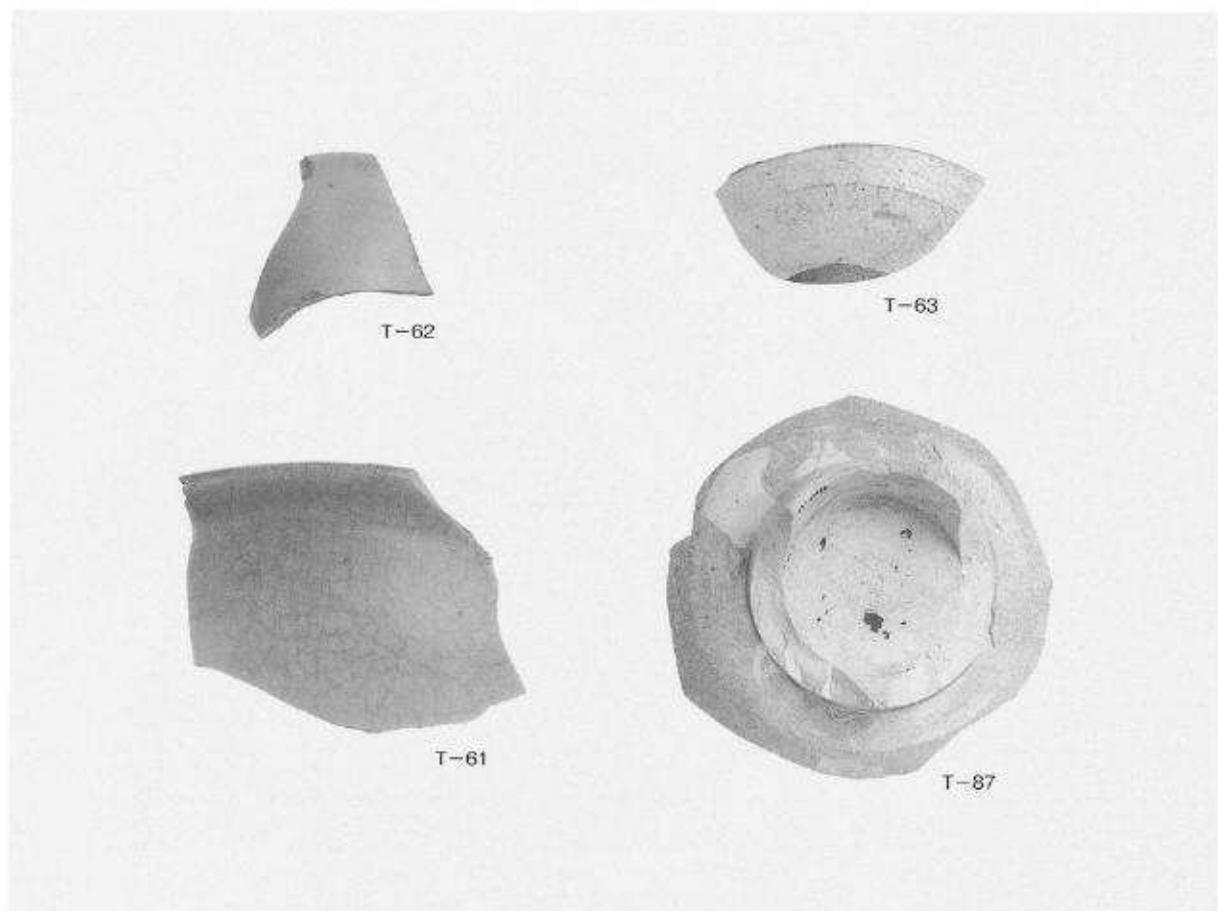
B地区遺構出土遺物



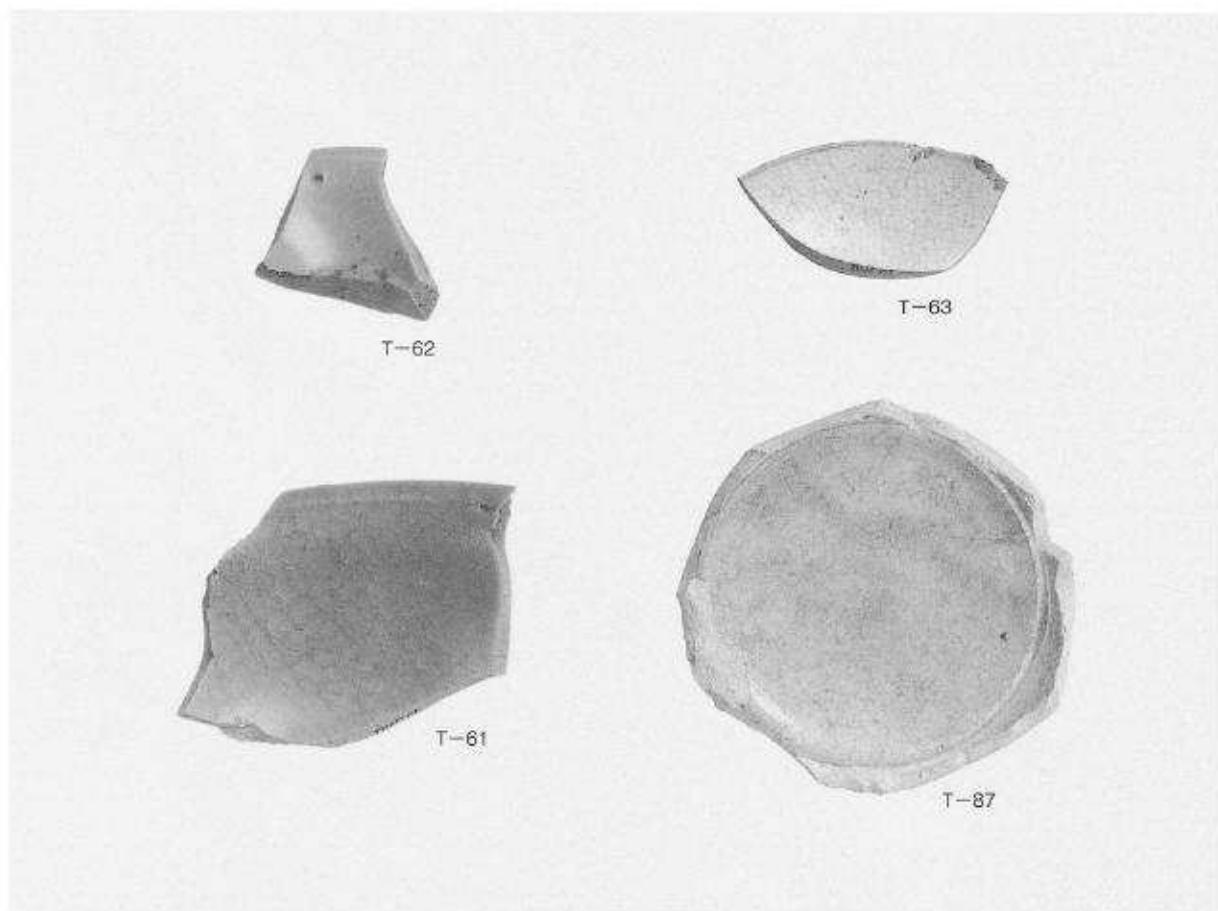
B地区谷部出土土器



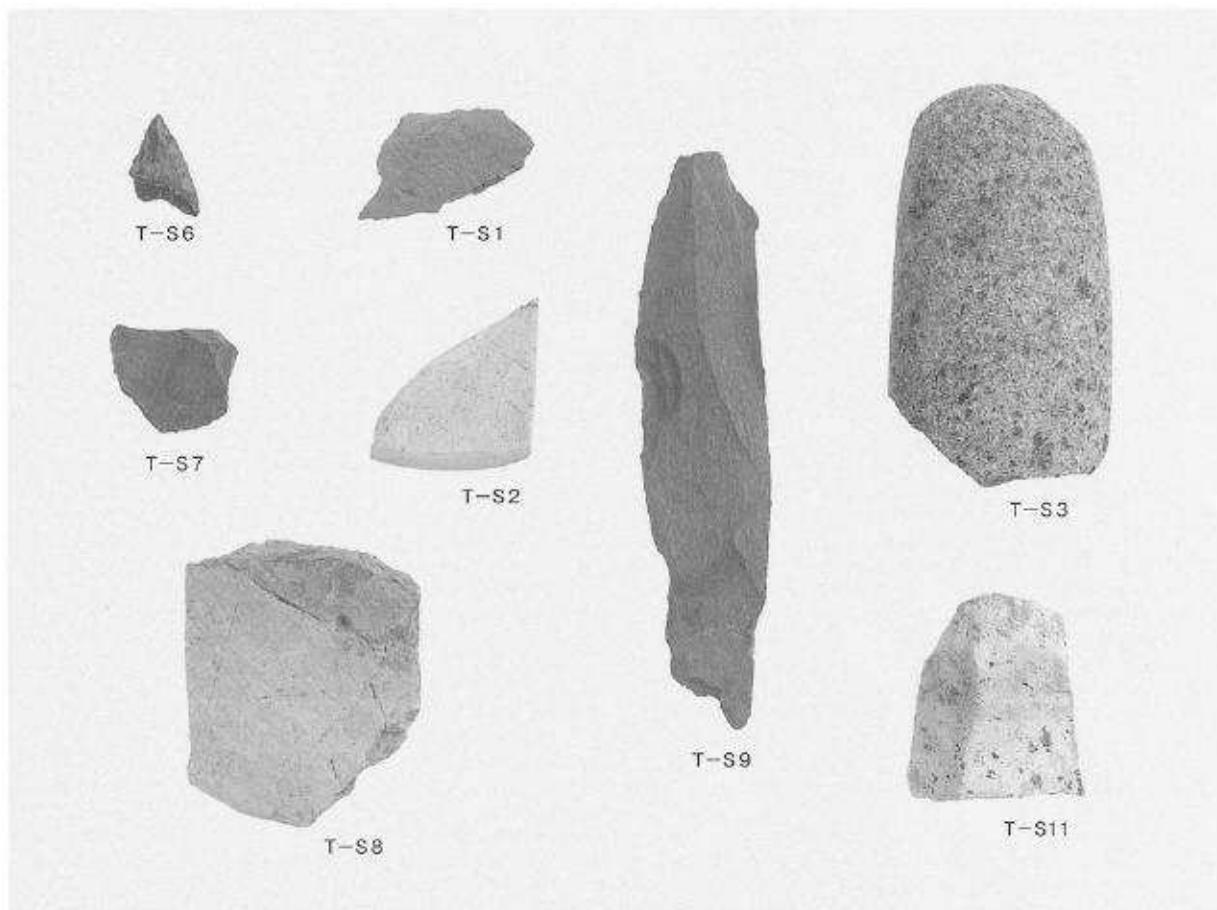
B地区溝・柱穴・包含層出土土器



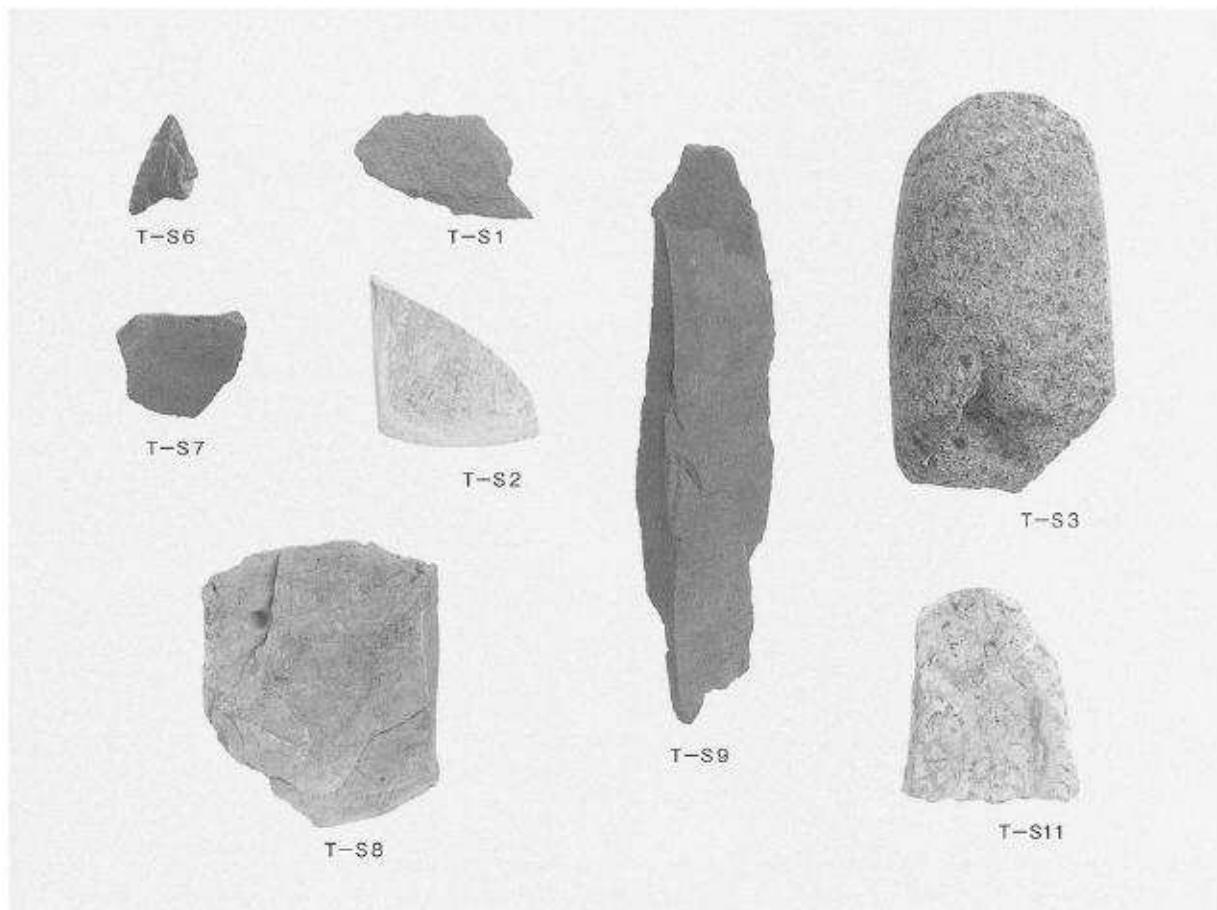
A地区柱穴・B地区包含層出土磁器(外面)



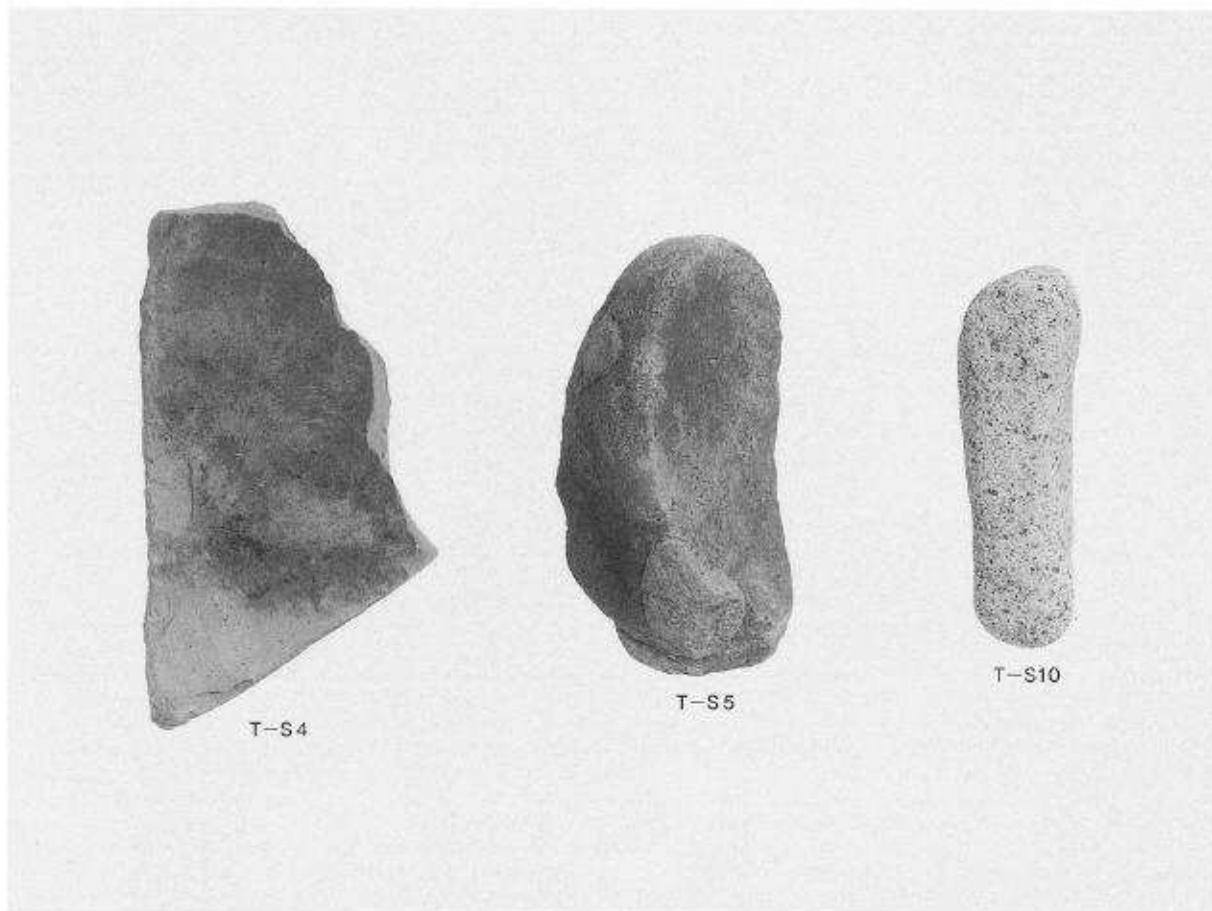
A地区柱穴・B地区包含層出土磁器(内面)



出土石器類(a面)



出土石器類(b面)



B地区遺構出土石製品